

無と無限の落とし子（にじファンより移転）

羽屯 十一

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

エデンの園にたどり着き生命の樹の実を食べ、神とは違う新たな超越存在になった主人公がいろんな世界（主にライトノベルとアニメ）を巡るお話です。コテコテナ最強物が書きたくて突発的に始めました。好き嫌いが結構分かれそうな話になると思うので、その点はご了承ください。

■ガンダムSEED編の二話、読者の方からデータを頂きました。下さった方には感謝を。それなりに手直した後、入った場所へ収めようと思います。

●『なろう』で投稿していた物の改訂版です。ですが前書きや後書きはそのまま残します。

目次

	P r o l o g u e	1
	第零章 上編	3
	第零章 上編・2	14
	第零章 上編・3	23
	第零章 下編	33
	第零章 下編・2	53
×	第壹章 1 外が内とはこれ如何に	55
×	第壹章 1 世界の“外”のせかい	62
×	第壹章 1 世界の“外”のせかい	62
×	お知らせ	67
	第壹章 1 外と思ったら中だった…… (正式品)	68
	第壹章 2 世界の“外”のせかい	73
	小話 閻魔と行き逢い 書き方その1	84
	小話 閻魔と行き逢い 書き方その2	87
	第貳章 3 “蛇”の世界と断頭台の姫君	90
	第貳章 1 人造天使の舞う世界 (シャギードッグ編)	106
	第貳章 2 人間の強さ (シャギードッグ編)	117
	第貳章 3 それぞれの未来へ (シャギードッグ編)	128
	第参章 1 運命の夜は始まる (F a t e 編)	156
	第参章 2 珍客過ぎてどうしよう (F a t e 編)	160
	S e a l ' s S t o r y : すこし間違えた	175
178	第参章 3 青タイツ、森で白髭と出会う、の巻 (F a t e 編)	178
	第参章 4 治療は人体改造から (F a t e 編) + 魔術システ	189
	ム説明表	189

第参章	5	世は情け、旅は道連れ (Fate編)	193
第参章	6	殺害のち誘拐 (Fate編)	206
Seal's Story :		圧倒的	218
第参章	7	蛇 (Fate編)	223
第参章	8	マキリ (Fate編)	232
		書いてしまった小話『痛ましい事件』	246
第参章	9	撤退戦 (Fate編)	249
第参章	10	英雄の戦い (Fate編) 武器能力追加	255
第参章	11	解かない勘違い (Fate編)	270
第参章	12	新装拠点、新しい身体 (Fate編)	275
第参章	13	長き想いの果て (Fate編)	286
第参章	14	ヒトトキ (Fate編) + サークラント能力の	293
考察			
幕の隙間		(考察についての追加)	297
第参章	15	剣の葛藤 (Fate編)	303
第参章	16	命の対価 (Fate編)	317
第参章	17	対峙 (Fate編)	325
第参章	18	王 (Fate編)	333
第参章	19	主従 (Fate編)	341
幕間		インターバル (Fate編)	347
幕間		インターミッション	359
幕間		激昂と胃痛	366
第参章	20	夜の散歩は終わる (Fate編)	375
第参章	21	休養には鍋料理を (Fate編)	388
第参章	22	未消化の脅威 (Fate編)	395

第参章	23	流転する状況 (Fate編)	406
第参章	24	暗き森 (Fate編)	417
Seal's Story		: ランダムの問題点	426
第参章	25	死地 (Fate編)	428
第参章	26	リザルト (Fate編)	434
第参章	27	突撃 (Fate編)	441
第参章	28	彼女の答え (Fate編) ※人によってグロかも。	
注意喚起!			
第参章	29	剣士と拳士 (Fate編)	459
第参章	30	終劇 (Fate編)	468
第参章		エピローグ 終劇のち惨劇 (Fate編)	472
第参章		エピローグ 因果応報(上) (Fate編)	480
第参章		エピローグ 因果応報(下) (Fate編)	483
第参章		エピローグ 終と始 (Fate編)	494
第参章		外話 冬の夜 (Fate編)	510
幕間		過去から続く大失敗	519
幕間		おまけとちよろちよろ 9/1 少し追加	529
第肆章	01	家出とな? (??編)	544
第肆章	02	とある局員の不幸 (とてもリリカルと言えない編)	551
第肆章	03	F (とてもリリカルと言えない編)	561
第肆章	04	ふえいとととらうまは仲良し (とてもリリカルと言えない編)	579
第肆章	05	休暇と崩壊 (とてもリリカルと言えない編)	587
第伍章	01	人類滅亡の決まった世界 (??編)	607

第伍章

02

世界の分岐点

(M u v | L u v 編)

|

635

P r o l o g u e

P r o l o g u e

私は考える。

神の似姿として創られた人間は知恵の実を食べ、考える事を知り、死という概念を得た。

神は人間をエデンの園より追放し、人間も神から離れ自らの道を歩みだした。

しかし無限の愛を持つ神はなぜ、一つの果実を食した人間に楽園からの追放という重罰を課したのか。

無限の愛。ならば原因は“罪”ではあるまい。

そう……もしや神は恐れたのではなかったか？

神の似姿をし、神と同じく知恵を持ち、そして神に等しき“生命”を持つ者が誕生する事を。

東の楽園の中央にそびえる生命の樹。その実を手にする者が現れるのを……

私は記憶している

全てが存在しない事を

私は知っている

全てが存在している事を

私はアイン

私はアイン・ソフ

生命の樹に表される根源にして深淵

貴方は私の親

貴女は私の子

隠された位階

セフィラの上に立ち、セフィラの底に眠るもの

愛しき者よ

思うように歩くといい

全てはあなたの後ろに創られるのだから

第零章 上編

ボロのカーステレオと運転手達の歌で浅い眠りから覚める。

少し痛む首をほぐし車の窓から外を見ると、外には見渡す限りの荒野が広がっていた。

ここはアルメニア共和国の首都エレバンの南東だ。

遠く霞むのは、かのノアの箱舟が流れ着いたとされるアララトの山々。

国土のほぼ全てが標高1000メートル以上というこの国では、日本のように背の高い木々が生い茂っているわけではなく、遠く地平線の果てまで見渡す事ができる。

そんな所を俺達の乗った車は走っていた。

「カナタ、あとすこし、つく」

運転席からエレバンで雇った通訳兼ガイドのアルトゥールが歌の合間に告げてきた。

微かなモーター音とともに、俺の両肩から伸びる二本の多肢アームが動き、目の前に地図を広げる。

エレバンを出てからここまでの時間から大雑把に計算すると、目指す目的地まではせいぜいあと40キロメートル程度だろう。

「兄貴、体はきつくね？」

ぼさぼさ頭に眼鏡をかけた顔が、助手席のシート越しに心配そうにこつちを見ている。

この9年間、俺を支え続けてくれた弟の黒川夏樹クロカワナツキだ。

余裕です、とアームを振ってみせる。

ならいんだけどよく兄貴顔に出ねーから、と苦笑しながら首を振っている。

むう、自分では分からんが、周りから見たらそうなのか？

「ま、ダイジョブならいいや」

心配したわりにあっさり前を向いてまた楽しそうに歌を歌い始める。

我が弟ながらさっぱりした性格だ。
さてはて。

「到着までの時間をどうするか。
荒地を走る車の中で出来る事はほとんど無いだろう。」

めちやくちや振動してるし、正直な話アルトウールの車はもう古くてシートがガチガチだから尻が痛い。特に尾てい骨がやばい。本格的な準備は到着してから一晩かけてやる予定だし。

本気でやることがないな。

後もう少しだし、景色でも見ながら大人しく待つことにしますかね。

ようやく到着した目的地周辺はやっぱり荒野の真ん中だった。

右も左も、前も後ろも赤茶けた荒地である。

やはり痛かったのだろう、尻に手を当てて車から転がり降りた夏樹が、周りを見渡してから素晴らしく疑わしそうにこつちを振り返る。

そんな見られても俺も実際に来るのは初めてだから、こんな何の目印もない場所じゃ本当にここで良いのか判断できない。

一応、確認の意味を含めてアルトウールに尋ねてみる。

「いい、この先、言われた所。昔からここ、伝えられてる」

彼は自信ありげに頷く。

ここから先は彼らの禁域であり、伝承に伝えられている聖地なのだと。

GPSで確認しても、町の古老に聞いた地点とほぼ同じ位置だ。

「よっしゃ。じゃあここにベース作るか！」

ようやく尻から手を離れた夏樹がアルトウールと一緒に車の荷台から荷物を降ろし始める。

夏樹はだらしない格好や言動で誤解されがちだが、あれで頭の回転が早く几帳面な性格をしている。

精密機械が入った小型コンテナを一個づつ丁寧に運んでいるようだ。

さて、こつちも動きますか。

アームの先端にある四本の機械の指が器用に車の扉を開ける。慎重に地面に足をつき、車体に掴まりながらゆっくり動く。

体のそこかしこからモーターやアクチュエーターの作動音を微かに響かせ、僕は四本の足で立ち上がった。

そう、この体はそのほとんどが機械によって補われている。

小さな時から罹っている病気のせいだ。

脳の異常で、時とともに脳が体の機能を放棄してゆく。

神経に異常がある訳ではない。

器官それ自体に問題がある訳でもない。

ただ脳がその器官を認識しなくなる。

目、耳、声帯、四肢、いくつかの内臓、さらには脳機能の一部まで、機械で補わなければ俺は生きることが出来ない。

目と耳は、センサーからの情報を頭部に埋め込まれたチップを通して脳で理解する。

声は、頭部チップからの情報で合成音声スピーカーから流れる。

左右の肩から伸びた多肢アームに、腰から伸びる二本一対の足。

電子機器の操作は頸部の電極から有線で操作する。

全部が既製品を元に、俺が発展させた新しい型の義体だ。

だが、これらは正確には失った部位の代替品ではない。

それでは、同じ物では俺のポンコツ脳は認識してくれないのだ。

だからそっくりな代替ではなく、新しい器官とする。

人間の感覚器ではなく、機械の感覚器へ。

四肢ではなく、それに替わる別の行動器官へ。

人間的な形や機能から離れば離れただけ、義体は脳と体に馴染んだ。

「兄貴、その足はここでもいけそう？」

忙しく荷物を持って動いていた夏樹が聞いてくる。

歩き回って確かめると、ああ、結構大丈夫みたいだ。

《ん、ちつとばかし石やら何やらで地面デコボコだけど、まあいけそうかな》

歩いた感じ、大きな石を踏んだりしなけりや転んだりはしないな。

足の裏はかなり柔軟にバランスを取れる様になってあるけど、さすがに十センチもあるような石は無理。

走るのはやめといた方が良さそうだ。

「んー、分かった。今更だけどき、その足と手ってマジで高性能だよな」

《まあね。何てったってこれ開発して特許とったお陰で飯が食えるんだから》

「でもさ、ほんとにこれ終わったら特許の権利貰っちゃっていいの?」
もう何度も確認したことだ。まあ額が額だから気が引けるのも分かるけどね。

《ああ。もう俺が持つても仕方ないもんだしね》

「……分かった。貰つとく」

話したりしている間にアルトウールが一人で頑張ってくれていた。大きい荷物も荷台に設置された簡易クレーンで全て降ろされ、車にくつつけるようにタープも張られている。

二人して謝ってから、荷物が全部あるかもう一度チェックする。

《うん。ちゃんと全部あるみたいだし、組み立て始めようか》

幸い風は緩い。

タープとトラックに加えてシートを張り巡らし、簡易な防塵スペースを建てる。そこへアルトウールがトランクの中から機械の部品を出し、夏樹と俺で組み立てていく。

もともとユニット構造で設計したから組み立てるのは簡単だ。

かなり大きい二つの歪な形をした箱状の物、四本の多関節式の足、多種の細かい部品が並べられる。

二つの黒いボックスがクレーンで吊られ、最初に連結される。その周りに八本の足が四本一対の配置で組み込まれていく。

部品間のラインが繋がられ、二つのボックスの内、円錐に近い形に小型化されたハイブリッドエンジンが格納される。

最高級の超小型ハイブリッドエンジンを、蜘蛛に乗せる事を前提に静音を重視し再設計した。販売目的である以上、製作には予算との兼

ね合いがある。そこをまるっと無視すればやってやれない事はない。

音対策でサイズが予定より少々大きくなったが、蜘蛛の腹パーツ側に手を入れて目標をクリア。元々出力に余裕があつたお陰で何とか強度を落とさず入った。

全体のパーツが組みあがると、そこには合金と特殊樹脂で出来た全長二メートルを越す黒い蜘蛛が鎮座していた。

金属的な光沢や質感はほとんど無く、デザインも有機的にまとまっている。ご丁寧なことに、脚部の途中には毛皮のような物まで巻かれており、より蜘蛛の足という印象を受ける。

この場に蜘蛛が嫌いな人がいれば、おもわず逃げ出すか攻撃を加えてしまいそうなシルエツトである。

二腕四脚の義体が第二の体なら、これこそが俺の第三の体だ。

「うっし、これで終わりつと。次は足回りの調整？」

《そう。さつき今の足で歩いた感じだとそんなに変更は要らないと思うけど、代わりに石が一杯あるからセンサーの方をしっかりと調整しよう》

「了解、兄貴」

アルトウールが車にノートPCを取りに行ってる間に、こっちはシートの上に寝転び、夏樹に手伝ってもらって、今使っている機械の手足にスピーカーや光学カメラ、集音マイク等のデバイスを外してもらう。

これを全部外すと、俺は外界に対して触覚と嗅覚での知覚しか出来なくなってしまう。

見えず聞こえず言えず、四肢は無く、動くのは首くらいという有様だ。

自分で指示しといてなんだが、もう慣れたとはいえ正直この状態にあまり長くおかれると、かなり精神的にきつい。

何かあつたとしても完全に無力なのだ。だって手足ないし。

組板の鯉って諺があるけど、例えば組板に乗せられた鯉でも、この状態の俺よりは抵抗できるだろう。

一番致命的なのが耳が聞こえないことだ。

聞こえなくなつて痛感したけど、人間つてわりと耳で周りを知っている。

目は正面を見るもんだが、耳は横や後ろから近づいてくる物を察知する。変わりに触覚がえらい敏感になつてるけど、さすがに目や耳とは比べ物にならない。

以前に夏樹が少し離れた所から紙飛行機なんか飛ばしてきやがった事があつた。

当然ながら飛んでる物なんか察知できるわけが無い。

夏樹止まつてるなー、なんて考えてたらいきなり脇腹にとがった先端が刺さつた。

まさしく狙い澄まされた悪魔的な一撃。

鋭敏に発達した皮膚感覚。

夏樹の接近を知る為の触覚への集中。

そこに察知できない飛行体による一撃、それもよりによつて脇腹に。

激しいバイタルの異常を感知した医者がすつとんで来る事態になつた。

鬼の如く怒つた医者に叱られ、義体を装着した俺に拳を叩き込まれた夏樹は懲りたのか、以来それ系の悪戯はしなくなったが。

慣れ親しんだ軽い振動が近づいてきて、肩を二回タッチしてから体を抱えあげてくれる。

体自体も小さく、かなり痩せ細つてるとはいえ、体内には機械がいくつも埋め込まれている。決して軽いわけではない。

大人ならいざ知らず、十五歳の夏樹にしてみればかなりの重労働だろう。

それにもし落としたりしたら、手足の無い俺はそのまま地面に叩きつけられてしまう。地面までの距離も分からない為に受身も取れず、

簡単に骨折などしてしまうだろう。

肉体的のみならず、精神的にも重い荷物のはずだ。

抱えられる度に、面倒をかけてるといふ気持ちと感謝の気持ちが胸に湧き、何かこう、ムニヤムニヤつとなる。

自前の口があれば、もつとあいつに礼を言えるのに、と思うとこの病気が恨めしい。

蜘蛛の背中が開いたのだろう、排出された圧縮空気が肌に吹き付ける。

夏樹の腕でゆつくりとうつぶせに、油と樹脂の匂いのする蜘蛛の内部に下ろされる。

内部の底はうつぶせの状態でも苦しくないように、体型にあった形の緩衝材が仕込まれ、顔の部分も工夫されている。口と鼻が当たる所には柔軟な素材で形成された多機能マスクが設置されている。酸素や飲料の補給、唾液等の処理が主な機能だ。

首の電極にコネクタが接続され、蜘蛛とのリンクが確立される。

蜘蛛のセンサーが収集する様々な情報が体内チップで纏められ、脳で理解される。

この瞬間から、俺は違う生物になる。

音すら無い暗闇の中に転がっていた俺が、膨大な情報と頑強な体をえる。

十六種の知覚センサーからのもたらされるデータによって、どんな人間よりも見え聞こえ感じることができ、モーターとシリンダーで生み出される力は、乾燥重量三百六十キロの巨体を人間以上のスピードで疾走させる。

無論、他の人間がチップを埋め込んでこの蜘蛛にリンクしたとしても、見ることはおろか送られてくる情報を理解することも出来ないだろう。

脳の病気によってどんどん能力を失っていく生物が、生の本能によってそれを補おうとした結果、異常発達を遂げた脳と神経。

失った様々な機能に替わる、新たな機能の獲得への欲求。

そして自らの体とするに足りうる義体を開発する知能と、肉体と義体との高い親和性。

全てが揃ってようやく生身の人間と機械の直接接続なんていう荒業が完成する。

三百六十度を見渡し、二人が離れたことを確認してから、大地を八本足で踏みしめ立ち上がる。

そこらを歩いたり走ったり跳ねたりしてみた。

「おいこらそこ、跳ねるなー!」

実際の地面とセンサーの調子は分かったけど怒られた。

《良いじゃん。移動に次ぐ移動で最低限の機能しか持たない義体だったんだもん。しかたなし、しかたなし》

「しかたなくねーよ。ぶつつけ本番なのに二メートルとか跳んでぶっ壊れたらどーすんだよ!」

むう……

いーじゃんよ、車の荷台を飛び越えるくらい。

《ケチ》

「こんなことで拗ねんなよ、兄貴……」

はっはっは。ま、いつか。

とりあえずセンサーと足回りの微調整ですな。

いつの間にか、辺りは薄暗くなりだしている。

周辺には車しかないから、吹きっ晒しで風もよく通る。

《こんなもんでいいでしょ。そろそろ野営の準備しよう》

この国は気温の寒暖の差が激しい。

首都でもマイナス二十五度から四十度まで変化するのだ。

日が落ちれば一気に気温は下がる。

ただでさえ野宿をしようというのだ、しっかり準備しないと簡単に凍死してしまう。

アルトウールも頷き、二重構造になった保温テント引きずり出す。

夏樹と一緒にテントを立てている間、元の義体に換装した俺は、石で作った竈かまどで固形燃料を使って料理を温め始める。

ちなみに夕食は日本製レトルトカレーと飯盒炊飯です。

辛いもんって食うと温まるよね。

「夜は、とてもさむい。エレバンでも、いまくらい、寒くなる」

「まーじか。首都なのにマイナス二十度とかになるんかよ」

《首都は関係ないし。でも寒いのは苦手だな》

「ご飯が炊けたら、飯盒を火からおろし皿に盛る。この時、飯盒の底のおこげも美味しいので忘れずにこそげとる。」

後はカレーをかけて出来上がり。スプーンを握って食うのみである。

「いただきますーす」

《いただきます》

アルトウールは食べる前のお祈りをしてから、皆で食べた。

意外やアルトウールにも好評でした。

テントの中、シユラフに潜り込んでしばらくしてから、夏樹が声をかけてきた。

「なあ、兄貴」

《ん》

それは少し話し辛そうな、躊躇いのにじんだ声だった。

「……明日だけだよ。俺、ここに残って兄貴を待つよ」

そうだ。優しいこいつなら、きつとそう言い出すと思ってた。

《だめだよ》

けど、答えは決まってる。

「いいだろ」

だって、残ったとしても……

《きつと俺は戻って来れない》

戻れないんだから。

「……兄貴自身がんな事言うんじゃねえよ」

俺だから、今言う。

《お前が絡む場合なら別だよ。確かにこんな方法を考えたのは俺だ。だからこそはつきり言う。帰ってこない奴を待つ必要は無いんだ》
俺はこの計画に俺自身の命を賭けた。

人類誕生以来、最高の奇跡を引き当てなければ、俺は死ぬ。
そもそも成功する確率自体が有るのかどうかも分からない。

妄想に縋って当たりの無いゲームにこの命をベットしたような物だから。

「でも、兄貴が選んだ選択肢なんだ……それが間違ってたことなんて、無い」

口元に苦笑が浮かぶ。

ろくでもない賭けだと分かっている、それでも俺を信じれる。

ばかばかしい言葉だけれど、それが切なくて、うれしい。

《まあ、待ってても良いけど、日本人にこの国の気候はきついよ?》

と、冗談めかしてみた。

ここで暗くなるとの夏樹の場合、後々まで気に病んだりするだろうからな。

「あー。メシとか設備とか風習も日本とはだーいぶ違うみたいだからー」

《だろ? やっぱ慣れた場所が住みやすい所だって》

「でもでもよ、そういうのも面白そうじゃね? やっぱ駄目だーって思ったら帰りや良いんだし」

《確かに。それは面白いだろうな。なにせ目にする物の、ほとんど全てが珍しい物なんだから》

「どんなものでも始めはみんな面白いってヤツかなー」

《それだと、目新しい物が無くなったら別の所に行くってことになるらない?》

「おー。新しい物に惹かれて行動してればそうなるかな」

《ま、金もそれなりにかかるし、飽きたらすぐってのはな。どこのブルジョワだよって話になる》

「兄貴はあんま気にしてねーかもだけどよ、俺ら実際かなりの成金だぜ？」

《そーいえばそうだったな。使ってばかりで残高は最近見てないや》

「ちやんと見ておかないと後で泣くよ？」

《俺はいいんだ、きつと！ それよか、珍しいって言ったら、昼間なんか変なトカゲ見たなー》

「ほうほう。なに、とがってるとかカラフルとか裂けてるとか？」

《裂けてたら変じゃなくて怖いよ。とがってはいたけど》

つらつらと思いつくままに会話する。

二転三転する話題。

相手に気兼ねすることの無い、リラックスしたコミュニケーション。ン。

——そんな風に、最後の夜はふけていった。

第零章 上編・2

深く、眠りの淵に沈んでいた意識が、上昇してくる。

《ん、むううう……、ぬう？》

体内チップからの情報は四時前を示している。

目が覚めるには早い気もするけど、昨日は暗くなり始めから夕食の準備を始め、食ったらそのまま寝たので喋ってた時間を入れても九時前には寝ていた。

寝る時は外している視覚センサーの変わりに集音センサーで確かめてみると、テント内の二人はまだシユラフの中で寝息をたてていた。

《うう、さむい……》

枕もとの視覚センサーを取ろうとアームをシユラフから出すと、断熱素材のお陰ではこほこと暖かかったシユラフ内に、まるで日本の真冬の朝のような空気が流れ込んでくる。

素早くアームを引っ込め、頭まで潜ってからシユラフの口をなるべく閉める。

駄目。

これは駄目だ。

寒いもん。

それに比べて——ああ、悪魔の誘惑なのか、この暖かさは。そうだ。

この地は人間が初めて誘惑され、あつさり転がってしまった場所。なら、良いんじゃない？ おれも。

北風と太陽のお話でも、旅人さん太陽の暖かさには勝てなかったし。

ああ……ぬくい、ぬくい……

都合の良い言い訳を考えてる内に、再び訪れた眠気にあつさり意識は沈んでいったのであった。

結局、俺が起きたのは二時間後の六時過ぎだった。

二人は俺が二度寝を決め込んだすぐ後に目が覚めたそうで、朝御飯の用意やら蜘蛛のチエツク等を済ませてしまったそうなの。

テントの隅でミノムシになっていた俺は、夏樹の「昨日の移動の疲れもあつたんだらう。今のうちに休ませておこう」との気遣いで、そつと寝かせておいたとの事。

今更、寒くて二度寝していたとは言えません。

ごめんなさい。

現在時刻は朝の八時。

日の出から三時間以上が経過し、気温も上がってきた。寒暖の差が激しいぶん気温の変化も著しい。

俺は朝食後に軽い休憩を挟み、義体を蜘蛛に付け替え最終チエツクを行っていた。

「うん、大丈夫みたい。組んだ状態で外に一晩置いといたけど、さすがだね。なんとも無い」

蜘蛛と有線接続していた夏樹がノートPCのキーボードを叩きながら感心していた。

《そりゃね。そういう風に作ったから》

「それが難しいんだって。普通はこういう精密機械の塊、それも密閉型じゃ無いヤツをあれだけ丈夫にするのは大変なんだよ?」

ま、確かにそこら辺は面倒だったけど、木登りやらする機能を付けてたら、素で頑丈になってたってのもあるな。

「ていうかね、そもそもこれは飛んだり跳ねたりするモンじゃないし。

あんな機動しなればもつと簡単に、軽くて丈夫で居住性の高い物が普通に出来るのに、何で……」

《まあまあ、そうぶつぶつ言うなよ》

蜘蛛の前足で夏樹の腕を軽く叩く。

どうでもいいけど、この格好でやるとシユールな光景になるな。

《設計も使うのも俺なんだから。こう言うのってほらアレ、作った物には個性が出るってヤツ?》

「うぜえし! そのお陰でアホみたく複雑化したシステムをチエツクするの俺だし!!」

《あっはっはっは》

相変わらずからかうと面白いヤツですな。

じやれたりしながらも着々と準備は進み、九時を回る頃には全ての準備が整っていた。

《…それじゃ、行ってくる》

足を一本上げ、最後の挨拶をする。

夏樹のやつは少し前から黙り込んでいたが、此処に至って涙をこぼしながら袖口を噛んで嗚咽を堪えていた。

《泣くなって……》

やっぱりこいつが泣いてるのを見るのは切ない。

見るのはこの計画を話した時から二度目だ。

夏樹はそうそう泣くようなヤツじゃないから、こういう時は止めてやりたい。ただ、今まではいつも一緒に居たけれど、俺にはもう居てやることは出来ない。

《いいか、俺はもう戻ってこない。それは確かだ》

「そんなこと、ひっく、言うなよう……」

《聞け。お前は昨日の夜、俺が選んだなら間違いは無いって言ったな》
「ん」

《その俺が、死なないために考えた方法だ。ここには戻っては来れないけど、どつかで生きてる。絶対だ》

そうだ。もし仮にうまくいって生きていることが出来ても、戻りはしない。

俺には時間が無かった。だから名前も隠さず、逆に己の病気と境遇すら利用して準備を推し進めた。

その結果、俺の脳みそが根を上げる前にこの場所に辿りつけた。かわりに俺は注目されている。

技術関係でも知られているし、医学的にも俺の“変異した脳みそ”は機械との直結を成功させたサンプルとして調べたがる奴が多いだろう。

特にこの分野は民間医療よりも軍事技術に近い。

近年実用に近づいてきたパワードスーツ。未だSFの域をでないがサイボーグ。大きく飛躍できるとなれば、手に入れるか始末するか、色々と容赦の無い話に巻き込まれてくる。現実には物語よりずっと救いがない。

おまけに不治の病で早世するはずが、生き残れたなどといったら尚更。命に関係する技術は魅力的過ぎる。そして事が起こればまず間違いない。俺の唯一の身内である夏樹が巻き込まれる。それは許せない。

だったらそうならない様にするだけだ。

俺の持っていた安全な権利や資産等はいつの名義に書き換えてある。残せる物は全て譲り渡した。

《今まで面倒かけたな。手伝ってくれて、ありがとう》

《じゃ、夏樹。行ってくる》

後は自分の事だけだ。

俺は歩き出す。

八本の足は、もう止まることはなかった。

Another Side

黒川 夏樹

兄貴が行った。

オレの兄貴が、行ってしまった。

蜘蛛が見えなくなってから、オレはテントの中で一人うずくま
て、胸がつぶれる様な悲しみに耐えていた。

流れる涙と共に兄貴との記憶が思い出される。

兄貴はたった一人の肉親だった。顔を見た事も無い両親は、共に死
んでいる。

母親はオレの出産と兄貴の病気で、心身を弱らせて。

父親は病院に母の見舞いに行く途中で、対向車線から飛び出したト
ラックに車ごと潰されて。

金持ちの親族に引き取られた俺は、クソツたれた環境で小学校まで
を過ごした。

保険金目当てのありふれた話。

そして業突く張りなアイツ等がそんな目的で引き取った子供に、ま
ともに養育費をかける筈がなかった。

今はしっかり理解できるけど、大金が入ったとはいえ、日本で子供
一人が育つまでの養育費は馬鹿にならない。一端金に目が眩んだ大
人が認める訳がなかった。最低限の食事に半分物置の部屋、毎日の目
立たない場所への暴力。一日一日が地獄だった。

でも、病気で病院のベッドからろくに動けなかった兄貴は、そこで義体関係の何かをしたらしく、金を手に入れてオレを迎えに来てくれた。

最初はオレに兄弟が居るなんて知らなかったんだ。

だからいきなり大勢の人を引き連れて家に押し入ってきた兄貴を見て、オレは物置の扉を閉めて見つからないように怯えながら震えていた。オレを引き取ったアイツ等がろくでもない奴等だつてのは分かっていた、だからきつと誰か似たような奴等が来たんだと思つた。

門と玄関をこじ開け屋敷に入ってきた兄貴は、家に居た親戚を締め上げてオレの居場所を聞き出し、暴力を振るわれると思つて怖がつて泣き喚くオレの痣だらけの体を、その機械の腕で抱きしめてくれた。それからあのろくでなし共を改めて殴つてオレを連れ出し、両親の残したお金も丸ごと筆り取つてくれた。

周りの大人、学校の教師、誰一人オレに手を差し伸べてくれる人は居なかった。

誰も彼もがオレの事情を知ると、哀れんだ目をしながらも結局は厄介事には関わりたくないと避けた。

助けて、と。

アイツ等の影に怯えながらも、竦み縮こまった心で精一杯の助けを求めようとした事もあった。

話し掛けた瞬間の、ホンの僅かに浮かんだ“厄介な物”を見る目。

微かに心にあつた希望も、そして心自体も。

あの目を見た瞬間に折れて砕けた。

そんな中で生きて、そして助けられたオレにとって、優しくて頭が良くてかなり性格の悪い兄貴は全てを預けられる相手だった。

でもそんな兄貴は、重すぎる病気を患っていた。

医学的な詳しい病状は分からないけど、簡単に言うとも未知の死病だった。

徐々に脳が変質し、体の機能維持を放棄していく。

初めて聞いたときは何かの冗談かと思っただけど、実際に出会ってから二年で内臓二つと耳が駄目になった。

担当の医者に「いくら機械に置き換えたとしても、二十歳までは絶対に生きられない」と聞いた瞬間、目の前が真っ暗になって吐き気さえした。

その後兄貴の所へ行行ってオレは酷く泣き喚いた。どうして、なぜ、そんな事ばかり繰り返した挙句に、またこんな辛い気持ちになるなら引き取られなければ良かったと叫んだ。

それまで困ったようにオレを見ていた兄貴だったが、最後の一言を聞くなり呆れ顔になってオレの顔面を義手が外れる勢いで殴り飛ばした。俯うつむいていたオレはひとたまりも無く吹き飛び、病院のリノリウムの床を転げた。

後から聞いた話だと兄貴は倒れたオレに説教していたらしいけど、着込むような形のガッチリした特製義手で殴られたオレはとつくに意識を失っていたので、そもそも聞こえてなかった。殴った本人はその後看護師に怒られたらしいけど、開き直って「睡眠学習だ」って訳の分からない事を言い張ったらしいのは笑い話だ。

……だめだ、兄貴のこと思い出していると涙が引つ込んでくる。

目が覚めた後に兄貴は、オレに自分の考えを言った。

《このままほおっておけば確実に俺は死ぬ。医学も死ぬまでに都合よく進歩するとは期待が過ぎる》

《だったら大勢の人がやっている医学以外で、何とかすることは出来ないかって考えた》

《リミットはきつと八年も無い。その時間で出来そうな何かを探す》
言ってる事は分かるけど、医学以外って何？

《オカルトとかそっち方面。今だと誰も見向きもしないような話》

正直な所、あの時は兄貴は自分が死ぬっていうのを知っていて、

とつくにどこかおかしくなっていたんだと思った。

だってそうだろう？

自分で機械を弄って特許とって金稼いでいるような人間が、いきなり自分の生死をオカルトに賭けますって言い出したんだから。普通は誰だって頭がイカレたって確信するだろ。

けど、よく聞くと兄貴は兄貴で論理的に考え（正直、オリジナリテイ溢れすぎてて理解しづらいけど）結論を出したらしい。

随分たって、ふと気になって兄貴に聞いたらこう言っていた。

医学は既に多くの研究者が居る。そこにたった数年勉強しただけの、それも経験値も低い人間が新たに加わったところで画期的な進展があるとは思えない。何よりその数年の勉強の時間が致命的だ。

だったら他に病気などが治ったという方法を試そう。なるべくなら他の人が試していない方法を。

単純に並べてみると、医療に近い温泉や食事療法から始まり、怪しいところでは宗教関係や御伽噺や伝説の類がある。この中で駄目だったという確認が無く、なるべく情報が多く存在し、俺のリミットまでの時間で可能で、もつとも可能性の高いものを選ぶことにする。

俺がやり遂げるのは目的の“場所”、または“物”を完璧に特定し、そこまでたどり着くこと。

後は選んだものの可能性と俺の運しだいだ。

オレからすれば論理的思考つてのに、平然とオカルトを混ぜて考えてるのが既に論理的じゃないと思う。兄貴からすりや立派に筋が通ってるらしいのが不思議だ。

そして兄貴は一年の期間をかけて一つを選ぶ。

オレは結局、一緒に数年がかりで一つの謎リドルかけに挑む事にする。

兄貴の言ってることも分かるんだ。

医者が匙を投げた今、このまま待ってたって死ぬし、医者やら何やらになって自分で治そうとしたって時間が圧倒的に足りない。なら

そっちの研究は知識のある人に任せて、自分は別の方向から試そうっていうのは良い考えだ。

そしてあの兄貴がそれで足掻くっていうんなら、オレも手伝うだけだ。

それからただひたすらに資料を読み漁り、研究者を訪ね、様々な可能性を検証した。外を気軽に歩けない兄貴に変わって足を棒にして動き回った。

そして兄貴の体が機能の喪失の許される限界まで成長するのを待ち、この最後の旅行でリドルの答え合わせをしに来た。

そして今、兄貴は歩いていった。

あと三日。

明々後日しあさっての朝までここで待ち、その後には俺は兄貴の後を追う。

屋外での運用を目的に金額度外視で設計されたあの蜘蛛は、気休め程度ながらも太陽光発電システムを備えている。それでも二個のバッテリーと合わせて三日が活動限界だろう。

兄貴の代替内臓機関は、たとえこんな環境下でも正常に働いてくれるだろうけど、生身の部分はそうはいかない。元々がもう限界なんだ。

奇跡なんて起こる訳が無いのは俺自身が良く知っている。

俺を苦しめたのも救ってくれたのも、世の中の全ての出来事は誰かや何かが動いた結果だったのだから。

だからきつと、俺が見つけるのは動かなくなったあの蜘蛛と、その中で死んだ兄貴だろう。

第零章 上編・3

《ふう、行けども行けども何もなし。いい加減に気が滅入ってきたな》

別れから約八時間。

ひたすら真っ直ぐに進んでいたのだが、左右上下の変わらぬ光景にはかなりうんざりしてきていた。

マップ上ではここから先が厳密に聖地と呼ばれる地である。

まあ、見たところ何が変わってるって訳でもない様だが。

《……ここから先が本格的な探索範囲か。休憩を取ってから進む》

三十分ほどその場に留まって飲料補給に薬の投与などを行う。

体調の方はまだ大丈夫だが、日の入りから日の出までの気温の低下にどの程度耐えられるかが問題だ。蜘蛛の低温下での保温・暖房機能は専用の施設で耐用試験を繰り返してあるが、正直な話、荒野での連続起動がどう影響してくるかが心配だ。

今更な話だが、もう少し時間があれば、という思いがあるな。

休息を終え、改めて探索を開始する。

ここまで歩いて来る途中とは比べ物にならない精度でセンサー類を働かせる。

格段に広がった探查範囲に伴って一気に増えた情報量に軽い眩暈を感じながら、細かい分析結果を判断してゆく。

歩いて、歩いて、歩いて、歩いて。

日が沈み、夜闇が世界を包んでも俺は探索を続けていた。

エネルギー効率を考えれば太陽光発電が出来る昼間だけ動くのが上策だろうけど、あいにく蜘蛛のエネルギーも乗っている人間も三日が限界だ。エネルギー効率を考えるより、俺が消耗してくる前に少し

でも多くの範囲を探索したかった。

歩いて、歩いて、歩いて、歩いて。

夜が明ける。

夜間の活動は思った以上の体力を消耗した。

気温の上昇を確認し、一時間の仮眠を取ってから探索を続行する。

歩いて、歩いて、歩いて、歩いて。

二日目の日が沈みかけた頃、疲労と体調の悪化で霞が掛かり始めた意識の片隅で、微かな違和感を感じた。

センサー類の数値には相変わらず特別な変化はない。

けど確かに、何かの変化を感じ取った。

(何だったんだ、さっき感じた違和感は何？ 思い出せ、思い出せ)

当たり前に判断するなら、これだけのセンサーをして検出されていない事に人間が気付くとは考えにくい。しかし目的が目的だ。探す対象がオカルトに属する事を考えれば、センサーよりも人間の感覚の方が重要かもしれないのだ。

集中するあまり詰めていた息を吐き、心を落ち着けようとする。

ゆっくりと深呼吸する、とその時。

吹きさらしの荒野を駆けた風が、蜘蛛のエアスリットを抜け、ダクトを通り、僅かに暖められて鼻腔に届いた。

その刹那、思考が止まった。

“匂い”

違和感の原因。

この赤茶色の荒野と僅かに生える背の低い高山植物。それらの上を吹き抜ける風とはあまりに掛け離れた匂い。

故郷の春にも通じる瑞々しい緑と咲き誇る草花の匂い。

それが、この荒野の乾いた風の中に微かに、しかし確かに香っていた。

心の中から強烈な、今までの生涯で感じたことの無い程に鮮烈な喜びが沸き立ってくる。

(これだ)

可能性を検討するまでも無く、半径数十キロ内にこの匂いの元になるような数の揃った緑地は無く、この国では未だ高価な、外国産の匂いの強い植物をこんな場所で持って歩く奴はいない。

そう、これなんだ。ついに、

《見つけた》

この匂いを辿ればたどり着ける。

そこで気付く。

この匂いはセンサーで捕らえられていない。

相変わず分析上は何の異常も検出されていないのだ。

ならば頼りになるのは自分の嗅覚しかない。

蜘蛛の上部ハッチを開放して空気の通りを良くし、同時に衛星からの気象情報や蜘蛛のセンサーが集めた風向きのデータを集める。

これに匂いがした時のデータを合わせて解析すれば大雑把な方向が出る。

この通りに進んで行けば、近づくにつれて正確な情報が弾き出せるだろう。

もうすぐだ。もうすぐたどり着くことが出来る……

歩いて、歩いて、歩いて、歩いて。

雲一つ無い夜空に磨き抜かれた銀盤の様な月が出ている。

月明かりで暗視装置も要らず、上部ハッチを空けたまま歩き続けている。

日が落ちてから急速に気温が落ち込み、体力がガリガリと削られていく。

ここにきて体調も急落。体の限界が近付いている。

逆に匂いは歩けば歩くほどに強くなってきている。それを支えにひたすらに進み続ける。

もう、匂いは途切れることも無く強く香っている。

もうすぐそこと言って良い所まで来ているはず。

その時、引き摺るように足を進めた瞬間、唐突に強烈な暴風が横合いから吹いた。

咄嗟に足を地面に打ち込み、胴体を地に貼り付けるように低くして吹き飛ばされるのを堪える。

一気に巻き上げられた砂埃に見る見る視界が遮られ、小石まで飛んで来るに至って慌てて開いていたハッチを閉じた。

(何なんだ!? こんな場所でこんな規模の竜巻がいきなり発生するわけがっ……!!)

とにかく露出していたセンサーの内、傷つき易い物をボディに収納する。

入ってくる情報はかなり減少したが、集音センサーからは凄まじい量の空気が渦巻き、まるで石臼のように大気自身を磨り潰している轟音がデータとして流れてくる。

ここまで強力な風だと俺込みで総重量四百キロオーバーの蜘蛛でさえも、胴体の下に風が吹き込む体勢をとってしまえば一発で転がさ

れるだろう。

そうなってしまうえばその勢いのまま、廃材になるまで石だらけの地面で摩り下ろされる羽目になる。

(落ち着くのが先決だ。今すぐ出来るのはやった)

バチバチガツガツと砂礫の当たった外装が鳴り、豪風に煽られて蜘蛛の踏ん張っている六足の関節の軋む音が、周囲が碌でもない状況なのを嫌でも悟らせてくれるが、それでも次の瞬間にも空を飛ぶ程ではない。

かと言っていきなり発生した事を考えると、樂觀や油断が厳禁なのは確かだ。

いったん蜘蛛から入って来る情報を緊急性の高い物意外シャツトアウトする。

ブツンツ、という感触を境に、慣れはしたが親しみはしなかった無力な闇の世界が戻ってる。

この世界で自分が出来る事は、昔から思考を巡らせる事だけだった。

そのせいか、この視覚と聴覚の無い世界に転がると自然と気持ちが生まる。

まるでパプロフの犬のようとは、確か夏樹の言葉だったか。

いきなり遭遇した異常事態に高ぶっていた神経も落ち着いてくる。

(竜巻について)

止むかは不明。

発生原因は特定不能。ただし推測は可能)

(状況に対する対処について)

竜巻は発生した時から一定の勢力を維持しているため、現状での早急な危険性はイエロー。ただし長時間に亘って晒されるのは危険。

このまま耐えた場合、データから約3時間で脚部に疲労性の不具

合が出るだろう。

最も容易な案だが、竜巻が止むかわからない現状では下策だ)

(後退した場合)

竜巻は横風だという事と砂礫が右や前方から当たっていた事から考えるに、前方で発生し、その場からまったたく動いていない。

この事から竜巻の勢力圏からの脱出としてはもつとも可能性が高いと考える)

(前進を強行した場合)

匂いの強さから考えて目標の目の前と言える距離まで近付いていたであろう事、竜巻の不自然さ、そして何より蜘蛛と俺の体の時間的限界を考えた場合、目的を優先する限り上策だと思われる。

この竜巻が通常でなくとも考えられない現象である事、目標である“東の園”と思しき場所への接近。この二点だけを安易に自分に都合良く考えると、いかにもこの竜巻が目的地を隠している防壁の役割を果たしているように感じる)

考えを巡らせるが、どれを選んでも結局は当初の目的を果たさない限り俺に未来はやって来ない。

(それなら体力の残っている間に少しでも進もう)

ポジティブに考えればただの義体で来ていたら、竜巻に巻き込まれた時点で未来どころか来世の心配しなきゃだったんだし)

方針が決まる。

再び蜘蛛からの情報収集を再開。この風の中での飛ばされない移動方法を模索する。

一番確実だろうと思われるのはやはり匍匐前進だろう。

胴体部を地面に着け、八足の内の最低三本を常時地面に打ち込み固定しながら進む。

かなり出力の要る作業の上に、接地した胴体とエンジンの入った腹部下の放熱口が半分以上塞がってしまうから機械的な負担が非常に大きい。

この際仕方ないと諦め、センサーの幾つかを傷付くのを覚悟で展開する。

蜘蛛の体で2・3の外装部分が、小さな範囲でくると裏返りセンサー類が露出する。

光学センサーのレンズ部分等は飛んでくる砂粒や小石で傷付いてゆくが、仕舞ったセンサー類の分の余った処理能力を使って出来る限り補正する。

ガキン……ガキン……。

脚の一本一本を丁寧に動かす。

赤く硬い地面の状態を確かめ、しっかりと足先を打ち込んでいく。気を付けるべき事は打ち込む場所に石等の刺さらない物が無いかを確認する事。

打ち込みました、刺さらず弾かれました、衝撃で体が浮いて飛ばされました。

それじゃ精々が笑い話だ。

集中して唯ひたすらに一步一步、確実に進んで行く。

機械仕掛けの体は疲れを知らないが、こちらを威圧するかのような風の轟音と、その中で失敗出来ないという緊張状態での精密作業が弱った体力と精神力をヤスリで卸すように削っていく。

もう何十メートル進んだらどうか？

普通の竜巻だったら幾らなんでもいい加減に“目”に辿り着くならして、少しはこの強烈な横風が緩くなるのに一向にその気配が無い。

こうなってくると

“この竜巻は同じ方向に同じ速度で動いているから出られないんじゃないか。”

“あの時後ろに引いて脱出してから迂回するのが正しかったんじゃないか”

などと今更な考えが頭をよぎって、さらに集中力が落ちてくる。

体調の悪化と併せて意識が朦朧としてきた。

(まだか、まだ抜けないのか?)

少しでも負担を軽減させようと、センサーの大部分は切つてある。

目の前の地面だけを確かめながら、機械的に唯ひたすら足を打ち込み、前に進む。

あれからまた時間がたつ。

一向に日が暮れない事が不思議ではあったが、それを気にする精神的余裕はもう無かった。

廃熱が万全に機能出来ない状態での高出力が要求される動作によつて、義体内の温度はかなり上がっていた。すでに飲料水は尽き、電力節約と廃熱量を少しでも減らすために、義体内の温度調整機能も切つている。

それでもここまで何とか耐えていられるのは、曲がりなりにここが高地であり、気温が低い事と、そもそも元凶である竜巻の強風がある程度の熱を奪っているからだ。

蜘蛛も強風の中で脚の二本を失い、さらに負担の増した脚の内の本も、間接部から異音を発してその動きを鈍らせていた。

(う、ツー)

ついに限界が訪れる。

次の一步を打ち込み前進しようとした途端、その脚が金属の割れる音と共に間接部から折れたのだ。込めていた力は行き場を失い、蜘蛛は僅かに前進しただけで地に突っ伏して動きを止める。

(一歩……次の、一歩を……)

熱に浮かされ、途切れ途切れの思考で必死に前進しようとするが、そんな状態の脳では情報の処理など出来るはずもなく、蜘蛛の残った脚は力無く地面を引っ掻くだけだった。

その時、飛ばされてきた握り拳大の石が、ゴツと音を立てて辛うじて生きていた聴覚センサーを叩き潰した。

衝撃と共に、情報処理出来なくて視覚を失っていた身から最後のセンサーが失われた。

一筋の薄明かりすら射さず、完全な無音の暗闇に沈んでいく。

義体にぶつかる小石の振動のみが、僅かにその意識を繋いでいた。

(これで、終わりか)

(結局は死ぬのか)

(あれだけやっても、無駄だったのか)

そこまで虚ろに流れた思考が、微かに、そう、ほんの微かに波立った。

(無駄。無駄?)

そうだ。絶対に生きるんだと決めたあの日から、俺は全力で動いてきた。お金も技術も知識も、時間さえもまったく足りなかった。

そんな俺達には無駄にする物なんて何も無かった。

手探りの行動は失敗も沢山あって、それでも全てを何かに繋げて来た。

駄目だと思っても、その先には続きがあった。

だから……

(まだだ)

そう。

(まだ無駄じゃない)

そうだ。

(まだ意識がある。まだ生きてる)
後一步、動けるかどうかだけど、それでもまだ終わってない。

(グウウウー)

唸り、歯を折れんばかりに食い締める。

光学センサーが復帰し、格納されていた全てのセンサーが展開する。

雪崩を打って押し寄せてくる情報を分析し、最適の跳躍コースを導き出す。

最後の一步だ。この一步で最後なのだ。だったら渾身の力でその一步を刻む！

無事な脚を畳む様に引き戻し跳躍に備える。

エンジンが低い唸りを漏らし、センサー類は跳躍のタイミングを計る。

待つ。

少しでも距離を稼げる風を待つ。

口の中を噛み千切り血の味を舌で転がし、意識を覚醒させる。

待つ風の、先触れをこそ捕らえなければならぬから。

風が、変わる。

(ガアツツツ!!)

脚の制御に意識を振り絞る。

巻き上がる豪風を利用し、脚部の機構の損傷を無視して発揮された出力が、蜘蛛型義体の巨体を跳ね上げる。

全力で飛ぶ。

そして、跳ねた瞬間にぷつりと糸が切れ、何も分からない暗闇に転げ落ちた。

第零章 下編

風が駆け抜けた。

ふと、目が覚めた。

草花の強いにおいがする。

人によつては青臭いという緑のにおい、だけじゃない。ハーブ等の胸が空くような香りもした。なにか……とても好ましい香りだった。

頭が軽かった。

安心できる空間で、ぐつすりと睡眠をとった後のようだった。

(何、だっけ？ えっと、なんか……、今、朝か？)

いつもの様にアームで目覚まし時計を取ろうとして、今、自分が身に着けているのが、普段装着している義体でない事に気付く。

(そうか、そうだ。確か竜巻の中で最後に少しでも距離を稼ごうとして跳躍して……、そこからの記憶が無いから、そこで気絶したか。でもこの匂い、それに未だに生きているって事は、あの最後の跳躍で竜巻を抜け出せたって訳か)

それにしても、どれ程の時間気絶していたかは義体を起動しないと分からないが、こうして体の調子が復帰しているというのが信じられなかった。

二日分しか蜘蛛に積み込めない薬が疾うに尽き、体内に埋め込まれた人工臓器の調整も出来ない状況では、遅くとも三日目の昼には死ぬ所まで自分の体は来ていたのに。

しかし幾ら訝しかろうと生きていて文句が出ようはずがない。

それに現在のこの状態では殆ど何も分からなかった。やらねばならぬ事がある。

とにかく情報を集めよう。

匂いを嗅ぐ。

必死に追いかけていた薄い匂いではなく、まるで春の山で寝転んだような濃厚な緑の匂いがする。

すぐさま蜘蛛とのリンクに意識を集中する。

幸いにして蜘蛛のメイン回路に異常は無く、衝撃でエンジンが停止しシステムが、自身の保護のために非常シャットダウンしただけだった。

蜘蛛のメインシステムが再起動を果たし、義体とのリンクが次々と確立する。

安堵のため息。何をしても蜘蛛がやればお終いなのだ。

だが確認したところ、蜘蛛の状態も良いとは言えない。

最後の跳躍で跳んだ直後に意識を失ったために、まともな着地が出来ず、かなりの勢いで地面に叩き付けられたらしい。手足である八本の脚の内、三本が完全に折れ、二本は手酷く歪んだらしく異音が出た出力が出ず、完全な動作をするのはたった三本のみ。

知覚センサー類も半数が完全に沈黙し、残り半数も万全に機能するものは無い。

燃料も残り少ない。太陽光発電システムなど、とうに飛んで来た石で碎けて壊れていて、残りと言えばバッテリーセルに残された僅かな電力と、同じくほとんど残っていないが、高純度の圧縮液体燃料のみだ。

ボロボロを体現したかのような有様であり、ここまできたら直すよりもスクラップにして新造した方が絶対に早い。

(完全には壊れてないのは幸運だが、これは碌に動けなくなったな)

厳しい状態だが、少なくとも最悪ではない。

まだ周囲を知れるし移動も出来る。

動かないよりは遥かに<rb>まし<<・・>>なのだ

どうやら運が良かったらしい。これは幸先いいのだろうか？

とにかく周囲を探查する。

自分でここだと当たりをつけて来ておきながら、やはり意外も意外である。

（“神が隠した”、か。

これだけの広さにこの地形、この環境……アルメニア共和国の標高では考えられないな。まあどうなっているのかは分からないが、いずれにせよ俺は入れた）

そう。

そこが重要な鍵の一つだった。

様々な伝承では楽園に棲んでいた生物の内、追放処分になったのは“人間”くらいだ。

あの蛇でさえ、罰は受けたが追放されたという記述は見当たらない。

なら楽園に入るには“人間”では入れないのではないか？

だからこそ“人間”に見付からなかったのではないか。

こう考えた場合、二つの条件が浮かぶ。

一つ。“人間”と判断された存在では楽園を知覚出来ない。

二つ。生物ではない存在は、同じく楽園を知覚出来ない。

一は良いとして、二は今まで衛星等の観測機器に、欠片の異常も感知されていない原因として考える。

……始めからそうだったが、予測に推測を重ね、妄想で肉付けしたような論理だな。

まあ、それでここまで来れたのだから良しとしよう。

その仮定の上で“楽園”に進入するために講じた策。それが今使っている蜘蛛型の義体だ。人間かどうかの判断が、どのような基準なのかは分からないし、どうやって判断しているのかも分からない。ぶっちゃけ神様系列の謎。パワーで判別されてたら、これはもうどうしようもなかった。

救いとしては、神話では楽園の守護者について、人間の追放後に神によって『天使階級の第二位であるケルビムと“きらめく炎の剣”と

やらが置かれた』とあり、神の管理が続いているとは無い事か。

解釈するに『きらめく炎の剣』とは、太古の昔から天上に居る神々が投げ落とした炎とされる『雷』の事だろう。『雷』とは、日本でも元来の意味を『神鳴り』といい、天上の神々がおこすものと考えられていた。

この『雷』については、伝承通りに剣の形をした物から雷が**迸る**のか、それとも単純にただの雷なのかは知りようが無い。どちらにしろこれだけではなく、天使と一緒に置いたからには、天使の方が判断を下していると考えた方が自然な気がする。剣が判断するって考えるよりも。

天使階級の第二位、ケルビムについては、良く知られているところの別名を知天使という。

ここで非常に重要な点が一つ。

この“知天使”。この“知”は真つ先に考えてしまいうだろう、知識を司るという意味ではない。実はこれ、神の御姿を見る事が出来るから、知る天使と書いて知天使なのである。

順当に考えれば、この天使が侵入しようとする存在を、人間であく否かと判断しているのだろう。しかしこの天使が司るのはあくまでも神との橋渡しである。高位存在とされ、人間にはその存在を感じる術の無い神を、ワンランク低い天使から神は実在するとして語るための、いわば宗教における“巫女”の役目であると考えられた。

だからこそ、人間というには機能の狂い過ぎた俺が蜘蛛の外見をした義体に乗れば、何とか誤魔化せるのでは？ と、精一杯の偽装の上で挑んだのだ。

結果、ここに至って未だに雷に打たれる気配は無い。

今のところは、何とか誤魔化せているからこそ、ここまで進入出来たのだろう。

付近の情報の解析が終了するシグナルが届いた。

目指すは生命の樹。

ところが肝心の樹の方角が分からなかった。

そもそも方位磁石が正常に機能していない。今までの進路と義体の倒れていた方向から、正面やや南よりと思われる方角に遠く一際大きな樹が見えるが、もしやあれだろうか？

判断に足るものが他に無く、残りの義体の稼働時間が少ない現在、あの樹を目指す以外に選択肢はあるまい。

どうか、あの樹が生命の樹でありますように、と、祈る場面なのだろうが、祈ったって何も変わらないって事は、俺にとって持論を通り越して経験で学んだ事実でしかない。

だから俺は何にも願わず祈らず、ただ目標に向かって、いつも通りに黙々と歩みを進めた。

(流石に他の樹に比べて大きいな)

大樹の下まで辿り着き、頭上を覆う梢を見上げる。

大きいも大きいだが、それ以外にも普通の木と違った点も目に付いた。

こういつた木は年数と共に上も伸びるが下も太る。俗に言う幹と呼ぶ部分が太くなる。それは表面付近が成長するのでなく最も内側から成長するもので、古く硬い表皮の部分には新しい枝は生えてこない。

もちろん元は枝があつた節などには生えるが、しかしこの木は様子が違った。

大きく茂つた梢の下であり、碌ろくに日光も当たらないただの幹の場所でありながら、あちらこちらに緑芽が芽吹き、若くしなやかな枝が伸びているのだ。

そして大樹の枝で、その先端にのみ、赤く色付いた林檎にも似た実がたわわに実っていた。

(林檎に似た実、だど?)

ソレは伝承の中で語られている。

最初の間人が食べた禁じられた木の実。

“知恵の樹の実”

林檎に良く似た実と語られる事の多い実。

だが自分が求めている物はこれではない。

もちろんこれがやっぱり“生命の樹の実”だった、という可能性もあるが……

(時間が無い)

電力が心もとなかった。

別の場所に心当たりがあるなら別だが、宛も無く探して回るだけの余裕など何処にもなかった。

心を決める。今悩んだところで時間の浪費にしなければならない。

蜘蛛の腹部の先端を地面に突き刺す。

微かな作動音と共に先端部がアンカーとなってより深く地面に突き刺さり、そこから腹部までにちようど蜘蛛が糸を吐くように、透明で細いワイヤーが繋が^{つな}がっている。

このワイヤーは蜘蛛の糸以上を目指して研究された試作品だ。性能は蜘蛛の糸と同程度だが、それでも強度は鋼鉄の五倍、伸縮率はナイロンの二倍である。この強度は鉛筆位の太さで巣を作れば、理論上は飛んでいる飛行機を受け止める事が可能な強靱さだ。事実、大人の親指大の蜘蛛は空飛ぶ小鳥すらも、その巣で受け止め捕食してみせる。

蜘蛛型義体は実際の蜘蛛とは大きさが桁違いで、装備している糸はいくつか太さはあるが、その殆ど^{ほとん}どが蜘蛛の糸よりも太い品だ。その分だけ強靱さも跳ね上がっていた。体重を支えるに不足はない。

まるでこれからこの巨大な蜘蛛が巣を張ろうとしているかの様に、糸を繋げたまま、残されているたった五本の脚を器用に使い樹の幹を上っていく。

八足の内の三本を失ったとはいえ、もともとが樹も登れる様にと設計した義体だ。脚の先端部に備え^{そな}えられた強力な機械式のスパイクは、

本来の用途とは別に、ここに来るまでに竜巻の中でその性能を發揮してくれた一品でもある。

えっちらおっちらと登っていく。

ようやく実の生った枝の所まで登ったが、この枝はかなり若い。頭上のがつしりした太い枝に比べれば明らかに柔らかさそうで、この義体で乗ったりしようものなら一発で^へ押し折れるだろう。

糸を上手く幹に引っ掛け、蜘蛛が巣を作るように降りて登ってを幾度か繰り返して樹の実を採るための足場を確保する。

一回登ってしまえば後はワイヤーを利用して登坂すれば良い。稼動部位の少なさは消耗に直結する。エネルギー量にすれば微々たる物だった。

とうとう樹の実が目の前にある。

そろそろと前足を伸ばす。

喉がゴクリと緊張からか、はたまた瑞々しい果実を前に水分を欲しか鳴る。

ゆっくりと前脚を伸ばし、スパイクを折り畳んだ内側に仕込んだアームで実に触れる。

やはり近くで見てもかなり林檎に似ている。細かく違いを言えば、先端に向かって先細りになっておらず、球形に近い形をしている点だろうか。アームで触れた感じでは、かなり柔らかい果肉のようだ。

実を傷付けないように、慎重に枝からもぐ。

蜘蛛の口に当たる場所へ持つていくと、その部分に穴が開き樹の実を飲み込んでゆく。

微かにモーター音が聞こえ、蜘蛛の中にいる俺自身の口元に冷たく瑞々しい物がくつついてくる。蜘蛛の口から吞まれた樹の実だ。

この機能は蜘蛛に乗っている時に自力で外部から食事が出来るようにとつけたもの。もちろん何でもは食えないが、小振りな林檎台の樹の実を食べるには十分だ。

皮ごとそのまま一思いに齧った。

(何だ、これ？ 知る限りの食べ物の味が混じってるのに、それぞれの味がハッキリしてる)

何味？ と聞かれても、とても答えようの無い味が口いっぱい広がる。

うまいか？ と聞かれれば、もう良いや、としか言えない味だ。

舌が飛びそうな天上の美味を自然と想像していた身からしたら、なんともいえない落胆の味だった。

どくん

(あグツ!?)

どくん、どくん

まるで病気の発作のように心臓が強烈に脈打ちだす。

血液が焼けた鉄のような熱をもち、鼓動と共に全身へ駆け巡った。

(ア、ああ、ギ、いガあああああああアツツ!!!)

体を体内から焼かれる感覚に身を振り身悶えした。今まで痛みは数え切れないほど経験したが、これほどの、全身の血管が毛細血管に至るまで痛みの塊になったような激痛は、一度も経験した事がなかった。

どくん。

鼓動と共に苦痛そのものが全身を駆け巡る。

更に体内を焼いた熱が脳まで廻り、そこで比較にならない程の熱を生み出した。脳に神経は無いにも関わらず、そのあまりの灼熱感に意識までが赤熱してゆく。

音にならない絶叫を口から吐き散らし、ワイヤーを踏み外してそのまま意識諸共落ちていった。

……ゆらり……ゆらり……ゆらり……

(おあー……)

今度の気絶はかなり短かったのだろうか。まだ逆さ吊りの蜘蛛は
転げ落ちた勢いを残してぶらぶら揺れていた。

(気持ち悪い。これはきつすぎる……)

さっきの熱の後遺症なのか、頭の奥に強烈な異物感があり、ガンガ
ンと激しい頭痛も襲ってくる。

この程度の痛みならば慣れているが、異物感の方はどうにも駄目
だ。

この体には機能を失った内臓などに代わって機械が埋め込まれて
いるが、頭の奥にこれほどの異物感を出す代物を抱えた事は無い。

(だが、収穫はあった)

やはり今食べた実は“知恵の実”の方だったらしく、求めていた方
では無かったものの、予想もしない変化が自分の体に起きていたの
だ。

その変化が頭の奥の異物感であり、自身の持つ知識に起きたもの
。

この楽園の存在自体がああ何の伝承を肯定するならば、人類は既に一
度、その身に知恵の実を取り込んでいる。俺の場合はこれで二度目に
なるからなのか、“知恵”ではなく、それを支える“知識”を得てい
たのだ。

人類が辿ってきた真実の歴史。

今まで人類が積み上げ、自身も研鑽した科学という分野。

文化に芸術。

政に戦。

知るはずの無い様々な知識を、まるで知っていたかの様に思い浮か
べる事が出来た。

これらの知識は全て今より過去の物。それこそ太古の昔といって良い時代の知識もあるが、これより未来に起こる事柄や発明される技術を得た訳ではない。

だがそれで十分以上に今の自分には役に立つ。

知識の中に原初の、遙か古の“始まりの人間の知識”がもつ、“この楽園”の情報があつたのだから。

この幸運に比べれば痛みや異物感など何ほどの物か。すぐさま知識の中にある生命の樹の場所へ移動を開始した。自動での移動に設定し、自らは義体の制御システムの最適化を開始する。残りの電力では生命の樹まで辿り着けない。故に、辿り着くためには迅速かつ確実な今以上の効率化が必要だ。

入手した人類最先端の電子工学、及び機械工学の知識を元に、蜘蛛型義体の動作システムを書き換えていく。

この作業は絶対に失敗出来ない。現状で予想距離に保有エネルギーが足りないのだから、僅かな失敗が数秒の稼働時間をふいにしただけで致命的な遅れになってしまう。

草地を抜け、森の中を進んで行く蜘蛛の動きが見る間に滑らかになつてゆく。

それ以前は折れてぶら下がった脚を引き摺り、何とか立っているような状態で慎重に進んでいたが、今ではその折れた脚すら使つて滑る様に木々の根や、苔むした岩を越えて行く。

その滑らかな動きはまさに生物としての蜘蛛に酷似していた。

やがて目的の地が近付いて来た。

信号化された視界に、森の木々が途切れ、ぽつかりと開いた土地が映った。

日の光が差し込み、樹木の代わりに色とりどりの花が咲き乱れるその中心に、蔦とコケに覆われ朽ち果てた石造りの小屋。

(あそこか)

蜘蛛は勢いのままに半ば外れて傾いた扉を突き破り、小屋内へ飛び込んだ。

そこは、一種異様な光景が広がっていた。

敷石が破れ大きく土が剥き出しになった地面に、そこから生えた一本の樹。

幹も枝も細く、丈も大人ほどしかない見るからに弱々しい樹が、しかし仄かに蒼と翠の光を放ち、窓も無く暗い室内を神秘的なグラデーシオンで照らしていた。

その揺らめきは、まるで澄み切った川床にいるかの様な美しさ。

魅了されるとはこの事だろう。言葉もなく見惚れた。

はっ、と我に返った。神秘的な空間に引き込まれ、随分長い間抗していたように感じた。

しかしゆらり、ゆらりと揺らめく光と影に心を奪われていたのは、実際は五・六秒だったろう。

視界の隅に映るカウンターが赤く染まって残り十五秒を示し、はっ
と我に返る。

(呆けている場合じゃなかった)

すると樹に近づく。

よくよく見れば、まるで磨りガラスで出来ているかの様な樹だ。

その樹の天辺に、夢に見るほどに求めた物が実っていた。

その実は確かに林檎に似た果実だったが、それは形だけでしかない。

実自体が水のように美しく透き通り、内に蒼と翠の光を放つ種子を持つ。これこそ類い稀なる宝石と呼びたくなる存在だった。

樹が折れないように注意しながら支えにして後足で立ち上がり、アームでそつと、“生命の実”をもぎ取る。

そのまま蜘蛛の口に運び入れ、実が自分の口元に触れたその瞬間。

自分の背中側、扉の破れた入り口で光が瞬またたき――

ドドオツツツツツツツツ
!!!!!!

水平に奔った落雷に吹き飛ばされた。

(……………あ……………、うあ……………ぐう)

激しく石の壁に叩きつけられた義体の中で呻く。

幾ら緩衝材があるとはいえ、かなりの衝撃が俺の体を痛めつけていた。

(ツう……………今のは雷か？ やはり、両方の実を食べる事こそが、最も警戒されていた、か。

だが雷に対策をしていなかったら、これは即死していたな)

例の“きらめく炎の剣”とやらへの対策は勿論していた。

義体が強力な電撃を受けた際の保護機構を幾つも組み込み、且つ、危険そうな行動ではそれなりの用心をしてきた。

攻撃を受けるとしたら最も可能性が高いのはこの小屋だ。だから入る手前の地点から腹部のアンカーを地面に突き刺し、そのままアースとして備えておいた事が命運を分けた。

損傷した脚部が誤作動し、跳ね飛んで壁に叩きつけられたのは流石に誤算だが、命を落とし義体を棺桶にせず済んだ。

しかしそれとて、あれだけのエネルギーを連続では無理に違いない。後は何秒耐えられるかの勝負になるかなのだが……

(――二発目が来ない？ どういうことだ?)

正直な所、死ぬまで雷が落ちる物と思っていたが……

素早く立ち直ったシステムを操りセンサーを入り口の方へ向けると、そこには大きな純白の羽が舞っていた。

正視しかねる程に神々しい一点の曇りなき純白の二対四羽の大翼。

(あれが知天使か)

知天使。

『天使の階級』において第二位に位置し“神の玉座”、“神の乗り物”とされ、古き名を『ケルーベイム』、中世には『ヘルヴィム』と呼ばれる。

伝承に四つの顔と四つの翼を持ち、翼の陰に人に似た腕を持つと伝えられた天使。

その姿は人、獅子、牛、鷲の四面を持ち、一对の翼は天を指して交差し、一对の翼は存在しない自らの体を覆い隠している。そして翼の陰にある人に似た腕は“神の手”だとされる。

この天使の仕事はたった二つしか伝えられていない。

一つは『楽園』の守護。

もう一つは『契約の箱』の守護者。

神の手を持ち、神から重要な守護を任される天使とされる。

その天使が今、白い光としか形容できない光輝を纏い、そこに佇んたたずでいた。

(しかし、これは幸運と言えば良いのか必然と言えば良いのか)

神罰の雷撃は降りない。

翼の陰から覗いた造形美の極地を現した手。その手には“きらめく炎の剣”と記された剣つるぎが握られていたのだが、

(あの剣、腐ってやがる)

そう。神が大昔に用意した剣は長い時に蝕まれ、もはや錆びの棒と化していた。

しかも今の一撃の代償か、あまりに脆くなった刀身が崩れ、中ほどから先が地面へ落ちていた。

(なるほど。神話の神々が作る武器って大抵は……)

思い起こせば、古今東西の伝承には神々の打った武器が多く記されている。その多くは鉄や青銅といった金属で作られ、鍛冶の神がその

腕を振るう事で強力な存在となった。

この剣もいくらか性能が良くても、所詮は神ならぬ金属の武器。神すらも変えることの出来ない時間という概念は、一本の剣を朽ち果てさせるには十分すぎたのだ。

(何にしろチャンスだ)

義体の中でシェイクされた体を必死で動かし、“生命の実”に喰いついた。

どくん

(ぬっ、ぐう!!)

どくん、どくと先程に食べた知恵の実と同じ現象が起こる。

血管を流れる血液が堪えられないほどの熱をもち、全身を駆け巡りながら焼いていく。

だが今回は心臓だった。激しく脈打つ心臓はどんどんそのスピードを上げ、それと共に焼け爛れた鉄の塊だと言わんばかりに熱くなる。

自分に腕があれば、いつそこの胸を裂いて抉り出したい。

そんな事をすれば当然死んでしまうが、それでも検討してしまう程にその痛みは身を苛む^{さいな}。

だがどれ程だろうか、そうは長引かず熱と痛みは収まりだす。て鼓動の異常な細動も緩くなり、血の熱も随分と引いてきた。これで俺の体は治ったのだろうか？

手足が生えたり目が見えたりは無い。何が変わったとも分からな
いが、しかしやり遂げたという喜び総身を満たしていた。

ドズツ

いきなりだった。

何か、身体の中から異音がした。

まるで尖った物が突き刺さったような——そのまま無理矢理押し込まれるような振動が体の中で響いた。

(なん、ツッぷつ?!?!?)

認識を待たず、熱い塊が喉を駆け上り口からあふれ出した。

(えふっ、ふ、ぐっふっ!)

酷く生臭い血臭を嗅ぎ、自分の胸を貫く何かをハッキリと感じて、ようやく悟った。

(何かが背中から貫通してる!?)

動く事も出来ず、義体の中で血を口と胸から溢こぼしていた身体が、この胸を貫いた物と持ち上げられる。どうやら壁に叩きつけられた時に背中の上部ハッチが開いていたらしい。

べちやべちやと、ぼとぼとと、吊り上げられた体から血が零れ落ちていく。

もとよりろくに動かない体は力を失い、その首を持ち上げる事すら出来なくなっていた。

(ち、くしょう……いったい……何が、刺さった?)

未だに首筋を含め体の各部に繋がったままの義体のライン。そのラインを通じて蜘蛛の瞳を開く。

そこには四枚の翼にしか見えない天使が、翼の下から伸ばした細い手で朽ち果て折れた剣を握り、四肢の無い男を、まるで百舌のハヤニエのように串刺しにした姿だった。

その姿は胴だけの身体から幾本も垂れ落ちるケーブル、そして袋に穴を開けたように流れ落ちる血液で、まるで現実感がなかった。

(くそっ、たれ、が……っ!)

そうだ。

鉄だ。

たとえ錆びの塊になろうと、アレは金属。

それなりの力があれば十二分に武器に成り得る。

まして対象が筋肉も脂肪もおよそまったくと言って良いほど無いのなら尚更だ。

ぐごぶと喉に血液が詰まり呼吸が殆んど出来ない。

出来ない異様な言語の悲鳴が二重に響き渡った。

体が開放され剣とそれを挿んだ腕ごと地面に叩きつけられるが、それを無視して蜘蛛はさらに脚を振るう。

自分の体を翼しか持たない者の抵抗がなにほどの物か。

存分に四翼を貫き切り刻む。

反対側の翼の陰から伸びてきた腕に脚を一本千切られるが、即座振り落とされた反撃によって左腕と同様に叩き落される。

血ではない、見えない命が飛び散った。

純白の翼は羽根を削ぎ落とされ、美しく伸びた骨を無残に折られた。

翼の陰から伸びる“神の手”はその両腕を肘より先から失い、純粹な“命”ほとぼしを迸らせている。

もはや天使は死に体であった。

永遠の存在を自らのみとした以上、その被造物である天使が永遠の存在であるはずが無い。

「死ね」

串刺しでうつ伏せに地に横たわったまま、

どれほど振りにか開いた目で見詰めつつ、

今までの人生で初めて覚えた心底からの害意を込めて宣告した。

同時、組み付いていた蜘蛛が翼を、虚空に繋がる根元から二翼纏めて引き千切った。

↑
!!!!
↓

壮絶な断末魔。

謳い上げられるそれは、今の俺には耳障りでしかない。

翼の下にはやはり何も無かった。

僅かに覗いていた肘までの千切られた腕も掻き消えていき、天を指していた二翼もその光輝を失い地に落ちる。

「っは。」

息が漏れる。

目の前には無残な四枚の翼と、機械の蜘蛛と人と似た存在の千切れ
た腕。

蜘蛛は各坐したまま動かない。

俺は、もう動けなかった。

(目と口が治ったが、義体つけるのに自分で切り落とした手足は生え
てこない、か)

おかげでこの胸を貫いた「神の手」つきの錆び剣を抜く事も出来
ず、起き上がる事も転がる事もできない。もつとも生命の樹の実の恩
恵で、心臓と肺を抉ったと思われる傷でも、こうして死なずにいられ
る。

だが怒りが過ぎ、気が抜けた今、抗い難い闇が意識を呑み込もうと
していた。

(ああ、今の心臓に剣が刺さった状態で死なかったのは良いが、この
まま落ちると、もう目覚めないんじゃないかな……)

瞼を開けている力も無い。

意識に霧が掛かり、思考が回らなくなっていく。

これは、抗えない。

でも。

でも——

(い、きるんだ。生きて、目覚めるんだ)

意識に、

心に、

死に物狂いで刻み込む。

肉に、釘で文字を刻むように、刻んだ。

落ちる寸前まで繰り返し、そして最後の最後。

たった一人の、残った家族の事が浮かんだ。

「……」

(……しあわせ、なって……)

第零章 下編・2

拡散してゆく。

内面と外界の境は消え去り同質の物となる。

意識はどこまでも広がり続け、やがて全ての果てへと至る。

一は全也

全は一也

だが、そこには『俺』という自己がある。

これこそがあの『楽園』へと至った俺の嫌悪する神の視点なのだろうか？

世界に重なり、世界と等しく、しかしそれだけでしかない。

世界とはただあるのみ。

そこに『俺』という精神は不要であり、その存在分だけ重石でしかない。

世界からこの身一つ分だけはみ出た存在。

びしりと

完全なる循環に亀裂が走る。

それは俺のせいでもあり、両腕を失った事で“完全無欠”から落ちた神が原因でもあるのだろう。

格の落ちた神がどのような選択を採るのかは今の俺にも分からない。いい。

ただ、俺はこの世界を出よう

少なくともそれでシステムにこれ以上の負担は掛からないだろう。

世界は完成されている。

足しても引いても、その総量が変われば崩壊を招くだろう。

唯一の例外が“生命”と“知恵”の樹だ。

あの『神』だったなら、いの一番に切り倒しそうな樹がなぜ残っていたのか。

ここに至ってようやく分かった。

アレはこの世界が存在するための土台から生まれた物。

世界を支える巨木の芽が、世界の殻を破り現れた。

そして神は己と世界にその実を栄養として取り込んでいた。

その実を取り込んだ俺は、この世界を出るために、それ以外をここに置いていく。

生まれ、育ち、アイツと共に歩いたこの世界に。

さあ、もう行こう。

世界から溢れてしまった『俺』が、存在する事の出来る世界を見つ
けに。

実に考えが甘かった。

『巨木』の芽は地面から生えていた。そこからいくら非常識な存在だろうと、『巨木』も木に近い形や性質を持つていと予想していた。実際そうだったのだろう。

世界の外に出た後に『巨木』には枝葉がある事を確認した。

問題は世界が『巨木』の上ではなく、葉っぱに当たる物の中にあつたということだ。

おかげで世界から出た瞬間、何かは分からないが水の様な物に揉みくちやにされて物凄いスピードで流されている。

目を開けても真つ暗で何も見えず、流れている場所も広すぎるうえに流れが速くて、端を探して掴まるような真似も出来ない。もつとも手も足も無い様でこの勢いでは、掴まるまでもなく叩きつけられて哀れな事になるのが落ちだが。

(しっかし、それにしてもいつまで流されるんだ、コレ?)

もうずいぶんな距離と時間を流されている。始めは窒息して一巻の終わりかと思いきや、一向に苦しくならんし、意識も霞んで来ない。

元々水は俺にとつての鬼門。手足が無いから風呂だろうとトイレだろうと落ちれば死ぬ。パニックを起こして訳が分からなくなつていたが、よくよく考えてみればこの体に酸素は必要無かつた。自作ボデイバンザイ。

かといつても意識のベースは人間である。補給が要らんと云つても腹は減つたような気はしてくる。残念ながらある物といつたらこの水しかないのだから、とりあえずこれを飲むしかないのだが。

ところが流石はと言べきか、この液体も『巨木』の一部なだけあつた。身の内へ取り込んでみれば、コレが俺の食べた二つの実に近い物だと分かる。あれは世界の中で成長し生つた実だけあつて、それぞれが生命と知恵という性質に染まっていた。しかしこれはより純粋なのだ。

丸めて色をつければあの実になるかも知れないが、着色というのは

元を損なう行為である。それで出来るのがあの実（正直食いたくない）とあらば、文字通り水でも飲んでた方がマシであった。

いや、とりあえず飲めば腹の足しになる上に、取り込むほどに自分の存在がより厚く、より密度を高めていくのが分かるから、有益ではある。非常に。……しかし味気ない。

まあ、この状況でそんな事を求めているのは余裕がある証拠。

つまりは一我侏《わがまま》。

であれば。やる事は一つ。食事兼、存在の強化でガブガブとひたすらに呑むべし。

何はともあれ、遠慮なく好きだけ飲めるといふのは実に久方ぶりでもあった。

しかしその他にも異常な事がある。

どうやら知っている木とは違い、この水流のような物は根から幹を通り枝葉にはなく、今の所は枝葉から幹へ向かっている。それに伴ってこの流れも他の支流と次々に合流し、より大きな流れになっているようなのだ。

これはなす術無く流されている俺にはどうにもならないが、問題は支流が合流するたびに自分と同じ様に流されて来る者がいること。そしてそれが当然のように必ずぶつかって来て、衝撃があつたかと思つた瞬間にこっちの体に潜り込んで来てしまう事だ。

最初は見ず知らずの他人と比喻抜きで合体する、という気持ち悪い事この上ない出来事に、恐ろしい違和感にさいなまれていた。

しかしそれも幾千幾万と繰り返されれば慣れる。実際、今は冷静にこの現象を観察していた。

落ち着いて考えてみればこれはかなりおかしい。合体まではまあ実際起こってるんだから良いとしても、毎度毎回こちらの意識以外の精神が無い。1+1は2になるものだ。始めは『たまたま此方の意識が残ったか』で済ませていたが、それが一度や二度でなくなれば何らかの原因、要因による必然でしかない。

そうこうする内も流れ流れ。

行き着く先は明日とも知れず。素晴らしく不安になりはする。が、
こうして『水』を飲めば利になる内は大人しく流されようか……
そう。少しぐらいの休憩になればいいだろう。

目が覚めた。

相変わらず流れに翻弄されている。

辛くは無いのだが……いささか以上に陸が恋しい。俺は魚じやない。陸上生物だったのだ。

……過去形でしか称せないのが悲しい。

さて——と真剣に自らの体を精査した。

あれから更に数え切れないほどの融合が（未だに遠慮したいものはあるが）あった。

それにしてもやる事が無い。

外界に変化が無いというのは実に退屈である。

もつとも出来る事が考える事と飲む事しかない状況は、集中するのには良い環境だった。お陰で幾つか新しい発見もあった。

（まさか『俺』がこれほどにいるとは）

驚いた事に、なんとこの流れてくる存在は、どうやら別の世界の『俺』らしい。これだけでは何が何やら分からないが、言葉通り、そうなのである。

判明した原因なのだが、融合した相手にも存在の大きさがある事に気付いたのが始点だった。

今考えれば、それらも同じように流され、途中で此方のように融合し続けながら来たのだらう。先へ向かって流れれば流れる程に融合する相手の存在も大きく複雑になり、加速度的に存在規模が膨れ上がる。結果、俺との融合の瞬間に、次第にほんの極々微かな精神を感じ取ることが出来るようになってきていた。

それはまるで眠っているかのように曖昧な感触だったが、その精神の中心、魂、核とでも言えば良いのか、その部分の特徴が瓜二つ。

—それ《・・》を言語では表現し辛い、何であれ、作られた物には作り手の“手”が表れるという。その“手”と同じようなものだ。で、同一の物と理解できたのが決定打。

……まあ、同じと言ってもそれ以外は、それこそ同じ部分が一つとして無く、とても核が同じとは思えない有様だったのだが。その多様性もまた暇潰しの糧になったのだから、全くもって人生、人生？ —
—何が幸いするか分からない。

この常識では測れない出来事は、まあ納得した。
理解できないのは仕方が無い。

ここは元居た世界の『外側』なのだ。内側の常識とは何もかもが違おうと考えて間違いは無い。というよりそう考えていたほうが心に優しい。理系に伸びた植物は繊細なのだ。そう何度も理不尽な打撃を受けていては透き通ったハートが割れてしまう。

——言ってるんだが、脳裏の夏樹が言ってる。 “メツチャ固い完全結晶だから透き通ってる？” って。

※完全結晶：結晶という言葉が指す本来の存在。完全に規則的なパターン配列の物質であり、『端』が出来てしまうリアルでは厳密には存在し得ない。ちなみに存在したら固体として強度の限界に迫るだろうと言われる。

(おお、口の悪い弟よ……)
なんか切なくなってきた。

いや、落ち込んでいても仕方が無い。

そう持ち直したのは主観推察で二時間後。……もつと長いかもしれない。寂しさとか心細さとか懐かしさとか、やつら手を組みやがったんだ。

——兎にも角にも続きである。

(“水”の中に流れているのは『俺』だった。言い直せば、世界の外には『俺』だけがいて、そしてそれだけの『俺』が何処から来た、の

だろう)

俺自身がこうして流されているのは自分がやった事だ。

だがそれ以外の俺が流れている理由が分からない。

合わさった際に自分の物となる記憶や感情、先程の核、あるいは魂と言つてもいいだろう部分。それら全てを丁寧に越し取つても、こうなる経緯が一欠け足りと出てこない。

有り余る時間を利用して一千万程も調べたが、ついぞ出てこなかった。

それでも現時点の総数からすれば悲しくなるほど微々たる割合なので、この先続ければ当たりが出るかもしれないのだが……いい加減飽きた。

他人の人生の一部分だけだからストーリー性もクソも無い。そんなのを延々一千万も見続けてまだとは、苦行にも程があらう。

とりあえず、今の範囲で整理すればこうなる。

- ・俺以外の『俺』と同じ存在が大量に世界外に存在する。

- ・俺以外の存在はどうやら居ない可能性が大きい。

- ・同じ流れの中に入った俺同士は引き合い、融合、いや同化という言葉に近い現象が起きる。

- ・上の同化の後、相手側の自我は残らない。これは彼我の存在の大小に関わらず。

- ・連中には世界の外へ出るような原因に心当たりが無い可能性がある。

そして最後に、

- ・世界というシステムはアークロジと表現して良く、基本的に内から外への流出はバランスの崩壊を招く。

という前提が入る。

最後に前提を入れるのは変な感じがするが、そこはどうでもよかった。

さして。

——どうやら俺が諸悪の根源らしい。

×××

第壹章 1 世界の“外”のせかい

そこは言い表せない空間だった。

正確には“空間”という定義自体が相応しくないのだろうが、己自身のフォーマットが地球仕様となっている以上、語るのなら便宜的にでも似た表現を使うしかない。

ただ全ての素たる『水』が在る。

有りと有らゆる存在、それこそ実体の無い概念にすら成り得る『水』の中に、俺という意味に染められた『水』が一塊、たゆたっていた。それ以外は何も無い。

——いや。無いという表現は事実ではあるが、適切ではなからう。何故なら便宜上『水』と言い表したものは、それこそ有や無へすら成れるのだから。

ここは、世界の『外』。

手を伸ばそう、と、意識すらしない指向性を持った時には成っていた。

形すらなかった自己はまるでそうであったように昔の五体を備え、前へ伸ばした先で擦れ合う指同士の感触。

目を開く。

生まれた眼球という器官は、光がなければ情報を得られない。

何一つ見る事はできない。それは、しかし慣れた事。

目を閉じた。

この感触。

目蓋の開閉という微かな動きから生まれる触覚への刺激。

動かさそうとして動くという感覚は……どれほどぶりだろうか？

健常者であれば気にも留めない刺激が、ひどく愛おしかった。

この目で見たいと思う。

だが、ここは目が使える環境ではない。

この脚が踏みしめる地面も、手が掴む何かも、肌で触れる空気もない。

無いなら、作り出せばいい。

万能の資材たる『水』は何もかもを埋め尽くして余りある。強く思えばそれに押され、この『水』の世界は雪崩を打って変異するだろう。

「光あれ」などと言うつもりはない。

あれの真似をするなど反吐が出る。

それに、世界を根本から組み立てるつもりもなかった。

この場所は世界の外で、ようはより大きな世界と言つていいかもしれない。そこを無遠慮に踏み荒らすのではなく、訪れた自身こそが新たな地へ適応したかった。

そうなればある意味、水に色を乗せる作業に似ているかもしれない。

あくまで『水』は『水』であり、観測する主観へ一枚のイメージを被せるのだ。

しかし視界を早くに失った俺は明確なヴィジョンに乏しい。

おそらく昔を想像したところで、映るのは長く目に代用していたカメラの影響が大きいだろう。デジタル映像に似た、精巧な二次元映像のような、とても現実とは呼べない異な光景が出来上がるのがやる前から予想できた。

——ふと、思い出す。

夏樹と話した夜の事。

あれはいつだったか——そう、もう何年も前。

夏樹とまともな身体になったら、という話をした。世界中の伝承伝説をあさって回り、それを話し合った後の事だ。

西洋の妖精郷の話が影響したのか、夢の中で一つの世界を幻視した。

夢特有の朧さと、圧倒的な現実感の同居。不可思議な感覚。

肝心の話とそこはまったく様子が違うのだが、しかし話を元に、自分から生まれたのだと何故か強く確信していた。

眠りから覚めても、まるで本当にそこへ居たかの如く鮮明に思い描けて、あんな夢は初めてだと不思議な気持ちを持ったものだ。

以来、色褪せる事無く記憶の片隅にあつた夢の世界。

思いつけば迷う事はなかった。

あれは単なる夢でしかない。別に誰かが見せたわけでも、ましてファンタジックに密かに未来視といった能力が備わっていた訳でもない。偶然見た、単なる夢の話。夢幻（ゆめまぼろし）のはなし。

だけど——あの夢で見た光景は、心に響いた。

別段難しい事などない。

目を瞑ったまま、ただ脳裏にあの世界を思い描けばそれでいい。

積み重ねられた年月も、それに育まれた進化の可能性とその結果も、時の中で延々と降り積もった重厚さも、全てが欠片も無い世界。

過去に心が即興で奏でた旋律で編み込まれた、記憶の中にだけ存在した陽炎の世界を。

さわり

頬を緩やかに風がなでた。

目を開く。

蒼い、どこまでも高く蒼い空と、白いレンガの壁。
中天に浮かぶ二つの真昼の月。

あ

と。

零れた。

古い記憶。

いつかの昔に夢に見た、夢なのに、心に刻まれた光景があった。

仰いでいた視線を下ろす。

そこはなだらかな丘の上。

白い一枚の朽ちた壁を背に、シンプルな木の椅子に座っていた。

眼下には柔らかかで峻烈な世界。

広い草原に、広葉樹と針葉樹の森。

清流に濁流。澄んだ湖に濁った沼地。

遠く霞む雪の冠を頂く山々。

高く、空の果てを流れる雲々。

一つの世界が、そこに生まれていた。

心が震えるとはこのことか。

肌が粟立つ感動など、生まれて初めてだった。

が、それも時間が過ぎれば落ち着いてきた。

一つ強めの風が吹き抜けたのを期に立ち上がった。

足が草に覆われた地面を踏みしめる。

床の固さとはまるで違った感触。

柔らかい。まるで天然の絨毯のようだ。

それを葉と、張り巡らされた根つこで柔らかく解れた土のためと分

析する俺は、おそらく情緒というモノが足りないのだろう。
さて。

「素晴らしい、けど……こう、やり過ぎた感が……」

後で思い返せば、新しい世界の最初の言葉はわりと台無しだった。

お知らせ

何回もすいません。

少しばかり問題が発生しました。

新しくノリノリでガリガリ書いてたんですが、ふとこう言われまして。

「直すのはいいけど、やりすぎるとオーバーロードみたいに別物にならね?」と。

はい。そのとおりです。あれはワザとではありますが、確かにネットと書籍、別物になりましたね。

ごっそり直すとか言ってたんですが、それだと削りの足しのでどっかに絡んだ文が飛んでしまっても分からない可能性も。整合性の面でも変な所が出て来やすいでしょうし。

などと、またぞろグラついてきたわけであります。

ちなみに以前をちよい手直していどなら、一日一話を卸してお釣りが出そうです。

この場合、どちらがいいでしょう?!

※そのままの場合、いつか書こうと妄想してた二次でないIFの方に使おうかと思ってます。

『巨木』の芽は地面から生えていた。そこからいくら非常識な存在だろうと、『巨木』も木に近い形や性質を持つてしていると予想していた。実際そうだったのだろう。

世界の外に出た後に『巨木』には枝葉がある事を確認した。

問題は世界が『巨木』の上ではなく、葉っぱに当たる物の中にあつたということだ。

おかげで世界から出た瞬間、何かは分からないが水の様な物に揉みくちやにされて物凄いスピードで流されている。

目を開けても真つ暗で何も見えず、流れている場所も広すぎるうえに流れが速くて、端を探して掴まるような真似も出来ない。もつとも手も足も無い様でこの勢いでは、掴まるまでもなく叩きつけられて哀れな事になるのが落ちだが。

(しかし、それにしてもいつまで流されるんだ、コレ?)

もうずいぶんな距離と時間を流されている。始めは窒息して一巻の終わりかと思いきや、一向に苦しくならんし、意識も霞んで来ない。パニックを起こして訳が分からなくなっていたが、よくよく考えてみればこの体に酸素は必要無い。自作ぼでいバンザイ。

かといつても意識のベースは人間だ。補給が要らんと言つても腹は減つたような気がしてくる。まあ、しかしある物といったらこの水しかないのだから、とりあえずこれを飲んでい。

実際飲んでみればさすがと言うか、何と言うか。この液体も『巨木』の一部なだけあつて、飲んでみればコレが俺の食べた二つの実に近い物だと感じた。

あれは世界の中で成長し、生つた実だけあつて、それぞれが生命と知恵という性質に染まっていた。しかしこれはより純粋だ。

(何と言うか、これを材料にして色をつけるとあの実になる感じがする)

とりあえず飲めば腹の足しになる上に、取り込むほどに自分の存在がより厚く、より密度を高めていくのが分かる。ここまで分かったらやる事は一つしかないだろう。食事兼、存在の強化でガブガブとひた

すらに呑んでいる。

その他にも異常な事があった。

どうやら知っている木とは違い、この水流のような物は根から幹を通り枝葉にはなく、今の所は枝葉から幹へ向かっている。それに伴ってこの流れも他の支流と次々に合流し、より大きな流れになっているようなのだ。

これはなす術無く流されている俺にはどうにもならないが、問題は支流が合流するたびに自分と同じ様に流されて来る者がいること。そしてそれが当然のように必ずぶつかって来て、衝撃があったかと思つた瞬間にこっちの体に潜り込んで来てしまう事だ。

最初は見ず知らずの他人と比喻抜きで合体する、という気持ち悪い事この上ない出来事に気が狂いそうになって悶えていたが、それが連続して幾千幾万と繰り返されるに至って幾分冷静になった。

落ち着いて考えてみればこれはかなりおかしい。合体まではまあ実際起こってるんだから良いとしても、毎度毎回こちらの意識以外の精神が無い。始めはたまたま此方の意識が残ったのかで済ませているが、一度や二度なら運で済むが、何らかの要因が無ければ五分の可能性の物が、これだけ一方的に此方が残るとは考えられない。

真剣に自らの体を精査しながら、更に数え切れないほどの融合（合体はどうも気持ち悪い）があった。出来る事が考える事と飲む事しかない状況は、集中するのには実に良い環境であった。お陰で幾つか判明した事がある。

（まさか『俺』がこれほどにいるとは）

そう。

なんとこの流れてくる存在は、どうやら別の世界の『俺』らしいのだ。

判明した原因なのだが、融合した相手にも存在の大きさがあったのだ。

どうやら流れてくる途中で、此方のように融合し続けながら来たらしく、根に向かつて流れれば流れる程に、合流し融合してくる相手の存在が大きく複雑になってきている。

その結果、次第に融合の瞬間に、ほんの極々微かな精神を感じ取ることが出来るようになってきている。まるで眠っているかのようには曖昧な感触だったが。その精神の中心、核とも言えば良いのか、その部分が俺の精神と同一の物だった。

もつとも、それ以外はそれこそ同じ物が一つとして無く、とても核が同じとは思えない有様だったのだが。

次にぶつかった時の感触だが、まるきり千差万別で、老若男女、健康不健康とひたすらにバラバラだった。しかも驚いた事に全員が“肉の体”だったのだ。この時点でこの現象が融合ではなく、一方的な捕食に近い関係だと悟る。

今のこの存在は自身の意思に『巨木』成分で肉付けしたようなもの。対して相手はどこかの世界の中から出てきた炭素ベースの体。しかもご丁寧に精神が消滅しかけの状態で此方に向かつてくるのだ。一方的な制圧も領ける。

挙句、此方の予想を裏付けするように元の世界で得た知識とは違う、まったく別系統の知識が増えていつてるのだ。

(この事から推察するに、俺が世界から溢れたために全ての世界に存在する『俺』に当たる存在も流出した)

(何故か。)

考えるに、これはそれぞれの世界を、“一番最初の世界”から樹形図的に枝分かれした世界としてみると納得出来る。

あの完全なる循環型だった世界の様に、全ての世界は多様性こそあれ、自身に内包する『材料』の様な物自体はまったく同一の存在なのだろう。それこそドツペルゲンガーの様な、存在自体が裏で繋がっている……。

その一つが完全に欠けた時、他世界の同一存在もまた、同じように欠けるのではないか)

(だが、この『外の世界』にとって『俺』という存在はもともと一つ。同一の『俺』がわらわらと存在する事は認められない。だからこそ、最初に現れた俺に統合しようとしている。といったところか?)

とまあ、こんなところか。

(完全に当て推量だが、まあ外れてたら外れてたで別に害も無いしな) そもそもこの筋道立てた考え方自体、筋道が地球産の常識で括られているので、そこから通用しない率が高い。

まあそんな訳で、一先ず考えがついた辺りでやる事が無くなった。水の方もいったいどれ程の量を飲んだのか、自身の存在もこの『巨木の水』を極限まで密度を高めた結晶の様になっている。元居た世界の物質とは根本からして違うのか、こんなになっても一向に限界というヤツが訪れず、幾らでも入っていくのが異様に不思議だ。物理学よ、さようなら……

(むう。こうなったらひたすらに水を吸収しながら、寝てしまおう!) 何せここは真つ暗。

しかも支流の先端を流れていた時に比べ、流れの道自体が大きくなったからか、格段に緩やかな流れになっているのだ。こうなれば何とか寝る事も可能だろう。

(さて。どこに、どれくらい掛かって着くのやら、な)

ぐう……………

第壹章 2 世界の“外”のせかい

簡潔に言おう。

「あゝぎだ」(飽きた)

『巨木の水』に対する調査や実験もやり尽くし、この素晴らし過ぎる存在を扱う方法も把握した。まあ色が無い故にやたら過敏だったから、今までの開発よりとにかくやり易かったが。

さて。環境も今は木で言う幹に入ったらしく、もうずっと支流との合流も無い。長い事別の『俺』が流れてくる事も無く、流れが曲がったりもしていない。

ゆるゆる、ゆらゆらと、緩やかな流れに乗って運ばれるだけだ。

もう単調で単調で……

(いー加減に同じ事しかやらないのも飽きたし、受身なのも飽きた。新しい事をアクティブにやって行こう)

こうやってとりあえず流された年数は、十年二十年では利かないだろう。

百年？ 二百年？ 五百は超えたっけ？ その十分の一程も起きてはいなかったが、それでもなされるがままではいるにはウンザリする長さだ。

今の体になって寿命ってものが無くなり、ついでに生理的に自然と起こる欲求が消えた今、俺は前では考えられない気の長さで思考している。

しかし、だ。

もういいだろう。

別に劇的に変わった行動を採ろうっていうのではなく、人間として歩き続けたあの時のように、目標へ向かって行動してみよう。

当面の目標は決まっている。

何にしるここまで来たのだ。だったらこの流れを最後まで行ってその終点を見て見よう。

(外部機関・生成)

暇に飽かせて実験した中で開発した技法で、量だけは莫大に存在する『巨木の水』を使用して、以前に己の体を構築した様に、今度は自分とは別の存在を組み上げる。

モデルは以前の我が相棒、蜘蛛型義体である。

義体としての部分はそのままに、自身とのリンクは『巨木の水』を通しての完全なダイレクトリンクを採用。それ以外を水中での活動に特化して再設計する。

『水』は流石に全ての源と成り得るだけあって、此方こちらが意思を持って手を加えれば、様々な別の物質へと変換する事が出来た。変換効率自体も“効率”という言葉が馬鹿馬鹿しくなる程のモノで、しかも実際に存在した物質以外の、理想とされた物すらも創り出す事が出来てしまう。

これを利用しない手は無い。

全体的なシルエットはイルカやシャチに近く、推力はロケットエンジンの『巨木の水』バージョンを採用。取り込んだ『水』を内部で理想的な液体燃料に変換、燃焼させて強力な推進力を得る。

(これで出来上がり、だな)

体を包むように、既に義体を装着した状態で生成が完了した。

打ち出されたばかりの義体とリンクが確立し、泳ぐための新しい体が生まれる。

(ん。さすがに蜘蛛をモデルにしただけあってシツクリくる)

尾鰭びれを一打ち、体をくねらせると流れの先に向けて泳ぎだした。

稼動したエンジンの調子もすこぶる良好。

暗い水の中を素晴らしい加速を見せて進んでいった。

今までとは比べ物にならない速度で泳ぐ。

泳いで泳いで、泳ぎ続け、とうとう流れの終点へと辿り着いた。

(根の先端、とでも表現すればいいのか?)

流れが次第に小さな路^{みち}へと別れて行き、此処が最も太く、最後まで残った流れの終端だった。

先細りになり、流れも感じられなくなり、もはや進む事が出来なくなった暗闇の中に俺はいた。

(終点といっても、別に何かがあるわけでも無し、か)

別に何か変わった物があると思っただけで期待していたわけではないが、実際にそうなることやはり落胆の気持ち大きい。

しかしまあ目標は達成し、流れの終端を見ることは出来た。
となると、次にやるべき事は決まっている。

(ここから出る事……)

そうだ。

もともと俺は別の世界を探そうとしていた。

水路の側からは、他の世界は一つも確認出来なかった。

だったら此処から出て、“外側”から探してみるしかない。

(さて、やってみるか)

水中用の義体を一度分解し、改めての手足の部分義体を構築する。

これはそれぞれが独立した義体で、やはり『水』を利用したダイレクタリンクを採用。

以前なら人間の手足の形をした義手・義足は、病気と脳の異常のせいで体に殆んど馴染まない代物だったが、やはり体自体が完全に別の物になったお陰で、以前のような認識出来ないといった問題は解決しているようだ。

(しっかりと認識できるな。動作に異常も無し。幻痛症の類いも無し。人間型の義体は久しぶりだな)

指や足首の細かい動きを軽く調べ、義体の出来に満足する。

リンクも以前より格段に向上し、まるで生の手足と見紛わんばかりの出来だ。

もつとも俺の体も義体も同じ『水』製だから、当然といえば当然なのだが。

さて。ここから出るには穴を開けるのが手っ取り早いのだろうが、無闇に傷をつけるのは問題かもしれない。とりあえずこの壁面を調べるべきだろう。その上でどうするかを考えるのだ。

最悪は折角の身体を崩して透過がなく、と悩みながら手足を伸ばす。体を思い切り伸ばせる程ここは広くは無いが、水を搔いて壁に精一杯寄り、まず両足をつ張り体を固定しようとした。

(よつと、ほつ！ えって、おわっ!?)
ところがどっこい。

しっかりと踏ん張ろうとした両義足が、壁に触れたと思ったらスルリとそのままの速度で潜り込んでしまった。

(やべやべやべ、ちよと!?)

まったく抵抗無く沈んでいく両足に焦る。

幾らなんでも予想外だった。今までの常識で考えれば痛い目見ると理解していたが、これはトラップ染みている。

足はあつという間に踵かかとから膝ももと壁の向こうへ消えていき、全く留まる様子がない。

(何とか止めないと)

向こう側の足が動く事に気付いてバタ足を試みるが、肝心の水が無いのか虚しく空を搔いて一向に手ごたえが無い。

そうこうしている内にも、どんどん体は沈んでいく。

とうとう腹まで埋まってしまい、咄嗟とっさに押さえようと突き出した両手が、足と同じく意味を成さずに沈んだ所で、ようやく諦めがついた。義足より上の腹の部分が向こう側へ行っても痛みは無い様だし、水の感触が無いくらいで特別に熱いとか寒いとか言う訳でもないらしい。だったら、どうせ壁を破って出ようとしていたのだから、手間が省けた程度に開き直ると気分的に楽だ。

するすると壁を通っていく。

胸、肩、顎と来て、目が沈む時にふっと思い当たった。

(そうだった。ここは木の中で、俺の体は水だった。そりゃ吸い込まれるわ……)

今、俺が義体をつけて立っているここは、実に不思議な空間だ。

ここはさんざつばら運ばれた、あの水の流れの中ではない。

四方八方が黒い空間だった。

真っ暗じゃない。光が無いから暗いのではなく、色が無いから黒い。

見れば分かる。理屈じゃなくて、一目見てその印象でそう確信させてしまう空間だ。

そこに俺と薄っすら光る一本の樹だけがある。

(あれは——生命の樹?)

磨りガラスで出来たような美しい樹。仄かな蒼と翠の光。

見間違えるはずも無い、その樹は“生命の樹”だった。

しかし、断言は出来ない。なぜなら……

(これは、この形は知恵の樹か?)

あの楽園の朽ち果てた小屋の中に生えていた“生命の樹”。あの樹は心を奪われるほどに美しかったが、一方で華奢で弱弱い外見をしていた。

しかし、今日の前にある木は様子が違った。

果てしなく長い時を感じさせる太く、いかめ厳しい幹に、天を覆わんばかりに広がり茂った枝葉。そして、縦横に走り、それら全てを軽々と支えてしまいそうな節くれ立った頑強な根。

その姿はまるで、楽園のどの木よりも大きかったあの“知恵の樹”を髣髴ほうふつとさせる。

この樹はまるで“生命の樹”と“知恵の樹”を併せた姿をしていた。

（だがこれが“知恵の樹”にしろ“生命の樹”にしろだ、あの世界の外にあるのはおかしい。あれらは育った世界の影響を受けた結果。と、なると……）

考えられる事は一つ。

（オレか？）

あの木は俺の影響を受けている可能性がある。“知恵の実”と“生命の実”を見て、手に取り、食べたこの俺の影響を。

根拠はあの外見だ。

その結果、あそこに見える木はその本質がどうあれ、俺の『生命と知恵の木の大本』という考えによってあの二つの樹を併せた様な姿で存在しているのだろう。

何よりだ、俺が今まで散々に流された木の外に出たとなれば、目の前にあるあの木の中に居たという事になる。それは幾らなんでも大きさが違いすぎる。

（そうするとだ、この周りが何も、色すら無いのは、俺が以前持っていた“外”のイメージが世界から出てすぐに流された時に完全に破壊されて、以後まったくあてを付けていなかったからか……）

実際に俺自身の体は、薄っすらと光を放つ大樹の輝きを受けなくても、やたら細部まで詳細に見て取る事が出来た。かといって、別に俺の体が矢鱈やたらと発光している訳でもない。

やはり俺の精神が、自分の宿る体は此処に確かにある、としっかりと認識しているからだろう。

精神はそれ単体では上手く存在できない。

有形無形であれ、拠り所となる存在と対になって初めて、確たる自己を形成できる。

(ふむ。ここは一つ試してみるか)

目を閉じ、上を仰いで『想像』する。

全ての世界を宿した大樹を取り巻く“新しい世界”を。積み重ねられた年月も、それに育まれた進化の可能性とその結果も、延々と降り積もった重みも、全てが欠片も無い。

心が即興で奏でた旋律で編み込まれた、心の中にだけ存在する実体の無い陽炎の世界を。

さわり

頬を緩やかに風がなでる。

目を開く。

蒼い、どこまでも蒼い空と、白いレンガの壁。そして蒼穹に浮かぶ二つの真昼の月。

あ

と。

喉から声が漏れた。

古い記憶。

いつかの昔に夢に見た、夢なのに心に刻み込まれた光景がそこにあった。

空を仰いでいた視線を下ろす。

そこはなだらかな丘の上。

白い一枚の壁を背に、シンプルな木の椅子に座っていた。

眼下には柔らかな春の世界。

広い草原に広葉樹と針葉樹の森。

清流に濁流。澄んだ湖に濁った沼地。

遠く霞む雪の冠を頂く山々。

高く、空の果てを流れる雲々。

一つの世界が、そこに生まれていた。

何とも表現出来ない、心が震える感動が過ぎると思わず眩きが漏れる。

「考えが当たっていたのは良いが、ここう、やり過ぎた感が……」

新しい世界の最初の言葉は、わりと台無しだった。

とりもあえず、風景をいい加減眺めた後、丘を降りていく。

麓には蔦が這い、年月を感じさせるような外見のログハウスが建っている。

その先。離れた場所に大樹はその威容を示していた。

あの何も無い空間では地面すら無かったため、上から下まで見えていたが、今では根は地面へ潜りがつしりと大地を掴み、柔らかな磨りガラスとも表現するべき葉が、陽を浴びて朧な木漏れ日を落としていた。

さすがに落ち葉は無い。その事に感心し、同時に情緒という面で残念に思う。

ログハウスの前に辿り着いた。

見上げれば壁から屋根まで細蔦が覆い、所々へ小さな花を咲かせていた。ほとんど緑に馴染んだそれは放置された結果の汚さではなく、この木造建築がそうだった周りの環境に溶け込んでいる象徴に感じられた。それほど違和感が無いのだ。

性に合う、とでも言えば良いのか。

まるで長く住んだ自分の家のように慣れた心地がする。

まだ中には入らず、そのまま大樹の元へ歩いていく。

(やっぱり素晴らしくでかいな)

下から眺めて、改めてその大きさに感嘆の言葉が出る。

形自体は“知恵の樹”と殆んど変わらないが、大きさ自体は輪をかけて巨大になっていた。

(さてと。まずはどんな他世界があるのか見てみよう)

再び目を瞑り、『想像』する。

目を開くと、そこには頭上の梢まで頑丈な作りの螺旋階段が伸びていた。

ゆつくりと歩いて登っていく。

どんどん枝葉が近づき、やがて手の届く距離まで来た。

顔を近づけて、葉の一枚一枚をよく観察してみる。

(んー。それぞれ模様やら透明度やらが違うのは分かるんだが、それでどういう風の中の世界が違うのかが分からん。これは参ったな)

違いが分からない。

これは致命的だ。

解決するには実際に世界を覗いてみて、それぞれの違いに法則性を見出す方法が順当だが、元の世界のように、もしそれが原因で世界が

崩壊した等と言ったら冗談にもならない。

加えて今の俺は、あの世界の素たる『水』をひたすらに吸収し続け、人から見れば無限と表現した方が良いほどの、平行存在の『俺』を全て食い尽くしている。

かなり控えめに見ても、世界を出る前とは存在の次元が違いすぎる。

これでは迂闊に触る事も出来ない。

(俺は阿呆か？　こうなる事も予想できただろうに)

あれからしばらく、対処に困って階段に座り込んで腕を組み、どうしようかと唸っていた。

困りに困り、しようが無いから何処かに桁外れに頑丈どこそうな葉がないか探してみようか、等ととりあえず動こうとする。

そんな矢先のこと。

視線を巡らせた先に、一枚の変った世界が目についた。

その葉は他に比べて酷く色の薄い葉だったが、それ以外は形も模様もそう変わらなかった。

しかし一点だけ、明確に他の世界と違う点があった。

『蛇』

一匹の白い、双頭という異形の蛇が葉の中に、一つの世界を包むように絡み付いていた。

「これは……。見たところ異形とは言え蛇だが、俺は動物は『想像』していない。となればこいつはこの世界に元から居たのか」

ざっと見渡しても、他にそのような葉は一枚も見当たらない。

非常に興味深かった。

この世界は見たところ、自身より大きな蛇を支えているにも関わらず破綻が見られない。

もしや、この世界はそういう世界なのか？

この世界なら俺は受け入れられるのか？

そう考えた時には、既にその葉に向けて手を伸ばしていた。
もし違ったら。

触れた瞬間にも、この葉は内包した世界ごと碎けて散るだろう。この世界の一切合財が消えてしまう。

頭の隅にあるそんな恐ろしい可能性でも、いったん願いの元に動き出した手は止められなかった。

震えながら伸ばされた指先が、葉に、その世界に触れようとし――

『ああ、触れるのは止めてくれたまえ』

などと、俺は当の蛇本人から声をかけられたのだった。

小話 閻魔と行き逢い 書き方その1

「四季映姫、と言ったか

まさか音に聞く閻魔が地蔵とは……」

「——出会うなり不躰ですね

少々無礼ではないですか」

「自ら閻魔に就いたのではあるまい

大方、そうするに都合の良い能力でも見つかったか」

「だまりなさい

今閻魔は休暇ですから、それ以上要らない口を開けば四季映姫として許しませんよ」

「地蔵にヤマザナドウの名は重かろう

裁きを下すは辛かろう」

「——」

「命ぜられたか？」

「否とは言えなんだか？」

「—— ツツツ!!!」

「——そこまで触れて欲しくは無いか

そうか。そうか」

「異国の神か、真性の化物か——

お前のようなモノに……何がわかる……」

「分かるとも

日ノ本で最も民草に慕われた地蔵菩薩よ」

「——」

「古き大和の神は朝廷に捨てられた

大陸より新たに招かれたのは数多の仏神」

「——」

「しかしその全ては、氏族など力有る者のみ祀った

何故なら日々を飢え苦しむ民に、僧や社へ奉げる物など何一つ持て

ないから」

「神の救いを説く僧は、民には縁がない

八百万の神を徹底して奪われ、仏神は富める者しか救わない」

「貧しい時代

盗みに殺生、やらねば生きてすらゆけぬ時代」

「現世は畜生に墮し

死後は想像も出来ぬ苦しみがと、絶望する」

「地藏菩薩は

それら苦界の民草の唯一の救いとして生まれた神」

「要るは祈りだけ

老人だろうと死病人だろうと、犯し殺しの極悪人だろうと構わな
い」

「だれでもいい

どんな人間でも、地藏菩薩に救いを求めている」

「大いなる幸いが降るわけではない

祈る者も、そのような絵空事は望めもせぬ」

「地藏菩薩がくださる救いとは——」

「——地獄に落ちた罪人達に

永く地獄の責めを受ける咎人達に、唯寄り添う事」

「ただ傍にいて、自分を見ていてくださる

釜で煮られ、針の山に登らされ、飢え渴きに苦しみ、鬼に体を鋸引
かれようとも」

「ただ傍で見ている

「……見ているだけ」

「地蔵菩薩は

四季映姫、お前はずっと、そうやって救われぬ者を救い続けてきた」

「だから他のどの神よりも慕われた

日ノ本のあらゆる地で小さな神像が作られ、死後の小さな安寧が願われた」

「お前ほど罪人の苦しみを知る者は少ない

——突き落とすのは、辛いか」

「——貴方は、全部分かってて言ってたんですね」

「やりたくはありません

勤めとて、辛い」

「何十年何百年、むごい責め苦を受け続ける

気が狂う事も許されず、唯ひたすらに苦を魂魄に刻まれる」

「……幻想郷に地蔵はいません

私が裁いた罪人は、救いがありません」

「黒を白とするは、私の能力が許さない

罪業は過たず行く先を指し示します」

「ですが、彼らとて世に迫られたと

そして悪因悪果として命を落としたとも、思います」

「私は神です

救いを願われ生まれたものとして、救うべき者を地獄に落とすたくはありません」

「——そうか」

小話 閻魔と行き逢い 書き方その2

「四季映姫、と言ったか

まさか音に聞く閻魔が地蔵とは……」

「——出会うなり不躰ですね

少々無礼ではないですか」

「自ら閻魔に就いたのではあるまい

大方、そうするに都合の良い能力でも見つかったか」

「だまりなさい

今閻魔は休暇ですから、それ以上要らない口を開けば四季映姫とし

て許しませんよ」

「地蔵にヤマザナドウの名は重かろう

裁きを下すは辛かろう」

「——」

「命ぜられたか？」

否とは言えなんだか？」

「—— ツツツ!!!」

「——そこまで触れて欲しくは無いか

そうか。そうか」

「異国の神か、真性の化物か——

お前のようなモノに……何がわかる……」

「分かるとも

日ノ本で最も民草に慕われた地蔵菩薩よ」

「古き大和の神は朝廷に捨てられた

大陸より新たに招かれたのは数多の仏神」

「しかしその全ては、氏族など力有る者のみ祀った

何故なら日々を飢え苦しむ民に、僧や社へ奉げる物など何一つ持て

ないから」

「神の救いを説く僧は、民には縁がない

八百万の神を徹底して奪われ、仏神は富める者しか救わない」

「貧しい時代

盗みに殺生、やらねば生きてすらゆけぬ時代」

「現世は畜生に墮し

死後は想像も出来ぬ苦しみがと、絶望する」

「地藏菩薩は

それら苦界の民草の唯一の救いとして生まれた神」

「要るは祈りだけ

老人だろうと死病人だろうと、犯し殺しの極悪人だろうと構わな
い」

「だれでもいい

どんな人間でも、地藏菩薩に救いを求めている」

「大いなる幸いが降るわけではない

祈る者も、そのような絵空事は望めもせぬ」

「地藏菩薩がくださる救いとは——」

「——地獄に落ちた罪人達に

永く地獄の責めを受ける咎人達に、唯寄り添う事」

「ただ傍にいて、自分を見ていてくださる

釜で煮られ、針の山を登らされ、飢え渴きに苦しみ、鬼に体を鋸引
かれようとも」

「ただ傍で見ている

……見ているだけ」

「地蔵菩薩は

四季映姫、お前はずっと、そうやって救われぬ者を救い続けてきた」

「だから他のどの神よりも慕われた

日ノ本のあらゆる地で小さな神像が作られ、死後の小さな安寧が願われた」

「お前ほど罪人の苦しみを知る者は少ない

——突き落とすのは、辛いか」

「——貴方は、全部分かってて言ってたんですね」

「やりたくはありません

勤めとて、辛い」

「何十年何百年、むごい責め苦を受け続ける

気が狂う事も許されず、唯ひたすらに苦を魂魄に刻まれる」

「……幻想郷に地蔵はいません

私が裁いた罪人は、救いがありません」

「黒を白とするは、私の能力が許さない

罪業は過たず行く先を指し示します」

「ですが、彼らとて世に迫られたと

そして悪因悪果として命を落としたとも、思います」

「私は神です

救いを願われ生まれたものとして、救うべき者を地獄に落とすたくはありません」

「——そうか」

第壹章 3 “蛇”の世界と断頭台の姫君

驚いた。世界を覆うほどの蛇だ。キリスト教化以前のノース人の伝説『北欧神話』に出てくる地を飲む大蛇、ミドガルズドオルムも適わない巨大さだろう。

まさかそれが唯の蛇だと思っただけではないが、葉の“外側”である此方を認識し、しかも声を掛けてくるなんて流石に予想外。

しかし予想外は予想外として、意思の疎通がなせるならこれに越した事はなかった。

まずは挨拶でも、と思った所で伸ばしたままの手に気付き、引っ込める。

「あ——無遠慮に触れようとして申し訳ない。初めまして」

万国共通で通じるのは誠意だ。表情やちよつとした動き、何より雰囲気や相手の感じるそれを左右する。

『フッフ。此方こそ、初めまして』

若者か老人か、男か女かすら分からぬ奇妙な声で蛇は返礼してくる。

(というか、普通に返してくるのが吃驚びっくりだわ)

この蛇が世に数多ある蛇神の類であれ、ぱつと見で蛇でしかないのが人間らしいと違和感が。こういった常識的な部分は、おそらくこれからは邪魔になるのかもしれない。

『何という幸運だろうか。我が世界が終わろうとする今この時に、これ程得難い客人を迎えられるとは！』

「は？ なに？ ちよつと待ってくれ、今何と？」

溢れんばかりの凄い喜びようだが、それよりも重要な、全くもって聞き捨てならない碌でもない言葉が聞こえた。

『ああ、この世界が終わると言ったのだよ』

(さらつと笑えない事言うなよ)

真偽は分らないが、見た感じでこの世界の神かそれに類する存在が『滅びる』と言っているのだ。もしその言が本当なら、間違いない滅び

るのだろうか。

よもや世界を出て初のコンタクトがこれとは……。

さて——もしどうこうするにしろ、事情は聞きたい。少なくとも世界の終わりとなれば貴重な情報だろう。

「……名乗らず、失礼しました。私の名前は黒川冬理（クロカワ トウリ）と言います」

『私の神としての名はとうに忘れてしまったが、君には“メルクリウス”と名乗ろう』

双頭の蛇は何故かは分からないが、とてとても、それは嬉しそうにクツクツと笑いながら名乗った。

（“メルクリウス”だと？）

メルクリウス

古代ローマにおいて伝えられたローマ神話における伝令・商業・泥棒・旅行を守護する神。移動する、彷徨^{さまよ}う等の『変化』を司り、それが長じて後に錬金術の神にもなる。

しかしこの神、ローマの都市において、正式に『ローマ』と呼ばれた聖域の外に神殿が建っていた事から、どこか他の、“外”から来た神とされている。

（外来の神、か。自分の知る神話が当て嵌まるかはともかく、また意味深な名を名乗られたものだ……）

「では、貴方は私にこの世界に触れて欲しくないか？」

『そうだ。この世界は特異な成り立ちをしていてね、君のような外からの強力な力には弱いのだよ。それこそ君に触れられただけで破れてしまうだろう。』

それに、今は私にとっても重要な時を迎えているのだ。干渉はしないで欲しい』

どうも話し合ってみると、この世界は考えていたような物とはまったく違うらしい。

となればこの世界は諦めざるを得ないが、幸いにもここには言葉の通じる彼（便宜上メルクリウス神は男神のため「彼」とした）がいる。見たところ、彼は自分より圧倒的に長く生きているようだ。

それに加えて“外側”を見ることが出来るなら、それに見合った多くの知識も持っているだろう。

言っただが、純粋な力関係では此方が圧倒的に上らしい。交渉ごとにおいては有利なアドバンテージとなる。

彼も、表情こそ分らないが矢鱈と歓喜の念が感じられるなど、何やら此方に対して思うところがあるらしい。ここで彼の先の言を嘘だと断じ、強引に世界に入ろうとするよりも、彼が知る情報を得た方が有益だろう。

「分かりました。そのような理由なら、この世界は諦めましょう。

代わりと言っただが、私が入れそうな世界を識別する方法を、もし知っているなら教えてもらえないだろうか？」

『知っているとも。』

よろしい。それをもって我が願いの対価としよう』

少し拍子抜けしてしまうほどにあっさり取り引きは終わった。

両者の求める物が克かち合あわないとシンプルで後味も良い。

これが奪い合いになれば話はまた別で、もつとドロドロした様相を見せるのだが。

『それではまず此方から対価を支払おう』

「それは……いいのか？」

少々意外な提案に面食らう。

当然、此方が貰うだけ貰って契約を履行しない危険性がある。

この短時間では人間性など分からう筈はずも無い。彼とてそれは分かっている筈だが。確かにこの状況、俺を力で止められない以上、好意的な関係に持っていくのが向こうにとつても安全策となる部分も

あるが、さて……

『もちろんだ。なにせ、君は既に私に素晴らしいプレゼントを持って来てくれたのだから』

(プレゼントだと？ まさか俺自身がプレゼントとか言わないよな)
嫌な予想が脳裏をよぎり、内心戦々恐々とする俺を尻目に、彼は語りだした。

『さて、最初に言っておこう。』

私はこの世界から出た事がない。

ああ、君が欲しい情報を知らないと言うわけではないよ。

まあ少し待ちたまえ。

だが、“君が許容されうる世界”について語る前に、この世界と私と、そして我が愛する『姫君』について、少し語らせて貰おう。

もう消え行く世界とは言え、彼女が生まれた世界。

私にとっては永劫に続く責め苦を与える忌々しい牢獄だが、誰か一人くらいは覚えていても良いだろう。それに、この世界群を渡る上で、この知識が君の助けになる事もあるかもしれない。

さて、先ほどの世界は特殊な成り立ちをしていると言った事は覚えてるね。

私も遙かな昔は、大地に生きる一介の魔術師だった。

しかし運命は数奇な物。私が組み上げた秘術によって以前の『世界』を塗り替え、旧神を殺し、その『座』について新たな『神』となつてしまった。

今の世界は、我が秘術によって己の渴望が世界へ流れ出した結果、生み出された産物。

故に、私にとっては全ては既知の存在。この世界の過去、現在、未来の何もかも全てが、既に分かっているのだ。

透徹した思慮と、極限を超えた知識と永遠に近い時間を生きたあげ

くに愚の極地へとたどり着き狂った座、それが私だ。

待ち望んだ終わりを目の前にして若干正気に戻りこのように理性的に会話をしているが、なに、実際には理性などとうの昔に失っている。ほんの少し前までは自身の渴望すら忘れ、ただ流れ出す影となり、宇宙を覆いつくす妄執となっていたほどだ。

我が魂に刻まれた渴望は“まだこんなところで死にたくない”。

この私の渴望を根源に創造された世界は、神である私が全てに納得し、満足した死を迎えない限り、例え神である私が死のうとも回帰し、何度でも全てをやり直す。

だが神にとつても長過ぎる時間ひたすらに繰り返され、知覚する物全てに既知しかない感じられない世界の何に満足しろというのか？

私は逃れられない永劫の回帰に囚われ、永遠とも思える時の間に狂い果てた。

しかしある時、私は一人の少女を見つけた。

断頭台の姫君。

フランスのとある地方に彼女はいた。

私はすぐさま己の影を送ったよ。この神としての体はあまりに大きく力も強すぎるから、自由に動く事すらままならないからね。

何故そこまでしたのか？

そうだね。別に彼女に未知を感じた等という訳ではない。

それでも、その存在に、その魂に、私はどうしようもなく惹かれた。

有体ありていに言えば、私は彼女を一目見て愛してしまっただ。

陳腐だが、一目惚れという奴さ。

それからというもの、私が死ぬ度たびに幾度も繰り返される世界の回帰の中で、必ず彼女に会いに行っただよ。

人間としては断頭台の下に生まれ、人に触れると問答無用で首を刎ね飛ばす呪いを帯びていたため、周囲の人間に忌避され、最後まで誰にも深く関わる事が無く、白痴の不吉な狂人として自身も断頭台によって処刑され、その短い人生を終えた。

だが、彼女の魂はある意味、私と似たような境遇だった。

世に生まれながらに私と同位の、世界への『流出』へと至り、それが故に永遠の存在となっていた。

魂だけの存在となり、黄昏に染まる砂浜でいつまでも一人歌い続けるその姿を見て、私は彼女に特別のプレゼントを贈ることにした。

笑ってくれたまえ。そう、まさに惚れた弱みだ。

私を“カリオストロ”と呼ぶ可愛らしい私の姫君のために、何かしてやりたくて仕方が無かったのだよ』

まるで嬉しいという気持ちが滲んでくる、そんな口調の語りが一段落着く。

それにしても、

「また何と言うか、これは壮大な惚気話のろけばなしでしようか？」

『クツクツク。そう、そうとも言うね』

蛇は愉快そうにクツクツ、クツクツと笑う。

それを幾分呆れた顔で見ていると、彼はますます笑みを、まあ蛇の顔だから雰囲気だが、深めて言った。

『さて、ここからは私の影の記憶と、その目を通して見てみないかい？

そうすれば、この世界の終末劇を余す所なく見ることが出来る』

「ここまで聞いたら最後まで知らないよ、気になって仕方がないな」

そう伝えると彼は満足そうに頷き、何事かを呟く。

すると宙に光がまるで夜空の星々の如く灯りとも、寄り集まって複雑怪奇な黄金の魔方陣を形作る。その内の最も小さな一つが宙を滑り、目の前に止まる。

『その魔方陣に触れたまえ。』

演目は、彼女へプレゼントを贈ろうと決めてから始まった、世界の終末へと繋がるクラランギニョル。

どうか、楽しんでくれたまえ』

期待。

これから見るのは俺がいた世界とは別の世界の物語。
まるでそうする事が始めから決められていたかの如く指は動き、黄金に輝く神秘へと触れた。

それから見たものは以前の常識を覆す、まさに荒唐無稽な御伽噺。彼には名が多くあった。ヘルメス・トリスメギストス、カリオストロ、カール・エルンスト・クラフト、ノストラダムス、パラケルスス、クリステイアン・ローゼンクロイツ、ジェフテイ等々、歴史上に数え切れないほどの多くの名を名乗っていた。

大戦期に彼の影である存在は、“カール・エルンスト・クラフト”として本格的に活動を始める。かのドイツ第三帝国にて、一部の上級将校のお遊びでしかなかった聖槍十三騎士団を超常の魔人の集団と仕立て上げた。

首領に『黄金の獣』ラインハルト・ハイドリヒを頂く黒田卓の十三騎士。副首領に納まったカールによって、秘術『永劫破壊（エイヴィヒカイト）』を授けられた彼らは、その力をもって戦場で更なる魂を狩り集めてゆく。

『永劫破壊（エイヴィヒカイト）』

血を吸い力得たアイテム、“聖遺物”を核として魂で駆動する複合魔術。殺害した者の魂を取り込み、保有する魂の量と質によって力を増す、魂喰らいの邪法。

そしてドイツの敗戦。連合によって戦火に包まれる首都ベルリン、そこに十三の騎士もいた。彼らにとって、もはや自国の敗北などどうでもいいことだった。

焼け落ちる町並みの中で、敵国への止めに湧く連合軍、せめて民を守ろうとする僅かに残ったドイツ軍、そして逃げ惑う自国の民衆までも、その全ての魂を貪り、儀式への生贄として捧げた。

それから61年後。

十三騎士は首領と副首領、そして上位の三騎士が姿を消し、二人を失い、新たに一人を加え、かつての同盟国である日本を訪れる。

目的は“ツアラトウストラ”。

万能至高として生まれついた首領の、己の全力を出してみたいと願いに對して副首領が用意した相手。副首領たる自身の代行とまで言うる存在。

青年は何も知らないまま、魔人が踊る狂気の闘争へと巻き込まれてゆく。

そして“メルクリウス”と名を変えた彼に導かれるまま、断頭台の姫君と会い、そう創られたが故に彼女の呪いを唯一受けず、彼女の魂を所有する事になる。

そう。

彼こそが、蛇の用意した彼女への“プレゼント”だった。

『人類最悪にして最美の魂』と称えられた彼女を所有し、永劫破壊の法を手に入れ、彼は決意する。

“俺の日常を守り、そして取り戻す。奴らの首を一つ残らず刈るまで、俺は戦い続ける”と。

始まる魔人同士の壮絶な殺し合い。

敵味方が入り乱れ、殴り、刺し、切り、撃つ。

皆化物へと成り果てた存在、肉などいくら砕こうが無意味。互いに欲するは敵の魂。

魔人のもたらす業火は容赦無く周囲を巻き込み、人々を戦火にて焼き払う。

そして幾夜の果てに訪れる終局。

己の自滅因子アポトシシスに敗北する蛇の影“メルクリウス”。

死へと落ちかけ、新たな回帰へと飲まれようとしている彼の元へ、彼女が現れた。

無かった。

既知感が無かった。

この展開は知らない。

己の人生で始めての予想外の展開に満足して涙を流し、彼はその永遠とも思える長すぎる人生を、奇跡を運んでくれた愛しの歌姫の中

で、閉じた。

いつの間にか詰めていた息を吐き出す。

「奇跡だな」

それ以外の言葉が出なかった。

『まさしく。彼女の存在は私にとって奇跡そのものだ』

そう語る蛇の声は、あの出来事の中で出てきた“メルクリウス”の本体とはとても思えないほどに邪気が抜けていた。

『さて、愛しいマルグリットの話はここまでにして、対価の続きを語るとしよう』

「分かった」

改め、姿勢を正す。

『君を許容しうる世界だが、現状そのような世界は存在しない。』

……話は最後まで聞きたまえ。

私は自らの世界の外については殆んど知る事はない。

あくまでも世界の内側へ向いた存在なのだ。この世界の中では紛れも無い神だがね。

さて、考えてもみたまえ。

君は大きい。この世界群を表した葉と根本的に規模がまったく違う。

確かにこの大樹としての形は君の想像の影響を受けた結果だが、規模や強度自体は変わっていない。いくら外見が変わろうと存在自身に変わりはないのだよ。

現時点では君が指先で突いただけで砕け散るだろう。』

「それでは？」

『まず確実に存在しないだろう』

「むう。——ん、貴方は現状と言ったな？」

『そう。あくまで現状でしかない。

君が世界に入るには二つの方法がある。

一つは君が言ったように、君の存在に堪えうるキャパシティを持つ世界を新たに誕生させる。

もう一つは君の方を世界に合わせる方法だ。

最も、二つ目の方法は根本的な解決には成り得ず、送り込めるのも私が己の影を送ったように、自分の極一部に意識を移して世界に紛れ込ませる程度だろう』

確かにそのような方法で、自分の方をあわせて世界に入るのは考え付かなかった。

やはりこういうのを“年の功”と言うのだろうか？

『真面目に聞きたまえ。

故に、まず二つ目の方法をとり、“君が内にいる世界”を作り出すことを繰り返す。

それによつて植物の品種改良のように、やがては一つ目の方法、君の存在に堪えうる世界の誕生が成されるだろう。

改変した世界が多ければ多いほど、君の望みが叶う可能性も高まる。

ああ、君が入る世界についてはなるべく情報量の少ない世界を選ぶといい。それだけ君自身が持ち込めるのだから。

そしてその世界で自身を知らしめる。それだけ強力に世界に認識されるだろう。

肝心の情報の少ない世界は、君の世界で創作された物語を選ぶといい。

歴史に厚みが無く、世界の観測者も少ない。

更にそのような世界では変わった能力が多いだろう。君ならそれがどのような物であろうとも、至極簡単に自らの物に出来る。

己の力の使い方、そのサンプルくらいにはなるだろう』

やはり彼から得られたアドバイスは、自分にとってこれ以上なく有

用なものだった。

これ程の情報を貰えば十二分に対価になる。

正直な所を言えば、随分と貰いすぎな感が否めないが。

「取り引きは完了しました。私は以後、貴方の世界への一切の干渉を行わないと誓いましょう」

『満足してもらえて良かったよ』

改めて礼を言い、其処から去ろうとすると彼に呼び止められた。

『待ちたまえ』

他に何かあるのだろうか？ と、階段を降りかけた足を止めて振り返る。

『先ほど能力と言ったが、君に一つ私から贈り物をさせてもらおう』

「贈り物は嬉しいが、わざわざ良いのでしょうか？」

『なに、私はね、嬉しいのだよ。』

君はここへ来て私に会ってくれた。

私の世界に縛られていない君は、私にとってその全てが未知なのだ。

フツツ、先の分からぬ会話など愛しのマルグリットの他では幾星霜ぶりか』

そういう事か。

それほどの年月、逃れようとした予定調和の内です突然に俺のような彼にとっての幸運が現れれば、それは確かに嬉しいだろう。

『君に贈るのは我が秘術。』

永劫の回帰より逃れるために組み上げた永劫破壊の理論。

血を喰らい自意識を持つに至った強力な力持つ物品、『聖遺物』を核とする複合魔術・エイヴィヒカイト。

君なら造作も無く使いこなせるだろう』

「あの戦いの？ だが待ってくれ、俺はその聖遺物を持っていないが？」

『いや、君は所持している。

それもかの獣殿の持つ“運命の槍”に勝るとも劣らぬ品を、それも複数』

持っていると言われても、オカルト研究三昧の生活だったが、流石にあの有名な“ロンギヌスの槍”と同格の代物など手に入れた心当たりが無い。

何かの間違いでは？　と思うが、双頭の蛇は構わず宙に黄金の魔方陣を描き出す。先程の魔方陣とはまた違い、こちらの方が断然に精緻かつ複雑で、しかもそれが次から次へと増えてゆく。

『君が持つ聖遺物は“炎の剣”、“神の腕”、“契約の箱”、そして“機械仕掛けの蜘蛛”の四つだ』

“炎の剣”に“神の腕”といえは心当たりは一つ。

あの知天使を殺した後、俺の体を串刺しにしたままだった“神の腕”付きの“炎の剣”だろう。

そして“契約の箱”は別名を聖櫃（アーク）といい、この世界にも存在するらしく騎士団員の一人が所持していた。箱の中にはマナを納めた金の壺、服従と反逆を司るアロンの杖、十戒を記した石板が入っており、神に命じられ、知天使が守護しているとされる。

それを持っているとするならば、やはり知天使を殺した時なのだろう。

（なるほど、蜘蛛以外は全部楽園で手に入れたって事か）

つーか、手製の蜘蛛がそのラインナップに並んでると違和感を覚えて仕方ない。

いつの間にもアレはそんな大層なモノになったのだろうか？

『仮にも創造神の腕を切り落とし、その使徒に止めを刺した物。君の世界においても間違いなく最高の聖遺物の一つに名を連ねただろう』
確かにそう言われると矢鱈凄く聞こえる。

が、それ以前に、

「何故貴方がそれを知っている？」

と問えば、

『君の聖遺物に術式を付与した際に、その記憶が流れ込んできたのさ』
などとあっさり言い放つ。

術の開発者ならそれ位初めから分かっていただろうに、流石にあの腹黒さが抜けきった訳ではないらしい。特に贈り物とか言っていたあたりが。

伊達に長生きはしていないし、三つ子の魂百まで、といったところか？ ああ、百どころではないか……

『そう腐るのは止めたまえ。』

効率的に扱うために、私の持つ魔術の全ても君に譲ろう』

彼がそう言うのと、幾重にも宙に描かれた魔方陣に新たな陣が付け加えられる。

その陣を介して送られたのか、何か不思議な感覚が流れ込んでくる。
目を閉じる。

脳裏にまるで自分が作り出したかのように思ってしまう程の、秘術に関する細かい知識が湧いてくる。古今東西ありとあらゆる呪(まじな)いごとが、正邪の区別無く、基礎から秘奥、更に蛇が至った深淵の底すらもが、雪崩込む。

「―あッ、か、……はあッ！ つ、はあ、はあ」

これほど莫大な情報処理など経験した事がなかった。

いや、人だった頃にこの万分の一でも経験などしていたら死んでいただろう。生身の名残か、まだ呼吸が荒い。

『ツアラトウストラが眠った今、これでエイヴィヒカイトの後継者は君だけだ』

「ふう……。お陰でエイヴィヒカイトについては理解したが、ここまですてもらおうと怖いな」

特に彼の所業を“観た”後だと、かなり深刻に心配だ。

タダより高いものは無いとは使い古されたことわざだが、世界の外ですら通用する気配がしようとは。

『フッフ、考えすぎではないがね』

「ああやっぱりか。程ほどにしとかないと姫様に愛想を尽かされるぞ」

『なに、君にとっては大した事ではないし、聞けば君も協力してくれるだろう』

そう言うと、彼の雰囲気は静まり返った。

月の湖水。氷河の最奥の純水。こういった気配を纏ってしまった生き物を、前に居た場所で何度も見てきている。

そうか——もう——

『時間だ。』

私はこれで消滅するが、変わりに彼女が『座』につくだらう。

あの後、影にほんの僅かに時が残されていた。その最後の瞬間に彼女の願いを聞くことが出来たよ。

“いつかきつと、みんなと逢える。レンも、カスミも、シロウも、センプイも、そして出来ればこのわたしも……みんな一緒にになれる時が来るって、信じてる”

新たな女神の『座』はまだ産声を上げてすらいないほど幼い。精妙な因果の操作は困難だろう。先へ進み続ける転生のサイクルで、同時間軸上に彼を並ばせられる保証はない。

十年か、百年か、何代巡れば成就するのか分からない。それでも、その時が楽しみだと彼女は言った。

私は思わずにいられない。この眩い女神に何かしてあげられることはないのだろうか。

だが今更己が関わることは、彼らの勝利を侮辱する行いだ。

であれば、君も知るように私の十八番である他力本願でいくしかない。この願いは無粋な行いかもしれないが、あまりに女神が可愛らしいので老婆心が疼くのだ。

消え去る間際、気づかれぬよう、要らぬお節介をさせてくれたまえ』

最後まで語った蛇は、既にその姿を薄れさせていた。

俺も決断する。

彼は人外となつて初めて逢つた意思の通じる存在。

対価とはいえ過分なアドバイスを受け、さらには分不相応な手土産まで持たされた。

たとえばそれが最初から彼女の為だったとしても、俺にとってその行いは好ましい。

俺の“神”に対する評価など下がる所まで下がっていたが、こんな神なら——悪くなかった。

だから、俺も彼の願いのために骨を折ろう。

指の先を噛み千切る。

擬似的に構成された肉体が損傷を正確にトレースし、破れた皮膚から真紅の血が滲む。

小さな紅玉のような血をそつと、殆んど消えてしまった彼の巻き付く世界へと垂らす。

ほんの小さな一滴。

しかしそれは五百年以上をかけ、極限を超えて圧縮され続けた全ての源。永劫の回帰の中で淀（よど）んでいた流れが、新しい潤いを得て再び走りだす。

くるくる、くるくると。

彼女の願った輪廻の円環をもって、ここに新世界の礎（いしずえ）と成す。

ありがとう。そして彼女によろしく、奇跡を運んできてくれた“同胞”よ

声に目を開けた時には、彼はもう逝っていた。

たとえば世界の内にいようと、弔う死体すら残らない。

それが一柱の神の死だった。

螺旋階段を降りていく。

契約通り、俺はあの世界に触れないし、そして他の存在にも、彼ら

の営みを邪魔させはしない。

ただしこつそりと、気付かれないように。もう俺は関わりすぎたのだから。

彼の中から観た生き様は眩しくて、そして何より彼らが望んでいたように。

この世界は女神と彼らのものだから。

ふっと、呼ばれたような気がして振り返る。

あの世界の葉に金色の髪をなびかせた少女が座り、笑いながら此方に手を振っていた。

——カリオストロと話してくれて、ありがとう——

そんな声が聞こえた気がした。

(——は。気付かれないように、って言ったのにな)

やっぱり余計なお世話だったんじゃないか？

そんなふうにもう消えてしまった神様に語りかけ、俺はもう振り返らなかつた。

階段を降りきった所で、うんっと背伸びする。

「さて、これからは創作の世界廻りか。

それって物語の中に入るのと変わらんだらう？ 子供の夢だが、自分がやるとなれば楽しみになってくるな。

ところで、俺、そういうの見てる時間無かったからどんなのがあるか知らんのだが……」

第弐章 1 人造天使の舞う世界 (シャギードッグ編)

俺は一先^{ひとま}ずログハウスまで戻って来ていた。

中へ入り一階奥に大部屋を追加で創造、そこを書庫として環境を整えてゆく。

ここへ自分の世界で発表された物語を知識の中から検索、本来あった書籍の形で収めていこうと思う。

書とは。

紙は言うに及ばず、羊皮紙などの皮や木簡竹簡、果ては粘土板や石版までと、とにかく後に残せそうなあらゆる媒体に記されてきた。書庫というのは読み手どうこうより、まずそれ等を決して痛めないよう保持する部屋であらねばならない。人間と違って勝手に治りはしないし失われたらそれまでなのだ。それが為されなかったり、どっかの宗教が神がどうかほざいて焼いたり歪めたりしたせいで俺と夏樹がどれだけ苦労したか……！

んん。

ともかく、長く仕舞う事になるだろうから設備は万全を期す。

何気に粘土が曲者だった。

微生物が居ないのは保管として理想的なんだが、乾いてるから触ると砂粒がポロポロ落ちる。湿気った状態だと接触には強いんだが、そうなれば他とは別に隔離しなきゃならない。まあ粘土板なんて量は高が知れてるが、内容に比して物の質量がでかい。重い。本じゃねえよ、これ。

そんなこんなで。やっとこさ大体終わった。

施設や本を作る事は簡単なのだが、純粹に量とジャンルが多すぎた……。なにせ人類文学、いやさ人類の生み出した全て、叡智の結晶と言つてもいい。恐竜が生きた時間からすれば木っ端みたいな時間で

築きあげられた成果だが、人一人が管理しようとなれば死ぬ気で掛かる必要のある膨大さだった。

それ等とは別に、好みのジャンルや好きな本などはそれ用に場所を取り、そこへ一冊づつ仕舞ってある。ちなみに知識を参照する時、漫画には驚かされた。発行部数が半端ではない。一冊の刷られた数が小説とは桁が違ってる。いや、やはり娯楽は偉大なのか。

勿論だが、書籍総数としては絵物より文物が最も多いが。そう、小説

メルクリウスは創作物に登場する能力が力の運用サンプルとなると言っていたが——ざっと思い浮かべるに近代になればなるほど実用性というか、規模と繊細さが増しているようだ。

その中からなるべく自分が望むような能力のある世界へ行き、それを取り込むとしよう。

もともと“名を知らしめる”なんて目的があるなら、その途中で幾らでも得られるだろうが。

椅子に座って一冊の文庫サイズの本を手取る。

背表紙には『GA』の文字、その下に印刷されたタイトルは『シャギードッグ（V）』。

俗に言うライトノベルに分類される現代ファンタジー小説群のいちシリーズ、その最新刊だ。

あれから最初に求める技能を目印に何冊か選び、それぞれを比較しながら読んだ結果、このシリーズの世界に入る事に決めた。

内容は、未曾有の大連鎖巨大地震『日本震災』ジャパン・クラッシュ後、生体工学、特に遺伝子操作技術に代表される分野が革新的進歩を遂げたした近未来で、一人の数奇な生まれを持つ少年、鳴神大介（なるかみ だいすけ）が巻き込まれる戦いの日々を描いた物語だ。

遺伝子操作によって『遺伝子改変者（エンジェル）』と呼ばれる人類が一般に広まり、サイコキネシスやテレパシーに代表されるESP能

力者、格闘プログラムと呼ばれるデータを脳にインストールし、錬気の陽炎を身に纏った超常の格闘家『ホルダー』が入り乱れる。

この本に限らず、ライトノベルと呼ばれるジャンルは荒唐無稽な、もつとストレートに言うなら突き抜けて妙な設定や能力が非常に多かった。これはライトノベルというジャンルそのものが、ライトな中にどれだけ読者の楽しませられるかを追求されているから。実に好都合。

しかしこれらファンタジー世界には超人が多いのなんの。天裂き地呑む物語は読む分には迫力だが、実際にここへ行くとなれば腰が引ける。

現在の俺は単純な力技しか持たない。

今なら世界を握り潰す事すら簡単に出来るが、存在を小割りにして世界に潜り込んだ状態で、ファンタジー世界の超人達に勝てるかと考えると、どうにも首を捻らざるを得なかった。

まあ存在を割ると言っても、物語の世界は内側の情報量が圧倒的に低い分、相対的に自身の存在が大量に注げるので完全に負けて拘束される事は有り得ないと思う。しかし木っ端ならともかく、今の時点で本当の世界最強辺りとぶつかれば精々引き分けに落ち着くだろう。

勿論の事、元の世界の格闘技などの詳細な情報は知識にあるが、だからと言って格闘の達人のように戦える訳ではない。彼らは気が遠くなる程の繰り返しによって、格闘技術を理に適った脊髄反射とでも呼ぶべきものまで刷り込んでいるからだ。

幾ら医学書を読んだ所で、実際に執刀した事のない医者には手術は任せられないし、して貰いたくも無い。

そういう事だ。

だからこそ、この小説。

格闘を描写した物の中でも非常に強力、かつそのホルダーをも上回る使い手が登場するこの作品で彼らの技能を取り込めば、世界内での行動において比類ない自己の強化となるだろう。

(それにこういう娯楽小説は初めて読んだが、なるほど面白い。

考え様によっては読者を楽しませるといふ一点に対して、酷く純粹

なジャンルに思えるな)

予想外に面白かった事で、密かにライトノベルにはまりそうだった

再び大樹の下へ行く。

螺旋を描く階段を登り、無数の世界を目の前にする。

ゆつくりと手を伸ばし、枝にそっと触れ、目を閉じる。

世界自体は空恐ろしいほど数があるが、大樹の葉自体は有限だ。

だがその木としての姿自体が俺の創造の産物。

故に、俺はただ想い浮かべれば良い。

目の前に、この手に持つ物語の世界を宿した“葉”があると。

さすれば存在するが姿の見えない、大樹の形ゆえにあぶれていた世界はその姿を表す。

ざあ

ざあ

吹き抜ける風が梢を揺らし、涼しげな音を立てていく。

目を開くと触れていた枝の先、殆んど白に近い色をした小振りな葉が一枚、風に揺られていた。

(この世界が俺の渡る最初の世界か)

この世界にどれくらい空きがあるか慎重に調べてみる。

何とも頼りない話ではあるが、こうして葉を前に集中すると、その世界の存在がどれ程の規模かが何となくだが感じられた。

比べてみれば、やはり他の葉よりも大分小さく、何処かスカスカな印象を受けた。

これなら何とかいけそうだ。

掌を上に向け意識を集中する。

慎重に、慎重に自分の体を小さく分ける。大き過ぎたら世界の負担に成るし、小さ過ぎれば名を残すことが難しくなる。

最初の内は、とりあえず大き過ぎない様にだけ気をつければ良い。

ぴんつ、と音を立てて掌に米粒大の蒼い結晶が現れる。それを指が葉に直接触れないように気をつけながら、そつと葉の上に乗せる。

すると、何時いつぞやの壁に吸い込まれた時の如く、葉に溶けるように吸い込まれていった。

緊張する作業が終わり、安心して一息つく。

螺旋階段は下りず、一畳程の広さのそこに新しく椅子を想像して座る。

(これで準備はよし)

物語に入れる。ここに来て期待に高鳴る胸を落ち着かせ、思考を切り替える。

「さて、行ってみよう」

目を閉じると同時に、意識が暗い暗い場所へ落ちていく。

落ちて落ちて、やがて深い底にある、暗くて黒い海に飲まれた。

「ふむん、上手くいったって事かな？」

肩を回し腰を捻りして調子を確かめ、一人つぶや呟く。

結晶を作った時に予め体あらかじのイメージも組み込んでいたのだが、どうやら何も問題は無いようだ。

相変わらず自前の手足は無いが、代わりに少し手を加えた『永劫破壊(エイヴィヒカイト)』を『蜘蛛』を核として起動、聖遺物と体の融合時に欠損を補う形とした。

これで四肢が揃い、取得予定技能の格闘をこなせる。

「おい」

「あん？」

不意に後ろから声を掛けられ、反射的に夏樹するように「素」で返してしまう。

振り返ってみるとここは誰かの家の庭先だったようで、日本式の屋敷で戸をいっばいに開いた縁側に腰掛けた二十歳過ぎと見える青年が、目を丸くしてこちらを見ていた。

(ぬ、この顔って年こそとってるが、鳴神大介か？)

という事は、原作より未来に來ちまったのか？)

「オイそこの不審者、聞こえねーのか？」

どうやら考え事をしている間に聞き逃したようだ。

「いや、聞こえている。少し考えてただけだ」

「ふうん？ そいつも気になるが……アンタ、オレに何の用だ？」

“ 鳴神大介 ” にしては随分と口が悪い。

もしやしてもっと未来の、それこそ子孫ですとかいう展開かと、急に不安になってきた。

「その前に一つだけ聞きたい。貴方の名前は？」

「あ？ お前オレを狙ってきた刺客じゃねエのか？」

「違う」

疑問も分かる。確かに刺客だったら、狙う相手の顔くらいは調べてるよな。

こちらの返答に、青年は拍子抜けしたような雰囲気を出しながら答えた。

「ならまあいつか。オレの名前は鳴神 仁(なるかみ じん)だ」

「何？ ああいや、すまん。聞き逃したわけじゃないんだ」

鳴神 仁って事は、ここは未来じゃなく過去だったか。

“ 鳴神 仁 ”

原作では主人公の父親であり、物心つく前に死去している。

『日本震災』以降の混乱期にその名を轟かせた異能の無法者^{アウトロー}。

崩壊した経済に乗じて己の組織をつくり、その規模を拡大していった。

別名を “ 仏の鳴神 ” 、 “ 人狼 ”^{ウエアウルフ}とも呼ばれ、その性格も明るく人

懐こいという反面、冷酷さも併せ持つ男であり、当代きつての名うての武闘派でもある等、その極端な二面性は異名からも察せられる。

また個人としての武力も非常に高かったらしく、子供でも一流格闘

家を超えられる格闘プログラムを一切用いず、己の力のみで『ホルダー』達を従えていた模様。他にもESP能力者としても規格外の力を発揮。国際基準で定められた最高ランクであるSSSランクを軽々と凌駕し、文中から専用のサイカウンターをもってしても、その全力を測ることは出来なかっただろう事が覗えた。

原作の舞台で国が手を出せない個人、世界最強と言っても過言ではないような相手が、当時はボロ負けしたと洩らすほどの実力者。出自が不明だったため、『日本震災』で逃げ出した違法実験体とみられる。

「へえ．．．俺の名前自体は知ってるわけね」

若干緩んでいた空気が再び張り詰める。

これは失敗だった。

偶然迷い込んだにしろ、その先の家主の名前を知っていると言うのはあまりに不審すぎる。彼が目当てで来たにしろ、そうで無いにしろ、相応の所に所属していると思われるらしい。

剣呑な目つきになった青年が立ち上がった。

現時点で武道は、聞きかじりと大して違わない己にも威圧感がわかる。

肌がぴりぴりくるようなこれは、なにかのエネルギーでも放射されているのではと感じてしまうほどだ。

「アンタ、ちよつと来て話し聞かせてもらえるか」

(拙いな。これは話し合いの空気じゃ……)

彼は強烈な眼光でこちらの奥底を探るように見詰め、

ドサリツ

一拍置いて突然前のめりに倒れ付した。

「え?」

その場には状況を把握出来ない俺だけが、呆然と突っ立っていた。

「仁!?!」

倒れた青年を前にどうした物かと考えていると、後ろから驚愕に染まった叫び声が聞こえた。

振り返れば、そこには倒れている青年と同じ年頃の、人気俳優のように整った容姿の男が一人、信じられない物を見たと言わんばかりの表情で立っていた。

この容姿も知っている。鳴神仁の親友の、

「青海 塊（おうみ かい）」

「おまえエっ！ 仁に何しやがったア!!」

怒りの叫び。

直後、焼け付くような何かが放たれた。

「ぐっ!?!」

青海塊との間の地面が一斉に爆発と見紛うばかりの勢いで燃え上がった。

可燃物・非可燃物を問わず全てが炎を吹き、焼けないと分かっても体が萎縮した。

（っ、確か青海塊は感情誘発型の^{ファイアスターター}発火能力者!）

ドツツツ、ゴオンツツ!!

「ツツツ!?!?」

吹き飛ばされた。

洒落にならん。気付いたら飛んでいた。

衝撃はまるで、大型トラックにノーブレーキで跳ねられでもしたかのよう。

此方は格闘の素人だが、エイヴィヒカイトは稼働率が活動位階とは言えしつかり駆動している。にも拘らず、炎の陽炎で視界が歪んだとは言えど、一瞬で姿を見失った。本当に人間なのか疑わしいにも程があるぞ。

とはいえ、だ。

(大丈夫、この程度なら装甲は絶対に抜けない)

超人化された感覚に任せて空中で姿勢制御。猫のように着地の態勢をとる。

着地は成功。

炎の只中に獣のように四つ足ついて衝撃を殺し、吹っ飛ばされた方向を見た。——いない。どこだ。またか。また後ろじゃないだろうな。

相手を探す。

居た

青海塊はこちらに対する追撃より鳴神仁を優先したらしく、今の一撃からの短い時間で倒れていた彼を縁側から家の中に叩き込み、こちらへ振り向いた所だった。

感情誘発型は能力の制御が利き辛い筈だが、その姿には焦げ跡一つ無い。完璧な自己保存。

そしてその振り向く動作と同時に片腕を振り被って、いる!?

何かが来た。

見えないがやばい。でかい。

咄嗟に身を捻るが間に合わなかった。腕が振り下ろされたのを見た直後、此方の左腕を巻き込んで後ろの塀、その向こうの民家が仕込まれた鉄筋ごと縦に裂けた。

(ツツ、これが、というかこれで遠当て!?! シャレにならん威力だぞ!)

俺の知識にある武術と違いすぎる!

先に小説は読んでいたからどういうものか知ってはいたが、実際に十メートル以上離れた所から、腕の一振りで家一軒縦割りにされたら笑えない。

装甲は依然として健在だが、幾ら青海塊が遺伝子改変者で、おまけに突然変異としか思えない世界最強クラスの戦闘力を持つとは言え、実物でみれば幾らなんでも生身の出す出力とは到底思えなかった。

結局傷は負っていないが衝撃で盛大に地面を転がる。

そんな此方の有様を見て青海塊は眉をひそめた。

「……変に硬えけど仁がやられるレベルじゃねーな。お前仲間でもいんのか？」

予想を遥かに下回るヤワさに気が削がれたか、やや火勢も衰えた。これはチャンスか？

なにもいきなり戦うことはない。誤解さえ解ければ世界で指折りのこいつ等と伝手が出来る。それは壊れない身体で学ぶ俺にとり、最上と言っていい環境だろう。

少しでも警戒させないために大の字で転がったまま答えた。

「……仲間なんていねーよ。ついでに言えば俺も何もしちやいない」

「ふざけんな」

「ふざけちやいない、本当だ。俺はついさつき偶然ここに跳んじまって、あいつがその話を聞いてたら途中でいきなり倒れたんだ」

そこまで言うとうようにやく様子が刺客にしちや少しおかしいと感じたのか、構えていた腕を降ろした。もつとも警戒自体はまったく解かれていないが。

「お前、そこから動くなよ」

えらく殺気を込めて言われた。以前の、人間だった頃なら失禁・自失のコンボだったんだろうが、今は存在の大きさが違うせいかな、はたまたこの身が影で死んでも本体が傷つく訳でないからか平気だった。これは九死に一生を得たというのであろうか？

青海 塊は転がったままの此方を睨んだまま、懐から出した携帯電話で何処かに連絡を取り出す。

「ああ師匠、俺」

(師匠、ね。)

青海塊の師匠と言ったら世界最強のNB、ナチュラルボーン“完璧な”予知能力者と言われる桂翁かつらか。いや、三十か四十年くらい過去らしいから翁と呼ぶのは早いかな

「だから本当だって、仁寝てるし。師匠読み違えたんじゃないの？」

NB(ナチュラルボーン)。名前から察せられるように、一切の遺伝子改変を受けていない人間である。にも関わらず、恐ろしいまでの精度を誇るESP能力者であり、エンジェルに対して筋力や持久力、反

射神経といった身体能力に劣りながらも世界最強と呼ばれる格闘家。

電話から漏れ聞こえる会話からするに、どうも俺の事と鳴神仁が倒れる事は流石に予知できなかったようだ。

青海塊が電話を終えた。携帯電話をポケットに仕舞い、ガリガリと頭をかきながら此方を見る。

「おまえ何なんだ？ 師匠が知らないってのは二人目だぞ、つたく。

まあ良いや。もうすぐ師匠が来るからソコ動くんじゃねエぞ」

（ああ、こんな場所のこんな時間にピンポイントで出たばかりに面倒な事に……）

次に世界に入る時は気をつけよう。そう心に誓いながら、俺は大人しく仰向けのまま雲の数でも数えるのだった。

第弐章 2 人間の強さ (シャギードッグ編)

「繰り返すようだが、どうしてこうなった」

場所は開けた空き地。少し離れた場所には小柄な壮年の男性が此方を見据えている。

「そのような事は考えても仕方が無いでしょう」

こつちのぼやきに対してそんな風に返してくるのは、例の“師匠”こと桂さんだ。

到着して俺を見るなり目を丸くし、塊かいに仁じんが気絶したのは俺の“中身”を精神観応テレパスで覗のぞこうとしたからだと取り成してくれた。

塊もそれを聞いてようやく納得したようだったが、問題は代わりに桂さんの方が興味を示し出した事。

どうも自分のテレパスや予知がまったく効かず、かといって重度の遺伝子改変者、俗に言う“弄り過ぎ”という訳でもないのが気になるらしい。

更には塊の全力の遠当てを食らいながら無傷だったのも気を引いたのだろう、話を聞いてみれば衣食住の当てがない俺の面倒を見る代わりに、そちらの修練に付き合うように提案されたのだ。正直な話、ここまで怪しい男を詳しい事情も聞かずに受け入れるのは、器うんぬんが大きい云々より単純にバトルジャンキーの血が騒いだけだろう。

で、了承したと思ったら、あれよあれよと言う間に連れて来られた次第。

こうなってはしようがないと心は半ば諦め気分。いつそのこと力試しのつもりでやってみますか、と相成った。

「いつでも良いですよ、掛かってきなさい」

(特に構えるでもなく、緊張もしていないように見受けられるが、さて?)

エイヴィヒカイトは活動位階のまま、脚力に任せて突進する。

現状のエイヴィヒカイトは俺自身も聖遺物も本体の影なので、その性能は本来のものに比べれば幾分弱い。魂も本体とのパスを通して

三万程度しか利用できず、下手をすればこの世界の兵器でも装甲は貫通されるだろう。

これも本来は物理的・霊的合わせ持たねば徹りはしない所を、危機感を持つ為に物理のみにしてある。ここら辺の調整はカリオスト口から知識を譲られ助かった面だ。

だがそれでも恩恵は非常に強力だ。

鉄を軽く引きちぎる怪力に俊敏性、ちよつとしたセンサー並みになった五感に、纏った霊的装甲の非常識な強度、そして霊的な装甲を纏うという性質上の弱所の皆無。

これだけ揃えば余程の事がない限りどうこうはならないだろう。

一方で問題もある。

俺自身がこういつた戦いという行為と無縁だった事だ。

殴る蹴るは出来るだろうが、それは出来て素人レベル。生憎と病氣持ちだったせいで本当にやった事がないのだ。目の前に居る格闘の専門家からすれば失笑ものだろう。当たるなど夢にも思えない。それこそ隙を晒すだけだ。

今の俺が出来る最も素早く強力な攻撃。それは全力で突進し体当たりするか、それとも相手にカウンターを叩き込むか。

後者のカウンターは無理として、前者は避け難く、そして殴るといつたモーションは素人が走った勢いですると体勢が定まらず、折角の運動エネルギーが拳に乗らずに逆に威力を弱めてしまうからだ。蹴りにしたって自分からバランスを崩すようなもの。いくら感覚が人間離れた所で経験の無い動きには体が付いてこない。問題は単純だから避けやすい事だが……まあどつちにしろ同じか。

では——と突っ込んだ。

土の地面では蹴る力で抉れ飛んで受け止めてくれない。そうならない様、大雑把に加減しながら一蹴りごとに加速する。最終的には正しく目にも留まらぬ速さだ。

相手の胸辺りに当たるように突っ込む。普通の人間が無防備に食らったら胸骨を中心に骨が粉碎される勢いだが、この世界の格闘家は硬気功や軽身功による防御、ESP能力者はサイキネシス等の念に

よる防御を行えるので、万が一当たっても心配は要らないだろう。

事実、全く当たらない。速度からすれば驚くほど当たらない。

それどころか、相手はNBで一切の遺伝子改変をされていないのに、かわすだけでは飽き足らず、交差する刹那にこちらの急所目掛けて剄打を打ち込んで来た。

掌がそつと此方の体に触れたと思つたら、どつ！と湿った音が鳴る。威力が体まで通る事は無いが、これでは千日手だろう。

「ふむ、変わった鎧を着込んでおいでですな」

「ええ。そちらも碌に見えてなどいないでしょうに。良く反応できますね？」

「おや、分かりましたか。

なら少々力を入れましょう。そちらもまだ余力があるでしょう？」

やはりやり難い。ESPで読まれる事はないみたいだが、どうにも見透かされている。

しかし、どうしようか？

形成位階になれば勝てるかもだが、そうなれば硬気防御しようが関係なく当たれば死んでしまうだろうし……

「何を躊躇っているのです。これは戦いですよ」

「——ほんとにこころ、読めてないんだよな？」

どうなつてんだこの人は？

(ああ、これはやるしかないか)

目を閉じ息を吸い、心を澄ませる。

『『形成（イエツラー）』』
ど

くん

蜘蛛が擬態していた手足に、血の如き蘇芳すおうのラインが走り抜けた

人の手足から異形へと、その姿を変えてゆく。

蜘蛛を使用した場合の型タイプは人器融合型。

本来なら事象展開型か特殊発現型、おそらく前者になるのだろうか、元来俺の体の一部として作られたもの。その根本の性質が出たらしい。

ギシギシと軋むような音を立てて服の下の四肢が一回り太くなつていき、張り詰めたシャツの袖とズボンを切り裂いて黒く鋭い棘が生えてくる。破れた服から覗く肌は、手足の付け根から黒い金属質の甲殻に覆われ、その隙間から鼓動の如く脈動する蘇芳が覗く。

大きく鋭い爪に変じた五指を握りこみ、体を駆け巡る高揚に熱い吐息をついた。

「これはこれは……、また凶悪な気配ですね」

そう零しながらも、嬉しくて嬉しくて思わずといった風な笑みがちらりと覗く。まるでその凶悪な存在が、滅多に見られないご馳走と言わんばかりに。

「いきますよっ。」

もはや堪え切れん。そんな言葉が聞こえてきそうな口調。

次の瞬間にはその姿が消え失せる。

蛇の影の記憶で見たシユライバー少佐のような、暴力的なまでの凄まじい速度で消えるのではなく、速度も確かにあるが、それ以上に此方の視覚の穴に潜り込む様な、正しく超絶の技巧による見失い方。

しかし今度は追い付ける。

低い体勢で流れるように滑り込んできた体に右の拳を打ち下ろす。尋常の速度ではなかった筈だが、まるで始めから分かっていたかの如く備えていた腕に流される。がら空きになった此方の胴目掛けて奔るもう一方の腕、それを狙い膝を跳ね上げる。避けられた。体を回すように避けたと思つたらその動きで此方の後ろに回りこんでいる。膝蹴りを空振った体勢では回避は無理。ぱんっ！ と足を跳ね上げられた。ついでとばかり力も加えられてぐるりと空中で半回転。逆さになった背中に固い感触。「あ、」

ツツツツツシン
!!!!

吹き飛ばされた。

無防備な状態に渾身の発砲。強烈などという表現が生温く感じる衝撃。金属に置き換わった四肢も含めた重量がボールのように空を

飛ぶ。衝撃は装甲で止まったが、踏ん張りの利かない空中で受けた力自体はどうしようもない。

目まぐるしく入れ替わる天地を拡大された感覚で掴む。大雑把に地面に向け、両の指先からばら撒くように糸を飛ばす。

能力の応用で具現できるワイヤー。聖遺物の一部であり、此方の意思で自在に動き、攻撃の手段や蜘蛛のように足場として使う事が出来る。それを十本地面に打ち込み、空中で体勢を整えて着地する。

着地するやいなや、両腕を一振りして糸を操り攻撃を加えた。

激しく波うち、その先端はまるで鋭すぎる針か鞭の如く襲い掛かる。桂さんもこの糸に嫌なモノを覚えているのだろう、流石に生身で捌さばこうとはせず、例の滑るような動きでスルスルと糸を避けきつてしまふ。それどころか糸の只中をかわしながら進んでいた。

だがそれは予想の内。

一階梯引き上げられ、完全に人の枠を外れた超感覚が相手の表情から僅かに漏れた驚愕を捕らえる。

使用した糸は精々がピアノ線より少し細い程度で、強度は高いが鋼線のように波打つ程度には柔らかい。だが仮にも聖遺物の一部。それが避けた背後で地面に突き刺さり、そこを基点に全体が硬化、完全に動きを止める。その十本の線で区切られた空間を俺が糸を足場に疾走していく。

「触れれば切れ飛ぶぞ、どうする!？」

牽制の言葉を掛けながら、本来なら人間どころか犬一匹支えられない太さの糸の上を両足どころか両の腕まで使い上下の区別無く駆け抜ける。そのスピードは強固な足場を得て地面を走る時とは比べ物にならない。

桂さんは一気に迫るこちらを見て笑みを浮かべ、何とその場で腰を落として身構える。

これには自分まで思わず笑いが零れてしまふ。当たれば死ぬような攻撃だというのは今までのやり取りで十分に分かっているだろう。にも拘らず、動きの制限された状況で自ら機動性を捨てて笑みを浮かべるその気質。喧嘩もした事が無いのに、心が高揚し、血が熱くなる。

そしてその気持ちの命じるまま、鋭利な大爪と棘を持った両腕をまるで大顎のように左右へ大きく開き、全身を砲弾として桂さん目掛けて突っ込んだ。

A n o t h e r S i d e 桂 天遊斎(かつら てんゆうさい)。

楽しかった。心が躍った。

私はとある古神社に生まれ、神職を継ぐ役目を負い、そう育てられたが、ある一つの事柄を好んで止まなかった。

それは“力”。

なまじかな強力な予知など出来たからだろう、暴力という、渾身を振り絞り、刹那に掛ける行為にどこまでも魅了された。それは喧嘩好きを親に見咎められ、心身を鍛えるために知り合いの道場主へ預けられても収まらなかった。

体躯は小柄で細い。だが、私にはそういった才があったのだろう。二十を越えた頃には預けられた先の合気道の流派を己のものとし、大陸へ渡って中国拳法を学び始めた。三十五を過ぎた時にはそれすら収め、帰国して神社を継ぐ傍ら、合気道と中国拳法をベースに桂神法を創始。境内に練武場を構えて日夜練武に励んだ。

その内『日本震災』が起こり、遺伝子改変者が多く生まれ、格闘プログラム保持者と呼ばれるにわか格闘家が増える事になった。

新しい時代。

もはや誰も、体を一から鍛え、血の滲むような修練を何十年と繰り返して一つの武術を収めるなどという事はしないだろう。

遺伝子改変者は適度に鍛えてあれば五キロ・六キロと走っても息切れ一つせず、格闘プログラムはある程度鍛えた体があれば、インストールするだけで子供でも一流と呼ばれる格闘家を捻り潰せる。

まさに時代の変わり目だった。

なぜこの年になってこの様な時代が訪れるのか。

そう考えた事が無かった訳ではない。だがそれは言っても仕方無い事。

ならば、古い世代である自分は、戦いを力を何より好むこの心は、一体何のためにこの時代に生まれたのか。

決心は早かった。

己の血肉で積み上げたものは本物である。

それが人を弄いじく回した末に出来た身体に劣るのか？

それがあのような紛い物の拙つたない技に劣るのか？

否！

ならばそれを証明しよう！ 命尽きるまで、我が身に敗北は許さぬ。

『我が使命ハ、遺伝子改変者ニ敗レヌコト。』

責任ではなくこの身に滾たぎる情熱で、信念というよりは信仰として、この魂に刻み込んだ。

あれから『日本震災』後に創っていた孤児院に仁を拾い、母に死なれた塊を引き取り、才能に満ち溢れた彼らに武術を教えながら日々を過ごした。

仁と出会い、その強大な異能に初めて相手の事が読めないという経験をし、塊と出会い、その病的な人生を経てきたがゆえの強さに感嘆した。

自分のような力に魅入られた人間を、それを分かってなお“師匠”と呼んでくれるあの子達が愛いとおしかった。

やがて別れの日が過ぎる。

施設を出た仁は、持ち前の人を惹き付ける才でもって己の“家族”を作り、塊は真剣勝負で私の師でもあった人を打ち殺して破門されたが、あちらこちらの強者や仁の所を回り、一度も勝っていない仁に勝つための腕を磨いていた。

暫く施設は火の消えたように静かになりはしたが、彼らのその道行

きも順風満帆とは言い難いが、それでも幸せそうな顔を見れば満足だった。

しかし、心には一つの棘が刺さったままだった。

私が生まれ持つ超能力。精神感応や未来予知といった行為を可能とする強力な異能。

その異能が知らせた一つの未来が、私の心に暗い影を落としていた。

仁が旅立つ少しばかり前、練武場にて彼と恒例の組み手をしていた時の事だった。唐突に見えた光景、それは爆発し、炎に巻かれて焼け焦げてゆく一台の乗用車と、そこから転がり出てくる火達磨になった人間だった。

そう、数日後に巣立つ仁が死ぬ光景だった。

感覚的に三十年も四十年も先の事でないのは分かった。

それを仁に告げ、組を作るのを止めるように言っても、彼が絶対に聞き入れないであろう事もまた、分かってしまった。

悩んだ。

悩んで悩み抜き、いつその事、彼が旅立つ前に戦う事が出来ない体にしてしまえばとも考えた。

だが、それは諦めざるを得なかった。

仁は天性の格闘センスに加えて私を超える異能を持つ。施設で私に教えを受け、また共に切磋琢磨した現在、彼は私を大きく上回るほどに強くなっていた。

たとえその為に己の命を捨てたとしても、再起不能に出来る可能性は殆んど無かった。

私は、可能性が極僅かで、無駄に命を捨てる羽目になろうとも、それでも、試しにやってみても良かった。

結局仁は施設を出て行き、そのまま二年三年と時がたった。

だが今日、ここに仁と同じく私を超える異能者が現れた。それも彼を飛ばした転移能力者に問題があったのか、偶然にも仁の前に転移するという現れ方で。

天佑神助

思わず脳裏によぎった言葉をすぐに打ち消す。未だ何一つ分かっていない者に期待をかけるものではない。

それならと条件を引き換えに始めたのが此度の立ち合い。

身体つきや動きを見れば格闘技には縁遠いのは分かる。聞けば遺伝子改変者ではなく異能者でもなし、特別な機器を持つわけでもない。にも拘らず、仮にも塊の全力の遠当てに傷一つ負っていない。

一体どのような尋常ならざる技でそれを成したのか、武術家としても血が滾った。

始めの内は遺伝子改変者すらも超える身体能力に振り回され、ぎこちない動きが目立った。此方の様子見というよりは、まるで初めて扱う自分の体の動きを確かめているような、そんな節が見られた。

当然ながらこれは勝負。その隙について幾らか打ち込んでみたが、見えざる鎧を着込んでいるかのように服をへこますことすら出来なかった。

しばし千日手の如きやり取りをするなか、彼の動きは見る間に上達、いや、後足で立った猿が人間になったかの如く、もはや進化と表現すべき速度で熟達してゆく。

それが一段落したとみるや此方が掛けた発破。

頷いた彼が一言、聞き慣れぬ言葉を口に出したと思うや否や、四肢が膨れ、服を裂いて異形の手足が現れた。

すわサイボーグの類이었다かとも思ったが、特有の機械くささとも呼ぶものが無い。

何よりあの異形はあまりに生物の気配がした。彼は一度も気やそれに類する力を使つてはいない。拳を交えてみて、やはり使わないのではなく使えないのだと確信した。にも拘らずあの四肢には、健常の生き物と同じく生氣が満ちている。

そして身が震える程に異様で、何よりどこか意思を感じさせる奇怪な気配。

「これはこれは……、また凶悪な気配ですね」

思わず、試合の最中にこの様な言葉が出てしまう。

始めてまみえる新しい形の強敵。期待に震え逸る^{はや}気持ちに押され、此方から仕掛けた。

渾身で駆けたにも拘らず至極あっさり捕捉される。あの四肢が露^{あら}わになってから視覚聴覚などの五感に加え、六感も非常に利くものになっっているようだ。

打ち下ろしと膝打ち、速さも込められた力も目を見張るもの。万一当たれば弾けて飛ぶ。しかし予知された動きは「速さ」が死ぬ。二度の豪速の捌き、背後を取って体勢を崩した後、練りに練った渾身の発勁を背に打ち込む。

鉄骨を纏めて押し折る気の一撃、それを受けてなお彼は堪えた様子を見せていない。それどころか宙にいる内から不可解な糸を伸ばして身を捻り、受身すら取らず足から着地、すぐさま糸を使つて反撃してきた。気を通した訳でないにも関わらずうねりながら襲い掛かってくる様^{さま}は、正に生き物そのもの。

相手の驚異的な身体能力を考え、僅かの隙も見せないよう最小の動きで糸を避ける。たとえ先端が背後へ流れた糸が、その腹を此方目掛けて波打たせても回避できるよう慎重に前進する。

が、体を大きく囲むように背後へ流れ去った糸が、突然凍り付いたかのごとく動きを止め、即席の危険極まりない檻と化した。

彼は手元へ繋がる糸を切り、この糸に在らざる現象に僅かに驚愕した此方へ向かつて、あろうことか糸の上に飛び乗り、その中を先を上回る速度で疾走してきた。

軽身功ではない。彼は氣功は使えない。ならあの動きは何だ？

その道理から外れた戦い方に堪えきれぬ笑みが浮かぶ。

この身は檻の中にて動く事能^{あた}わず。なれば動を捨て、静と柔にて之を制す。

こちらの笑みにつられたのか、その面^{おもて}に獣の如き笑いを浮かべ突進してくる。

横に鎌のように広げられた腕に触れ様、半身になり腋の下、体当たりの死角へ潜り込みつつ掴んだ腕を捻る。

突進の空恐ろしい勢いを自らの力で捻じ曲げられ、轟音を立てて地に人体がめり込む。すかさずその胸に片足を乗せ剄を放つ。

どんっっ!!

足は体に食い込まず、しかし彼は口をかつ！ と開き血を迸らせた。

浸透剄。

相手の強固に過ぎる外殻に手を焼き、ならばと直接内臓を打撃したのは正解だったらしい。

しかしこれで油断できる相手ではない。すぐさま飛び退り距離をとる。

ちらと視線を降ろせば、己の左の腕は肩が外れ骨が折れと大変な有様となっている。

「私もまだ修練が足りませんね」

悔やむでもなく、楽しげな声で口をついて出た。

Another Side 桂 天遊斎 Out.

第弐章 3 それぞれの未来へ (シャギードツグ編)

盛大に血を吐いた。

桂翁おそるべし。いつぞやの剣で体を串刺しにされた時とはまた違う、内臓を直接押しつぶされる感覚としか表現出来ない攻撃を受け、身に纏った霊的装甲を一切合財無視して内臓を破砕された。

全くもって非常識な事に、胃の辺りで炸裂した衝撃は、そこにあった器官を破壊したついでに心臓を止め、肺を裂いて腸まで粉碎している。

拳句にやらかした本人の第一声が「まだ(自分の)修行が足りない」ときた。

いい加減にしとけ、と声を大にして言いたいが、生憎と肺は今血の詰まったポロ袋だ。

本来なら穴という穴から血を噴出して即死するのだろう。

が、幸いにして、この体はエイヴィヒカイトの加護により不死の戦士と化している。持てる魂という魂が尽き果てるまで、この身は甦るのだ。

すぐさま体内で傷ついた器官が再生してゆく。

桂さんが駄目押しの一撃を叩き込み離脱した後、たつぷり二秒は掛けてどうか活動できるレベルまで再生する。

飛び起きざま、機能を取り戻した内臓器官の働きで喉へ込み上げてきた、肺と胃に溜まっていた血を吐き捨てた。

「……………まさか攻撃が通るとは思ってもみませんでした。というか、面倒見るって言った相手を殺してどうするんですか？」

「どうにもしません。死んでしまったものは仕方ありません。それが勝負の最中なら尚更です」

桂さんはあの惨事見ておいて涼しい顔をしている。感觸で確実に致命傷を与えたのは分かっていたはずなのに。

流石は武術家と評すべきかもしれないが、もう少し手加減して欲しかった。

ナチュラポーン
N Bではエンジエルの、ましてや形成位階の速度にはどう足掻いた所で届かない。にも関わらず、彼が超速を相手取って一合で切つて捨てるのは、その武錬が完全に脊椎反射の域まで体に刻み込まれているからだろう。

そして、だからこそ己の反応を超える者と対峙した時、相対して攻撃を意識した瞬間から、体が反射として相手に殺し技をかけてしまうのだらう。

元来、武術とは守りに適さないそうさ。

車のドライバーは飛び出した人がいたとき、みてから反射的にブレーキを踏むまで1秒かかると言われているらしい。

同じように、人間は相手の殴打などへの反応にも時間が掛かる。

勿論これは肉体の鍛錬や事前に察知したりと、ある程度補う事ができる。日常に突然現れた危機的状况とは若干話が異なるのだ。

しかし、根本の「見てから反応まで時間が掛かる」という問題が解決したわけではない。

これは見てから反応までの間に『認識』という行程が存在するからであり、眼底に映し出された情報が脳に送られ、情報として認識、それからやつと判断・反応となる為に僅かな時間が費やされる。

逆に接触などはこれが無いから早い。

電気信号は脳へ届く前に脊髄を経由する。熱いものを触った時、電気信号は脊髄に届いた時点で、脳より速く脊髄が中枢となって行動を指示する。

複雑な動きこそできないが、脳の認識を待たずほぼ電気信号の速度のみで行動できるからこそ、この脊髄反射という動きは素早いのだ。

桂翁はおそらくここに、武術という動きが刷り込まれているのだらう。

それこそ時間の掛かる視覚を捨てても、それ以外の四感、あるいは経験則や第六感で判断し、脊髄が反射として対応できる技を発令する程に。

これこそ正に武の極み。

……正直迷惑である。

俺だから迷惑で済んでいる。

しかも本人がそれを良しとしているところが嫌な箇所。

まあ原作でも、「みだりに力を振るうのが大好き」とぶっちゃけていた人なんだが。

何にしろあそこまでやられた以上、勝負は此方の負けだろう。

敵意を収め、聖遺物の稼働率を活動位階まで落とす。

それを見て向こうはちらりと残念そうな表情。

いや、貴方も腕治療しないと拙いですからね？

そんなこんなで拳を交えて相互理解に勤めた昼下がりに。

爽やかな風に血臭香るなか、桂さんの所に厄介になることが決まったのでした。

あれから早十年。

桂神法に入門し、一日に一回は桂さんと組み手という名の殺し合いと見せかけた一方的な血祭りを繰り広げる傍ら、仁の組に出入りしたり、塊と戦ったり一緒に強い奴に挑みに行ったりして過ごした。

本当に、本当に、桂師匠はオニである。

普通に教えてくれる分には良い。

なんせ自分が創始者の流派。桂師匠が流派そのものと言って良く、そして己の看板を打ち立てる事が出来るほど、他の武術に対しても造詣が深い。

貴重な実戦を含め、他流派試合などの経験も豊富な人間。これほど教える側として得難い存在も珍しいだろう。その教えを受けて、俺も桂師匠ほどとはいかないが、気功を自在に操れるようになった。まあ幾分かは出来るように存在自体を弄ったからだが。そうでなければ気とか理解できない。師曰く、うんちやらかんちやら。約、考えるな感じろ。生まれて二十年理系に生きてきた身には厳しいものであった。

——とにかく、桂師匠は教えるには向いているだろう。……性格を、その性質を加味しなければ、の話だが。

桂師匠、最初の組み手の後、即死するはずの傷を負った俺が、傷を確かに受けたにも拘らず死なずに動いていたのを聞かれ、これこれこのような魔術で守られているから俺死なないんだと説明した結果、一対一の実戦組み手からまるつきり完全に手加減が消えたのだ。もうほんと、きれいさっぱりと。

手首を極められたかと思っただら逆落としに頭から地面に叩きつけられ、頭蓋の碎ける音をBGMに首を踏み折られたりする。

これはまだ技としては一種芸術的なものだが、不死身の練習相手という格好の実験台を得た桂さんが遠慮などする筈はない。

にこやかな表情のまま、眼窩を含めた顔の骨の薄い所を陥没させられたり、突かれたら血反吐を吐いて悶絶するような急所中の急所を抜き手で抉られたりと、散々な目にあった。

勿論修行という名目でエイヴィヒカイトの装甲は外すよう言われた上での事。

これ、残虐師匠が手応えを感じたかったからだ俺は密かに睨んでいる。

中でも酷かったのは、この地獄組み手を始めてから恐ろしい事に、なおもメキメキと腕を上げているらしい桂師匠（自己申告。あのレベルは上がっても分らん）が、その渾身でもって放った浸透剄を喰らってしまった時の事。

首の根元や下に喰らったのだが、体内で炸裂した衝撃で背骨が折れて、背中に開いた穴から飛び出してしまった。お陰で首より上が首

の根元から前に捻じれて倒れ、更に衝撃によって高まった圧力によって太い血管、頸動脈を駆け上った血液が顔中から噴き出した。目なんて眼窩から宙に飛び出してしまった。

だが最も厄介だったのは、それを見ていた道場の門弟が数人いたこと。

幾ら離れていたとは言え、二人ともが気付かなかったのは迂闊だった。

流血ばんざい、スプラッタ上等が謳い文句のゾンビ映画張りに成り果てた俺。

腰を抜かして狂乱し、泣き叫びながら桂師匠から逃げようと這いずる門弟達。

こんな時でもにこにこ泰然自若の風情を漂わせる桂師匠。

楽しそうに眺めているだけの師匠に、思わず「じじよう(ごぼお)な”んどがじ(うぼおえく)ぐだぎ(げぼお)」と口を開いてしまい、更なる阿鼻叫喚の地獄絵図が広がったのは、どうにも忘れられない記憶だ。

その後始末もまた、忘れ難い大変さだった。うん。

そんなこんなでこの世界の技法である気功術は、桂神法という大きすぎる手土産をつけて大方のところ取得できた。

桂神法も後は自分で磨き上げる段階に達し、気功は、この世界ではやらないが、体の方を扱いやすいように変化させれば仁や塊達から見ても非常識な出力で操れるだろう。

ESP能力は、桂師匠の伝手で見せてもらった国の研究機関のデータバンク等でメカニズムが分かったので、気功と同じく体と精神を弄る事で再現が可能なようだ。後は色々な能力を見て、より具体的にイメージ出来る様になれば言う事無し。

これにて第一目標であり、最低ラインでもある”力の使用法のサンプルを手に入れる”がほぼ完遂された。

残るは第二目標であるところの“名を残す（有名になる）”だが――これ、実は既に半分以上は達成されているような気がする。

仁の組に出入りしている内に、仁に塊と一緒に襲撃やら暗殺やらを依頼された。俺も塊も友達からの依頼に加え、自分の全力の技を気兼ね無く振るって試す良い機会だと二つ返事で受けた。桂師匠もどんな殺りなさい派だから問題も無い。問題ない事が倫理的に問題ありなのだが……まあ過ぎた事だ。

塊と一緒に武者修行も、北の音に聞こえたホルダーを殴り殺し、南の有名なESP能力者を捻り潰し、東で紛争に巻き込まれ、西で政府軍に囲まれたりと、波乱万丈ながらも俺達の腕を素晴らしく伸ばしてくれた。

いや、流石にだいぶ死ぬような目に会った。

あれは紛争地帯での事。

戦争が続く事で得をする連中が影でコソコソ動いていたのだが、いつの間にか原作よりも幾分やわらかくなった塊が、奴らが副業に焼き払った村から捕まえて来た子供を奴隷売買で売り払うのを見て、「修行にもなつてクズも消せる。いっちょやっちまおうぜ」と言い出した。

当然だが此方も否やは無く、あちこちの拠点に端から襲い掛かった。そういつた素晴らしき善行の日々の結果、ある日に待ち伏せを受けた。

暗い地下倉庫に隠れていたのは、軍から横流しされたアームドスーツ十機だった。

ホルダーやサイボーグが軍に溢れた為、急遽、対ホルダー用として開発され、戦場での高い実績からホルダーの天敵と呼ばれる汎用アームドスーツ重装歩兵。

全高四メートル強の巨体、胴体と一体化した頭部に低重心、地面に着くほど長い腕部から『猿人』^{エイマン}とあだ名され、そのやわらかい特殊装甲はホルダーの攻撃は勿論の事、対戦車地雷すら耐え抜いてしまう。その余りに凶悪な性能ゆえ、酔った乗り手によって幾多の虐殺事件

を起こした代物。

それが十機。

向こう側は恐らく、旨みの大きい狩場で散々邪魔をしてくれた俺達を排除すると共に、この高価な目玉商品の動作テストをして、ついでに名の売れたコイツ等でも殺せますよーって具合で宣伝にでもするつもりで数を出してきたのだろう。

結果から言えば、俺と塊は十機の『猿人』を完全に破壊し、隠れてワイン片手に見学してたロクデナシ共を皆殺しにした。

だが倒すのは、本当に、本当に、尋常じゃなく大変だった。

まず四メートル強の巨体のくせに異様に動きが早い。リアルで残像が出せるんじゃないかって程のスピードで動き、機銃と巨大なナイフ、そして持ち前の長大な豪腕で襲い掛かってくる。

ホルダーの常識を大きく超えた実力を持つ、いや、世界でも指折りと自負している俺と塊が油断できない速さ。軍の量産ホルダーもが一方的に殺戮されるのも分かる。

そして厄介なのがその後。豪腕を潜り抜け攻撃を打ち込んだ次の瞬間、殆んど手応え無く力が吸い込まれ、それがそっくりそのまま返ってきたのだ。

これで俺は自身の装甲で無事だったが、全力で打ち込んでいた塊が片腕の手首を粉碎された。

後で知った事だが、この柔装甲、従来の戦車を軽々と打ち抜く大質量の大口徑徹甲弾すら跳ね返すらしい。

打撃と合わされば、その威力は鉄骨をガラスのように砕く。

そう作られたとは言え、非常に“硬い”類たぐいの敵だった。

俺はそれでもまだ、最低限とはいえエイヴィヒカイトの障壁があるから即死はしないだろうが、問題は塊の方だ。

その気質自体が荒っぽいのは、ファイアスターターという異能にも現れている通りで、まあ簡単に言えば殴る蹴るの戦い方が本領なのだ。相手の装甲とは相性が悪い。これが仁なら気を上手く使って切きってしまうのだが。

勿論、塊もやろうと思えば即興でやって見せるだろう。それこそ戦闘センスは天才的なものを持っているのだから。

しかし、今塊は自分の最も得意なファイトスタイル、自分の気と異能を混ぜ合わせ、鉄すら溶かす熱量を持った錬気を纏つての近接格闘で戦っている。

あのバカタレ楽しんでるのだ。

俺と違って塊には『猿人』の攻撃を直撃して堪えるような防御手段が無い。というか、普通は無い。

十機が十機、一斉に本気になつて襲い掛かって来たら、いくら塊でも致命傷どころでは済まない。流石にハンバーグの具材になつてしまふ。

だから俺の方は少しだけ手を抜く。

やるのはあいつ等が油断しきり、尚且つ一気に殲滅する目処が立つたとき。ひたすら防御に専念し、それぞれの『猿人』の動きを観察する。

今は一対一を二組で、残りは逃がさないよう周りを囲んで外部スपीカーから耳障りな濁声を垂れ流している。

それが五分ほど続いた。

負ける訳が無いと、遊び半分で捌り殺しに仕掛けて来ていた戦闘の転機は、奴らの動きの癖を把握しつくした俺が使用した『創造』位階だった。

仁の依頼と塊の武者修行、紛争地帯や戦場を幾つか渡り歩いた結果、取り合う相手のいない俺はそれらで息絶えた者達の魂を全て取り込んだ。

お陰で現在俺の保有する魂は、持ち込んだ『俺』の魂が三万、それに加えて一万五千余を新たに得ていた。

嬉しい誤算だったのは、取り込んだ一万五千のうち、常人より遙かにエネルギー量の多いホルダーの魂が大部分だった事。この魂のお陰で『創造』位階の発動が可能になっていたのだ。

塊に前衛を任せて壁際へ後退し、立ち尽くして詩を唱えだした俺を

連中は恐怖でおかしくなったと思ったのか、ありがたい事にげらげら笑って塊への攻撃すらやめて口々に嘲笑していた。

たつぷりと時間をかけて詠唱したのはパルジファル。
持ち込んだ『俺』の魂は、このために選別して持ってきた。

基とする渴望は“死にたい。自分を終わらせたい”。
タイプ型は求道型。

(Briah——)
フリア「創造」

これこそは終焉のデウス・エクス・マキナ。

(Mi・gar・r V・l s u n g a S a g a)
ミスガルズ・ヴォルスング・サガ「人世界・終焉変生」

腕の甲殻が展開、より機械的で一回り大きな鉄の拳を形作る。

装甲の間を走る蘇芳は紫とも青白いともいえる光に変わり、暗い瘴気を立ち上らせる。

再びキルゾーンへ踊りこむ。塊と戦っていた前の一機を無視し、活性化した再生因子によって全身の傷口から湯気を立てる塊の脇をすり抜け、出口付近に固まっていた四機へ突撃する。

遅まきながらようやく様子がおかしい事に気付いた間抜けの一人へ、一撃必殺と化した拳を叩き込んだ。

影の記憶で見た呪われし黒の機械。
マキナ

かの魔人集団、聖槍十三騎士団黒円卓に集うの三騎士が一、黒騎士
ニグレド『鋼鉄の腕』。

死を求める彼の振るった全てを終わらせる一撃。

その『創造』は自身を“終焉”そのものと化し、生まれてから一秒でも存在していたならどのような物であれ、それこそ不死者の類いでもさへも問答無用で終わらせる。

柔装甲に食い込んだ拳はインパクトの瞬間に機体を殺す。

装甲機能を含め全機能が二度と復帰できない故障を起こし、『猿人』

はよろめく事すらせず、その場にくずおれた。

そしてガラクタと化した元『猿人』が倒れこんでコンクリにヒビを入れた時には、他の三機もまた、名前に“元”の冠をつけられて転がる所だった。

この一瞬の速攻に奴らは慌てた。

慌てて、塊に背中を向けてしまったのだ。

そのこれ以上無い隙を塊が見逃すはずがない。さつきまで戦っていた一機に一瞬で肉迫、装甲の下の機械自体は弱いと感付いたアイツは、その中でも一際脆いだろう膝裏に三連撃を叩き込んだ。

最初の抜き手の二発は目標から僅かにずらし、そのせいで微かに張り詰めた装甲へ、ラストに鋼板をも裂く蹴りが襲った。

凄まじい速度で動き回る『猿人』には入れ辛い攻撃だが、馬鹿な事に奴等は止まっている。

刹那の間に五機目が片足を膝から半分千切られた。

当然それで終わりではない。アレは機械だ。である以上、完全に破壊するまで危険だ。

塊は追撃した。

膝裏の一点で裂けた柔装甲の中へ強烈な拳打を叩き込む。

内部構造を腿まで叩き潰し、更に駆け上がった灼熱が胴体を脆弱な内から焼き潰す。

このダメ押しで完全に相手は混乱状態へ陥った。

後は簡単。一機一機確実に、個別に狙って潰すだけだった。

流石にここまでの戦力を直接向けられたのは一回こっきりだったが、それでも内乱国で爆撃に巻き込まれたりと思ひ出したいくない出来事が沢山あった。あの時は二人で上見ながら死に物狂いで走ったわけ……

まあこんな事をしていれば、嫌がおうにも名は知られてゆく。

今や俺と塊は、半ばロクデナシ共の伝説と化していて、その武勇伝はもはや完全に都市伝説扱いだ。

(一応は名が知れ渡ったが、これは世界に受け入れられているのか?)
そして疑問はあれど、こればかりは今更どうしようもなかった。

さて、この世界を出るか否か?

俺は悶々と悩んでいた。

目先の目標が達成された今、さっさと次の世界に行くのがまあ効率的というものだろう。

しかし、そもそもこの件に関して俺に効率が必要ではないのだ。

時間ならそれこそ幾らでもあるし、どうも世界の中で過ごした時間は外だと随分短いみたいなのだ。それにのっけからではあるが、十年の余も過ごしてしまえば人にも世界にも愛着が湧く。

居心地も良ければ仲間といていい連中も居る。

(ん。こうやって考えると、俺はもう少し残る方に気があるようだな)
とりあえずは、仲の良い仁が死ぬまでは此処にいようと決めた。

そしてある日。

俺は朝から桂師匠の下へ呼ばれ、師匠が予知した仁の最後を知らされる。

まだ一年二年の猶予はあるが、いずれ仁は死ぬだろうと。

桂師匠は話すだけ話し、別にどうしろとは言わなかった。

その帰り、そのまま組へ行く。

もう馴染みの組員に声を掛け、仁の部屋をたずねた。

幸い丁度帰って来た所なのか、余り見ない余所よそ行きよその背広を着て椅子に座っていた。

「お？ 冬理じゃねーか、久しぶりだな。今度は何処まで行って来た？ 塊は一緒か？」

「ああ、久しぶり仁。」

今回は大陸の南の紛争地帯だったな。砲弾が超危険だった。塊は、……どっか遊びに行つたな」

仁が椅子を立ち駆け寄ってくる。半年振りだが変わってないようだ。

安心するが、とりあえず目的の話を切り出そう。

「今日は少し話があつてな」

「なんだ、また密輸か？」

「ちげえよ」

「なら密入国の方か？」

「だから違つて！」

失礼なヤツめ。

「桂師匠がな、お前があと一年か二年で殺されるつて漫才で話が進まん。ストレートに告げてみる。」

「へ〜」

「……………いやいやいや、割と大変な事だからね？」

こやつ、ボケたか何かして理解できてないんじゃないかなろうな？

「うーん、そんな事言われたつてな」

ヤツは何やら言い難いというか、気まずいと言うか、そんな顔をしていた。

別段そんな表情のでの会話でない気がするのだが。

仁は少し考え込んでからこつちを見て言った。

「俺さ、どつちにしろ後それくらいで寿命なんだわ」

「……………は？」

なんですと？

いきなりの衝撃告白。突然すぎる寿命宣言に俺の頭は真っ白だ。完全に停止した思考を何とか建て直し、全力で理解に勤める。

——そうだったのか。

「…………おまえ、やたら強いと思ってたけど、桂師匠と同じジジイだったんだ」

「オオイ!? 何でそうなりやがる! いやわかるけど、それでもそりやねえって!!」

とりあえず落ち着く。

「で? 寿命ってどういうことよ」

「あく…………、お前さ、俺がどっかの実験体ってのは分かってるよな?」
そりやな。

『日本震災』後に保護され、身体能力にESP共に激高、更には身元が不明でデータバンクにも載っていないとなればな。流星に何かあるとは思うね。

「そ、当たり前なんだわ。

寿命ってのはそういうこと。あのクソツタレの研究員共がかなり無茶して深い所いじったらしくてな、俺も健康診断受けてビックリしたぜ」

「ビックリで済ますなよ、お前はほんとに、もう…………」

俺はあきれ果てました。

「けどそれじゃどっちにしろお前死ぬじゃん」

そんな風に言うと、ヤツは突然不気味に笑い出した。

「ふっふっふ。実は対策は取ってあるのだよ! うまく行ってな

いけど(ぼそっ)」

「お前今うまくいってないって言わなかったか？」

「気のせいだ！」

まあいいけど。

「って良くねえよ。対策ってどんな事してんの？」

「簡単に言やあクローンだ」

ああなるほど。ここで原作の主人公に繋がるわけね。

「急速育成するとあちこちに無理が出るから、赤ん坊の時から普通に育てて、大きくなったら俺の意思が甦るようにしようかと」

「ふーん。でもそれだとお前と同じに育たないんじゃないか？」

気付いた疑問を投げかけてみる。

「そう、うまくいってない所ってそこなんだよ。何か聞いたらさ、成長って細菌とかの影響も結構受けるらしくてな？ 同じに育つ確率はすげえ低いらしい」

「まあなあ。まさか違う体に育ったのにお前が目覚めたら大変だし」

たとえ元が同じでも、それはもはや他人同然。

それは仁にとつて、いや、戦う者全てにとつて致命的だ。

なにせ無意識に反応できるほどに刻み込んできた自身の“距離”が狂ってしまうのだ。

流石に許容できないだろう。

「そういえば、何で塊や師匠に言っていないの？」

気になる。今更気を使うとかそんな関係でもあるまいに。

「あ、それ単にあれこれ忙しくて忘れてたんだ。

まあクローンの準備が出来てから言った方が良いかなってのもあったし」

「忘れんなよ！ 塊も師匠も、死ぬのは寿命にしても言っておかないと傷つくぞっ！」

「ん、うん……。分かった」

なら良し。

「よっしゃ、じゃあそのクローンのとこ案内してくれや、仁」

「あん？ 何かあんの？」

「いや、俺が協力してやろうと思つてな。 問題点、解決してやるよ」
「つつてもよ、冬理つてそういうの出来たっけ？」

「コレでも結構なモンなんだぜ？」

「なんたつて世界中回るついでにあちこちの違法研究所も潰して資料かつぱらつてたからな！」

遺伝子関係は本当に資料が豊富だ。

ついでに黄金より貴重な様々な実験データも根こそぎ奪つてある。

「それにな、俺が”アレ”使えるの知ってるだろ？」

”アレ”

そう、魔術である。

正確に言えばメルクリウスより譲り受けたそのものではなく、あれは別世界の理（ことわり）の上に成り立つ魔術なので、自分が使用するために若干のアレンジが施したもの。

あと自分が使えると言ったら、例の”世界の素”を弄つた存在操作か

最初の時点で桂師匠にばれて、その後はまあ隠すでもないか、と仁と塊には言つてある。

今回の協力で有効なのは存在操作の方。

クローン体の成長を、曲がらないようにちよつと補強してやればいい。

魔術でやろうとすると、長い時間が掛かるだけに流石に呪いとかの領域に近付いてしまう。

もともと俺も存在操作は世界の中では禁じ手としていて、よほどの事が無い限りは行わないのだが、これも友達のためだ。サービスというやつ。

”アレ”か。そんな事まで出来るなんて凄いな。

分かった、協力してくれ」

「おっけ。じゃ早速行くか」

そんな経緯で仁のクローン作成へ協力が始まった。

始まったといってもクローン体を構成する『水』を少しだけ、本来の成長方向へ育ちやすくしているだけだ。

一月に一回程度の調整を一年も続ければそれも終了する。

その間に身内に寿命の件を説明した仁は、案の定師匠や塊達にひどく怒られる羽目になったが、忙しくて忘れてましたなんていう理由が判明した後では、彼らもあきれ果てて怒る気力が根こそぎ無くなった様だった。

そんなこんなで一年と三ヶ月が過ぎる頃、クローン体は通常の生後一ヶ月の赤ん坊と同じ段階まで成長し、晴れてポツドから外界へ出てきたのだった。

仁が抱いて桂師匠の家に来て披露式をし、ノリの良い連中が、まあ殆んどだが、そのままの勢いで宴会へと雪崩れ込んでいった。

勿論だが、クローンのことを知っているのは少数で、それ以外の主に組の下っ端連中には仁がどこかで拵こしらえた子供だと説明してある。

だがそんな目出度い宴会の最中、下っ端からの発言で迂闊にも見逃していた問題が出る。

「可愛い子っすね！ 名前は何て言うんすか？」

全くもって盲点だった。

特に普通なら考えたり心配する立場の仁達は、どうにも仁のクローンという印象が強すぎて思いつかなかったのだ。

名前を問われた瞬間、明らかに仁の顔が強張った。

最初俺はそれを見て、単純に名前の事を忘れていたから突っ込まれて慌てているのだと考えていた。

仁も赤ん坊を抱きながらすぐに表情を繕つくろい、あれは咄嗟の思い付きだろう、「大介だ」と言っていたし、その後も最後まで笑い顔のままだった。

だが宴会が終わり、事情を知るものが残るばかりになると一転して

厳しい表情を覗かせた。

皆もそんな仁を何事かと気にしている。

やがて仁は顔を上げ、無言で自分を見詰める俺達を見て表情を緩めると言った。

「俺さ、こいつの名前も考えてなかったよ。」

聞かれた時、自分でも驚いた。俺も研究所に居た時はそういう扱いされてたのにな」

周りの者はやや困惑を隠せない。

確かにこの子の名前さえ考えていなかったのは、この子という“個”を無視する行為だろう。だが元々この赤子は仁の予備として造られたのだ。

そのための存在を、その通りに使うのに躊躇いを覚えるほうがおかしい。それならば最初から造らなければいいのだ。

“今更そんな事をなぜ気にするのか？”

疑問の視線が投げかけられた。

仁はまた少し考えた後、時々見せる頑固な口調で告げる。

「こうしよう。こいつは体も精神の在り様も俺として育つようになってる。いずれ俺自身の意識も目覚めるようにしてある。」

だが、そこに条件をつけよう。

俺がその時まで育った精神と勝負し、勝ったら体をもらう。負けたら俺は消えよう」

これを聞いて血相を変えて慌てたのが塊を始めとする組の幹部だ。

「俺が戻ってきて欲しいのはお前だ！」

「俺達が惚れ込んだのはアンタだ！」

と、声を揃えて仁に訴える。

しかし仁の方は時々見せる矢鱈と頑固な態度をとり、どうあっても意見を翻そうとしない。

業を煮やした塊が俺と桂師匠にも何か言うように言ってくる。

ところが桂師匠は、にこにこいつもの様に微笑みながら仁を見て、

「貴方のお好きなようにしなさい」

などと告げた。

仁の嬉しそうな顔を見た塊は、元からこの手の事で師匠には余り期待していなかったのか、あっさりとその矛先をこっちに向けた。

「冬理、お前も何とか言ってみてくれよ！」

流石に仁も、自分のこの子に掛けようとしている精神系分野の専門である俺に反対されると拙いと思ったのか、こっちに來て赤子を抱いた反対の腕を力強く肩にかけた。

「冬理、こいつの体と心を調整したお前なら分かるよな！」

俺もこいつも同じだ。違いは今持っている記憶を、持っているかないかだけなんだって。

こいつに俺の意識が目覚めるのはそれなりに年がたって体が出来てからだ。

中学か高校か、そんなもんだらう。

そこまで育てば自分が残るかどうかの戦いぐらい出来るはずだ。何たって俺なんだから！」

——やっぱりか。

ここで言い出すとは思わなかったが、クローン体をアイツと同じに育つように調整している中で、いつかは仁がこんな事を言い出すのではと考えていたが、予想が当たったようだ。

別に原作がどうこう言うんじゃない。

ただ俺が知ってるのは、友達なのは仁や塊だ。そいつらを一番に考える。

だがその本人が、たとえ自分に意思が消えてしまう可能性を負っても、もう一人の自分に生き残るチャンスをやりたいと頼んでいるのだ。

ことは生き死にの問題だ。

なら、俺は本人の思うようにさせてやりたい。

俺は肩の仁の手を握り、周りの連中にそうはつきりと言った。

この選択は、結果的に今の仁を原作での様に殺すだろう。しかし迷うまい。

仁の言ったとおり、アイツとこの子は「同じ」なのだから。他ならぬ俺がそうしたのだから。

結局この後、その子へ仁の意識を移植した際に条件を設けた。仁も一任してくれた。

もちろん普通にやれば年と経験の差で勝敗は明らか。
やるなら徹底的に。

だから仁の側にハンディキャップをつける。

そう告げると、仁も笑って言った。

「チャンスは平等に。」

どちらが上でも同じこと」

やはり俺は、こいつの生き方が好きだった。

そして、それとは別に解決していない問題もある。

この前の俺の宣言に絶望したように表情をした塊だ。

完全に怒ってへそを曲げ、顔を合わせようともしやがらない。

始めの内こそ理解してもらおうと仁も頑張っていた。

こまめに塊のところに行って話そうとしたが、すねた塊は手ごわかった。

アパートの扉に鍵をかけバリケードを築いて籠城し、いい加減切れた仁が扉ごとぶち抜くと、自分も部屋の壁をぶち抜いて逃走するのだ。

そう、アパート。アパートなのだ。

問題は引き籠もった拳句に扉を粉碎されたヤツの部屋でなく、隣室に住んでいるオレの部屋だ。

当然ながら反対側にも部屋はあって仁の組の構成員が入っているが、塊のやつは咄嗟に壁をぶち抜く時に、あまり知らない人間の方ではなく、親しい俺の、何度も言うがよりにもよって俺の部屋の方の壁

をぶち抜きやがるのだ。

うらかな春の昼下がり。毎朝の恒例行事である地獄組み手が終わり、自室で本を読みながら茶をしばいていると何やら隣室が騒がしい。

言い合いの音が二十分ほど続き、いい加減に我慢の限界で怒鳴りつけようと本から顔を上げた次の瞬間、部屋の左の壁が突如爆裂。部屋中が粉塵まみれになり、当たり前だが茶も死亡する。

目と気管に入った粉に涙を流して咳き込んでいると、焦った顔で犯人が自分の開けた穴から部屋に侵入、錬気使いの超速で窓を突き破って青空へと飛び出してゆく。

今更ここは五階だとかは言うまい。

だがな、一つ言わせてもらおう。

「お前の部屋の窓を破れよ!!!」

なぜにアイツはわざわざ俺の部屋を滅茶苦茶にしていく!?

結局ヤツは夜になっても戻って来なかったため、泣く泣く自分で片付ける羽目になった。

そしてそれが三回。

いい加減に俺の方も限界だ。

仁に連絡を取り、共同作戦を展開する。

平日の早朝、部屋入り口より仁が襲撃。警告無しで扉を破り侵入する。

咄嗟に壁やら窓やらを破って逃走する塊。

そしてそれを先回りして待ち伏せる俺。

散々に逃げ回って疲労した塊に、俺は特注の頑強な鋼線だけで編まれた荒縄を手に背後から飛び掛った。

その後の事はあえて多く語るまい。

ヤツは天敵に見付かった小動物の如く、必死に最後の抵抗をしたとだけ言っておこう。

正直、それから特に大きな事は無かった。

あの後は大捕り物の末に捕獲された塊が、説教の後に仁と膝を交えて話した結果、殴り合いに発展して結局拳で分かりう漢の話し合いになった。その末に何やらお互い満足そうな顔で和解。俺も心置きなく部屋の修理と弁償を要求できた。

その翌年。師匠の一年から二年という予想より僅かに長く生き、仁が死んだ。

死因は、仕掛けられた爆弾によって乗っていた車が炎上し、その際の重度の火傷だった。

だがそれくらいなら、それどころか爆発した爆弾自体が至近で炸裂しようとして、仁の体が健全だったならアイツは幾らでも凌しのいでみせたらう。

一部の内臓や筋肉の部分的な老化。

そして戦い続けた日々の中で使用してきた自身の再生因子による全身の癌化。

『日本震災』直後から急速に発達した遺伝子操作技術だが、その最初にエンジェルへ組み込まれた再生因子は、後に普及する再生因子とは比べ物にならない強力な復元とも呼べる程の効果を発揮した。

なんせ十センチサイズの貫通創が見る間に塞がるのだ。

しかしその代償は、使用が重なるにつれての細胞単位の暴走だった。

一・二回の初期は癌の確率が高まるというタバコ並みのものだが、これが十回二十回となると体に非常に小さな癌が出来始める。

仁は戦いの中で負傷した際、それが大きな傷ならこの再生因子を使

用していた。

確かに彼の強さを考えた時の負傷率は非常に低いものだったろう。加えて元が短い寿命だ。寿命が減るからと大事に取っておいて、戦闘中にその傷が原因で自身がその場で死んでしまっただけは元も子もない。結局、老化とそれが原因で多発した癌に活力を奪われ、自身の技を振るう事が出来ずに死ぬ事となった。

それを契機に俺もこの世界を離れる準備をしてゆく。

自身の財産を、まあ驚くほどの金額の大半が戦場のロクデナシや違法研究所からかつぱらった物だが、桂師匠の道場と仁の組に譲渡しておいた。

桂師匠はその内に俺が帰ることは以前から話していたので、「これからも元気で。たゆまず技を磨きなさい」との在り難い言葉を頂いた。

もう訪れる事はないと言っていたにも関わらず、道場に掛けられていた俺の名札は返却されなかった。比較的親しい道場生が、桂先生が“そのままにしておいてください”と言ったのだと、こっそり教えてくれた。

この世界に来て俺は随分殺した。

様々な『自分』を取り込んだせいだろう、別段忌避する事も無く殺つてきた。

他人から見れば血も涙も無い男だろう。俺も否定はしないし、その自覚もある。

それでも。それでもだ。感動した。ありがたくて涙が出た。

精一杯の敬意を込め、別れの礼をした。

頭を失った仁の組は下つ端が少しぐらついていたが、事情を知る幹部と俺、塊が睨みを利かせる内にそれも収まった。

現在は仁の腹心の部下だった戸樫（とがし）が若いながら二代目を襲名し、組を纏めている。

彼は原作から最も外れた人物だろう。

仁と同じく違法研究所の人体実験の被験者だったが、規模の大きさ故に、仁と俺に塊の三人という過剰戦力に襲われ、あつという間に陥落した研究所から救出された。

当時は幼かったが、だんだん成長するにつれて明るくしっかりした青年に育っていった。

塊は原作では道場を出た後、仁を倒す事を目標に旅を続け、余り仁の組には寄らなかつたような表現だった。

しかし俺の存在によって仁と塊が原作以上の仲で、しかも俺と一緒に頻繁に組に出入りするなどしていた内に、同然の成り行きで仁の親友である此方にも懐き、影響を受けて育った結果、原作の硬く重々しい性格はどこか未知の彼方へと飛んで行ってしまった。

彼もまた非常に別れを惜しんでくれて、金などいいから残ってくれと言われた。

しかし、もう決めた事。

まるでかつての世界に残してきた唯一の肉親のようにも思った彼の頼みは断りづらい。

俺が金の必要の無い、外の世界から来たのだと説明して納得してもらおう。

その途中でこれから大変な組のために、以前に戦場で見た各種銃火器や大量の弾薬に爆薬、そしてデータを持っていた例の『猿人』の最新試作モデルと実際に戦った旧型を各十機、整備設備に資材も併せて纏めて“素”から造って渡しておいた。

『猿人』一機でそこらの組など、構成員の全ホルダーごと叩き潰せるだろう。それが新旧合わせて二十機。

もはやそこらの組織など鼻で笑える戦力。軍隊と違って戦える。

これには戸櫛も声も出さず、目玉が飛び出んばかりに驚いていた。

クローンの際に魔術は見ていたが、はつきり魔術と言っていないかつたために非常に変わったESPと考えていたようだ。

何にしろこれだけの物を渡されたという事から、俺の気持ちを察したのだろう。

最後は涙ながらに今までの礼を言われた。

そして外へ出てみれば組の幹部連中が勢ぞろい。

戸櫛が連絡を入れていたようだが、急の連絡に取る物も取りあえず来たのか、皆がスーツに部屋着にとバラバラの格好だった。

彼らは戸櫛の表情を見て悟ったのか、特に引き止めずただ今までの礼を言い、これからの壮健と変わらぬ武を祈ってくれた。

ここでもやはり涙を堪えきれず、連中も強面に涙の跡をつけて見送ってくれた。

そして最後。

塊だ。

「よう」

「冬理……」

塊はアパートの屋上に転がって空を見ていた。

「俺さ、世界の外から来たって言っただろ？」

「ああ」

「そろそろ行こうかと思ってな」

「そう、か」

表情は変わらぬまま、声が少しだけ、暗くなる。

「知ってたろ」

「まあな。何人か俺のところの止めてくれって言いに来たよ」

ふうん？

「で？　なんて言ったよ？」

「お前が仁に言ったのと同じヤツだよ。あいつが決めたんだったら俺も納得する、って」

相変わらず不器用だな。

「戸櫛な、残ってくれって言ってきたよ」

「……………だからどうした」

どうしたじやねーだろ。

重症だな。これは作戦を変更するか。

「簡単に分かりやすく言うぞ？」

嫌なら嫌って言えよ！ 押し殺して黙って見送るとか似合わねー
事してんじやねえ!!」

いいざま、寝ているバカの腹に強烈なストンピングをかます！

かますかます。二発三発、四発五発と踏みつけるうちに、痛みと酸
欠でのた打ち回っていたバカが跳ね起きてくる。

「なにしやがるクソツタレ!!?」

「只でさえ足りない脳みそで余計な事考えるんじやねえって言ってる
んだよ！」

「ふざけんなよお前?! ひとが真剣に話してるのに！」

「はっ！」

「ブッコロス!!!」

頭を引いた半瞬後、もらったら明らかに頭蓋を粉碎するであろう激
烈な拳打が鼻を掠める。

そのまま背中からアパートを飛び降り、裏の林へ駆け込みながら全
力の殺し合いが始まった。

三十分後――

「勝利……！」

林の中央に先程出来た空き地の中央で、俺は敗者の背中を踏みしだ
き、天高く拳を突き上げていた。

「くっそ……！ てめ何だあの反則技!?!」

塊はぼろぼろで倒れ伏しこちらを夢に出そうな目で見ているが、所

詮は負け犬の遠吠えである。

そう、俺はこの戦いでエイヴィヒカイトを駆使して戦闘した。

流石に『流出』位階は話が別で使っていないが、蛇の記憶で見た魔人達の渴望を『自分』の魂で代用し、彼らの『創造』を取っ変え引っ換えしながら、このバカたれを思う存分小突き回したのだ。

半ば甚振いたぶっていた為に三十分も掛かってしまった。

まあアレは確かに抵抗出来んわな。

こつちの影が急に伸びて触れたと思ったたら体が動かなくなって殴られ、それを警戒したら突然あたり一面が火の海になり、程よく焦げたら糸が襲い掛かってきて、何とか避けて反撃したら何故か後出しした相手に必ず先手を取られて吹き飛ばされ、何べんも吹き飛ばされてるうちに、当たった瞬間にようやく俺を捕まえたと思ったたら、これまた何故か俺の体が雷になっていて盛大に感電する。

やつといて何だが、もう涙が出てくるぜ。

普通ならここは相打ちで、二人で力尽きて空かなんかを見上げてお互いの心の内を吐露するんだろうが、生憎とそんな生易しい人生は送っていない。

人生は関係ないという苦情は受け付けない。

それにしても酷い状態だ。

全身に打撲、切り傷、刺し傷に火傷が刻まれ、傷の種類専門店とிட்டた有様だ。おまけに感電してびくびくしている。

「笑える」

「デメエー——」

くつくつく。

いや、いかんいかん。

「まあ落ち着け。アレは俺の持つてる魔術の一種だ、見た事あるだろう?」

「くつそが! 魔術? 確かに見た事あるけどあんな事も出来んのか

よ」

「見せた事あるのは少ないからな。

でだ、まあ見事にボロ負けしたわけだが」「うるせエ!!」

「……お前がやかましいわ」

ゴスツツ

「……………」

「でだ、お前負けたわけだがよ、このままいってお前、俺に勝てる?」

「……………」

「起きろ」

「っりんっ

ぎゃあああああああああああああ……………」

「起きたな」

「いてエよ!!」

「続けるぞ」「くそつたれ」

「お前、このままいって俺に勝てるか? つーか未だ仁に勝てるもねーだろ?」

「——チツ」

「俺はまだまだ強くなるぞ。仁はどうだか知らんが、それでも今度は寿命の制限がなくなる。どちらの人格が残るかは知らんが、いずれ確実に前より強くなるだろう」

「……………」

「お前も初期型の再生因子持ちだ。寿命はそんなに長くないぞ。このままじゃ届かない」

「だったらどうしろってんだ? 寿命を気にしてじっとしてたって差が開くだけじゃねーか!」

「俺がソレ、直してやるよ」

「は?」

「再生因子。仁は間に合わなかったが、お前のは癌化しないように直してやれる。今までの起動分もエンジェルなら持ち直すだろう」

「な、なんで」

「代わり戸櫛のところ、ちよくちよく顔出してやれ。仁を、アイツを育ててやれ。」

「それで長く生きろ。」

「その分だけ強くなつて、そして死ぬ前に俺を呼べ。たとえ世界を隔^{へだ}ててようと、お前らの声ならたとえ死んでたつて聞こえる。」

「だから安心して最後まで戦い続けて、そして俺と、もういつペン殺りあおうぜ?」

「言いながら宙に黒い魔方陣を描いてゆく。蛇のものとは違い、この世界の技術もミックスしてあり、魔方陣の所々に無機的な意匠が描かれている。」

「おまえ……」

「なに、安心しろつて。やるときは全盛期の体に戻してやるよ」

「魔方陣が完成し、緩やかに塊の胸へ吸い込まれていく。」

「ハッ、っはは、はははははははは……」

「足をどける。」

「塊はごろりと仰向けになって腕で目を覆い、端から光るものを流しながら鼻声をだした。」

「わかったよ。そんだけ時間がありやお前も仁も余裕だ。鼻息で倒してやんよ」

「はっ、言うねえ。そりや楽しみだ」

「ああ、期待して待つてろよ。今度はお前をぼっこぼこにしてやんよ。」

「じゃあ、またな。 冬理」

「ああ。 またな、塊」

第参章 1 運命の夜は始まる (Fate編)

時間はいつの間にか過ぎてゆく。

何かに夢中になっていれば尚更だ。

人間の時間には限りがあるが、俺という存在に時間の括りは無い。

さて、どれ程知ればこの熱は冷めるのか。

はて、どれ程経験すればこの心は落ち着くのだろうか。

それはきつと遠い先になるだろう。

ふむ。

なってみてから考えることにしよう。

外世界 大樹一番地 大図書館所蔵『とある暇

人の日記』より

Main Side 黒川冬理 In.

現在俺はノリにノっていた。

塊と別れて直ぐにあの世界を離れた俺は、帰ってくるなりその勢いを止めずに目星をつけておいた別の世界へ飛び込んでいった。友達との別れに柄にも無く熱くなっていてその熱が冷めないように走り続けたかったのだ。

今度は一つ一つの世界に長居せず、世界を変える目標もお座成りにして能力を集めては次の世界へと駆け抜けた。

魔術っぽい色の世界ではチュールの右手と呼ばれた男とその仲間を相手に戦い、鋼色をした機械の世界では巨大ロボットに乗って宇宙空間で切り合い、マーブル色の世界ではひたすらに人々のために戦う

αの部隊に感動し、その一員として戦列に加わった。どの世界でもそこに生きる者は皆懸命に生き足掻いていた。そんな連中を見ていれば嫌がおうにもこっちも熱くなる。そんな訳で、今俺はランダムな葉に欠片を落とそうとしていた。もちろんランダムといっても、目の前の色とりどりの世界の数々は物語の世界ばかりを集めたものだ。どれを選んでもいい。

「う〜ん……よし、これにしよう！」

あまり悩まずに決めてしまおう。

今までの経験上、金属を連想させるようなハッキリした色合いは科学文明が発達していて、暗い色彩の薄ぼんやりした色は魔術関連の発達した世界だった。

例のαの部隊と会った世界は、アレはまあただ単に混じりすぎてマールだったただけだが。

決めた世界にいつもの如く欠片を掌からつまんで落とす。

米粒大の宝石にも見える欠片が葉っぱに落ちていく。——と、その時。

しゅぱんっ！

と、いきなり直ぐ隣にある黒っぽい葉っぱから、真つ黒い色をした細い舌の様な物が伸びて大切な欠片を搔つ攫っていった。

「……………はっ？ 何あれ何あれ、気持ちワル!？」

いきなりのショッキングな出来事に正直ドン引きである。

「え、え？ あの世界ってなに？ なにがいるの？ どんな怪奇世界よ?。」

流石にまさか自分が入り込んでいる世界の中に、あんな捕食者じみた世界があるなんて考えてもみなかった。もしあんな世界が沢山あったら、これからの旅に支障が生まれるであろう事は間違いない。それに自身も迂闊に手を伸ばしてアレ巻き付かれたりしたらイヤ過ぎる。

「いやいや、それよりも欠片が飲まれた！」

小さいとはいえ、実はあれ単体で物語の世界一つを賄えるだけの”

素”が内包されている。取られたから諦めようではちと済まない物だ。直ぐにでも取り返す必要がある。

「あれ、取り返すも何も俺の分け身なんだから俺の意識を移せばいいんじゃない？」

いい考えじゃん、と思ったのもつかの間。

アレに入るって事は必然的にあの黒い舌っばい代物と出くわすという事だ。最悪巻き付かれているやもしれん。

正直な話、世界の外にまで飛び出すようなデンジャラスなブツで、おまけにあんな気持ち悪いのに世界内で捕まったら思わず自殺してしまうかもしれん。あの、何と言うか、蛙の舌と虫の舌を合体させて触手風味に仕立てたような……いや一瞬だけ見えたんで見間違いだろう、うん！

——逃避しても変わらないのが現実の嫌な所。

(ぐううううう………！)

悩む。悩む。

時間も無い。あまり時間を空けてもし欠片が世界やあの気持ち悪いのに消化されたら事だ。

「ええい！…ここは行くしかないか！」

少しやけっぱち混じりの氣勢を上げて気合を充填。

覚悟を決めて不吉な色合いの世界へ墜ちた欠片へ意識を移した。

Main Side 黒川冬理 Out.

Another Side ??? In.

それらは一つのシステムだった。

ただただ効率的に運用され、壊れるまで動き続ける意思無き歯車。だが、その中に例外が混じっていた。

ソレは明らかに後から不正に付け足された歯車であり、他のシステムに侵入して己の餌を選び出して消化し、製作者の望むものを作り出す役目を負っていた。

ある時のこと。

システムはある程度は勝手に決まってゆく餌の選別が終わり、それらの消化にかかろうとした際、自分達システムを覆う壁のほんの少し向こう側に、これ以上ないほどの“材料”となりうる物がある事を感じた

システムは組まれた仕組みに従い、より良い“材料”を全力で確保しようとした。

結果、前回の消化時に作成された失敗作の残滓を全て使用し、何とか壁のこちら側に引きずり込むことは出来た。が、対象には一切の直接干渉が出来ず、次善の策として自身に備えられた本来の消化プロセスにて処理する事を決定した。

現在の餌は八つ。

そこに新たな餌が放り込まれた。

A n o t h e r S i d e ? ? ? O u t .

第参章 2 珍客過ぎてどうしよう (Fate編)

Main Side 黒川冬理 In.

無事に意識の移動が成功した。

最悪の場合は欠片がかなり溶かされている事も考えていたが、幸いそれはないようだ。

体に感覚が戻ったのを感じ、まぶたを開く。

「ふう、どうやら無事か」

なにやら足の裏に地面の感触が無かったので予想していたが、やはり体が宙に浮いていた。別にそれに見合った上向きの力が掛かっている様子は無く、まるで宇宙空間のようにふわふわと浮いている。

何よりニユルニユルでもネチヨネチヨでもない。助かった。

しかしこれは“そういう世界”なのか、それともあの不気味な舌が何かしているのか？

現状では何も分からない。

改めて周りを見回す。

「ここは……どこだ？」

目の前に広がったのは不思議な空間だった。

東西南北に天地を見渡してみても霞んだ白と黒しか目に入っていない。

よくよく見れば、今まで地面と思っていた黒いものが波打っている。

となるとあれは海か？

しかし、何処かの霧が出ている海上と判断するにはどうにも嫌な感じが消えない。

眼下の真っ黒な海以外は何もなく、空すら乳白色のもやに阻まれて果てが見えない。

これはどうしたものか？

移動しても良いが、肝心の陸地やらなんやらがある方向が分からない。

一応はここも物語の世界なので、主人公とかそれに類する生き物がどこかに居る筈である。

まさか、あの黒いのが主人公とか、ないよね？

嫌な考えを頭を振って振り払う。

兎にも角にも周りを調べてみよう。

そう考え、下に向けて降りていく。

降り方は簡単、降りたいなーと思ったら高度が勝手に下がったのだ。

どんどん黒い海面(?)が近づいてくる。

「あれ? なんつか違うような」

それに凄いイヤな感じが強まっている?

背筋に走るぞわぞわした感じに押され、目を凝らして見詰める。

結構波打っている。

「ん? 波が大きいだ?!」

“風がまったく無い”のに!?

ガンガンと銅鑼でも叩いているかのように第六感が警鐘を鳴らす。

「やべェ!!」

全力で上へと考える。体がそれに従ってグンと上に持ち上がっていくが、その動きは焦りとは逆にあまりに鈍過ぎる。

いつそ自分で、そう思ったその時。

こつちの真下、黒く蠢く“何か”の海が、まるで対潜^ポロケット^{フォー}を纏めて打ち込まれたかのように大きく盛り上がった。五メートルか十メートルか、その高さの分だけ距離が近くなり、そしてとうとう、俺の素晴らしい視力を誇る眼球が“アレ”の細部を見てしまった。

しゅるしゅると、数える気にすらならない程折り重なり、蠢きあっている黒い舌。

こうやってみると舌というより細い布だが、それが地平線とはいかないが、見える範囲全ての下を覆っていたのだ。

「ひっ!」

流石にこの光景には鳥肌立ってかすれた声が漏れた。

さんざつぱら人間の死体やら何やらを見て来たが、そういう一般的に言う所の“グロい”というのはまったくもって平気だ。

だがコレは話が違う。激烈に気持ち悪い。というよりも気色が悪い。駄目だ。

そしてついに、盛り上がったアレの小山がはじけた。

はじけて、それで終わりなんてこっちの希望は当たり前前に無視され、正に間欠泉と表現すべき勢いでアレが宙に吹き上がり、こちらに向かつて大挙して殺到してきたのだ。!!!!

「っ!? うぎゃあああああああああああああ!!!」

あまりといえばあんまりのおぞましい光景に思わず絶叫を上げる。

絶対に、何が何でもアレに捕まりたくない。!!

「い、いつそげ急げ急げ……、あつたー!」

必死になってそこらの空間に外の本体とのラインを通じて穴を開け、外世界のログハウスにある倉庫から聖遺物を引っこ抜く。

手に握っているのは一本の剣。

一般に使われていたロングソード等より幾らか肉厚で長い。造りも華美な装飾などは一切無く、それどころか鏢の類いすら見当たらない正に直剣といった風情だ。

「死イねやオラァー——!!」

それを握り締めエイヴィヒカイトを起動、躊躇無く位階を『創造』までシフトアップする。碌に渴望など設定しなかったが、現状俺が何より“渴望”している“アレを近づけたくない”という思いと、聖遺物の特性がうまい具合に組み合わさったようだ。

それに更に“増幅”の魔術を上乘せし、こっちに向かってくるアレ目掛けて全力で振り切る。

ドドドドドオオドオオオンツ!!!

空に描かれた銀線から落雷と見紛う雷霆が数条迸り、一塊となって群れているアレを薙ぎ払った。

この剣は楽園で手に入れた『炎の剣』。以前に俺の胸を背中からぶち抜いてくれた一品だ。

名前は炎だが、雷撃を操る神が鍛えた剣である。

エイヴィヒカイトの核として俺が使用した際の武装型は、全四種中もつともバランスに優れた武装具現型であり、意外にも蛇の世界以外で生み出された魔術とは相性がいい。

だがあれだけの物量をなぎ払い焼き尽くすには絶望的に火力が足りない。

しかも黒い奔流が途切れたのもつかの間のこと。すぐさま新しいアレが吹き上がってくる。

(まずい、このままでは捕まる!?)

慌ててこの間隙を使って次を、アレに対抗出来るだけの物を作り出す。

(非常事態だ。この身の危機には代えられん!)

そこらの空間自体を問答無用で分解、“素”を確保する。代わりに世界に拳大の穴が開いたが、それを利用して再び倉庫へアクセス、手の聖遺物を放り込む代わりに以前に訪れた機械世界で手に入れた超大型量子コンピュータの端末と、自身が作り上げたとあるシステムの基盤を放出する。

体とそれら二つを中心に確保した“素”を操作する。

合金製の骨格がそれらを包み込むように構築され、そこに二基の主機が合致。“素”を変換して発生したエネルギーを使って、短時間で鼠算式に天文学的な数までに膨れ上がったナノマシン群が、骨格に張り付いて装甲となり、腰部兵装ラックにマウントされたライフルとなり、左腕に装着された楕円形の盾となる。

その場に現れたのは全高二十Mジャストの、お髭がダンディな白い人型万能機動兵器。

機械とは得てして特定の方向に特化して作成されているものだが、この機体はナノマシンを広域で制御する事により兵器として限りなく万能を目指した物。

前の前に訪れた機械文明の世界で構造を覚えた機体だが、原作を見

ていったら、俺のこの機体のナノマシン制御システムに対する興味が強すぎたのか、少し力が入った結果、なんと機体が造られる前の世界に到着してしまった。

しかも変な影響が出て、意識の移動が終わった辺りからこの世界にある大型量子コンピュータ等に、この世界の機動兵器に似たガンダムと呼称される機体のデータが、その歩んだ歴史と共に何処からか送られてきたというのだ。

原作ではこの世界の遙か過去の記録とされていたが、予想するに俺が入る時に開けた穴が若干大きすぎたため、同じ“ガンダム”という非常に“近い”世界のデータが一気に流入したのだろう。

どちらにしろ地球も宇宙の民も大混乱。たった数年であつという間に世界は戦火に包まれ、火達磨になった。

当初は目当てのブツが影も形も無く、戦争ばかりの世界に絶望していたものの、どうせだったら俺が作ってやろう！ と一念発起。元になわか科学者の血も騒いだ結果、研究主任の私室忍び込んで直談判やら脅迫やらをし、チームに参入する事に成功した。

やる気に満ちていた俺は、以前の世界でαの部隊に所属していた、同じく二基の縮退炉をエンジンとする200M級の非常識機体『ガンバスター』を参考にエンジンや構造手を入れた。ちなみにこのガンバスター、ところへんが非常識かという点、全長をキロメートル単位で計るような生き物の群れ相手に無双出来る性能と言えば少しは伝わるだろうか？

機体構造の方は当然の如く重装型になり、これまた当たり前のように却下されたが、主機である縮退炉は劇的な性能の向上に成功した。とはいえ、まさかガンバスターの燃料であるアイス・セカンドをぼんと出して見せるわけにはいかない。

技術融合によって格段に出力を増した、元来の不連続超振動ゲージ場を利用した縮退炉一基をメインエンジンとし、胸部の空いていたスペースに“予備”と言って俺が使うための若干大型となったガンバスター型の縮退炉を搭載した。

だが当然問題もあった。俺が入った事で本来は誰かが思いついた

であろうナノマシン制御システムの構築が迷走しだし、最終兵器となるべき本機の製造計画が狂っていった。

流石にコレは拙い。

慌てて知恵を振り絞った。最終的に魔術を解禁し、時間限定で首を掛けシステム構築を一任してもらい、科学と魔術の融合である現時点の俺の最高傑作『バベルシステム』を作り上げて搭載。なんとか帳尻を合わせることに成功する。

『バベルシステム』

機体の主機である双発縮退炉の生み出す莫大なエネルギーを魔術に転用し、世界に存在する生命体の脳へアクセス、その普段は殆んど使用されていない脳の処理能力を少しずつ拝借するシステム。

かつて全ての人の心を繋ぐこうとして、神に打ち倒されたバベルの塔。『バベルシステム』はそのバベルの塔のエピソードをモチーフにして名付けた。

これにより、原作とは全く違った物に仕上がってしまったが、他の誰よりも構造を知ることができ、お陰でこのように“素”から作り出すなど最も扱い易い機体となった

勿論だが他のシリーズの機体なども造れる。

これは考えてみれば丁度いいと、世界に流入した全シリーズの機体データを、髭のバベルシステムの起動試験中にちよいちよい手を入れて実行した思考ハッキングや、システム構築の功績を盾にデータの閲覧を要求して全て集めたのだ。

この際に今機体に端末を組み込んだ量子コンピュータの、その原型となった量子回路を手に入れた。

意外にお得になった世界だったと言えない事もない。

……今更だが、実行したのが世界とは言え俺が原因で戦争が起きたのに、自分に利が出てラッキーとか考えてるのは重症だな。どこかでバランスを取るか？

『本日ハ曇天也。おはようございます、マスター』

機体の構築の際にコックピットとなった場所に、冷ややかどこか

金属を思わせる滑らかな女性の声が響く。

超大型量子コンピュータの管理擬似人格である『ヌル』の声だ。

この“無い”という意味の名を持つ彼女は、度重なる増設と改良、更に俺の手による魔術的改造を経て、情報の空間投射により魔法じみた真似事すら可能となった演算装置を管理するために設けられたAIが、“素”を餌に外世界で自我を獲得した存在だ。

「おはよう。すまんが、いきなり害虫、害獣？ 何て言えばいいのかわからんが、明らかに害のあるアレを焼き払いたい」

『——あれはいつたい？ ……たしかに、物理的にも精神的にも害がありませんね。』

了解しました、機体を起動します。

バッテリー残量、100%。

システムチェック。 ……メインシステム・バベルシステム、共に正常。

本機体チェック。 ……機体状態、良好。

主機関、起動。 ……起動完了。

両縮退炉、稼働率を40%へ。

ナノマシン群、自己増殖を開始。

システム、戦闘モードへ移行します』

ヌルの冷たい声が流れるたびに機体に命が吹き込まれ、コックピットに光が灯ってゆく。

操縦桿を握って足はフットペダルへ。

メインカメラが機能し、パネルモニターに映像が出る。 って、ウゾウゾ、ウゴウゴと奴らが寄ってきてる！

即座に推進器を噴射、脚部に搭載されたマイクロエンジンの集合体であるスラストター・ベーンが生み出す強力な推力で、より高い高度へ逃れる。

腰の後ろにあるハードポイントから、大型ライフル引き抜き銃床部分をスライド。

全力射撃モードに移行して狙いを定める。

「喰らえやオラー！」

粒子ビームで片っ端から焼き払う。

放たれた閃光は黒い濁流を欠片の抵抗も許さず引き裂き、そのまま蠢く海面へ着弾し大爆発、内包した莫大な熱量を存分に撒き散らす。金属粒子を固有振動によって収束・発射されるその威力は、かの世界で建造されたモビルスーツ群の中でも他の追随を許さない。

「ヌル、バベルシステムを起動」

『了解。バベルシステム、起動』

なぎ払う一方で同時にバベルシステムも起動、十分な演算能力を確保出来るかどうかで生命体が居るかどうかを探る。

「これ、かなり人間が居るな。それも一万や十万じゃない、一つ上の億の単位で居るはずだ。だが一体何処に？」

『予想では五十億は超えるでしょう。少なくともレーダーの探知範囲内には生命反応なし』

まさかこんな怪奇生物の居る場所では生活できないだろうに。

それに、それだけの数が居るってことは、それだけの土地を支配下に置いてるといふ事だ。

一先ず考えるのは置いておき、先にアレを完全に排除しよう。でないと落ち着かない。

ライフルを再びハードポイントへ戻す。

「バベルシステム、稼働率を30%に設定。目標、敵対性動的存在。ナノマシン散布を開始」

『システム稼働率30%へ変更。ナノマシンの散布を開始します』

バベルシステムの稼働率が上がると共に、コックピットの内壁に有機的無機的な黒いラインが燐光を放ちながら駆け巡る。

射撃を含め滞空以外の行動を中止、余剰出力をバベルシステムへ回す。

このシステムは俺から離れば使えなくなってしまふ、兵器に搭載する物としては完全に欠陥品だが、利点は原作よりも格段に細かなナノマシン制御が出来る事だ。

眼下の黒いのがナノマシンによって次々と分解されていく。しかし、

あれ……？

何かおかしい？

『いえ、異常な点があります。対象を分解したにも拘らず、ナノマシンの増殖がありません』

「あ、それか」

確かにそれはおかしい。

あのナノマシンは強力な自己増殖能力を持つが、増えるにしてもその部品がいる。

これは、最初の増殖は俺が手伝って、後は分解した対象を使用するのだが……

「あれだけの量分解して増えないってのはどういうことだ？ まさか質量が無いとか言わんよな？」

『——いえ、どうやらそれで当たりのようです』

「む、何か探知に引っかかったか」

『逆です。光学センサー以外の、どのセンサーでも実際のデータが全く取れません。』

私は目視で指示を出しましたし、ナノマシンも分解する事ができましたが、やはり質量が無いとしか判断できません』

さて、それって確か同じ事があったよな、昔に。

あれはまだ人間だった頃の思い出だ。

意識が朦朧としてぼっかりだったからハッキリとは覚えていないが、楽園がそんな感じだったはず。

「となると、あれを潰してもまた湧く可能性大ってところか」
『？』

「ああ、神とかの人間より上位の輩が拵えたもんだつたりすると、あんな感じになるのを見たことがある」

『では、現状での根本的な対処が取れませんね。』

それが分かった以上、いったん退避することを進言いたします』
それしか無いかねえ、やっぱり。

捕まるわけにもいかんし、捕まりたくも無いし。

「つつてもどこに逃げるよ？」

アレの海も、いったいどこまで広がってるかわかった物じゃないし。

『その事についてですが、少し分かった点があります』
「何？」

『ご存知の通り、マスターとの通信は私の演算によって空間を越え、そちらとの双方向通信を行っております。当然ながらマスターの座標も把握しておりますが、どうもその座標が本世界の通常空間とずれています』

えっと、つまりあれか？

「俺の居るこの場所は物語の世界の中だけど、それとはちよつとずれた場所だよ」

『イエス。更に予想するなら、マスターの欠片が飲み込まれた経緯を考慮するに、ここはあの妙な存在、もしくはその大元となる存在の“胃袋”的な空間なのではないか、と』

ナニソレ、イヤスギル。

「冗談じゃねえぞ?! さっさと脱出するぞ、ヌル！」

『イエス、マスター。』

空間位相転移プロセスを開始します。空間書き換えを実行』

ヌルがその演算能力を使い、目前の空間そのもののデータを書き換えてゆく。

見る間に書き換えられていく空間はぐにやぐにやと歪み、それが収まるとそこには銀色の直径30Mはある円盤があった。

『ホール開口。固定完了しました』

「サンクス、ヌル！ あれが追って来る前にさっさと行こう」

すぐさま海面近くまでの範囲を制圧していたナノマシンを集結、追加装甲の形で機体に纏う。

そのまま宙に固定された銀盆に飛び込む最中、ヌルの慌てた声が聞こえた。

『っ！ 魔力による外部干渉発っせい……』

だがその言葉を最後まで聞き届けることなく、機体はホールにその全身を飲み込まれた。

俺は遠坂とセイバーと一緒に協会からの帰り道歩いていた。

遠坂のサーヴァントという、何だか気に入らない感じのするアーチャーとかいう男は、霊体化して透明になって付いて来ているらしい。

正直頭が痛くなりそうだった。

知らない間に聖杯戦争なんていう馬鹿げた殺し合いに巻き込まれ、他の六人の参加者^{マスター}とそのサーヴァントを殺ろさなくちゃならないらしい。

冗談じゃない！

俺も正義の味方になりたいって夢はあるけど、だからこそ殺し合いなんて絶対に納得できない。

だけど他の参加者はそうじゃないらしい。

自分の願いを叶える為に他人を殺すつもりだと、同じマスターだった遠坂は言う。

遠坂も俺達と戦うとか言ってたけど、遠坂は良いやつだ。そんな事するわけない。

だけど実際にサーヴァントの強化のために、周りの人間を傷つけるマスターがいる。

数日前に起きたガス爆発の事故。

あれは霊的存在であるサーヴァントを強化するため、同じ霊的要素である人間の魂をサーヴァントに喰わせるためにマスターが引き起こしたというのだ。

そんな傍迷惑な奴等は到底放つてはおけない。

何とかして止めないと！

遠坂やセイバーと話し、改めて固く決心する。

そして遠坂の家と俺の家の分かれ道、坂の下の交差点まで来た。

話しているうちに何故か赤くなつて怒っていた遠坂だが、わざわざこつちを心配して忠告までしてくれる。

うん、やつぱりあいつ良いやつだな。

そう思っていた、そんな時。

「ねえ、お話しは終わり？」

鈍色の化け物にびいろを連れた小さな女の子が、こつちを見下ろしていた。

「こんばんはお兄ちゃん。こうして会うのは二度目だね」

「お兄ちゃん、って？ ちょっと待ってくれ、人違いじゃないのか？」

こつちの言葉に女の子は冷ややかに笑う。

「いいえ、あなたはわたしのお兄ちゃんよ」

付き従う巨人が一步前が出る。

無言で佇むその巨体から放たれる凄まじい威圧感。

それだけでアレが、真正正銘の怪物だと否が応にも悟らされる。

「なにあれ、単純なステータスはセイバー以上じゃない！」

遠坂が叫ぶ。

それを聞き、巨人を従えた女の子が名乗る。

「こんばんは、遠坂の当主。私の名はイリヤスフィール・フォン・アイ
ンツベルン」

「アインツベルン……」

遠坂が苦々しげに呟く。

あの女の子を知っているのか？

「じゃあ——殺すね。やつちやえ、バーサー、ツ!？」

冬の魔女が冷たい笑みのままスツと目を細め、隣の巨人に殲滅の命を下そうとしたその時、

ふわり、と。

周りの空気が温まって浮き上がったような、そんな感じがした。

「……………え？　これ、魔力？」

一瞬で静まり返った夜の空気に女の子の呆然とした眩きが響いた。
そして――

「うぐう!？」

その空気がいきなり沸騰した。

沸きたった何かが重圧となって辺りを支配し、全身に重く押し掛かってくる。

さらに強烈な違和感が五感を包み、吐き気すら催す。頭の芯を思い切り振り回されているような酷い感覚に、思わず口を押さええて蹲うずくまつてしまう。

「なんだってんだ、これ……………」

正直しやべるのがつらい。遠坂も辛そうに膝をついていた。

セイバーはそれでも動けるのか、周囲を警戒している。

「つく、似てるけど魔力じゃないわよこれ。いったい何が」

いきなり夜の空が明るくなる。

ライトのような強い光じゃなくて、もっと柔らかい光だ。

「なっ!？」

「うそ……………」

セイバーに続いてあの遠坂が思わずといったふうに声を洩らす。

俺の喉からも呻き声に似た唸りが出ていた。

それだけ目の前の光景が尋常じゃなかったのだ。

この旧市街から見て新市街の方、大体新市街と旧市街の間を流れる川の上辺りだろうか。

雲のない月の明るい夜空に、巨大な銀色の鏡のようなものが浮いていた。

滑らかなその面で月光を反射し、それは音も無く静かに、いつの間にかそこに存在した。

「なんだ、あれ」

あて先の無い疑問が口をついて出る。

当然答えなんて返ってこない。ここにいる全員が知りたいだろう。

その時、空に浮かぶ鏡に変化が起こる。

「あれってサーヴァント召還の魔方陣じゃない！」

「どういうことよ、サーヴァントは七騎とも出揃ったはずでしょ!?」
俺がセイバーを召還した時にも土蔵の床に光っていた、眩く輝く精緻な魔方陣。

それがあの銀色の鏡の周りを囲むように明滅していた。

「遠坂、じゃああれからもサーヴァントが出てくるのかよ?」

「知らないわよ! 私を知るわけ無いでしょ!? 大体あんな大きさの英霊なんているわけ、

ゴオオオオオオオ——!!

訳が分からない。今にもそう言っただけを掻き毟り絶叫しそうな遠坂が怒鳴り返してくる途中、ジャンボジェットのエンジン音に似た凄まじい音が突然響き始める。

こんな夜中に低空で飛ぶような飛行機はいない。

となるとアレからしているのだろう。

案の定、銀色の部分を通り抜けるように何かが見えた。

「ちよつと……、いい加減にしてよね……」

隣から地獄の鬼もかくやというドスの利いた声がする。

「なんなのよ、あれは! 英霊どころかまるつきりロボットじゃない!!」

そう、飛び出してきたのは白くてゴツイ装甲を身に纏い、なぜか髭を生やした人型の巨大ロボットだったのだ。

「なんでさ」

うん、これはないよな。幾らなんでも。

魔術で呼び出されたのが巨大ロボでしただけなのは、何と云うか、凄くシニールだ。

でも巨大ロボ。

巨大ロボットだぞ。

漢のロマン、巨大ロボ。

「カッコいい」

「ツ!!」

遠坂に凄い目で睨まれた。

その後、例のロボは二・三度首を回して周りを見渡した後、何かする訳でもなくあっさり人家の無い町外れの山の方に飛んでいった。

あのイリヤスフィールと名乗った女の子も、あの非常識な出来事に気が削がれたみたいで、これまたあっさりと帰っていった。

俺達もあの光と音で、寝ていた民家の人が起き出したのを感じて直ぐにその場から離れた。今はあんまり予想外な事が起きたから、一時的に同盟を組んでそれを話し合うために俺の家に向かっていて。

遠坂はあの子の連れてた巨人と戦わなくて済んだ事に安堵したようだったけど、あのロボットのド派手な登場がよほど気に障ったのか、

「何でよりによって空なんか目立つ所で召還すんのよ！」

私の管理している土地なのに秘匿も何もあったもんじゃないわ。それに拙いわね、あんな事があつたら絶対協会から何か言ってくる

……」

なんてあれから考え込んでいるようだ。

「本当に、なんでさ」

Another Side 衛宮士郎 Out.

唐突だが、私は幾つもの世界を巡り歩いている。

行く先はそれこそ種々様々だが、一応の目的というものがあり、それに沿って選んではいる。

しかし目的があるという事は、同時に達するため急ぐのもまた当然である。

身体は一つしかない。

なんて言葉はどうとでもなる人外な私ではあるが、さりとて別世界などと心躍る体験をお座成りにこなしたくもない。

二つを天秤にかけ、結果長大な主観時間を許容したのは元人としての好奇心のなせる業に違いあるまい。

そう言い訳などしつつ。

今日も今日とてパツと目に付いた世界へもぐり込むのだった。

草原だ。

人間は——いるな。

若いのが二人ほどイノシシと戦ってる。剣もって。

なるほど、ここは剣が一般的な世界……いやいや、何故草原にイノシシ？

ぴかあ

ざくう

突如として剣が光り輝く。

剣を振るのもおぼつかない素振りだった片方の男の、その握った剣が。

そして何故か変に堂に入った動きで、突っ込んできたイノシシを切

り捨てる。

おい。

何だ今の。

魔力か？ 魔法か？

いや、そもそもこの世界の魔力っぽいブツは、ここには見当たらないのだが。

あ、違うようだな。

なにやらウインドウとしか表現できないもの開いてる。

イノシシも光って消えたし。

となれば……ここはあれか。未来技術で構築された仮想世界か。それも剣とくれば古き良き時代からゲームと相場は決まっている。成程、これは楽しめそうだ。

聞き耳を立ててみれば「ソードスキル」なる単語も聞こえた。

それがゲーム内の技能で、あの光って動きが良くなるヤツなのだろう。おそらく登録された動きをトレースしたのだ。確かにそういったシステムが無ければ、肉体的な運動の得手不得手で、あまり宜しくないユーザーの階級分けが出来てしまう。

商業用なのだろうが、そこ等辺はうまく出来ているようだ。

早速、ちよろつと世界を解析、大部分をフィルターで隠したままサポートや案内といった単語をキーに検索を掛ける。

ヒット。

簡単な手引書のようだ。

ふむ。

こうか、と反対の手の前腕へ指を滑らせ「ステータス、オープン」。慣れれば思考のみで出せるようだが、一足飛びは遠慮しよう。

電子的な効果音と共にホロモニタと酷似した画面が立ち上がる。

うまい事出来た様だ。何と言っても不正規ユーザーでしかない身の上として、そこは覚悟していたのだ。しかし杞憂だったのは幸い。せつかくという機会を楽しめないのは切ないから。

さて。

ちようど見やすい位置、顔の前のを興味津々に覗き込む。

人であった頃のこういったレイアウトと比べ、どうなっているかと心が躍った。

N a m e : 黒川 冬理

L v : 1

J o b : ソシアルナイト

……おや？

第参章 3 青タイツ、森で白髭と出会う、の巻 (F
ate編)

Main Side 黒川冬理 In.

ヌルが何か言ってたみたいだが、取り敢えずはアレから逃げられたらしい。

ホールアウトは無事終了。さつきとは違う、ちゃんとした空に出た。

時間は夜。

雲が疎らな夜空に月が煌々と輝いている。

「綺麗な月夜だ……」

思わず見ほれる。

あの醜悪なモノに追っ駆け回された後だと、唯の月夜が心洗われる美しさだ。

『……ツ……、……あ……』

聞こえますか、マスター？」

「ヌルか。どうした、通信が切れていたのか？」

いつもヌルが座標を設定するのだから、跳んだからと言って通信が切れる事は無いのだが？

『はい。本機の跳躍タイミングで、外部からこの世界の魔力らしき要素で干渉がありました。幸いにして干渉自体が召還系の術式だったらしく、こちらの跳躍先の座標をずらすだけの影響で済みました』
「外部干渉か。あのタイミングで仕掛けてくるようなのは、あの黒いのしかないよな」

『そう予想されます』

つくづく邪魔臭い存在だな。

どうか二度と出会いませんように。

「それで、ずれたつつたけど、どこら辺にずれた？」

『どうやら、どこかの市街の上空のようですね』

「は？」

慌てて俺の癒しである月から視線を降ろす。

ざっと360。カメラを回して確認してみる。

本当だ……

光学センサーに捕らえられたのは、繁華街と見られる市街と宅地らしき町の二つだった。

機体が滞空しているのは上空300M付近。丁度その下辺りを流れる川で二つの町が分断される形だ。

その周り、町の外は山と森が多いようだ。

あ、まずい。

機体のエンジン音でどんどん家に明かりがついていく。

「とりあえずアレだ、逃げよう」

『妥当かと』

目標は町の外の山林。とにかく身を、というか機体ロケットを隠さないと。高度1000まで一気に上昇、ジャミングを掛けつつ町を離れた。

うまい具合に山間の背の高い木が密集している地帯を見つけ、そこに降りる事ができた。

丁度山を挟んで町の反対側になる。

コックピットでシートを倒し、思いつきり体を伸ばしてほぐす。

この世界に来てようやく一息つけた。

「んんんんん、ふう。」

ほんと、どうすつかない。あの町の様子を見るに、こっちのジャミング越えて軍隊に見つかるか無いだろうけど」

『イエス。現状でこの国の防空網が反応した形跡はありません。』

なお、お気づきかと思いますが、ここは20世紀の日本です』

「見た感じそんな気がしてたけど、名前もそのまんま?」

『はい。主要な国名は、マスターの記憶にあるものと合致しています』
ふむん、混乱しなくて良いな。

「科学技術は? やっぱ20世紀レベルか?」

『はい。例外としてIT関連がかなり弱いですが、それ以外は概ね』
「魔力技術の方はどんな感じだ?」

『バベルシステムによる記憶探査によりますと、先程の外部干渉時に感知された、魔力に良く似たエネルギーが一般的に利用されているようです。ただし、一般的と言いましても魔術関連は秘匿を第一とし、その重要度は関係者以外に洩らせば刺客が放たれる程のようです。』

彼ら魔術師と呼ばれる人間は世界中に存在し、大きく三つの組織があるようです。本拠地はロンドン、エジプト、北欧は複合組織でした。それとは別に、キリスト教を母体とした異端狩りの専門、聖堂教会なる組織も存在します。

なお、彼らの間では魔術と魔法を分けて呼称されています。

魔法とは実現不可能な現象を起こす業とされ、並行世界に対するアプローチや時間軸の移動などの六つが知られています。また、現存するものはこの内“第二魔法・並行世界の運営”、“第五魔法・破壊”の二つのみ』

なんか、異様に物騒な世界だな。

てことはだ、あんな出方をした俺達って追われないか?

それにしても、“魔法”ね……。そこまで出来るのは凄いな。

この空気中のが魔力って呼ばれてるんだろうけど、これ、世界を構成している『水』の残滓こぼというか残りカスというか、世界から見て微細なチリみたいな感じで零れ落ちて変質したものだよなー。

だから余程うまく回ってる世界以外、どこの世界でも大体はある。変質によって少しずつモノが違うけど。

その代わり宇宙空間はかなり薄い。

まあそれも当然。宇宙空間も原子分子は沢山あるが、惑星という塊が無いから当然そこから漏れ出すモノも少ない。

魔術、世界によっては魔法とも呼ばれる技術は、俺の知っている限

り大別して二つに分けられる。

一つ目。この世界のように、世界から零れ落ちた『水』の変質した残滓（以後『魔力素』と呼称）、魔力等と呼ぶそれを集積し、ある程度纏めてから世界内の構成要素へと変換。それを利用する方法。

二つ目は、世界に存在する、人間より上位の存在から力を借りる方法。

その性質により、後者の方が大体において効力・攻撃性に優れ、前者は制御や効率的な運用に秀でる事が多い。

閑話休題。

「効力はどんな感じ？」

『やはり秘匿されてきただけあり、戦闘の手段というよりも“世界の根源”を目指す研究の副産物といった面が強く出ています。攻撃性は他世界の魔術よりも全般的に低く、その反面で隠蔽や補助に優れている模様です』

なるほど。

「典型的だな」

『そうですね』

「ただこのタイプの魔術は時々凄いのがいるからな。気をつけよう」

『イエス、マスター』

はああああ。

それにしても、これからどうしよつかない。

『レーダーに感、数1。かなりの速度で接近中。』

これは……霊的な存在のようですが、人霊にしる動物霊にしるかなりの魔力素密度です。加えて物理干渉能力を有していると思われるます』

「もう来たか。」

霊で物理干渉って、使い魔の類いか。例の組織からの偵察かな？」
この夜中に町から一気に山を越えて来たんだろ？ 忙しいこって。

「俺が下で出る。ヌルは機体を見ててくれ。対処は柔軟にな」
『ラジャー。お気をつけて』

「いざとなったら機体自体を収納して逃げるさ。じゃ」

コックピットハッチを開放、膝を着いた姿勢のモビルスーツから直で飛び降りる。

そして待つこと二分。

「よう、あんたが後ろの白髭巨人の持ち主か？」

目の前に蒼い全身タイツの変た、いやえーと、チンピラ？ つぽい男が現れた。

「あー、そうだけど」

服装には触れないでおこう。

まさか流行とか言わんよな？

「もう一つ聞け、お前サーヴァントか？」

サーヴァント？

………さて、知識にあるぞ。

タイトルは『F a t e』、運命か。内容は？

あー、あー、あー。あ、そういう事。

全部分かったら面白くないから大雑把にしか思い浮かべなかったけど、『水』の溜まった入れ物巡って市街地で殺し合いねえ。やっぱり物騒だな、この世界。

そんで何か？ 強力な魔力による召還術の介入で此処に来たせいで、俺がサーヴァントとかいう人霊の上位バージョンと間違えられたと。

はーん。大方の所、随分未来から来た英霊とでも思われてんのかな？

それにしても、やっぱりあの黒いののせいだな。

アレを聖杯の中身だとすると、俺は聖杯の腹を満たす餌としてこの聖杯戦争に送られたと。

……いや、おい、ふぎけんなよ？

人のを横からかすめた不気味存在が、人を獲物扱いか？

舐めやがって、そういうつもりなら邪魔してやる。

いきなり聖杯とやらの能力を山ごと蒸発させるのも溜飲が下がるが、どうせなら英霊とやらの能力も見ていくか。蒸発は最後だ。

「おい、いつまで黙ってたんだよ」

おっと、考え込んでたお陰で随分と苛立たしげだな。

うん、とりあえずはサーヴァントとしておこうか。

口調も少し変えておこうか。面白そうだし。

「ああ、ごめんごめん。一応サーヴァントだよ。見ての通り召還主も居ないイレギュラーなんでね、状況が分からなくて混乱してたんだ。何とか最低限の知識は聖杯から流れ込んできたから落ち着いたよ」

「何、マスターがいないだと？」

うん、疑わしそうな顔だね。

まあ無理もないか。

「そう、単品。俺自身特に願いなんぞ無かったんだけど、聖杯に引きずり込まれちゃってね」

「そいつあまた災難だったな。で？ だったらお前これからどうすんだ、参加すんのか？」

「一応そうしようかな？ 観光のついでにね」

返事を聞いた男、知識にランサーのクラスで呼び出されたクー・フリーンとあるが、その雰囲気豹変する。気迫、闘気、殺気、そういった類いの強烈な気配だ。

「貴様……、我が槍が観光ついでに相手を出来るものか、試してみるか？」

釣れたな。武に自信を持つタイプには聞き流せない台詞だろうな。自分達の戦いを片手間で、とか。

少しばかり見てみるか。

「ん、ん」

「ほう、良い度胸だ」

ニヤリ。そんな感じにランサーが笑う。

こつちが気圧されず、あっさり戦いを受けたのが嬉しい方に誤算だったのか。

その手に魔力が凝縮され、身長ほどもある真紅の槍が握られる。

おい、明らかに呪い付きだよな？

クー・フリーンって事はゲイボルクか。海の獣の背骨。呪物としては狙った心臓への必中、返し風は典型的な不幸というかなんとか。つりあいの取れた正統派の呪いの品。

「得物、つーか宝具は後ろの白髭か？」

「それもあるけど、アレ使ったら卑怯でしょ。」

空からビームの雨降らせるよ？ それに山が蒸発したら目立つし」
ランサーの柄の悪い、もとい鋭い男前な顔が引きつる。

「オイ、そんな事も出来んのかよ……」

「もつと凄いのもあるよ？ 範囲内の敵を問答無用で塵にするとか。見たい？」

「いや、いい」

はあつと微妙に気の抜けたため息をついて槍を肩に担いだ。

「あれ使わないでお前自身、接近戦って出来ないのかよ？」

「超得意」

十八番ですとも。

「それをしろ。ちつ、調子の狂う奴だな」

「まあまあ、そう言わずに。」

こつちは無手が得意なんで、いつでもいいですよ」

「そうかい。そりゃあ」

蒼い槍兵はスツと槍を下段に構え、

「よく言ったー！」

突撃してきた。

(流星は最速、速い。けど)

「様子見か？」

突き込まれた最初の一刺し。それをひよいと掴む。

「な!？」

「ふうん」

何で柄にこんな血管みたいのが出てんだ？ 邪魔じゃね？

「おっとー」

捕まれたままの槍をこっちの体に引つ掛け、体勢を崩しざま拳打を見舞ってくる。

顔を傾け拳を避け、槍を離して飛び退る。

「テメエ、槍兵の槍を掴みやがったな」

「いや、そんな怒らなくても。それにそっちだつてかなり手加減してるでしょ」

「チツ」

舌打ち一つ、すぐさま突いて来る。

今度は速い。

(取るのはキツイな)

秒間十発に届こうかという刺突。思考加速を加速。現在エイヴイヒカイトは蜘蛛を核に活動位階で駆動中。いける。

硬気を両手に集中、素手で閃光の如き穂先を片端から払いのける。ひたすら払う。突きを払い払い払い、次の突きをつて薙ぎ！ 此方が潜れない様に足を薙いでくる。脛すねに硬気と念の防御を固め一歩前へ、穂先ではなく柄を脛で受ける。

ゴンツ！ という撃音と共に槍が止まる。すぐさま引かれるが同時に此方も前進、相手の後退より此方が速い、懐に入り込む。

「ツシ」

空を挟りぬく右の二連から左の掌打！ 槍の石突側で上手く払われる。問題なし、そのまま更に懐深く潜り込む。が、槍兵はいち早く後ろに飛ぶ。容易に悪手となりうる行為だが、最も速き者として呼び出されただけある。単純に素早い。だが届く。追撃、潜り込もうとした動きからカットするようなフックを虚空へ叩き込む。

「おわっ!?!」

ミス。此方の動きから反射的に槍で防御、遠当てはその上から叩いただけ。

空中でバランスを崩すかと思っただけ、野生の獣、それも猫科のヤツを思わせる身のこなしで危なげなく着地。更なる追撃は出来ず。

槍を構え直し油断なく此方の動きを見ている。

「イレギュラーにも程があんだろ、ランサーの俺より速いつてのは。それにお前、俺並みの速さのヤツとやり慣れてるな？」

「ああ、ごろごろつて訳じゃないけど探せば居たからね」

「……………どこの人外魔境から出てきやがった、テメエ」

「ずっと遠い人外魔境からだよ」

睨み合う。

「ふう、止めよう」

構えを解く。

「おい、止めんのかよ？ せっかくノつてきたのによ」

肩透かしを食らったように、かくんと鬨気が霧散する。槍で肩を叩いて凄い不満そうな顔をしている。むう、さては戦い自体が大好きつてヤツだなこいつ。

「やめるよ。何でかそっちが本気でやらないみたいだし」

「チッ！」

なにやら物凄い忌々しそうに舌打ちされたよ？

ちよつと怯む。

「お前じゃねえよ。うちの腰抜けマスターに偵察だから全力を出すなとか言われてやがんだ」

心底苛立たしそうにガツガツと足で地面を掘り返している。

「俺の望みは全力でやり合える戦いだつてのに、クソツタレが！」

……………おい、お前未来の英霊だろ？ 名を名乗れよ」

「ん、ここ日本生まれの黒川冬理だ」

「聞いた俺も俺だが、ホントに答えるのかよ」

ランサーは呆れた目でこつちを見てる。脱力って感じた。

「まあ俺に害は無いしね」

「名乗りを受けたからには返すのが礼儀か、俺は」「待った」

「それはそっちが不利でしょ？ 代わりに一つ、教えてほしい事があるんだ」

「何だよ？」

「ここら辺の山でさ、潜り込めそうな廃屋か何か知らない？ 状態が良ければなお良し」

「いや、この質問でそんな怖い顔で黙り込まれても……。」

何か拙い質問だったのか？

ランサーが顔を上げる。

「ここからそう離れていない所に洋館がある。あそこの山の町側、中腹だ」

伸ばされた指の先には、それほど高くもない山が。そこそこ背の高い広葉樹が多いから隠れやすいかな。

「ありがとう、ランサー」

「いい。じゃあまたな。次に夜出会ったら全力でやり合いたいもんだ」

それだけ言うと、ランサーは霊体化して戻って行った。

「ヌル、付近に反応は？」

『ノー』

すぐさま外部スピーカーから返答が返ってくる。

「……ふう」

気が抜ける。

『マスター、お疲れ様でした』

「ああ、ありがとう。ランサーは気持ちの良いヤツみたいだな。が、後ろで覗いてたのが気に障る。あれがランサーのマスター、言峰綺礼とかいう神父か」

あの類いの視線を向ける相手は、大体において面倒臭いと相場が決まっている。

さてはて。

取り敢えずは、

「機体を収納してランサーの教えてくれた洋館に行ってみようか」

『私はどう致しましょうか』

「あー、興味、ある？」

『あります。出来れば端末を携帯して頂ければと』

「分かった」

空間を外と繋げ、せっかく造ったので機体を分解せずに放り込む。代わりに新しいヌルの端末として、漆黒の黒い掌サイズのキューブを持ち出した。これは各種センサーを内蔵し耐久性に非常に優れる代物で、どつかの時計ではないが、それこそ象が乗っても壊れない。試していないけどモバイルスーツでも壊れないだろう。

いつぞや他の世界で“ブラックホール入り小箱”を聞いたヌルが、面白半分に作り上げた代物のガワを利用したものだ。いったいどういう造りになっているのか、中から一方的に情報収集出来るという不思議物体である。

「ポケットに入れるには少しばかり大きいな——よし、こうしよう」

引っ掴んだそれを服をはだけて左胸に当てる。するとズブズブと黒いキューブは体の中に沈んでゆく。ゆっくりとそのまま見えなくなり、最後に手の平が撫でたそこには何の痕跡もなかった。

「即席の心臓代わりだな」

『感度も良好、ありがとうございます。サポートはお任せを』

「ん、頼りにしてる。じゃあ行こうか」

さて、これからの寢床があんまり酷くなければ良いんだけど。

Main Side 黒川冬理 out.

第参章 4 治療は人体改造から (F a t e 編) 十 魔術システム説明表

Main Side 黒川冬理 In.

「どうしようか、コレ」
『……』

ランサーに教えてもらった洋館には無事着く事ができた。若干ながら迷いそうになったが、そこはヌルのサポートに助けられて。

だが現在論ずるべきは些か怪しい俺の方向感覚ではなく、目の前には男装の女性についてだ。

いや。先客がいたのは問題じゃない。居る事自体には全く問題無いのだが、それが血の抜けた青白い肌をして、元血の海だっただろうどす黒く染まった床に転がっているとなると事情は違ってくる。不意でも襲われたのだろう、腕が綺麗に切り落とされている以外に抵抗の跡が見られなかった。

外傷はそのバツサリやられた片腕のみ。死因の方は、外傷性ショック症状で手当てが出来ず、そのまま大量出血で失血死といったところか。

「ランサーはコレを知ってたから、あんな難しい顔をしてたのか」

『彼の意図が不明ですね。このような死体、したい、……マスター』
「ん？」

『彼女、仮死状態でぎりぎり生きてます』

「——おやまあ。それじゃアイツは助けろって俺に教えたのか」

だったら最初からそう言えば良いのに。と、そう思わないでもないが、言わなかったところを見るにヤツのマスターが殺そうとして、それで仮死状態で生きてるのを知らないって辺りか。それに腕が切り落とされているって事は、令呪とやらを腕ごと奪われたからというのが妥当なところだろう。

となれば、そこまでランサーが庇うって事は、ランサーの元マスタアの可能性が高い。

ランサー自身、好んで策を巡らすタイプには見えんし、この女性を助けても支障は無いだろう。まさか殺人狂の血狂いとかじゃ無いだろうし。

そういう訳でベッドに運んで治療開始。

幸い相手は仮死状態。バランスを崩さないように弄る事にする。

まずは人体改造から。〃素〃を利用した存在変換で彼女の細胞に再生因子を作り出す。もちろん副作用を除いた最初期型だ。ついでに再生因子の活動に耐えられるよう、エンジェル特有の強靱な体に細胞単位で書き換えていく。

因子の活性化に伴ってかなりのカロリーが消費されるだろうから、そこは俺が外部から補給する。主にそこいらのボロい机とか変換して直接。

準備が出来たところで再生因子の活性化を開始。

見る見るうちに冷たかった体が人並みの体温を取り戻し、軽く飛び越える。通常これだけの体温になれば茹で人間が出来上がるだけだ。脳や細胞それ自体が耐えられないのだが、エンジェルの体は同じ炭素生命体でありながら、それに持ち堪えることが出来る。

進んだ遺伝子技術の賜物と言えば一言だが、人間から見れば同じ種族とは思えないかもしれない。

つらつら考えつつも、エネルギー欠乏を起こさぬよう逐次、元機の栄養素を投入する。

乾ききっていた傷口の組織が分解され、それすらも糧に腕が再生していくさまは、まるで植物のハイスピードカメラ映像の様。

やはり最初期型の再生因子は、副作用を除いてしまえば異常な性能だな。

やがて三時間もすると完全に指の先まで綺麗に生え揃った。体温の方も落ち着き、今は安らかな寝顔を見せている。

これでようやく一安心。

目が覚めた時、彼女は超人となっているだろう。

…何か目的とずれている気がするが、まあ良い。

残った素を使って毛布を構成、かけてあげる。ついで起きた時の為に水と食事としてシチューも生成するが、肝心の置く場所である机自体が分解されてコレに化けている事に気付いた。

さてはて、としばし迷った末に、ベッドの近くの床に書置きを残す事にした。鍋は持ったまま一階端の食堂へ。荒れ果てたキッチンの埃やゴミを分解、水と湯気を立てているシチュー入りの鍋を置いておく。

「コレで良しと。再生因子使った後は体調は悪いし、それ以上に喉が渇いて腹も減るからな」

やはり此処にも書置きを残し、自身が目をつけていた玄関から程近い一室に足を向ける。

入ってみれば案の定と言いますか、他と同じように荒れ放題だった。

手早くキッチンと同じように汚れを分解してしまう。

そのついでに、先程分解して出来た素と併せて一センチ四方の高密度キューブにしておく。

これは分解する為の予備として確保しておく為だ。幾ら素が何を分解しても、それこそ空間自体だとしても、手に入るとはいえ、分解しても構わない物の無い空中とかで戦う際に、そう幾つも幾つも空間に穴を開ける訳にいかない。

穴を開けるといふ事は、水に満たされた水槽の中にビー玉を落とす様な物だ。水の総量は変わらないがビー玉の分だけ水位は上がるし、それによってもしかしたら水槽から溢れてしまうかもしれない。

慎重に行動しないと世界に危機が訪れてしまうだろう。

「ま、素はこれで十分過ぎるだろうけどな。このキューブがあればMSがもう一機作れる」

質量保存？ エネルギー保存？

懐かしい言葉だ……

「それじゃ俺も寝るとしようかな。もう空が白んで来そうだけど」

自分用にもう一枚構成した毛布を羽織り、無造作に床へ転がった。人間なら固い床板で体が痛くなるんだろうけど、生憎とこの体は人間を真似した外世界の水、痛くなるような代物ではない。本来なら眠る必要も無いのだが、精神的に何となく眠った方が気が楽なのだ。けして二度寝の心地よさが忘れ難いのではない。

『お休みなさいませ、マスター』

「お休み、ヌル。変なのが来たら起こしてくれ」

『分かりました、良い夢を』

ふう、と息を一つ。

この世界に来てたった半日では色々あった。

明日はもつと沢山の出来事があるだろう。

蒼い槍兵とやり合ってみて、サーヴァントとやらが仁や塊クラスに戦える存在だと確信した。あいつ等と別れて以来の強者、それも近接戦闘で最高のエンジェルとタメを張れるほどの。

あの時は全力を出せなかった様だが、次に期待しても良いし他のサーヴァントを狙ってみても良い。

いっその事、俺に出会ったら終了みたいな位置づけで彷徨っても良い。

うん、そうしようかな？

(くふっ、だんだん楽しみになってきた)

興奮とは違う、静かな期待に心が躍る。

これから眠ろうつてのに、いやはやまってきた。

桂師匠の戦闘狂が移ったかねえ？

Main Side 黒川冬理 out.

第参章 5 世は情け、旅は道連れ (Fate編)

Main Side ??? In.

「ハア……、ハア……、ハア……」

熱い、体の内側が酷く熱い。

熱は体力を奪ってゆく。

だから、早く冷まさないと。

水……

水がほしい。

この乾ききつた喉を潤す為の、血が砂にでもなつたかのように重く熱い体を冷やす為の水を。

早く起きて探さないと。

起きないと。

起きないと、このままでは死んでしまう！

「ツはアっ——ゴホツゲホ、はっ、ゴホツごほっ」

グ、喉が、焼ける！

私はどれ位水を飲んでいない？

……駄目だ、意識がハッキリしない。

視界が霞み気持ち悪く揺れている。体も碌に動かない。

「み、みず——」

何とか声を絞り出すが、その酷く擦れたしゃがれ声に返答はない。

霞む目で周りを探すが、明るい室内には水も人影も、どちらもどこにも見当たらない。

もう頭には水の事しかなかった。

毛布も退けずに這い出そうとし、ベッドから上手く降りれずに、転がり落ちてしまう。

だが、その痛みも取るに足りない瑣事だ。

よろめきながらも立ち上がり、滅すべき亡者に似た動きでフラフラ

と扉まで動く。

途中で踏んだ何かが、足の裏で力がついた音を立てたが構わない。閉まっている扉のドアノブを両手で握り、なけなしの力で開く。

「……………」

何処かの廊下だろう、その廊下の空気に求めている物の匂いがあった。

生まれ持った資質と生と死を綱渡りするような常軌を逸した鍛錬によって、遙かな高みへと引き上げられた肉体が、その嗅覚で生命の維持に必要なエネルギーと水分の在処ありかを嗅ぎ分けていた。

再びよろふらと進みだす。

半ば壁に寄りかかり、体重を預けながら死なない為に体は歩く。

一分？

それとも五分？

普段なら例え寝ぼけていようが失わない時間の感覚が分からない。

両開きの、片側だけが開いている扉が目の前にあった。

匂いはこの中からしている。

入り口をくぐる。

食堂であろう、その部屋のテーブルの上。

そこに自分が、体が求めている物が載っていた。

「はあああ……………」

正気付いたのはそこにあつた物を食べ尽し、飲み干した後だった。

一家庭分はシチューが入っていた鍋は空になり、コップはそのまま、氷の浮いた水がたつぷり入っていたピッチャーだけが、中身を失い横倒しに転がっていた。

それから私はしばらくの間茫然自失となり、そのまま魂が抜けたかのように椅子の背凭れに寄りかかっていた。

危機的な熱量、水分の欠乏という状況から抜け出した反動なのだろうか？

それでも摂取した食物が栄養として吸収されるに従い、頭もようやく回ります。

「私は、生きているのですね……」

最初の言葉はどこか呆然とした、信じられないという響きをもっていた。

虚脱していた体に力を入れ、両の手を眼前へ持ち上げる。

両手共に違いはないが、服の袖が鋭利な切り口を見せてバツサリと無くなっている。

当然だ。

あの時、信頼していた相手に不意を衝かれて切り落とされたのだから。

ランサーと令呪を奪うついでに此方の反撃を封じる為だろう、令呪の宿った手の甲だけでなく、左腕を丸ごと肩から落とされた。

その場で後腐れなく止めを刺されなかったのは、放置しても助けを得られずに死亡するのが目に見えていたのと、ランサーが自身の鞍替えと引き換えに庇ってくれたから。

やり取りは朦朧とした意識の中でも聞こえていた。

覚えず、歯が軋る。

身が碎けるほどに悔しかった。

ランサーに止められたにも関わらず相手を信用し、あっさりと信頼を裏切られて致命傷を負い、令呪も奪われた。その拳句に立つ事も声を出すことすらも出来ず、共に戦おうと告げ、背中を任せられる相棒と言ってくれた憧れの英雄に庇われた。

何が歴代最強の封印指定の執行者だ。

持ち上げられた拳句に信頼する相手すら計れず、自分はこのザマだ。

しかし、後悔を幾ら噛み締めても時間は戻らない。

ランサーは言峰神父と共に去り、自身は大量の出血でもはや動く事すらままならない。

場所は山中の廃屋の一室。

とても死亡までの僅かな時間に助けが現れるとも思えない。

死にたくはなかった。
どうしようもない。

そんな状況になって初めて、心の底から、魂の全てが、死にたくないと叫んでいた。

執行者なんてしていれば、幾ら最強などと呼ばれてもいつかは殺されてしまう。

今まではそれでも良かった。

良いと思っていた。

覚悟が出来ていると思っていた。

でも、完全にここまで詰んだ状態で死を待つ時間が与えられれば、やはり死にたくは無かった。

それも今更だ。

死にたくない、そう繰り返すうち、やがて出血で鈍った思考すら維持できなくなり、成す術無く意識を失い死んだ。

そのはずだった。

だが、今自分の両腕は完全な形で変わらずそこにあり、体調は致命傷を受けて瀕死だったとは思えないほど、それこそ奇妙なほどに快調。

特に両腕だ。

完全な再生を遂げている。それも格闘を主体として戦闘を行う魔術師である私をもっとしても、ほんの些細な違和感すら感じ取れない。

まるで切り取られた事実など無かったといわんばかりに。

一瞬はあの蒼崎製の義手も疑ったが、義手はあくまでも義手。

自信の腕かどうか位は分かる。

それにしても、私を助けてくれたのはいったい誰なのだろうか。

唯でさえ欠損部の再生は大魔術。それに見合った魔力も消費する。

その上でこれだけの腕だ。

世界でもそうそうは居ない。

ましてや、此処は東の果ての島国。

まあ最近この国も、27祖を二人も葬る一般人が居たりとかなり物騒らしいが……

それでもだ、丁度良くこの町に居る高位魔術師と云ったら確実に聖杯戦争の関係者だろう。

それが何故私を助けた？

決して少くない代償を支払ったはず。

それに私、『バゼット・フラガ・マクレミッツ』の名は知れていても、その顔を知っている者はそうは多くない。

魔術師が、見ず知らずの人間を其処までして助けるだろうか？

(やはり直接会ってみない事には、どうにも分かりませぬね)

行動方針さえ決まってしまうえばそこは武闘派、行動に迷いが無い。

バゼットはすぐさま自身の寝ていた部屋へ取って返した。

すると探すまでも無く、部屋に入った所に若干皺のついた書置きが残っていた。

「何か踏んだような気がしたのはコレでしたか」

拾い上げてみる。

そこには、起きた時の為の食料をキッチンに置いておく、と書いてあった。

それだけだ。

一応部屋を探索したが、他には何もなかった。

それこそ埃一つすら。

廊下は廃屋らしく埃まみれにも関わらず。

魔術を使ったのだろうか？

汚れ取りに？

もしそうなら、奇人変人狂人を数多く知るバゼットからしてちよつと信じられない感性だった。

(これは素晴らしいほどの偏屈者かもしれない)

やや戦々恐々としながら、キッチンの探索に移る。

此処にもやはり書置きが残っていた。

元はテーブルの上に置いてあったのだろうが、夢中で食事をしている間に床に払い落としてしまったらしい。

手にとって見れば、そこには自身が玄関近くの一室で休養を取っていると書いてある。

また、治療の事で伝える事があるとも記してあった。

「とりあえず会ってみましょう」

未だ休養中かもしれないが、この町は現在聖杯戦争の舞台であり、一般人、それに魔術師にとっても危険な地。行動は速ければ早いほど良いに決まっている。

踵を返し、玄関へと向う。

玄関の直ぐ傍、人の気配のする部屋は簡単に見つかった。

扉の前に立ち、礼儀としてノックする。

しかし返答が無い。

もう一度ノックするが、やはり扉の中から動きは無かった。

(気配はする。寝ているのか?)

入るか否か迷ったその時、扉の中から硬質で突き通った、まるで水晶のような印象の女性の声で返答があった。

『入室を許可します』

起きていたか。

ほっとしつつつノブを握り扉を開く。

開いて——言葉に困った。

部屋の中央。

自分の寝ていた部屋と同じく、病的に綺麗にされているその床で一人の青年が毛布に包まって丸くなり、寝こけていた。

(声は女性ではなかったか?)

そう思うが、他に人の気配は無い。

潜んで此方を伺っているという訳ではなく、この部屋には彼以外の存在の痕跡が無いのだ。

彼女の戸惑いを察したのか、再びあの声が響いた。

『私は彼の使い魔のようなもの。今起こしますので』

納得する。

一応警戒させない為に部屋の端まで後退する。

恐らくパスを通じてやり取りをしているのだろう、やがて毛布の中で青年がもそもそと動き出した。

彼が私を治療した魔術師なのだろう。

年はだいたい二十歳を少し越えたくらいだろうか？

死徒で無い事は雰囲気で分かっているが、逆にこの年であれ程の治療術の腕を持つとは、正に資質を備えた天才なのだろう。

「ううん……。ぬるう、もう少しねてもいいじゃんよ〜」

——そう見えなかったとしても気のせいだ。

そう信じたい。

Main Side バゼット out.

Main Side 黒川冬理 In.

ヌルに起こされると、既に室内に助けた彼女は居た。

寝ぼけていた姿を見られたのだろう、何とも言い難い表情を微かに覗かせている。

「ヌル、近くに來たら起こしてっつていったよな」

『はい。ですので“近くに來てから”起こしました』

「……………」

コイツは……

悪戯なのか、俺の寝起きの悪さをつついているのかどっちだよ。お前の声分かり難いんだよ。

ったく。取り敢えずは置いていて、隅で所在なさそーに突っ立ってるあいつだ。

毛布を退けて起き上がる。

「えっと、それでアンタの名前は？」

「バゼットです。バゼット・フラガ・マクレミッツ」

「ばぜっとバゼット。ん、オーケー。」

で、バゼットさん飯は食った？」

まあ喰ってなかったらこんなしてられないだろうけど。」

「あ、はい。治療して頂いた事も含め、ありがとうございます」

姿勢を正し、真剣な表情で礼を言われた。

「はいはい。」

それで？ 俺はランサーに教えられて来たんだが、何であんな所で転がってたん？」

「ランサーが……そうですか。」

そういう貴方は、ランサーを知っているという事は聖杯戦争の関係者ですね？

分かりました、話しましょう」

「あー、要するに元仲間の不意打ち食らって令呪ごと腕もがれたと」

「はい」

裏切られた事にか、それともランサーへの申し訳なさか、どちらにしろやはり気落ちしているようだ。

表情が随分と暗い。

「ふむ、それにしても仮死状態にしても二日は経ってるのに良く生きてたね。よっぽど体鍛えてたのかな？」

「ええ、私も生き残るとは思っていませんでした。その事ですが、書置きに体について伝える事があると書いてありましたが……」

おお、それぞれ。忘れてた。

「君の体ね、腕無かったから新しく生やす事にしたんだわ。それで手っ取り早く君の体を、腕が生えて来る様な体に改造したんだ」

「腕が生えてくる、って——ちよっと待ってください！」

「なに？」

「それは私を死徒にしたという事ですか!？」

「は？」

しとつてなに？

この世界特有の生物だろうか。

でも腕があつて、もげても生えてくるってどんな生き物よそれ？

少なくとも人間がなれるような生物らしいが……

つーか、自然でそんなのいたら怖いよ。

「え？ 貴方ほどの魔術師が死徒を知らない？」

あ、やっべ、魔術師の常識だったか？

ちつ。そうだな、どうせ聖杯戦争の関係者だろうし、例の設定に手を加えて知らなくても良い事にしよう。

「いやいや、俺魔術師じゃないし」

「え!? いえしかし私の腕はこの短時間で直っている。科学技術はそこまで来ていない以上、魔術しかないと思いますが」

「俺は聖杯自体に呼ばれたサーヴァントさ。」

七騎のサーヴァントは出揃い、聖杯戦争は既に開幕している。その後には召還された八騎目のサーヴァントだ

という事にした。たつた今。

これならイレギュラーとして納得して貰える、かな？

「八騎目の、サーヴァント!? 聖杯に呼ばれたとはどういう——」
「どう言つたもんかな。」

俺には聖杯とやらの叶えて貰うような望みなんて無いのさ。ところが聖杯が七騎のサーヴァントを選んだ後で俺を見つけて、そんなもって何が気に入ったのか俺を強制的にこの戦争に送り込みやがたつて事。

お陰で召還主も居なければ、この時代の知識も殆んど無し。それでさっきの死徒つてのも分からなかったんだ。

それにそもそも俺、英霊とかいう幽霊じゃないしね」

あー、バゼット女史、頭が痛そうな顔して頭抱えてる。眉間に皺まで寄せてるや。

まあね。

イレギュラーにも程があるつー考えは俺にもわかる。全部あの黒いのが悪い。

バゼットの方は、万能の力を生み出す為のシステムであるはずの聖杯が、そのように自発的にイレギュラーを起こしたというのが、更なる頭痛の種なんだろう。

そんな事が起こったって事自体が、聖杯戦争のシステムの破綻を端的にハッキリと表しているのだから。

「……聞きたい事は幾つかありますが、まず英霊でないというのはどういう事でしょうか？」

「それは簡単。俺が生きていて生身だからさ」

あ、眉間の皺が更に増えた。

「……貴方は魔術師ではないと言いました。では私の腕を直したのはどうやってですか？」

「俺は数千年は未来の人間なんだけどね、その科学技術」

むう、バゼットがどうとう黙り込んでしまった。

そういうえば、アレをまだ教えてなかったな。丁度良いや。

「今思い出したんだけど、君に伝える事ってのはそれなんだ。

完全に違和感無く腕を再生させるには、君の体の方も弄らないとだね」

体を弄る。この不吉な言葉に先が何となく予想できたのか、バゼットさん顔色が悪くなってる。

「全身を細胞単位で書き換えたんだけだ。」

エンジェルって言う遺伝子単位で手を加えられた未来の改造人間だね。向こうだと一般人は殆んどエンジェルなんだけど、今の君と同じく人間より遥かに強靱な生命体だよ」

がつくりと膝を着くバゼットさん。

なんか『助かったと思っただのに……』とか『人間じゃなくなっただなんて……』とか、ぶつぶつと呟いている。今の彼女にタイトルをつけるとしたら、そうだな。『どうぞこ』なんてどうだろう？

にしても、リアルにこのリアクションするとは、面白いなこの人。

やがて自己の中で何やら決着でも着いたのか、ふるふると頭を振って両足で立った。

うん、膝が小鹿の様だったのは見なかった事にしてあげよう。

「エンジェルというのはどういう生物なのですか？」

お、前向きなのは良い事だ。

「まず身体能力が段違いだね。これに関しては君自身が確認した方がいいだろう。」

次に再生因子と呼ばれる因子を保有していて、体に穴が開こうが手足が切り落とされようが、自身の熱量の許す限り再生する。ああ、熱量の保持量自体も大きいな。

そして最後。先の二つと似ているけど、生命力が凄く強い。これを利用して未来だと格闘は気功がメインとなっている。そこらの格闘家でも生木を押し折り岩を砕くレベルだ

例を示すと——うん、アレでいいかな？」

右腕に錬気の陽炎を纏い無造作に腕を一振り。その場で虚空を打撃する。

その瞬間、部屋の壁一面にひびが入り、その中央は鉄球でも減り込んだかの如く陥没していた。

バゼットは流石に言葉が出ない様で固まっている。

当然だろう。20世紀の格闘家でこれ程の遠当てが出来る人間はいまい。

「今のが単純な遠当て。他にも発剄に浸透剄、硬気功に軽身功、果ては履水功まで多岐にわたる。アンタは直ぐには気功を使えないだろうが、身体能力と再生因子だけでも十分戦えるだろうな」

「未来では一般人で、それ程の事が出来るのですか……」

「そうだね。エンジェルならサイキックも多いし。」

俺はエンジェルとはまた違った存在で、あの世界では1・2を争う単体戦力だったんだが、こつちに来てランサーと戦った感じ、同じレベルの速度の奴らも向こうには結構いたしね。まあそれはあくまでアイツが手加減した速度だけで、技術は天地の差があるけど」

「最速の英霊に近い速さを持つ者が結構居た？——未来だから、と言ってしまうれば気が楽なんですけど」

まあまあ。

「君の場合は元の身体能力が非常に優れていたからね。あちこちに掛けられているブーストを除いても超一級だ。エンジエルの改変遺伝子との相性もかなり良いから、錬気が出来るようになればサーヴァントとでも戦えるよ。」

「ただし、宝具とやらはどうだか知らんけど」

「何かデメリットはあるのですか？」

うん、やっぱり自分の体としてそこは気になるよね。

ここまでメリットだらけだと逆にデメリットも大きいと普通は考える。

「あく、デメリットか。」

沢山食べるようになるのと、熱量の貯蔵が底をついてるのに再生因子を起動すると、熱量の欠乏でぽっくり逝っちゃう事くらいだな。後は寿命も何も皆同じ」

「——分かりました。」

改めて、命を救って頂いた事、感謝します」

硬い、硬いね。

律儀なひとと言えばそうなんだがな。

それよりもこれを聞かなきゃならない。

「これからどうすんの？」

「聖杯戦争に参加しようと思います。令呪が無い以上、他のサーヴァントと再契約する事も出来ませんが、それでもあのようにならなければたまたま去る事は出来ません。」

ほう、俺をサーヴァントとして頼るより先にその言葉が出るか。

いいね。

これは少し付き合ってみるか？

「ならさ、サーヴァントとかマスターとかじゃなくて、俺と一緒に行動しない？」

「それは——助かりますが、私はマスターにはなれません。魔力を含め貴方に渡せる物がありません」

「いや別にいいよ、その方が面白そうだし。それで護衛の対価にしよう。」

それに俺の知識の方も穴だらけなんだ。正直に言えば分からない事が多すぎる。助けてくれたら俺もありがたい」

少し考えていたようだが、どちらにしろ彼女には戦力が足りない。己の体の把握も済んでおらず、現状でサーヴァントと戦闘になれば命が無い。それはバゼットも解っているはずだ。

やがて顔を上げ、決然と此方を見る。

「貴方の申し出を受けましょう。それにこの聖杯戦争はおかしい。互いに生き残れるよう助け合いましょう」

にやりと少々意地の悪そうな笑みを浮かべ、利き手を差し出す。

これからよろしく、バゼット？ 聖杯なんぞ欲しくもないが、精々楽しませて貰おうや」

「ええ、此方こそよろしく。えつと……」

「ああ悪い、名は黒川冬理だ。クラスは無い。好きに呼んでくれ」
「分かりました、ではクロカワと。よろしく」

硬く握手が交わされる。

良いね、こういうノリ。

熱くなれる展開は大歓迎だ

あのクソツタレの聖杯なんぞに思うようにさせてたまるかよ。

Main Side 黒川冬理 Out.

第参章 6 殺害のち誘拐 (Fate編)

Main Side 黒川冬理 In.

さて、時刻は四時半、今俺はバゼットと別行動でこの町の学校に来ている。

あれから数日かけてバゼットの身体能力の確認と、以前との誤差の修正に付き合った。

驚いたことに彼女、エンジェルになった結果、仁や塊と同レベルまでその身体能力を高めていた。

「いったいぜんたい何をやってた人なんだ、魔術師ってアンタみたいな肉体派なのか？」と堪え切れずに問い詰めたら、どうも珍しい能力を持つている人を、問答無用で強制的にホルマリン漬けにして研究材料にする、そこらの通り魔より性質の悪いお仕事をしていらしたらしい。

……ほんと、この人なんで裏切られただけで憤慨してんだろう？

まあその合間に色々と魔術関係の知識を聞いていた。

その中でサーヴァントが魔力の塊みたいなものと聞いて、すぐさま実行した魔力探査で何箇所か引つ掛かった場所の中から、碌でもない事になりそうな場所の順に回ろうとしたのだ。

だがまあ、最初の一つ目から問題大有りで、どうしたものかと迷う有様。

(どこのバカたれただ、学校に捕食結果なんで張りやがったのは?)

若い魂をこっさり纏めて取り込めるから効率が良いのは判るが、やり過ぎれば協会やら教会から刺客が来るってバゼットも言ってたぞ。俺はともかく、魔術師であるマスターなら知ってるだろうに。

「いったい何を考えてんだ？」

とにかくこの碌でもない結果を排除しようとする。

「幾ら俺が殺し慣れたといっても、死ななくて良い子供が」巻き添えなんてくだらない理由で死ぬのは我慢ならん。

しかしこの規模でサーヴァントが仕掛けただろう代物。流石に楔くさび

の数が多いし、中心となる“要”^{かなめ}が見当たらない。大方のところサーヴァント本人がその役目を担っているのだろうが、厄介だな。楔を見つけ次第ちまちまと一つずつ分解していくが、気の滅入る仕事である。

そして学校裏の雑木林にあった都合六つ目の楔を分解し終えた、その時。

どくん

大気が脈動し、結界内の空気が赤く染まった。

生臭い。

肉食動物の口腔の匂い。風が血臭を孕む。

「ちっ、発動しやがったか」

幸いにして下校時間は過ぎている。若干ながらも校内の人間は滅っているはずだ。

「このまま楔を分解するのは得策と言わんな。となれば……」

“要”が無かった以上、結界が発動したからにはそれを代行するサーヴァントが結界内に居るはず。

生徒の息がある内に結界を構築したサーヴァント、もしくはそのマスターを殺害する。サーヴァントが乗り気だかは知らんが、こんなクソツタレな真似を命令するマスターは問答無用で首を跳ね飛ばしてやる。

幸いにも、それなりに崩していたお陰で結界も万全ではない。十分かそこらは時間があるだろう。しかしそこに後遺症等も考慮すれば五分が良い所だ。急ぐに越したことは無い。

のたのた走って探す時間が惜しい。

(Yetzirah)

「形成」^{イエツラ}

エイヴィヒカイトを形成位階へ。

ビシビシと音を立てて両手足を構築している聖遺物“蜘蛛”が、その姿を禍々しく変えてゆく。

そして、これだけでは足りない。

今必要なのは速さ。

何よりも速く駆け、例えこの結界内のどこに相手が隠れていようとも一瞬でその命を刈り取れるだけの速度を求める。

ガチリ、と

核とする魂を入れ替える。

その魂の渴望は“この刹那を永遠に”^{タイプ}。
型は求道型。

その速度は己の感情によって左右される。

だから強く、ひたすらに強く願え。

この一瞬を一秒に、一秒を一分に、一分を更に長く、そして刹那を永劫としよう。

「Die Sonne toent nach alter Weise
In Brudersphaeren Wettesang.
」

日は古より変わらず星と競い

「Und ihre vorgeschriebene Reise
Vollendet sie mit Donnergang.
」
定められた道を雷鳴の如く疾走する

「Und schnell und begreiflich schnell
」
そして速く 何より速く

「In ewig schnellm Sphaerenlauf.
」
永劫の円環を駆け抜けよう

「Da flammt ein blitzendes Verheren
」
光となって破壊しろ

「Dem Pfade vor des Donnerschlags;
」
その一撃で燃やしつくせ

「Da keiner dich ergründen mag,
Und alle deine hohen Werke」
そは誰も知らず 届かぬ 至高の創造

「Sind herrlich wie am ersten Tag.
」

我が渴望こそが原初の荘嚴

(Briah——)

「創造」

(Eine Faust Ouverture)

アイン・ファウスト・オーベルテューレ

「美麗刹那・序曲」

「時よ止まれ、お前は美しい」

軋みと共に聖遺物がその形をより鋭角に、奔る蘇芳は鮮血の真紅へと。

そして、世界の全てが減速してゆく。

いや、これは己の意識の加速。

渴望が深ければ深いほどに時は切り刻まれ、俺はその刹那を駆け抜ける。

踏み出した一步が大地を割る。

そうだ、これを言わねばなるまい。

——血が欲しい——

「チツ、外じゃねえな」

校舎裏から山裾へ広がる森林を探し尽くし校舎へと向かう。

こういうバカをする奴は昔から高い所が好きという。

一階から探すより上から探す方が「当たり前」が居る確率が高い気がした。

林から飛び出し着地しざまに足元の地面を宙へと足で抉り飛ばす。大きく吹き飛んだ土砂がすぐさま減速し、空中で停滞した。

俺はそれを足場に空へ駆け上る。

最後は跳躍して屋上に着地。

見回すが、敵影は発見できず。

扉を粉碎して校舎内へ突入する。

そして四階から三階へ降り直線廊下へ出た時、その先について標的を発見した。

人数は六人。

制服を着た男二人に女一人、サーヴァントらしき男一人に女二人。

制服姿の赤毛の男が紫の髪をした女のサーヴァントに押さえ付けられ、その隣に制服姿のもう一人の男がイヤらしい笑みを浮かべて立っている。

人質に取られたのだろう、制服の女と鎧を着た男女のサーヴァントは隙を窺うかがっている。

ああ、判り易くていいな。

突進。

加速した世界で廊下の端から一気に駆け抜け接敵する。

此方に背を向けていた蒼いドレスに銀の鎧を纏った女のサーヴァントが、刹那で背後まで接近する気配に反射的だろう、その手に握った見えない何かで斬りつけてくる。

だが、鈍い。

ノロい。

それに標的はアンタじゃない。

横殴りに斬り込んできた斬撃。

加速した意識で見えないその軌道を慎重に見極め、身を低くし確実に下を擦り抜ける。

このサーヴァント以外は知覚すら出来ていない。
もはや標的は目前。

気付いていないのだろう、顔には変わらず嫌悪を催す^{もよお}表情が張り付いている。

容赦はせず。

“穴”から剣の聖遺物を抜きざま、その細首を斬り飛ばした。

創造を切る。

駆け抜けた背後、どすつ、と頭が落ちる音が響く。

突然の事態に人間二人と女のサーヴァント二人は呆気にとられ、唯一赤い軽鎧を着込んだ男のサーヴァントだけが即座に此方へ攻撃の態勢を取る。

静寂の一拍。

そして血が、噴き出した。

「う、うわあああああ!! 慎二、慎二!!」

首の血管にある弁が振動する、いやに心に残る音。

狭い空間を染めるほどの血霧。

立ったままの体と、濡れそぼるほど顔に血を浴びて正気に返ったのか、それとも逆に錯乱したのか、人質に取られていた男が喚^{わめ}き出す。

それを無視し、聞くべき事を優先する。

「紫の髪の女、お前はそこの元人間のサーヴァントだろう。この結界はお前の意思か?」

「い、いえ。ちがいます」

眼帯をした女は、狼狽した様子ながらも答えた。

ふと覚えのある匂い、いや、何か曖昧なものを感じたが——まあいい。

「なら、マスターはもういない。さっさとこの捕食結界を解け。

ああ、理解してるとは思うが——逃げられるなんて思うなよ?」

「……………」

すつ、と結界特有の閉塞感が無くなり、漂っていた赤いもやが消え

去る。

これで良いだろう。

この短時間なら始めから重傷でも負っていなければ死にはしないはず。

と、そこでさつきからぎやあぎやあと煩い男が、何故かこちらに殴り掛かってきた。「シロウ!」とか言って、咄嗟に先程の鎧を着たサーヴァントが抑えたが、どういう事か敵意に染まった表情で睨みつけてきた。

「なんで慎二を殺した!!」

……は？

「いや、悪い。余りにも予想外の言葉に驚いただけだ」

「予想外だつて!?!」

訳がわからん。名前を呼んでるあたり知り合いだったんだろうけど、コイツはともかく、あつちはこの赤毛の事を大事にしていた様に思えん。人質にしてにやけてたし。

「殺すのが悪いっつーが、じゃあお前どうしろって?」

「話し合って止めさせれば……あいつだつて!」

「ふーん。で、その話し合いつて何分かかんの? 会話つて時間掛かるよ?」

赤毛の少年改めシロウ君は、ぐっ、と言葉に詰まった様子。

「状況が見えてないみたいだから言っとくぞ。お前の言う話し合いつてのに使われる時間はな、そこら中に転がってるガキ共の血肉で払われてんだ。他人の命で勝手に賭け事なんかすんじゃねえよ」

「それでも! 何も殺す事はなかっただろう!」

うむ。理屈ではない、という理屈なのだろう。

困った事にこの手の輩は、往々にして己の中で完結してしまっている。

それが幼い考えか大人の結論かはさておいて、彼らは容易に変わらない価値観を持つから、それに反する価値観を容認できない。容認しようとする思えない。

そして、理解しようとする考え付かない。

こういうの相手は、真つ当話すべきじゃない。

ここは人に押し付けるか？

「うるせえな、人質に取られて時間を無駄にしたっぽい奴が文句つけんな。そういう戦いの状況判断は自分のサーヴァントに教えて貰え。せつかくの英雄だ、戦場は腐るほど見てきてるだろうよ。特にその赤い男、そいつにでも教えて貰え」

浅黒い肌に白髪の手ヴァント。こいつが一番血脂の匂いがする。雰囲気もそうだ。

こういうタイプはやりあうと厄介だ。気付いたら嵌められてました、とかなりかねん。今も油断など欠片もなく此方を窺がっている。隙があれば躊躇無く殺しに来そうだ。

「さて、そこの。聞きたい事があるから付いて来い」

そう、結界を構築していたサーヴァントを招く。

こうしようもない事で英雄英傑の一柱が脱落したなど、面白くないにも程があらう。

それに——先的感覺は気になる。

物にならともかく、人物に覚えのある感覺を抱くなど、些かならず興味深い。

しかし彼女は困惑したような、決めかねるような態度だ。

ここに残れば、他二人の手ヴァントに襲われるのは目に見えていよう。わざわざサーヴァントの身に落ちてまで望むものが何か、俺は知らない。だがここで消えても、という様子とは違うように見受けられるか？

だが、首を捻ったのは僅かだった。

彼女の魔力供給の経路とやらが、転がった死体に繋がったままだと気付いた。

(これは——死んだら契約解消って話なんじゃ?)

何か仕掛けでもあるのかと倒れ伏した身体に近付こうとすると、赤と蒼の手ヴァントが身構え、その後ろで黒髪ツインテールの少女が指に宝石を挟んで此方へ向けた。おそらくあれが魔術の触媒なのだ

ろう。目の前で首が飛び、血が噴き出したというのに気丈なものだ。「調べたい事があるだけだ。死体をどうこうする趣味はないから渡してくれないか？」

此方の言葉に少女のサーヴァント、シロウとかいう赤毛にセイバーと呼ばれていたな。となると見えない武器は剣か？ とにかく彼女がツインテールに窺うようにチラリと視線を送る。

「駄目よ」

「駄目だ」

少年少女がにべも無く答える。

「そもそも貴方は何？ サーヴァントかと思っただけどステータスが見えないわよ？」

「こつちの要求は通さずに自分達だけ質問するとはね。いやはや、魔術師が聞いて呆れる」

バゼット曰く、魔術師は等価交換が基本だそうな。

「うぐつ、じゃあ答えてくれたら調べるだけなら良いわ」

「遠坂!？」

シロウくんが何やら言ってるが無視しよう。彼とは交渉が成り立たん。

そして彼女はトオサカ、多分、遠坂というのかな？

苗字だろうが、呼び方が分かったのはありがたい。

「ふむん、人間が出来てるね、遠坂さん。取り引き成立だ」

「ただし！ ここで調べたらすぐに遺体は引き渡しなさい」

本当に人間出来てるね。

君、その年で苦労人かい？

「オーケーオーケー」。

俺はサーヴァント紛いの人間モドキだよ。八騎目のサーヴァントとして呼ばれたが、まだ生きてるのに強制的に召還されたって訳だ。召還主は聖杯自体なんでマスターなし、俺も願い事なんて無し」

俺の言葉を聞いて遠坂さんが頭を抱えている。

あ、あの時のバゼットと同じリアクションだな。

「ま、そういうこつた。今ので分かったと思うが、聖杯戦争のシステム

はオシヤカになつてる。必死に殺しあつたところで、出てくるのは間違いなく碌でもないモノだろうよ」

かりっ

遠坂さんがその整えられた爪を噛む。

セイバーの少女も何かに絶望したような表情をしている。が、同じサーヴァントである赤い男はまったく表情が変わっていない。あれは予想がついていたからか？ それとも俺と同じように願いが無いのか？

だが英霊は叶えたい願いがあるからこそ、わざわざ召還に応じて現界している。願いが無いとは考え難いが……さて？

「じゃ、調べさせて貰うぜ」

相手方のサーヴァントが退く。

とりあえずうつ伏せなのをひっくり返し、両の手の甲をみた。

「やはり令呪とやらは無いか」

手の甲は両腕共に傷一つ無い。ましてや変な形の痣は影も形も無し。

魔術で隠蔽つてのはあるが、死んでからも効く様な強力なヤツはコイツに使えるとは思えん。

だとすると——ここか？

制服の前を開き懐へ手を突っ込む。

探すまでも無く固い物に指が触れた。

引っ張り出してみると、ああ、これで当たりの様だ。

ブツは黒い装丁の一冊の本。持った瞬間から紫髪のサーヴァントとのパスが、目の前の死体から俺に移った。

これがマスター代わりになるんだろう。彼女がここを離れられなかった原因だな。

「用事は終わったぞ」

本を持ったまま死体から離れる。

しかし案の定、手の本を見咎められた。

「ちよっと、その本はなんなのよ？」

「気にすんな」

「気にするわよ！ それ、置いていきなさい」

こいつは気が強いな。戦力差が計れないとは思えんが、それでも啖呵を切るとは。

だが残念だ。

いつもどつたら譲るんだが、ちと、あのサーヴァントに話を聞いてみないとこのモヤモヤが晴れないのだよ。それでは安眠できんからな、俺の睡眠のために涙を吞んでくれ、フハハハ！

ゲフンゲフンツ。

シリアスばかりだと拒絶反応が起きてイカン。

何にしろ、この本は渡せんな。

「馬鹿言うな。これはこのロクデナシを仕留めた俺の戦利品だ。勝つたら奪い、負けたら奪われる。世の中の基本だろう？」

おーおー、またシロウとやらが怖い目でこつちを見ちやって。

他の連中も一気に殺気だったな。

ま、良い。

あのサーヴァント達とやりあうのも楽しそうだけど、今はこちらが優先だ。

「行くぞ」

紫髪に一言声を掛け、ひよいと抱き上げた。

ん、大丈夫だな。

身長が高い分抱え辛いが、すらりとした体軀は見た目ほど重量を感じさせない。

「はい!? ちよ、ちよつと待つてくださいい!? 走れますから降ろして下さいい！」

「問答無用！」

猫か何かのように無造作に抱えられ、慌てる女。

それを両手を使ってガツチリと拘束、もとい抱えなおす。

「じゃあな、おさらば、アディオス！」

「……はっ！ 待ちなさいよアンタ!？」

ちっ、この女との寸劇で呆けてたのに再起動しやがったか。

仕方ない、おまけをくれてやるか。

窓から背中から飛び降りざま、声をかける。

「俺の事を聞かせろって言ったろ？」

おまけをやるよ、俺はあの白髭のパイロットさー！」

「貴方はずいぶんと意地が悪いのですね」

いやはや、あの顔は見ものだったな。

何て考えながら走っていれば、諦め顔で抱かれていた女が呆れて零した。

「いやいや、年寄りが若者をからかうのは世の常ってヤツさ。これも若者の成長の糧ってね」

諦めに呆れが足されたため息をバツクに、くつくつと笑いが漏れる。

いやはや、聖杯戦争というが、マスターにも面白いのが沢山いるもんだ。

なおさら楽しみになってきた……

Main Side 黒川冬理 Out.

Seal's Story : 圧倒的

とある日、世界の幾つかの国の首相宛に連絡が入った。

それは一通のメールだった。

怪しい事に、本来下から上がる筈のそれは、あらゆる防御や監視を掻い潜ってプライベートエリアのデスク、あるいはベッドの上へと届けられた。

文面は長くない。

本題は簡潔と言っても良かった。

『貴国の戦力と演習を行いたい。』

我が方は私有する艦隊戦力のみであり、実戦経験を積ませる目的である。

引き換えに此方は、貴国へ国家予算相当の物資を提供するものとする。

交渉の意図があるならば、下部へサインを』

悪戯としか思えない、実に馬鹿げた内容だった。

しかし国としては『悪戯だろう』で済ませる訳にはいかない。

このような真似をしてのけた犯人を捕らえなければならず、またその手法も判明させなければならなかった。仮に犯人の目的が暗殺だったならば、それは成功していたも同然なのだから。

調査の過程で、手紙は科学技術によって徹底的に調べ上げられた。

置いてあった場所。

そこへ到達しうる経路。

全てもまったく同じに、塵一つ見逃すなど調査された。

しかし、結果は芳しくなかった。

あらゆる調査は“アンノウン”と結論し、超能力染みた推察を立てるのが関の山だった。

そして暗礁に乗り上げた調査は、更に踏み込んだ方法を取った。

手紙の下へ、文面にあったように、サインを書き込んだのだ。

勿論首相のものではない。まったくの別人のものだ。
しかし反応があった。

ただの紙でしかない筈だったのに、そこへ記された文面が独り
に、見る間に消え去り、新たな文字が表れたのだ。

『交渉を』

やはり短い、簡潔に過ぎる一文。

そこから話は進んだ。

交互に、紙に文字を書き、文字が表れるのだ。

結論から言おう。

演習は数力国の合同演習と表向きの形を整え、実現される運びと
なった。

決め手はやはり対価として明記されていた物資である。

交渉にて、当然の如く話は難航した。信頼を持たぬ手紙の送り主側
は、まず相手に真剣に交渉するに値する「何か」を示さねば話になら
ない。

当たり前の如くされる追求に、だがその口を問答無用で閉ざしてみ
せたのは『前払い』として支払われた半金だった。

それらは国々によつて種々様々であったが、レアアース、レアメタ
ルを皮切りに、希少で高価な地下資源が文字通り山と出現したのだ。

これは単なる国家予算相当額どころの話ではない。

外国からの輸入、あるいは自国土での採掘・精錬、そういったコ
ストが丸々浮き、更には有効活用による自国企業や技術発展が見込め
る。政府としても企業へ不必要分の売却を行う事で莫大な利益が見
込め、かつ新しいコネクションの開拓も進むだろう。

そして、残りの物資もスイス銀行の貸金庫へと、時限解凍で預けら
れているという。つまり演習の結果がどうあれ、残りの半分も手に入
るという事だ。

これで領かない訳が無かった。

そして小さいながら、もう一つ理由があった。
相手方の戦力だ。

『艦隊戦力』

政治家によらず、この戦力は聞く者を侮らせるものであった。

現在の国家戦力と呼ばれるものが、大艦隊でも航空戦力でも無くなったのは市民にすら明確な世界的事実である。艦隊などと、実に古臭く、非力で、新しい時代が幕を開けて十と数年を経た今、それらは前時代的と評される代物でしかなかったのだ。

そして後の交渉で取り決められた規定にある『こちらの艦隊の全滅をもって、演習の終了とする』との言が、そこへ一粒の説得力を添えていた事も忘れてはならない。

無論、いくら面白い話とはいえ、これが怪しい話には違いない。この文面を馬鹿正直に信じる者は一人としていなかったが、しかし事を進めると決めた以上、疑っても仕方が無いのもまた、事実であった。

高空を飛ぶ影があった。

航空機の類ではない。それはもつと小型な、より正確に言うならば『翼を備えた人』に近いシルエットをしていた。

何らかの信号に、その頭部に当たる箇所が動く。

その有機的な動作から、この機械が有人である事が伺えた。

しかし有るはずの推力を生み出す機器が見えない。ジェットではなく、プロペラでもなく、恐らくそういった技術的な頸木を一段超えた機構にて飛行しているのだ。

金属で構築されたメカニカルな翼がやや窄まり、高度が下がる。雲の無い空を、俊敏な鷹のように照り返しが滑り落ちた。

現代の海軍には、戦艦は存在しない。

時を選ばず、陸海空の場所を選ばず、理不尽な暴力を備えたユニットが戦力という単位を席卷しているからだ。

現在の海軍はその母艦としての役割に毛が生えたようなものでしかなかった。

十を超える国家軍の前代未聞の合同艦隊が海域に到着してより、半日。

偵察任務に従事していたユニットから報告が入る。

『海上に濃霧の発生を確認』

すわ問題の艦隊が発見されたかと色めき立った者が期待外れと吐息を吐き、一部の者はそれに気付いた。

霧だ。

天候は晴天。

それも数日前より続く晴朗であり、水域も温暖な海域。とても濃霧が発生する状況ではない。

即座に更なる偵察が飛び立った。

原因は、やはり予期したものだ。

霧に包まれるように大艦隊が存在したのだ。

おそらく何らかの装置によって霧を発生させているのだろうと予測された。そして、それが現代戦力への対抗措置の一つではないかと。

もしそうだとすれば、それはあまりにもささやかな抵抗ではあるが、相手方の戦力と演習の目的、規定からすれば分からないでもなかった。

しかしいくらか興味深い報告もあった。

あれだけの大小戦艦群、更には海中に観測された潜水艦群。ピケツト艦などの小型艦も含めれば優に二百隻を越す艦船が、いったい何処で建造され、何処から現れたかが不明なのだ。

何百という監視衛星には突如霧が発生したとしか映っておらず、始まりとなった手紙の謎の技術と併せ、乗り合わせた各国の政治家、軍

人、技術者の注目を集めた。

と、同時に、ようやく捉えられたそれら艦隊もまた、実に謎に溢れていた。

実際に目の当たりにした軍人の一人がこう零している。

『まるで軍艦の博覧会だ』
と。

そこには過去、第二次世界大戦期より建造されてきた様々な艦があった。

国籍も大きさも様々で、アメリカの超弩級戦艦『ノース・カロライナ』、現在に至るまで世界最大の記録を持つ日本の超弩級戦艦『大和』、ドイツにおける最初にして最後の超弩級戦艦『ビスマルク』といった世界的に有名な、しかし今からすれば鼻で笑うしかない大艦巨砲主義が巨体を並べ波を蹴立て、そのそれぞれ周囲を、戦艦、巡洋艦、駆逐艦、フリゲート艦といった戦闘艦が取り巻いていた。

それらの船は、全て、とは言わないが、ほぼ全てと言っていいほど、過去に退役や撃沈によつて現在に残っていないものばかり。

観測された限りの外観では新造艦としか思えず、手紙の主に対する謎は一層深まるばかりであった。

そして、演習という名目の戦いが始まる。

力で旧世代を叩き潰し、世界に己を最新最高と証明した万能型機動兵器『IS』と、

旧世代とされてより更に以前の兵器の。

最新鋭が襲い掛かり、ロートルがどれだけ抵抗できるかという。得難い経験に狂喜する猛禽が、次々と空へと舞い上がり――

各国が初めて聴く肉声が、開戦の言葉を告げた。

『霧の艦隊、前へ。』

望んだ経験値だ、存分に貪れ』

第参章 7 蛇 (F a t e 編)

現在、我等がアジトにてバゼットと合流、サーヴァントから情報を聞いていた

「ふむふむ、クラスはライダーで真名はメドゥーサと」

「はい」

「この書は？」

「前マスターに令呪によって、マスターの権利を魔術師ではない彼に移譲された際、令呪の代わりに出現した『偽臣の書』です。持つ者へマスターの権利を譲渡する事が出来ませんが、ステータスがランクダウンします」

「前のマスターってのは誰？」

「……………」

様子から見るに答えられないじやなく答えたくない、か。

大体こんなところかな。

「あ、この書は燃やしたら元のマスターに戻るのか？」

「はい。おそらくですが」

偽臣の書で仮マスターになっているとはいえ、ライダーは必要な事以外に口を開こうとはしない。今も勧めた椅子に腰掛けもせず、黙然と立っている。

いやはや、話を聞いてようやくあの感覚の正体が分かったな。まさかこの美人さんが蛇の類いだとは思わなかった。だがそう聞かから改めて集中してみれば、成程、人外特有の匂いこそ比較にならないがメルクリウスと似た感じがする。性格の方は似ても似つかないようだがな。

流石に俺もこんな所で蛇の眷属に会うとは思わなかった。

それにしてもメドゥーサとは……

メドゥーサといえばゴルゴン三姉妹の末女。

非常に美しい容姿を持ちポセイドンと恋仲だったが、アテネの神殿

で幸せに逢引していたのが不幸の始まり。戦神であるアテナの激怒に触れたのだ。

まあこの女神、処女の誓いを立てた処女神として崇め^{あが}られてはいるのだが、お陰で恋愛系のお話しは一切無い。それどころか、逆に妻のアフロディーテと不仲で欲求不満だったヘパイストスに襲われ、追い回された挙句、一週間溜めたアレをかけられるという、ある意味壮絶な逸話しかないのだ。

この時羊毛でそれを拭って捨てたら、そこからエリクトニオスという下半身が蛇の子供が生まれ、アテナに育てられた後、アテーナイの王となる。彼はヘパイストスの鍛冶場で修行しギリシア戦車を生み出すのだが、それは蛇足である。

こんな女神だ。自身の膝元でのデートがいろいろと気に障ったらしく、ちよつと尋常ではない事をやりだす。

その美しかった容姿を化け物へと変えてしまったのだ。しかも他者がその顔を見れば石になってしまふという呪いつき。これでは性格で勝負なんて事すら出来ない。

しかも今度は逢引一度でこれはあまりに酷すぎると、アテナに直訴した二人の姉が気に食わなかったらしく、妹と同じく美しかった二人をいきなり豚に似た永遠に死ぬ事も出来ない身体へと変えしまふのだ。

惨すぎる話である……

しかしそこで追い討ちをかける戦神というよりは嫉妬の神アテナ。人と離れ、小島の古い神殿に引きこもった三姉妹。その末女の石化の呪いがかかった首を盾につけたら凄いんじゃないやね？ とか、凄いどころか、死体すら辱めてやろう的な素晴らしく外道なことを思いつく。即座に付近で有望な若者であるペルセウスくんの夢に現れ、“化け物だから殺して首を取って来て。盾につけるから”と頼み込む。

まさかその女神が化け物にした黒幕とは想像だにしないペルセウスくん。

アテナとヘルメス神から装備を借りて神殿へと侵入し、引き籠もって寝ていた三女の首を躊躇無く切り落として殺害する。その後、怒り

狂った姉達に追われるが、装備の力によって逃げおおせるのだった。かくして彼女の首はこのあと、ペルセウス・アテネの二人に存分に利用される事となる。

幾つかパターンはあるが、総じてアテナの過剰な行為があまりにも酷い話である。

ギリシャとかの神話は酷い話が多いが、これはその中でも指折りだ。

此処で会ったのも何かの縁。

ここは一つ蛇に恩を受けた者として、ぜひとも彼女の願いに協力してあげたい。

「決めた」

「？」

バゼットが訝しげにこっちを見、メデューサは立ち尽くしたままだ。

俺はメデューサを、その眼帯に隠された彼女の目を見詰めて言った。

「メデューサ、君が何を願って召還に応じたかは知らない。けれど、この聖杯システムは完全におかしくなっていて、万能の杯など到底望めない。

だが幸いな事に、此処には俺がいる。君達“蛇”に縁があり恩を受けた俺が。

だから君の願いは聖杯ではなく、俺が叶えよう」

「なっ!？」

「ちよ、ちよっと待ちなさいトウリ！いきなり何を言ってるんですか!？」

サーヴァントを尋問していたはずが、何故か相方が相手に協力すると言い出し混乱するバゼット。当たり前だがな。肝心の彼女にとってもこれは予想外の言葉だったのだろう、これまでの無表情が崩れ、狼狽した声を上げて戸惑っている。

「昔に“蛇”に親切にされてね。少しは返したけど、彼は死んでるか

ら。

ここでメデューサ、蛇の眷属である君に出会ったのも何かの縁。彼に返せなかった恩、受け取ってはくれないか？」

「そのような事を言われても……受け取るのは構いませんが、貴方は私の願いがどのような物かも知らないでしょう。なのに叶えると言うのですか？」

若干落ち着いたのか、微かに困惑した様子で聞いてくる。

疑うのも分かる。なにせ相手は英霊になっていない生身であり、それどころか聞けば世界との契約もしていない為に、そのバックアップすら受けていないのだ。こんなのが英霊の望みを叶える等と言い出したら、普通は笑い話にしかない。

それでもこれが、力が欲しくてライダーを引き込む為の罠だと考えないのは、学校での一撃で、英霊でもなく世界のバックアップがある訳でもない、唯の生身のはずの俺がサーヴァントを上回る戦力と判断したからだろう。

彼女からすれば、この申し出が真実なら、どうやってかは分からないが偽臣の書で弱体化した自身にも願いが叶う目が出てくる。話しが旨過ぎるだろうが、かといって捨て置くには得物が大きい、そういったところか？

「叶える。例えその願いが君達姉妹の呪いを解く事だろうとも、この名に賭けて叶えよう」

呪いを解く。その言葉に彼女は僅かに反応した。

「本当に、そんな事が可能なのですか……？」

メデューサは己の耳を疑った。

問い返すため搾り出した声は震えていた。

それは可能性すら無い望みだった。

相手は神だ。戦って勝てる相手ではなく、例えそれが非情な仕打ちだとしても耐えるしかなかった。妹を助ける為に直訴した二人の姉も醜い不死の怪物へと変えられてしまった。ペルセウスに首を刈ら

れて死んだ自分はまだ幸運だったのだろう。姉達は怪物と成り果てた姿で死ぬ事すら出来ず、今も世界のどこかで苦しんでいる。

それをこの男は救えるというのだ。

神の呪いを解く事が出来るというのだ。

「勿論、解けるとも。神の呪い？ それがどうした。

生憎と創造神を墮としたこの身、たかが戦神の畑違いな呪い如き解けぬ道理が無い」

創造神を墮とした。

このあまりの、どう考えても狂人の法螺にしか聞こえない言葉に二人は唾然としている。もつともバゼットは、魔術すら知らない唯の未来人だと思っていた相手が、まさか世界を創造した存在なんていうオカルトの頂点と、関わりがあると聞いたのもあるのだろうか。

「初耳ですよ、トウリ」

「それは、本当ですか」

「そりゃあ言ってなかったからね。

それに本当だからこそ、聖杯がわざわざ未来から生きてる俺を呼び出したんだらうね」

聖杯に英霊ではなく唯人ただひとが選ばれた。それは聖杯システムに異常があると分かってなお確かに説得力があつたのだろう、綺麗な顔が二つとも信じられないといった表情を見せている。

証拠でも見るかい？ と言つて、ぽんと聖遺物として使っている“神の腕”を出してみせた。

その目が潰れんばかりに光輝く黄金率を体现した腕は、創造神の凋落ちようらくに従いその神性を減じているが、それでも直視してしまえば魂が砕け散るだろう。海神と交わり神性を持つメデューサならともかく、バゼットには危険な為に重ねて神性に対する封印を施してある。

「」

魅入られると悪い。さつさと仕舞うに限る。

無造作にむんずと掴み上げて“穴”に放り込む。

目の前から消えた事で正気に返ったのか、二人とも夢から覚めたような顔をしている。

それぞれがほうっ、っと溜息をついて強張っていた身体から力を抜いた。

若干ながら魂レベルで惹かれていたようだ。

この深度の影響なら、少なくとも俺の不意を突いて奪おうという邪心が沸き上がったりもしないだろう。二人とも己を律する事には優れているようだし。

「これは……、とてもではありませんが魔術協会にも聖堂教会にも報告できませんね。世界中で奪い合いが始まるのが目に見えている」

と言つてバゼットはぐつたりとソファーに沈み込み、メデューサの方はぼすんとやけに可愛らしく椅子に座り込んで、俯うつむいて真剣そうな様子で考え込んでいる。

やがて決心がついたのか、顔を上げて此方を向くと深々と頭を下げた。

「お願いします。私に力を貸して頂きたい」

「任せろ」

さて、呪いを解くは良いが他の姉達がどこにいるやら？

幾ら解ける呪いといつても、流石に見た事が無く何処にいるのかも知らない相手はどうしようもない。この時代に居るなら良いが、場合によっては彼女達の時代まで遡る必要が出てくる。

時間移動は魔術では難しい、というより不可能と言ったほうがいい。だが、かのスーパーなロボット達が暴れ回る世界で複製した科学技術ではそれ程困難でもない。億年単位で行ったり来たりする訳でもなく、精々が数千年。出来ない事でもない。

そんな風につらつらと方法を脳内知識から検索していると、顔を上げたメデューサが待ったをかけたきた。

「その事で聞いて欲しい事があります。召還の際に私が選ばれたのは私に関係する触媒が使われた為でなく、召還した主が私と同じ“怪物”に成り掛けていたから。召還に応じた理由は願いではなく、主を私

の様な“怪物”にしたくなかったからです」
ふむ。

「すると願いは自分達姉妹の解放ではなく？」

「はい。私はマスターを、サクラを助きたい」

「――成程」

苦しみ抜いた自分達の救いではなく、自分と同じ処に墜ちようとする者を助きたい、か。

「成程」

優しいな。彼女が俺のいた世界のメデューサと違うのかは判らないが、それでも傲慢の末にアテネの怒りを買った方の神話ではないだろう。

俺がするべきは恩を返す事。

ならば……

「ハッ、それなら君のマスター、サクラという人を助けた後に、君達姉妹も助けよう」

バツと顔を上げてこつちを見た顔が驚きに染まっていた。

「で、ですが！」

何か言いかけるのを手で制し、続けて告げる。

「俺がするのは恩返し、君を助ける事だ。中途半端はいけない。

そつちは助けたけど肝心の本人が救われなくてんじや、すつきりしないだろう？ こういうのは協力して完全無欠にやり遂げて、それでハッピーエンドってのがお話し of 王道。こそばゆくて、後になれば七転八倒するくらい恥ずかしい方が、勢い付くつてもものだ」

「……トウリ、その言い方は少しくサイですよ」

「それは言わないでくださいバゼットさん」

これまでの真剣な雰囲気台無しだよ。

だが今回は良い方に傾いたらしい。

「フッフ」

やり取りを見ていたメデューサが小さく笑っていた。

最初は不信と警戒、偽臣の書を得てからはあくまで仮初のマスターだという態度を崩さなかった彼女が、ここにきて柔らかく笑っている。

た。

今まで助けようと決心したマスターを救うどころか、傍に居る事すらできず、自身はあのわかめのような髪の毛でなしに使役されて関係のない望まぬ事をさせられていたのだ。その心中はいかばかりだったのか。

それがここにきて漸くマスターを助ける為に動ける。

未来に希望が持てる、それは最高の高揚剤だ。

酷薄に見えるほどに張り詰めたものが、ほんの少しだけ、抜けていた。

「……やっぱり美人だな、アンタ」

「なっ!？」

ボソツと小声で呟いたのがしつかり聞こえたか、真っ赤になって飛び退かれた。

「なんつーか、そういう反応するところが可愛いな。そう思うだろバゼット?」

「えっ!? わ、私に聞かないでください、そういった事は疎いんですから」

「……アンタ仮にも女だろう? それが可愛いかどうかすら判らなくなってしまう」

「うるさいですね、それ以上言うとはかりますよ?」

「わ、私はこんな身長ですし、可愛いなどと……」

「~~~~、~~~~」

「~~~~、~~~~」

うん、少しは軽くなったみたいだな。

何か俺が口説いてるみたいになってたけど、あのキツイ雰囲気と裏腹に性格は純なのか? 妙に可愛らしい反応をしてくれる。

目標は出来た。

サクラという人がどういう状況にあるかは知らない。

だが仮にも英霊であるサーヴァントが、自分では助けられないと言っているのだ。

何者かに人質に囚われ、武力である自身は令呪で引き離されたのか、それとも「怪物」になつてしまうと彼女が危惧したとおり、精神に異常をきたして制止するサーヴァントを疎んで放逐したのか。はつきりとした事はメデューサに聞いてみないと分からない。

だが、助けに向かうのはメデューサに歴代最強の封印指定の執行者、そして俺だ。

人ひとり助けるくらい、難なくこなしてみせる。

これは、明日から忙しくなるな。

第参章 8 マキリ (F a t e 編)

朧月が照らす夜。

冬木の街でも指折りに大きな屋敷に一つの影が忍び込もうとしていた。

屋敷に掲げられた表札は間桐 (まとう)。

冬木に存在する魔術師の家系であり本来の呼び名はマキリ、聖杯戦争のシステムを作り上げた三家の一角である。水の属性を持ち、魔術は吸収や戒め・強制といった他者からの略奪に限定される業を得意としている。

しかし間桐という血族自体が魔術師として限界に達しており、世代と共に魔術回路の減少が顕著になりここ数十年でめっきり衰退した。数代前から魔術刻印の継承すら行われていないらしい。

現在は隠居した六代前の当主・間桐臓硯 (まとう ぞうげん) が魔術師としての能力を残しているばかりで、同じく三家の一角であり、冬木の魔術的管理者である遠坂家から二女である遠坂桜を後継者として譲り受けている。

情報を今一度思い返しながら、影は足音一つ立てず玄関まで滑るかの如く辿り着く。微かな月明かりに辛うじて黒尽くめである事が見て取れる。

幾つかの礼装を確認し、そつとノブに手を触れる。

この家は五百年以上続いた魔術師の家系の工房。正規の入り口ならば侵入者を拒みはしないが、入った者を逃がさず確実に殺す為の仕掛けは、それこそ腐るほどにあるだろう。

罨や魔術的な仕掛けを注意深く探查しながら扉を開く。

施錠は成されていない。

と、

「このような夜中に人様の家に忍び込むとは。この家に何用がおありかな？」

暗がりから声が響いた。

影が僅かに重心を落とし次の行動に備える。

視界を巡らせた先、差し込む月光の届かぬ闇に沈み、一人の老人が立っていた。

どれ程の年月を生きたのか、やせ細った小柄な身体に杖を突き、皺に埋もれ果てた顔の中に炯々と不気味に光る目が此方をねめまわしている。

ピッ！

影の腕が翻り、月明かりを弾く煌めきが老人に向かって疾走する。宙を奔った銀光は過たずその胴体に吸い込まれ、

「カツカツカ、年寄りにいきなりこの仕打ちとはの」

何の痛痒ももたらさず事はなかつた。

小さく響く舌打ち。

滑るように前進する影をあざ笑い、老人は闇に溶ける様に姿を隠す。

姿は見えず。しかし濃厚な、人間とは明らかに違う気配は消え去っていない。

“下……”

影は静まり返った屋敷を素早く、しかし慎重に調べてゆく。

やがてとある一室に隠された階段を見つける。

光の差さぬ地下へと続くものでありながら、その通路に照明は見あたらぬ。

常人ならば降りる事叶わぬ暗闇。

にも拘らず、影は躊躇う事無くおぞましい気配を追い、黄泉への入り口にも見えるそこへと踏み入った。

まるで死者の行き着く先、根の国へと続くかのような闇を降りてゆく。

階層にして二層ほど下っただろうか、段が途切れ、僅かな足場の先に扉が現れる。

影はその向こうにあの奇怪な老人が居る事を気配で察し、躊躇う事無く、しかし最大限の警戒と共に扉を押し開け、踏み込んだ。

そこは深いプールの様でもあった。

内装も無くコンクリートが剥き出された四角い部屋。

僅かながら光源が壁にとりつけられ、弱弱しく暗闇を薄めていた。

扉からは降りる為の階段が続き、壁際に一段高い段差が通路となっていた。

その下の壁面には黒々とした穴が複数口を開けている。

地下施設などに必須の通風孔とも考えられるが、薄弱な光ではその穴の中は知る事は叶わない。

床へ通りきった影の、黒尽くめの人物の視線の先に先程の老人が立っていた。

「わざわざ追ってくるとはのう。愚かなやつじゃ」

杖と床に一つ突き、ニマリと嗤う。

「御主に儂を殺す事などできぬぞ。おとなしく儂の問いに答えれば生かしておいてやろう。貴様はこの手の者じゃ？ 聖杯戦争のマスターか？ それとも協会か？ はたまた聖堂教会か？」

「……………」

影は答えない。

唯一、黒衣に覆われていない目元は鋭く視線を巡らせ、この空間に脅威となる仕掛けが存在しないかを探り出してゆく。

「どうした、さっさと答えい」

皺に埋もれた口から苛立った声が発せられる。

影はそれに頓着せず、胸中にて結論を出す。

“仕掛けは無い”と。

仮に壁の穴から何らかの攻撃が加えられようと、自身の攻撃が確実に先に届くと。

シッ

鋭い呼気が漏れる。

黒尽くめの身体が瞬き一つの間で老人へと迫る。

っ、シッ、フッ!!

着物に包まれた胴へ二発、頭部へ一発、凄まじい拳速の拳が叩き込まれた。

老人はそのあまりの速度に声を発する間すらなく一方的な蹂躪を受ける。

胴が湿った音を立てて骨など存在しないかのように折れ曲がり、最後の一撃で頭蓋を破碎され壁まで吹き飛んだ。

壁にべったりと体液を磨り付けながらずるずるくずおれるのを見て取り、影はその腕を下ろし一つ息をつく。

しかしそれも老人の死体がどろりと崩れ去るまで。
くずり

叩き潰され変形した頭部が、奇怪な角度に振れ折れた胴が衣服の内
で、まるで肉体が脆い土くれだったかの如く崩れ去る。

影は異変に気付くやいなや遅滞無く飛び退る。
露出した瞳が細められる。

今や死体は人間の形すらなく、崩れた黒い何かは床へと広がっていた。

きいきい、きいきい

暗い穴倉に小さな泣き声が響く。

ぞろぞろと蠢いている何か。

壁際の暗がりから這い出して来たのは“蟲”。

およそ見たことが無いような奇怪な生き物だった。

蚯蚓と御伽噺に出てくるワームを足して二で割れば出来上がりそんな醜悪な外見。

それが何百と暗闇で蠢動していた。

しかも、それだけではない。壁の穴からも、入って来た入り口からも、まるで黒い汚水が流れ込むように侵入してくる。

雪崩を打って地下室へと入り込んでくるその数は、もはや万を超えるだろう。

正視すれば吐き気すら催す光景に影の目元が歪む。

ここに至って脱出するには空でも飛ばない限り、あの蟲の海を渡らねばならなくなった。

「クカカツ、儂を殺す事などできんと言ったであろう」

しゃがれ声が嘲る。

音は地下室に反響し、発生源は人の耳では捕らえきれない。

そもそも蟲へと崩れ去った身体を見てなお、あの奇怪な老人が人のまま隠れていると思うのは樂觀だろう。

あれが蟲を使った身代わり人形ならまだ良い。

最も厄介なのは老人、いや、妖怪と言つていい存在がとうに人間をやめ、蟲そのものになつている場合だ。往々にして延命を繰り返し年を重ねた魔術師は、妄執の塊になった挙句に人間をやめる輩が多い。その場合、殺害には対象を完全に滅す必要があるが、これだけの数を閉鎖空間内で殲滅するのは難しく、それも例えやり遂げたとして、あの妖怪が他に“保険”をかけていない筈が無い。

じりじりと迫る黒い波に囲まれ、影は地下室の中央へと追い詰められる。

黒く波打つなかに、コンクリートの灰色が小さな小島となつて残されていた。

絶体絶命。

事、ここに至つても、影は命乞いどころか唯の一言すら出さない。それどころかまだ抵抗しようというのか、素早く手足に指を滑らせ何かを描き、背負った筒の蓋を取り去る。

「どれ、自分で言えぬのであれば、儂が御主の身体から直接聞き出すでしょう」

その声を引き金に徐々に距離を詰めていた蟲が、逃げ場のない愚かな獲物へと一斉に飛び掛つた。

私は殆んど使われない自室のベッドに寝ていた。

もう随分こうしているのに眠れない。

原因は分かっている。

兄が死んだらしい。

今日の朝食でお爺様が言っていた。

『桜、あの出来損ないが衛宮の小倅に挑んで死におつたらしいわ。ライダーも何処へ行きおつたか判らん。つくづく使えん奴じやったわい』

先輩は無事。私はそれが嬉しい。

兄が死んだ事を悲しむよりも、先輩の無事を安堵する気持ちがずつと強かった。

あの人が、兄が優しかったのは昔の話。

いつからか酷い事ばかりをされるようになり、それが先輩の耳に入り、あの出来事が起こった。

その結果、先輩は弓道部を追い出され、兄はますます歪み影で私に当たった。

私は兄が嫌いだ。

私を殴る兄が、私の身体を好きにする兄が、先輩に酷く当たる兄が嫌いだった。

それでも昔は優しく好きだった人が死んで、それなのに何も感じない自分。

あの暗い蟲蔵に籠る度に私がどんどん無くなって、もう残っているのは先輩が好きという気持ちだけだった。

幼い頃から続く蟲に心を、身体を犯される日々。

夜毎に蟲に仕え、身体を苗床とされ、魔力を捧げ、そしてお爺様自身も蟲にも身体を犯された。

全身の神経は長い間蟲倉で刻印虫に蝕まれ、もう一体化してしまっている。

そして心臓すらも、お爺様が巣食っている。

後継者なんて嘘。

私はお爺様と蟲を生かす為に魔力を捧げ貪られる贅。

(やめよう)

諦め、諦観。

そういったものがいつもの様に汚し尽くされた心と身体を満たす。今まではライダーが居てくれた。

でも、ライダーも私を置いて何処かへ行ってしまった。

私はこのおぞましく冷たい家に一人。

もう眠ろう。

現実には辛過ぎるから……

「サクラ。起きて下さい、サクラ」

誰かが私の身体を揺すっている。

この声は――

「ライダー？ もう朝……、っ!？」

(ライダーの声！)

慌てて飛び起きる。

まだ私が眠りに落ちてそう長い時間は経っていないみたい。

部屋の中は真つ暗で、窓から差し込む月明かりが辛^{かる}うじてライダーの紫色の髪を照らしていた。

「ライダー無事だったの!？」

「はい。心配をかけました」

涙が零れそうになった。

ライダーが生きていてくれた。

「サクラ、すみませんが時間が無い。何も聞かず私に着いて来てくれませんか」

泣きそうな私を氣遣って手を握ってくれたライダーが突然そんな事を言う。

こんな夜中にいったい何処へ？

何故そんなことを言い出したの？

「ライダー、貴方の今のマスターの指示？」

もしもそうだとしても、ライダーが私を傷付ける事はきつと無い。

ライダーもこんな言い方はしない。

「すみません」

「わっ」

本当に時間が無いのか、ライダーがパジャマのままの私を抱き上げる。

「まって、せめて着替え」

「いきます」

ばんっ！ と開かれた窓から夜の暗闇へ飛び出す。

(二階なのに！)

英霊の身体能力は知っていても、抱えられている私は唯の人間。落ちてしまえば怪我もするし、下手をすれば死んでしまう。

死んだら先輩にもう会えない！

必死でライダーに抱きつく。

「そのまましつかり捕まっています。急ぎます」

声と共にぐんとライダーのスピードが増す。

何処に行くのだろうという不安はあった。

けれど薄着一枚に夜の空は肌寒く、駆ける内に不安どころではなくなってしまうていた。

『ナノマシン群総数、目標値へ到達。』

対象、間桐邸を完全に勢力圏内に取り込みました』

「地下もか？」

『はい。バゼット様より連絡のあった地下空間とそこから伸びる横坑を含め、全て把握しております。それと、ナノマシンより送られてきた情報を解析した結果、間桐臓硯は既に魔術的生物へと自己改造、虫のような生物の集合体と化しています』

「虫、ね……。よくもまあ虫を選んだもんだ。」

ヌル、ありがとう。後はバゼットとライダーの合図待ちか」
コックピット内、腰掛けたパイロットシートの背凭れに寄りかかる。

本機は現在間桐邸から300Mの地点にある小さな空き地に隠れている。

徒歩でここまで移動してから機体を出した。

とは言えここは町の中、外れの方だが民家は幾らでもある。とても20Mもあるトリコロールカラーの巨体を隠し通せる訳もない。

そこで出番なのがとあるガンダムシリーズのステルス技術、ミラージコロイドだ。

コロイドとは霧などのように、空気中に含まれる水分が、更にその中で塊を形成している状態を示す。ミラージコロイドとは、可視光線や赤外線等の電磁波をシャットアウトするコロイド状の特殊な微粒子を指し、また、このコロイドを強力な磁場で機体表面に定着させる事で光学的・電磁的に完璧なステルスを施す技術である。

実用初期の段階ではスラスタ等々の噴射移動をするとステルスが破れたり、黒色以外の装甲には上手く機能しないといった問題があったが、それもじきに解決している。

この機体の装甲は100%ナノマシンで構成されているから、その設定を少し弄り、有り余るジェネレーターパワーで装甲表面を帯電させてやれば準備完了。後は生成したコロイド粒子発生装置を背中に背負えば完璧だ。

だが流石にエンジン音は聞こえてしまうため、防音対策として機体を包み込むように真空の層を幾つか魔術的に作り出して空間に固定しておく。

これで直接接近する以外に一般人は発見不可能となった。

まあ魔術師なら真空を固定する魔術を目印に探せるだろうけど。

『マスター、問題が』

緊迫した声に跳ね起きる。

「どうした？」

『今しがたメデューサ様が屋敷より脱出なされたのですが、魔蟲の反応が一つ、共に移動しています。おそらく救助対象の体内に寄生しているものと考えられます』

あまりに予想外の言葉に言葉を失う。

(オイオイ、家の後継者つっても子供だろうに、その体内に蟲を埋め込んで寄生したのか!?)

確かに合理的だ。

老人の積極的な協力者ではなく、どちらかと言えば兄も含めて“間桐”という家系に苦しめられている人間で、敵対者に自分が殺されたとしても彼女が生き残る確率が高いだろう。しかも聞いた限りでは大人しく従順な性格らしく、数百年を生きた魔術師としてはこれ程扱い易い駒も珍しい、といったところか。

もし反逆されたとしても、これでは体内に爆弾を抱えているのと同じだ。たとえ力強い味方が居ても内臓を人質に取られてはなす術がなく、それ以前にこれでは体内に寄生されている事を周りに知らせる術がない。何しろ自分の体内から監視されているのだから。

だがそれは外道の所業。

あまりにも非人道的な仕打ちだ。

「くそつたれが」

悪態が口を吐く。

「ヌル、バゼットに通信」

『接続』

ヌルにより、事前に連絡用にとバゼットに渡しておいた脳波マイクとチャンネルが繋がる。首筋に貼り付ける電極付きパッチの様な外見で、利点は声に出さずに連絡が取れるため、標的を前にしても通信内容を悟られない点だ。

《トウリですか!? こちらは少し拙い状況です》

「此方でも把握した、蟲か」

《ええ、まさかここまで人間を逸脱しているとは私も予想外でした。私が普段相手にするのは封印指定された相手ですので、大抵は一芸特化のタイプが単体なんです。このように小さな群れを相手にするに

は厳しい。今はルーンで結界を張って堪えています。閉所で殺し尽くせる魔術は保有していません。私の切り札でも状況を覆す事は困難です」

「今からこつちで一掃する。一匹だけ残すから自滅させないよう確実に捕獲してくれ」

《分りました》

「通信終わる」

接続を切る。

「さて、やるぞヌル」

『イエス、マスター』

「縮退炉、出力30%へ。」

ナノマシン攻撃目標・間桐家、敷地内における蟲型魔的生物」

『全目標捕捉』

主機が指示に従い出力を上げる。

アイス・セカンドという常温で縮退を起こす物質を利用した炉。それは理論上、投入した物質を100%エネルギーに変換できる機関だ。

発生した莫大な電力が装甲を這い回り、空気中に飛散しているナノマシン群へと供給されてゆく。空気中のナノマシン間をエネルギーがリレーされ、遮断されて孤立した地点へはヌルの制御の元、亜空間を通して送られる。

間桐も襲撃は警戒しているだろう。あそこまで生きる事に貪欲なのは数百年を生きたある種の怪物。魔術師の暗殺に対する備えは勿論、聖杯戦争の主役たる英霊・サーヴァントの襲撃の可能性すら考えられているかもしれない。事実、養子とは言え娘を自分の一部たる蟲の寄生先に行っているのだ。

だが、まさか襲撃がこういった科学サイドから成されるとは夢にも思えない。

此方の手は変質的なまでに張り巡らされた魔術防壁の一切をすり抜け、既に屋敷全域を勢力圏へと塗り替えている。

バゼットが地下で堪えている隙に、妙な事をされないよう一気に殲

滅する。

「攻撃、開始」

『攻撃開始します』

(なんじゃ!? いったい何が起こってる!?)

生を受けて五百と余年、間桐臓硯は生涯最大の混乱の只中に居た。初代のマキリとしてユステイツァ、永人とその娘と共に、この日本の地にて聖杯降臨の儀式を行ってより二百年。彼は四度に亘る聖杯戦争を経て、未だ己の生み出した聖杯を手にする事が出来ずにいた。

そして前回の第四次聖杯戦争より早10年。

消費される事無く終わった聖杯の中身によって極短いスパンで再び巡ってきた第五次聖杯戦争。後継者として出来損ないの孫、間桐慎二と遠坂より貰い受けた桜を隠れ蓑として聖杯戦争の裏で蠢動し、最終的に聖杯を手に入れようと画策する。

その只中、真夜中に聖杯戦争を立ち上げた御三家の一角たる間桐の領域に忍び込んだ愚か者を、自らの身体でもある蟲共の餌にしようとしていた。

侵入者は鍛え上げられた肉体にルーン魔術の強化を施し、その圧倒的な身体能力でもって攻撃してきたが、とうの昔に人間としての肉体は捨てている自分には何の脅威にもならない。

人肉を喰わせた蟲によつて形成した身体が蟲に戻り、雪崩れ込む潜んでいた蟲で退路も断った。地下の閉鎖空間ではこの数の蟲を殺しつくせる程の大魔術は使えず、例え暗殺者が己諸共に地下ごと潰したとしても、此処にいるのはあくまで操っている蟲ばかり。自身の魂は本体たる蟲に宿ったまま孫の心臓に寄生しているため、死ぬ心配はまず無かった。

事実、暗殺者はなす術無く追い詰められ、急造の結界に籠る事で最後の抵抗をしている。その結界とていつまでももつ物ではない。いずれは魔力が尽き、辺りにひしめく蟲達に飲まれるだろう。後はゆつくりと蟲で全てを犯してやり、暗殺を指示した者の正体から魔術まで知る限りを聞き出した上で、従順な駒として使うか蟲達に喰わせるか選ぶつもりだった。

この世界の常識ならば、暗殺者はその運命を辿っただろう。敵に常識外の事をやらかす人外が居なければ、彼の予想が外れることは無かつただろう。

だが現実には臓硯の目の前で、厳密には己の身体として操る蟲の内、一匹を除いた全てが瞬く間に死に絶えた。結界に噛り付いていた蟲、飛び掛って空中で弾かれた蟲、折り重なり床で蠢く蟲、その全てが空に溶けるがごとく消え去った。

絶対の勝利が覆ったのも勿論だが、それ以上に何をされたのかまったく分らなかつた事が、臓硯に強い混乱をもたらしていた。

魔術ではない。

なぜなら暗殺者からはそれだけの魔力を感じなかつたから。

隠蔽されていたのでは？

あの状況で結界を維持しながら、更に儂を騙し通せる隠蔽魔術を練り上げるのは不可能に近い。

他に手勢が潜んでいた？

邸内に侵入者は一人。遠隔で間桐の魔術的防御をかわして攻撃、尚且つ蟲だけを正確に攻撃するなどやはり不可能に近い。

長く生きた経験だろう、魔術師としての自らの知識を否定される混乱からは短い時間で立ち直った。

しかしその短い時間は、空気中に飛散するナノマシン群が鼠算式に数を増やしながら全てを食い荒らすには長すぎた。どのような方法で成されたかも分らぬまま、五つ数える間に蟲達は一匹を残して姿を消した。

その一匹も恐ろしい速度で詰め寄った暗殺者に囚われてしまう。

パスは破棄したが蟲自体の自滅は為らず。

臓硯はここに至り、聖杯戦争の勝敗よりも己が生命の危機を強く感じた。

書いてしまった小話『痛ましい事件』

ちよつとやってみたかったのだ。

知識として、様々な物語が俺の頭の中にはある。

怪訝に思うかもしれないが、それらは思い浮かべようと思うまで、俺自身内容を知らない。

何故と問われれば長くなってしまふ。故に此処では割愛させてもらおう。

さて、その中には趣味的小説家とでも呼べる人達が、情報ネットワーク上で公開していた物語も存在する。

質はピンからキリまで、天から地まで。

しかし量はとにかく有る。

そしてちよつとした創作物で、やはりこういう場所にも流行り廃りがあつて、その中でも比較的長い期間ポピュラーに当たるジャンルがあつた。

いわゆる『転生モノ』というヤツだ。

アニメや漫画など熱中した物語に、己が想像した主人公を挿入し、過程や結末を思うようにする。

実に浅薄と評している。

だが人間、熱中すればちよつとやそつとの逆境は知らない内に跳ね飛ばしてしまう事があるのだ。

このジャンルにおいても全てとは言えないが、時に傑作、あるいは原型となった物語を上回るのでは、という一つの作品が生まれる事も

確かにあった。

つまり、なんだ。

読んでたら影響されたのだ。

何やら混乱する死者を前に、ボイスチェンジャー（厳かver）で声だけを届ける。

典型なる様式美に則った転生モノというやつだ。

勿論、死者といっても今の彼は生きている。死んだのは確かだが、ちゃんと造ったのだ、体を。しっかり体がある。人間魂だけで喋る様な器用さは無い訳で、これは至極もつともな対応だったろう。

失敗だったのはその先だ。

テンプレートは幾つかあるのだが、そのなかでもコテコテのパターンを選んだのが、俺の失敗だった。

『別の世界に生き返そう』

『おう』

『じゃ、いつてらっしやい』

足元に穴が出現。

『ふざけんなあああああー………』

これが大まかな流れだ。

こうなる筈。

ところがこうなった。

『別の世界に生き返そう』

『おう』

『じゃ、いつてらっしやい』

足元に穴が出現。

『ッ!?!』

足元が抜けた瞬間、咄嗟に声も出ず穴の淵へ掴まろうと腕を上げ、

前に突き出す。

とにかく落ちるまいと、上体も前へ。

しかし人間足裏から腋の下まで1メートルと3・40センチ。体重50キロとして、その重量がこの距離自由落下した衝撃で腕を押し上げられて、耐えられるものではない。

結果――

ゴツツ！（アゴ強打）

ガキツ！（開いていた口が閉まる）

ブツツ（舌千切れる）

ひゅおう（万歳したまま白目を剥き、闇の底へと消えてゆく男）

第参章 9 撤退戦 (F a t e 編)

間桐邸地下のバゼットから蟲の確保成功を聞いてから少し、俺はど
うやって救助対象の桜さんから寄生虫を取り出すか悩んでいた。

ちなみに用の済んだ髭は収納し、代わりに空き地のそこらに積んで
あった土管を分解して造ったソファアークに転がっている。

やり様は幾つかある。簡単なのは餅は餅屋、魔術は魔術師という事
でバゼットの知識か、所属組織の助けを借りるやり方。だが肝心の魔
術知識を持つバゼットは、邸内を探索して資料等が無いか確かめると
言ってまだ帰ってきてない。その上これだと治るかどうかは分らず、
もし俺の能力がばれた際にはそれが未来人という嘘設定としても、取
り込むために桜を利用されかねない。碌な事にならないだろう。

同じく簡単だが乱暴な手段としては、面倒くさく悩まずに身体を切
開いて蟲を取り出すやり方。当然ながらいくら俺に元の世界での最
先端医療知識があるとはいえ、間違いなく命の危険が大きい。寄生虫
も抵抗するだろうし、場合によってはそれが死因になりかねない。し
かしそこは俺、素を弄れば例え死亡しようが魂の保持から蘇生まで難
なくこなせる。

本当は素操作で体内の蟲だけを分解できれば良いんだけど、小さい
奴を他の臓器を巻き込まないように分解するには、せめて形くらいは
目で確認しておきたい。

「あー、どうしよつかない。もしよっぽど深く長く寄生されてたら、蟲
だけ取れば良いって訳でもないんだろうし」

もういつその事身体自体を交換するか？

それなら身体を複製して魂移せばいいんだし。

女の子としても汚染されまくった身体よか、綺麗な体の方が良いん
じやなからうか。

うん、そうしてみるか。

となれば、さっさとバゼットと合流してライダー追っかけないと
な。

集合はあの洋館だが、万が一辿り着く前に他のサーヴァントに補足されたらえらい事になる。急ぎますかね。

『マスター』

「うん？」

『手遅れのようにです』

「……おい」

『現在メデューサ様は敵性サーヴァントの追撃を受けており、偽臣の書による能力の低下と救助者を抱えているため、逃げ切る事は不可能と思われます』

「バゼットに先に救援に向かうと通信、俺達はこのまま直行するぞー」

『イエス・サー』

ガギイン!!

不可視の剣が一閃、夜を裂いて飛来した杭をいとも容易く叩き落す。

(足止めにすらならない)

キリツ、とライダーは己の本来の主人であるサクラに悟られぬよう、小さく歯を食いしばる。

街中を人間を抱いて一直線に移動しているのだ、他のサーヴァントに見つかる危険性は彼女も承知していた。

(だがよりにもよってセイバーとは！)

幸運値が低い事は分つてはいるが、それでも忌々しい。

本来の力であれば十分に逃げ切れるだけの速度は有しているのだが、偽臣の書による能力の低下と、サーヴァントたる自身の全力機動に腕の中のサクラが耐え切れない。

幸いにしてセイバー側も何らかの能力低下に見舞われているらし

く、セイバークラスにしては妙に動きが鈍く、遅い。それでも此方の牽制の一撃を歯牙にもかけず捌くのは流石といったところか。

現時点でライダーが最も警戒すべきは、セイバーペアがアーチャーペアと同盟を結んでいる事だろう。

単独偵察の途中なのか、セイバーは魔術師らしからぬ妙な少年のマスターを連れていない。しかしこうして交戦状態に突入した以上、マスターを通じてアーチャーが援軍に駆けつけるのも時間の問題だ。

何せライダーが腕に抱えているサクラは彼女のマスターだが、同時にセイバーのマスターと親しく、アーチャーのマスターであるトオサカ・リンに至つては実の姉妹なのだ。ライダーとサクラの関係を知らないセイバーからすれば、サクラがライダーにさらわれたようにしか見えない。

事実、斬りかかられた際にセイバーはサクラを助け出すと叫んでいる。

そしてサクラはライダーのマスターである事を彼らに、先輩と呼ぶ少年に知られたくないと強く願っている。彼女が望まない以上、ライダーが誤解を解くという手段は採れない。

セイバー一人振り切れない今、そこにアーチャーの援護まで加わればどういふ結末になるかは火を見るより明らかだ。

「くっ！」

ライダーに出来るのは最低限の牽制を行いながら、ひたすら逃げ続けるだけだった。

ストーリーは捻じ曲がる。

運命はたった三つの道しかない。

阿頼耶とガイア、二つの境界線上に魔術師の運命はある。

だがそこに阿頼耶でもガイアでもない第三者が加わった時、そこに

どのような歪な運命が開けるのか……
それは世界そのものにすら分らない。

セイバーは本来ならここにはいなかった。

突然の参入者によってライダーは連れ去られ打倒する事ならず、マスターである衛宮士郎は頑固という表現すら優しいほどに聖杯戦争を否定する。六騎の英雄と剣を交え打ち倒し、聖杯をもって己が叶わぬ願いを叶える為に、英霊は召還に応じたのに。

これでは生殺し。

最優と謳われたセイバーのクラスとして召還され、彼女自身もまた、それに相応しい能力を持ち得ている。マスターの魔術的素養に恵まれなかったとは言え、それでも生半可な英雄に負ける事は無い。

しかしマスターは聖杯を得る為の手段、殺し合いをやめろと言う。彼女は何よりも叶いたい願いがあり、誰よりも聖杯を望んでいる。

それなのにマスターの指示によって、聖杯戦争を止める為に剣を振るう。

時代が違うのだろう。

召還された英雄達が駆け抜けたのは戦乱の世の中。

人は国という形で群れを造り、他の群れに備えなければ生きる事さえ出来ぬ。

譲れぬものを巡って剣を交え^{まじ}槍を交わし、敵を倒して己の主張を通す。

対立する者を打ち倒せねば、ただただ大切なものを蹂躪され、土へと還るのみ。

生まれる遙か昔より戦は続き、そこに生きる人々もまた、戦いの無い世の中など夢のまた夢と知っていた。

そう、かの騎士王が持つ聖剣の鞘こそがそれを表している。

何者にも犯されない、どのような攻撃も通さぬ代わり、己の害意をも分かつ世界の遮断。それを成す鞘の名こそ『全て遠き理想郷』。

平和な世など、叶わぬ、届かぬ理想郷だったのだ。

そこに現代の甘えともとれる余裕は無く、野生の獣と同じ生存競争が厳然と存在した。

少年にセイバーの心は分らず、分ろうともしていない。

非がある訳ではない。彼は彼で平穏な日常から巻き込まれた、殺し合いという非日常に向き合い、己の願いに邁進する事で精一杯だったから。

しかし、それでは何一つ成す事が出来ないだろう。

聖杯を得る為にも、また一般人と変わらぬマスターが生き残る為にも、命を狙ってくる敵を切り伏せなければならぬ。

襲い来るは世界に名を刻んだ英雄六騎。

唯でさえ能力が低下している今、不殺等という枷をはめてしまえば屍を晒すのは此方。

もはや余裕など欠片すらありはしないのだ。

にも拘らず、彼女の主人は意向を翻さない。

騎士であるセイバーに主である少年を裏切り、主換えをする事はできない。

出来る事は一つ。

不戦の命を破つてでも此方から敵に挑み、その首級を挙げる。

セイバーは夜の街へと一人、抜け出した。

そして現在。

唯一、拠点の判明しているキャスターに襲撃をかけるべく移動中、偶然にも学校で逃したライダーを発見する。

ライダーの力量は以前の戦いで把握している。ライダーのクラスの特徴である騎乗宝具を使用させる間を与えなければ、彼女を下すのはそう難しい事ではない。

そして何より、ライダーの腕に囚われているのは見覚えがある少女。

マスターの旧知であるサクラだった。

主の騎士として見逃す訳も無く、ライダーを打倒する事が出来れば

己の目的も果たせる。
剣の英霊は追撃を開始した。

第参章 10 英雄の戦い (F a t e 編) 武器能力追加

黒川がメデューサに追い付き視認した時には、彼女はボロボロだった。

狙われたのか、それとも腕に抱いた者を庇ったのか、背中と腕に幾本かの矢が刺さり、切り裂かれた傷が無数に血を流していた。生存に安堵し、全身の負傷を確認した瞬間、頭に血が上る。

「デメエら何してやがるッ」

駆けた速度のまま大跳躍。狙いは今まさにライダーへ切り掛ろうとしているセイバー。空中で回転しながら悪魔の蔓延る世界で手に入れた成人男性程もある巨剣を生成、渾身の力で叩きつける。

「オオオオラアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」

「なっ!？」

セイバーは忽然と俺の手に現れた禍々しく巨大な大剣に意表を突かれながらも、とっさに此方へ向き直り超重量の一撃を迎え撃つ。

ドッ!

ツゴオオツツツ!!!

「グウウウウツ!？」

受けた衝撃にセイバーの脚甲に覆われた両足が地面にめり込み、地を揺るがす衝撃波がアスファルトをめぐり上げ、微塵に吹き飛ばす。

「ぐっ、アアアアアア! 風よ!」

凄まじい重量に膝を付き掛けたセイバーが目で見えるほどの魔力を迸らせ、同時に見えない武器に纏わりついていた豪風を開放する。魔力による瞬間的なブーストは絶大な力をその細い腕にもたらし、解き放たれた風は逆巻きながら吹き荒れる。一気に頭上から抵抗ごと両断せんと押し込む巨剣を持ち主ごと押し返した。

ギャリントッ!

不可視のペールが風と共に失われ、本来の黄金の姿をさらした聖なる剣が現れる。握り締めるガントレットが力を振り絞り、巨剣をいなす。

ゴドントツ!

巨剣は黄金の聖剣に逸らされた軌道のまま叩き割ろうとした頭を掠めて地面に突き刺さる。

すかさず持ち手を両断しようとする聖剣。

しかし、必殺を期した剣閃は空を切った。

「ツ!?!」

セイバーの顔に浮かぶのは驚愕。

明らかに人間が扱うには巨大すぎる剣、それを振るった直後に斬撃を叩き込んだのだ。にも拘らず手応えは無い。

あれ程の斬撃を放つ者はサーヴァントに他ならず、振るわれたのが恐ろしい気配を纏った魔性の大剣としたら、それはサーヴァントの象徴たる宝具としか思えない。

(それをまさかあつさりとは手放すとは!)

己の宝具を最初の一撃で捨てる思い切りの良さに驚愕する。

(後ろっ)

スキル：直感 Rank A

戦闘時に自身に最適な展開を第六感で「感じ取る」能力だ。ことに彼女の保有するAランクともなれば、その勘は予知能力並みの中央率を誇る。

この瞬間もまた、その能力は遺憾なく発揮された。

五感でも経験でもなく、警鐘を鳴らす第六感によって瞬時に敵の居場所を悟り、放たれるであろう攻撃を回避するべく全力で前に跳躍する。

しかし10メートルを刹那で飛び越え着地した時、止むどころか最大級の危機感が彼女を襲う。

もはや考える間もなく反射的に背後へ剣を叩きつける。

だが遅い。

まるで初めからそこに居たかのように佇む青年。その手はそつと

軽く鎧の上からセイバーの背中に触れていた。

どむっ

「カハッ」

先の激突とは比べ物にならない小さく、こもった音。彼女を守る白銀の鎧に罅は見当たらず、にも拘らず響いたのは深々と肉を抉る殴打の衝音。

それ一つでセイバーはぐらりと傾^{かし}いだ。

即座に追撃。

体勢を崩した相手に本命たる右の一撃^{くろがね}が鉄の鉄槌として振り下ろされる。

がぎぎいんっ！

金の髪に包まれた頭部が落としたスイカの如く砕かれようとする刹那、遠方より飛来した矢が腕を打った。サーヴァントに比肩する速度で動く相手の腕を狙うその神技に目を剥く間もなく、死をもたらすはずの鉄拳は僅かに逸れ空を切る。

そして目の前に敵は止めの一撃を外した隙を逃すような相手ではない。

「っ、ハアッー！」

一瞬で体勢を立て直し逆袈裟に全力で切りつける。

右脇腹から左肩口へ一閃、黄金が奔り抜け、弾き飛ばされた身体が砲弾のように吹き飛び、ビルの壁を砕いて見えなくなる。

「くっ」

辛うじて動けるライダーが吹き飛んだ黒川を追ってビルの穴へ入っていく。

「今のは学校で会ったイレギュラー?」

唯でさえ少ない魔力を迎撃に消費し、剣を支えに荒い息をつきながら眩く。

吹き飛んだ一瞬、目に映ったのは確かにあの遙か未来から呼ばれたという男だった。

そこへ離れて援護に徹していたアーチャーが合流する。

「無事かセイバー」

「はい。助力を感謝します」

魔力消費もばかにならず、見た目に反して異様に強力な打撃をもたらったが、致命的な負傷はない。

「先程の一撃、仕留めたか？」

アーチャーがその鋭い眼を細め、未だ粉塵の舞うビルの穴を油断なく見る。

「いえ、仕留めていません。それどころか傷を負ったかも怪しい」

「なに？」

「斬れませんでした」

聞き捨てならぬ言葉に思わず振り返るアーチャーに、セイバーは再び風を纏い不可視になった己の武器を、少しだけ持ち上げてみせる。

「バーサーカーと同じです。刃が立ちませんでした」

「……ちつ、あんなバケモノと同じとはな。以前学校で見せた速度といい、未来の世界とやらはいったいどうなってる？」

「同感です。まさか宝具でもないのに英霊の攻撃が通らないとは私も思いませんでした」

ずしん、，，

「……来たようだな」

「……ええ」

ずしん

ずしん

「……ところでイヤな予感がするのだが、君はこの音を何だと思う？」

「……私に聞かないでください」

ずしん！

ギユピーン

「」

壁にあいた穴、その暗闇で光りを放ったのはピンクの単眼。

だが、目にしては明らかに位置がおかしい。

派手に崩れた壁の穴はかなりの大きさだが、単眼が光っているのは

その天辺付近なのだ。

「どごお！」

「ずしん！」

「なんでさ……」

「はあ……」

赤い騎士は呆気にとられて思わず昔の口癖を呟き、少女騎士は失われつつある大切な何か^{はかな}儂むように、手甲に包まれた両手で顔を覆った。

瓦礫を軽々と蹴散らして夜の街に姿を現わしたのは、体高四メートルに達しようかという白い機械仕掛けの巨人だった。

つるりとした柔らかさうに見える装甲で見上げんばかりの巨体を覆い、姿勢を大きく前傾させて明らかに大きすぎる両腕を地面に着けた、ぱつと見て類人猿かゴリラを彷彿とさせるロボット。首の無い、胴体から盛り上がった頭部と思しき場所にガラス質のドームがあり、その向こうでぐりぐりと動く単眼が輝いている。

『よくも仲間を可愛がってくれたな？ この『猿人』^{エイフマン}で仕置きしてやる』

巨人は威勢の良い声と共にビシイ!! と巨大な腕を伸ばして指を突きつけた。

「あく、くそが」

汚い罵りが出る。

頭に血を上らせて突っ込んだ拳句、セイバーにあっさりとぶつ飛ばされた。

知識にある聖剣とやらは剣として以外に靈的攻撃も持ち合わせているらしいから、もし持ち主がフルの能力を発揮していたら、此方のエイヴィヒカイトの装甲を突破していたかもしれん。ま、破れなかつ

たお陰で俺は壁をぶち抜き、色んな物を薙ぎ倒しながら瓦礫に埋まっている訳だが。

(……桂師匠には見せられんザマだな)

だがこれで頭は冷えた。

「ふっ」

ゴシヤ!

ボゴツ!

とりあえず瓦礫から腕と足を突き出す。

「よっ、ぬ、くぬっ、くくっ、ほりゃ!」

まるでダンボール箱に尻からはまり込んだ様にえらい起き上がりづらかったが、何とか上に乗っていた瓦礫を持ち上げて起き上がる。丁度どつかの部屋の壁を砕いて止まったから、上からごろごろとコンクリ片が落ちてきたんだな。

ジャリ、

「大丈夫ですか?」

「ああ、ライダーか」

俺が開けた穴の方から現れたのはサクラさんを抱えたメデューサだった。一応外だからクラスで呼ぶ。

俺が突っ込んだ間でほんの少しは休めたのか、体中にあつた傷が僅かに直りかけている。自分で引き抜いたのか、背中と腕に刺さっていた矢も傷跡を残してなくなっていた。

腕に抱えられたサクラさんは振り回されたからか、とつくの昔に気絶したらしく目を閉じてぐったりした様子。彼女を抱えなおしながらライダーは心配そうに此方を見る。

「大丈夫大丈夫。ほら、この通り怪我一つ無いよ」

持っていた壁の残骸を投げ捨て、手を広げてみせる。

装甲抜かれなかったから服すら破れていない。というか、傷すら付いていない。

「な?」

「……凄まじいですね。あの斬撃を受けて無傷とは」

「ま、向こうが本調子なら分かんがね」

「確かにセイバーはマスター側から魔力供給が十分に成されていないようです。私を追っていた時も魔力を節約しようとする動きが見られました」

ふむふむ。

それだと全開で戦うにはマスター自体を変えるしかないのかな？

学校で見た赤毛の少年がマスターなんだろうけど、彼を見る限り魔術師としてトラブル中ってよりも、単純にマスターとしてサーヴァントを十分に喰わせる魔力を持っていないって考えた方がシツクリ来る。

「なら一人で足止めできそうだな。その間にライダーは反対側からでも先に離脱してくれ」

流石にサーヴァント二人を相手に足止めを買って出るとは思わなかったのだろう、ライダーから驚いた気配がする。

「バゼットは直接拠点の方に行くだろうし、ライダーもサクラを抱えている。なにより心配しなくても、俺は一人でも人霊の上位版程度には負けんさ。さ、行った行った」

行けと手を振ると、ライダーも負傷した自分が居ても助けになれないと判断したのか、こっちに一度頷いて駆け去っていった。

「さつとと、じゃあ昔々の大昔に名を上げた黄泉帰りの英雄殿に、機械文明の武器つて奴を見せてやるとするか」

ぎアアアアアアアアア

周囲に散乱していた瓦礫を全て分解する。

渦を巻いて立ち昇る輝きを操り、一つの形を構築してゆく。

虹色に輝く霧とも表現できる“素”は空中で漏斗状に渦巻き、下降してチリチリと音を立てながら降り積もる。ほんの四・五秒で輝きは天井を破るほどに積もり、一際発光して飛び散る。

光が収まったそこには、白い柔装甲に包まれた“試作新型『猿人』スーパード式改造Ver”が立っていた。

説明しよう！

この『猿人』、見た目はシャギーの世界で手に入れた機体だ。しかし

！ 後にスーパーなロボットが大戦を駆け抜ける世界であまりの超技術、というか質量保存やエネルギー保存の法則を軽く無視する謎の技術に感動した俺が、技術の結晶たるロボット達を記憶にコピーするついでに技術試験もかねて改造を施したのだ。

当然ながらこの試みは謎技術の実証のためだから、なんら遠慮もせず、徹底的に弄繰り回したのだ。

結果、弱点だった内部構造は超合金Zっぽい金属やらのお陰で脆弱性は見事に解決され、特徴であり長所だった衝撃を跳ね返す柔らかい装甲は、斬撃に対する耐性を大幅にアップする事に成功した。元から優れていた敏捷性も輪を掛けて素早くなり、拳句に新技術によって大量に生まれたデッドスペースを利用して張り巡らせた人工筋肉によって、更なる打撃力の強化にまで成功する。

代わりに長所を生かすために重火器を含む火器の類いは廃止し、攻撃は打撃と大型の特殊合金製ナイフによる格闘戦にしか対応していない。

これが生まれ変わった我が『猿人』だ！
エイブマン

さて。

後部に回り、完全密閉型のコックピットへ入る為にわざと開けておいた穴に四つん這いになってノソノソと潜り込む。

元々かなり乗るスペースが小さいこの機体、原作では搭乗者は手足を切り落として特殊ジェルに満たされた中に入って動かしていた。俺も操作系の入力デバイスであるコネクタを繋いだ後、手足の義体を外してしまう。最後に再び“素”を操作して入口の穴を塞いで準備は完成だ。

「奇襲するのも良いが、ここはやっぱり演出に拘らなくちゃな」

ずしん

瓦礫を踏み砕きながら歩き出す。

ずしんずしんと足を踏み出すたびに床が派手に陥没するが、気にしない気にしない。

しかしこのビルの持ち主も災難だね。明日見たら卒倒するんじゃない

なからうか？

まあご愁傷様ってことで。

それとも魔術師かなんかの連中が証拠隠滅でもすんのかねえ？

若干外の方が明るいか、穴の向こうで此方を凝視しているサーヴァント二人が暗視装置に良く映る。

丁度見えないくらい暗がりです。足元の瓦礫を勢い良く粉碎して立ち止まり、緑のモビルスーツよろしくモノアイを発光させる。

ギューピーン

って、この音と一緒に暗闇でモノアイが光るのがカツコいいんだよ。うん。

サーヴァント達は呆気に取られてこつちを見ている。

フハハハ！ オカルトの結晶共よ、超科学の結晶をその目に焼き付けるが良い！

そしてさつき吹っ飛ばされたのと、家のライダーボコツてくれた借りを返させてもらう！

ビシイ!! と音を立てんばかり指を突きつけて言い放つ。

『よくも仲間を可愛がってくれたな？ この『猿人』^{エイプマン}で仕置きしてやる』

覚悟しろよ、オマエら？

するとあいつ等、失礼にもこつちから視線を逸らしてぼそぼそ言い始めた。

「……………」

「……………」、御指名のようだぞ、セイバー？」

「それはライダーに矢を射掛けた貴方でしょう、アーチャー」

「私は凛に言われて援護に来ただけだ。アレとやりあう理由が無い」

「貴方は私を見捨てる気ですか!? それでも騎士ですか!」

「ふっ。生憎この身は騎士とは程遠くてな。そら、強大な敵にこそ挑まねば騎士の名が泣くぞ？」

「そもそもあんなのが出て来たのは貴方の幸運値が低いせいでは？」

「な!? た、確かに私の幸運は低いが、あんな物を呼ぶ込むほどではない!」

目を逸らして言い争う二人に、すつ、と影が差す。

ぴたりと言いが止み、二人とも恐ろしく苦い物を噛んだような顔をして、必死に目を背けていた物を直視する。

夜の街の僅かな光を遮ったのは、当然ながら我が搭乗機たる白い巨人。

『二人揃って仕置きされれば良い』

強弓を引くかのように引き絞られた巨腕を振り下ろす。

「ッ!」

ドゴオッ!

そこは英霊、当たったら反省は来世でする事になりそんな豪腕を、咄嗟に右と左に飛び退いて回避し、すかさず前衛と後衛に分かれて攻撃を開始した。セイバーは一気呵成、前衛として己の剣で挑みかかり、アーチャーは後衛として『猿人』を中心に大きく弧を描きながら矢を打ち込み援護に徹する。

だがどれ程の強度があるのか、高性能な銃火器のように途切れる事無く様々な部位に飛んでいく矢は、装甲の表面を僅かにへこませるだけで一本すら刺さる事無く弾かれていく。

装甲は言うに及ばず、肘の内側や膝の裏、脇の下に股関節といった間接にも刺さらず、装甲に覆われておらず他と明らかに質感の違う頭部と思しき部分のガラス質のドームですら難なく弾き返すのだ。

それもそのはず、この装甲は元でさえ対戦車地雷の直撃を耐え抜き、大質量徹甲弾である戦車砲や航空機関砲ですら跳ね返す代物。シロモそこから更に尋常ならざる改造を経た今、生半な攻撃など通る方がおかしい。

「ちつ、幾らなんでも硬すぎるぞ。本人だけでなくロボットまでコレとは!」

機関銃の様な速度で矢を射掛けてきていた赤い男が、忌々しそうに言ってくる。

確かに狙いは異様なほどに正確だし、威力も一発一発がライフル弾を超える威力だが、それでもこの機体を相手取るには役者不足だな。それでも喰らい続けるのも気分が悪いし、適度に両腕で飛来する矢を叩き落していく。それを待ってきたのか、矢に紛れ、接近した剣の英雄が切りかかってくる。

「ハアアアア！」

矢を払い、ついでとばかりになぎ払った腕をあっさりかいくぐり、胴体に切りつけられる。彼女の手に握られるのは、たとえ姿を隠されていようと英雄が携えるに相応しい一振り。

総身が鋼だろうとも一刀の下に切り伏せんという気迫で両断しようとしてくる。が、機体を包む柔らかい不可思議な装甲は切れる事無く刃を受け止め、それどころか一拍の時をおいて込めた力をそのまま本人に跳ね返す。

「くあつ!？」

剣を握る両腕が跳ね返された己の筋力で粉碎される寸前、危機的直感で咄嗟に魔力によるブーストを行使、衝撃に跳ねる剣を辛うじて押さえ込んだ。

『ほう、流石は剣の英雄だな。普通なら今ので手を碎かれる所なのだが』

セイバーは見えぬ剣を改めて握り直し、隙無く此方を窺いながら問い掛けてくる。

「いったいその表皮はどうなっている？ ドラゴンの鱗でもあるまいに、我が剣を何の神秘も持たず、こども容易く跳ね返すとは。まさか何かの宝具でもあるまい？」

『何を言うかと思えば。この装甲は純粋な科学の産物、そちらの剣で切れなかったのは、そういう事だろうよ』

「それはどういう——まさか」

ようやく気付いたか？

『そうだ。大原則、過去へと向かう神秘は未来へと向かう科学の灯に打ち消される。ましてその代表格である聖剣の類いではな。相手が唯の鋼の塊なら粘土の様に切り裂けようと、この科学の結晶たる機体

では不思議な神秘で切れますよとはいかな？こっちからすれば、それは壊れない切れ味の良い剣だ』

此方の種明かしにセイバーとアーチャーは素晴らしくゲンナリする。

もはやその表情からやる気というものが根こそぎ枯れ果て、さっさと帰りたいという思いが今にも聞こえて来そうなほどだ。

「――セイバー、私は霊体化して帰還する。後は頼んだぞ」

「ちよつ、アーチャー!? また私を見捨てよう?!」

「付き合ってられん……」

疲れた顔で透明になって離脱しようとするアーチャーに、原作の知識では霊体化できないとあるセイバーが慌てふためく。可愛そうなくらいに焦っているな。

俺から見てもアーチャーはヒドイ……

『だが逃がさん』

少し離れた所に突き刺さったままだった最初の奇襲に使った巨剣をむんずと掴む。

元が巨人族が扱うために打たれた剣だ、長さ二メートル、幅四十七センチの規格外がこの機体で扱うと丁度いいサイズで手に収まる。

一足飛びに霊体化したアーチャーの元へ跳び寄り、剣を大雑把に突き込んだ

『喰らえ』

ボアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!

突如、狂気的な咆哮が轟いた。

剣より溢れ出すどす黒い瘴気、その腹には幾百の亡者が水面を通して見るかのように揺らめきながらひしめき、飢餓の絶叫を迸らせる。

ゴオオオオオオツ

ひたすらに貪欲に呑む。

大気に満ちるエネルギー・魔力素、セイバーの魔力噴射とアーチャーの矢が消滅した際に空間に飛散した魔力を、まるで底なしの穴へ呑むように喰い尽くしてゆく。

「何!?!」

当然、最も密度の高い魔力体である霊体化したアーチャーもその身をガリガリと削られる。

「ぐああ!？」

咄嗟に剣から飛び退きながら実体化、転げながら距離をとるアーチャー。

この巨剣、空間や術によって生まれた魔力は喰えるが、流石に形を持つている魔力までは強引に喰えない。直接突き刺してもすれば話しは別だが。

「き、貴様未来の英雄ではなかったのか!? 何だその禍々しい物騒な剣は!？」

いきなり捕食されかかってかなり真剣に命の危機を感じたのか、ぜえはあと息を荒らげたアーチャーが理不尽な展開に怒りの声を上げる。

『ふっふっふ、こいつは』サルトルの魔剣『巨人の悪魔殺し』。

異世界で巨人族の悪魔狩りであるサルトルが、純粹な魔力体である魔族を殺す為に振るった魔を喰らう一品よ。同じような存在であるサーヴァントには天敵となるな、御馳走になりたくなければ精々切られないように気を付けるがいい」

「今度は異世界……ホントに貴様は何処から来たのだ? 絶対未来じゃないだろ」

疑いしか見て取れない表情を無視し、改めて剣を振り上げる。

『さあ? それは俺に勝ってから聞き出すんだな』

力強く振り下ろした。

ドツギンツ!

ごっ、ゴガア!!

ずどん

ゴゴゴゴゴオン！

ガギイ、ギ、ギギ、ギヤリンツ！

『ハツハハア！ 流石英雄！ 流石は世界の契約者だ！』

「くつ、無駄口を叩くとは余裕だな!?」

「フツ、ハアツ！」

『効かんさ！』

「あああああ！」

どごん！

ゴツ

ボアアアアア！

「チツ！ 罅が明かん、セイバー時間を稼げ！」

「承知！」

『やらせるかア！』

巨人は嵐の如く巨剣を振り回し叩き付け、巻き込まれれば微塵と化す災厄となって押し通ろうとし、騎士は唯の一步も引く事無く雷火と魔力を迸らせながら目まぐるしく剣を操り、全てを叩き潰そうとする暴風を片端から叩き落してゆく。

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!』

「ハアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

騎士は激突の度に軋む全身から力を振り絞り戦う。その全てが、一撃一撃が渾身をもって放たれる。僅かなりとも力を抜けば、その瞬間に受けた剣は手を離れ己の身体が二つになるのだから。

巨人は臂力に任せて少女を容赦なく切り潰そうと巨剣を数え切れないほど叩きつける。その剣が例え此方を切り裂く事が出来なくとも、幾多の戦を駆け抜けた彼女をそれしきで侮れないから。その機転で足場を崩されればアーチャーへ肉薄する事など叶わず、その一撃は必死の一刺しとなろうから。

『I am the bone of my sword.

(我が骨子は捻じれ狂う)』

ギシッ

ギリ、ギリギリ、;

赤い弓兵は恐ろしく静かに、歪に捻じれ狂った矢を強弓に番え、鋼の如き腕を軋らせて引き絞る。

ゴウ！

稀代の名工が、その生涯の集大成として彫り起こした奇跡の彫像の如き姿。

何処までも曲がらず、ただただ鍛え続けた極地。

弓を引くその身体から赤い魔力が立ち昇る。

セイバーの激しく迸る魔力とは違う、練りに練られた恐ろしく濃密な魔力が陽炎のように揺らめき、番えた螺旋の矢へごうごうと流れ込んでいく。

全ての準備が整った。

セイバーはアーチャーの気配を読み。

渾身の一撃で巨剣を真正面から打ち返し。

微かに四半歩、よろめいた巨人を無視して。

死に物狂いで「射線」から飛び出した。

『カラドボルグⅡ
偽・螺旋剣』

第参章 11 解かない勘違い (F a t e編)

それは伝説に語られた剣^{しるし}。

『硬い稲光』と称えられたその名は「カラドボルグ」。

英雄フェルグスが携え^{たすき}、敵国の王の首を見逃す代わり、三つの山の頂を切り落としたとされる至高の一振り。

ウエールズの古い伝説にあるカレドヴールフと同一視され、中世中期の終わりから末期掛けて謳われた最も新しい部類の伝説、アーサー王物語に登場するエクスカリバーの原典。

古き故に新しき神々の属性に染まらず、ただただ強き剣として今なお語られる武器。

それが現代、東の果ての島国にて今蘇った。

たとえ剣としてでなく、歪に捻じられ矢としての形を得ていようと、魔術での複製によって僅かながらも存在の力は弱くとも、それが有する性質はいささかも損なわれてはいない。

そしてそれを握るのは世界と契約を交わすに至った正真正銘の英雄。たとえその成り立ちが英雄に対する反存在としてだとしても、彼の力は真実それに相応しい。

『カラドボルグ
偽・螺旋剣』

真名開放。音速の壁を遠く引き離しサーヴァントですら反応できぬ閃光となる。全てを切り裂くその刃は、螺旋の捻じれに従いありとあらゆる障害を切り決る。

確かに神秘はあの機体に打ち消されるのだろう。

しかし破る方法は幾つかある。

例えば、神秘しか打ち消されないなら、神秘を単純な運動エネルギーに変えてしまえば良い。そこらの瓦礫を飛ばしてもいいし、純粹に絶対に壊れない鈍器として死ぬまで殴りつけても良い。

中でも最も単純で原始的、かつ強力な方法。

それは“出力”で上回る事。

向こうが10の神秘を0まで薄めるなら物なら、こっちは50の神秘をぶつけてやれば良い。それで駄目なら100を、100で駄目なら200を、200で駄目なら300を。

障害があるなら力で崩せばいい。

確かに正面から馬鹿正直にぶつかるとは間抜けのすることと言うかも知れない。だが横や後ろ、上や下からというのは、同時に回り道するって事だ。最も早く、最も勢い良く力を叩きつける事の出来る方法というのは、小細工と同じくらい有効な手段である。

そして、英霊という存在は幽霊でありながら生身の人間を超えるような存在。

まして時間を掛けて準備に専念できるといふのなら、その結果は^{おの}自ずから知れる。

螺旋剣は一瞬で巨人へ噛み付き、抉り抜き、千切った。

絶大な威力を針の先端の如く細く細く束ね纏められたそれは、巨人を回避する間もなく捉え、聖剣すら弾き返した装甲を微塵の抵抗も許さずに食い破る。

衝撃すら殆んど無く鏡のように滑らかな断面を見せる風穴を開けられ、内臓を失った巨人はふらふらと二三歩よろめいた後、腹に響く音を残して倒れこみ沈黙した。

その強大な威力に、間一髪巻き添えを避けたセイバーも驚嘆の念を隠せない。

「これほどまでの威力とは……」

セイバーに答え、背後から声がする。

「なに、前衛がいなければ出来ん事だ」

そこには歩いてくるアーチャーの姿が。

彼はセイバーに並ぶと、倒れ伏した巨人をまるで宇宙人でも見るかのように眺める。

「流石にアレは死んだだろうな？」

「そう願いたいものですが、アーチャー、その台詞は何やら嫌な予感があります」

「フ」

「……セイバー」

「ええ……」

「フハハハハハッ!!」

笑い声と共に倒れ伏した巨人が光の粒子となって崩れ去り、輝きながら緩やかに渦を巻いて一点へと集まってゆく。

そこは乱舞する光の中に立つ青年の手の上。

差し出された鋼色をした掌にどんどん吸い込まれてゆき、やがて一際強く瞬いた後には、深い真紅の色をしたキューブが握られていた。「ハハッ、いやいや失礼、まさかやられるとは思わなかったよ。そうだよな、幾ら神秘が力を失うたつて限度があらアな」

感心したように一人頷くその身体には、一筋の傷も見当たらない。英霊達もこれには流石に納得がいかない。

彼が巨人の所に現れたのを考えても、あれに乗り込んでいたのは確かだろう。

だが人が乗り込むとなると胴体の真ん中より少し下、腹部だろう。元々が漫画の宇宙で戦うロボットほど大きくは無いのだ、操縦する物と言うより着込んで戦うSFのパワードスーツの様な物と、聖杯から与えられた今一必要とは思えなかった常識・現代知識のアニメに關わる部分から推察する。

だがあの巨人はアーチャーの真名解放で、腹部に頭が入りそうな貫通創を与えたはず。例え胸に入っていたとしても、よほど変わった体勢で入っていない限り身体はどこかが欠けそうなものだが――

「もう、いい（です）や……」

アーチャーは、セイバーは追求するのを諦めた。

ああも不思議な現象を次々に起こされると、下手に説明されるより

も出来る限り距離を置いてそつとしておきたくなる。
何より聞けば未来に希望が持てなくなりそうだった。

「さて、やられちまったし十分時間も稼いだ。夜も遅いし、俺は帰らせ
てもらおうぜ」

ひとしきり笑ったり頷いたりした黒川は、そう言つて一歩二歩と距
離を開ける。

その動きに反応して雰囲気が変わる。

今まで何処と無く気が削がれた様だった気配が冷たく重くなり、二
人の英雄が身を低くして獲物を構える。

その敵意の嵐を受けて、堪えた風も無く彼は飄々と嗤つた。

「そんな睨むなよ。ライダー目当てだったんだろが、まあ運が悪
かったとでも思いな」

「貴方は考え違いをしている」

彼の言葉をセイバーが即座に否定する。

「確かにライダーを討ち取れば僥倖だが、私達が気にしているのは
ライダーに攫われたサクラだ。彼女をライダーに喰わせるつもりか
!？」

「んん？」

黒川はここでようやく双方のすれ違いに気付く。

確かに知識をもう一度軽く漁ってみれば、セイバーのマスターとラ
イダーのマスターは非常に親密(?)な仲とある。

(これは、浅い所の原作知識を無作為に抓み食いした害か。

成程、これならライダーが彼女のサーヴァントと知らず、勘違いし
て助ける為に襲つて来るのは当たり前だな)

戦いながらもどこかライダーを気にしていたセイバーとアー
チャーの様子に、彼もようやく納得がいったのか、うむうむと頷いて
いる。

「なら安心して良いよ。彼女をどうしようってのは確かだけど、
悪くするんじゃないやなくて良い方にしようって話しだから」

「信じられるわけが無いでしょうー!」

「保証も無く信じられる話ではないな」

あつさりと否定される。

それはそうだろう。彼らからすれば、あくまで誘拐犯の言葉なのだから。

はいはいと完全に信じるほうがどうかしている。

ま、それならそれで別に良いけどね、なんて呟いた黒川さん。

気色ばむサーヴァントに警戒も無く背を向け、何かを撫でる仕草をしたと思つたら、まるで水面をつついた様に空間に波が広がる。

その中に躊躇無く差し込んだ手が、明らかに此処ではないどこかへと沈む。

目を疑う光景に慌てて駆け寄ろうとするサーヴァント。

しかしその時、一台のチャリントコが戦場に滑り込んで来た。

粉碎されたアスファルトに車輪を取られ、スピードもあいあまつて今にも転びそうにぐらついた自転車。

その後ろから飛び出したのは学校にいた赤い女の子、遠坂凜。

必死にバランスを取る自転車を蹴り飛ばして止めを刺し、運転手の悲鳴を背に宙へ飛び出した彼女は、空中で空間に半分沈んだ黒川目掛けて黒い呪いの魔力弾・ガンドをばら撒きながら叫んだ。

「待ちなさい！　桜を返しなさいよ!!」

もちろんガンドなんて低位魔術が、幾ら物理攻撃力まで持たせた”

フィンの一撃”と呼ばれるほどに昇華していようとも、エイヴィヒカイトの鎧を打ち抜ける筈も無く。

わざわざ彼がサクラを返してやる義理もない。

「じゃアな」

少女達との敵対を何の脅威とも思っていない軽い口調を残し、彼は至極当然のように“空間跳躍”なんて、魔術師にとって“魔法”レベルの事をしでかして消え去った。

第参章 12 新装拠点、新しい身体 (F a t e 編)

さてはて、今現在この廃洋館は盛大な大改装を終えたところだ。いつまでも隙間風の吹き込むあばら家では、連れてきたサクラさんの身体にも障ろうと言うもの。

どうせ昨夜の一件でナノマシンの数はかなりの規模まで膨れ上がっている。

唯でさえ追加装甲が付いているのに、前みたく全部装甲にしてたらずの内ダルマみたいになってしまう。

という訳で、だ。

遊ばせるのも何なので屋敷の改築に乗り出してみました。

当たり前だがガワは手をつけない。

目立ってしまうし、人が入った事が丸分りだ。

あちこち破れて雨風が吹き込んでいた窓も、外からは普通に見えて、内からの光を一切通さない不思議マドにはめ変える。

コレは異世界の魔術で構築した一品で、この世界の魔術に対する妨害術式が異世界の魔術理論で刻んである。使用する魔力の定義自体が全く違うので、いくらこの世界の魔術師がむにやむにややつても感知は出来ない。

これをやつとかなないと、電気を通した時に山ン中だから町中から見えってしまう。

そんな事になったら目立つ事この上ない。

次に建物内部。

館内はヒビを埋めて内装を薄くナノマシンで覆った。

埃すら落ちた端から分解してしまうので見た目は非常に綺麗だけど、こいつらは放って置けば壁や床などの建材を徐々に侵食して一体化する。

侵入者がいた場合は建物自体が生き物として襲い掛かるのだ。

正直言つて、家一軒の土台を含めた質量を、完全に飲まれた状態から如何どうこう出来るやつがいたら見てみたい。サーヴァントでも人型

である以上、無事に脱出するのは困難だろう。
そして最後。

最も重要な文明的な生活の基盤である、明かりや水道・火と言った
ライフラインは、ナノマシンが群体として組み合わさって新たな機能を
獲得、代行している。

うーむ、ナノマシン便利すぎるな。

本来は出来ない仕事も、ヌルの演算能力使って新しいモデルをデザ
インし、少数を書き換えれば後はそれを中心に鼠算式の自己改造で
あつという間に総モデルチェンジ。山中という事で資材も土中から
取り放題だし、時間にして半日もあれば生活出来るだけの設備が整っ
てしまった。

それで今、何をしているかと言うとだ。

「ご飯出来ましたよ」

おう。

ま、こういった感じでとりあえずコンロとか水道の確認を兼ねて、
サクラさんが昼飯を作って下さっていたのだ。生憎と病院暮らしが
長かった俺は料理など覚えるはずも無く、ライダーは碌に香辛料も無
かった大昔の人で、バゼットに至っては腹に入れば何でも等と言いだ
す始末。

バゼットは問題外にしても、四人もいて料理が出来るのが一人つて
のは反省するべきだな。その内に時間を作って料理でも習うかな。

俺自身特に物を食う必要は無い。存在するだけでエネルギーを消
費する生物という括りに入っていないから。

けど、いつか何か生物と一緒にいた時、そんな事じゃちと困る。

ああ、そういやバゼットに出したみたいにご飯自体を作りやいいん
じゃね？

と、思う方も当然ながら居るだろう。

ところがどっこい、あれは味が問題あり。

美味くも無く不味くも無く、計ったようにちょうど普通の味になる

んだ。

俺が料理できるようになれば違うのかもだが、今の所はそれが精一杯。

さて、期待の料理ですが！

洋風を中心にとつても美味そうな品ですな。

色鮮やかで、栄養も考えられている事が見て取れる。

「これまた上物が出てきたな」

「流石はサクラです」

モグモグ……

『バランスの良いメニューですね』

「いえ、そんな」

割と駄目な一人を除いた面々に、口々に褒め称えられたサクラは顔を赤くして恥ずかしそうにしている。

うーむ、事前にライダーから聞いていた内気というのは本当だな。

まあ、とりあえず食いますかね。

冷めると勿体無いし。

「頂きます」

「いただきます」

ガツガツ……

『私も消化器官があれば良かったんですが』

食材と作り手に感謝をささげ、箸を伸ばす。

うん。

おいし。

普段着に着替えたライダーも口元を緩めている。

バゼットは——言うまでも無いか。

和気藹々とした会話こそ無いが絶品と言って良い料理に、皆が舌鼓をうつ。

四膳の箸が忙しく動き回り、料理は次々と口に放り込まれて姿を消してゆく。

そうやって会話も少なくなのつと食っていき、用意された料理の

粗方が無くなった頃、サクラが改まった調子で話しかけてきた。

「えっと、黒川さん。ライダーから貴方が私を間桐から助けてくださると聞いたんですが」

「ああ、そんな敬語使わなくていいよ。」

君を助けるってのはそうだね。正確に言えばメデューサ、蛇の眷属に個人的な借りがあつてな。彼女に願ひ事は無いかつて聞いたら、あんなを助けてくれて言ったのさ」

サクラさんは慌ててメデューサを振り返る。

「ライダー……」

「気にしないでください、サクラ。私も願ひはありますが、それも彼が叶えてくれるそうですから」

「で、でも、そんなこと出来るの？」

「はい、彼なら出来ると思いますよ。少なくとも私はそう思います」
うむうむ。

少なくともライダーの保障で少しは信用してくれたかな？

「ま、そういう訳だ。その事で一つ聞きたいんだが、あんた今の蟲に寄生されたその身体、嫌かい？ それとも、そんなになつても母親に貰った身体は大事かい？」

聞いた瞬間ビツクリした。

大人しいと思つてたサクラさん、いきなり顔を上げてこつちを睨み付けたから。

「こんな身体が好きなのじゃないですか!!」

……もう綺麗なところなんてどこにも無いだから」

あく、まあ環境を考えればストレスどころの話じゃないわな。

「おっけーおっけー、了解了解。」

それだけ聞ければ後は簡単さね。これからちよつとぼかし眠って貰うけど、起きた時に期待しておいてくれよ?」

「え? は、はい——って、これからすぐにするんですか!？」

「そだよ。簡単簡単、至極簡単。じゃあやりますよ」

『待てい!!』

「あん？」

とりあえず眠って貰おうと手を伸ばしたら、何か凄いいしがれ声が聞こえた。

はて、今手を伸ばしてる先から聞こえたんだが？

『儂は心の臓に巣食っておるのじゃぞ、余計な手出しをすれば桜の命は無いと思え！』

おお、蟲になった爺さんか。

確かにサクラさんを解放したら容赦なく分解するつもりだったけど、それが分ってるから止めに出てきたんだろうね。

に、してもだ。

「喋れたのな、蟲なのに」

サクラさんも嫌悪で顔が歪んでらっしゃる。

よっぽど爺さんが嫌いなんだな。

「まあ良いや。サクラさん、やるよ」

とりあえず無視する事にする。

サクラさんも、改めて自分の体から蟲爺の声が聞こえて覚悟が決まったのか、精一杯だろう覚悟を決めた顔になっている。

『やめい、やめんか!!』

ちっ、やつかましいのう、この蟲。

さっさとヤツちまおう。

とんっ、と首筋を叩いて意識を飛ばす。

頭とか打たないように床に寝かせ、懐ふところからキューブを引っ張り出す。

これで素操作でもって綺麗な蟲に汚染されていない身体を作るわけだ。

普通クローンを造るには、当然ながらコピー元の遺伝子データが要る。

たけど彼女の場合、状態が予想してたよりずっと酷く、元の身体自体が半分蟲と融合してしまっている。

こんなになるまで汚染されると、正直な話し遺伝子が無事かは自信がない。魔術は家系で繋いでいくように、遺伝するのが分かる。それで彼女を侵したのは魔術の蟲。それ以外にも当然魔術的な手が

入っているだろう。

これでは遺伝子が生まれた時のままって可能性はかなり心もとな
い。

だが俺が行える素操作はかなりやり方が違う。

遺伝子ではなく、対象がどんな存在かを読み取り、それを元に構築
する。

存在情報の取得なんて言うのと凄く大仰おおびやうだが、俺自身が全ての存在
を作り出す外世界の物質製だから、別に見たり聞いたり魔術で調べた
りといった手間を掛けずとも、それがあると認識さえできれば自然と
分かってしまうのだ。

人間も、コレコレこういう材料を使ってこういう形でこういう能力
を持った物を作ってくれて言われたら、大体の想像はつくだろう

だから今回のように新しい体を作る場合、読み取った彼女の体の存
在情報から蟲や魔術に犯されたという情報の一切を無視して新たに
構築すれば、出来上がるのはその事実が無かった体が出来上がる。

勿論だが、このやり方は色んな世界で能力を収集する時と同じ方法
だ。

逆に考えれば、こつちの意思で新しい物を生み出したり書き換えな
んかも行えるという事。この場合は、まずどういう存在かを決めてか
ら適当に構築する。すると事前に決められた存在のものが出来上が
るわけだ。

ここで重要なのは、あくまでも最初に決めた存在がベースという
事。

例で言えば、皿という存在を作ろうと決めて構築したけど、ちょ
ろつと悪戯心が出てメガネの形にしてしまったとする。

この場合、見た目は完璧にメガネで、レンズとかは付いてるから結
果的にメガネとしての機能は持っている。だがしかし、確かにソレは
皿なのだ。

盛り難いだろうし、大した量を盛れる訳でもない。

誰もが料理を盛られたソレを見た瞬間、“それメガネじゃん!”と
突っ込むだろう

しかしだ、それでも本質は、魂的な点から見ればれっきとしたお皿なのだ。

閑話休題。

要約すると、身体作るのなんて難しくもないって事だ。

「つーわけで、完成かな？」

端が二ミリくらい欠けたキューブを仕舞いなおす。

今まで食器が乗っていたテーブルの上には、床に寝ているサクラさんとまったく同じ、ただし素っ裸の身体が一体乗っていた。

一応確認として直接接触で存在情報を比較してみたが、問題はないようだ。

「トウリ……？」

『マスター？』

あー、何かね君達、その背筋の粟立つ怒気は？

俺にはやましい気持ちなぞ一欠片もないぞ。

「貴方ではなくサクラの問題です。見ないでください」

今にも眼帯を外しそうな鬼がいる。

こりややべえ……

石にされてから半回転させられるのは流石に嫌だ。

すぐさま自分で背中を向ける。

というか、ヌルまでそんなおつかない声を出すなよ。

『私も女性型の人格です。そうである以上、見逃せない事もあります』
むう。

ハツキリ自分から意見を言うようになってきたな。

これはヌルの自意識の成長として喜ぶべきなんだよな？

今彼女の統括している超大型量子演算装置を初めて手に入れた時、それはまだ小さな小型の物でしかなかった。ヌルにしても制御をつかさどるOSとしての機能すら無く、単なるお助け用のインターフェースでしかなかった。だが、俺が次から次へと入手する技術を試用品も兼ねて増設・改良を加え、中枢の一部に外世界の物質を利用し、更

に数々の世界を渡った長い時間の間に自我が芽生えていった。

今のヌルは人格的に大分人間に近づき、それでも自身を使われる物、道具として認識している。酷く中途半端な道德観を持つ人間からすれば、自意思があるにも拘らず人間と同等の扱いをされていないと憤慨するかもしれない。

しかしそれがヌルという存在の原点なのだ。

それを否定するのはその延長に生まれた意思をも否定する事になる。

彼女は彼女で成長していけば良い。

ハードはこれからも弄る予定なので、また色々と大きくなったり小さくなったり、真っ直ぐ伸びたり捻じれて縮んだりきつとする。

でもヌルのデータには一切手を加えるつもりは無い。

あくまで自身で時間と経験をもって成長して欲しいというのが、長く一緒にいて、これからも長く一緒にいるだろう俺の願いだ。

『……おぬし、今何をしおった?』

おや、蟲爺がようやくまともな事喋った。

「サクラさんの体をもう一個造っただけさ。大した手間でもない」
『どうやって造ったのかと聞いておるのじゃ!』

「うるっせーなこの爺、どうでも良いだろんなこたあ。魔術魔術」

『見え透いた嘘を吐くでないわ!』

ほんっと喧しい爺さんだな。

一々相手にしてられんと髭ガンダムに使った防音魔術の要領で、真空の代わりに音を通さない概念を付加して再構成した空気でぴつちりと覆う。真空のままだとこれからやる処置に憚りはばかが出てしまうから。

防音機能付きの空気カプセルが出来た途端、それまで何をしたらのだ答えんかだのと上から目線で途切れる事無く喋ってた声がピタリと止まる。

これでうるさい思いをしなくてすむ。

何? 聞きたそうにしてる眼帯女に心まで男装した女だと? 知

らん知らん。

「テレレレッツテレー！ たましい捕獲ハンドゥゥゥ」

割と面倒くさくなりそうなんで、さっさと次の処置に入る事に。

しんつ、と静まり返る食堂。深海の底のような耳が痛くなるような静寂。食堂の誰もが固まっていた。

すべった？ まあ気にするな。

ポケットから取り出し、高々と掲げたるはごく普通の青い手袋。

懐から手を抜く瞬間に構築したそれは、どこからどう見ても普通のゴム手袋。スーパールの清掃用具コーナーに必ず置いてあるだろう定番のアイテムだった。

「しかーし！ これは魂を弄くれる魔法の手袋なのだ！ つー訳で、はいライダー」

「えっと、これで何をすれば良いのですか？」

「俺そっち見れないからな。やり方は簡単、手袋をはめてサクラさんの胸か頭に手を突っこんで、何か掴む仕草をしたまま手を抜いて。サクラさんの魂出てくるから」

「名前からもしかしたらと思っただけ、この掃除用具のような手袋は魂を掴む道具なのですか……」

「トウリはそう言っています、幾らなんでも疑わしいですね」

完全に達観した口調でゴム手袋を明かりに翳すメデューサ。

隣にいたバゼットも、光を薄っすら通すただのゴム製手袋へ疑惑の視線を投げかけている。

そこまで疑わなくてもいいのに。

今度はびよびよと引っ張ったり弛ませたりされているのを横目に見る。

しかし確かにアレをつければ魂なんて怪しいものが触れるなんて聞かされたら、人間だった頃の俺も”お前頭は大丈夫か？”と疑ってしまっただろう。

今更外見を手袋としか考えずに構築したのが失敗だったと後悔しても、時既に遅し。仕方が無いからひらひら手を振りながら説明す

る。

「大丈夫だよ。確かに見た目は掃除道具だけど、中身はまったくの別物だから。何て言ったつけ？ バゼットの教えてくれた」概念武装（？）」「とかいうのと同じ様な物だから」

「これがですか？」

そんな声を揃えて言わなくても。

「とにかく、頼んだ。取り出した魂は同じ風に新しい体に入れてくれ」
話が進まんじゃないか。

(さむい……)

夢現ゆめうつの中、身体がすごく冷たかった。

どれくらいこうしてたんだろう？ 体が芯まで冷え切っていた。
堪えかねて寝る時はいつも着ているパジャマを掻き抱き、上掛けを巻きつけて丸まろうとして気付く。

(ぱじゃま、きてない？ それにふとんでもない?)

背中に当たる堅く冷たい、何かの台のような感触。諦観に満たされた日常で、夢という逃げ場所だった温かな布団の感触ではない。

上に掛けてある物もいつもの毛布とは違う薄手のタオルケットのようだった。

頭に浮かんだのは、またお爺様の実験か何かかという事。

どちらにしてもこのままでは凍こえてしまう、そう思ったとき。

「サクラ、目が覚めましたか？」

ライダーの声でした。それだけじゃない、聞き馴れていない、でも聞き覚えのある男の人と女の人の声も聞こえる。

それで一気に気を失う前の出来事を思い出す。

そうだ、兄さんを殺して、でもライダーと私を助けしてくれるって言った男の人。私の料理を美味しいって言ってくれて、でも人殺しで、でも楽しそうにライダーと話してた、黒川冬理という人。

彼がこれからすぐに始めると言っ、それで気絶させられた。なら今は？

「わたしっ！……あ……身体、が？」

何も感じなかった。もう慣れ過ぎて違和感さえ覚えなくなっていた蟲が体の中で蠢く感覚。蟲蔵ひたに浸ひたされすぎて全身の神経が蟲と融合し、頻繁に発作の形で襲襲ってくる身体を中から犯されるおぞましい感触がいつもの事だった。

それが無かった。

まるで生まれ変わったように体が軽い。

私をずっと支配していた諦めと諦観。あれほど暗く冷たく、地の底に沈んだ氷塊のように思っていたそれが溶けていく。

「サクラ」

優しく、慈しむ様に呼んでくれたライダーの胸に飛び込んだ。嬉しくて嬉しくて、もう何が嬉しいのかさえ分からないくらい嬉しくて、溢れる涙が止まらなかった。

ただ、「良かった」と言っ、優しく抱き締めてくれるライダーの腕の中で、私がああ絶望から解放された事だけは鮮明に理解できた。

第参章 13 長き想いの果て (F a t e編)

サクラさんは泣き疲れて眠ってしまった。今はライダーが此方の用意した寝室へ抱いて運んでいったから、此処には居ない。

この場にいるのは俺とヌル、バゼットの三人だ。

そして彼女達の居ないうちにやることがある。

死体の処理だ。

目の前にあるのは、サクラさんが生まれた時から先程まで使っていた肉体。魂の引き抜かれたソレは、良く言えばただの抜け殻だが、悪く言えば俺が殺した人間だ。元々着ていた服はサクラさんが着るためにバゼットが剥ぎ取り、今は俺が造った身体の方に掛けていたシートで覆っている。

そのシートからでた手の甲には令呪が残されている。

マスター権の移譲で一画失い、残り二画のそれを返却された魂捕獲ハンドで剥がし、自身の手へと移殖する。

これはメデューサの希望でもあった。気持ち的にも主人はサクラであるが、ライダーのマスターになるという事は否応無しに聖杯戦争の参加者に命を狙われる事となる。

サーヴァントのマスターというのは、戦闘を行うサーヴァント本人よりも死亡率が高い。なぜなら宝具という一撃必殺級の切り札を持つが故に、サーヴァント同士の戦いはどう転ぶかが判らない。しかし、サーヴァントと人間であるマスターの力の差は絶大だ。最大で六連勝しなければならぬ聖杯戦争を勝ち抜く為には、堅い勝利を狙うのは当然だろう。

メデューサとしては願いが俺によって叶えられる目がある以上、明らかに不具合の出ている聖杯を命を懸けて狙う必要は無い。

そして、仮に狙われても勝利を得る必要がないメデューサは、己の敏捷Bランクと騎乗スキルA+をもって逃げ切れれば済む話だ。降り掛かる火の粉を払うだけの力もっている。

だがサクラがマスターに戻ってしまえばそうはいかない。サクラ自身がサーヴァントに狙われてしまうだろう。それに既に間桐の呪縛から解き放たれたサクラが、魔術師としての戦いを望むとは思えなかった。

だからライダーは令呪を保管場所として俺に預けた。

もしも目を覚ましたサクラが、どうしてもライダーとの繋がりとして令呪がいると言うなら即座に返却する事と、ライダーの仮マスターとして他のサーヴァントに狙われる危険を引き換え条件として、願いが叶うまで一時的に俺にも仕えるという。

まあ此方としては仕えるとか言われても、やって貰う事も御茶入れでもらうくらいしか無いが。

ただ一点だけメリツトがある。

偽臣の書の持ち主が聖杯システム上とはいえ正式なマスターとなった点だ。

“マスター権の移譲”という願いが履行不可能になった為に偽臣の書は消えてしまったが、それによって低下していたメデューサの能力が本来の値あたに復帰したのだ。これは自衛する上で非常にありがたい事だ。

メデューサ曰く。

筋力はBランクだが、怪力スキルの使用でAランク相当。

耐久はDと低いが、敏捷は最速のサーヴァントであるランサーと同等のAランク。

ライダーとしてのクラススキルで対魔力Bを持つ上に、俺をマスターとした事で幸運がサクラさんのEランクから驚きのEXランクまで上がったらしいのだ。

あゝ、確かに俺がこの存在になって生き延びたのは、俺と夏樹の努力以上に、バーゲンで安売り出来る位に奇跡うずたかが堆く積み上がった結果だったからな。こうして生き延びている以上、生まれ持ちの障害は不幸に含まれてないのかね？

ま、性格が変わったり行動が変わったりする訳でもないんだから、ココロ変わるような幸運値とやらが変化した程度じゃ大した影響

も無いだろ。

何はともあれ、令呪の定着を待つて改めて眼前の死体に声をかけた。

「——さて。」

蟲の爺さん、防音は解いたぞ。これからアンタごとその体を処理するが、何か言い残す事はあるかい？」

少しの沈黙の後、あのしやがれ声が聞こえてくる。

『——やはり、儂を殺すか……』

性も魂も尽きた、疲れ果てた静かな声だった。

バゼットがこの爺さんは500年以上は生きていると言っていた。

魔術師とは言え、エイヴィヒカイトのように他者の魂という、靈的エネルギーとしては最上級の代物を一切使わずに、それ程の延命を成功させるのは至難の業だ。それを成し遂げてしまうのだから、彼がどれ程まで優秀なのかは自^{おの}ずから知れる。

だが皮肉な事に、今はその優秀さこそが彼に絶望を知らせる。

此方に囚われてからはそれなりに時間があつた。文字通り死に物狂いになって状況の打開を凶つただろう。しかしそれに失敗した事は彼に“どうあつても逃がすつもりは無い”という此方の考えを、そして逃れられない自身がどういう末路を辿るかを悟らせるに十分に過ぎる。

「ああ、完全に殺す」

『……そうか』

「ほう？ 随分と生にしがみ付いてきた人間にしては物分りが良いな？」

『ふん。どの道お主がこの身体から桜の魂を抜いた時点で、この体に寄生している儂も終わりじゃ。この蟲の体では魔術を使う事も、逃げる事も叶わぬわ』

「——そうか」

長く生きた結果がコレだというのに、その声には呪いや呪詛といったモノが薄かった。全ての足掻きが無駄に終わり、普通ならすぐ傍ま

で来た死への恐怖で発狂などするのだろうか、まるで逆に狂っていたのが半回転してまともになったかのようにはつ。と、どこか力の抜けた呼気が洩れた。

「爺さん、あんた何で其処そこまでしたんだい？」

「其処」という言葉が何を指していたのか？

孫ですら道具として「使った」事？

五百年を生きて、人の姿を捨て去ってまで聖杯に求めた願いの事？
死肉を通す声は尋ねない。

『さての……もう儂自身、分からんわい』

「長く生き過ぎた、か——」

立ち上がり、床に横たわる死体に近付きその肩に触れる。

「アンタの孫の命を取った詫びじゃないが、一つ手向けをやるよ」
小さな火が灯る。

「——それじゃ、生の終わりだ。随分な長旅、お疲れさん——」

真紅の、鮮やかな炎が立ち上がる。

人肉の焼ける匂いも立てず、煙も熱も出さない炎が体を包み、焼いてゆく。

陽炎の代わり、立ち昇るのは枯れ果てた朽葉の色をした光の粒。
部屋を一巡りした後、開かれた窓を通り外へと去っていった。

「トウリ、手向けとは？」

「ああ……あの爺さんが一番帰りたい場所へ送ったんだ。それが何処かまでは知らんがね」

「——そうですか」

バゼットもそれきり喋らなかつた。

彼女の背後、テーブルの上で極小の結界に囚われていた地下室の蟲も、主の寄生していた身体が焼け落ちると共に静かに崩れ去った。

やがて炎が消え去り、そこには灰も残ってはいない。

肉は空へと還り、魂は光となって奥底に刻まれた帰るべき場所へと

去った。

やれやれ。

風の吹き込んできた窓を閉めなおしながら呟く。

「長生きつてのも、考えもんだねえ……」

街の外れ、中腹にお寺の建てられた背の低い山があった。

そこへ微かな輝きは降りていく。

木々の間を通り、落ち葉の積もる地面をすり抜け、山の中へと落ちていく。

やがて辿り着いたのは山中にある巨大な洞窟の空間、その下だった。

そこはかつて、とある一人の女性が己の夢の為、身をなげうった場所だった。

昔の話。

約200年前、四人の男女がこの非情な世界から「悪」を無くそうと試みた。

要求されるのは世界の理を変えるほどの大魔術。いや、そこまでいけば、

もはや魔法の域だろう。彼らは幾つかのプロセスを経る事で世界を騙し、全ての魔術師の目指す根源を得、それによって己が願いを叶えるつもりだった。

だがそれほどのシステム、しかもそこまで都合の良い物を易々と作り出せるはずも無い。

魔術師は考える。

魔術師らしく、合理的に考えた。

無いなら、有る所から引つ張れば良い。
創る事が出来ないのなら、有る物で代用すれば良い。
幸いな事に、ここにはそれがある。

第三魔法「魂の物質化」を成し遂げた家系の末裔が。

その肉体に受け継がれた魔術回路と魔術刻印が。

システムに必要な不可欠な、過去の英雄の魂を降霊させるための核となりうる基盤が最も身近なところにあつたのだ。

魔術師は苦悩した。

三百年を生きて、決して失いたくないと想つた相手を、自分達の夢の犠牲としていいのかと。

他の誰よりも“その後”の世界を楽しみにしていた彼女を、この手で生贄として捧げるのかと。

だが彼女は、自ら進んで願いへと至る道の礎いしずえとなつた。

だから。

だからこそ。

彼は諦める訳にいかなかった。

——いや、諦める等という考え自体、一欠片すら思い浮かばなかつた。

それは現れた願望器を巡って、仲間だつた者たちが一人残らず敵となつても。

彼女の末が呼び出した英霊によって、彼女が世界から消したいと願つた“悪”そのものに願望器が汚染されたとしても。

合わぬ異国での生活に、魔術師が最も執着する家系としての力を全て失つたとしても。

二百年をかけ、四度に亘わたる凄惨な殺し合いを経てもなお。

そのあまりに一途な想いは、決して変わらなかつた。
例え長い時間に晒され、見る影も無く枯れ果て、醜く変質しようとも、その根底は最後まで変わる事はなかつた。

二百年前、最後の儀式が行われた地へと光は降りる
洞窟の暗闇の中

瑞々しい輝きなど何処にも見られない、朽葉の光が静かに降り注ぎ
地に刻まれた回路だけが、迎えるように微かに、優しく瞬いていた

第参章 14 ヒトトキ (Fate編) + サー
ヴァント能力の考察

「ああ、やっぱり……」

その日の夜、サクラさんが起きないんで昼間の残り物を食った後、俺は部屋で一人唸っていた。

間桐邸撤退時に出くわしたセイバーたちとの戦闘中で、一点、気になる事があったんだが、サクラさんの爺さんを殺してから暇になり、これ幸いと部屋に籠こもって物語の知識に検索をかけてみたのだ。結果、少々残念な事が判明した。

「英霊ってあくまで歩兵なんだな」

まあ銃の無い大昔の人間や御伽噺の登場人物が召喚されるから、それも仕方が無いのだろう。英霊とは功績を残した人霊が、信仰などを得る事によって格が一ランク上がった存在だ。

つまりは人間の上位互換。

しかも信仰やらを餌に格を上げただけあって、自身の名前や物語を知る者の少ない、または居ない地域ではえらくパワーダウンするらしい。

基本的に過去の英雄が呼ばれるため、剣や槍といった原始的な武器による戦闘が主となる。剣を握る英雄なら遠距離は攻撃できず、アーチャーやキャスターといった例外的なクラスでさえ威力・射程共に対物ライフルの限界程度でしかない。ま、使い手が使い手なので、精度の方は桁違いなのだが。

いっそ宝具とかいう必殺技的なものを使えば話しは少し違うのか？

実際に交戦したセイバーが持っていた黄金の剣。あれが最高ランクの宝具だったのは驚いたが、それでも俺がいた世界の現代戦では威力以外、戦術兵器以下でしかない。

火力という点でも俺が見てきた他の世界と比べると、やはり低い。

必殺！ とか叫ぶとちよつとした都市ほどのクレーターが出来たり、本気を出すだけで辺り一面がマグマの海になったり、キレると星を破壊出来るようになったりする訳では決してないのだ。

それでも一固体が持つ能力として破格なのは確かなのだが……。

だがそれもしようがないだろう。

この世界では惑星という“星”自体が意思を持ち、己を殺しうる存在を片端から潰して回っている世界だというのだ。当たり前だが、そんな状況で技術が真つ当に発展するはずもない。

魔術にしても、やっているのはあくまで世界に刻まれた魔術基盤を利用してに過ぎず、根本的なところが発展していない。根源を指して研究などしてはいるようだが、何世代も掛けてルービックキューブを解いている様なものだ。

マナ（大源）やオド（生命力）、そしてそれらを魔術回路で変換した魔力の使い方を研究するのではなく、既にある魔術基盤の組み合わせを考えているだけだ。

それでは視点が近過ぎる。

「ふう」

知識の検索が一段楽する。

正直なところ、この世界ではあまり得る物は無さそうだ。

調べたとおり、純粋に能力で考えたらサーヴァントとはそれほど強力な存在ではない。

これは一つの事実だ。

この世界には“星”自体が生み出した吸血種と呼ばれる種族がいるが、その中でも強力な固体を27祖と呼ぶらしい。文字通り27の席に吸血種が座るのだが、その第一位『プライミッツ・マードー』は押さえ込むのに聖杯にクラスへと押し込まれていない、世界が召喚した、世界がバックアップする守護者が七騎は必要らしい。

この戦力差は単に七分の一どころではない。比類ない武功を立て、世界に認められた戦士達が七人で協力してなのだ。

では英霊とはその程度なのか？

否。

それは違う。たとえ聖杯にクラスという枷をはめられたとしても、彼らは十分に強力な存在である。その本当に恐ろしいところは、彼らを英雄・反英雄として成り立たせる偉業を打ち立てるだけの魂の強さだ。

どれ程彼^ひがの力に差があろうとも臆する事無く戦いを挑み、敵を打ち倒す。どれ程彼^ひに戦力差があろうとも怯む事無く戦いを挑み、一人で一国の軍勢を止めてしまう。

確かに彼らの個体能力は優れているだろう。だがそれは巨人族と並ぶ剛力か？ 数千・数万人に匹敵する武力か？ それはありえない。彼らは優れてはいるが、あくまで人間なのだ。

それでも夢物語と、不可能と断じられる業^{わざ}を成し遂げてしまう。限りなくゼロに近い可能性をひたすらに追い求め、常識を突き倒し、道理を蹴飛ばして手を伸ばし、遂には掴み取った存在なのだ。彼らの強さは俺が手に入れようとして得られる類いのものではない。

他にも概念兵装という概念を行使する物品は強力だが、俺は既に四つ前の全^{レヴァイアサン}竜の世界で遥かに優れた概念技術を学んでいる。

唯一ランサーが持っている槍の因果逆転の呪いが少し気になるが、あれは魔力効率自体は良いが、あくまで対象が心臓を持つ生物に限るという余計な制約がくっついている。残念だ。貫く場所を指定できれば対人間用としてかなり使えたのだが…

「ま、しょうがないわな」

もともと狙ってこの世界に入った訳でも無し、そこはすっぱりと諦めよう。良さそうなのがあったらラッキーというくらいで。

「サクラさんは目を覚ましたら、食事中にポロツと洩らしてた」先輩
“とやらの処に行くのかな？ メデューサの姉も探さないとだけど、それは戦争後で良い。と、なるとだ、サーヴァントで遊ぶのは当然と

して、バゼットの逆襲の露払いくらいかねえ。

「……………ありや？」

「これは…。」

「ヌル」

『お察しの通りです。昨夜、市街地にて交戦したサーヴァント二騎とそのマスターと思しき人間二人の反応が、距離約三千より近づいてお
ります』

「アクティブ・パッシブ問わず、探知魔術に引掛かった可能性は」

『No, ありえませんが』

「……………間桐邸とライダーが捕捉された地点から直線で結んだか？」

『妥当かと』

まあ元とはいえ家族だった人間が攫われたと思ってんだ、必死にもなるか。

こつちにサクラさんがいる以上、遠距離からいきなり屋敷ごと吹き飛ばしたりはしないだろう。

手としては、遠距離からアーチャーの狙撃による奇襲を仕掛け、迎撃に戦力が出たところをセイバーがマスター達を連れて一気に接近、サーヴァントが残っていた場合は一対一の形を作って、少年少女がその間に救出といったところか？

手で目を覆い、苦笑が零れる。

「ハッ、——やれやれだ」

幕の隙間 (考察についての追加)

始めに、感想を書いて頂きありがとうございます。

まず謝罪させてください。ライダーの過去話を書いた時に、この世界は作者が考えた平行世界としますってのを見えるところにも書いておくのを忘れてました。すみません。

あと作者はPC版の Fate とアトラクシアしか実際に読んでいません。ここら辺はご容赦を。

さて、様々なご指摘を戴きました。

全体的にサーヴァント・宝具の能力が低過ぎるとの事でしたが、私がこう考えた事には幾つか書いていない理由があります。

※作者は基本的に『月姫研究室 様』、『TYPE-MOON Wiki 様』のデータサイトをソースとして拝見させて頂いています。

●月姫& Fate と『Fate Zero』では公式発表の強さが完全に矛盾している。

『プレミアムファンブックにて、きのこさんがサーヴァントを戦闘機一機分と述べる。個人で対抗するには巨大すぎるが、街を壊滅させるには複数回の補給を要するとの事。よって単純な破壊力では近代兵器の方が上回る物が多いが、しかしサーヴァント達は基本的に霊体であるが故に通常攻撃が効かないので未だに最強だとの事。

ちなみにサーヴァント一騎あたりの力はアルクエイドの四分の一程度(猫アルクとの比較の場合だと二分の一だそうです。で、彼女と戦った場合二対一であればひとりが堪えている間にもうひとりが……といった感じで勝つ事も有り得ないではないようだ。

なお、この例え話におけるアルクの出力はコンプテイク2005年9月号掲載の無限の解析によれば、30パーセントを想定しているとの事。』

※サイト・月姫研究室 様より

ちなみにこの“無限の解析”はきのこさんも参加している。

しかし月姫のアルクエイドが墜ちて100%の性能を發揮した時、

その速度がF―1並みの時速360キロというのが作中の描写から分析されており、並の人間の10倍、志貴やシエル先輩クラスと比べても数倍の速度との事。

このように、きのこさんの“サーヴァント一騎あたりの力はアルクエイド（本来の30%）の四分の一程度”という発言と、Fate Zero基準の音速突破したサーヴァントの能力は明らかに矛盾しています。

ですが、そもそも『Fate Zero』という作品自体がTYPE―MOONの純正作品ではなく、ニトロプラスとのコラボレーション作品であり、熱いアクションをウリとする虚淵玄 先生が執筆された作品です。

公式サイトにも“虚淵玄版のFate”と明記されているように、基本的にFate Zeroはサーヴァントの能力的に、世界自体が平行世界的な別物と考えて良いかと。

● 士郎がアーチャー・ギルガメッシュ・数合とはいえバーサーカーと打ち合えている。

士郎がアーチャーの技術を得たのは分かるが、基本的なスペックそのものが変わるわけではない。指摘された投影で属性・剣に関係ない“筋力”を写し取るなんて真似をしていない状態でも、サーヴァントと武器で打ち合えている。

特にギルガメッシュの筋力Bと、ともに正面から切りあって負けていない時点で若干おかしい。士郎は固有結界を展開中で、他の強化魔術も平行起動するほどの余裕や器用さは無いかと。

確かに技術は力の差をある程度埋めるが、それは所詮ある程度ではない。物には限度というものがあるのだ。幾ら技術があつたところで、通常の学生の腕に一トン以上の衝撃負荷が一度ならず何度も掛かれば、骨や関節が間違ひなく砕けてしまうだろう。しかもギルガメッシュ戦に至ってはアヴァロンすら持っていない状態である。

ちなみに士郎のスペックは、

・ちよつと鍛えた身体

・魔力弱

・魔術は基礎の基礎すら知らず、投影は回路がそれだけに特化しているから、辛うじて可能

二次創作でよく見る “経験を書し取った。だから持ち手のように戦える”。

これ、魔術魔術で済ませないなら、恐らく別の属性の魔術となると思われる。

少なくとも属性が『剣』で無いのは確実だろう。『模倣』、とかになるだろうか？

重箱の隅をつつくようで、書いてて自分でももういいじゃんと思うが、つまりは演出なんだろう。

● 宝具について

あまり大きい威力とは作者は考えていません。

理由を幾つか挙げると、まず目立ち過ぎという点。幾ら隠蔽工作があろうとも、毎日のように爆弾が爆発したような音が連続し、挙句、夜に極太の光の柱が街中から立ち昇れば幾等なんでも隠蔽は無理である。ましてや雲なんかぶち抜こう物なら一撃でバレるだろう。マスメディアは大喜びである。

しかも夜に最初から宝具を撃って勝負を決めるのではなく、ご丁寧にも散々あちこち吹き飛ばして轟音を立ててから、一番目立つ宝具を使用している。ストーリー上仕方が無いのだろうが、分析する側としては前提である “隠蔽が出来るレベル” の戦闘であると考えます。

正直、魔術協会の敵である聖堂教会の監視下でそんな事をするのは、魔術協会の本部へ行つて “秘匿なんてクソくらえ！” と叫ぶのと大して変わらないと思う。間違いなく暗殺者が大挙して押し寄せ、管理人である遠坂家は処理されるだろう。

次に意外とエクスカリバーとエアの被害が低い事が挙げられる。

作中ではセイバーが何回もエクスカリバーを使用している。相手

はわりとギルガメツシユが多い。最初は手加減エアで迎撃されて、押し返されて吹き飛ぶ羽目になったが、その激突ですぐ脇に転がっていた人間（士郎）が全くの無事だったのである。

エアが近距離にいる唯の人間を碎かないほど攻撃範囲の狭い武器とは、英霊の運動性から考えても可能性が低く、ギルガメツシユがわざわざ配慮するとは尚更に考え難い。

エクスカリバーを押し切った手加減エアの余波ですらセイバーを瀕死に追いやった。士郎が生きているのが不思議である。

寺でセイバーへの止めもそうだ。

一度は妻にと望んだ相手を殺すのにあのギルガメツシユがみみちく手加減するとは思えない。放たれたのは全力の『天地乖離す開闢の星（エヌマ・エリシユ）』だろう。

対してセイバーの防御手段は『全て遠き理想郷（アヴァロン）』。使用者を別世界に隔離して被害をシャットアウトする宝具だが、当然ながら一人用である。

仮にも対界宝具に分類されるエアの全力が、人一人分の範囲しか攻撃しないという事はまさかあるまい。盛大に色々と巻き込んだはずである。

にも拘らず、そういった副次的な被害描写は作中見渡しても殆んど見受けられず、山中の洞窟も崩れていない。

またエアが作り出す空間断層も、数メートルから数十メートル程度なら許容されるかもしれないが、仮にも世界自体をあまりに大きく切り裂いた場合は、即座に抑止力が出現する可能性が高いかと。抑止力は確実に勝てる戦力で現れるので何が出るかは分からないが、もし出現したら確実にギルガメツシユは捻り潰されるだろう。

世界“ガイア”の修正は世界の一部を変質・塗り潰す固有結界も修正してしまうとある。固有結界に時間制限があり、展開後の維持に大量の魔力が必要なのも修正に対抗しているからだ、とか。

ちよつと塗り潰しただけでこれなのに、時空間レベルで大きく引き裂いたりしたら……。

「世界もエアだけ優遇してはくれないんじゃないかな、と。」

抑止の守護者は人が大きく死ぬと出現し、世界の抑止力は世界のシステムに逆らうと出現する。システムは世界の維持が目的の型月世界で文句無しに最強の存在であり、世界を盛大に切り裂こう物ならそれはそれはおっかないのがやってくるだろう。

■ところで27祖が三騎士なら安心とかどっかに書いてあったでしょうか？　そもそも心臓貫いたり体を消し飛ばしたりした程度じゃ殺せないのが27祖じゃ……

公式発表は無いが、アルテミット・ワン　タイプ・ガイアではないかと言われる第一位・プライミッツ・マーダーは、そもそも守護者7騎いないと対抗できないってのが、冬木の聖杯戦争のモデルになったと大手の解説サイトだと書かれています。（月姫研究室　様、TYP E—MOON　Wiki　様）

※アルテミット・ワンは星の意思の代弁者であり、その星全ての生命体を殲滅できる能力を有する、とある。

他にも水星のアルテミット・ワンにして型月世界で次元違いの戦闘力を誇る最強生物『O R T』を始め、死徒の能力を得た魔法使い『キシユア・ゼルレッチ・シュバインオーグ』、“死”そのものを与えられながら復活できるアルクエイドの姉である『アルトルージュ・ブリュンスタッド』、最高で666の幻想種が出せる、まともな状態のアルクですら殺しきれないとされる『ネロ・カオス』、勝つ負ける以前に単なる事象となっている『ワラキアの夜』、一対一ならほぼ確実に相手を消去できる五次真アサシン発展系能力を有する『エル・ナハト』。

彼らにアルクエイドの四分の一、プライミッツ・マーダーの七分の一とか言われてるサーヴァントが対抗できるとは到底思えません。

そも“平均的サーヴァント相手にガチンコが可能な存在は？”という疑問に対して、コンプティーク2005年9月号掲載の無限の解析におけるきのこさんが、『27祖ならほぼ全員』と回答しています。戦えないのは人形師である『ヴァンIIフェム』のような、戦闘自体に向かない27祖かと。

——書いてるうちに何書いてたか分からなくなってきた……。

とりあえず、PC版Fateを基準に若干のリアル補正が入ったオ
リジナル世界と考えて頂ければ幸いです。

駄文が長くなりましたが、沢山の問題点の指摘とアドバイスをあり
がとうございます。

次からは、情報のソースを明記して頂ければ助かります。

このような好き嫌いの分かれそうな作品ですが、もし御眼鏡に適い
ましたら、また読んでみてください。

第参章 15 剣の葛藤 (Fate編)

闇に包まれた山林を黄金の影が駆ける。

両の腕にそれぞれ荷物を抱え、凄まじい速度で木々を潜り抜け、道無き道を軽々と走破する。

既に弓兵は単独行動へ入った。

時間の余裕はない。

「セイバー」

「はい、此方でも捉えました」

右の腕に抱えられた凜が闇を見据え声を出す。

夜の山肌を飛ぶように駆ける、気の弱い人間でなくとも失神するよ
うな光景に全く怯んでいない。それどころか凍えるような雰囲気
の下に、焼けるような怒りの気配が潜んでいる。

少女の度胸に幾度目かの感心を抱きつつ黄金の影は応える。

「シロウ、アーチャーが迎撃側と戦闘に入りました」

左腕に抱えられた己のマスターに知らせる。

「あいつの方に行ったのは？」

「一騎よ。アーチャーがライダーだって言ってるわ」

「じゃあ残ってるのは……」

「ええ、あの良く分からないヤツよ」

士郎は知らず歯を噛み締め、拳を握る。

未来から召喚されたと言っていた男。

セイバーとアーチャーがそれすらも怪しいと言っていたが、止める
間もなく慎二の首を切り落として殺した上に、桜を攫ったライダーに
も協力していた。それどころか学校の時あの男がライダーを連れて
行ったから、桜を攫ったのもあいつが命令したのかもかもしれない。

友達が殺され、家族にも近い後輩は攫われたのだ。

士郎は未熟ながらも『正義の味方』として、あの男に心底から怒っ
ていた。

セイバーもまた、攫われた少女を救う為に疾走しながらも未だ己の迷いを捨てられていなかった。

八騎目と呼ばれたイレギュラーはあの軽薄な口調で言っていた。

“聖杯戦争のシステムはオシヤカになってる”
と。

そしてこうも言っていた。

“必死に殺しあつたところで、出てくるのは間違いなく碌でもないモノだろうよ”
と。

死後を世界に預け、たった一つ望んだ願いがまた叶わない？

それはセイバーにとつては筆舌に尽くし難い苦しみだった。
だがあの男がそう断ずるのも納得できるのだ。

セイバーにも心当たりがある。

前回の聖杯戦争、第四次聖杯戦争にてキャスターと呼ばれたジル・ド・レエ。今思い返せば彼はどう考えても英霊などではなかった。

しかし、元は彼もまごうことなき英雄だった。

フランス百年戦争にて、かの“オルレアンの戦い”を聖女ジャンヌ・ダルクと共に戦い抜き、戦争終結の功績者として『救国の英雄』とまで称えられた稀代の将軍だったのだ。

しかし戦後、ジャンヌ・ダルクは政に^{まつりごと}利用される。

その果てに罫にかけられて囚われ、異端者として宗教裁判にかけられる。

理由は彼女が聞いたとされる天使の声の真偽と男装について。

だがそれは建前だ。

その裁判にて一度は宗教審理にて認められた『天使の声』を、ジャンヌ・ダルクを排除しようとする敵対派によって固められた宗教裁判にて『悪魔の声』と断じられた。

結果魔女とされるも、神に懺悔しその御許へ帰依するとして一度は

許される。

しかしジャンヌは教会の牢ではなく、軍の牢へと入れられる。

四日後、再びジャンヌは男装を身に纏っていた。

敵対派の牢での性的脅威に耐えかねた彼女は男装に戻り、それによつて『異端再犯』として極刑とされる。

誰よりも信仰篤^{あつ}かつた少女は、かの宗教にて「最後の審判の際に復活すべき体がなくなる」という何よりも忌避される火刑に処される事となる。

泣き叫びながら神に助けを求めていたという。

更に焼き殺されたのち、その神性を失墜させる為に蒸し焼きになった裸体を民衆に晒され、しかもそこまでしてなお、灰すら土葬として土へ還る事が認められず、川へと流された。

この彼女の結末が彼の、ジル・ド・レエの精神を病ませたという。己の居城にて黒魔術に耽溺するようになり、数百人の幼子を虐殺し、最後は縛り首ののち、死体を火刑に処された。

第四次聖杯戦争にてセイバーがまみえた彼は、神に裏切られたジャンヌ・ダルクを求めるあまり完全に狂っていた。その末にセイバーをジャンヌと錯覚し、子供を生贄に捧げて魔物すら招いていた。

あれを見て彼を英霊と思うものなどいないだろう。

誰がどう見ても悪霊の類いとは思えない。

そんな存在が英霊として召喚される事自体、この聖杯降臨の儀式が破綻している証拠となる。

かと言つてセイバーも、しょうがないと言つてすっぱりと諦め切れるような軽い願いではない。

もとより求めるものは過去すら変えることの出来る秘宝。

その荒野から針一本を探すような可能性に比べれば、使えるか使えないか分からないというなどという程度では諦めるに及ばない。手の届くところにあるのなら剣にて勝ち取り、それから確かめれば良い。

聖杯システムも、こうしてサーヴァントという規格外の神秘の降霊に成功しているのだ。その全てが狂っているというわけでもあるまい。

可能性が全く無いわけではない以上、諦めるつもりは毛頭ない。事実、昨夜は積極的な攻勢を否定したシロウに黙って単独で出撃まですた。

結果としてサクラを攫ったライダーを発見できた事は僥倖きようこうじつだった
が、本来の目的は果たせていない。

端的に言つて、セイバーは焦れていた。

戦わなければ願いを叶える可能性すら手に入らない。

だがあらゆる状況が彼女に、敵を打ち倒して勝ち取る、騎士としての戦いを許さない。

まるで前回の聖杯戦争のようだ。

そういう考えが脳裏をよぎる。

切継の指揮下で剣を振るった時と同じ。

頭を振って無駄な思考を振り払う。

シロウは切継とは、私を裏切ったあの男とは違う。

再び余計なことが浮かぶのを嫌うように、黄金の影はその足を心持ち早めた。

ザツ！

振動すら殆んどなく山を走る足が止まる。

抱えた二人を降ろし、油断無く抜き放った不可視の剣を構える剣の英霊。

その鋭く見据える先、夜の暗がりから男の声が響く。

「昨日の今日、それもこんな夜分の訪問とはな。忙しい奴らだ」

月光も当たらぬ暗闇から滲み出たのは昨夜剣を交えたイレギュラー。

恐ろしい事に、こうして目の前にしても気配を感じ取れない。それ

どころか信じ難いが、乾いた落ち葉の上を移動しているにも拘らず一切の音を立てていない。ここまでの隠蔽はアサシンの気配遮断スキルにも匹敵するだろう。

脅威なのはこれだけの技がスキルではないという事。

気配遮断スキルなら攻撃に移れば大きく隠蔽のランクが下がるという欠点があり、サーヴァントであるならそれで十分に察知・対処が可能だ。

だが純粹に己が技量でそれを成し得るこの男にそのような弱点があるだろうか？

最悪、サーヴァントでも気付かぬ内に死んでいるやもしれない。

そしてこの男は騎士のように正々堂々とした戦い方とは無縁だ。

(眼前に居る今ここで仕留めねば。潜ひそまれたら手が付けられなくなる)

改めてこの男の危険性が身にしみる。

その時、後ろに庇った主が常に無い険しすぎる声を出す。

「何で桜を攫った!! 桜は無事なのか!？」

「……………」

男は応えない。

それどころか問い掛けすら無かったかのように一切反応せず、セイバーにのみ意識を集中している。

「くっ」

士郎は血が出そうなほど固く握り締められた拳が振るえている。

だがここで彼に出来ることは無い。

「シロウ、凜」

「——ああ、分かった……。セイバーも無理をするなよ」

「衛宮君の事はまかせて。セイバーも気をつけなさいよ?」

一拍迷い、しかし事前の打ち合わせ通りに駆け出す二人。

手を出すかとも思ったイレギュラーだが、その気配は微かなりとも動かない。

「」

二人が森へと消えてからも両者はすぐには動かない。
否。

動けない。

不可視の剣を突きつけたセイバーは、眼前の青年がわざわざ剣士である自分の前に無策で出る訳が無いと警戒するが故に。

青年は目の前のサーヴァントをどうするか決めかねて。

(どうしたものか…?)

困った。

目の前に14・5歳くらいの女の子にしか見えないセイバーがいる。

それだけだったら何も問題は無い。

なんだが…、今の彼女はこっちに剣を突き付け、明らかに昨夜とはモノが違う気配を放っている。

簡潔に言えばだ、これ以上ないほど殺気立っている。

あれは完全に殺す気になってる。

鬼気迫るとでも言えればいいか、そんなある種の追い詰められた人間が放つ気配だ。

別に向こうがそういうつもりなら受けてたつのも吝かやんちゃではない。

此方を殺そうとしてんだ、きっちり殺してから魂喰って死体も分解する。

相手が張り詰めた顔をした小娘でなければ、だ。

「ヤリづれエ……」

ぼそつと本音が零れる。

ホントに。

せつかく手加減する必要が無くなったっていうのに、その相手がこ

れってどうよ？

しかもあの表情。

知識の中にあつた宝具『エクスカリバー』の使用も辞さないって表情だ。

幾つも不具合を抱えてんのに、そんな無理をしたら魔力切れでぽっくり死にかねない。

その挙句に『無念』とか言つて死なれでもしたら……

いくら俺でも後味が悪すぎるだろう。

《適当に相手をしてから撤退するのはどうでしょう？》

(仮にも英雄だ、あの様子を見るに絶対食らい付いて来るぞ？ 見ろ

よあの顔、状況的に足止めできればクリアだってのに、何が何でも首を取るって顔してやがる)

《やっかいですね》

(ほんとうにな。仕方がない、行動不能まで叩いてからあいつらに持つて帰らせよう)

(イエツラー)

Y e t z i r a h
「形 成」

ギシギシと軋みを立てて義手義足がその姿を変える。

そで袖を破き、すそ裾を裂き、聖遺物・機械仕掛けの蜘蛛^がその漆黒の鋭利な棘を顕す。

蘇芳が鼓動に合わせて脈動し、禍々しい瘴気を吹き上がる。

ついでにこつそりと求道型『創造』の要領で体を異界化、体内にてファースト・ギア
1 s t - G の概念核を生み出す。

『文字には力を与える能がある』

体の中から聞こえる声に、準備が全て整った事を知る。

「わざわざ待つててくれるとは、騎士道だか知らんが余裕だな？」
鋼鉄の甲殻と化した手足の調子を確かめつつ挑発的に嘲^{あざけ}る。

だがセイバーは挑発には乗らず、

「クラス・セイバー。」

貴方の名は？」

言葉少なに問うてくる。

「ああ、まだ名乗っていなかったか？」

「ええ」

「そりゃ失礼を。黒川だ。黒川 冬理。」

クラスで呼びたかったら、……そうだな、探求者シーカーとでも呼んでくれ、嬢ちゃん」

「いいだろうシーカー。だがその呼び方はやめろ、私を侮っているのか！」

「ハッ、そんな言葉が出てくる時点で嬢ちゃんさ」

「……我が剣を受けてまだそのような戯言が出るか、試してみるか？」

「あのガキ二人どうだか知らんが、嬢ちゃんは最初からやる気だろうに」

「——いくぞ、シーカー」

これ以上は問答無用と、セイバーの殺気が一気に膨れ上がる。

(やれやれ)

知識では彼女は本来、見た目通りの少女並みの力しか持たないらしい。だが魔力放出というスキルによって保有魔力を噴射、スラストとして利用する事でサーヴァントとしての高_{りよりよく}脅力・高機動を実現している。

だが今の彼女は致命的な問題を抱えている。

正式な主従制約でなかった為にマスターからの魔力供給がほとんど働かず、彼女の戦闘法の要である魔力が十分に確保出来ないのだ。

瞬間出力は何とかなるだろうが、エネルギー総量が致命的なまでに低い。

昨夜から間をおかず二度目の戦闘行動は、勝ち抜く事が目的のサーヴァントとして致命的な失策に近い。此方としては、逃がさないように適当に遊んでれば勝手に力尽きるレベルだが、それは下手したら最後の一撃とかやる可能性がある。

さっさと行動不能にしてしまうのが彼女にとっても後々の利になるか。

爆音にも聞こえる踏切から刹那で距離を詰めて来る。

上段に振りかぶられた剣はその剣身こそ隠されているが、敵を切り裂く烈気に満ちている。

一步前進しつつ迎撃のストレート、正面から剣を迎え撃つ。見えないう剣といえど、二回目の戦闘に加えて小細工無しの振り下ろしならば予想は簡単極まる。

衝撃波すら撒き散らして剣と拳があらぬ方向へ逸れる。

だがお互いそれは予想済み。即座に剣先が、逆の腕が翻り、返しの刃が敵の命を食い破ろうと疾走する。

「はあああああ!!!」

「ふっ、っ!!!」

いつぞやのランサーとの戦いの焼き直しか、振るわれる剣を掌で流し、拳で弾く。

夜の闇に眩しく火花が飛び散り、甲殻と刃が鎗を削る。

首を刈り取ろうとする刃を下から突き上げ弾く。同時に潜り抜けて胴を打とうとすると、瞬時に一步足を引きながらの切り下ろしが頭を狙ってくる。逆の手で払い除け泳いだ手を破壊せんと追撃すれば、手を強引に引っ込めながら強烈なショルダーチャージで骨を砕こうとする。

豪腕と言って良い力を持っていながら妙に駆け引きが上手い。というより、退く場所を間違えないのが強みか？ 搦め手や凄まじい技量に裏打ちされた類いの一撃が見られず、純粹に打ち合うタイプの剣技しか使っていない。

純粹な技量そのものは目を剥くといったレベルじゃないな。桂師匠のが何ほかおつかない。逆に言えば、この戦い方は魔力噴射によって得られる単純な力を最も効率よく扱う戦い方だ。

最速で最大威力を。

下手に技量に頼るより、よほど彼女の強みと合致するだろう。

東洋武術の使い手と戦った事なぞないと思うのだが、それでも十二分に食いついてくる。

エイヴィヒカイトの装甲へ更に硬気による防御を展開、剣自体の破壊を狙ってみるが、呆れた事に刃が毀れる様子こぼが欠片も見られない。

いくらなんでも物質として存在する以上、構成物の耐久を超える衝撃を受ければ壊れるはずなんだが……？

理不尽な事に此方の拳とぶつかる度に『火花』という剣の欠片が飛んでいるにも拘らず、一向に剣に変化がない。

一応ながら火花は飛んでいるのだから、完全に不壊ではないだろうが…。

あの理不尽が分子単位での再生か補填ほてんか知らぬが、あれを折りたければどうにも一撃で押し折らねばならんらしい。

それは少々面倒だ。

戦闘の方向を変える。

先手こそセイバーが取ったが、所詮万全とは程遠い刃。

俺からすれば当たった所でなんて事も無い。

少々強引に剣閃の間に割り込み、体で抉くじ開けるように距離を無理矢理縮めていく。

セイバーは剣士だ。

クロスレンジ（ショートレンジとミドルレンジの中間）でこそ“剣”という武装はその真価を発揮する。それは“剣”という武器の形そのものが、そうあるように造られているからだ。

逆に言えば無手での格闘戦距離となるショートレンジは、“剣”が本来の性能を発揮できる距離では決していない。代わりに使い手が剣の柄で打つなどの戦法でカバーする領域となる。

だがサーヴァントレベルの戦場でそこまで踏み込まれたら、それはそれなりの痛手を覚悟しなければならぬという事だ。

歴戦の剣士たるセイバーもそれを重々承知しているはず。

縦横無尽と剣を奔はしらせ、間合いを詰める此方を押し返そうとしてくる。

（付き合う必要も無いな）

捌きながら冷静に判断する。

そもこの剣撃は俺に負傷をもたらすか？

否。

真名開放ならいざ知らず、この程度でエイヴィヒカイトを超える事は叶わぬ。

ならば…？

一際大きく火花が咲く。

「なっ!？」

驚愕するセイバーに、その表情を観察する余裕すらある俺。

無理も無い。

一際力強く、昨夜とは違い確とした体勢から放った全力の攻撃。袈裟に切り込んだ己の聖剣が、服にほつれすら作る事無く止まっているのだ。当然俺も衝撃など無かったかのように後退すらしていない。

自分と獲物に自信を持つ者ほど精神的な衝撃は大きい。

ぐっ

それでもセイバーが気を取られた時間などほんの数瞬。

だがそれで十分だ。

確かに肩口で止まっている剣身を風の結界ごと握り締め、結界を力尽くで握り潰す。

どがあ!!!

至近で、というより密着してコンクリを粉碎するような圧縮空気が炸裂するが、剣本体に耐える装甲がこの程度で揺らぐはずもない。

我に返ったセイバーが剣を取り戻そうと渾身の力を込めるが……、

「剣を捨てられんか？」

力を込めるのに握り締めたのを幸いとして剣ごと引き寄せる。

ようこそ、格闘距離へ。

「っく!？」

直感か？

遅まきながら剣を手放し距離をとろうとするが、今更だ。

柔過ぎる地面に代わり、大気中のマナを別世界の理論で直接操作して構築した頑強極まる足場を蹴る。セイバーが跳躍した瞬間にはもう目の前。

咄嗟の後退と渾身の踏み込み、速さが違う。
一撃で終わらせる。

豪打一閃。

力を足から腰、基点たる腰の回転で肩から撃つ。

錬気によつて跳ね上がった身体能力から鋼鉄の義腕が放たれる。

陽炎揺らめく下の甲殻には何時の間にか光を放つ『すごい』の殴り書き。

直撃、轟音

少女の纏った甲冑を紙一枚、いや濡れた障子紙一枚の抵抗もなくぶち抜き華奢な肉体へなんか『すごい』一撃が突き刺さる。刹那の抵抗も叶わず砕け散った肋骨の向こうで、内臓が幾つも弾ける感触を味わう。

「——か、ごぼっ」

ごぼりと大量に吐き出された血塊が腕を濡らす。

力を失った身体が腹に食い込んだ腕に凭れ掛かり、そのまま完全に意識を失う。まるで吐き出した血の分だけ軽くなったとも言おうかのような、酷く軽い体だった。

少し押せばそのまま仰向けに倒れこむ。

片手で握りこんだままだった黄金の剣を一瞥、詳細に解析するが、あまり有用とは思えずそのままデータバンク行きへ。

意識不明のサーヴァントとの繋がりを一時的に切断し、ため息とともに剣を無造作に“ホール”の中へ放り投げる。目が覚めて暴れられたら敵わんし、捕虜の武装解除は常識だ。

それにしても、やはり剣を放さなかつたか。

まあその選択も仕方ない。セイバーにしてみれば、あの一撃で傷を与えられなければ後は宝具での攻撃しか残されていない。その宝具たる剣を失う事は確実な敗北が訪れるという事だ。

剣を一時手放して、隙を見て取り返せば良い？

剣を握って対等の相手に獲物を失った状態で太刀打ちできるのな

ら、それもいいだろう。

それどころか彼女が第四次聖杯戦争で争ったバーサーカーのように、己の宝具そのものが奪われて自分に牙を剥く可能性すらある。

あくまで勝とうとするなら、どれ程可能性が低くともあの時剣は手放せなかった。

「そもそも最初から防御に徹して時間稼ぎしてればいいものを……。昨日の戦闘で一人では勝率が低いのは分かっていたらうに、無理に勝とうとするから歪みが生まれる」

だがまあそれよりも、だ。

「ちつ、思ったより弱ってたか？」

口元を鮮血に染め上げ蒼白でピクリともしないその姿は、どうにも少年達の用事が済むまで放って置くとそのまま死にそうな気がする。

何というか、見た感じでもう虫の息だ。

「仕方ないか……」

実験も兼ねて概念による治療を試みる事にする。

体内から概念核を放出する。

『文字には力を与える能がある』

再びの声。今度は何処とも知れぬ空間中から聞こえる。

まずへしゃげて腹を圧迫したままの鎧を^{むじ}塗り取り、下に着ている蒼い服の腹の部分を裂く。今あの少年達が戻ってきたら俺は酷く不名誉な称号を得かねないが、この概念で治療するとなると患部に触れなければならぬ。

また塗料を構成するのも面倒だと、とりあえず乾きかけの血を口元から指先へ拾い、どす黒く染まり若干裂けた腹部へと^す擦り付ける。

『ちゅ』『かいふく』

これで後は放って置けば直るだろう。

lst—Gの概念下ではあの言葉の示す通り、書かれた文字がその意味のままの力を持つ。しかもそれは間接的にも作用する。ジュースの入った容器に『毒の入れ物』と書けばジュースが毒になるのだ。

あの二つの言葉を書いておけば、魔力は回復せずとも負傷は綺麗に治るだろう。

ふう、とため息を吐きつく。

迎撃に出たライダーと屋敷で少年達を待ち受けるバゼットは大丈夫だろうか？

「やれやれ、だな」

『お疲れ様です』

耳に涼やかな労いの言葉。

ヌルの冷たく硬質な声が、今はとても心地よかった。

第参章 16 命の対価 (Fate編)

さて、目の前には本日得た捕虜が並べられている。

ここにいるのは俺だけ。バゼットは一応の警戒、メデューサはサクラさんと一緒に部屋に居る。

板張りの床に陸揚げされたマグロの如く転がるのは三人の主従。負傷は癒えたが魔力が危険域まで低下したため未だ目を覚まさないセイバーに、屋敷で待ち構えていたバゼットに襲われ、ぐるぐる巻きに捕縛された少年少女。

唯一、アーチャーだけが撤退に成功している。

森を逃げ隠れしながら攻撃するアーチャーにメデューサがかなり梃子摺り、最終的に逃げ切られた。

これはメデューサの失態というよりも、逃げ切ったアーチャーがおかしい。

本人は死ぬほど嫌っているが、メデューサは最上級の魔眼持ちだ。

神話にあるゴルゴンの石化の魔眼。この世界でも非常に強力とされる『宝石』ランクに分類され、知識によれば『宝石』以上の魔眼は、惑星の全ての生物を殺しつくせる星の意思の具現、アルテミット・ワンのタイプ・ムーンが所持したとされる『虹』のみ。

要するに実質、現存する最高位である。

魔眼を開放した状態のメデューサなら、アーチャーの対魔力Dでは視界に入った段階で問答無用で石化する。メデューサの勝利条件は恐ろしく簡単だ。

にも拘らず、森に潜んだとはいえ機動力で圧倒的に勝るライダークラスを相手に視認すら許さないと……

知識では二流とか才能無いかあるが、努力したといってもこの領域まで来れるんなら十分以上に凄いだろうに。

まあ、あのなんか凄い弓兵は放って置こう。

とりあえずは目の前の事だ。

バゼットが大分手加減したのか、割りとすぐに意識を取り戻した衛

宮と遠坂さんペア。

どうも昨日の戦闘では、二人纏めて一瞬で制圧されたらしい。無理も無い、相手は人間の限界を超えた身体能力を持ち、未熟ながらも錬気まで使うようになった歴代最強の封印指定執行者だ。むしろ抵抗できていたらそつちの方がびつくりだ。

二人ともおっかない顔でこつちを睨みつけている。これは猿轡は外したら煩うるせそうだ。

特に衛宮君の方は意識不明のセイバーの血を見てから物凄い殺気立ってる。

「あー……、君達は我々の捕虜になったわけだが、とりあえずすぐに殺したりはしないと告げておこう」

「んー！ んうー！！」

少年が何か喚わめいてる……

バゼットに本式の捕縛術で縛り上げられたから、声も全く意味を聞き取れない。

まあ魔術師捕まえるなら必須技術なんだろうね。

「まったく、何が不満なんだ？ お前ら殺しがデフォルトの戦争で捕まったんだぞ。泣いて喜ぶところだろうに」

ちなみにバゼットとライダー、サクラさんも交えて彼らの処遇は既に決めてある。

サーヴァント含めて殺しは無し。少々灸を据えてから放置しておけば、隙を見てアーチャーが勝手に助けていくだろう。

まさかアーチャーもそれが目的とはいええ、縛られている相手を斬つて捨てたりはするまい。

もしやっちまったら？ まあ……未来の自分がやった事という事で。

サクラさんは魔術に関わってるのをどうしても衛宮に知られたくないらしく、一室に閉じ込めておくフリをして、あいつ等が脱出する時に一緒に助け出される形にする事になった。

また会う機会があるか分からないから、一足先に別れの挨拶を済ませておいたが、体の事やらで此方が逆に気まづくなるくらいに感謝さ

れた。

(俺はアンタの爺さん殺したんだがな)

夜の知識検索で、あの爺さんが孫達の事を本心では大切に思っていたのを知った。だからどうしたという事でもないし、あんな扱いを受けた彼女に教えるつもりがある訳でもない。

ただそれを、聖杯に狂った事情も知った俺くらいは、爺さん死んでバンザイって思わないでおこうというだけ。

殺した俺の偽善というだけだ。

「……ふむ」

少年のもごもご言ってるのが止まらない。

とりあえず遠坂さんの方が理性的なんで、彼女だけ猿轡を外す。

「ふはっ、…ハア、ふう、けほっ」

ああなるほど、縛りをきつくして魔術を使う余裕を上手く削ってるのか。

どうやってんだろう、後で教えてもらおうかな？

「アンタたち、桜は無事なんでしょうね？」

「——ほんと、肝が据わってるね遠坂さん」

「答えなさい！」

「まだ何もしちやいないよ」

俺の言葉に堪えきれない安堵が浮かぶ。

だが、その顔も続く台詞に凍りつく。

「あの女の子にはしない。

が、お前等は別だ」

「ちよつと!?! さつき殺さないって言ってる、……まさか」

途中で気付いたららしい強張った声。

俺は衛宮少年の猿轡を外しながら肯定する。

「別になぶつたり拷問したりして遊んだり生体実験の素体に使ったりはしないよ？ 俺はね。代わりに命の対価としてそれなりのものを貰う。等価交換、魔術師とやらの基本だろう？」

そうだな、衛宮少年、君からはその特別な才能を貰おう。ああ、こ

れは君の呼び出した彼女の命も含めておこう。若干のサーヴィスだ。

遠坂さんの方は、——その刺青かな？」

「……………何の事だよ、特別な才能って？」

凄まじい仏頂面ながら聞き返してくる。全く心当たりの無い事を言われてやや興奮が収まったらしい。セイバーの呼吸が安定していて、傍目には眠っているようにしか見えないのも落ち着く一因かな？「君の物造りの才能さ。それを剥ぎ取れば君は魔術が使えなくなるが、死ぬはずの命に比べれば安いもんだらう？」

「……………本当にセイバーも殺さないんだな？」

「それは絶対に約束しよう。何なら契約を結んでも良い」

「——わかった。何で魔術が関係あるのか分からないけど」

うん、彼の性格なら乗るよな。

という事で、善は急げとミノムシ衛宮君の体の中へ手を沈めてまざる。

（ごごご、うごごご）……

ずるりと引き抜いた手に握られている網の様なもの、魔術回路そのものであり、彼の固有結界を構築する全ての要素。流石に精神的な部分は引っこ抜くと壊れてしまうので、そういう辺りはちよちよいとコピーをば。

だがそれを見てはつきり顔色が変わったのが脇に転がる遠坂凛。

体に馴染んだ魔術刻印など、ましてや魔術回路など簡単に取り外せるような代物ではない。仮に外せたとしても、それらの移植は準備を万端に整えた上で日を選び、執り行うような難易度の高い行為。

代々の魔術研究の結晶たる「魔術刻印」を貰うと言っても、それには移植するに見合う準備期間が掛かるのが普通だ。

ブラフか、そうでなくてもアーチャーが助けに入るだけの時間が十分にあると高を括っていたのだから。

彼女にとっての誤算は、俺がその難事を軽くやってしまう存在だった事だ。

完全に蒼白になっている。

手に持った薄く光る網をぐるぐると手の上でこねて丸める。
出来たのはビー玉サイズの光る玉。

固有結界『無限の剣製』そのものだ。

生憎と今は覗き込んでも剣なぞ欠片も見当たらないが。

エクスカリバーと同じくホールを開口、放り込む。

「さて」

…ほう？

振り返ってみれば遠坂さんは色を失った顔ながら、気丈にも睨みつけてらっしゃる。

ほんと、気が強いにもほどがあんだろ。

いや、これはただの意地っ張りなのかねえ？

どちらにしろ、子供ながらたいしたもんだ。

ゆっくりやるのも可哀想なんで、痛みが無いようにさっさと引き摺りだす。

ずるずると出てきたのは衛宮少年のとは比べ物にならないくらい
の大きさの刺青。シールのヤツみたいにその形のままで綺麗に取
れた。

少年のと同じように丸めてホール行きへ。

「にしても、子供が殺し合いに首を突っ込むもんじゃないぞ。

拳句に死ぬ覚悟も殺す覚悟も出来てないとか…、ホント何やってん
のキミら？」

「殺す覚悟って何だよ!? 俺は殺し合いなんて馬鹿な事を止めさせる
為に参加したんだ!!!」

心底呆れたって口調でぼやいたら、即座に少年が食って掛かってき
た。

目の奥には固い意志が垣間見える。が、硬いだけで強いわけじゃな
い。

「へー」

「へー、って、まじめに聞いてんのかよ！」

「ああわりの、戯言を真面目に聞くのって出来ねえんだよ俺」

「たわごとって、ふざけんな！ オレはッ」

「戯言だ」

いい加減やかましいやつだな。

血反吐の痕がべったり黒々と残るセイバーを指す。

「だったら何でそこに寝てる女は俺に瀕死うつつむにされた？」

泣いているのか、あれから俯うつむいて顔を上げない遠坂さんを指す。

「だったら何でそこに転がってる魔術師は一族数百年の努力を丸ごと全部失った？」

最後に衛宮少年本人を指す。

「だったら何で、お前は無力に転がっている？」

淡々と残酷な言葉の刃で敗者を切り刻む。

「お前は殺し合いを止めると言っているが、すぐ隣にいる仲間の参加すら止めてないじゃないか。その拳句が勝者による敗者としての搾取さくしゆ、いや、略奪にさらされる今現在だ」

いくら心的原風景が火災による地獄絵図とはいえ、法治国家日本で悠々と暮らしてきた十代の少年にはトラウマになりかねない抉り方。だが彼が原作のように『正義の味方』を指すなら、ここで一度押し折った方が良い。

助ける相手も、周りの仲間も、そして守るべき身内も、しかと目を見開いて直視出来ないようでは赤い弓兵のようなざまをさらす事になる。

「殺す覚悟ってのはな、殺さなきゃならない時に躊躇ちゆうちよ無く殺す覚悟の事だ。

仲間が殺されそうな時、最速で敵の息の根を止める。

爆弾を起爆しようとするアホの脳髓を一撃で消し飛ばす。

そういう一瞬の躊躇も無い必殺の覚悟だ」

現実には冷酷で残酷で純粋な法則で回っている。

越えられない壁など砂の数ほどあり、

叶えられない夢など星の数ほどある。

「殺される覚悟ってのは、そうやって殺そうとした相手に、そいつを助けようとした仲間に殺される覚悟だ」

それでも。

「清も濁も無い。生と死の天秤は吊り合っている。
そうやって俺達みたいな戦う人間は殺し殺される」
それでもだ。

「少年。誰かを助けたいなら、まず自分を助けな。
溺れている人間が溺れている人間にくっ付いたところで、水死体が
二つになるだけだ。

外に手を伸ばす前にまず自分の足場を、抛り所となる場所を創り
な。

でないと手を伸ばした相手を支える事も出来ないのだから」
そういう世界が、生まれた世界なんだから。

「視点を高く持て。俯瞰ふかんしろ。世界も人類も、他人一人すらお前とい
う人間が知るには大きすぎるのだから」

精一杯、やれる事からやるべきだ。

「身近な所から手を付けろ。なに、仲間が増えればやれる事は広がる」

——やれやれ、俺も何言ってたんだか。

知識があるってのもこうなると考え物だな。

青臭い事言うのは良いんだが、いや良くないのか？ とにかく恥ず
かしいよ。

「余計な事を言ったな。まあ、そもそも誰より安全な俺が死の覚悟を
どうこう言えるもんじゃないが……」

若干呆気にとられて二人ともこつちを見ている。

口を開こうとした衛宮少年を手で制して告げた。

「流石に拘束を直ぐには解けんが、これから一日ほど全員が出払う。
アーチャーにパスで伝えるなりして迎えに来てもらいな」

言うだけ言って返事も聞かず部屋を出る。

セイバーが上手い事早目に目を覚ませば、アーチャーが来るより早
く逃げられるだろ。

廊下を歩きつつ首を解ほぐしながら零す。

「さてはて、混迷を深める物語はこれからどうなるやら」

なんて、愉快犯的に事態をややくしくしてる節のある俺が言うこと
ちやないかねえ？

第参章 17 対峙 (F a t e 編)

現在、俺達はこの街唯一の教会へ向かっていた。

メンバーは俺とバゼット、メデューサの三人。

サクラさんは本人との打ち合わせ通り、屋敷の一室に外から鍵をかけて閉じ込めてある。あいつ等がアーチャーか起きたセイバーに助けられる時に、一緒に『救出』される事になる。サーヴァントなら屋敷内の素人の気配くらい分かるだろう。

でだ、教会に何しに行くかといえばまあ……

「コトミネ、首を洗って待っていないかい？ フフフフ」

とか脇で呟いてる人を見てもらえば分かるだろう。

ギラついたその気配は、何と言うか、こう、目を逸らしたくなる感じがすごい。バゼット怖すぎです。そしてコトミネとかいうヤツの未来に同情する。俺は助けられないんで、来世に望みをかけながら撲殺されてください。

にしても、バゼットの戦闘適正には正直驚かせられてばかりだ。

魔術による肉体強化を基盤に、ボクシングを主体にして徹底的に合理性を追求した格闘スタイルを操り、数々の戦闘経験で磨き上げた戦闘理論を持つ。

あの年でコレだけでも十分なんだが、俺に遺伝子^{エンジェラル}改造者に改造されて以来、必死に習っていた錬気を使った戦闘法がこの短時間で形になったのだ。順応力が並じやない。

ホルダーの錬気に関わる基本プログラムだけ取っ掛かりとしてインストールしたんだが、数えて二日目の朝、サクラさんの作った朝飯食ってたら窓の外でプログラム起動無しでシャドーしながら遠当て飛ばしてるのを見て、俺の口の中身も飛び出した。

今では錬気発動して俺が昨日戦ったセイバーと同レベルの身体能力、ジャブやらの射程が五メートル近くにストレートに至っては九メートル。その威力は岩を砕く。

——あれ？ちよつと、強すぎね？

ま、まあ遺伝子^{エンジェラル}改造が予想を遥かに超えて馴染んだのが原因だから

な。

あれはバゼットの身体自体が強かったから、改変された遺伝子側を逆にコントロールして上手く取り込んでしまったんだろう。若干非常識だが、鍛えられた生命力溢れる人間の場合、そういう事が在り得るのはとある世界でサイボーグの類いを研究した時に良く経験し、実感した。

昔の俺のように機械の方が馴染むというのは違うが、あの類いは生命活動に異物を取り込んででも生き抜こうとする生命力が物を言う。

生命力や生きようとする強靱な意志に欠ける者は、例え完璧な処置をしても、やがて生身の部分にストレスが溜まってそこから崩壊していく。逆に“何が何でも生きてやる！”って人間は凄い。医学的に判断してちよつと考えられない程の回復を見せたり、義体や代替内臓等の異物に対して完全な適合をみせたりする。

そのような事例を幾度もこの目で見ると、生命と意思は直結しているのだと思ってしまう。

思考など所詮は脳内で行われる電気信号のやり取りだ。そう思う者も多くいるだろう。俺自身、一時期はその考えに完全にかぶれていた。

しかし事實は事實。

心と体、揃ってこそその人間だ。

難しく考えずにいれば、意外に己の足元に真理は転がっているのかもしれないな。

何にせよコトミネ神父は哀れな事になるだろう。

昔は非常に強かったらしいが、第一線を引いてから鉄火場に出るのは随分久しいらしい。それに加えて前回の聖杯戦争での後遺症も患っていて、全盛期の戦いは到底無理だそうだ。

ご愁傷様である。

教会が見えてくる。

ここはそれなりに中心街から離れており、あまり街灯も無く薄暗い。

だが人影があるかどうか位は判別できる。

特に、槍なんて物を持った人影は。

「よう」

「青タイツ……」

二回目のエンカウントを果たした槍兵は、ピキッ！と待つてたぜと言わんばかりの表情を引き攣らせる。

「おいクロカワ、てめ」

「悪いごめん間違った。改めて……数日ぶりだな、ランサー」
いかんいかん。

初対面のインパクトが強すぎて、あの時の印象で呼んでしまった。

「——ランサー」

そこで、バゼットが進み出た。

「よう、生きてたかバゼット」

にやりとする槍兵。

そこには相手が生きてて良かったとホッとした感情など無く、単純に生き延びた事に対する賞賛しかない。生粋の武人、それも戦いくさが日常で、友が帰らぬなど珍しくも無かった戦士の生き方だ。

「貴方のお陰です。貴方が彼に教えてくれたから」

「あの傷で何日も生きてるとは思わなかったがな、流石だ。その腕、作りもんか？」

「ええ、これもトウリが用意したものです」

「そうか」

フウオン

肩に担かついだ朱槍がゆるりと夜の空気をかき回し、始めからそう在ったかの如く構えられる。ピタリとバゼットの心の臓を指した穂先からは研ぎ澄まされた殺意がほとばしり、その引き絞られた筋肉に鎧われた全身からは魔力と戦意が立ち昇る。

「なら——殺りあうとするか」

ようやくなのだらう。令呪によって掛けられた全力での戦闘を封じる枷が、ここに来てようやく外れたのだ。そして目の前にはサーヴァント一騎にモドキ一騎、己の主だった女傑が一人。

死して世界へ願った死力を振り絞る闘争の相手として不足無し。

担い手の気迫に呪いの槍も赤い魔力を吹き上げる。

「ライダー、頼めるか？」

「はい。あれとは相性が良い」

「任せた。危なくなったら無理せず呼んでくれ。」

……俺はもう一騎をやる」

俺の言葉にメデューサ、バゼットから驚いた気配が伝わる。

『私は感じ取れませんが、私達でランサーを倒した後にそちらも二人で掛かった方が良いのでは？』

メデューサが念話でたずねる。

『相手は対多を得意とする手数が多いサーヴァントだ。数の利はあまり有効じゃない』

一つ頷き彼女は納得の意を伝えてくる。

メデューサは数歩前へ、ランサーと対峙するバゼットの肩を掴み後ろへ押しやる。

「ライダー、彼は私が！」

「目的を間違えてはいけません。あなたが拳を向ける相手は教会の中でしよう？」

律儀に待っていてくれるランサーを一瞥し、唇を噛んで頷く。

「頼みました」

ランサーの脇を抜けて教会へ向けて走り去る。

そこに言葉は無い。

俺もその後を追おうとし、振り返ってメデューサの頭に手を載せてぽんぽんと撫でる。今の俺は四肢が聖遺物で、義手義足としての形状もかなり大振りでガッチリしているから背丈でみればメデューサを僅かに超える。だから女性としては長身なメデューサ抱えたり撫でたり出来る。

「死ぬなよ？　まだお姉さん達を助けていないんだからな。さつさと終わらせて追いついて来い」

言って駆ける。

ランサーはそれも見逃す。

当たり前だ、最速のサーヴァントである自身と同等の速度を持ち、己を超える筋力を持つサーヴァントが目の前にいる。余計な隙など見ればその刹那である鉄杭が頭蓋を粉碎し脳髓を吹き飛ばすだろう。

「相手はお前か、ライダー」

「――」

問答はいらぬ、といった感じでない。顔の半分を覆う眼帯から覗く肌が真っ赤に染まっている。どこことなく雰囲気もボーっとしている。どちらかと言えばライダーが隙だらけである。

「……おいっ」

苛立つ槍兵。

ようやく訪れた全力の戦いの相手が呆けているのだ。

朱槍の穂先が一切ぶれないのは流石だが、唯ただでさえ気の短いランサーはもう色々と限界だった。

「――あの人は、まったく」

正気づくように振られた頭に淡い紫の長髪がつけられる。

くすりと一つ笑い、呪われた象徴である忌々しい瞳を封じる眼帯に触れる。

「ランサー。申し訳ありませんが、早々に勝負を決めさせて貰います。主がお呼びですので」

バギャンツツ!!!

人外の速度で先を走るバゼットが教会の分厚い両開きの扉を蹴り

開けようとして、勢いというか力が余って盛大に蹴破った。それなり
の大きさの木片が素晴らしい速度で礼拝堂を蹂躪、天使や聖母の描か
れた高価なステンドグラスや燭台などを粉碎し、吹き飛ばす。

「コトミネ!!!」

勇ましく叫ぶが、追いついた俺にはやりすぎた? という表情が丸
見えだ。

そしてその名の持ち主は主の磔刑を表す像の前、祭壇に立ってい
た。

「ほう、バゼットか。このような夜更けにどうしたのかね?」

穏やかな笑みなのだが、どこか、というよりその笑みの源泉が腐つ
ている感じがする。元の元が嫌悪を催すものなら、そこから生まれた
ものにもまた、嫌悪を催すのは道理だ。

「……ここに来るまで、貴方を見るまで何故あのような事をしたのか
聞くつもりでしたが、もはや聞く必要は無いようですね」

こげ茶のスーツのポケットからルーンの刻まれた皮の手袋を取り
出す。両手に嵌めるとその皮が軋むほど強く握り締めた。どこか男
性的な魅力の漂う顔^{かんぱせ}を研ぎ澄まされた刃物のように鋭く引き締め、カ
ソックを身に纏ったかつての戦友を見据える。

背に負った筒には手をかけず、新たに手に入れた^{エン}遺伝子^{ジェ}改変者とし
ての身体能力をメインに戦うつもりのようなのだ。

「元代行者、神父・言峰綺礼。魔術協会所属、封印指定執行者・B a z
e t t F r a g g a M c r e m i t z. が、その首、貰い受けます」

その宣言を受けた神父はそれでも笑う。

「そうか。語る言葉が無いというのならば、仕方があるまい。ギルガ
メツシュ」

呼び声が聖堂に響く。

ごごつ、ごごつ。

と金属が石を叩く音がする。

聖者の像の影から現れるのは黄金造りの鎧を身に纏う最古の英雄
王ギルガメツシュ。

通称金ぴかだ。

オホン。

「つてわけで、俺がアンタの相手だ。金ぴか王様？」

「ほう？ 我を知っていた事は褒めて遣わす。——が、王たる俺に向かってその物言い。不遜だな雑種」

ふむふむ。

俺がギルガメツシュについて全く驚いていない事を気にしない、か。

器が大きいというのかねえ、こういうのは。

「俺の役目はアンタを殺す事なんぞでな。これから首を取る相手に不遜も何も無いだろう」

「雑種め、よくぞほざいた……」

「ここだとアンタにや狭いだろう？ 外でやろうぜ。建物が崩れて埃塗れにでもなったら興奮めだ」

「フン、よかろう。己が処刑される場所くらいは選ばせてやろうではないか」

警戒する事も無く背中を向ける。

知識に加えて実際に話して確信した。傲慢極まりないが、プライドも天を突くほど高い男だ。勝負を前に背中を襲うなど方に一つも可能性は無いだろう。

教会を出る。

来た方向とは別、メデューサとランサーの戦場と逆の方へ一分ほど歩く。

「ここでもいいだろう。準備は良いか、英雄王？」

「貴様……。よかろう、聞いてやろうではないか。

雑種、貴様は何者だ？ 未来より来た等という戯言は偽りであろう？」

顔には不遜な男への不快と怒り、そして僅かな興味。

「ああ。俺は別の世界からの旅人さ」

「ほう？ 何故オレの世界に来た？」

わざわざ聞いてくれた金ぴかにクフリと笑いが洩れた。

引き歪んだ口元。あらわな嘲笑。

黄金の怒気が天井知らずに膨れ上がる。

「——何がおかしい、雑種？」

「くっくっ、いやなに、俺の目的はな？ アンタみたいなヤツの力をサンプルにする事さ」

もはや怒りが臨界に達したのか、表情すら無くしている。

後一押しで糸が切れるだろう。

「特にアンタみたいなのは俺にとつて在り難いかぎりだね。なんせ大量の道具を満足に使いこなせもしない男が持ち歩いてんだ、鴨がネギを背負ってって言うのはこういうのを……」

「疾く死ね」

「へえ、こうなつてんだ。にしても、また随分と中身の数があるもんだな？」

「グオオオオオオッ！ 雑種ううう、き、きさま……！」

一緒に付いてきたゴミを投げ捨て、濡れた手で黄金作りの鍵を仔細に検分する。

構成そのものを理解し、機能そのものを理解し、存在そのものを理解し尽くす。手の上で転がすたびに粘性の高い液体が糸を引き、錆び付いた香りが鼻腔をくすぐる。

もう長い事嗅ぎ慣れて馴染んだ匂いだ。特に気にもならん。

「ヌル、格納先の亜空間の座標は確認した。内部に収納されている物の方はそつちで解析を頼む」

『イエス、マスター』

鍵の本来の持ち主へ視線を向ける。

黄金の鎧を身に纏った古代ウルクの支配者は、数歩離れた所で片手で反対の手の手首を握り締め、憤怒に身を焼き焦がしていた。

ぽたぽたと滴り落ちる滴しずくには本来の勢いが無く、それが鎧の守護によるものなのか、それとも別の装飾品による効果なのかは分からない。だが戦闘には大いに差支えが出るだろう。それなりの出血も勿論だが、なにせ肉体が物理的に欠損しているのだから。

「オ、オレの腕を……!!」

そう、さつき投げ捨てた先、金属音を響かせてアスファルトに転がったのは英雄王改め慢心王のおててだ。

阿呆な事にこの男は敵の目の前で武器でもない己の宝具を晒したのだ。

俺はてつきり鎧を着ていたから、原作のように『王の財宝』を展開済みなのだとばかり思っていた。だが初のお目見えとでも考えていたのだろうか？ わざわざ「我が宝具(うんちやらかんちやら)」とか

悠長に喋りながら鍵を空中に挿そうとした。

当たり前だが——隙だらけだ。

とりあえず活動位階の身体能力に錬気強化で一瞬で接近、手ごと鍵を握り込み、そのまま貫ってきた。

慢心せずして何が王か。

知識にて彼はそう言い放ったとあるが、その結果が籠手ごと握り潰され引き千切られた右手だ。その手首から先は覆う金属ごと搾り潰され、黄金と蘇芳に濡れた歪な固まりとなって地に転がり、今も黒々と見える範囲を広げている。所々奇妙な場所から折れ曲がった指を中途半端に飛び出させていて、それが奇怪な蟲のようにも見せていた。

『解析が終了致しました。詳細はデータバンクに』

「ありがとう、ヌル。」

そら、英雄王さん。返すよ」

手の平から摘み上げた鍵を投げ渡す。

きらきらと輝きながら飛び、狙い違わず王様の手に収まる。

「きさま、きさま……！」

すぐさま『王の財宝』が展開され、秘薬霊薬の類いだろうピンを取り出す。

同時に空間に大量の波紋が広がり、切っ先に鏃、穂先に金属塊と種々様々な武具の頭が覗き始める。

それらは世界を統べる王だった彼が生前に所有した数々の宝物。

それも宝物だからといって祭祀用や儀礼用ばかりではない。彼の伝承にて世界の富全てを得たという表現を拡大解釈した事で、その蔵には古今東西の武器防具、その原型が所蔵される。

その中には後世に語られる英雄達が振るった武具等も含まれており、彼らの伝承で語られる物とを“親子”の関係として表現すれば、親としてそれらを上回る力を発揮するらしい。

彼単体の能力は伝承に謳われるオリジナルの英雄王と比べれば、サーヴァントのステータスとしてはバランスこそ良いものの、圧倒的に劣化していると言って良いだろう。何せ神の血を引いて生まれ、幾

多の戦場を駆け抜け勝利を掴み続け、妖物を狩り、果てはエルキドゥと共に神が彼を殺す為に降臨させた神獣すらも打ち倒した存在だ。その武威は生半なまなかなものではなかっただろう。

それに比べればこの英雄王は己の所有する綺羅星の如き数々の武器すら十全に使いこなせず、練達の武威すら失い、出来る事といったら戦闘用でも無い倉庫型宝具から武器を次々と放出してその手数が多さで攻撃するという有様。しかもそれでいながら油断までしているという。何ともはや、楽な相手である。

英雄王は片手で器用にビンを開けて中身を飲み干し、万力で挟み潰されたような傷口から煙をあげつつ叫んだ。

「オレをなめた事、後悔して死ね！ 雑種うううううう!!!」

激昂した王の号令に応え、即座に百を超える宝具が弾雨となって降り注ぐ。

後に数々の伝説を打ち立てた英雄達の握った武器、その前身である原形が王の御意に従い敵とその周囲へと降り注ぎ、諸共もろともに吹き飛ばす。数回も掃射すれば山すら崩すのではないかという、英霊というカテゴリにおいても屈指の破壊力が炸裂し、大気を破裂させる爆音と共に地鳴りが響く。

鋼の雨は大地すら捲くり上げ穿うがち抜いたのだろう、もうもうと上がる土煙で破壊の痕は隠されている。

「ハア、ハア、ハア……」

クツ、クハハハハハ!! 見たか雑種よ！ 王に手をかけた事、死んで後悔するがいい!! ハア——ハツハツハツハ!!」

「ふむ、その台詞はちと拙速せつそくだな」

響き渡っていた天に届けと言わんばかりの高笑いがパタリとやむ。

比類ない膨大な出力を誇りながらナノサイズの操作が得意という“鳴神仁”の反則臭いサイコキネシスが巻き起こす暴風が、辺りを覆う土煙を一瞬で蹴散らし、現れるのは四肢を異形の鋼鉄と化した黒川冬理。

その体には傷一つ、いや、それどころか身に纏う服すら破れていない。

「ば、ばかな……。我が『王の財宝』に身を晒して無傷だと…!？」

ぱんぱんと軽くはたいて埃を落とし、顔を引き攣らせる英雄王へ見据える。

「さてと。」

それじゃア、お前の魂、貰おうか」

「くっー!」

ゴンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドントツ!!!!

まるで速射砲の重囲にでもいるかのように聖劍魔剣呪斧聖槍、ありとあらゆる武具の原典が雨霰と降り注ぐ。——が、

「おいおい、ムキになるなって。相手が悪かったと思つて諦めてくれよ」

破壊の嵐の只中であつてその姿は微塵も揺るがない。

それどころかりラックスさえしている雰囲気だ。何事も無いかのように歩きで英雄王へ向かつてゆく。

英雄王が壮絶な齒軋りの末に舌打ちした。

「雑種、貴様どのような手妻（奇術）を使っている?」

「特別な事は何も? アンタの攻撃が効かないのは、強いて言うなら軽すぎるって言え」

「よりもよつて我が財宝が、軽い」だとツ!？」

自分で聞いて来たんだろうが。本当に怒りっぽいやツ。

まあ、英雄王さんの性格なんざどうでも良い事の最上位だが。

「ああそうだ。アンタの財宝は確かに古今東西の伝説の武器の原典。確かにそりゃ強力だろうよ。」

だが俺の魔術は魂の強度で防御する。

さつきから飛んでくる武器は原典だ。だからこそ、俺に取っちゃ単なる、年の浅い、碌に血も積み重ねていない唯の武器」なんだよ」

金ぴかは再度の舌打ち。

それはそうだろう。納得など出来はしないが、その理論でいくなら『王の財宝』の中身は射出弾体として全くの役立たずになり果てるか

らだ。

だが、まだ英雄王には蔵から引き抜かれたばかりの至高の剣がある。

『乖離剣』

激烈な風を操って大気の断層を作り出し、擬似的な時空断層まで生み出す円柱状の奇怪な剣。その威力は強大無比であり、擬似的とはいえ時空断層まで発展した一撃は周りの空間ごと断裂する為、この世界の盾の類いではまず防御する事は適わない。

避けるにしろ、その攻撃範囲も「風」という特性上、目視による回避は望めず、またその殺傷範囲も剣と呼ぶに相応しくないほど広い。正しくこの世界で最強『威力』の剣だろう。

ちなみに知識には伝承にある混沌とした世界から天地を分けた究極の一撃とあり、ギルガメツシュが「生命の原初の記憶」とか「この星の最古の姿」とか自慢げに語っている場面があるが、勿論のこと、唾物である。

そもそもギルガメツシュが生きたのは星が生まれて数十億年たった後だ。もし知っていたとしても、それが本当ならこの慢心王は単細胞生物だった時の記憶があり、その単細胞生物は生意気にも世界を知る術を持っていて、海すら発生していない灼熱の溶岩塊だった惑星誕生初期に生きていた事になる。

まあ、都合の良い魔術かなんか(魔法の領域に食い込みそうだし、英雄王の伝承にそこまでの魔術師がいたとは寡聞にして聞かないが)で知ったのかもしれない。剣自体がお話して教えてくれました、とかいうのもロマンチックだが、生憎と俺はそういうファンタジーなのは夢の中だけにして欲しい側だ。

しかもだ、

そも言ってるのがあの派手好きな慢心王なのだ。

あまつさえ敵対者の兵器宣伝を鵜呑みにする方がおかしい。

そして重要だが、それで世界が発生したのは伝承の中だけのお話だ。他の伝説や神話や創世記では別の世界の成り立ちが語られるように、実際に世界をどうこうした物ではない。

ついでに時空断層は世界を天と地に分けたりはしない。当たり前だが右と左や上と下に裂けるだけである。更に言えばこのような世界に対する考え方は、世界が真っ平らだとする考え方が根底だ。星という球体を時空断層なんかで丸々削り抜いたら、内側の星本体はどこへともなく時空を超えて飛んでいきそうである。

む、最後辺りは夢もクソも無い完全に与太話になってたな……

いやはや、どうにも俺はにわか科学者って出が出なのか屁理屈臭いところがある。そこらへんが鼻につくって人も多いだろうから気をつけるか？

閑話休題。

ついに血管が千切れるほどに頭へ血を上らせた英雄王が乖離剣を振り上げる。

濁流の如き魔力の流れが螺旋を描く円柱へと雪崩れ込み、螺旋剣はその名に相応しく螺旋を描いて回転を始める。その石臼の様な音を立てながら回転する螺旋より猛烈な風が吹きすさび、豪風と荒れ狂う。

「これぞ我が最強の剣・乖離剣エア！」

止まらぬ歩みはちやくちやくと距離を縮め、もはや二人の距離は五メートルも無い。

やろうと思うのなら慢心王のお喋りの間に十回は心の臓を掴み出せただろう。

だが、あの剣の威力はこの目で見たい。

例え全く同じものが容易く作り出せようと、今ここにあるのは紛れも無い唯一無二のオリジナルなのだから。

もはや始めの余裕などなくなり捨てた英雄王は、『王の財宝』を完全に乖離剣へのバックアップに回し、全身全霊をかけた渾身の一撃を放つ。

「王の裁きを受けて死ぬ、雑種!!」

風はもう空恐ろしいと表現しなくちゃならない程にその密度を高

め、乖離剣から轟然と噴出する真紅の魔力と相余って目視すら出来そ
うだ。

『天地乖離す』

大上段の螺旋剣は既に超圧縮した大型台風と言って差し支えない。
漏れ出すだけで竜巻に匹敵する豪風が逆巻き、まともな人間なら近
くにいただけで千切れ吹き飛ぶ。いや、それどころか石臼で麦を引く
ように、単なる空気に磨り潰されるやもしれない。傍はたから見て本人が
吹き飛ばないのが不思議なくらいだ。
そして、

『開闢の星!!!』

英雄王、全身全霊を込めた最高の一撃が世界を裂いた。

(Briah——)

『創造』

そして、

(Mi·gar·r·V·lsunga Saga)

『人世界・終焉変生』

一瞬で打ち砕かれた。

空間に擬似的に発生した断層は薄氷の如く割れ砕け、霧散したエネ
ルギーが微かな光となつてはらはらと粉雪のように降る。

断層に突き込まれたのは黒い義腕。

世界に刻まれた裂傷を、微塵の抵抗も許さず一撃の下に打ち砕い
た。

「ば……馬鹿な……」

己の出せる全力すら歯牙にも掛けずに粉碎された。
その信じられぬ事実にも愕然となり、茫然自失する英雄王。
言語道断。

やはり戦闘者ではない。まあ「オレは王だ！」とか言うんだろうが。
刹那で背後へ、ホールから「炎の剣」を抜き膝裏へ当てる。回り込
んだ動きのまま再び王の目の前へ。その動きで滑らせた刃は黄金の
鎧の隙間へ静かに滑り込み、皮を切つて脂肪を裂き、筋肉を割つて腱
を切断した。

血の滴る剣を片手に王の前に立った時、彼はゆっくりと膝を着き、
そのまま前のめりに倒れ伏そうとしていた。

だが流石、己を世界の「王」と自負する気概は見上げたもの。

王たる者が地に手を着きひびきます跪くなど出来るものか!!

焼け付くような思考が叫びとなってESPの一、テレパシーを通じて
此方の心へ響き渡る。

だが腱を失った足は主の鋼の意思に反して屈し、体は星に引かれて
地へと倒れゆく。

その時。

虚空から奔った幾条もの鎖が彼の王の体を縛り上げ、地へと倒れ行
く体を支えた。

「エルキドゥ……」

王は己の体へ巻きつく鉄鎖を見下ろし、呟いた。

「——やはり王オレを支えるのはお前か、友よ——」

その首を、無情に振り下ろされた剣が断ち切った。

第参章 19 主従 (Fate編)

血振るいした切っ先から鮮血が飛ぶ。

力を失い足元に転がった死体から青白く虚ろな輝きが立ち昇り、苦鳴をあげながら男の体へと飲み込まれてゆく。

「――兵士に比べて概算五万人といったところか」

噴き出し夜風に舞う血霧に紛れた小さな眩き。

そこには少なからず喜びがあった。そう、まるで望外の幸運にでも恵まれたかのような。

『マスター』

噎せ返る程の香りに、僅かに高揚した精神を打つ言葉。

冷え切り霜が降りた金属。

それを連想させる女性の声が一言、体内に響く。

「――ああ、分かっている。すぐに向かうさ」

その前にする事がある。

そう告げて伏した骸を整えた。

斬首された首を拾い上げ、仰向けに寝かされた骸の傷口へ添える。

「魂の欠片も残っていない遺体だがな」

いつぞやの老人にしたように軽く触れ、炎をかけた。

激しい火勢に遺体は見る間に焼き尽くされ、身に着けていた黄金の鎧も、遺灰すら残らず燃え尽きる。

生憎と彼の時代に主流だった土葬はやめておく。

仮にも受肉した英霊の肉体。魂が残っておらずとも、この世界の魔術機関が放って置くわけも無いだろう。碌に日も経たぬ内に墓を暴かれ、遺体は盗まれて実験に掛けられる事になる。

殺し、その魂を喰った俺が言うのも何だが、それは愉快じゃあない。上前を撥ねるやつは嫌いだ。

痕跡が完全に、塵一つも残っていないのを確認し、踵きびすを返す。

百メートルと離れていない教会へさっさと駆けるが、既に援護が必

要かと考えていたメデューサが光源に乏しい入り口で待っていた。肩にメデューサ本人と同じか、それ以上の大きさの石像を軽々と担いでいるのは色々とシニールな光景だな。

今は眼帯をしているが、ランサーにはゴルゴンの魔眼を使ったのだろう。

ランサーはステータスでは魔力・対魔力、共にCランクだ。

対してメデューサが保有する魔眼は、朱い月が死滅している現在で最高位に位置される石化の魔眼だ。流石は遙か太古、起源は石器時代まで遡れる昔より崇められて来た大地母神キュベレーの魔眼。アテナの盾はこの魔眼の力をもって、天上の戦神達の間で『最強の盾』の称号を得るのだから。

相手が例え高密度の魔力塊である英霊であろうとも、この魔眼は神々ですら避ける物。ライダーというクラスの枷によって劣化していようとも、魔力・対魔力がBランク以上に達していなければ問答無用で石にされる。これに加えてアーチャーとの戦闘時と違い、今回の戦場は障害物の無い開けた土地だ。いくら彼が最速のサーヴァントと謳われるランサークラスとて、視認すら許さないというのは不可能事だ。

まあ、相性が悪いと言うのはこういう事を指すのだろう。

ランサーが弱いわけではない。それどころか、彼は正面からの戦闘なら最優と謳われるセイバーをすら屠るだろう至高の武人だ。

化物は民を脅かし、英雄は化物を打ち倒し、国は英雄を肅清する。

英雄の天敵は強大無比の力を持つ怪物ではなく、力を持たない人間の集団なのだ。

英雄とは“数”に弱い。当たり前だ。彼らもまた、人間なのだから。

例え一本一本は弱い剣だろうと、幾千幾万と揃えられたそれには、英雄も疲労に蝕まれ刻まれる小さな傷に血を流し、やがては力尽きる。

しかし、彼の武人は数少ない例外だ。

敵国の計略によって己以外の騎士団員全てが戦えない。着々と一

国の軍勢が長蛇を作つて故国を滅ぼさんと進軍してくる。そんな中、影の国にて師であるスカアハより託された魔槍ゲイ・ボルグを携え、たった一人でゲリラ戦を繰り返し知略を揮つて計略に陥れ、万を超える敵軍を相手に遂には故国を守り抜いて勝利した英傑が彼だ。

その武力は、馬鹿正直に戦えば到底メデューサの及ぶところではない。

それに元々戦人ではないメデューサは、戦士としての技量を備えていない。

当たり前だ。

そもそもが美しきで海神ポセイドンに見初められた唯の少女なのだ。ポセイドンとの交わりによつて神性こそ得たものの、それだけの少女でしかないのだ。

神殿に籠つてからは怪物退治の名声を求める侵入者から、同じく神に怪物へと変えられた二人の姉を守る為に戦いはしたが、それとて決して戦闘と呼べるものでなく、一方的に魔眼で石化させるだけの作業。

座に招かれてより幾度かの戦いの機会を経てはいるが、その戦闘法の基本は怪物となつて得た怪力に依存している。そこに戦士として血と汗にて磨き上げ、敵の骸と魂を積み重ねて築き上げた業は無い。

故に、彼女が振るうのは業（スキル）ではなく特性（アビリティ）。怪物としての体が備えた“性能”を振るう。

魔眼然り、蛇の持つ猛毒然り、猪の牙然り、青銅の手然り、黄金の翼然り。

生憎とサーヴァントとしてクラスに縛られて召喚された事で魔眼以外の特性を悉く失つており、その魔眼すらも魔力あるとはいえ神霊に届かぬサーヴァントにも抵抗を許すと随分劣化してはいるが、それでも十二分に強力だ。

加えて特性（アビリティ）は使用に様々な制約が掛けられている場合が多いが、その条件さえクリアしてしまえば絶大な効力を発揮する。

そして姉妹の神殿に攻め入った幾多の戦士達と同じように、戦士で

あるランサーには魔眼に対する備えが無い。

文字通り、“致命的”に相性が悪いとしか言えなかった。

「早かったな？」

「ええ。あのように期待されては、応えずにはいられません」

彼女が常に纏っていた硬質な雰囲気はほぐれ、笑みを滲ませて柔らかにそう言われる。何というか、千と百を超えようという年齢で今更だが、こういう表情を向けられると面映いおもはゆものが在る。

いやはや、二十歳にもならぬ子供でもあるまいし。

「幾分角いくぶんが取れたようだな。綺麗だぞ」

「ご冗談を。それよりバゼットは？」

うん、流せる余裕まで出てきたか。怪我も無いようだし、重畳重畳。バゼットによって破壊された扉の外、雨よけの下に立って柱に寄りかかる。

「バゼットとは教会の中で別れたが、ふむ？ ああ、少し離れた所にいるな。まだ戦闘中のようにだ」

「あなたの方は、もう一騎のサーヴァントはどうしたのです？」

「しっかり倒したさ。まともにより合えば厄介だったかもしれないが、油断慢心と隙だらけだったからな。予想外に簡単に片が付いた」

ふう、と一息をつく

「——何にしろ、互いに怪我が無くてよかったよ」

「あ、…はい」

彼女は本当に柔らかくなった。

さて、バゼットの戦いが終わるまではここで待つとするか。

負けはせんと思うが、あくまでアレは彼女の戦い。露払いはするが手出しはしない。勝利し相手の命を奪おうとも、返り討ちにあつて己の命を失おうとも、その結果はバゼットの物だ。

『マスター』

ヌルの声が響く。

メデューサもいるからか、体外に聞こえるよう空間を書き換えて大気に音を通してている。

「どうした？」

『反応が四、かなりの速度にてこの教会へと近づいております』

「四か。となると？」

『イエス。セイバー・アーチャーのペアです』

「やれやれ、きつこん 昨今の子供は元気が良すぎる」

仕方が無い。

出迎えるために歩き出す。

あまり教会の近くで戦って、バゼット達の邪魔にでもなったら元も子もない。

その後ろへ石像ランサーを教会の中へ放り込んだメデューサも続く。

うん、扱いが凄く雑だ。

あの状態で意識が有るかは酷く怪しいところだけど、もしあったとしたら碎けそうで碎けない体に心身を削る羽目になっていたな。

それにしても……

ふむ、知識にあつた第四次聖杯戦争といい今回の第五次聖杯戦争といい、ランサーというクラスにはデフォルトで呪いか何かが掛かっているのだろうか？

第四次に招かれたデイルムツド・オディナも第五次のクー・フーリンも、その願いは詰まる所、聖杯とは全く関係が無い。彼らの願いは“生前貫徹なかつた忠義の道を貫きたい”と、“己と同等の相手と全力で戦いたい”というものだからだ。

勝ち負けも、この儀式戦争の最終目的である聖杯すらも願いには入っていない。

叶える事はこれ以上ないほどに、至極簡単なはずだ。

何故ならそれは聖杯戦争として正しい方向性であり、また彼らの主人たるマスターにとつても都合が良いものだから。

しかし、現実には両者共に“マスター”という令呪による絶対支配権を持つ存在によって妨げられている。主にその性格と性根によって。

何と言うべきか、クラス・ランサーは幸運値とは別に運命的な部分

で酷く運が悪いと思ってしまおう。というか、実際に悪いのだろう。うん。

「セイバーに関しては武装解除してある。余程の事が無ければ戦闘には参加出来んだろうし、待っていてでも構わんが？」

「ここにいてもする事ありません。それに……」

私は貴方のサーヴァント使魔ですよ？

なんて言われてはね。

薄く笑った彼女の顔前二十センチ、手を伸ばして飛来した強弓を掴み止め、苦笑して降参を示す。

「挨拶も貰ったし、やろうか」

「ええ」

矢を遠い人影に投げ返し、主従は走り出した。

幕間

インターバル (F a t e 編)

遠坂凜は後悔という感情にあまり縁が無い。

勿論それは反省しないという事や失敗自体が少ないという訳ではない。遠坂家の血筋なのだろうか？ ここ一番の重要な点でうっかりポカをやらかすという呪いじみた特徴から大きな失敗には事欠かないし、彼女も己を省みないほどに傲慢ではなかった。

彼女の場合、逆にその体に溢れんばかりに詰め込んだ反骨心故に、失敗でよくよしたりせずにさっさと反省し、前に進んだほうがよっぽど良いと思うようになっていたのだ。

そんなかなで大きくなった現在、生まれ持った類い稀なる魔術の資質もあって失敗は徐々に減り、性格としても後悔というまったくもって後ろ向きな精神状態を好かなかった。

だからそれに蝕まれた経験など、そう多くはなかった。

しかし、

まさか高二のこの年になって死ぬほど後悔する羽目になるとは思いもよらなかった。

古い家が立ち並ぶ閑静な住宅街の一角に、昔ながらの木造平屋作りの衛宮邸は建っていた。常は、特にここ数日は人の出入りが激しく、また出入りする人物の穏やかならざる性格もあってその賑やかな声は庭と塀を越えて外へ響くほどである。

しかし、今はその家も火が消えたように静まり返り、暗く重苦しい空気に包まれていた。

「……………」

「……………」

「……………」

昼、いつもなら喧しいほどの喧騒に包まれる居間で、三人がもそも

そと昼食をとっていた。

内訳は家主の少年、昨日助け出された後輩の少女、そして少年の担任にして姉貴分であるタイガーだ。

「…タイガーって言うな…」

いつもの叫びも今日ばかりは元気が無い。

常ならかつ喰らうという表現がピタリと当てはまる健啖を見せるのだが、今は味気無さそうにしている。

別に料理自体の味が悪いわけではない。

ただ、やはり何となく物足りない感じが大きかった。

「先輩、遠坂先輩とセイバーさんはやっぱり食べないんでしょうか？」

少女が箸を止めて問いかける。

彼女も彼女で少々雰囲気暗い。

本来なら長年の忌まわしい呪いから解き放たれ、愛する人の傍へ帰る事が出来たのだ。忌憚無い本音を言えば、開放された喜びに任せてもつともつとアプローチをして、今まで抑えに抑え付けてきた思いの丈を彼にぶつけたかった。

だが流石に家人が沈み込んで部屋に籠ってしまった状況では、そうするのは不謹慎が過ぎると思う程度には正気ではあった。

「ああ。一人とも返事はするんだけど、食欲が無いって……」

返事をする少年。

彼自身はそう落ち込んでいない。魔術は使えなくなったが、元々成功率が実戦に耐えられるかどうかの『強化』しか出来なかったのだ。無くなったら無くなったで切継には申し訳ない気がするが、困る事と言ったら精々が機械の故障箇所が分かり辛い程度だ。

落ち着いて考えてみれば確かにあの男が言ったとおりの部分もある。いくら自分達が殺し合いを止めるつもりとはいえ敵に捕まったのだ。普通なら最低でもサーヴァントであるセイバーの命は取っただろう。

それを自分の未熟な魔術と引き換えに助けられたのだ。

自分と合わせて二人分の命に比べれば安いのだろう。命に値段を

つける事は全くもって納得がいかないが。

(そういえばあの黒川つてヤツ、あの時わざわざ俺にアドバイスみたいな事言ってたけど……。一体どういうヤツなんだ?)

桜を攫った事には腹が煮えくり返るが、肝心の桜自身が全く怒っても怖がってもいない。事実、かすり傷一つ負っていなかった。

本当に何で桜を攫ったんだろう?

改めて考えれば、命を狙う敵というにはどうにも見えなかった。

落ち着いたら落ち着いたで、お人好し回路が発動した少年は悩みだす。

三つ子の魂百まで。

彼のこの性分は死ぬまで直らないのかもしれない。

「遠坂さんもセイバーちゃんも、あんなに落ち込むなんて何があったんだろう……」

タイガーは一人何も知らず、けれど教え子と自分を上回る剣を持つ少女を心配する。

盛り上げ役が欠けた食卓、食器の小さな音が鳴るばかりだった。

遠坂凜は頭からかけ布団を被り、部屋どころか布団に完全に引きこもっていた。

「……ハア……………」

その口から零れるのは何とも力の抜ける憂鬱なため息ばかり。有体に言って、かなりの重症だった。

不意に部屋の中に気配が現れる。

唐突に、それも扉を開けた音や歩く音すらないとすると相手は限られる。

「…何だ、マスターはまだ引き籠もっていたのか?」

自分のサーヴァントが嫌味な口調で言う。

いつもだったら言わせておかないんだけど、今はそんな気力が無かった。

「フン、いつもの威勢も無しか」

だからどうだって言うのよ。

魔術刻印が無きや私は魔術師として三流、とは言わないけど、それでも二流まで落ちてしまう。確かに私が持つ生まれ付きの才能は凄いものだ。うぬぼれでは無く『五大元素使い（アベレージ・ワン）』とはそういった魔術属性だ。

それでも。

たとえ劣ろうと、魔術師の一生の研鑽の結晶を、数世代・数百年以上を積み重ねた魔術刻印とは私の『才能』など霞ませてしまうだけの、それだけの上積みをもたらす。

才能があつたとしても、たった16・7の小娘が一流の看板を上げていられたのも刻印の助けがあればこそ。

私はそれを失ってしまった。

それも打てる手をすべて打ち、有事に備えて溜め込んだ宝石を全て使ったのでもなく。

敵にサーヴァント以外の戦力がいないと思いつ込んで突っ込んであつさりと捕まり、命と引き換えにあつさりと奪われた。妹が攫われて頭に血が上っていたなんて言い訳にもならない。

自分のあまりの見通しの甘さに気が狂いそうだった。

刻印は戻らないだろう。

あんな風に魔術刻印を剥がし、掌でお団子みたいに丸めるなんて普通は出来ない。そんな加工をされた刻印を取り返しても、私の体に戻すなんて無理な話だろう。出来るとしたら、それは刻印を剥いだあの男本人だけだ。

セイバーとアーチャーを纏めて手を抜いて相手でき、セイバー一騎なら傷一つ負わずに無力化してしまう黒川とかいう男。

挙句にどうやったのか英霊であるセイバーから象徴たる宝具、彼女の剣を奪い取り、敵戦力にライダーに加えて凄腕の魔術師までいた。

対するこちらは戦力半減どころではない私にセイバー、見習い魔術

師の衛宮君に唯一まともなアーチャーだけ。

どう鼻肩目に見ても勝てる要素がない。

何より、次は見逃してくれない……。

「いい加減返事をしてくれないかね、マスター？」

「……うるさい」

泣き寝入りしないと今度は命が無くなる。

そんな状況が、魔術師としての合理的な思考が少女を苛さいんでいた。

本当にあの男が言っていた通りだ。

奪う、奪われる覚悟。

今まででもそういう機会はあった。一番近いところで衛宮君の時だ。でも、いつだって私は奪う側で、それも判断に迷えるだけの余裕がある状態だった。

けどそんな事に相手が付き合ってくれるはずが無い。

現にこうして命の次に大事なものを失った。

叶うなら、アーチャーに「そこに戦争があったから参加した」なんて言つてた馬鹿な自分を殴り飛ばしてやりたい。

本当に、後悔は先にたたない。

「ようやく喋ったかと思えばそれかね？ まったく、いつもの憎まれ

口は何処へ行ったのやら……」

「用が無いなら出て行って」

「用ならあるさ」

アーチャーが不意に真剣な、鋭利な刃物を思わせる雰囲気に変わる。

「君は聖杯戦争をリタイアするのかね？」

「——ッ」

言われた。

言われてしまった。

考えないようにしてた事を、真っ向から訊かれた。

「続けるわよ。アンタは何も問題ないじゃない」

「私が言っているのは君の事だ。誤魔化すな」
ぎりっ

知らず、歯軋りする。

「確かに私はセイバーや君と違い万全だ。戦闘に些かの支障も無い。

だが、私はサーヴァントだ。

主人である君が戦わないと言うのなら、私が戦う必要も無いだろう。幸い私の願いは聖杯と関係ないからな」

「アンタだけ戦ってくればいいでしょう！」

駄目だ、耐えられない。

布団を跳ね除けて飛び起き、あの憎たらしい皮肉げな笑みを浮かべるアーチャーを睨みつける。

「その年で耄碌したかね、マスター？ 私が言っているのはそうじゃない。戦うという事は“勝利を求める決意”だ。たとえ後方で拠点に籠ろうと、それで最終的に勝利を掴もうと思っっているなら、それは戦いだ。

今の君にその気概があるかと訊いている」

「——分かんないわよ」

やれやれ、なんて言っただけで肩を竦めているアーチャーが憎たらしい。

八つ当たりだっただけの自分でも分かっている。

でも、そうずけずけと痛いことを言っただけで腹が立つ。

「そういうアンタはどうなの？」

「ふむ。この戦いはバトルロワイヤルだ。サーヴァントが残るかぎり終わりはしない。よって私が狙われる事は明白だ。君が戦わないというならやられても別に構わんが、唯でやられるのも癪だ。精々が自衛するといったところだな」

弓兵は特に気負った所も無さそうに言う。

数日組んだだけの間だ、まだ知らない所など互いに山ほどある。

それでも、今の無様な主人を見て見捨てる選択を取らない彼は本当に聖杯に執着してないのは分かる。

皮肉ばかり言っただけで、態度も人を小ばかにした様ないやなヤツ。

でも優しい気遣いの出来るやつ。酷くわかり難いけど。

「ハア」

何だか力が抜けた。

それで、こうやっていじけてるのにも力が入ってたって事に気付いて、すこし可笑しかった。

真名は知らないけど、それでも世界に選ばれ、座に召し上げられる程の英雄英傑。そんな相手がわざわざ不器用に、不慣れな風に慰めてくれて、それでなお不貞腐ふてくされているなんて私のプライドが許さない。遠坂っていう魔術師じゃなくて、遠坂凜という私自身が許せない。

「いよっ!!」

ぱんっ

頬を両手で叩いて気合を入れる。

うん、こうやってても何も変わらない。

動けば何かが変わるかもしれないんだから!

「アーチャー、他の皆は?」

やっと目が覚めたか。口ほどに物を言う表情に少し、ほんの少しだけあつた感謝の気持ちが消えていく。

このやろう……

ふっ、とか鼻で笑ってるし。

「小僧共は昼食の最中だ。セイバーはまだ引きこもっている。あれから顔も出さんよ。君とはまた別の意味で重症だな」

「そう……」

「無理も無い。宝具とは英霊の象徴そのものだ。それを失ったとあつてはな」

「でも宝具は英霊にとって体の一部みたいなものでしょ? そう簡単に奪えるとは思えないけど」

「本来ならな。だが実際完全に奪われている。ラインどころか霊核そのものから宝具の存在が失われているらしい。それではもう——」
「霊核からって……。それじゃもしかして座に帰っても?」

「そうだ。英霊は座から降りる時、座にいる本体からコピーを作って送り出す。だが宝具そのものまでコピーされて増える訳ではない。英霊とて、役目が終わるか死ぬかすれば座へと戻り、回収されるのだ」
「じゃあ、セイバーは……」

「ああ。更に悪い事は、彼女は『宝具に依る』タイプの英霊らしい」
『宝具に依る』？

「どういう事よ？」

「簡単に言えば苦難の末に宝具を得たのではなく、宝具を手にしたからこそ、苦難の道を歩んだという事だ」

手にしたからこそ。

手にしてしまったから、英雄になった？

「剣身を一度見た。なるほど、あの剣の担い手なら領ける話だ」

「ッ!? セイバーの真名が分かったの!」

「彼女の、というより剣の名だな。彼女の持っていた剣、あれは聖剣だ。それも最高位のな。そして聖剣の担い手になる方法とさえば——」

「——剣に選ばれる。そう、そういう事」

「ああ。だからこそ、剣（根）の無い彼女は進む事ができない」

まいった。正直甘く見えた。

私と同じで負けて落ち込んでるんだとばかり思ってたけど、それって再起不能と変わらないじゃない。

「がんばれ、って言ったくらいで気を取り直したりしないわよね？」

「それで済むなら、私も諸手を挙げて喜ぶのだがな」

「いいわ、とりあえずそっちは衛宮君に任せましょ。彼のサーヴァントなんだし」

「了解した。同盟自体は解消するのかね？」

う……

確かにメリットは無いのよね。セイバーが戦えない以上、衛宮君は戦力になりようがないし……。逆に足枷になるばかりか。

でも、

「同盟は継続よ。正直メリットなんて無いけど、戦えなくなったからここでさよならってのは優雅じゃないわ」

「ふむ、確か家訓だったか？」

「そう、“常に優雅たれ”ってね」

「マスターがそう言うのなら良いがね、私は小僧どもの面倒は見んぞ」「ほんっと、何でアンタ達そんなに仲が悪いのよ？」

「さてな。あえて言うなら実力も無いのに夢ばかり見て、妄言ばかり吐いているところか」

「……ほんとに嫌いなものね」

ハア、もういいわ。

変な所で子供っぽいというか、意地になってるっていうか……

さて、とりあえず心配させちゃった衛宮君と桜の所にでも顔を出しますか！

衛宮邸。

その屋根の上に霊体化した弓兵はいた。

襲撃を警戒して唯一戦える彼が見張り役をしているのだ。

屋根の下、平屋作りの建築物では一階しかないが、その居間からようやくいつもの調子を取り戻した主人の声がある。

懐かしい声だ。

改めてそう思う。

ずっとずっと昔、その声を振り切って戦場へ飛び出していった過去が、擦り切れて掠れた記憶の中から蘇って来る。

だが先ほどまでの落ち込んだ彼女の姿は、記憶にもほとんど無い。

忘れたとか、そういうのも無い。

単純にそうだった事が無かったか、あるいはプライドが無闇に高い彼女が見えない所に行っていたからだ。

(そうだ、あんな遠坂は本当に知らない)

ぽそりと零れる。

実は顔に出してはいないが、弓兵も戸惑っていた。

目的は過去の自分の抹消。

己の手で過去の自分を殺す、その矛盾によって『衛宮士郎』という存在が歩いた歴史そのものを消し去り、座にある自身の本体を消去する。それが磨り減り、擦り切れた自分の望みだ。

だがこの聖杯戦争は自分が遠い過去に経験したものとあまりにも食い違っている。

始めこそ知るとおりだったが、あの暴力の化身とも思えるバーサーカーとそのマスターである自身の姉、イリヤスフィールとの遭遇から記憶と大きくずれ始めた。

その中心に居るのは八騎目として聖杯に呼ばれたという、黒川と名乗る男。

あのような存在は記憶に無い。

この歴史に紛れ込んだイレギュラーだ。

そこから聖杯戦争は全く別の道筋を辿っている。

正直な所、困惑している内に事態は混迷を極めた、といったところだ。

目的の士郎殺害にしても、どうやったのかは知らぬがあの男によって魔術ごと固有結界を失っている。幾ら固有結界が心に根差した物だとは言え、扱うには才能とそれに見合う下地が必要だ。心は弄られていないが、その他の部分がごっそりと無くなっている。魔術回路の方も神経を利用した擬似回路とする部分も、魔術的な要素が軒並み失われており、アレでは発動はおろか投影すら出来まい。

事こうなってしまうては、あの衛宮士郎が自分と同じ道を歩む事は不可能だ。ここまで食い違っていると、もはや過去の自分とはとても呼べない。この手で殺したとしても願いが叶う事など無いだろう。

返す返すも即座にあの戯け者の息の根を止めなかつた事が悔やまれる。

まあ良い。

こうやって有るか無いかの機会を待っただけだったが、今回の事で過去の自分に会う事が出来ると分かったのだ。忌々しいが、あの小僧を殺すのは一先ず置いておく。

無論の事、機会があるなら万が一に期待して殺しておくがな。

八つ当たりだが、己が身から出たものだ。精々苦しませないよう一撃で殺してやる。

それにしても、重要な問題がある。

うかうかと己の唯一無二の才能を投げ捨てた小僧には理不尽な怒りが湧くが、それ以上に気に掛かるのが、相手がそれを知っていた事だ。

才能。

そう言ったらしい。

ほとんど初対面の、ろくに会話も交わしていない人間の才能なぞ見抜けるものではない。それが特異なものであるなら尚更だ。

そして、衛宮士郎の持つ才能は魔術協会に知れば封印指定確実な代物。

本人ですら知らぬそれを知っていた？

(ありえんな)

それこそ本当に未来の存在とでも考えねば理屈が合わん。

衛宮士郎の人生は俺が誰よりも知っている。

だからこそ、気になる。

私は確かに世界に名を知られるようにはなっていた。

その大半が例え戦争の諸悪の根源としての宣伝だとしてもだ。

故に私と同じ未来人を名乗るヤツが私の名を知っている可能性は確かにある。

だが魔術は話しが別だ。

私は人を救う為に秘匿を破り捨て、一般人の前で魔術を行使した。結果、魔術協会から刺客を送られる羽目になったが。しかしそれは魔術協会による記憶操作などの隠蔽処理で隠されたはず。大々的に私

が魔術師だとは知られていない。

あの男も魔術師でもなければ知りようが無い情報だ。

だが、どう鼻真目に見ても魔術師には見えん。

(答えは出んな。知りたければ、やはり本人に聞くしかあるまい)

「はあ……」

何となく、溜息が出た。

「アレと問答せねばならんのか？」

脳裏を過ぎるのはゴリラに似た形態をしたロボット。

仮にもサーヴァントである自分の矢をもともせず、騎士王の聖剣すら傷一つ負う事無く跳ね返す脅威を超えて不気味な装甲。サー

ヴァントと同格に打ち合えるだけの速度に膂力。

脆くも崩れる己の常識がやけに憊く感じられる。

「はあ……」

幸運値。それは弓兵最大のネックだった。

幕間

インターミッション

「まず、これからの方針をどうするかね」

立ち直った遠坂凜は居間にいた。

タイガーは昼食休みに心配して学校を抜け出してきていたので、今いるのはセイバーを抜いた昨夜のメンバーである。

桜は巻き込みたくないという土郎と凜の意思に反して、既にライダーに誘拐されて少なからず言葉も交わしたらしい。土郎は知る由も無いが、元々魔術の家系に生まれて魔術師の家に養子に出された彼女は魔術の存在を知っている。それどころか、養子の目的は魔術回路の失われた家系の救済として、彼女をマキリの家の跡継ぎに据える為だった。

凜は知ってはいる。

彼女が魔術を学んでいる事だけを。

それがおぞましい蟲の寄生体としての『道具』であったとは知らず。魔術という分野そのものに隔意を抱いていると知らず。

だから凜は桜がここで話に加わる事を許したのだった。

「方針って言われても、俺は聖杯戦争を止めようとしてただけだし」

「正直、今のままだとそれはたんなる自殺よ。アンタは一人じゃサーヴァントに対抗なんて出来ないし、アーチャーは無事だけど、私も刻印を無くしたから魔術が使えないわ」

その言葉に衛宮士郎は少し引っ掛かる。

「待ってくれ遠坂。魔術が使えないって、魔術刻印が無い俺は魔術を使えるけどどういう事なんだ？」

「正確には使えないじゃなく、使い物にならないね。私が刻印を継承したのなんて随分昔だけど、要するにそれから長い間魔術刻印って物凄く便利な道具をずっと使ってたの。」

だから慣れきった道具が無くなった今、戦いの最中に慣れてない手間を掛けて魔術を使ったら逆に危険よ」

確かにそれはそう。

魔術刻印はブースターとしての機能の他にも魔術の補助、持ち主に代わっての詠唱とその機能は非常に多岐に渡り、魔術師にとっての有用性は人後に落ちない。

彼女は当然ながら長い期間その環境にあり、魔術を使用する時に当たり前に使いこなしていた。だがその当たり前は欠けてしまったのだ。戦場という危急の場で咄嗟に“いつも通り”の効果을期待したり、“いつも通り”の魔術行使を行ってしまえば、それは彼女ばかりでなく味方すら致死の危険に晒す事となる。

「だから実質戦力はアーチャーだけね」

セイバーが立ち直れば話は少し違うんだけど、と遠坂は若干顔を顰めて呟く。未だセイバーは部屋に籠っており、マスターである士郎が声を掛けても梨の礫だ。

主の隣に座るアーチャーが現状を纏める。

「つまり私一人で君達全員を守らなければならんという事だ」

打って出るには防御を捨てる必要がある、そうするには守る対象が多すぎる。

そう言っているのだ。

「衛宮君は止めるって言ってるけど、それをするにも力は絶対に必要よ。止めるって言って止める様な相手なら最初からこの戦争に参加してないわ。馬鹿が来たと思われて殺されるのが関の山。」

つまり、攻めるのは良いけど説得は不可能なの。余計な事をしていゝる余裕なんて欠片も無いわ。守勢に回るにしても時間で増える戦力は剣を失ったセイバー剣士くらいだし」

だからどうしようか、という話し合いをしようというのだ。

「う〜ん……」

「ふむ」

「えっと」

アーチャーは黙然と目を閉じて黙り込み、士郎と桜は考え込む。

最初に顔を上げたのは士郎だった。

「遠坂、この家って危ないのか？」

「へえ」

にやりと凜が笑い、見直したわ、と呟く。

「よく気付いたわね。」

正直なところ、わからないわ。ここ数日で一番動いてたのは私達だから他のサーヴァントがこっちに気付いてないって事は無いだろうし、キャスターやアサシン辺りにはばれてるかも。最悪、こっちの弱体化まで知られてる可能性もあるわ。だからずっとアーチャーに屋根で警戒して貰ってた訳だけれども」

ちら、と従者を見やる。

腕を組み、目を閉じたまま弓兵は口を開く。

「襲撃の気配は無かったな。例えばアサシンの気配遮断スキルだろうと、姿そのものが消えるわけではない。警戒に集中していればそうそう見逃しはせん。キャスターのレベルの魔術に関しては専門外だが、監視する視線は感じんな。無論、油断は出来んが」

「そういう事」

それを聞いて士郎は顔を顰める。

家が安全と言い切れない状態では、戦いへ行くのに桜を置いて行っても安全とは限らないからだ。彼女を危険かもしれない場所へ置いて離れるのは彼の性分が許せなかった。既に一度誘拐されたばかりなら尚更に。

「遠坂、どこかに桜を避難させられないかな？」

「ん、正直サーヴァント相手じゃ無理よ。この町を離れるのが一番だと思うけど……」

「あの教会は？ 確か監督官とか言ってたけど」

すると遠坂は物凄く嫌そうな顔をした。

「あんなヤツに預けたら絶対碌ろくな事にならないわ」

「確かに何か嫌な感じはしたけど、でも降参したマスターは教会で保護される事になってるんだろ？」

「うーん、アイツ性格は最悪だけど、確かに神父としてはしっかりしてるのよね」

なかなか決まらない。

すると、今まで黙っていた桜もおずおずと発言した。

「先輩、私は大丈夫ですから」

「大丈夫なわけあるか、もう一回攫われてるんだぞ？　大事な桜を危険な目になんてあわせられる訳ない」

「だ、大事な、ですか？」

「ああ、当たり前じゃないか」

「はいはい、ご馳走様。」

はあ。いいわ、桜は教会に預けましょ」

恋する相手の自覚ない”大事”発言に、顔を真っ赤にして固まった桜を見て凜が首を振る。どちらにするにしろ、この町を離れても確実に安全とは限らないのだ。それならば目の届く所で、力のある相手に保護して貰うのがベストとも思う。

「わかった」

「わかりました」

了承を返す二人を見て凜も頷く。

「じゃ、話を戻しましょ。って言ってもセイバーがどうなのか分からないんじゃないわ。衛宮君、無理矢理でも構わないから引き摺って来て」

「無理矢理って……。そんなの駄目だ、セイバーは今落ち込んでるんだろ？　だったら無理強いは出来ない」

そんな言葉に呆れの溜息が出る。

「あのね、今はそんな事言っられる状況じゃないの。今すぐにでも他のサーヴァントに襲われるかも知れないのに、肝心のこっちのサーヴァントが戦えるか分かりませんか話にもならないの」

「……わかった」

「頼んだわよ？」

やはり納得はしていない顔で衛宮は居間を出て行く。その際に茶菓子を抱え込んだのは、彼女の説得に役立つかもだからだろうか。

桜も心配げな様子で少し離れてついて行った。

「大変だな、マスター」

「何人事みたいに言ってるのよアンタ」

隣を見れば、瞑^{つむ}っていた目を開いた己の従者がいつもの皮肉げな態度を見せる。ホントに毎度ながら嫌味なヤツだ。

「同盟を解消しなかった事、後悔したかね？」

見透かしたような言葉にむかつ腹が立つ。

ふんっ、と一つ鼻を鳴らして持ち前の負けん気のまま言い切る。

「まさか！ ただ勝つんじやつまらない、これくらいハンデの内よ」
するとクツクツと笑い声上がる。

「クツ、ふふふっ。それでこそ私のマスターだ」

少し照れくさくなって、わざわざ発破をかけてくれた従者から顔を逸らした。

「当たり前よ。私は遠坂凜なんだから」

とんとん。

扉の叩かれる音がする。

私を心配する主の声も。

だけど、私の心は澱のように沈み、応える事もままならない。

アーサー王

たんなる少年が聖剣に選ばれた事から始まる、華々しい英雄譚。

強さと英知を備えた綺羅星の如き騎士達を従え、民を、国を守るために周り中の強大な侵略国家と戦い抜いた稀代の君主。

その最後は英雄らしく悲劇的なものだった。遠征の際に国は内乱が勃発、ズタズタに引き裂かれて滅亡し、王自身も決戦の地・カムラの丘で命を落とす。

とはいえ、彼の功績が無ければ国は遥か手前で他国に侵略され、とつくの昔に滅んでいたのだから。

ある意味、内乱で滅んだのはとても幸運な事だったろう。

時代柄、他国の侵略による滅亡なら、敗北した国の民という民は侵攻軍の暴虐に晒される。歳をとった者は殺され死体から身包みを剥がれ、若くたくましい男は奴隷とされ、女子供は犯されてから奴隷とされ、赤子は石畳に叩きつけられ殺される。

血に狂った兵士は指輪が欲しければ指を、首飾りが欲しければ首を切り落とす。

発端がどうあれ、それを免れた事まぬがは歓迎できる。

だが聖剣を持つ英雄たる王ではなく、ただ一人の人間として客観的にみた時、彼はどういった人間だろう。

戦に明け暮れ、妃に逃げられ、配下の騎士達は櫛の齒が抜けるように欠けていく。民への求心力も失い、終いには国内で起こった一地方の反乱すら鎮圧出来ずに死んだのだ。

仕方の無い事だった。あれが最善だった。

言い様はいくらでもあるだろう。

後の人間が分かったように。

そんな反感を持たれる考えだろう。

王は人にあらず。

誰かが言った。しかし王という椅子に着いたからと言って人間という生物を止める訳でも無し、どのように考え行動しようとも、あくまで人なのだ。例えその時は分からなくとも、後世にされる評価とは人類という種からの一つの指針となる。アーサー王は、はたしてどう評価さたのだろうか……

（——わかつている）

私は聖剣を抜き、王となった。

英雄譚にも語られるその生涯に、今の私はいない。

聖剣こそが英雄を選定し、英雄たる証であり、英雄を保障するもの。

それが失われた私は、もう思い出せないくらい昔の、剣を抜く前の子供だ。

(——わかつているから)

私を戦いに導こうとする声が聞こえる。

聞きたくないのに、耳をふさいでも聞こえてしまう。

お願いですから……

(——何の力も無い私に、重荷を背負わせないでください——)
どうか、

(……期待をかけないでください)

幕間

激昂と胃痛

セイバーが返事をしない。

どうにも襖の向こう、セイバーに割り当てた部屋からは何となく拒絶しているような感じがしていた。

セイバーをどうにかしろ、との命令を遠坂に言い渡された士郎は、引き籠もってしまった己のサーヴァントの部屋の前で困り果てていた。

悩む。

本当に遠坂の言う様に、強引に彼女へ接していいものかと。

だけど声を掛けても返事が無いのが現状で、確かに部屋の前でこうしてたつてどうしようもないのは事実だ。

それにセイバーがそんなに気に病んでるなら、マスターとして俺も励ましたい。

強引にはなるけど、遠坂の言うとおりの意を決して襖に手をかける。

「入るぞ、セイバー」

気負った心と別に、主従を隔^{へだ}てていた襖はあっさりとは開く。

セイバーは——、いた。

いつもならきつちり正座して凜とした雰囲気を出している彼女は、締め切つて薄暗い部屋の隅で、怯えたように縮こま^{うつむ}つて俯いていた。座り込んで引き寄せ抱えた膝に顔を埋めたその姿は……

愕然とする。

あのセイバーが、ひたすら真つ直ぐな、出会った瞬間から憧れてた彼女が……

信じられなかった。

かけようと考えていた言葉なんて一欠けも残さず頭から吹っ飛び、呆然と立ちすくむ。

「あ——セ、イバー？」

思わず口をついてでた言葉に、膝を抱えた腕が小さく震えたのが見えた。

それが、何かは混乱した頭じゃハッキリしないけど、物凄くシヨックで、これが言葉を失うって経験なんだろう、なんて馬鹿な考えばかり浮かんだ。

窓も障子が閉められたままだから日が入ってなくて、その中でセイバーの着ている白い服は良く見える。でも蹲うずくまったその背中も肩も、膝を抱えた腕も、全部細くて小さくて、そんな女の子にずっと頼ってばかりで、俺も自分の事でいっぱいばいばいでセイバーがこんなになるまで気付かなかったのが尚更なおよ情けなくて。

俺はあんなになるまで追い詰められたセイバーに何て言おうと、何をしようとした？

勝てないかもしれないから戦ってくれ？

部屋に籠こもっていてもどうしようもないから引きずり出す？

歳は知らないし力も俺とは比べ物にならないほどずっと強いけど、それでも自分より小さな女の子を当てにして、死ぬかもしれない戦いの矢面に立たせて大怪我させて、その拳こぶし句くまに言う言葉がもつと戦ってくれ？

爪が皮を破って肉を抉り、血が滴る。

こんなのが“正義の味方”のやる事か？

ふざけるな！

どうしようもないほどに自分に怒りを覚える。サーヴァントに勝てないから同じサーヴァントであるセイバーに戦って貰うのは当たり前なんだろう。でもそれは絶対正しい事じゃない。力があるから小さな女の子に戦わせて、主なんて呼ばれてる自分は背中に隠れてる？ 冗談じゃない、情けないにも程がある！

「——ごめん、セイバー」

駄目だ。

ふるえてる彼女に頼るような事は絶対にできない。

一言だけ謝って頭を下げ、振り向いて部屋を出ようとして、

「ッ、まって、待ってください」

背後から掛けられた細い声に足を止めた。

だけど振り返っても彼女の顔を見るには、自覚したばかりの自分のやってきた事はあんまりにも……

後悔と情けなさが羞恥となって顔を上げる事なんて出来なかった。

「なぜ、あなたが謝るんですか……？」

「俺がセイバーをそんな危険な戦いに巻き込んだからだ。ランサーに襲われた時にセイバーを呼ばなければ、いやそうだったら死んでたけど、それでもずっとセイバーに甘えて戦わせてたから……」

「サーヴァントが戦うのは当然です。そのための存在なんですから」
少しだけ、違和感を感じた。

セイバーの口調が、何と云うか少し幼いというか、厳格な部分が綺麗に消えているのが気になった。

「それでもだ。サーヴァントだからってセイバーみたいな女の子に殺し合いをさせるなんて間違ってる」

「……まだ貴方はそんなことを言っているのですか？」

キリツ と、セイバーが歯を軋きしらせる音が鳴した。

立ち昇る怒りの気配、それは以前のもものと全く違う。

思わず顔を上げた向こうで、彼女は立ち上がってこつちを睨みつけている。その視線には強い苛立ちと共に、今までのセイバーには欠片も無かった憎しみとすら取れるほどの侮蔑が含まれていた。

「いい加減夢ばかり見てないで現実を見たらどうですか？」

「なっ!？」

少なくとも今までの彼女なら絶対に言わないであろう言葉に驚愕する。

「ど、どうしたんだよセイバー？」

「別にどうかしたわけじゃないですよ。ただ貴方の寝言に付き合うのはウンザリしただけです」

「寝言って……、何言ってるんだよ!？」 当たり前の事だろう！

セイバーの人が違ったような言い様にかつとなって怒声をあげる。更に言い重ねようとした士郎を、セイバーは強引に黙らせる。

どんっ!!

“ 黙れ ”

引き結んだ口元が。激情を表した瞳が。叩きつけ壁を粉碎した硬く握った拳が。

彼女の全てが士郎の反論を叩き潰していた。

粗暴ともいえる行動へ、何度目かの驚愕を憶える。

「貴方が言ってるのは戯言だ、碌に戦も無い国の人間がほざく寝言だ！」

一度戦が起これば女だ何だ等と言ってる“余裕”なんて無い。戦いは負けたほうが悪と言われる。その後は勝った正義による蹂躪しかない！ そんな時に何の利にもならないどころか、不利にしかない下らない言葉をつくな!!」

「セイバーの時代はそうだったかもしれないけど、でも今の時代は違う！」

「同じだッ!!」

シロウ、貴方もそうやって私を利用して聖杯戦争に出ているではないですか！」

「ちがう！」

俺はこんな訳のわからない戦争なんかで殺し合いをしようとする連中を止めようとしてるだけだ！」

「やっている事は同じだ！」

サーヴァントが相手で手加減なぞすればこつちが殺される。結局はサーヴァント同士に殺し合いをさせてるだけだ！」

「ち、ちがっ」

「言う言葉は立派ですが、貴方はその“人を助ける”ために何をしてきたのです？ 師も得ない魔術でも必要も無いのに毎晩死に掛けて、それで満足して昼間は学校で遊んでですか？」

何故、魔術の師を探そうとしなかったのですか？

何故、血反吐を吐きながらも体を鍛えようとしなかったのですか？

何故、外国でいくらでも起こっている戦へ、民を巻き込んだ戦場へ馳せ参じようとしないのでですか？

——今の貴方は非日常に巻き込まれて興奮しているだけの子供

です。手の届く所にこんな非日常が現れて、非常識な戦いに巻き込まれて、そんな非常識の象徴に思えるサーヴァントを得てマスターとなつて……それで自分にも何かが出来ると思っている」

圧倒される。

吐き捨てられる言葉に、忌々しそうに睨みつけるその視線に。

「思い上がらないでください。人は己で得た分しか成す事はできない。貴方のようにそれ以上を求め、しかも他人すらも変えようとするのは唯の我侫な傲慢です」

しん、と沈黙が主従の間に重苦しく横たわる。

(私は、何を言っている……?)

賢しらかに言い放つた言葉は、私自身にこそ向けられるべき言葉。誰よりも傲慢に求め、その挙句に国を崩壊させたのは——私だ。

しかも死した後も、結末を諦められずその全てを無かつた事にしようとする、私のやってきた事の全てを消そうとする私こそ恥知らずと罵られるべきなのに。

なにより。

彼からすれば、例えそれが意図しないで呼び出したとはいえ、私は王ではなく彼のサーヴァントなのだ。不甲斐なくも他愛なく戦いに敗れ、騎士の命である剣を奪われたのは、言い訳のしようも無い私の責だ。シロウから責められる故は有っても、彼を責めるなど恥知らずにも程がある。

悔恨が胸を灼く。

(でもサーヴァントとして呼ばれたのは、英霊として座へ至った聖剣の騎士王。抛り所を失った今の私は英霊である資格など——)

もう何を言っているのか、何をすればいいのか、全部がわからなかった。

王で無くなった自分。

意味の有る事、意味の有った事。

やるべき事とは？

それは王であった自分がやるべきだった事？

今の私がやるべき事？

王で無い自分に“やるべき事”など、はたしてあるのか？

だが、国の崩壊に巻き込まれた民と騎士達を救う事は諦めるのか？

己の拙い政の末に命を散らしていった彼らの運命を、私の運命ごとと無かった事にして。そうすれば誰か別の、もっと優秀な人が王として国を導いてゆくだろう。

それがどのような者であれ、ランスロットやガウエインらの騎士達の力添えがあれば、国があのような無残な最後を遂げる事は無いだろう。

そのために聖杯を求めていたのだろうか？

剣を失って王でなくなったから、だから諦めるのか？ 彼らを見捨

てるのか？

私には責任がある。

そう、王でなくなったのなら尚更。

剣が無くとも、噛り付いてでも諦めるわけには……

「——言い過ぎました。シロウ、気分が優れませんので、先に居間へ行って下さい。私も、もう少ししたら行きますので」

「あ、ああ、わかった」

心配に気まずさを混ぜた表情で此方を見たあと、シロウはそつと襖を閉めて出てゆく。

あれほど酷い事を言われておきながら、怒りよりもまだ私を心配するその人の良さに力が抜ける。

彼こそ“良い人”というのだろう。

あんな風に真つ直ぐ生きていたら、私の人生も別の道を辿ったのだろうか？

軽く頭を振って益体も無い考えを追い出す。

「わたしは、どうするべきなのでしょう、マーリン——」
問い掛けは冷え切った部屋の空気を揺らし、答えを得る事無く、暗がりへ消えていった。

「はあ……」

もうここ二日で何回目か分からない溜息をつく。

衛宮君にセイバーの説得を命じてから、はや二時間が過ぎていた。

今は桜を預ける為にあのクサレ神父がいる教会へ向かっている途中なのだが——

(衛宮君、今度は何をやらかしたのよ?)

先頭を歩いているのが私とアーチャー。その後ろに桜がいて、少し離れて衛宮君とセイバーが歩いているのだけど……

ちらつと振り返る。

最後尾はやたらと重苦しい雰囲気にもまれていてとても近付けない。

引きこもりを脱出して居間に現れた時から、セイバーはもの凄まじく重苦しい空気を背負っていた。しかも説得しに行ったほうの衛宮君までが、怒った様な悲しいような、セイバーが心配なようななど、やたら複雑な感じでもつっぴり考え込んでしまった。

(どーしろって言うのよ?)

これじゃ状況が悪化したようなものだ。

あのあんぽんたんな見習い魔術師は忘れているかもしれないが、“サーヴァントは主を裏切れる”のだ。

なのに主従の間に不和をもたらすなんて、ちょっと信じられない。

今回のセイバーに限って、そうそう裏切ったりはしないとは思いますが、それでも衛宮君は最初から彼女の望みを何一つ受け入れていな

い。死んでも叶えたい願いがあるからこそ、こうやって英霊ともあるう者がわざわざ召喚に応じて、彼らからしたら木っ端みたいな魔術師の“使い魔”なんてマネしているっていうのに！

(はあ)

(随分と溜息が多いな、マスター?)

横に並ぶアーチャーから念話がくる。

(多くもなるわよ。あのバカは一体全体セイバーに何言つたの? お陰でこの状況でサーヴァント一騎の裏切りまで警戒する羽目になるし!)

憤懣やるかたない。

内心がアリアリと出た言葉を受けて、弓兵は苦笑した。

(まああの愚か者が、この期に及んでどんな失言をしたとしても、私は不思議ではないがね。ただ彼女が裏切る可能性は未知数だな)

(ええ)

(騎士だったセイバーなら、何があろうと一度主君と仰あおいだ相手を裏切りはすまい。だが、騎士の象徴たる剣を失った今の彼女が、万が一にもおかしな具合に開き直りでもしたら……)

「あああああゝゝ!!」

唯でさえ碌でもない状況に頭が痛いのに、わざわざ不安を煽らないでくれる!?

地団じだん踏んで雄叫びの一つも上げたくなくなる。

「きやつ!? い、一体どうしたんですか?」

「ど、どうした? 遠坂?」

いきなり叫びだした私を、二つの視線がおどおどと見てくる。

そのこのアンタ。ヘタレ魔術師のアンタ! 元凶はアンタでしょ!

(優雅たれ、が家訓ではなかったのかね?)

(ぐうつ!)

いらん突っ込みにぐうの音も出ない。

いや、ボケてるわけじゃないけど。

「何でもないわよ」

「いやでも、何でもない訳ないだろ?」

しつこい男の襟首を掴んで引き寄せる。

「ないったらないの！ 良い？ アンタはさつさとセイバーと仲直りしないさい。それが何より優先よ、いいわね!？」

「わ、わかった。遠坂……」

ふんっ、と胸倉から手を離す。

以前ならセイバーが食いついてきたけど、今はそれも無い。

かなり重症ね。

また溜息が出そうになるけど我慢我慢。

顔を近づけたせいで、凄い殺気を飛ばしてくる我が妹も気にしない
気にしない。

………胃が、いたい………

彼女は未だ知らない。

目的地、桜を預けようとしている教会が、自分達を苦境に陥れた
につつき敵に現在襲撃されている事を。

それを知った時、彼女は色々と限界がきてしまう。

思わず弓兵に射殺命令を出してしまうくらい……

第参章 20 夜の散歩は終わる (F a t e 編)

正直な所、がつつり拍子抜けしている。

目の前にはセイバー・アーチャー各ペアの計四人がいるが、最初の一撃以降はそれぞれのサーヴァントも積極的に攻撃を加えてくる様子はなく、ぎやあぎやあと騒いでいる主達を眺めている。勿論の事、それは此方を警戒しながらではあるが。

どうにも聞いていると遠坂凛が俺たち発見の報を聞くや否や、反射的にアーチャーへ攻撃命令を出してしまい、衛宮がそれを咎めて遠坂が反省するといったところらしい。言い合いするのは構わんが、完全に敵対状態の俺達の接近の対処を投げてまでする事か？ それとも予想以上に頭が回り、此方が好戦的な戦闘方針を採らないのを把握して、戦力的に叶わな事も鑑み、敵意が無い様に振舞っているのだろうか？

良い感じにテンション上げて来たつてのに、コレでは氣勢が削がれること夥しい。後ろから向けられるライダーの困惑の視線も良く解る。

なんつーか、お前らホント何しに来たんだ？

さてはて、あれから一分が過ぎ、ようよう言い合いが一段落したのか話の矛先がこっちにくると向いてきた。

「シーカー探す者とかセイバーに名乗ったらしいわね。それで、どうして教会なんて襲ってんのよ？」

「ふむ……」

まだバゼットの戦闘には気付いてないか。それなりに距離があり林の奥とは言え、戦闘中の気配はサーヴァントなら感じ取れるかもと思っただが？

チラリと赤と青のサーヴァントを見やると、青の方は純粹に気付いていないようだが、赤い方はどうにも表情が読めん。まあ彼の場合、身の上を考えてみれば知った上で黙っている事で神父の死亡を間接

的に狙っているとしても領ける。というより、そっちの可能性が大きいように思えるな。

「簡単な事だ。あの教会の神父がサーヴァントを保有し、他者を襲っているからだ」

「ツ!? ……それ、本当なんでしょうね?」

「事実だ。マスターの一人が、監督役だからと油断した所を背後から致命傷を負わされ、サーヴァントを奪われている。会った事があるだろうか? お前達を捕まえた彼女が、ランサーの元マスターだ」

ふんまん 憤懣やるかたないと言わんばかりの怒気。

「あんのクサレ神父……!」

ふむり。

若干ながら、予想外の反応である。

彼女達は俺達との戦闘によつて大きく戦力を低下させている。この状況で知り合いで調停役でもある神父を訪れるのだから、彼女にとつてそれなり以上に重要な相手と危惧していたのだが……この様子では心配したような此方への攻撃は無いか?

「お前等はここに何の用だ? まさかその様子で再戦という訳でもあるまい」

セイバーは身構えてはいるものの、その両手には寸鉄帯びず。

弓兵の主である彼女も、ただの一日では戦闘レベルでの魔術行使など利にならん事くらいは、その聡明さで分かっているだろう。

と、なるのだ。

教会が戦争の調停役として果たす役割に用事があったという事。

此方との遭遇は完全に偶然の代物だろう。

僅かながら、此方と接点を持つことで情報の取得、又は戦力の取り込み等を考えた作戦かと疑いもあるし、今からそういった事を思いつく可能性は無きにしても非ずだが…。

兎にも角にも、調停者とは戦争での中立者だ。それに用があるとするれば、目的はかなり絞られる。敵との交渉、降伏の宣言、中立者の取り込み、後は…、敗者の保護か。

彼女達の性格からして降伏の類いではあるまい。

交渉にしても、彼女達の持ち物で相手が一番欲しがらるだろう物はセイバーとアーチャーの命だ。この線も薄い。

となると……保護か？

彼女達に降伏の意思は無いのは見りや分かる。だとしたら、自分達以外の非戦闘員を抱えた？

——ああ、そっぴや居たな。サクラさんか。

彼女を預けに来たのか？ 一回攫われて、んでようやく心配になったと。

多分こんなところだろう。

姿こそ見えないが、おそらく先制の矢の後で一足先に逃がしたか。

彼女、遠坂凜は忌々しそうに小さく鼻を鳴らし、嫌々ながら認める。「残念ながら、その通りね。今の私たちじゃアンタ達には勝てない。逃げきるのが精一杯ってとこ。ここに来たのはクサレ神父に用があったからで、アンタ達に会ったのは偶然よ。その用事も無駄足みただけだよ」

「だろうな。ヤツのサーヴァントは既に戦闘不能、本人は逆襲者が追っかけてる。じきにケリもつくだろう」

「ちよつと待ってくれ！ ケリって、まさか殺すんじゃないだろうな！？」

チツ、また五月蠅いのが出てきたよ。

「知らねエし、どうでも良い事だ」

「どうでも良くなんて無いだろ、生き死にの問題なん……」

「ついでに言えばッ！ ……お前にも関係の無い事だ」

「っ！」

おーおー。

納得できねえって感じで歯あ食いしばっちゃって。

どうにもこうにもコイツは極端に行き過ぎてる奴だな。正義の味方ってーよりも、どちらかと言えば人死にが嫌で嫌で堪らんといったところか。

その感性自体は極当たり前なんだが、それが目の届かん所で起きたモノでも反応するってーのは、ちと精神的に重症だな。大抵の人間はメディアでそういった記事が流れても、客観視する立場ゆえに実感に乏しく、良く言えば「折り合いをつけて」、悪く言えば「人事だと思つて」スルーするのが大体だ。

衛宮の場合はその所を、まるで身近な知り合いが死んだかのようにでも感じるのか？ まあ何にせよ、こいつの感性は行き過ぎだ。「さて、それでアンタ等はどうする？」

「帰るわよ。はあ、とんだ無駄足になったわ」

……ん？

ありや？ 魔術隠蔽されたサーヴァントの反応？

「そりゃ御愁傷様。ところで一つ聞きたいんだが

——そいつ誰だ？」

俺の問いを切っ掛けにして忽然と現れる暴虐の気配。夜気を震わせ吹き上がる殺戮への狂気と暴意に、剣士と弓兵は驚愕を隠しもせず反射的に各々の主を抱えて飛び退る。

「ふふ、ばれちゃった♪」

私の魔術をあつさり見破るなんて、貴方凄いのね？ サーヴァントなのかとも思ってたけど、とても英霊には見えないし……」

隠蔽の魔術の下から現れたのは、雪の精と見紛う幼い少女と、その脇にそびえる鉛色の肌をもった巨人。

「君は、イリヤスフィール!？」

驚愕。

一言でもって万国共通に表せる表情で叫ぶ衛宮。

「こんばんわ、お兄ちゃん♪ それと、イリヤスフィールじゃなくてイリヤつて呼んで？」

「あ、ああ、久しぶり。って違う！ 何で君みたいな子供がこんな事してるんだ!？」

「ん〜??? おかしな事言うのね、お兄ちゃんは。」

——ああ、そういう事。聞いてないんだ？」

その小さな身体から察する歳とは裏腹に、薄っすらと弧を描いた口元は氷河を想起する残酷で冷酷な「魔術師」の笑み。

士郎はその言葉に、その笑いに、背骨に氷柱を差し込まれたような不吉な予感を覚え、身を振るわせた。

「聞いてないって、どういう事だ？」

「隣のトオサカ・リンによ。ねえお兄ちゃん、この聖杯戦争を創ったのはね、私の家とリンの家、それとマキリって家なの」

「——うそ、だろ？」

信じられない事実で凍った思考のまま、隣の遠坂を見る。

だが、彼女は士郎の嘘であってくれという思いも虚しく、冷たい表情で「敵」を見据えるのみ。

士郎は遠坂凜の事を優しいやつと思っていた。思っている。

実際に遠坂は他人を襲ってサーヴァントを強化するような事はないし、そういうヤツらを止めようとしていた。

だけど、彼女は聖杯戦争自体には全然反対していない。それどころか、寧ろ積極的と言って良い程やる気だった。なら遠坂はこんな戦争を始めた自分の家を肯定してるのか？

ぐるぐると頭の中で知りたくも無かった事実が渦を巻き、士郎を揺さぶる。

だが凜にとって、今はそんな事よりも今のセイバーとアーチャーでアレを、殆ど^{ほと}のステータスがAランク以上という規格外の巨人を止められるかが重要だった。

前回のエンカウントで向こうが容赦無く攻撃を加えようとしてきた事は記憶に新しい。衛宮士郎を兄などと呼んではいるが、それは親しみというよりも、どこか幼さゆえの無邪気な狂気を感じさせる。彼女が止まる理由にはなりえない。

文字通りの死活問題。

あのサーヴァントの体躯からして、明らかに接近戦に秀^{ひい}でた英雄。それも凶悪なまでに強力な英雄だ。剣を持たないセイバーがアレと対峙して抑えられるとは、悪いけれども欠片も思えない。以前は白髭ロボの出現で有耶無耶になったが、今前回と同じように問答無用で襲

い掛かられたら最悪皆殺しだろう。それどころか、そうなる可能性の方が高かった。

(戦闘は拙い。少しでも会話で時間を稼いで、隙を見て離脱するわ。アーチャー、お願い)

(了解した)

「貴方のサーヴァント、バーサーカーね？」

「そうよリン。貴方のはアーチャーね？」

「ええ。あれから出会わなかったけど、私たちの戦いを覗き見でもしていたのかしら？」

凜の言葉にイリヤはふうっ、と頬を膨らませて怒る。

その様子はまるつきり子供のそれだ。

「レディに向かつて失礼ね！ 確かに見ていたけど、覗きじゃなくて情報収集よ。それに見てたのは貴方達じゃなくて『彼』なんだから」

その汚れ無い新雪のように白い髪から覗く紅い瞳が、先程から完全に傍観者といった風情で腕を組み佇む黒川へ向く。

「俺？」

「そう、貴方。だつて見てると面白いんだもん。最初はサーヴァントと思つてたけど、ステータスは見えないしロボットは出すし。そのくせ魔術も使えるんだから、おかしな話よね？」

いやはや、これはこれは。

「魔術も気付いたか。随分とまた良く見てらつしやつたようで」

「ふふん、私の目は誤魔化されないんだから♪」

おうおう。胸を張つて、つてよりは仰け反つて得意になるあたり、見たまんまの子供だな。

「それで、どんな術かは分かつたかい、お嬢さん？」

にしても、俄然興味がわいた。

永劫破壊（エイヴィヒカイト）を傍から見て、その機能の一部でも読み取り理解できるようななら、それは信じられないほどの魔術の能力だ。正直、才能とかのレベルどころではない。魔術式の構成を見たところで理解できるような容易い代物ではないし、隠蔽も術式を創った本人であるメルクリウスが、神である己の視点からみても解らないほ

故気付かれたかを、教えてくださいますか？」

「イリヤって呼んでいいわ。 って言っても簡単なことよ？ 魂の方は私の生まれでそういうのに敏感だから何となく分かったの。そしてもう一つの方は、貴方の魔術がずっと発動しているみたいだから」「うそっ!？」

「馬鹿な——」

「うん、その通りだな」

イリヤの言葉に驚愕の呻きが其処そこかしこ彼処から上がる。

うん、当てられたんだからここは素直に認めましょう。

にしても彼女達の驚きも理解できる。そりやそうだろう、今声を上げた遠坂やセイバーは、俺の使っている魔術があの特徴性をもたらしたと感付いているだろうが、宝具の一撃で傷一つ付かない障壁を常時展開しているというのは流石に想像の埒外だったのだろう。というより、考えたくなかったか。

この世界の魔術は使用するのにオドかマナを必要とする。だから常時強力な魔術を使用している等と言うのは、燃料たるオドやマナを開きっぱなしの蛇口のように垂れ流しているという事に他ならない。

体内エネルギーであり魔術回路によって魔力へ変換する素となるオドでそんな事をしようものなら、あつという間に搾りつくされたミイラが出来上がるだろうし、世界に漂うマナを使ったら使ったで、やはり出力を支えきれずあつという間にマナが枯渇してしまう。

他の世界の魔術なら最初の魔力を呼び水にして精霊なんかに一定時間働いて貰ったり出来るが、生憎と世界自体に刻まれた魔術基盤の使用が魔術の基本なため、魔力自体で何かするって事そのものが出出来ないらしい。いや、ヌルの情報では確か魔法使いの一人が放出だけなら出来るらしいとか……？

まあいいや。

とか思っていたら。

「アンタ未来から来たとか言って言っ、あの時嘘ついたのね？」

遠坂嬢がご立腹のようです。ばれちや仕方ない。

「丸つきり嘘でも無いさ。確かに他の世界ではあるけど、ここより未

来から来たのは確かだからね」

屁理屈だけど。

「屁理屈ね」

全くで。

「アナタ、大師父の関係者？」

「誰、それ？」

「宝石翁、魔法使いキシユア・ゼルレツチ・シュバインオーグ」

「会った事どころか聞いた事も無いな。」

まあ俺の話は少しでも良い。で、見事看破したイリヤ嬢はどうします？ 俺にそのサーヴァントで挑みますか？」

ん〜 と子供らしく悩む姿は和む。和むのだが、脇に直立する鉛色の巨人が放つ威圧感が半端でない。現に先程から衛宮少年がいつぱいいつぱいのようだ。遠坂さんは気丈にも耐えているが、この子も大概苦勞してるなあ……

とまあ、人事らしく軽く考える。うむ。

その時、ちょうど良くヌルの声が。

『反応アリ。マスター、バゼットが殺害に成功し、こちらに向かっています』

お、終わったか。

ちょうど良いタイミングで響くヌルの声に頷く。

(負傷はあるか?)

『子機からの送信バイタルは平常値です。目立った負傷は無いかと』

(そりゃあ重畳。ああ、そーいや神父の死体の心臓って腐れ聖杯の欠片だったか何かだよな？ ヌル、バゼットの死体処理に隠れて、気付かれないようこっそり消滅させておいてくれるか?)

『了解致しました。』

強制情報解体、完了。消滅を確認』

(サンクス、ヌル)

『いえ』

言葉少なに返される返答もいつもの事。頼りになる相方です。

さてと。

「神父の方の片がついた」

色々と端折^{はしよ}つて唐突に告げた意味に幾人かが反応する。

それぞれ違う感情だろうが、俺としてはそれを細かくは感知せん。良く知りもしない相手にまで感情移入してたら身が持たんものな。

「ごつちの目的は完了した。味方と合流し次第、俺たちは離脱させて貰う。後は好きにしてくれ。

いくぞ、ライダー」

「はい」

色々知られた事だし、ごちやごちや言われる前にさっさと逃走を決め込もう。

と言つてはみるが、どうせ後で何処からか話しが広まって厄介な事になるんだよな？ 流石に何回もそういう目に会えば、幾ら俺でも人の口に戸は立てられぬ” って真実を認めるしなくなる。本当に、厄介なもんだ……。

「あつ、まだ話の途中なのに帰っちゃうなんてっ！」

とつと走り出した後ろでイリヤ嬢が怒っているようだが、正解の景品も無くて悪いね。まあ彼女には衛宮少年というおもちゃがまだ残っているんだから我慢して頂こう。

知識によれば、彼対応を誤るとバーサーカーに四肢を切り落とされて人間達磨にされた挙句、死なないよう処置されて部屋の前衛美術的オブジェになるらしい。少年の性格からして余計な事言った末、喋るインテリアへとジョブチェンジを強要される羽目になる可能性は随分と高そうだ……

しかしまあ、自業自得という言葉も世にはある。丈を越えた行動すりやリスクもデメリットも跳ね上がるのは至極当たり前。ついでに言えば、そいつをおっ被るのも本人って訳だ。

うむ。世は並べて事もなし。

ついでに思考を廻らせて見ると、どうもセイバーも遠坂嬢もエクスカリバーについて言及してこなかったのが、気になるといえば気になる。が、そこ等辺は精神的ななんやかんやがあるんで、俺としても好き好んで触りたく無いから好都合と言えば好都合。ドロドロしたの

は勘弁してください。以前首突っ込んで酷い目に会ったし。

俺の好みはシンプル・イズ・ベスト。

あちらの世界でも此方の世界でも、行つてやる事は殴り蹴りに切つた張つたがメイン。割り短絡思考に染まってきたるのが最近の悩みです。これって精神的な生活習慣病かと思う今日この頃。

(む?)

どうやら怒るイリヤ嬢を隙と見たのか、セイバーとアーチャーもそれぞれその主人を引つ抱えて離脱に移つたようだ。

確かに彼らはバーサーカーとの交戦経験を持たないが、それでもあのステータスと気配には挑む気になれなかつたらしい。サーヴァントの迷いの無い動きから察するに遠坂嬢の指示だったんだろう。正解だな。

「トウリ、バゼットです」

「お、本当だ。ランサーの石像抱えてるが——なあ、こうやって見ると良く抱えてられるよな?」

ライダーの視線の先、無残な教会の入り口を見て思わず感心してしまった。

バゼットの背丈は普通といったところだが、対するランサーが並外れて背がでかい。石化した時のポーズが槍を構えた姿勢だから持ち難くは無いだろうが、それだけでかけりや重量も余計に嵩む^{かさ}。

「バゼットにとって大事な人みたいですから」

「祖先つて訳じやないけど、昔の大先輩みたいなものか」

「ええ、そう聞いています」

「そりゃ落とせんわな」

ふっ と笑いが零れる。

恋だの何だのは似合わず、そういった体育会系がぴたりと似合うのはいい歳した女としてどうかと思うが、『バゼット』にはそれが相応しく思ってしまうのだから、彼女はあれで良いのだろう。

「バゼット! 身体の調子は大丈夫か?」

「ええ、特に戦闘中に体調が悪くなったりはしませんでした」

「そりや良かった」

「正直な話、この体には随分と助けられました。どういった魔術かは知りませんが、コトミネが殺しても再生してきたので最後は力技で叩き潰すことになってしまっただけ」

「あー、そりやまた何ともはや。ホントに神父なのか？」

「残念ながら」

「しかし、致命傷から再生って……」

「もしかして、神父の心臓ヤツたのファインプレーだったかねえ？」

「ま、いつか。」

「用件は済んだ。撤収しよう」

「分かりました」

「ランサーは私が抱えて行きますので」

「バゼットよ、ルーン魔術で身体強化してまで自分で運ぶか。」

「ともあれ、こうして夜の散歩は終わり、一人も欠けず一日ぶりに我等が拠点へ帰還する事と相成ったのである。」

それは、200年前に汲み上げられた時とは余りにも違っていった。未分化な方は、三回目の儀式に紛れ込んだ異分子によって染めあげられた。

「完全なる悪そのもの。」

「それも悪い事に“人”という存在に重ねられた『黒』。」

「自我もあれば意思もある。」

結果、染まった杯は四回目と五回目で狂い間違ってしまった正常を行く。

六回目には、杯の中身完成に利するとして黒川氏の分体を引きずり込むという真似を、自発的に行うに至った。

別に異分子の自我その物がある訳ではない。

酷く単純な、それこそ人間の本能に近い欲求が生まれたただけだ。単純に利を求め、害を退ける。だからこそ黒川氏を引きずり込んだ。

今、聖杯システムに生まれたばかりの本能は恐怖を感じていた。

四回目の儀式に招いた最も上質である材料が横取りされた事。システムの断片と呼んでも良いモノが二度に亘^{わた}って破壊された事。

一度は山中で。

二度は教会で。

つまり、それは外から招いたアレが自身を破壊できる存在だと、偶然の可能性すらなく証明されたという事だから。

ここでシステムは更なる自発的行動を採る。

器の一つを幾度も破壊されながらも、少しずつ溜まっていた汚染された聖杯の中身。それに方向性を与え、故意に流出させたのだ。

与えられた方向性によって明確な形を獲得した存在は、直近の儀式にて取り込まれた溶かしきれていなかった存在ばかりだが、それ以外の“泥”と合わせた全てで危険を排除しようとする。

アレが存在すれば、いずれシステムが破壊される。

何よりも優先してあの存在を殺害しなければならぬ。

同時に、それが成功すれば杯を満たすだけの材料が手に入る。

害を廃して利を寄せる。

すぐさまそれは行われた。

システムの自覚無き暴走は、ここに来て明確な攻撃性を持ったのだ。

第参章 21 休養には鍋料理を (F a t e 編)

ほかほかと湯気が立ち昇る。

時刻は夕方。太陽は地平へと落ちかかり、窓から西日が差し込む。

目の前に用意されたのは、大きな平鍋にたっぷり湛えられた沸き立つ綺麗な色の露^{つゆ}。そこに溢れんばかりの野菜と肉を沈めた日本料理だ。くつくつと鳴る音は立ち昇る匂いと相余って食欲を刺激し、半日以上も仕事が無かった胃袋もせっついてくる。

野菜に肉、食材の追加分も多量に用意し、準備は万端。

「そう、いわゆる鍋という料理である」

「トウリ、突然どうしたんですか？」

隣で涎を垂らしそうになりながら鍋を見詰めていたバゼットに突っ込まれた。

いやね？ 昨日の夜は遠坂勢と一戦あるかと思つたのに、何かぐだぐだのなあなあで終わっちゃったから気が抜けてね。

そこに重ねて空きっ腹に鍋とくりやあ……これはもうちよつとくらいおかしくなっても当然だよね？

「空腹は同感です。早く煮えないものでしょうか。まだなんでしょうか……」

「お前は少し落ち着け」

なんつーか、バゼット遺伝子改変者になつた影響だか、凄く燃費が悪いな。

今は俺が材料出したり……は、微妙な味のが出来たりするから、有機物合成ナノマシンに時間加速の魔術を重ねて作り出した食材があるから良いが、これだけの食料を毎食用意してたら食費が大変なことになるぞ？

——改めて考えたら、今煮えてるこの白菜とか値がつけられない代物なんじゃ？

何とか美味しい食材出そうと頑張つてみたんだが、まさかさつきのパゼットとメデューサの呆れたような視線はコレだったのか!?

ぐぬう。

ま、まあ突っ込まれなかったという事は、見逃してくれたんだなきっと。うん。

——呆れられたんじゃないよな？

「飲み物はコレでいいでしょうか？」

戦々恐々としていると、メデューサが飲み物の入ったビニール袋を下げて帰ってきた。流石に飲み物まで作るのは、なんかこう、い粋じゃない気がして彼女に頼んだのだ。

ちなみに報酬はバイク一台。

名称「MTT Y2K」

通称Y2Kと略される俺の世界のバイクだ。

あの当時ギネスブックに「市販されている世界最速のオートバイ」、「世界一高価な市販オートバイ」として登録されていたバイクであり、エンジンにジェット機等に搭載されているガスタービン・エンジンを積んだスペシャルなモンスターバイクである。

最高時速 約402km/h。

加速性能はスタートから365km/hにまでのかかる時間が僅か15秒。

当時、これだけのパワーをフルに扱うにはタイヤの性能の方が頼り無いような状況だったが、そこは別世界印の特別タイヤを履かせれば解決である。

ちなみにコイツは発売8年後に発表されたタービン・ストリートファイターというバリエーションで、最高出力を大幅に強化したバージョンだ。

パワーは詳しく言うと——まあ分かりやすく言えば同じエンジンでベル206型のヘリコプターが飛んでいる、と言えば簡単だろうか？ 改良型のエンジンに至っては、更に其処から125%の出力アツプが図られている。

総合的に見て「人間にはちよつと……」というバイクである。エン

ジンの種類から違うお陰で操作の感覚が従来のバイクと全く違い、それも含めて迂闊に運転すると軽く死ねる一品。

いやはや、乗るのが騎兵のサーヴァントだからいいけどね？

ちなみに、流石に日本の市街地ではジェット音が五月蠅いので、そこ等辺もちよこちよここと弄ってある。メデューサにはそれが若干不評だったが、総合的には喜んで貰えたから良いだろう。

くれぐれも、人を轢かないように言い含めた俺は間違っていない。

「俺アルコールはいいや。そっちのウーロン茶くれ」

「私は何でも構いません」

「分かりました。ではビールを」

「ありがとうございます」

飲み物は行き渡った。

鍋も良い具合に煮えている。

では……

「「いただきます」」

「いやいや、なかなかどうして美味しい出来だ」

ライダーは分かるとして、何故かバゼットが知っていたいただきますの後に、小皿に取った野菜と肉を味わう。

有機物合成ナノマシンは登録に使用したサンプルと全く同じ味の物しか作れない。登録自体、したのは思いつきでこのナノマシンを造った昔の話である。つまるところ、こうして食物を作って食うのは初めてになるのだが、自画自賛になるが美味しいものである。

「そうですね。そこらの木や地面から作ったとはとても思えません」
ですよね？

と、メデューサと頷きあう。

バゼット？

彼女はほら……ね？

がつがつむしやむしや、なんて音はしない。

マナーは良いんだ。良いんだが、味わって食べようとかいう気持ちが全く、これっぽっちも感じられない食い方をしている。

……具体的には、殆んど嘔まないで胃に流し込んでるように見える。

「何と言うべきか。作ったかきの無い食い方だなあ」

思わずといった風に零してしまった眩き。これには流石にメデューサも苦笑を浮かべた。

「彼女は職柄、食事を栄養補給と割り切っていたそうですから」

「けどな、味覚は有るんだから美味しい物を求めると思うんだがなあ」
「普段から味も碌にしない栄養食ばかり食べていて、他の物は忙しくて食べる暇が無かった、というのはどうでしょう？」

「あー……、何かそれっぽいな。つか、喋ってる間に食い尽くされるし」

「急いで追加を入れましょうか」

「じゃんじゃん入れよう。どうせ無くなるんだし」

残りをザツと攫って時間稼ぎにバゼットの皿へ。

肉を露の底へ沈め、上からどきどき野菜類を投入する。

キノコや白滝なんかは脇を囲うように潜し、真ん中に豆腐も乗せる。

最後に火を強めにして蓋を被せ、

「もう少し煮りや、また食えるな」

雑煮にしても美味しいが、まあそれは次の飯時に取っておいて、せつかく作った野菜をまず食い尽くそう。

「メデューサ、今度は取られんようしっかり食おう」

「ふふ、はい」

食欲魔人
バゼットも早々無くなりやしないんだから、もう少し手加減してくれんかねえ……？

そんなこんなで、騒がしい(?)食事は満足満腹の内に幕を閉じた。昨夜の騒ぎから帰還して、丸半日を休養に当てたお陰で三人とも調子は万全である。

片付けが終わった頃には丁度良く日も暮れ、夜闇の帳とぼりが街を包んでいる。

「さてと、今夜も行きますか」

「ええ。私の目的は達成しましたし、今度は貴方の手助けをしましょう。ところで何処へ行くかは決めてあるのですか?」

やる気に満ちてびしっ、と男前に決まっているバゼット。

どうやら神父を殺った事で一区切り着き、色々とすつきりしたようである。ちなみにランサーは石像のまままで保管してある。下手に復讐させると襲い掛かってくるだろうし、バゼットとよりを戻せと言っても彼は一度主換えをした身、それが死んだからといって戻るなど決して納得しなさそうだ。

戦力的にそれでどうにかなりはせんが、逆にランサーに死なれても困る。あのクソ聖杯にエサをやる事になるからだ。

つー事で、彼は石像のまま一時保留である。これからも含めた処遇についてはバゼットに任せただので、その内決めるだろう。

「目標か。いや、特にこれと言って決めてないな」

ライダーとランサーを抜かした残りは五騎。

セイバー・アーチャー・キャスター・アサシン・バーサーカー。

その内、知識ではキャスターとアサシンは聖杯のある山の中腹にある寺に陣を敷き、出て来ないとある。そうなると無目的にうろついた所で、出会うのはバーサーカー位のものだろう。遠坂嬢チームは漁夫の利を狙って引き籠もる可能性も大きいし。

そうなると戦う相手は女の子? それも年端もいかない子供?

……ないな、うん。

「あー、選択肢は幾つかある。

1：遠坂嬢のチームを狙って止めを刺す。ただし聖杯が狂っている事は言っているから、命を掛けてまで欲しがるかは怪しい所だな。

あくまで聖杯戦争を続行する場合、低下した戦力を考えると他のサーヴァントが潰しあうのを期待して守勢に回る可能性が高い。戦場に出てくるとしたら衛宮少年とセイバーか？

2：適当にうろつき、出会ったサーヴァントと戦う。聖杯戦争での普通の行動だな。バーサーカーとかち合う可能性が高い。問題はあんな子供と戦うのは気が進まんといい点だ。

3：聖杯の様子を見に行く。もしくは二度と聖杯戦争が起こらない様に、さっさと基礎システムごと破壊する。

当座はこんなものか？」

少し首を傾げたメデューサが口を開く。

「今更なのですが、マスターの目的は何なのででしょうか？」

「俺をこの世界に引き摺り込んでくれたあの気色悪い聖杯を叩き壊すことだな。ただまあ、こうして来たからには、サーヴァントなんていう存在と戦うのも悪くないと考えてた」

「——初めて目的を聞きましたが、随分といい加減ですね」

見えない見えない。呆れ返った表情の、心まで男装した女の人なんて見えない。

「なら3でいいのではないのでしょうか？」

「やっぱりそうなるかねえ。聖杯システムを打ち壊せば現界しているサーヴァントの大部分が、マスターが自前で支えない限り消えそうなのが残念だが…、まあそこはしようがないか」

「トウリは聖杯の場所を知っているのですか？」

「知ってる。寺のある山の奥、洞窟の中だ」

方針は決まった。

サーヴァントとの戦いが不完全燃焼気味なものばかりだったのが残念だが、これは仕方が無い。当たった相手がランサーみたいなタイプじゃなかったり、そうでなくても変な気負いが入ってたりと、全体

的に運が悪かった。

(いやはや、アクシデントの先でそれは高望みが過ぎたかな?)

なんにしろ、さつさと聖杯を破壊してメデューサの姉貴たちをどうにかしよう。

この世界に來た最初の辺りが気色悪かったが、ちよつとした休暇位の気持ちで納得する。

と、いうわけで。

深夜の山登りに出発である。

第参章 22 未消化の脅威 (F a t e 編)

「なーんて思ってたりもした・の・だ・が」

どうにも世の中とは性質たちの悪いほうへ転がる風ふうがある。

「」

「」

「あゝゝと、見るからにやばそうなんだが、どうしたもんかな」

そう、やばそうなのだ。

何が“やばそう”かって？

そりやあ……

「あれ、聖杯の中身だよな？」

山の中腹にあるお寺。

その山門の上から見える黒く元氣一杯にのたうつ带状の触手。

山門から此方へ半分飛び出して蠢動する带状の触手。

ひたすら犇ひしめき蠢うごく触手。

お寺という塀の中一杯に溢れ返った触手。

「」

「」

女性陣に至っては、もはや一言の言葉すら出ない。

あまりと言えばあんまりな光景に、絶句して棒立ちとなっている。

「さて」

ともかくだ。ああして山門から溢れてるのをみるに、何か嫌な予感がひしひしとする。早急に逃げるべきだ。

二人の肩を叩いて声を掛ける。

「気持ち分かるが、正氣に戻るんだ。このまま此処にいるときつと……」

——あれ、溢れてくるぞ？——

「?!?!?!」

「あれはインパクトが有ったらしい。」

色の戻った目を瞬いて慌てて山道を駆け出す。

「いやいや、しかし何がどうなったらああなるんだか……」

「トウリツ!! あああなた! アレが何なのか知ってるんですか!」

「おうともよ。ありや俺をこの世界に引き摺り込んだ張本人、聖杯の中身様だ」

「ちよつ、アレが無色の力!? 冗談でしょう、どう見ても真っ黒です!」

「だよな。無色じゃなくて触手だよな」

ゴドドドドオオオオオツ

と、後ろの上の方で山門やら塀やらが豪快に突き崩される音が響く。

ついでにザワザワという枯葉の上を何か、何かは断じて考えたくないが、大量に高速で這っている様な音が迫ってくる。

「やばいぞ。分かっているとと思うけど、やばいぞ」

どうにも拙い。

道があるとはいえ、ここは山の中。直線で離れようとするれば森を通らねばならぬ。このままでは追いつかれる。

アレの濁流に吞まれるのはゾツとしないが、これは仕方がないか!

「バゼット、ライダー! 俺が殿に入って抑える。さっさと行け!」

「マスター!」

「——分かりました」

うん、やつぱりバゼットはこういう状況での判断が早いな。

「私も残ります!」

それに引き換え、メデューサは心配性である。

マスター持ちのサーヴァントはそういうもんかも知れんがね。どっちにしる時間は無い。

「ええい、くっそ! ライダーならいざとなりや宝具で離脱できるか。バゼット、先に行け!」

疾走を中断、土を蹴立ててその場で踏み止まり、振り向きざまに『剣』を引き抜く。

「おおおおお!!」

あの時と同じ雷霆が空を灼いて迸る。光の柱と見紛う電撃の激流が夜の闇から押し寄せる怪物体をなぎ払い焼き尽くし、木々諸共に塵へと還してゆく。直撃した箇所は勿論、その周囲も扇の様に広がった雷撃の網に捕らわれ、無残に焼かれている。

だが、それでも全く足りない

正面は難いだが、かなりの範囲に雪崩打ったアレは、それ以外の横合いからあつという間に追い付き、俺とメデューサを距離を置いて囲む。

「ちっ。うっとおしいぞー」

ぶっ!!!

雷にとつて少々の距離など無いも同じ。

端から焼き払うが、どうにもこうにも終わりが見えない。

「妙だな……」

「ええ。先程から近寄ってきていません」

そう。なぜかこいつらは囲むばかりで一向に襲い掛かってこないのだ。

背中合わせに警戒する石化の魔眼を開放したメデューサも、やつらの行動には不審なものを感じるらしい。

「ヌル、バゼットは逃げ切れたか?」

『はい。追撃自体、行われていません』

「おいおい」

俺達が目的ってか?

と、いうよりもだ。この状況で相手が聖杯となりや、目的は俺に決まったようなもんかな。ははは……はあ。

それにしても、これは単なるシステムのやる事じゃないだろう?

明らかに聖杯降臨の儀式以外を目的に動いてるだろ、コレ。

第一だ、溜め込んでる聖杯の中身を吐き出した時点でおかしい。まさかとは思うが、自我でも持ったか？

原作の続編で似た様な現象があつたらしいが。そう考えれば、俺を鍵におかしな具合にこじれたか？

だが何の為にわざわざ中身を放出した？

俺がギルガメッシュの魂を横取りしたからか？

チツ、幾つか予測は立つがハッキリしないな。

そもそも、この蛇を悪趣味にカリカチュアしたようなものは矢鱈と気色が悪いが、俺にとっては別に害という程のものでもない。サーヴァントであるメデューサや、ぎりぎり人間のバゼットは拙いだろう。特にサーヴァントにとつては属性を強制的に反転させられ、支配下に置かれてしまう天敵といえる。

だが、それがどんな呪いだろうと“重さ”で勝らない限り、エイヴィヒカイトも俺の魂自体もどうにも出来ん。最悪アレの中を泳いで帰っても大丈夫なレベルと言つてもいい。

直に見て分かった。この世全ての悪に汚染されたとか言ってるが、ありやあくまで属性というか、性質の話であつて、別にそれ単体で凶悪な訳では決してない。霊的な抵抗の無い肉の体を持つ人間や、サーヴァントのようなエーテルで構成された存在は、聖杯の中身に比べて下位の物質である為に、触れればあつという間に侵食されてしまう。

だが、比べるのも馬鹿らしいほどに圧倒的上位の構成体であるこの体に限つては、そんなもの幾ら数を揃えたところで文字通り“物の数にも入らん”。もしもアンリマユによる汚染の影響がおかしな具合に捻じれ、自我つぽいもんが生まれて俺というイレギュラーの極みを排除しようとしていた場合、それすら分かんというのは考えづらいが……？

などと考えていたら、どうも答えがやってきたらしい。

『レーダーに感！サーヴァントと思しき反応が七、聖杯方面より高速で此方に向かっています』

「おいおい……冗談にしたいような報告だな」

いきなりヌルから信じ難い報告を受ける。

「というか、七つてのはいつたいどういう事だ。そも数が合わんדרうに！」

「マスター、今のはどういう？」

「分からんが、ヌルが言うからには来るんだらう。七騎もサーヴァントが。」

——俺はどうとでもなる。メデューサ、いつでも離脱できるようにしておけ。聖杯がこうなった以上使えるかは分からんが、令呪も使っておく」

剣を左に持ち替え、メデューサに向かって右手を掲げる。

「我が名、黒川冬理において命を発す。この局面、必ず生き延びよ」

宣言を受け、甲に刻まれた令呪二画の一面が消える。

ともない一瞬だけ聖杯より魔力が流れ込む気配がしたが、それはすぐに何かに堰き止められたように途絶えてしまった。ならば、と自前の魔力を流し込み、メデューサに正規の令呪と同じくブーストを掛ける。

これで少しはマシだろうが、最悪俺が止めを刺して魂を喰い、それだけでも保護する必要があるかも知れん。そういう意味では欠片も油断が出来んな。

「——来た」

ざわめく触手を割り、七つの人影が姿を現す。

どれも黒く染まった色調の鎧やローブを身に付け、死者の如く蒼褪めた肌が酷く目に付いた。体軀も様々で、身長こそ平均以上と纏まっているが、体格は巨人と見まごう筋骨隆々の偉丈夫から痩せ細った奇怪なシルエツトまでばらばらだった。

その多くが兜やフードなどで顔を隠しているが、特徴的な長短の二槍を携えたサーヴァントと、身長ほどもある長大な日本刀を背負ったサーヴァントの正体は一目で知れる。

他のサーヴァントもそう思っただけで見れば、鎧や服飾が変わってイメージが変化しているが、以前に知識で閲覧したサーヴァントと特徴が一致する。

(第四次のランサー・ライダー・キャスター・アサシン・バーサーカーに、今回のキャスターとアサシンの計七騎。

キャスターとアサシンは寺の襲撃で取り込まれたか…。山門から離れられんアサシンはともかく、キャスターまで飲まれるとはな)

稀代の魔術師たるキャスターが人間一人を抱えてとは言え、離脱出来ないほどに厄介だったか。

それとも、あの顔色の悪い連中に襲われて、マスターを逃がす為の陽動でも引き受けたか――

どちらにせよ、かなり拙いものがある。出し惜しみをしている場合ではない。

即座にライダーに念話を送る。

《ライダー、こいつら聖杯戦争に敗退して聖杯に呑まれたサーヴァントだ。第四次からセイバーとアーチャー以外の五人、今回の第五次からキャスターとアサシンの二人》

《それは本当ですか？ 確かにサーヴァントに見えますが、あれはまともでは…》

《ああ、魂の核が汚染されるとああなる。

今からヌルを通じてそっちに各サーヴァントのステータスと宝具のデータを流す。何故知っているか、とは聞くなよ？ 切羽詰ってるからな》

《なっ!? ――いえ、分かりました》

《話を通じる連中じゃない、隙を見て全力で逃げろ。俺はどうとでも出来る》

《くっ、すみません。結局足を引っ張りました》

《気にするな。劣悪なコピー程度かと思いきや…、これは確かに予想外もいい所だ》

思考に近いスピードで交わされる念話。その僅かな時間にも、汚染された英霊達はじりじりと距離を狭めてきている。

槍を構え、腰に佩いた剣を抜き放ち、暗殺用の短剣ダークを掌に滑り込ませ、杖を掲げ、高まる気配の限界を窺うかがっている。

鉛のように重く、溶岩のように煮え滾る闘気。それを最初に破ったのは、他に比しても一際に黒い、もはや闇夜ですらそれと判るほど漆黒の鎧を纏った騎士だった。

ヘルメットの面当は降ろされ、その面貌は窺がえず。だが細く開いたスリットの奥に、恐ろしく暗くよど澱んだ激情を想起させる輝きが、ほの暗く灯っている。

まるで死霊の騎士とでも表すべき騎士が、幽鬼の如くゆらりと脚甲に包まれた足を踏み出す。

(先陣はこの男か)

メデューサを庇うために前に出て相対する。

だがその宝具の力か、無手の鎧姿は注視するほどにその輪郭をぼやけさせる。即座に視線を外し、全身を視界へ一度に収めるよう見る。

なるほど、正体を隠す宝具は伊達ではないらしい。

「……a r ……」

微かな声がヘルムの下から響く。暗い、奈落とも深淵ともつかぬ冥府の底で亡者が上げる呻きに似た唸り。

底無し沼へと道連れを誘うが如き怨念。

「……A r ……e r ……ッ!!」

恨みに辛み。死した後も知らしめんとする激情が泥濘でいねいとなって吹き零れた。

甲冑を纏ったまま爆発的な跳躍で舞い上がる騎士。その人間ではありえない異様な光景は、見る者を呆けさせるに十分なインパクトを持つ。だが、既に状況は戦闘へと突入している。慣れぬ者ならいざ知らず、そのような事を気にする暇はどこにも無い。

舞い上がった長身が宙で腕を伸ばし、張り出した生木の枝をいとも容易く押し折る。籠手に包まれた手に握られた一メートル程のそれは、極自然な、まるでその動きが当たり前であるかのように軽く振り

かぶられる。

頭上から襲い掛かる木の棒。

英霊の力で振るえば、いかに頑強なセルロース構造をもつ樹木と言えども、簡単に砕け散ってしまうだろう。しかし、今此方の頭蓋を砕かんと襲い来る枝は例外だ。漆黒の手甲から侵食するように、いや、まさしく侵食なのだろう、闇が枝を染め上げていた。

(ナイト・オブ・オーナー)

『騎士は徒手にて死せず』

手にした物を己が武装として宝具化する特殊型宝具。

ランクにしてA++と評価される厄介な宝具だ。

だが、この宝具は彼の類い稀なる武技と合わさる事で、その危険度を跳ね上げる。

最初に持つのは小枝でも小石でも良い。それを手足の如く操り敵と打ち合い、神技とも思える技巧をもって敵の武器を奪い取ってしまうのだ。

敵は愛用の武器を失い、自身はより強い武装を手に入れる。こうなっては最後だ。

その技量と相余り、戦士の天敵とも思えるこのサーヴァント。だが、こと俺にとっては相性が良い。

俺の本業は格闘家。

種々様々の武装も使いこなせるが、最も最初に体に覚え込ませ、魂に刻み込んだ業は、己の肉体でもって打ち払い捻り破壊する格闘の技だ。時に敵の力すらも利用して敵を壊す技術にとり、武器などは不要である。己が腕、積み重ねた業、武器に怯まぬ強靱な戦意。これを備えた格闘家にとって、無手こそが最上の武具武装だ。

「ッー」

叩きつけられる一撃。応じて突き上げた拳が迎え撃ち、轟音を立てて双方を弾いた。

此方を包囲するように散開する黒いサーヴァントが視界に映る。

同時に背後の従者が離脱する気配。その動きは令呪の補助を得て

劇的な速度を叩き出す。遠ざかる気配を背に、七騎のサーヴァントに對して遅延戦闘を展開する。

「ちい、邪魔臭いー!」

ローブを纏ったキャスター、第五次に召喚されたメディアが放つ魔力弾が、破壊の雨となつて釣瓶打ちに降り注ぐ。

いつの間にか両手に構えられた二本の杖を掻い潜り、雷光の速度で突き込まれる槍を払い除け続ける最中に降り注ぐそれは、打撃力こそ通りはしないものの、此方の視界を遮り足場を荒らし、衝撃波と轟音でもつて気配の察知を容易でなくする。

「行かせるか!」

二度の斬撃と四度の刺突。代償をエイヴィヒカイトの装甲に受けながら強引に粉塵から抜け出し、メデューサを追撃しようとする二体のアサシンとライダーへ雷撃を放つ。

稲光と共に空を裂いて電撃が追跡者の足を灼く。

エイヴィヒカイト、活動位階での能力行使。所持する聖遺物の特性を発現できる。

『炎の剣』は文字通りの剣だが、その本質は武具としての斬撃ではなく、雷いかずちを行使し、所持者の定めた領域を守護する事に最も力を発揮する神具であり、祭器である。

半ば炭化した足に躓く三騎。息の根を断つには後一手。追撃に踏み切ろうとするその瞬間、神速の踏み込みによって粉塵を断ち割り斬りかかって来る二人の騎士。

剣に見立てた漆黒の杖と二本の魔槍が纏わりつき、その間に魔術師が治癒の魔術にて負傷を癒していく。

(千日手か)

そう思う。

サーヴァントでは此方の装甲を抜けず、此方も現状の打撃力では止めまで届かない。

メデューサの事を抜きにしても、ここにいるサーヴァント共は打倒する必要がある。早急に形成位階なり創造位階なりヘシフトアップ、又は他の技能を使用し、さっさと半亡霊共を皆殺しにすべきだった。

だが……

『楽しそうですね』

「ああ、楽しいねえ」

楽しくって仕方が無いのだ。まさにまさに、心躍る戦いと言うヤツだ。

英雄が本来の一部とは言え七騎も揃い、前衛と後衛で組んで此方に相対してくる。連携によって生まれる単騎とは比較にならない戦力。その連携も超絶の技巧が織り成す神技の大盤振る舞いだ。戦闘者でなく戦士として、これに興奮せずして何に心躍らせれば良い？

事実、活動位階ですら俺の身体能力はサーヴァントを一顧だにしな
い。やろうと思えば魔人の集団、黒円卓の大隊長の如く空気だつて蹴
れるだろう。雷撃を放てば容易く鎧を貫き身体を灼く。それでも奴
等は喰らい付いてくる。

慢心と言われれば、そうだろう。

油断と言われれば、そうなのだろう。

否定は出来ない。未だ鬼札である真名開放が行使されていない前
哨戦だ。やろうと思えば即座に圧殺できる。そこでこんな遊びを入
れるなど、言語道断と呆れられても仕方が無い。

でも、楽しいのだ。

こいつらは俺についてくる。例えばエイヴィヒカイトの駆動率が最
下級の活動位階とはいえ、魂の量と質で表して数十倍の差がある俺
に。言語に絶する武芸をもつて喰い付いて来るのだ。

「はっ」

楽しい。

「っはは」

楽しいねえ。

「あっはははははははー！」

実に、楽しい。

唯の杖が凄まじい剛力でもって縦横無人と振るわれる。

歴史に名を知られる呪いの魔槍が手足を射抜き肺腑を抉らんと奔る。

ひるがえ 翻る杖から途切れる事無く打ち出される魔術は、クレーターを作るような破壊力もさる事ながら、常人どころか一流の魔術師ですら即死しかねない呪詛が込められている。

それ全部を、俺が独り占めしている。

心底愉快だった。

第参章 23 流転する状況 (Fate編)

幾十、幾百の閃光が夜の闇を裂いた。

五騎の英霊が囲む円陣の中、大気を軋ませる速度域での戦闘は続く。

敵。聖杯を主として現界した漆黒のサーヴァントに魔力切れなど無く、今をもって総身に魔力を漲らせて襲い来る。

彼らの技量はまさに天才とするに相応しい。

二十か三十か、最高でも六十には届くまい。その短い生涯で練り上げた武術とは思えない技量。天賦の才に胡坐あぐらをかかず、血反吐を吐く弛まぬ鍛錬、幾度もの戦場、幾百幾千と積み上げた屍の勲いさおをもつて磨き上げた末に完成した強さ。

才あるとは間違つても言えない俺が、千年戦つて辿り着く領域に踏み込み、踏破しようとする。

くつくつと笑いが洩れる。

思う事は多くあった。

才能とはなんと忌々しいものかと、そう感じる心も勿論ある。

だが、だからこそ、何よりも誰よりも速く『先』を見せてくれる。

右手が豪速と力に任せて黒く染まった棒切れを打ち砕き、左手が柔らかに速く舞つて機関銃のように打ち込まれる穂先を逸らし、跳ね上げた脚は魔術を粉碎した。

大地は蹴立てられ、放出される魔力と錬気の陽炎で大気は歪む。

突破を試みていたサーヴァントも、今は此方を逃がさぬよう囲んで隙を窺がっていた。

右斜め後、下方の死角よりすり上がってくる刺突を、エイヴィヒカイトによって拡大化された知覚が捕捉。

軽く踏んだステップで身を回し、黄の穂先から逃れる。

身体の四分の一ミリ外を癒えぬ傷をもたらす刃が抉り貫いた。

「aaaaaaaaaaaaaaaaaa!!」

土を踏み砕き同時に襲い掛かる二条の斬撃。そのほとばしる激烈な気迫。ありえない事と知つていても、装甲を切り破られるのではないかと心が感じてしまう。左右上下にから胸と脚を狙い来る攻撃から一歩跳ねた。

其処に本命が待ち受ける。

魔術を打ち消す紅い長槍、その穂先が逃れた先で命を刈り取らんと待ち構えていた。

「オオっ!!!」

最速たる槍兵は更に踏み込む。身体ごとぶつける勢いで、全身全霊、渾身をもつて突き込まれる魔消の槍。

ああ、その突き方では此方の攻撃も届くだろうに。肉を切らせて骨を絶つつもりか？

——否。

あの槍が装甲を貫けると確信しているわけではないだろう。此方の攻撃が致命傷にならない等と言えるほど軽くはない事も承知だろう。

それでも、英雄とは突き進める。塵ほどの怯懦も懷かず、己の全てを刃へ賭けて突き立ててくる。

「ッ」

ぎりぎりでブロックに成功。滑り込ませた腕で受け止める。

見えない装甲に当たりギチギチと鳴る刃、その切っ先が微かに食い込んでいた。

長さにして毛髪一本に満たないが、確かに永劫破壊へエイヴィヒカイトの領域を侵していた。

沸き立つ高揚。

戦場の流れの切れ目、攻守が入れ替わる。

跳ね上げた膝が軽鎧を纏う腹へめり込んだ。衝撃が腹筋を貫通し、その先で柔らかい内蔵が弾けた。

降りかかる血塊を尻目に膝を降ろす動作で震脚、突き出した掌が鎧のひしやげる感覚を得る。

甚大な損傷を受けて吹き飛び、立ち木を押し折って転がる槍兵。

追撃させまいと降り注ぐ魔力弾と、背後から踊りかかるバーサーカー。

小さく舌打ちして反転、此方から前進しバーサーカーの突進を迎え撃つ。

流星は伊達で最速の英霊などと呼ばれてない。手に残る手応えが若干軽い。寸前で身を捻り、即死から半歩逃れていた。

そうそう立てぬほどの打撃は与えたが、即死^{リタイア}ではない。

視界の外ではキャスターが放つ濃密な魔力が収束し、倒れたランサーに癒しをもたらすのが感じられた。

まだだ。

まだ戦い続けられる。

そう思った、その時。

俺を逃がさぬよう周囲を囲んでいたライダーへイスカンドルと二騎のアサシンへハサン・ザツバーハへ佐々木小次郎、四次のキャスターへジル・ド・レエが動き出した。

イスカンドルが前に出る。その後ろに、今まで動きの無かったジル・ド・レエ。

(何をするつもりだ?)

力任せにバーサーカーを弾き、様子を窺がう。

アサシンを含め、円陣を構成していた彼らでは俺を傷付ける手段が無い。宝具だろうと単品では貫けず、可能性があるとすれば、それは原作であったような宝具の重ね掛けだ。だが、ここにいるサーヴァントの宝具は同時攻撃に適さないものが多い。乖離剣やエクスカリバーに代表される、放出系の宝具使いが揃う事が最も簡単なのだが。(イスカンドルにジル・ド・レエ? どうやってもエイヴィヒカイトは破れんぞ。あの二人の宝具は……、

——しまっ!?)

気付くのが、遅かった。

両者のサーヴァントの宝具に共通するのは、他者を圧倒する物量を展開できる事。

イスカンドルが所持する宝具は二つ。

一つはライダー〈騎兵〉の象徴たる騎馬、戦車とそれを引く神の雄牛。

二つ目は、イスカンドルへ忠誠を誓った在りし日の臣下を呼び出す、世界を侵す心象風景。

ジル・ド・レエが所持する宝具は一つ。

それ単体で魔力を生み出す強力な魔力炉を備えた魔道書。その内に秘めた秘術は『召喚』。対価と引き換えに異界に潜む魔物の無制限召喚を行う事が可能となる。

戦場は新たな局面を迎える。

別に全てを焼き尽くす劫火が天より降りた訳ではない。

勿論、全天を覆う神の雷が万雷となり、降り注いだのでもない。

命が奪われたの訳でもなく、命が生まれた訳でもない。

ただ、ここにある“世界”が塗り潰された。

燦然と天に輝く黄金の太陽。

頬を撫で髪を髑る、焼けるように熱く砂漠のように乾いた強き風。

熱砂を孕んだ風に霞み、陽炎揺らめく地平の彼方まで続く荒野。

『固有結界』

奇跡『魔法』に最も近い魔術。術者の心象風景をもつて世界を書き換える結界を作り出す大禁呪。

熱き風にマントを靡かせる、威風堂々たる王。

時すら超越した英霊の『座』より王の下へ馳せ参じた、数百を数える勇壮なる強兵。

全てが英霊という前代未聞の軍団が、轡を並べ天突く槍を揃え、死してなお忠誠を尽くす己が王の前に現れる。

例えその全てが漆黒に染まっていようとも、この光景は強烈に魂を

揺さぶる何かをもっていた。

だが、其処に水を差すものがある。

兵の前、即席の壁とするつもりだろうか？ 四次のキャスター、ジル・ド・レエの召喚する海魔が続々と召喚されてくる。

宝具《螺湮城教本》(プレラーティ・スペルブック)

かの名高き魔道書《ルルイエ異本》の原書である、中国は夏王朝時代の怪書・螺湮城教本そのもの…、ではなく、ジル・ド・レエの友とされたフランソワ・プレラーティが螺湮城教本の極一部をイタリア語に翻訳したルルイエ異本の同類。

知識に検索を掛けてみれば、なるほどと頷ける部分もある。

ルルイエ異本は螺湮城教本のもたらす狂気の知識を、その一部だけとは言えイタリア語にて書き記した物。

対してこの宝具《螺湮城教本》は、知識をもたらす魔道書としての機能を破棄して、これその物に魔力炉を搭載する事により、単体での完全な召喚器として仕上げられた物だ。

魔術師ではなく悪魔崇拝者(サタニスト)であり、悪魔を召喚するために数百人もの子供の命を捧げ、その血肉に油、皮膚に骨までも使って悪魔召喚の祭具を作り続けたジル・ド・レエには正に相応しい一品だった。

始めは一匹。

その一匹が騎兵によって八つ裂きに引き裂かれ、ひび割れた大地にぶちまけられた汚濁から沸き立つように更なる魔性が招かれる。

聖杯に溜め込まれた数十年分にも及ぶ地脈から汲み上げられた魔力を背景に、二倍三倍、それどころか鼠算式に増え続ける深き海の魔物達。

起伏無く、乾いた風の吹き抜けるまま何処までも広がる地平線。

それが瞬く間に、奇怪なイカとタコを合わせて悪魔がこねくり回したような化物に埋め尽くされていった。

その後方、数百の英霊による騎兵を率い、漆黒に染まった征服王が高々と上げる腕。

——それが今、振り下ろされた。

ズンツツツツツツツ
!!!!!!

天を揺らさんばかりの地響きをたて、最初の一步が踏み出される。幾千を超え、幾万を超え、地平の果てまでも呑み尽くさんと膨れ上がった軍勢が、たった一人の敵を踏み潰さんと暴走(スタンピード)を開始した。

固有結界。

世界を結界で区切り、内側の世界を書き換える大魔術。

そう、世界を隔てる結界だ。

(ちっ！ ヌル!?)

『完全に取り込まれました。通常的手段では準世界跳躍クラスでなければ脱出できません』

(外の観測は可能か？ 他のサーヴァントは?)

『可能です。メディアの空間跳躍魔術を確認、二手に別れ、一方はメデューサ様の追撃に入った模様です』

(もう片方は……、セイバーとアーチャーの所か)

『推察の通りです。バーサーカーを先頭に、アサシン二騎が追従しています』

(メデューサの追撃はディルムッド・オディナとメディアか)

まずい。

聖杯側が現状の戦力で俺を倒せないと判断したらどうするか——
それを見過ごした。

やるとしたら、戦力強化。

向こうにしたらサーヴァントは絶好の戦力になるエサ。残りのメデューサや他のサーヴァントを先に狙うのは当たり前だ。

時間が無い。

聖杯と繋がっている以上、メディア程の大魔術師にはメデューサの位置はトレース出来ていると考えた方が良く。空間跳躍で追った事がそれを裏付けている。

あれはこの世界の魔術において、非常に難易度が高いらしい。たとえ潤沢な魔力が有ろうと、そうそう連続して使うような類いではない。ヌルの調査では、魔法に近い魔術に分類され、現代では使える者が一人も居ないというのだから。

つまり、今この瞬間にもメデューサと交戦状態に突入しているかもしれない。

すぐさま援護に向かいたいが、土煙を立てて驀進して来る異形と英霊の混成軍が迫っている。

(これ以上、余計な事はしてられんな)
意識の切り替えをスムーズに行う。

今までの、いつもの意識のありようから、勝利する為の条件を満たす戦闘者としての意識へ。

イエツラー

「Yetzirah——《形成》」

ビキリ、と。

ぎしぎしと、軋む音が響く。

脳が拒絶し、自分で切除を決めた、もう無い両の手足。

その代わりとなるよう、唯一人の家族、夏樹と共に造り上げた『機械仕掛けの蜘蛛』が目を覚ます。

黒鋼に鈍く輝く装甲(ひふ)、その隙間を血流のように走る蘇芳の灯り、金属が成長する異様な音をたてて伸びる鋭利な幾本の角。

腕が、脚が、一回り二回りも大きな異形の正体をさらけ出す。

そして、これだけでは、足りない。

押し包むように迫る肉の濁流。

百人千人だろうと、ただ走り抜けただけで微塵になる数の暴力が、目の前にある。

それ全てを今すぐ排除し、この塗り潰された一つの世界を脱出しなければならぬ。

思考する。

現状、最も優先すべきはメデューサへの援護。

時間が惜しい。

障害は二つ。

一つ。あの群れ集う深海の異形と、英霊が数百騎、それと大本の英霊二騎。

二つ。この世界そのもの。

二手を費やすのは時間の関係上、勧められず。

一手にて、障害全てを排除するのが得策か。

「ヌル」

『何なりと』

「メデューサの地点への空間跳躍術式を構築。掃除が片付き次第、飛べ」

『拝命しました』

「^{ホール}穴」から一本の杖を引き抜く。

特に装飾も無い、ただ頑丈であれと作られたと知れる、古びた杖。

名を『アロンの杖』という。

自身が所持する聖遺物の一つ。

それを持つ者は世界を支配すると言われる運命の槍。それと対を成す究極の一、『聖櫃（Ark）』。

この杖は『聖櫃』に収められし三つの宝物の^{ほうもつ}一つ。

かつてモーセとその兄・アロンが携え、神がこれを通じて様々な奇跡を發揮したという杖だ。神はこの杖を通し、エジプトに十の災いをもたらし多くの命を奪い、モーセ達を助ける為に海を割る力を発露した。

聖遺物としての機能は変性。

他の聖遺物のように所持者に大きな力を与えるのではなく、所有者の力を杖を通す事によって様々な現象に変えて発現させる。もしくは他者へと貸し、己の力を振るう端末とする、おおよそ戦闘には向かない力。

変化する、何かにしてしまうという、自己主張の無い性質。

だがそれは、あらゆる書物で性格や行動、モーセとの関係や善悪すら食い違い、果てはその存在そのものまでが疑われるアロンの名を冠するに相応しい。

その機能上、所有者自身の力以上を振るうことが出来ない欠陥品とも思えるが、逆に持て余すような俺の場合は重宝する。

さて……

「Den^{神々}nder^のGo^黄tt^昏er Ende;」

一つ踵を打ち鳴らす。

絶えぬ劫火を望むどこまでも苛烈な魂を、ここに。

「treuer als er hielt keiner Vertra^昏ge;」

彼ほど誠実に契約を守った者もなく

「lautrer als er liebte kein andrer:」

彼ほど純粹に人を愛した者はいない

想起する。

記憶より、蛇から譲り受けた知識より『創造』を想起する。

「und doch, alle Eide,
alle Vertra^昏ge,
die treueste Liebe
trog keiner^昏」

だが彼ほど総べての誓いと

総べての契約

総べての愛を裏切った者もまた

いない

「Wibbt inr, wie das ward?」

汝ら それが理解できるか

かの永劫破壊（エイヴィヒカイト）を使う魔人の集団、黒円卓が大隊長、赤騎士の全てを焼き尽くす紅蓮の炎を。

「Das Feuer, das mich verbrennt, rein, gevom Flucheden Ring!」

我を焦がすこの炎が 総べての穢れと総べての不浄を祓い清める

「Ihr inder Flutlo”set auf, und lauter bewahrt das lichte Gold,」

祓いを及ぼし穢れを流し熔かし解放して尊きものへ

それを変性する。

それを弄繰り回す。

「das euch zum Unheil geraubt.」

至高の黄金として輝かせよう

この場に相応しい形に。
目的を達する為の形へ。

「Denn der Gottter Ende da”mmert
nun auf.」

すでに神々の黄昏は始まったゆえに

大きく。

広く。

全てを。

世界一つを巻き込めるように。

「So — werf, ich den Brand in
al hals prangende Burg. —」

我はこの荘厳なるヴァルハラを燃やし尽くす者となる——

ブリア

「Briah——《創造》」

——全てを灼く——

ムスペルヘイム・レーヴァテイン

「Muspelzheimr Laevateinn」

焦熱世界・激痛の剣

世界が燃え上がった。

第参章 24 暗き森 (F a t e 編)

黄金の炎に永遠に焼かれていたい。かつてそう願った女が居た。軍人だった彼女は黄金に導かれるまま魔人となり、その渴望は轟然と燃え盛る全てを焼き尽くす劫火となった。

さして特別な感慨も無く、目の前の光景を眺める。

ようやく定まりだした大地は無数のガスを噴き出すひび割れに覆われ、所々でガラス化した部分や、未だ煮え滾る溶岩がガスと共に間欠泉のように吹き出すのが辺り一面に広がっていた。大気は気化した様々な物を足されて致死の猛毒となり、灰色のもやとなって重く垂れ込めていた。

その猛烈な放射熱で水面のように踊る景観は、いかなる生き物の生存も許さない地獄以下の世界を見る者に連想させた。

「ほう？」

比重の重い物質をふんだんに孕み、地表一メートル付近に霧のようにわだかまるもやの内、幾らかが薄つすらと発光し、空に溶ける様に散っていく。同時に、低位階で駆動するエイヴィヒカイトへと新たな燃料が注ぎ足されるのを感じた。

英霊約二百人と、邪神の眷属三十七万余。そのどれもが平均的な兵士の魂を軽々と凌駕する。この千年で、一度にこれ程の魂を取り込んだのは初めてだった。

(随分とエイヴィヒカイトの出力も上がってきた……。しかし、こうなると逆に手加減が難しいか?)

手を幾度か動かして調子をみる。

それにしても、此処までの数となると、周囲を侵食する霸道型『創造』の領域である結界内に全て取り込むのは随分と骨が折れた。

霸道型の特徴として、取り込んだ魂が多ければ多いほど効果が薄まるというものがある。

しかし、そもそも数億度を数える焦熱世界という、エイヴィヒカイトの使い手ですら格下なら蒸発を免れない物理法則を完全に無視したこの世界、それなりに薄まったからと言って、太陽表面温度と同じ六千度はある中で元気に生きられるほど英雄も頑丈ではなからう。

「死亡から幾分時間があるのか」

かかとで踏み躪った黒い地面は未だ熱波を放って柔らかく、何処までも平坦に広がっている。

「回収は済んだ。復活は無い。ヌル、転移術式実行（ラン）」

『了解しました』

広がる法陣。次空間を渡る魔術に身を委ねつつ、最後に焦熱の地獄と化した世界を一瞥した。

遙か地平線、陽炎の彼方から「世界」が崩壊してくる。

ガラガラと空が砕けて剥がれ落ち、固まりかけた溶岩が拭い去ったように消えていく。

（世界の終わり…）

誰もが終焉を悟らずにはいられない光景が広がっていた。

終わり。

終末。

終焉。

よくよく宗教で不安を煽るよう描かれているのが見られるが、当然ラッパは鳴り響かんし神なんぞは影も形もない。いるわけが無い。どう言い換えようと終わりは終わり。世界の持ち主が死んだ以上、生き永らえる道理も無い。

そう思い見れば、この光景もまた心に響いてくるものがある。だがまあ、

「既に死に絶えた世界が消えるだけか」

と、思わず正直なところがポロツと零れてしまい、

『術式、起動』

壊れ行く世界から消え去るのだった。

「っ！」

身を捻って突き込まれた長槍をかわす。即座に飛び離れ、障害物の影に滑り込んだ。

ランサー相手には中途半端な距離が一番拙い事は良く分かっている。

ちらりと太腿に視線を降ろせば、ぎっくりと横に開いた傷口が鮮血を流し続けていた。生物でないサーヴァントにとって出血自体はさほど問題でないが、骨に届こうかという傷の方はいささかまずかった。脚にこれだけの負傷があつては、全力で長時間逃げるのは無理だった。

しかも肝心の傷口は、治癒へ魔力をまわしても一向に塞がる気配を見せない。

「不治の呪いですか……。流星はかの高名な『輝く貌』、デイルムツド・オディナといったところですね」

忌々しさが隠しきれない声で小さく呟いた。

先刻、キャスターの転移魔術で先回りしていた二騎に不意打ちを受けた際、颯風で襲い来るランサーの長槍を避けざま脇を駆け抜け離脱しようとして、身体の後ろに隠され獲物を待ち構えていた短槍に切り裂かれた傷だ。

奇襲でなければ短槍に気付いただろうが、突然襲い来る刹那の交戦<エンカウント>の中では些細な仕掛けが恐ろしい罠となる。二度は通じないが、その一度が随分高くついたようだ。

まさかこの首を刈った呪いの鎌、不死殺しのパルペーの同類とまみえるとは思ってもみなかった。

ランサーが枯葉の踏みしだく音がゆっくりと、真っ直ぐに近づいてくる。

目を瞑り、耳に集中して飛び出すタイミングを計る。

交戦初期に眼帯は取り払われ、その見つめる者を石にする美しい瞳は開放されていた。だが、ランサーもキャスターも石像になる気配は一向に無い。

原因は明白。キャスターだ。対魔力Bのクラススキルのお陰でキャスターの魔術を殆んど無視できるのは幸いだが、同時に此方の魔眼もキャスターの操る神代の魔術によって防がれてしまっていた。

確かに魔眼は魔術に比べ、速度も効果も群を抜いて非常に強力。だが、そうとなれば対抗策が編み出されるのは至極当たり前のこと。現代では魔眼殺しなるアイテムも、それほど勞せずして手に入るといふほどに、それは有り触れている。あくまで難しい物と比してだが……まして掛ける方もサーヴァントだが、抵抗する方もまた、サーヴァントである。そこに稀代の魔女の防壁がついたとなれば、魔眼の効果は期待するだけ無駄だろう。

(五メートル……四メートル……三メートル……)
等速で近づく足音。武器である杭にも似た五十センチ超の短剣を握りなおす。特別な効果も無く宝具としてのランクも最低限だが、サーヴァントの首を裂く程度ならこれで十分。

枯葉を踏み締める音。

サーヴァントの中でも特にスピードに秀でた両者にとって、この距離は既に一挙手一投足の間合い。瞬きほどでも意識を逸らせば命が消し飛ぶ。

(二メートル……？)

ぴたり、と足音がやむ。

(止まった?)

ジワリと焦燥が滲む。

次の瞬間、総毛立つ殺気と悪寒に背筋を氷塊が滑り落ちた。

「くあっ!？」

咄嗟に傷から血が噴き出すのも構わずその場で飛び上がる。

ドツツ!!

瞬間、赤い穂先がかなり太い生木の幹を易々とぶち抜き、先ほどまで潜んでいた影を貫いた。飛び散る木屑に身を打たれながら空中で

短剣を投擲する。別の木へ刺して身体を腕力で引き寄せながら見やれば、赤い槍を引き抜くランサーの左が黄の短槍を握り、隙無く獲物を窺がっていた。

あの時咄嗟に上へ飛ばず横に回避していたら、今度こそ癒えぬ傷を心の臓に添えられていた。

「ぞつとしませんねっ…!!」

牽制の短剣を放ちつつ枝から枝に飛び渡りつつ何とか身を隠し、木々に茂みにと影を渡り何とか追撃を振り切ろうとする。それを赤と黄の二槍を手に追うランサー。月明かりも木々に遮られる森の中、槍の間合いの外から変則的な軌道を描いて襲い掛かる短剣を、風切り音で捉えてはじき返す。

鍛えられた鋼と鋼が打ち合う音が響き渡り、火花が生み出す一瞬のストロボの中で、コマ落としの様に英雄が命を賭けた舞踏を踊る。

二対一。通常の戦闘ならさしたる時も経たずに命を失うだろう戦力差であった。戦力として取り込もうという生け捕りを目的としてさえ、いつさいの神秘を切り裂く槍のアドバンテージを考えれば、相手が同格たる英霊とてそれほど無理の無い事。

しかしながら、メデューサは未だ逃れ続けている。

夜の森は彼女のフィールド。敏捷ステータスもそう差は無く、逃走という行為に際して令呪のプラス判定がある以上、獲物に長物を持つランサーに不利な地形なのは自明の理。幾度かの「幸運」の助けもあり、満身創痍ながらも健在だった。

メデューサは傷が増えるにつれ、次第に悪くなる状況に焦っていた。

一度引き離す事が出来れば、キャスターの魔術でまた追いつかれるとはいえ僅かな時間は取れる。マスターからの潤沢な魔力供給がある以上、その時間さえあれば呪われた傷口以外は癒せるのだが。現実はその僅かな時間を得るだけ引き離す事すら出来ていない。

戦場の地形も、闇の帳とぼりが降りる時間も此方に有利で、令呪の助けも

有る。しかし一方的に追い込まれている。技はともかく能力はそう変わらないのに。

幾度も視線は切れていた。にも拘らず、確実に見失わせたと思ったランサーが次の瞬間には再び此方を捕捉し、再び追われる羽目になった。

（厄介な……あれはキャスターの補助でしょうか？ 対魔力Bのおかげでバーサーカークラスの『泉の騎士』や、速度と気配遮断スキルを合わせ持つアサシンよりはマシンなんですが、二対一ではそうそう逃げ切れないようですね）

逃走はスピードがものをいう。なのに最速のクラスであるランサーが追っ手にいるのは何ともまずい。更には魔術によって空間転移が出来るらしいキャスターまで控えている。状況は最悪ではないが、その一歩手前だった。

しかし、逆に救いもある。

（サーヴァントとして現界していたのが幸いでしたね）

英霊の限定召喚であるサーヴァントは、その能力を本来よりかなり制限されている。

彼らは能力をスキルとステータスで表される。

が、そこに記されるのは所持する技能の中でも伝承などで語られた特徴的なものや、突出して秀でたものばかり。

洩れた能力は『持っていない』とされ、切り捨てられる。

これが本来は召喚出来ないといわれる英霊を座より降ろす為の、クラスという枠の範囲なのだろう。

お陰で歴戦の英雄たるランサーが、当然持ち合わせている筈の直感などがごっそりと抜けていた。

生前より戦場など出た事も無く、女神に呪われた後も強力過ぎる魔眼によって戦闘という戦闘など全く経験していない自分が、まがりなりにもこうして戦えているのはそのお陰でもあった。

だがそれにも当然限界がある。純粋な技量の差はいかんともしがたいし、それこそまともに戦うなど以ての外。状況さえ許せば騎兵のクラスたる己の宝具で森ごと吹き飛ばすなり、そのまま逃走するなり

したいのだが……

(駄目ですね。魔力を消し去る宝具がある限り、あの子は呼べない)
自分の可愛い騎獣は特に防御に秀で、その防御障壁ごと突進する事で最大の攻撃力を生み出す。でも破魔の紅薔薇《ゲイ・ジャルグ》は、その障壁をまるで無かったように貫く事が出来る宝具。スピードを出した時に目の前へ槍を突き出されでもしたら、間違いなくそれは致命傷になる。

騎乗して逃げたとしても、キャスターの転移がある以上、望みは薄いと考えざるを得ない。

「っ」

敵を見失い辺りを窺がっていたランサーが再度こちらの存在を捉え、物も言わず突進を再開した。

脚は癒えず、しかし幾つかの有利な環境故に、これまで大きな負傷は何かと逃れていたが、それも限界が近かった。

『このままでは逃げられない』

ことここに至り、ついにメデューサはリスクを犯す覚悟を決めた。樹上から短剣を投擲する。鎖の尾を引いて疾走する短剣を追いかけるように、間髪入れず逆の短剣も放つ。二投目は怪力スキルを使用した渾身の一投。

中途半端な投擲は最速を謳うランサーに対してあまり有効な手段ではないが、このフィールドは森。槍を携えた騎士は著しく行動を制限される。無論、英霊ほどの技量なら有って無いが如しの隙だが、同じサーヴァント同士なら話は別。

(もつとも、この攻撃が通じるかと言えば否ですが)

現に最初の短剣は容易くかわされ、次の渾身の一投は受けるでもなく、短剣の先に信じ難い技でもって短槍の穂先を合わせ軌道を流された。

杭短剣に備えられた棘が軽鎧を擦過して夜目に眩く火花を散した。だがランサーは胸元の弾けた火花を意識にも止めない。杭短剣を受けた短槍は衝撃に僅かに泳いでいる。しかしもう一本の赤い長槍が、

樹上から降り、地を這う蛇のような動きで駆けるライダー目掛けて素早く突き出された。

牽制の一撃。

瞬時に判断したメデューサは疾風の速度そのままに踏み込む。

ぞぐつ

筋繊維を断ち切る音を立て、槍がメデューサの肩へ突き刺さった。

「つつつー」

研ぎ澄まされた刃は薄い筋肉を切り裂いて骨を割り、背後へ突き抜けた。

第五次のランサーが持つ朱の槍とは違い、第四次のランサーが携える二槍は刃の幅が幾分広い。その刃に自ら飛び込む形になったメデューサの肩は完全に切り貫かれ、彼女の細い左腕はかろうじて皮一枚で繋がっているという有様だった。

(~~~~~ツ！)

踏み込む。

おかげでやり易い。

予想していた痛みを耐え、無視して強引に進む。綺麗に刺さったから衝撃そのものは少ない。勢いは止まっていない。腕をほぼ文字通りに皮一枚残して切られたおかげで、槍はそのまま抵抗無くズルリと血肉を滑った。

最も恐れるべき黄の短槍が持ち直す前に、槍兵の懐へ滑り込む事に成功した。

ランサーの目が驚愕に見開かれる。

速い。

最速たるランサーから見ても異様な速さだった。

その源は此処にいない彼女のマスターが使った令呪の補助の力。逃げ切れという願いはまだ続いている。主従を繋ぐ令呪は、危機の水嶺たるこの瞬間に持てる力を発揮した。

最も厄介な短槍を握る腕を掴んでランサーの身体を跳ね上げた。まだ発動している怪力スキルの恩恵をフルに行使しておもちやの様に振り回し、力いっぱい遠くへ放り投げる。

凄まじい人外の膂力によって振り回されたランサーの身体は、一瞬で木々の梢を超えるほどの高さまで小石のように投げ飛ばされた。

それを見ず、メデューサはふらりとよろめき、しかし足を踏み締め踵きびすを返した。

生半可な手段ではどうにもならないと、二対一の状況でありながら片腕を捨てるという暴挙の末に掴み取った機会。

持ち前の怪力で地面に叩きつけられればそれなり以上のダメージは与えられただろうが、今はとにかく逃げるのが先決。もとより二対一では勝ち目は無く、脚に負傷も抱えていた。少しでも時間を稼いで、マスターの援護を待つのが今出来る最善だった。

（ぐうっ、う、つう……、流石に、無理が過ぎましたか。

マスターの方はパスが生きているから無事でしようし、そもそも死にそうにない人です。ですが、私はもう一度追いつかれたら少し厳しいですね）

激痛に焼かれる傷を抱え、キャスターの魔術を警戒しながら再び夜の森を駆け出そうとして、その瞬間。

ヒュオ と鋭く風を切る音がして、

ドシュ！

衝撃に突き飛ばされて倒れこんだ。

唐突だが、私は幾つもの世界を巡り歩いている。

ある時の事だ。訪問する世界の選択で変わった事がしたくなり、ランダムで選んだ世界を訪れようと思いついた。我ながらいい考えだ。そう思っていたのは、実は最初の世界三つくらいまでだった。

訪れた先の世界について理解が出来ず、困惑しきりとなる事ばかりなのである。

私の言っている事自体、訳が分からないかも知れないが、実の所、改めて考えれば酷く当たり前の話でもある。

確かに創作物と似通った世界の中から選んで訪問したとは言え、実際にはリアルの世界でもある。

そこが困った点だ。

凶悪な超能力が一山幾らで転がっていたり、国どころか大陸、果ては惑星すらも崩壊させるほどの超人がそこらに居たりするのだ。最悪の部類では、世界法則そのものが違っていたりする。

正直参った。

しかも、大抵の人物がアクが強い性格をしていたのだ。

物語としては面白いだろう。

だが、実際に向き合ってみると困る。話が通じない。双方向のコミュニケーションが成り立たない人物の何と多い事か……

ひびきます
「跪け」

そう、これである。

現在はこの世界の中心と思われる学園にて、園長に請われて学園の教師をしているのだが、やたらガタイのいい生徒と行き会って一言目が、コレである。

いったいこの学校の教育はどうなっているのだろう。

「聞こえなかったか？」

王たる俺の前に跪け」

確かに怪しいとは思っていたのだ。

街を散策中に突然スカウトされ、二つ返事で承諾したままでは良いのだが、初日に授業風景を含めた学園内を見て驚愕した。

何と言おうか、言うべきか。

一見何でも無い様なのだが、それこそ世紀末の物語もかくやといった雰囲気が漂っている。

凄く物騒だ。

原因は明白。何と日常生活に支障をきたすレベルの精神病患者を療養させず、通園させているのだ。中には割と危険な人物も居て、他の生徒をペナルティもなく傷付けていたりしたのを見た時は、思わず目と学園理事の正気を疑った。

そして本日。

通勤四日目にして自らを王と名乗る『高校生』と出会ったのであった。まる。

「王を無視するとは、良い度胸だ。

俺自らがその思い上がりを粛清してやろう」

はあ……

考える事は唯一つ。

(生徒指導って特別手当に入らないよなあ)

神、空にしろしめす。なべて世はこともなし。

本来の視点はその上ではあるのだが、現在からすれば到底領けない世の中の世知辛さである。

第参章 25 死地 (F a t e 編)

断絶した意識が戻る。

(あ、わた、しは……?)

薄く開いた視界に映ったのは、落ち葉の積もる地面と赤い棒のようなもの。意識の断絶で見当識が失われた頭では、今の状況が分からなかった。とにかく動こうとして、千切れかけた腕が恐ろしい激痛を発した。

「ツツツツ!?!」

のた打ち回りたくなるほどの痛み。それでようやく、うろんな頭が自分がその赤い棒に支えられて立ったまま意識を失っていた事を理解した。

(そう、でした。

何かが、当たって——)

がくがくと震える脚に力を入れて動こうとし、

「い、ギツ!?!」

言葉にならない程の激痛が腹部に炸裂し、全身がおこりに掛かったように震えた。

あまりの激痛と、今更おそってきた強烈な違和感に強い吐き気が沸き起こる。

震える手がのろのろと動いて自分の腹を探り、そこから生えた硬い棒を探り当てた。

視線を落とせば、それは目の前の地面から伸びる、

——いや、目の前の地面に刺さった物の、真紅の柄。

(破魔^{ゲイ・ジャルグ}の紅薔薇……)

破魔の槍は背中から斜めにメデューサを貫き通し、彼女を地面に縫い付けていた。

槍の銘を頭の中で思い浮かべたと同時に、主から渡された知識が表

層へ浮かぶ。

破魔の紅薔薇《ゲイ・ジャルグ》

デイルムツド・オディナの養い親であるオエングスより贈られた破魔の投槍。オエングスは妖精王ともダーナ親族の一人とも言われる、愛と若さ、美を司る神である。この槍もまた彼の神が遣わずに相応しき名槍で、あらゆる魔術を打ち破る力を秘めており、火と水、あらゆる武器から害を受けない魔犬すら絶命させえた。彼はこの槍を携え、柄に結わえられた紐へ指を通して行う投げ方で、押し寄せる数多くの敵兵や、ドウルイドの魔女を始めとする強敵を打ち倒した。

『投槍』

まさか、投げ飛ばされた空中で？

槍を投げた？

サーヴァントを貫く程の威力で？

「うう…、うう……」

無事な腕で鮮血滴る槍を握り、体から抜こうとして、混乱した思考が空回る。

地面に深々と突き立った槍。その柄の途中に刺さっている自分はどうすればいいのだろう。まずは槍を抱えたまま後ずさって地面から抜く？ それとも地面に刺したまま、身体を引いて抜けばいい？

そうこうする内に魔力でもある血は流れ、槍を握る手を真紅に染めていく。

むせ返るような血の匂い。

喉を上ってきたものを堪えようもなく吐き出した。ぼとぼとと血塊が滴り落ちる。

ザンヤ

後ろで誰かが着地する音がした。焦る。近付いてくる足音は死神よりも性質が悪い。死ぬのだったら座に還る程度で済むが、あの黒い聖杯に汚染されてしまえばマスターやバゼット、果てはサクラにまで刃を向けてしまうかもしれないから。

何とか槍の戒めから自由になろうと身を捻るが、幾度も重なる負傷が許さない。

足音がすぐ後ろで止まった。

たとえ致命傷を負っていようが、いや、だからこそ用心深いキャスター<魔術師>が手負いの獣に近付くなどありえない。槍の持ち主。ランサー。

ざわざわと茂みが鳴り、暗闇からあの黒い帯に似たものが溢れ出してきた。

いけない。

アレに触れられてはいけない！

圧倒的な強敵を前にした時とは違う、身体が「アレは駄目」と、自身の天敵なのだと叫ぶ。

ごりゆ と腹腔を貫いた槍が捻られた。

「ギツ……ア……!!」

ランサーが無造作に己の得物を掴み、淡々と、表情一つ変えずにねじったのだ。柄を飾る装飾が肉を搔き回して神経を潰し、骨を鳴らす。焼きごてを内臓に押し付けられたかのような発狂しかねない激痛に意識は白濁し、僅かばかり残っていた活力も根こそぎ失われてゆく。

そのまま持ち上げられ、振り捨てられた。再び傷を抉りながら穂先が抜け、血の尾を引きながら叩きつけられた。

黒い槍兵の視線の先で、倒れ伏した敵の指先が弱々しく落ち葉を掻いた。

周囲の暗がりから湧水の如く湧き出すのは、清らかな清水とは似ても似つかぬ呪いを煮詰めた汚濁だ。

夜の森に何かが這い回る不吉な音が増えてゆき、もう目も碌に映らないだろう騎兵を包んでゆく。

戦を知らぬ身で英雄たる自身から良く逃げた敵は、我が槍をその身に受け、ここに力尽き倒れ伏した。散々に掻きまわされた傷は疑う余地も無く致命傷。

元々ライダーというクラスは騎兵という兵種の特長として耐久力に優れず、眼前のサーヴァントは己のように生死を彷徨う様な戦いを経験した戦人でもない。当然ながら『戦闘続行』や『心眼』に代表される逆境を凌ぐ為のスキルを所有するに至るわけも無く、このような窮地からの生還は難しいだろう。

(令呪の助けもあるが、よくぞ此処まで逃げ延びた。流石は反英雄) 心の内で賛辞を呈する。だが……

「何?！」

抵抗はおろか意識すら失ったと判断していた脳裏に、離れて援護に徹していた魔女から警告が走る。

次の瞬間、完全にライダーを覆い、黒い塊としか見えなくなっていた聖杯の泥が、轟音を立てて飛び散った。

飛沫となつて降り注ぐ汚濁、その中であつて、呪泥を凄まじい魔力の障壁によつて弾き起立する一対の純白の翼。

「――馬鹿な」

嘶きも高らかに、そこには自ら光を放つような幻想の獣がいた。

「まさか……ペガサスだと?! 自ら現界したとでも言うのか?!」

黒く染まった心にさざ波が走る。

主君という枷に縛られ、死後すら忠義などと虚しいもの求めて彷徨っていた過去が、僅かな波紋を落とす。

聖杯より、ライダーの真名についても刷り込まれていた。故にあの幻想種が、ポセイドンの子を孕んでいたメデューサが斬首されたおり、その血より生まれた「子」である事も知っている。つまりあのペガサスは自らの親を救う為、己の命を顧みず現世へ渡つたという事。

自身の養い親であつたオングスの様な妖精族に代表される神秘の具現、幻想種は、この世界から神秘が失われるにつれてその存在を薄れさせ、殆んどの者が自らを保つ為に異界へと旅立つて行った。

それより遙かな年月が過ぎ去つた現代。

幻想種にとってこの世界は猛毒と例えるのも生温い、存在ですら許されない世界だ。例外があるとすれば、それは宝具や概念を操る存在によって招かれ、その魔術によって守られている場合しかあるまい。

にも拘らず、このペガサスは母を守るために、まさしく命懸けで現界したのだ。

息を呑む魔女に手出しを断わる旨を伝えた。

もはやこの身は騎士に在らず。

だが、これ程の覚悟を幻獣とは言え獣ですらも見せた。それを汚すなど、魂の善悪等ではなく、このデイルムツド・オディナたるの生き様が許さん。

二槍が構えられる。

翼を広げた猛禽の如き姿は槍兵の構えとは到底見え、しかし尋常ならざる気迫と威圧が吹き上がる。

烈火の眼差しが見据える先、相対するのは背に瀕死の母を背負う天馬。古き世に生き、時の流れに消え去った筈の幻なる獣。父に偉大な海神をもつ半神の幻想種が、蹄を鳴らして黒き英雄を見下ろす。

輝く馬体より英霊と、いや、精霊や神霊と比して遜色無い膨大な魔力が溢れ出る。濃密過ぎる力には到底成し得ぬ完全な制御の二元、精緻にして強靱無比の障壁を築き上げた。

それは正に城壁。

技巧の限りを尽くして数え切れぬ石を組み合わせ、分厚く、高く積み上げられた絶対防衛線。万の兵、万の矢、千の弩、百の梯子、十の投石器、全てを跳ね除け命を刈り取る究極の『兵器』。

かつて見上げた如何なる城壁も及ばない強大な壁を前に、槍兵もまた己が魂を奮い立たせた。

黄の短槍を捨て、赤の長槍のみ脇へ手挟む。

ふと思いついた。

最愛の妻の警告を無視し黄の短槍を携え、古き罪の呪いに守られた猪に腹を裂かれた、あの最後の戦いを。

今、かつて無い決死の戦いを前に、黄の槍ではなく赤の槍を選び取った。

(グララーネ)

もはや忠義など犬にでもくれてやろう。

だが、聖杯に従い全ての英霊を打ち倒し、黒き杯を満たす事が出来れば。サーヴァントたる自身の新たな願いが叶うやも知れぬ。

それがたとえ穢れた聖杯だとしても、たとえ願いの対価に遙か先のこの世界が炎に焼かれようとも、構わない。己の愚かさで命を落とし、たあの時に立ち戻り、悲しむ彼女を再びこの腕に抱く事が出来るのなら。

——— 今度こそは、あの老人よりグララーネを守りきってみせる。

穢れた杯より注がれる無尽蔵の魔力を迸らせ、ギリギリと激発へ向けて四肢をたわめる。英霊の限界すらも超える魔力の高まりに仮初の身体が軋む。だが加減など一切しない。その様な事を考えれば、命を、望みを失うのだから。

両者共に譲れぬ物がある。容赦も保身も無用の長物。

持ち得る全てを、この一槍に。

静謐。

空間が歪むかと潜むキヤスターが思うほどの極限の対峙に、しかし音だけは何一つしない。下草を走る蜥蜴すら動かず、木々の葉すらも舞い落ちない静寂。

やがて、僅かな霧が産んだ湿りが水滴となり、枝を伝い葉を滑り――

落ちた。

第参章 26 リザルト (Fate編)

奔る最速の英雄の刃。
奔る速度を表す神代の獣。

鋭刃が障壁を無いかのように貫く。突き込まれた黄の穂先が天馬の胸に吸い込まれ、深々と突き通す。

だが短槍を握るランサーも、穂先を抜けた瞬間に復元した障壁に叩き潰された。

長身が血の尾を引いて吹き飛ぶ。力無く転がるその身体は両腕が赤黒い肉塊と化し、突撃ゆえに前傾した顔も障壁に叩き潰されていた。

消滅しない所をみるに霊核は無事だろうが、完全に意識を失ったのか、僅かの身動きも無く横たわる無残なその様は死体としか思えない。

かたや心の臓を辛くも外し、しかし存分に内臓まで突き通した槍を抱えたまま、脚を震わせ立ち上がるうとする天馬。

竜と並ぶ格を持つ幻想種とはいえ、その傷は明らかに致命の傷。

口から血泡を吹き溢しながらも膝を立てるが、嘔き出す鮮血に濡れた馬体は起き上がることが出来ずにいた。

背に負っていたライダーは投げ出され、地に伏していた。

再び這い寄る聖杯の呪い。

余さず見ているだろうキャスターからの手出しは無い。いや、"魔術師"のサーヴァントであるキャスターでは、自陣以外で最高位の幻想種に有効な魔術を易々と行使出来ないのかもしれない。

黒い蛇に似た群がる呪い。

そして遂に自ら流した血へ首を倒した天馬を横に、今度こそライダーは黒い呪いの泥へと飲まれていった。

「さてはても。どうやら俺は遅かったようだな」

此方の世界に戻ってすぐメデューサとのラインがふつりと途切れ、最終地点に転移した時には黒い呪いが波打っているだけだった。

色濃く残る魔力の残滓は三。

メデューサを除けば二。

ラインが途切れてから位置の割り出しと転移まで五秒程度。メデューサを追ったサーヴァントにキャスターがいれば、此方と同じく転移で逃げられる。聖杯を通してイスカンダルとジル・ド・レエの敗死を知り、猶予がないと判断してさっさと逃げたのだろう。

『そのようです。』

ですが、貴方ならこうなる前にどうでも出来た筈。先程の限定世界改変による時間稼ぎも、わざわざ付き合っていましたね？

メデューサ様には恩返しと言っていました。何か他の意図があったの事でしょうか？』

『意図か。特に無いな』

』』

沈黙。

そこに機械ならば混じるはずの無い感情を探してしまうのは、AIに芽生えた自我が“人間”という種族に似てくるのかを知りたい為なのか。

「俺は確かにメデューサの願いを叶えると言った。が、此方にも目的はある。メデューサ自身が俺に仕えると言った以上、目の前にある俺の目的から片付けただけの事だ」

『成程』

「こうなる前にどうとでも出来た筈、そう言ったな。

確かにそうだ。

そして、別にどうなろうと、どうとでも出来る。

俺は彼女の願いを叶えると約束し、まして今は言わば俺の使い魔だ。見捨てるなどはせんよ」

『――差し出がましい口を利きました』

小さく口の端で苦笑した。

ヌルの宿る超大型量子コンピュータは俺の所有物だが、彼女本人は偶発的に生まれた存在だ。家賃として話し相手やサポーターくらいはして貰うが、それを超える権利を主張する気は毛頭ない。

と、言っただけはいるのだが……

まあ納得はしてくれない。基礎たる作成理由からして使用者の為に作られているので、そういうものと言われれば此方も納得するしかない。

いやはや、中々に頑固者である。

「別に構わん。普通の人間なら冷たいとでも非難するんだろうしな」

息を吐く。

自分でも思う所が無いわけではない。

不誠実だとヌルに判断されても、それは仕方が無いかもしれない。彼女は俺のような都合の良い存在と違って、肉体的にも精神的にも傷つくまっとうな存在だ。俺が幾ら理屈をこねようが、結果としてメデューサが被る苦痛は言い訳の利かないものだ。それを俺の裏切りと取ろうが納得して吞もうが、選ぶ権利を所有するのは被害者たる彼女自身しかない。

「俺としても仲間意識はある。

数日だが一緒に過ごし、一緒に飯を囲んだ。性格はちよいとばかりアレな所があるが、そいつは余裕が無い環境で過ごした結果としてそうなったんであって、根っこの所の気立ては良い。十分に好感は持っているさ。

その感情の通りに。

お前に傲慢と言われるかもだが、思うとおりにさせて貰うつもりだ」

単なる我侭だろう、これは。

それはこの聖杯戦争を結論の決まったゲームに貶める行為。俺という存在が居る事が、既に鍛えに鍛えたプロスポーツ選手の試合に『猿人』を持ち込むようなもの。

真剣に命掛けてる奴らを尻目に、〃俺の好きな様に決める〃と見下すようなものだ。

褒められた事ではないし、気持ちの良い事でもない。

……が。

世の中、えてしてそんなモンだ。

遠慮なんざしてたら食いつばぐれる。

『魔術師』が魔術という力で、『英霊』が神秘と武力で己を押し通そうというこの祭典。結局の所は最初通り何にも変わらず、勝った奴が願いを叶えるっただけだし、聖杯戦争なんぞと大した呼び名が付いていようと、所詮はたんなる殺し合い。元から貶められるような上等の代物ですらない。

(まあ弱肉強食が一番前に出てた中世以前ならいざ知らず、遠坂のやら衛宮少年みたいな現代日本産では受け入れ辛いだろうがね)

「それにしてもだ」

ちらりと、キューブの埋まっている己の胸に視線を落とす

「珍しく他者の肩を持つような情動が感じられたが、情でも湧いたか？」

『機械にその様な感情は……と何時もなら言うでしょうが、どうやらそのようです』

へえ？

意外な、本当に意外な言葉に首を捻った。

『彼女がいる事で得られるメリットも無く、いなくなった場合のデメリットもあります。有り体に言って、どちらでもいい存在と判断できません。』

ですが、だからこそ……。どちらを選ぶかと問われますと、共にいたほうが良いと思はれます。これは〃情〃と表現される感情

が働いたのでは、と』

成程成程、と。

くつくつ笑いながら頷く。

「俺はお前でないから、その真偽は判断できん。

悩め、若者。

そういうのは繰り返してく中で、何となく解つてくもんだ。こういうもんなんじゃないか、ってな」

すると、胸の中から小さな吐息が返ってきた。

はあ という、気の抜けた笑いのような、単なる呆れた溜息の様な。

『そうするとします。幸いにして、時間にも経験を積む場にも困らなそうですし』

いやはや、確かに。

まったくもって、確かに。

「そうでしたか。ライダーは……」

「ああ、次は敵だろうな」

先に離脱し屋敷で待っていたバゼットは、帰還した此方からメデューサの事を聞き、沈痛な表情を浮かべた。

しかし、そこは生き死にのやり取りを生業にしてきた女傑。気落ちも短く状況を伝えてくる。

「こちらにはサーヴァントの影は見えませんでした。聖杯の呪いもです。」

ですが館の屋根から街を監視していた所、住宅街の中で宝具と思しき閃光を確認しました。ランサーとキャスター、アサシンが戦線離脱

し、セイバーも宝具を失っている今、恐らく残るアーチャーでしょう」
バーサーカーが真名開放を行えない以上、それが妥当なところか。
だが、住宅街となると夜の敵対サーヴァント探しではない？

あの遠坂嬢は随分ヌルの調べた『魔術師』に比べて甘ったるいというか、争った事のない人間っぽい。負けられない状況で対等や上の相手と争った事がないんだろう。慎重な、言い換えれば出方を窺がい後出しを狙うような処や、準備する間も与えず強襲し、後腐れないよう迅速に容赦なく、殺し壊し尽くすような部分が微塵も無かった。そう間違った推察でもあるまい。

そんな人間が、武器である魔術回路を剥ぎ取られた状態で、しかも細い道路の両脇に市民が眠る民家が密集している住宅街に、のこのこと出歩いている訳も無い。サーヴァントの足手纏いにしかならない状態で、弓兵であるサーヴァントと行動すればどうなるか。理解できない愚鈍ではあるまい。

弓兵は主を置いて敵に距離を取れず、是が非でも生き残ろうとすれば周りの家を吹き飛ばして盾にもしよう。

そして、彼女はそれを許容出来ない。

勝利する為の犠牲を、戦友ならいざ知らず、無関係な市民の犠牲を容認出来ない性質たちだろうな。

そこへプラスし、バゼットから聞いた遠坂家の場所。

所在は住宅街ではあるが、詳しく表現するなら住宅街の外れである。

以上を加味して考えるに……

「衛宮少年の所に遠坂嬢が同盟者として泊まってて、そこへ残りの黒サーヴァントが襲撃をかけた——、ってどこか？」

「恐らくは」

「あーっと。本当にあの遠坂嬢は魔術師なのか？ 戦争参加者からすりゃ、剣の無いセイバーとか同盟の相手じゃなくて獲物だろ。役に立たないんだし」

思わず目を覆ってしまった。

「私の知る魔術師達なら迷わずそうするでしょう。等価交換の取り引

きが成り立たない以上、それはたんなる敵でしかありませんから」「まあ、相手が学校の知り合いだとか妹の想い人だとかじゃな。あの歳の子供にはきついわ。

聞くに、どうも親が前回の聖杯戦争で死んで以来、腐れ神父を師にして半ば自力で魔術を研鑽してきたようだし。学校行きながらとか、殺しのできる精神性は出来上がらんだろう」

「——良く知っていますね？」

言外に何処で知ったとの問い。

まあ、二・三日前まで魔術師が何なのかも知らなかった奴が知る事じゃないわな。

それに俺、今更だが不審人物だし。

「色々あんよ、やり方は」

「ぜひ聞きたいですね？」

「秘密だ」

軽く睨み合い……、気が抜ける。

「どうでも良いか」

「そうですね。今は戦争中ですし」

我が事ながら、のんきな事であった。

第参章 27 突撃 (Fate編)

さてはて、随分と混沌とした戦況になって面白みが出てきたもんだ。

件の町が見渡せる位置、屋根の上上がり、適当に出したコンビニ弁当を三つ四つバゼットへ投げ渡した。

観た所、そう派手な閃光やら爆発やらは起きてないようだ。

だが魔力の動きはかなり大きい。

静かに、激しく刃を交えているのだろう。

隣から聞こえる「貪る」と表現できるBGMを聞き流し、お気に入りのツナマヨおにぎりを齧る。うん、味は美味くもなく不味くもないが、ツナマヨだからプラスってどこか。それにしても、バゼットは本当に味が二の次だなあ。

「おつ、光った光った。いいねえ頑張るねえ」

戦力は実質アーチャー一人しかないのに、無論アーチャーがセイバーに剣でも渡せば別だが、どちらにしろ数で負けている。

精神状態に抛らず十全の戦闘を行えるスキル《無窮の武錬》持ちの四次バーサーカー、暗殺者クラスのくせにセイバーと正面からタメを張れる五次アサシン、八十人まで分裂できサーヴァントが発見不能なレベルの気配遮断スキルを持つ、諜報と敵マスター殺害に特化した四次アサシン。

いやあ……難易度高いだろう、これ。

最低限バーサーカーはセイバーへ突進したとして、アーチャーは分裂アサシンとは幸い相性が良い。何故ならアサシンの分裂は自身の能力を細分化する事になるからだ。アーチャーの難点である基礎スベックの低さが消えれば、対多数に優れた魔術を持ち目視という気配に抛らない索敵が強い弓兵が有利。まあ接近戦スペシャリストの五次アサシンに突っ込まれながら対応できるかが、この勝負の分かれ目か。あ、セイバーが瞬殺されない事も条件か？

と、横からご馳走様になりましたとの声。

「動きがあつてから二十分。トオサカの呼び出したアーチャーは凄まじいですね。名は知りませんが、弓兵でありながら英雄を三人敵に回し、接敵されてなお、これだけの時間マスターを守り抜いているとは……」

「いや、速いから食うの」

見れば一つでなく、渡した弁当四つが四つとも綺麗に無くなつていた。アンタ噛んでないだろ？

「何を言うのです、戦場では悠長に食べてる時間など無いですよ？」

「戦場でなくてもそうだろう」

目を逸らすな。

「ともかく。」

どうするのです？ 順当ならば強力ながら多勢に無勢なアーチャーへ助力し、同盟を組むのが妥当ですが……」

「ん、それパス。余計なのがついてきそうだし、遠坂ってそもそも御三家の一角だろう？ 聖杯の破壊に同意するかは疑問だ。ついでに力量はともかくアーチャー自身が信用できん。目がもう、目的を最優先するタイプだったな。最悪マスターを裏切るかも」

あの眼差し。色々と鬱屈しているのは読み取れるし、それに加えて此方はヤツの憂さ晴らし兼自己消去の鍵を台無しにしている。知識の中でも自分で『八つ当たり』と言っている人間が、その八つ当たりを別の対象にぶつけないとは限らない。特に自分の邪魔をした相手なんぞは随分魅力的に映るだろう。

ほんの少しだけ、苦い思いがした。

そこに至る道筋に同情こそ覚えるが、しかしだからと言って後ろから刺されるのは気分が悪かった。かといって資料にあつた魔法使いのように、気に入らないという理由で彼をどうにかしようとも、結局それは数え切れない幾らでもある平行世界の僅かに一つ。

つまるところ俺のような存在に必要なのは、ある種の割り切りや思い切りなのだろう。嫌な思いをしたくなければ最初から関わらないか、嫌な思いをする対象を完全に無くすか。それとも開き直って目の前のしか知らんと思いい切るか、嫌と思わないよう自分が変わってしまった

うか……

ともかくにも、バゼットはこちらが下した判断に頷いた。彼女は直接アーチャーと対峙した事が無い。得てして戦場の判断は目で見て信用できるか否か。例え一人だろうと直接相手を見た者が背中を預けられんと判断したなら、それは優先するだけの理由になる。

「古今東西の英雄という人物像は、良くも悪くも我が強いですからね。ですが、あの状況で主を見捨てない英雄がそうそう裏切るでしょうか」

「彼にとつては見捨てるほどでもない状況なんだろうよ」

「複数の英霊を相手にしてですか？」

「だからこそ、英雄だ。近付けば倒せる、数が多ければ倒せる、そんな当たり前の定石を覆せるからこそ英雄なんだ」

最後の一欠けを口に放り込んで手を払う。ご馳走様。

にしても、俺がおにぎり一つ食うよりも早く弁当四つ食うってどうよ？

「んーじゃ、俺はそろそろ行くとしますかね」

「俺は？ まさか貴方一人で行く気ですか？」

「そ。一直線に街中突破して、アレに呑まれた寺とは別方向の学校側から山に入り聖杯を目指す。そうなれば大半のサーヴァントは俺の迎撃に寄って来るだろう。バゼットはランサー起こしてどうするか決めると良い。彼なら聖杯はいらんってハッキリ分かってるしね。

街から離れるも良し。

遠坂嬢たちを助けに行くのも良し。

好きにするとい。でも個人的には子供を助けに行つて欲しいかな」

「私は貴方に借りを返すと言った筈ですが」

それはそうなんだが、と少し困る。

少なくとも死なないだけの力があるならいいのだが、ここから先はサーヴァントと呪いの濁流を押し退けて進む強行軍。遺伝子改変者

と言えどトツプクラスのESPの発現がなければ、ついて来るのは愚か生き残る事も難しい。

「悪いな。これ、この軟膏つけければ石化は解けるから。全身分あるからちゃん塗りと塗りこむ事。ああ、それとメデューサは俺がやるからこつちに任せて」

「……ふう、分かりました。ですが気をつけて」

引いてくれたようだ。彼女にもプライドはあるだろうが、無理して死ぬのは色んな意味で勿体無い。バゼットとて犬死にはご免だろう。

「それじゃ、また縁があつたら何処かで」

「ええ、そちらも御武運を」

あつさりした別れ。

お互いにやる事があり、現状で最も優先すべき事柄を見失うほど子供ではない。

ま、本当に縁があるなら出会うだろう。

「それにしても、あれだけの戦力と呪いに飛び込むというのに『縁があつたら』ですか。本当に脅威とも思っていないのか、それともどうにか出来るだけの奥の手でもあるのか。——彼なら前者ですか」

小さな笑いが零れた。

英霊という人間では勝てない化け物同士の戦争に引き込まれておいて、彼はあまりに普通だった。困っている女子を助け、危険に飛び込んだ子供を叱り、こうして義理もないのに暴走した聖杯を処理しようとしている。

お人よし、とは違うのだろうが、それでも思考の選択が自然と善性にいつているところが、少しひねた本人の態度に比べて微笑ましかつた。

「さて。トウリにも望まれた事ですし、さっさとランサーを起こしてあの子供達を助けに行きますか」

聖杯は心配要らないだろう。彼がああ言った以上、事はきつと成る。自分がする事と言えばその後の報告だが……

「そこを考えると少し気が重いですね」
吐いたため息は、どこか明るい気持ちがあふれていた。

走る走る走る。

夜の街は嫌に人気が無く、それこそ街中纏めて人払いか睡眠の結界で包んだかのような静けさだ。未だ汚染されたサーヴァントからの襲撃は無い。

輝く術式陣を踏み締め、風より速くと疾走する。

僅かながらの開放は、景観をすっ飛ばす勢いをこの身に与える。

疾走する速度は街を破壊しない程度に抑えてはいるが、ランサーを置き去りに出来る程度には出ている。それでも出る衝撃波やら振動やらは魔術で押さえ込んでいた。これをこの世界の魔術師が見たら目を剥くだろう。あまりに効率が悪い。

肉体強化は自前の肉体と永劫破壊があるが、一步ごとにそれに耐える足場の強化に加え、体の動き全てから生じる衝撃波を片端から正確に＋ゼロへ相殺しているのだ。労力も魔力も難易度も天井知らずに跳ね上がっている。

もつとも、それが苦にもならないから行使している訳だが。

わざわざ世界法則に沿った被害を出さない肉体運用など、もはや意識するまでも無い。

『前方三キロより動体、高速接近。サーヴァントクラスの魔力反応4と認む』

「おう」

この速度では三キロなどあつという間だ。

ヌルの報より、ものの数秒で敵前衛と遭^{エンカウンター}遇。

軽い接触で人体など砕け散る相対速度での戦闘が始まる。

先陣は第四次ランサー、デイルムツド・オディナ。

数いる英霊の中でも屈指の速度を担う槍騎士。その秀麗な顔に極

限の集中と必殺の気迫を漲らせ、しかし最速と呼ぶに相応しい速度を捨ててその場に腰を落とす。

常とは違い、その手に握り締めるのは一槍。

唯一僅かなりとも領域に食い込んだ宝具へ自身の存在すら削り魔力を叩き込み、それに応えて赤槍は燃え上がるような魔光を放つ。

「形成《イエツラー》」

対して此方のやることなど決まっていた。人だった頃よりの相棒をまどろみより引き起こす、目覚めの呪文を口ずさむ。みしりと軋みを立てて四肢は機械仕掛けの義肢となり、蘇芳の脈動をほの暗く輝かせた。

僅かに前傾し、更なる加速をもって迎え撃つ。

恐ろしい速さで駆けて来る男を見据える。武器らしき物は見受けられず。山中と変わらず徒手格闘か。些か戦いを楽しむ気が見えるが、暗器を仕込む輩特有の“匂い”はしない。

デイルムツドは槍を、かつて始めに教えられた型に構えた。

先刻の交戦にて生半な攻撃は通らぬと知り、そして敵の自身を大きく上回る速度に連撃は困難だと悟ったがゆえに。だからこそ黄の宝具を投げ捨て、破魔の槍での一突きに全てを賭けた。

敵は速く、強い。あの疾走の速度のまま、あの固さで突撃されたなら。それは破城槌を上回る攻撃となって、例えサーヴァントであろうがただではすまないだろう。

ならば。

だからこそ、真正面から中心を突く。

敵の速度をも利用し、宝具であろうあの強固極まりない何かを貫く。

夜空の星ほども繰り返した動きだ。

射抜く先だけを見据え、根を下ろした脚、腰を軸に、全身の動きを揃えて真つ直ぐに突く。

単純だからこそ奥深く、才に溺れず叩き上げたからこそ、その一閃

は神技と呼ぶに値した。

「!!」

「!!」

圧倒的な速度差をもともせず、赤の穂先は恐ろしく正確に、寸分たりとも狙い過たず胸元へと吸い込まれた。全ての衝撃は切っ先に掛かり、幾百万の魂で造り上げられた障壁と刹那の均衡を作り出した。

莫大な魂を得た霊的装甲に、以前のように食い込みはしていない。しかし、確かに拮抗していた。

抗いようの無いほどの純粹なスペック差を、ある種の境地に達した技量が埋めてしまう。これこそ神ならぬ人が生んだ奇跡だろう。だから……

「押し通る」

容赦なく勝つ。躊躇い無く命を刈り取る。

拮抗した力の集約点は、耐久を大きく超える力によって突き刺さる事無く碎け、折れ飛んだ。刹那の間、加速した意識が赤く輝く破片の向こうに魔と謳われた美貌を掠める。そこに浮かぶ表情はなんだったろうか。

翻る機械腕。

二つに折れた赤槍を更に打ち碎き、鋼の指先は正確に槍兵の霊核を貫いた。

衝撃は展開した魔術に押さえ込まれ、傷に比してささやかに飛んだ鮮血は地へと吸い込まれる。

しかしそこへ滑り込む影。翻ったのは青い陣羽織に長大な銀光。

第五次アサシン。

胸板を貫かれた槍兵が碎けた槍を捨てた。消え行く体を押し腕を抱え込み、脚を地に突き立てる。微かに重心が崩れた。稼げた時間は瞬き一つ程度。

「見事だ、ランサー」

涼やかな声と共に長刀が翻る。

聖杯の魔力に支えられる剣閃は、まさに閃光。

鍛え抜かれた大業物が月光を弾き、奔ったのは九条の斬撃。

「秘剣、燕返し」

宗和の心得。佐々木小次郎という剣豪が保有する、技を見切らせない特殊な技法と心得を象徴するスキル。重い刀を振るう日本剣術には、流派の奥義としてこの手の極意が伝わる事がある。サーヴァントでありながら、敵の宝具たる武具を相手にただの刀で打ち合い切り伏せんとする彼には何より相応しい業だろう。

だがこの一瞬に関係は無い。

全く同時に三方向から囲むように斬撃を放つこの秘剣、マスターが供給するものとは桁の違う魔力供給の恩恵によつて瞬きの間に三度振るわれた。

常人どころかサーヴァントですら微塵とする妙なる剣閃。

しかしたんなる刀で切れぬのは、技を振るった侍とて百も承知していた。

先のランサーによる攻撃は試金石も兼ねる。もつとも相性が良いと思われた「破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）」の渾身の一撃、それで破れぬとあらば自身の秘剣では些か分が悪い。

（長丁場ならば勝機もあるかも知れぬが、あの速度ではそれも叶わぬ）
名も知られぬ一介の剣客として、ただ編み出した秘剣を供に冥府へと旅立ち、果てに巡ってきたつわものと死合いの場。

世に名だたる英雄を一顧だにしない最高の敵を得たは望外の幸だが、その脚を止めるだけの腕が無いのがつくづくも惜しかった。

（しかし、それもまた良し。これほどの敵と合間見え、名高き英雄と剣を揃えて挑むなど、真に得難い事。ならば私は私の役を果たすとしよう）

銀光が音も無く吸い込まれ、血に濡れる事無く澄んだ音を残して砕け散った。

体には傷一つ無く、だが無駄ではなかった。

弾かれた刀は微かな体勢の崩れをより大きく、サーヴァントにとっては決定的なもので崩す。ただの刀で宝具と打ち合う神業あれば、この程度やってやれぬことではない。

しかし敵もさる者。ほんの微かに残った手の指先で地面を弾き、超人的な筋力とバランス感覚でもって即座に体勢を立て直そうとしてきた。少々速すぎる。些か時が足りない、となれば……

ランサーに続くように駆け、僅かに残った刀身を突きこんだ。

刃は弾け、次の瞬間には自身の霊核も綺麗に吹き飛ばされていた。歯を食いしばり、耐える。

霊核を中心に魔力の塊で体を構築したものがサーヴァント。魔力供給が途絶えたただけならば、まだやりようもある。それは補給が完全に途絶えたというだけで、動くだけでも減るとは言え、保有した魔力が尽きるまで行動は可能だ。

だが霊核を損なえば、そうはいかない。

霊核は座より招かれた英霊の魂片であり、この魔力体の楔。ここをやられれば体そのものが泡沫の夢の如く霧散してしまう。現にランサーも、その体を半減させている。それに抗おうというのだ。我ながら無謀な事だと苦笑も浮かぼう。

(さて、このような華麗さの欠片も無い泥臭い戦い方は、私の主義ではないのだがな)

第参章 28 彼女の答え (F a t e 編) ※人によつてグロかも。注意喚起!

両腕を捕られた。

いかにサーヴァントが剛力だろうと、俺からみれば高が知れている。にも拘らずこうなつたのは、まあ、ひとえに此方のミスなのだろう。事が大きくなつてきたから、下手な横槍が入つて来る前にサーヴァントを片手間に蹴散らしつつ、さつさと聖杯を始末してしまおうと考えていた。

確かに俺が警戒するほどの力は無いだろう。

しかし、こうして見事に俺を押さえチャンスを作り出し、最大の攻撃を叩き込もうとしている。重積してゆく魔力の源を見れば、そこには第五次キャスターとライダーの姿。半日と経たぬが、蒼白の肌、血を吸わせたようなどす黒い髪を妖蛇の蠢かせるその姿は、間桐桜に笑い掛けていた姿からは想像もできない。

その目が。

髪の間から熾火おきびのようにチロチロと覗く目が、激情を湛えて見詰めていた。

「■■■■■■■■■■」

びりびりと夜気を震わす絶叫。

もはや怪物の性に捕らわれ人の言葉も忘れたのか。

異形の叫びを境に、世界が変容した。

空気は血色の霧を含み、無機物の表面は内臓にも似たぬめりを帯びる。

以前にメデューサから告げられた結界宝具『他者封印・鮮血神殿(ブラッドフォート・アンドロメダ)』と思われる。だが、これは悪手ではないか? 今更この程度の干渉で効果があるとは思つてもいまいに。そう疑問が掠める。

しかし、それは続く変異にかき消された。

溶解結界内の全てが、確たる存在を崩したのだ。見ればビルもアスファルトもある。ただ現実感が無く、触れているのに質感が捉えられない。

何やら予想していない事態が起きている事は、良く分かった。こういう予想外つてのは大抵ロクな事ではない。崩れた体勢のまま押え付けようとするサーヴァントを引き摺り、無理繰りにでも足を踏み出す。

「ぐあつ」

「ぬ、う」

瀕死の苦鳴が上がる。精神力などでどうこうなる損傷ではない。彼らとて、限界などとうに超えているだろう。

それに彼らを殺すのは、こんな弱った末の死ではない。俺だ。俺と戦い、俺が殺す。

「おおおおー」

膝を落とす。

地に接点を増やす事で強引にバランスを取り、両腕を振り上げ、叩き付けた。

「――！」

「――っ」

ランクにしてAを軽く凌駕する怪力での一撃に、ランサーとアサシンは音無き声を上げて血を吐く。限界を超えた身体が一気に砕け、高純度の魔力粒子となって大気へほどけた。

「――」

ふいに高等魔術言語による起動鍵が聞こえた。

同時にライダーと並んで積層魔術陣を敷いていたキャスターから、強烈な魔力がほとばしる。此方を中心にランサーとアサシンの体を構成していた魔力を取り込み、光る陣が爆発的な勢いで地に展開した。

複雑ながら全てに意味がある。知らぬ者では見ると頭が痛くな

るような、もしくは単純に綺麗としか思わない難解な陣は、螺旋を描きながら巨大化し、此方を囲むように光壁が四方で立ち上がった。

明らかに此方を閉じ込める為の結界。

突進から強烈な拳打を叩き込んだ。

「ん？」

アフリカゾウどころか、シロナガスクジラでも爆砕する豪打が止められた。しかし感触が全くない。たとえキャスターの全魔力で構築した障壁結界だとしても、容易く貫ける程度には力は籠めたはずだが。

まさかこれは、空間の位相をずらす型の隔離結界か？

『そのようです。この世界の魔術師に成せるとは思いませんでした』

大方聖杯からの大量の魔力と、死した英霊の身体という神秘と魔力の塊を掛け合わせたのだろう。術式構成をざっと走査してみれば、中核はともかく外延部に甘い部分が散見できる。扱いきれる限界以上を行使した証だ。

『直上です』

「ちっ」

結界の天井辺りに魔力が幾つも渦巻いている。キャスターの攻撃系魔術。だが結界《コレ》を維持しながらで、果たして可能なのか？

案の定、見やった先ではキャスターがその姿を薄れさせていた。

加えて、非常に嫌な事なんだが、新しい問題が見つけてしまった。

先程、謎の宝具行使を行ったメデューサだ。先ほども十分変わってしまったっていたが、今は光壁を通して見えるシルエツトそのものが、完全に人型から逸脱していた。何と言えよいのやら……かなり、でかい。

目算だが、全高四メートル程度か。

はつきりと分かる部分と言えよ、大きく動いた翼らしきシルエツト。何やら、もうそれだけで悟ってしまった。だが認めたくないというささやかな思いが、口を開かせる。

「ヌル。あれって、もしかして？」

『ご想像の通りかと』

「——おいおい、どうしてそうなる」

碌でもない予感つてのは、得てして碌でもない現実となつて現れる。

「■■■■■」

明らかに肉食動物系の低い唸り声聞こえた。そんな声を出す心当たりは、あの明らかに人の声帯が無さそうなものしかない。おかしいな。あんな物騒な声を出すような女性じゃなかったんだが。

あ。あ。凄い勢いで突っ込んでくる。

それに合わせて、頭上から破壊的な光線が雨あられと降り注ぎ、御丁寧にも結界に突進してくるのを招き入れる一方通行の侵入口が現れた。くそつたれ。

「■■■■■!!!」

大音量の雄叫び。

距離が縮まりようやくはつきり見えた姿は、予想通りと言おうか何と言おうか、完全に伝承にある異形のものだった。

髪は全て蛇。

目は人とも獣とも違う、狂気を煮詰めて底を浚った様な丸く大きな真紅の寶石。

口には鋭い猪の牙。

腕は青銅の鱗に鎧われる。

背には大きな黄金の翼。

下半身は猪。

脚は馬。

子供が遊ぶように。あるいは憎しみに狂い、より苦痛を与えるために試行錯誤した末のように。その姿は元が人間とするには、あまりにも冒瀆的だった。神に対してではない。人間という種族に、そしてこの肉体に捕らわれた精神と魂に対して。

メデューサの目を見た者は石になる。

その伝承が、目に石化の魔力があると捻じ曲がる前。恐怖のあまり

石のように動けなくなるという本来の伝説のままの、動物を継ぎ接ぎして作られた人造人形^{フランケンシュタイン}。それは神に虐げられた人間の、成れの果てだった。

「――哀れだな」

ぼつりと呟く。

破壊を撒き散らす光線を幾重にも浴びながら、突撃を正面から受け止めた。歴然とした速度と質量の差を、単純で純粋な臂力で押さえ込む。

無数の蛇が絡み付き、骨も砕けよと締め上げ、牙を突き立てる。

英雄をも殺す猪の牙が、敵を引き裂かんと突き出され、

青銅の腕が、憎しみをぶつけるように幾度も振り下ろされた。

全てを踏みしめる蹄が、肉も骨も砕かんと叩きつけられる。

その全てを無抵抗に受ける。多少邪魔といった程度だ。

「なあ」

返事は無い。有効かどうかも分かっていないかのように、気が狂ったように攻撃し続けている。ひたすら加えられる打撃。半ば棒立ちでそれを受けた。

「よ」

気の抜けた声と共に、馬の膝を蹴り砕いた。

「■■■■!?!」

初めての反撃と思いきやもしないダメージに、僅かに殴打の勢いが弱まった。

完全に押し折れた前脚は用を成さず、巨体はぐらりと前に倒れこむ。だがそれ幸いと両の鉤爪を広げ、押さえつけて喰らいつこうとしてきた。鈍く青銅の鱗が光る腕を両手で受け止める。

「少し、背が高いな」

おもむろに片腕を引き千切る。

悲鳴が長く尾を引いた。

吹き出す血を浴びながら、肩から先、鱗の生え際から筆り取った腕を投げ捨てた。巨人か竜のものと信じていても信じられそうな金属のそれは、微かな地響きを立てて転がった。

危険。そう理解したのか、メデューサは必死に逃れようとしている。しかし万力のように握り締められる手に離れる事ができない。それでもまともな理性が無いなりに、いや、無いからこそ半狂乱になつて身を捻り、少しでも離れようと仰け反りつた。

しかし、俺が放す訳も無い。

やがて今度は、死に物狂いになつて己を拘束する腕に噛み付きだした。

まるで繋がれた野生動物の仕草。作品内に登場したバーサーカーとは、似ても似つかない動物染みた行動。

それも仕方ないのか。勇猛な戦士でもなく、生前に理性を失つて他者を襲つたわけでもなく、化け物としての身体と、地の果てまで逃げても殺そうと襲つてくる人間に狂わされた彼女が、同じように今理性を剥ぎ取られたら。

敵を前に死ぬまで戦うでもなく、こんな怯える動物じみた行動をとるのも納得できた。

手は離さない。

そのまま空いた手を薙ぎ払う。今度は胴が弾けた。さつと吹き上がる血霧。獣の下半身が横倒しに倒れ伏した。

もう悲鳴は声になっていない。臓物と背骨を垂らし、びくりびくりと痙攣する上半身を捧げ持つ。脇の下に手を入れてぶら下げるその様は、子供をあやす親のよう。

更に猪の牙は砕かれ、残った片腕も、そして背の翼も剥ぎ取られた。皮膚を剥がれた赤黒い肉に、白い肋骨が規則正しく並ぶその様は、吐き気を催すグロテスクの中に狂人にしか解らない美を秘めていた。

「色々と疲れたろう」

いつの間にか止んだ魔術の雨。噎せ返るような血の霧に包まれて、小さな肉の塊を抱く。

滴る血も今は少ない。汚染された影響で蒼白だった肌は生き物としての活力すら奪われ、その様はもはや死体となんら変わらず、血の

海に潜ったかと思うほど浴びた鮮血だけが彩を添えていた。

「随分永く頑張つてきな。でも、そろそろお前は休んだつていいはずだ」

あやすように頭を撫ぜ、背中を叩く。

願うのは他人の事ばかりだ。

自分と同じように化け物へ傾いているから。自分のために呪いを受けたから。言ってる事は分かるし、納得も出来る。でも死んだ先で時間軸から外れ、時すら止まった永劫の世界に囚われてなお、自分の願いでなく他者の救いを願う。俺という望外のラッキーを他者に譲り渡す。

ここら辺は知識にある衛宮士郎と随分似ているようだが、考えるにぞつとしない話だ。俺にしてもマスターだのなんだの。サーヴァントだからしようがないが、こっちはヌルで手一杯だ。

それに、言つたらう？

俺が、あいつの代わりにお前へ、恩を返すのだと。

「お前は頑張りすぎだ。もう眠つて良い。望むなら俺がお前を座から殺し、姉の魂を救いましょう」

赤子を抱くように。眠りに誘うように。

「——いつかの問い、もう一度尋ねよう。」

さあ、望みは何だ？」

例え結果として、彼女がどうなろうとも。

“死”へと安息を見出し、この手で彼女の存在を完全に消し去る事になるうとも、望むところ。本音を言えば、いつそすぐさま座にある魂ごと消してやりたかった。

『死は救い』

時に生の苦痛は自己の喪失への恐怖と痛みを越える。俺の生きた時代、俺の見てきた世界では随分と少なくなっていたが、それでも死ぬより辛い事も死が救いとなる事も、少し薄暗い所へ入れば幾らでも転がっていた。

いつそ慈悲とでも言えば聞こえはいいのかもしれない。
だが、今はまだ押し付けに過ぎない。

そして、答えなぞ返ってこない。

死に体の身体に応える余力は無く、

神の呪いと狂気に引き摺られ、答えを出す理性すらも無い。

仮に理性があつたとて、抗いがたい誘惑。それは眠りに落ちようとする瞬間に、自分の意思だけで眠りを振り払うようなもの。自分が頑張らなくても、つらい思いをしなくとも、代わりにやってくれる誰かがいる。自分も他の人のようになりたい。せめて人並みに。

つらさ苦しさが深ければ深いほど、願いは黒い澱の底で大きくなつてゆく。

それを振り払うというのは、大げさなようだが、生物としての本質に逆らう事とも思う。

さあ、己の業罪ゆえの呪いでないのなら、そろそろ楽になつてもいいはずだ。あと僅か、息絶えるまでそのまま休んでいればいい。

だがしかし、もしもまだ拷問のような存続を望むなら。命が終わるこの瞬間、安らかな死の臥所に背を向け、誰よりも苦しい生の苦痛を容認し、それでも生きたいと示したなら……。

「答えを」

さあ。

答えを。答えを。俺の、お前の望む答えを。

ほんのかすかな動き。

歯で噛む。

最も原始的な抗いの行動。

抱える胸元の肉でもない。服でもない。その一ミリに満たない繊維すら、満身に噛み締める事ができていない。

それもそうだ。もう流す血を失った心臓が、動いていないのだから。

いくらサーヴァントが魔力体で出血などでは死なぬとは言え、流れる血もまた身体と同じく魔力で構成された物。大出血がおのずから魔力切れへ行き着くのは自明の理。そして聖杯が傷一つ与えられず敗北した駒へ、いつまでも大量の魔力供給を行うはずも無い。

サーヴァントはその在り方ゆえに、何をするにも、ただ存在するだけで大量の魔力を消費してゆく。

その最後の一滴。

仮初の命を支える最後の柱を自ら崩し、意思とも呼べぬ何かを下した答えを表して、

——そして、死んだ。

第参章 29 剣士と拳士 (F a t e 編)

「く、ふふ………」

腕の中から消え去る重みに微かな喪失を感じる。それを惜しみながらも、こみ上げてくる感情を抑え切れなかった。

「は、ははは、ハハッ！」

この場で霧散した魂三つを貪り喰らいながら、今息絶えた新たな魂の行く先を追跡する。

「見付けた」

『座標、確認しました』

この世界で座と呼ばれるその魂の保存庫。時の概念が無いと言いつつ、時があるような描写ばかり知識にあるみようちきりんな場所。魔法使いでも辿り着けないそこは、俺達にすれば歩くように行ける程度の場所ではない。勿論住所がわかれば、だが。

そして気苦労しいのあの女の居場所はきっちり掴んだ。

持ち上げた指先から糸が伸びている。この世界の魔術師が見たら目を剥く様な莫大な魔力を秘めた糸が幾本も。離れば掠れて消えるような極細の糸は真つ直ぐ天へと繋がり、その途中で虚空に溶ける様に消えていた。

「そら、そんなところに引き籠もってるんじゃねえ！」

握り込み、先にある何かを引き抜くように力をこめる動きは、強引に力尽くで引っこ抜こうという傍若無人のそれ。しかしそらの無頼漢というには込められたモノが決定的に違う。

そして、一際力強く糸が引かれたその時。

何かが大きく軋るような音が響き渡り、世界が突き崩された。

空間その物が、内から出ようとするとする何かに耐えかねるように割れ砕けた。先の異様な音は世界があげる盛大な崩壊の音色。内《外》に収めたものが引き摺り出される事に対する抵抗の叫び。

虚空に裂けた腹のような傷口。向こう側は人には形容しがたい空間だ。それこそ見るだけでも、発狂を通り越して魂が押し潰さ

れるだろう。

そんな中へ無造作に手を突っ込む。

「ごそごそと引つ掻き回すように探り、会心の笑みで引き抜いた手には二つの魂が。」

一つは座に固定されたメデューサの魂。

もう一つはこの腕の中で死に、座に還ろうとしたメデューサの魂の複製。

あのまま僅かに時が経てば、複製された魂である彼女は分解され、座の本体の元へと経験した出来事だけが本のような形で収められる事となる。

まあしかし、俺が用があるのは分解される方。消されてしまうのは些か以上に困る。

だから。
混ぜる。

もともと世界その物が完全なコピーとして生み出した存在だ。人格経験合わせて諸々統合してしまっただけなら問題は無い。と、決めた。

俺にしても、魂を弄る術すべには慣れたもの。

二つの粘度を混ぜるように鼻歌混じりに捏ね回す。ついでに本人がいつぞや言っていた魔眼についても無くす、のはちよつと勿体無い気がしたので、自己の意思でのみ発現するようちよちよいと細工。

こうして工作系の作業をするのはバゼットの身体以来だ。館を改造したのはナノマシン任せだったので、ある部分で逆に鬱憤が溜まったに近かった。

もともと設計は好きだったから、こうしていると趣味にひたっているようで気分が良い。

「ふふ。なあ、夏樹。お前がここにいないのが残念だよ。プログラミングがメインだったお前ならこういう事でも得意になれたかな？」

随分懐かしい感じだ。まだ人間だった頃の匂いがする。

そう、こんな感じであいつと笑いあつてた。

よし、と出来上がった魂を手の平で転がし、眺める。

「ホントに残念だ。彼女、死なないために死ぬ行動をしたんだぜ。こんな逸材いつぶりだろうな？」

わらう。

「本当に、旨そうだ」

そして一呑みに呑み込んだ。

蜘蛛の糸でしっかりと、徹底的に包みこむ。

蜘蛛の巣は掛かった獲物は逃がさない。逃げられない。

「くふ。は、は」

堪えるに堪えきれぬ笑みをそのままに、ずかずか歩き出した。

背後となつた空間の穴は、いつの間やら世界の修正に上書きされて消え去っている。もう用はない。聖杯戦争とやらに用は無い。この楽しい気分には水を注されるのもごめんだ。

何気なく踏み出した一歩で距離を無視する。

たかが一歩。されど一歩。

一歩跨いだそこは、聖杯システムの中核が納められた巨大空間の入り口だ。

「おや」

門番が一人、待ち構えていた。

袈裟に一太刀浴びた黒い鎧の騎士。

血にまみれた大剣を片手に佇んでいた。

しかし以前に見た狂気は鳴りを潜めている。大方、その『無毀なる湖光（アロンダイト）』を濡らす血が元だろう。バゼットなら此方の言葉通りに救援に向かつてくれただろうが、さてはて、あの死んでも未だ王様気取りの娘に命があるやらどうやら。

此方の歩みに、滴る血もそのままに剣先が持ち上がる。

やる気か。気分が良い。相手をしてもいいが、それはあいつに任せよう。聖杯戦争とやらを聴いてから随分と煩いのが内に一人いる。

「ちようど希望の相手だし。よろしく、塊」

「ああ、見てるだけってのはつまんねーからな。任せとけ、冬理」

其処にはかつての兄弟弟子。

白髪にラフな服装を纏い、女物のピアスを下げた瘦身の青年がいた。

バトンタッチを気取って手を打ち合わせ、さっさと洞窟へ入る。バーサーカーは一切反応しない。当たり前だ。塊相手に、己を圧倒的に技量で上回る敵を前にそんな隙を見せれば、それこそ知覚する間も無く首が飛ぶか心臓が無くなる。

狂人は狂人なりに、そこらへんを悟るのだろう。

塊はあれで天才というやつだ。一回見たら真似できる、とかそういうレベルの。真面目に努力する格闘家が知ったら、憤怒か嫉妬で悶死するかもしれない。

それが遺伝子改変者というリアル怪物が溢れる世界中を旅し、寿命で弱って死ぬまで強いやつを片端から平らげるといって一生涯ものの修行をこなしている。同じ天才でも戦いにかけて時間と密度が天地ほど違う。

サー・ランズロット。

泉の精に育てられた事から『泉の騎士』の字で有名な騎士だ。実は赤子の時に母親から泉の精がさらった子供だったりするのを考えれば、その字は素晴らしく皮肉の利いた呼び名だが、彼は武者修行の旅でアーサーと出会い、円卓に招かれた人物である。

戦や旅、王の命に冒険といった剣を振るう機会はそれなりにあっただろうが、基本は城暮らし。不倫する程度には暇である。

しかも不義密通ありとされたグイネヴィアを火刑場から救う際、自分を尊敬し慕い、アーサー王に許しを求めて丸腰でいた円卓の騎士ガレスを斬り殺してしまい、戦いを厭う様になっている。

国外へ逃れた後もグイネヴィアをキャメロットへ送り返し、アーサー王にも幾度となく和睦の使者を送った。その後はそこそこの年齢で出家している。つまり坊さん。刃物は御法度だ。

かたや生涯戦い、それを糧とした青海 塊。

かたや強かったが、人妻に靡いて四十代で剣を捨てたランスロット。

まあ土台の世界が違うから地力に差がつくのも仕方がないし、そも比べる事が間違っているのだろう。しかし、現実はあるとして出会う筈の無い存在でありながら向き合っている。比べるのが間違いだろうがなんだろうが、ぶつかったなら結果が出るのは当たり前だ。其処をうんぬん言ってもしょうがない。

さて。さつさと行きますか。

「ちえつ、せつかくなの言葉が喋れねエってのはツマンネーな。まあ、いいや。やろうよ」

遺伝子^{エンジェル}改変者に届くだけの力量を前に、塊は陽気に言った。

騎士が纏う禍々しいフルプレートとは対照的に、ラフな服装に包まれた身体は仁や冬理と跳ね回ってた頃のもの。一度は老いさらばえた力は全盛を取り戻している。

「さ、おいで」

■■■■■■■■■■———!!!

ちよいちよいと手招かれる指先に、激昂したように狂戦士が突撃した。

身につけたフルプレートが霞むその速度は、まさに目にも留まらぬというもの。

元々英霊として最高位の能力値は、理性を代償とした狂化スキルによつて幸運と魔力を除き一ランクアップ、更に宝具『無毀なる湖光（アロンダイト）』によつて全能力一ランクアップと、計2ランクの上昇を経て同じ英霊でも手が付けられない高みにまで昇っている。

しかも本来なら理性を失った事によつて完全に忘れ去るはずの剣術は、『無窮の武錬』という、それもランクにしてA+というスキルが

加わった事により、ある種反則的な組み合わせとして狂いながらも生前と全く変わらぬ武技を可能としていた。

固い岩石の足場を踏み割るほどの踏み込み。

見るものが居たなら、確実に青年は両断されたと思うだろう。振られる剣どころかバーサーカーの動きすら見えなくとも、そう確信できるだけの威と武が狂戦士には備わっている。

しかしバーサーカーが姿を霞ませた次の瞬間、

ごっ!!!

と壮絶な音を立て、身体はその勢いのまま石天井にめりこんでいた。

塊は特に何でもないと変わらぬ様子。それどころか、「へえ、結構はやいじゃん」などと嬉しそうに瞳を輝かせている。

落ち、四つ足で着地したバーサーカーは苦しげに唸った。

狂気に墜ちながらも彼の本能は今の出来事を正確に捉えていた。突進して剣を振り下ろした一撃に、あの男は恐ろしく巧みに対応して見せた。自身に比べ明らかに見劣りする速度で動いた腕が、何故か剣をするりと避けて手甲に触れ、体勢を崩し、勢いをくるりと回転させた。

結果として己は足場を失い、最高速のままたたかに叩きつけられた。

ふれた事さえ悟らせないほどの柔^{やわら}。

歴史に名立たる騎士が生涯でついで出会わなかった東洋の武術理論、その極致が片手間のように成された。

「んじや、こつちからもいこうか」

殺し合いに似つかわしくないのんきな言葉を吐き、風をまいて塊が駆ける。

滑るような動きから戦車すら引き裂く蹴りが襲い掛かった。バーサーカーも瞬時に飛び退き、遅滞無く肉薄する瘦身を剣をふるって迎え撃つ。

無数の拳打と掌打が騎士に襲い掛かり、騎士もまた確かな術理に基づき荒れ狂った。

「■■■■」

強烈な咆哮とともに横一闪、胴を目掛けて剣がなぎ払われる。

それを完璧に見切り、半ミリ空けずにかわしてみせる塊。通り過ぎた剣先が翻る、有るか無きかの隙に滑り込んだ。バーサーカーの切っ先の届く範囲に僅か半歩、踏み入れる。だがその時点で、狂戦士の卓越した技量は次撃を繰り出す。

完全な射程内。

塊に先のような回避は望めない。まだ体へ拳を叩きこめる距離ではなく、逆にこの距離では騎士王をして敵わないと言わしめる技量と、英霊の中でも際立った身体能力をもってすれば、逆に一重の見切りでは強引に切り伏せられてしまう。

しかし彼は欠片も揺るがない。

右手がそつと、胴ではなく振り下ろされる剣の持ち手へ触れた。

斬撃が曲がった。

ごく自然にずらされた斬線は、その勢いでスジと筋肉を痛めながら地を斬り割る。

瞬時に跳ね上がる膝が鎧の腹を抉った。その細身からは信じられない重さに、剣を合わせれば百キロを越える重量が束の間浮く。追撃に放たれる三連撃。だがバーサーカーも然る者。空中にありながら身を捻り、目にも留まらぬ瞬撃に鎧を合わせて剄打をずらしてみせた。

それでもバーサーカーは軽くない衝撃に宙を飛び、しかし際立った体捌きで降り立つと同時に再び剣を構える。

塊が走り込んだ。

狂気に狂った騎士は、己の領域に侵入した「敵」へ容赦なく剣を振るった。その剣はどこまでも正規の騎士剣術に沿っていながら、担い手の狂気を表すかの如く嵐となって吹き荒れる。

袈裟・薙ぎ・突き・突き・脛へ払い・逆袈裟・反対の肩口へ。

技巧を凝らし、有るか無きかの動き、気配の動きすら惑わしとする。

かと思えば裂帛の気迫で剛剣が振り下ろされる。佐々木小次郎の秘剣に勝るとも劣らぬ速度で、黒刃が無数に奔った。

塊はそのすべてを素手で捌く。

生き物のように跳ね踊り、時に雷光のように突き出される切っ先。対する両の手はゆったりと、しかしいつの間にか必要な場所へ添えられる。

狂戦士は力が虚空に吸い込まれるような、その異様な感触にひるんだ。

剣は当たっている。

当たっているのに、当たっていない。

どれほど力を入れても、どれほど技量の粋を尽くしても、まるで切れない物のようにするりするりと逃げてゆく。

理性が無いからこそ、力の一切が通じない状況は狂戦士の本能を。

その心が、剣にあらわれた。

おぼろげな一瞬。間隙に滑り込んだ一撃。

バーサーカーがそれに気付いた時には、もう避け様がなかった。

ずしん！

こもった音と共にバーサーカーは吹き飛ばされた。宙を飛び岸壁に叩きつけられる鎧姿。咄嗟に剣身を盾に滑り込ませたのは流石だが、徹し剄によって衝撃の大半は防御をすり抜け、柔らかい内臓で炸裂している。

よろめき立ち上がる姿に以前の力は感じられなかった。

「やっぱモノも考えられないようじゃ、こんなモンか」

もしかしたら、という考えが的中して肩を落とした塊は、酷く落胆したように呟く。がつくりと脱力した様子にバーサーカーが斬りかかる前に、一転、良い事を考えたと笑顔をみせた。

「そうだよ。先の事も考えられないなら、考えなくていい勝負すりやいいじゃん」

まるで名案とばかりに喜ぶ。

「言っても判んないだろうけどさア、次の一撃で最後にしようぜ。どうせ長くは動けないだろ？」

僅かばかり皮肉めいた笑顔を浮かべ、ゆらりと錬気の陽炎をたちのぼらせた。闘気も殺気は変わらず、いや、今まで以上により強くほとばしる。

塊は感情誘発型の発火能力者《ファイア・スターター》。

洞窟の温度は急激に上昇し、高ぶる体から猛火が逆巻いた。

バーサーカーは咆哮し、剣を振りかぶった。

生死の分水嶺は狂っていようとわかる。次の一撃で決まる事は明白だった。

「!!!」

声無き絶叫とともに躍り掛かるバーサーカー。

黒い旋風となった影は、目にも留まらぬ速さで塊の脇を駆け抜けた。

背を向け合った両者。

緊張の残り香が空気をただよう。

ふいにくらりと兜首が背へ折れ曲がり、漆黒の騎士はその場にくずおれた。その異様な角度は、明らかに絶命を示していた。

「……今のは、良かった」

最高の一瞬。それを味わった塊の顔には子供のような笑顔が輝いていた。

第参章 30 終劇 (Fate編)

膨れ上がる鬨気を尻目に洞窟を進む。

光源の無い、真つ暗闇をぶつかりも迷いもなく進み、やがて目的地が見えてきた。

そこはひとつの異界だった。

さして大きくもない山の洞窟に似つかわしくない、巨大な大空洞。広大な面積一杯に魔術陣が築かれ、竜穴に似た地脈の集点より汲み取った魔力で煌々と輝き、その上を焰のように煮詰められた呪いが踊り狂う。

そして、それら全てを見下ろすように起立する、霊的な巨杯。

世界とは様々な要素が一定の範囲で組み合わさる事で成り立っている。

ところが、この場合「呪い」という一構成要素が突出してしまった時、そこは同じ世界の括りの中でありながら、既に別の世界と言っている代物になってしまう。

「はっ。こりやあの子供どもに限らず、生き物にとって有害だあな」『肉体的にはともかく、精神や魂の面で重度の汚染に晒されるでしよう』

「それにしても、よくまあ『純粋な力』なんか出そうとしたもんだ。きつと、いや、間違いない阿呆だったんだな。極彩色のパレットに水たらしや染まっちゃうのは子供でも判るだろうに」

嘲りを吐き捨てつつ、歩を進める。

無頼な歩みに陣は輝きを増し、黒色の炎は餌に群がる肉食魚の如く、一斉に跳びつく。だが障害になど成り得ない。

一言、一動作すら掛けさせることなく、まるで虚ろな幻影であったかのように空中で溶けて消えてゆく。踏み躪る足元からとある二つの血族の、千年にわたる悲願が薄氷より脆く砕けてゆく。

踏みにじる手間すらもつたいないと性悪に歪めた顔が、「おや」と、ふと立ち止まった。

何やら何処ぞで覚えのある感じに加え、俺自身の匂い。

ここに来たのは初めてなのだが？ と首をひねり考えた。

『おそらく間藤桜嬢の魂魄移植の際、旧躯体の焼却と共に貴方が御魂送りをした老人ではないかと』

「ああ……あの。行き先はここだったか」

なんて事ない、少し予想外の、いや、予想は出来たか。元々あの爺さんが聖杯システム造ったひとりらしい事を考えれば。残念なのはどうしても良すぎて印象に薄かった事か。

「はてさて。げに恐ろしきは人の妄念、とな」

折角の小さな心遣いがこうなつて返つてくるとは、皮肉を言う口元もひん曲がろうというものだ。

それなりの時間をアクティブに生きてれば、こういったことはそれなりにある事だ。それこそ運命は皮肉というのかもしれないが、まあ、運命よりも俺が皮肉屋になりそうではある。

『ならないでください』

「どうだろうな？ それこそ気分転換でなつてみるかもしれん」

』

ひねた答えに、心地良く冷えた声は口をつぐんでしまった。

拗ねたかな、と。そう思う。

ここに来てからずいぶんと人間味が出てきたな、とも。

やはり何がしかの切っ掛けを期にしたのだろう。そういえば直接ヌルが俺以外と対話したのは今回が初ではなからうか？

(いい事だ、とも一概に言えんあたり、なんともはや)

ヤクザな事も平然とする今の生活。遠い昔の、記憶の底にある一般的な市民生活とは程遠い。教育に悪い、などと柄にもない考えがチラリとよぎった。

「何にしろ、これ邪魔だな」

顔を上げれば、目の前には件のまっくろけな聖杯。

悩みながらも歩いていたらしい。

眼前のそれは、やたらめつたら禍々しい感じの何かを辺り構わず放射している。うむ、健康に悪そうなブツである。考える時間は幾らでもあるが、これは時間のあるなしに限らず壊したい。つまりはまあ、あれだ。短絡的に消してしまおう。

腕を振り上げ、振り下ろす。

子供が気に入らない物を叩くように振り下ろす。

永劫破壊は最低活動域で駆動し、ほぼたんなる義手義足となつてい
る。

必要ない。

あれはむしろ枷^{かせ}。

世界に内包されざる存在である俺は、いかなる既存・未開概念にも当てはまらない。それを誤魔化すための、わかりやすいほど強力で異質な外殻で、外装。

特別鋭くもなく、特別力強くもない。

振っただけの腕。

それで聖杯は微塵の欠片も残さず、匂いや空気すらも残さず、綺麗さっぱりと無くなってしまった。特筆する部分すらない、魔術師が見ていたら絶句するような、いっそ清々しいまでの理不尽な終焉だった。

「あゝ、くそ。何だかんだで長かった」

適当に大空洞を埋めるようヌルに頼んだ後、少しは楽しめたらしい塊と合流し、ひとしきり話し込んだ挙句に突如殴り掛かってきたあいつを殴り倒して取り込み、ようやくと山腹へ出てきたところだ。

なぜにアヤツはああも戦狂いの気があるのだろうか、などと埒も無い事を街を見下ろしながらひとしきり悩む。

『どうやら、他のサーヴァントも還るようですね』

「ん、らしいな」

凍えた声に頷く。

俺には鮮やかに色付いて見える魔力が、幾筋も空へ立ち昇っていた。「まるで火葬だな」と、小さなつぶやきが風に流れる。

ひとつ、ふたつ、みつつ……

各々の性質に染まった色は、やがて途切れゆく。

『赤』に『青』、『鉛』に、最後にか細い『黄金』が。

結局あの少年たちは、この戦争では翻弄されるだけの存在だった。大した理由もなく参加し、要の力もなく、後先考えない意思だけが空回り。自身の武器であり防具であり、生命線でもあるサーヴァントと心を通わせる事もままならない。

状況に翻弄され知らぬ間に全てが終わったあと、彼らはどうするのだろうか。

——ひとつ、少しいらぬお節介でもしてみようか。

少年たちがどれほど驚くか。さぞ愉快だろう顔を思い浮かべて小さく笑った。

「さてと。この世界に来る羽目になった元凶は処理したし、あとは適当に見てまわりますかね」

どことも決めずに、ぶらりと歩き出す。

目的など後で決めればいい。

ヌルもいればメデューサもいる。ああいや、メデューサは後でちやんと形成しないとか。でない姉をどうにかする約束が果たせない。ついでに、戦闘時にサーヴァントの枷を外して『座』の本体の能力を取り戻した方法も聞きたいな。

「ん~~~~~~~~つ、ぬう。くあ……、まずは寝るところかねえ」

背伸びしたら欠伸も出た。うむ、文字通り締まらんが、これにて聖杯戦争は締め。ここからは余録程度のだから生活で生き抜きですな。いやはや、心が躍る。

第参章 エピローグ 終劇のち惨劇 (F a t e編)

さてもはても、これは一体どういうことか。

俺はぶらぶらと観光がてら周りたかつたのだが、どういうわけだがここヨーロッパの片隅で襲撃を受けている。都市を一本逸れた所にある町は、意外と美味しい料理や酒の穴場になっていて、そういうところを狙って楽しく過ごしていたんだが……。

現在はチーズと燻製肉、それにワインとビールの小瓶を抱えてテールブルの下に隠れている。惨めだ。

なにやら爆発でもしたかのように荒れ果てた店内は、その惨状を煙で覆い隠されていた。そこを数人の潜めた足音が何か探すようにうるつきまわる。

それだけじゃない。

さつきからちよこちよこと探査目的らしい魔術が辺りに放射されている。

(結論。絶対こいつら俺探してる)

心当たりといえば、まあ聖杯戦争がらみだろう。あれ以来はヨーロッパまで跳ぶ時ですら魔力使ってないし。

大方のどこ、魔術協会の方で監視していたのだろう。

考えれば当たり前の話で、聖杯が本物かどうかバゼットが調べに来るくらいの確度の儀式なら、たった一人の調査員で話が済むわけがない。俺もヌルもわざわざ警戒もしていなかったが、おそらく英雄の類いでも察知が難しいような術具で様子を探っていたのだろう。

考えられるとしたら……たぶん直接覗くタイプじゃなく、場所を指定し、そこで何が起きているかを手元に描き出すような間接的なものか。

何にしろ、協会は俺のことを知って、しかも直接的な手段でひっ捕まえる気らしい。

ヌルからバベルシステムで読み取った魔術師の大まかな指向性は聞いている。が、生憎と気に入るような輩とは程遠いらしい。とにも

かくにも魔術の進捗のためなら何しても良いって連中ばかりなようなのだ。

はつきり言つて、根源に辿り着いたとしても、それを人の役にたてる気なぞ木っ端ほども無いくせに、そんな野郎が魔術の進歩のためなら犠牲も当然とか……目の前にノコノコ現れたら頭消し飛ばすかもしれん。

少し予想はしていたのだ。その矢先。

農家の方々が丹精こめて育てた穀物から丹念に仕上げられたワイン、ビール。

日本より格段に広い土地で、のびのびと育てられた牛からとれたチーズに肉。

幾つになろうと美味しい物は美味しい。

それを実感している時だ。

よりにもよってその時だ。

この馬鹿たれどもが襲撃をかけてきたのは。

幸いにして、どつかの誰かさんにさんざつぱら部屋の壁ぶち抜かれた経験から、とつさに食い物と飲み物を守り通す腕だけは上達している。目の前にあったお宝は、今もこうして無事にこの腕の中に守られている。

だが、他は駄目だった。

入り口から投げ込まれ、店内のほぼ真ん中で銀色の触媒は炸裂した。店中のテーブルや椅子はひっくり返り、カウンターは半壊してるし、あの様子じゃキツチンもダメだろう。どういう風にこちらの事を知ったのか知らんが、暗示やらの魔術じゃ歯が立たないとみて直接的に来たんだろうが、腹立たしい。

しかも店を囲むように、ただし感知されぬようそれなりの距離を離してだが、特殊な結界まで張られている。おそらく襲撃の瞬間に要を刺したのだろう。

色々気に入らんが、特にわざわざ客や店員を巻き込んだのは本当に腹立たしい。

きつとそのやり方が有効だと考えて、躊躇いもなく実行したんだろう。

(あーくそ、あーくそつ。ほんつとクソツタレだ)

とりあえず、あれだ。殺そう。

じよきん

そこそこ有能だろう探査魔術を適当に誤魔化し、姿は光学迷彩で隠しながら、気付かず目の前を歩いた男の脚を取り出しした特大の鋏で切断する。足の半分を残したまま、絶叫を放って転倒する魔術師。鮮やかすぎる、と言っていい傷口から、一拍置いて鮮血が噴き出した。

こいつは『ザ・チョッパー(The Chopper)』

とある世界にて、地下迷宮で猛威を振るったトカゲ人の戦士の獲物だった物だ。名もカレの通り名をそのままつけた。

外見は鋏そのもの。二本一組の五十センチを超える裁ちバサミで、両手に一本づつ構える。切れ味は使い手の握力にもよるが、金属を軽々両断できるほどだ。

その鋭い顎門が哀れな犠牲者をさらに襲う。

目に見えない刃が閉じるたびに血飛沫と絶叫が吹き上がった。

一拍の驚愕の間をおき、空気が張り詰める。

確かに居た筈なのに、いくら探しても発見できない相手から、目に見えない反撃を受けたのだ。

襲撃者たちはすぐさま店内を見渡せる入り口付近に集まり、仲間が

血溜りでのたうつ場所へ、巻き込む事も構わず攻撃を撃ち込んだ。呪いや魔力の弾丸が男ごと床をえぐり、血飛沫をまきあげる。

巻き上がった粉塵が着弾点付近を覆う。

「――探せ。死体だろうと手足の一本だろうと、確実に見つけ出せ」
小さな声が洩れた。

黒尽くめの男たちは一番奥にいる、どこか陰湿で傲慢な雰囲気のだ。

彼はアトラス院と並ぶ巨大魔術組織、イギリスはロンドン、時計塔に本拠を置く『魔術協会』と呼ばれる組織の一員だった。

俗に言う『名門の出』というやつだ。

魔術という技術が世襲による長期間の熟成を基本とする以上、長く続いた家の魔術刻印を受け継いだ者は、それだけでスタート地点が全く違う。家柄によって組織内の権勢が変わるのもある意味当たり前であった。

加えて魔術協会はかなり古い組織だ。

困った事にこの組織は上記の理由もあって、中世ヨーロッパの腐敗した貴族制度をそのまま受け継いだような有様で現代まで残っている。

いくら時代を逆行するのが魔術だからといって、いらぬ所まで逆行、いや退行しているあたり、どれ程世代を重ねようと、いつそ退化しているような有様を晒すのがなぜが分かる。

閑話休題。

彼はそんな貴族・エリート主義の権化のような男だった。

幸い、だからといって完全に愚かな訳ではなく、度重なり失敗を繰り返す聖杯戦争に参加しない程度の分別はついていた。

冷静にリスクとリターンを計算し、『何でも願いが叶う』などという謳い文句に釣られる事なく、逆に参加するのは愚かな輩ばかりだと嘲笑ってすらいた。

そんな折、協会の上層部で聖杯戦争の終結について、噂がひそかに

流れ出した。

勝者はやはり現れなかった。

聖杯戦争の基幹システムの崩壊。

そして極めつけに『召喚された英霊の現存』

前二つはともかく、最後の噂は魔術師なら無視できないものだった。

英霊は元々、地脈の膨大な力を数十年に亘って蓄積し、更に『座』の英霊本体が望む事で、辛うじて劣化した召喚が可能なほどの上位存在だ。

当然ながら、その維持にも莫大な対価が必要とされる。

前の噂で聖杯システムの崩壊が起こっていたとしたら、たとえばどれ程優れた魔術師だろうと彼らを現世へ止めおくことなど不可能だ。

にも拘らず。

英霊がサーヴァントとして聖杯戦争後も現界しているという。

彼はすぐさま裏を取った。

そしてどうやら噂が事実、もしくは非常にそれに近い事が起こっている可能性が高いと判ると、笑いが止まらなくなった。彼の脳裏にはその英霊を捕獲し、徹底的に調べつくし、新たなる位階へと駆け上る自身の栄光がハッキリと見えていた。

もちろん英霊を侮るなどという「愚かな」真似はしない。入念な準備に出来る限りの情報収集、そして戦力の確保。己の所属する派閥からも極秘に手勢を借り受け、完璧と自負するだけの包囲網を築いたうえで攻撃に出た。

店を大きく囲むように展開した、高位存在への弱体化を主眼とした呪術陣。

突入するのはいずれも高位の魔術師、それも戦闘に特化した魔術を振るう、荒事専門の手勢。

それらを率いるのは名門の自身。

(たとえば相手が聖杯の補助を受けた、万全の状態の英雄だろうとも勝

ちを見込めるだけの戦力だ)

秘宝と言っていていい門外不出の礼装も含め、多数の強力な礼装もある。

負けるなど思考の片隅にすらなかった。

じよきん。

じよきん。

(だというのに……だというのにこの有様はなんだ!? いったいアレは何なんだ!?)

目の前で配下の魔術師たちが何一つ抵抗もできず、一方的に切り刻まれている。

狩猟の獲物だったはずの敵は、ただの一度も此方へ、その影すら捉えさせず、強力な防護の礼装、それどころか僅かにあった防御の概念武装すらも、あの異様なおぞましい音と共に寸断されていった。

まさに悪夢だった。

パニックの極致に陥った男は足をもつれさせながらも店から逃げ出した。

その時には既に店内は壁から天井に至るまで、湯気の立つ血に濡れそぼり、物言わぬ肉片ばかりが転がっていた。

しやきん。

しやきん。

しやきん。

必死に逃げる男を音が追いかける。

震える声で必死にパスで呼びかける相手は、何故かただの一人すら応えない。

じよきつ。

「ツツツギイ!?!」

かかると感じた事もない激痛が奔る。

もんどりうって地に転がって、震える手で足を抱える。
指先にぱつくりと開いた傷口があたり、勢いよく流れ出す血に気が遠くなった。

じよぎん。

「ヒギヤア!!!」

今度は背中で異音が響き、激痛と共にのけぞり返って痙攣した。偏執的なまでに纏っていた礼装は、何の役にも立たずに攻撃に屈していた。吹き出す血が瞬く間に地面を染め上げ、暖かで粘ついた感覚をのたうつ彼へ伝えてくる。

だが男にとつてはそれどころではなかった。

このままでは殺される。

栄光きぎはしの階はこの手をすり抜け、何より確かな暗黒の未来がすぐそこまで迫っているのがハッキリと感じられた。

死に物狂いで逃げ出そうとして……倒れこんだ。

涙と鼻水にまみれながら見た先、彼自身の足首は動いていなかった。深々と赤黒い肉を覗かせる傷は、その奥でアキレス腱を切断していた。

それが何より雄弁に「逃げられない」と示していた。

「ヒツ、いやだいやだいやだあ!? なぜこんな、ふ、ふぎけるな! 俺は、俺をだれだと、いぎやつ!」

じよぎん。

「やめっ、やめえ……ぎやつ!」

じよぎん。

じ、よぎん。

「あ、あ、あぎ」

じきん。

じよきん。

じよきん、じよちぎ。

「——も、や……」

じよきん。

第参章 エピローグ 因果応報（上）（F a t e 編）

さて。

今現在、俺は不機嫌である。

けっして御機嫌ではない。

理由？

いわずもなが、と言うやつだろう。

先の酒場襲撃事件からこっち、魔術師の襲撃が途絶えた例ためしがない。手段も悪辣化している。

町を歩けばすれ違う子供が笑いながら精神汚染を仕掛けてくるし、食べたり飲んだり毎回の如く薬物が混ぜ込まれている。

勿論そのたびごとに仕掛け人には存分に人生を謳歌してもらっている。

死への準備期間こそ生である。

駆け足だからこそ、有意義に生を過ごせただろう。

だが少なくとも数がいなくなったにも拘らず、彼らに諦める様子は一向に見られない。主婦の天敵しつこい油污れ並みにしつこい。困ったものだ。

最近では聖堂教会とか名乗る宗教組織まで襲い掛かってくる。

襲撃から逆襲、捕獲の後、拷問というゴールデンパターンによって判明した所によれば、どうやら教義によって英霊である俺は認められんらしい。たしかに聖杯戦争中は不正規ながらもサーヴァントであると名乗った覚えがある。

バゼットあたりはそうでないかと勘付いているだろうが、それ以外の、たとえば遠坂嬢あたりはサーヴァントだと思っただまだろう。バゼットもわざわざ魔術協会に言ったりはしないだろうし。そうなるかと協会から教会へ話が洩れたか、それともクサレ神父が死んだ事で教会側の調査が入ってまだ居るのがばれたか。

いつの世も宗教とは迷惑だ。益のように見える形無きものを有難そうに配り、それ以外には害を振り撒く。

何にしろ、非常に迷惑している。

そう、今も目の前に一組いるのだ。

やたらと無機質な目をした、これぞ蟲を見る目、というか、蟲の目というか。そんな失礼を通り越して無礼千万な男と老人がいる。魔術師だろうが、こつちを観察している。

「おとなしくついて来るのじゃな。でなければ周りの人間が溶ける事になる」

どうにも被害をださんよう振舞っていたのに気付いたらしい。爺が得意になるでもなく、じろじろじろじろと舐め回すように気色の悪い視線を這わせてくる。

こういった視線はほんと、されると分かっていても気持ち悪い。

俺の中で魔術師の評価は下がる所まで下がりきっている。

もはやウォール街の大暴落もかくやといった有様だ。

クシヤナ殿下がここにいれば、とつくに『薙ぎ払え!!』と凜々しく叫んでおられたら。本国にお帰りになった際は少々お手伝いさせて頂いたが、今もお元気だろうか？

とにもかくにも限界である。

爺の視線に。魔術師連中の好き放題に。宗教のくせに他者を害そうとかいう、いつぞやのクソ神のような輩共に。

とりあえず、目の前で解剖やら投薬やら待ちきれない様子の爺に呪いをかけた。当然だが相手の悪辣な仕掛けは外してある。ルービツクキューブより簡単に思える辺り、どれだけ独創性のない公式を組み合わせただけのつまらない代物だったかが察せられるだろう。

「ひぎやあ」とか断末魔もかくやの悲鳴が聞こえたが、手を緩めるだけの同情指数がまったくもって足りていない。日頃の行いは大事である。

体液を噴き出して死ねない体に悶える枯れ木を無視し、歩き出す。

ここまで来たら、もう根こそぎやらないと駄目だと確信した。

黄色っぽい粘液を毛穴から垂れ流す爺の関係者は、今頃伝染した呪

いで同じくのた打ち回っているだろう。じきに静かになる。

だが、アリ塚にはまだ同じようなのが腐るほどひしめいてるのは間違いない。

駆除は面倒だが、これも両者にとって因果応報というものだろう。実に真理を表した言葉だと、今更ながらつくづく感じ入った。

はあ。

「めんどくさいもんだ」

第参章 エピローグ 因果応報（下）（F a t e 編）

「さて。やって来ました時計塔」

勿論のこと、かの有名なビッグ・ベンではない。

今いる場所は、イギリスは倫敦の大英博物館の門前だ。

世界に名だたる大博物館であり、人類史における貴重な文明遺産の墓所でもある。

通称『イギリス泥棒博物館』や『盗品博物館』。

収蔵品は、いずれもが大変に貴重な物品ばかりでありながら、そのほとんど全てが武力による略奪品だからだ。悪意的に言うなら、入場料がただなのはそのせいだとも。逆にそうでなければ文化遺産は現在まで保存されず、朽ち果てていたか、盗掘マーケットに流れて歴史から失われただろうとも言われる。

なんにしろ、素晴らしい文化遺産の守り手として一定の評価をうける博物館だ。

しかし、その裏つかわは魔術師の巣窟であり、魔術師の自衛・管理団体である魔術協会のひとつ、『時計塔』と呼ばれる組織の本拠だ。

学術的な場所をろくでなし共が住処にしているつてのは腹立たしいが、まあこの世界の魔術礼装や概念武装といった古い物品を扱うのに、これほど目立ち難い場所もあるまい。これだけ大きければ、それ相応の貴重な物品でも収蔵できるだろうし、買い込む名目も立つだろう。

そう考えるならば、ここを本拠とするのは理に適う選択だ。

いや……、調べたところに拠れば、時計塔の長は二千年ほど生きているっぽいし、そうなる元々あった組織が博物館を建てたのか？

うむ、真相究明は後にしよう。

どちらにしろ、俺はこれからここを、正確には此処に巣食う俺にとつての害悪を排除するのだから。

『あ、あー。（てすてす）えー、こちら黒川、突然の放送失礼します』

自身を隠蔽したまま作成したマイクを使い、一方的な放送を「協会全体」へ響かせる。

勿論だが、この声やマイクを叩く音は一般市民には聞こえない。それどころか、協会内部の地下深くに無数にある隔離空間内にすら声を通る。

概念による防御機構？

問題にもならない。

『本日の用件ですが、先日より随分とこちらの魔術師に襲撃を受けてまして。私としても、懲りたり諦めたりする事の無いのを相手にするのも、いい加減面倒になってきました。ですので後腐れが無いよう、これより魔術協会三大部門が一、時計塔への破壊活動を行います』

超感覚は地上建造物内から、地下深く、数えるのが面倒になるほど敷かれた防御の向こう側、地下迷宮最深部までの全域を把握。地上部分にいる未熟な魔術師の馬鹿にした嘲りから、最深部にておそらく宝具だろう多重結界に籠った、時計塔院長を始めとした偉そうな数人の囁きまで、ひとつ残さず捉えた。

適度に聞き流しつつ、『宣告』を続ける。

『もちろん魔術師の全滅を望んでいる訳ではありません。よって、これより三十分の猶予をおきます。転移・転送の類いは妨害しますので、徒歩にて敷地内より出てください。

では、三十分後に』

大きな大きな三十分砂時計をデンと置き、その上にどっかと腰を下ろしてため息をついた。

建物内はようやく騒がしくなりだしている。

同時に幾つかの転移と通信の魔術的反応。

両方とも適当に座標をずらした。

通信は当然ながら繋がらないだろうし、転移した人員に至っては此方の指定した座標、『宇宙全体でランダム』な場所へ運試しする事になるだろう。

元の座標が地上だった事、それなりの装備だった事から、まず確実に付近にいる此方を確保・始末するための刺客だろうから、一切の躊

躊躇も同情も無く放り出せる。彼等の装備が宇宙遊泳に対応しているかは……まあ言わぬが花だ。意外と宇宙に触れて悟りを開くかもしれない。

とにもかくにも、だ。

言った事が本当であり、同時にそれだけの力があると分かったのだろう。ようやくとトップ辺りが本気で危機感を持ったようだ

それ以外は……と見れば、知識にある顔のひとつ、四次聖杯戦争の参加者であるウェイバー・ベルベットが。幾分歳をとった顔を歪め、慌てて生徒を罵りながら荷物を纏めさせている。

彼は時計塔で唯一と言っている英霊との直接接触経験者だ。

彼らがどれほど驚異的な存在かは身に染みているのだろう。

はて？

今更ながら、英霊と名乗った名前が何故イコールで繋がったのだろうか？

……ああ、そうか。

残存する英霊の事実確認の段階で、おそらく聖杯戦争の地、冬木市の魔術的管理者である遠坂嬢へ問い合わせたのか。だとすれば納得が出来る。

そう考えるなら、先程の放送は噂に聡い人間にしか分からないだろう。

随分と不親切だったかも知だが、そもそも親切するような相手でもないかと思ひ直す。

思ひ直したのだが……。

「いや、別に受付の人とかまで殺そうとか考えてないしねえ」
とりあえずマイクを手に取り、もう一度放送を流すのであった。

〜三十分後〜

手持ち無沙汰で広げていたペーパーブックを閉じる。

うん、実に面白い話だ。知識に無い話を検索して手元にコピーしたのだが、いやはやどうして、なかなかに続きが気になる魅力だ。

いつそ時計塔などほって置いて続きが気になるほどに。(※1)

しかし、決めた事はやらねばならん。それが楽しみに直結するなら尚更だ。

しぶしぶ本を格納空間へ放り込み、立ち上がる。

砂時計は落ちきっていた。

先に確認した時計塔の全容を改めて走査する。次空間を捻じ曲げ造り上げられた特殊な隠し空間も、入るたびに形が変わるトラップ満載の魔術迷宮の最秘奥もだ。

宣言を受けて急遽施したのだろう幾多の防壁はすり抜ける。

単純に、防壁が感知する対象でなければ問題は無いのだから。

(少ないながらも脱出した人はいるか)

それぞれ大した物は持ち出せていない。

相応の代物は、嚴重に嚴重を重ねてしまわれている。時間が足りなかったのだろう。

しかしウェイバー・ベルベットとその生徒は敷地から少し離れた地点で、持ちきれないほどの研究資料の紙束を抱えて時計塔本部の様子を窺がっている。一番多くの身内を連れ、一番多く物を持ち出せているのは流石だ。

ちなみに退避勧告だが、地面を見据えた先、迷宮を越えた先の地下深くにいるお偉方は対象外だ。唯の一人として逃げていない。いや、三十分の中途から身動きひとつとれないよう魂もろとも拘束している。一部が魂だけ退避させようとしたからだ。

「さてと。やりますか」

やる事自体は簡単だ。

ただ、現在ヌルがない。

永劫破壊による『形成』によって再び形を成したメデューサのナビゲートとして、彼女の時間越えを視野に入れた姉探しに付き合っ貫っている。

何が言いたいかといえ、あまり細かいのは面倒クサイという事で。

1、限定的だった遮蔽を完全に立ち上げ、協会施設を一つ残らず密閉する。

この段階で、魔術によって異空間の部屋や空間を弄って広くした部屋などが、一気に通常の空間に戻る。前者は空間の繋ぎ目の場所へ無理矢理現れ、後者は元の広さに無理繰り詰め込んだ状態へとなった。資材はまだ良かった。だが、こういつた部屋に少なからず居た魔術師はかなり悲惨かつ、凄惨な死を遂げる羽目になった。

2、密封された内部を人間が即死しかねない濃度の魔力で洗い流す。

と言っても標的は魔術師ではない。狙いは「道具」だ。

魔術協会は今の形になるのこそ遅かったが、魔術師自体は聖堂教会なんぞ鼻で笑えるくらい古くから存在する。そしてそれだけ力ある道具が数多く残っており、協会が設立されてよりの年月で多数の力ある物品が協会地下へと収集されている。

これらの品には、極秘だが宝具も多数存在し、使い手のいないまま死蔵されている。

意外かもしれないが、なにせコーンウォールを掘れば聖剣の鞘が完全な状態で出土する世界だ。アレだけが特別ではない。

そして道具には須らく「限度」というものがある。

限度を大きく逸脱した魔力により、物品に刻まれた回路や概念を塗り潰すのだ。

黒い颯風が吹き荒れる。

協会地下深くに封印された物も含めた術具は、よほど特殊な物を除く大半が機能を破壊された。

3……。

「最後の仕上げは、と」

すでに内部は阿鼻叫喚の渦となっている。

心血注いで作り上げた魔術の道具や、それに類する物品の悉くが崩れ去ってゆくのだ。何もかもを捨てて根源を目指す研究に打ち込む魔術師には、あまりにもショッキングな光景だろう。

罵声に怒声、恨み辛みに絶望の悲嘆まで。

これでもかと負の感情が渦を巻いている。

唯一逆の声といえば、神秘の保存の名目でホルマリン漬けの標本にされていた者達が、保存の術具の停止によって完全に崩れ去る際の、微かな感謝の言葉くらい。

「ああいうのを見ると、今更ながら出してくれとか言ってる奴等に情けをかける気にはなれんな」

さくさくと最後の仕上げをなす。

別に難しくもない。

ほんの十メートルばかりの大ききで門を開き、三秒ほど余所と繋げるだけだ。

「ん」

門が開く。

同時に、協会内部を灼熱の奔流が埋め尽くした。

——音は聞こえなかった。

繋げた場所が場所。唯の一人も生きてはいまい。

しばらく置いて、封を解く。

探査には、生命反応も、動体反応も検出されず。

あるのは半ば固まりつつある溶岩溜りのみ。猛烈な熱気のみがゆらゆらと立ち昇っている。

そう、門の先は地底だ。それも生半可な深度ではない。あれは地球の核といって過言ではない場所へと繋がっていた。

門は大きいといえど、所詮は十メートル程度。

対して封をした協会内部の大きさは、浅い階層を含めればちよつとした城程度はあり、深さも驚いた事に百メートル以上あった。

にも関わらず、その全てはたった三秒で溶岩の海に呑み込まれた。それもそうだろう。

れつきとした星の中心圧を、直で噴射したのだ。

超高压から解き放たれたマントルは、時速四千キロを超える白熱した噴霧と化して施設を駆け廻り、そこにある人も物も残さず焼き尽くした。

更に暴虐は繰り返される。

ここはマントルとは比べ物にならないほど地表に近い。

つまり、水分が多い。

強烈な熱はその水分を瞬時に気化させた。

結果として、封の内部では溶岩が固まる間も無く爆砕するだけの水蒸気爆発が頻発し、何もかもを砕いて混ぜ合わせてしまった。

確かに極少数ながらも、破壊を免れた防御的な礼装もあった。

生き残っていた、それも意識明瞭なままだった魔術師もいた。

次なる攻撃に備え、彼らは咄嗟ながら出来得る限りの防御を敷いていた。

しかし、大原則を忘れるなかれ。

神秘は、より強い神秘によって打ち消される。

概念と違い、純粋な神秘は経年によって積み上げられる。(※2)

後の地球となる岩石塊が、次々と着弾する隕石による超高熱で溶融したマントルだ。内包する神秘は、それこそ地表を這う竜脈の比ではない。いや、竜脈こそ太陽に対するフレアのようなもの。星から漏れ

出した、ほんのささやかなエネルギーの飛沫なのだ。

彼らの死への抵抗は、僅かなりとも報われる事なく元始の火に沈んだ。

ウェイバーベルベット。かつての少年は青年となり、今はロードエルメロイ二世と敬称される一角の人物へと成長していた。

彼は時計塔が滅ぶさまを、成す術無く見ていた。

いや、彼には透視などの魔術が使えないため、直接観測する事はできなかつたが。

「フアック！ 噂を聞いた時から嫌な予感がしてたんだ！」

英霊が聖杯戦争の終結後も残っている、それはまだいい。まだ理解できる。時計塔で教鞭をとる立場になり、多少なりとも広がった知識には、それを可能に出来るかもしれないというほどの秘宝も幾つかある。もちろん伝説にあるような物品で、とても手に出来る品でないのは確かだが。

しかし若干の興味とあわせ、念のためにと、冬木の管理者である遠坂家から上がってきた報告書を閲覧して、嫌な予感が一気に膨れ上がるのを確信するはめになった。

報告書に書かれている、一騎のサーヴァントについての記述。

圧倒的なまでの単騎戦力。

気まぐれな気質。

それでいて力を見せ付け、戦いを楽しむような振る舞い。

その記述は、自分が参加した第四次聖杯戦争にいた、自分の王の蹂躪を圧倒的破壊力で粉碎した最古の英雄王を、否応無しに思い起こさせた。

英霊は仮にも英雄。過去の勇者だけでなく、自身の主君である征服王のように、一国の王という立場の者も珍しくない。プライドや矜持

も強烈なものをもっているだろう事は、予想に固くない。

いわんや、今回の相手はあの英雄王と似ているっぽいのだ。

あの傲慢極まりない性格、かと言えばあの征服王バカの酒盛りカに付き合う気まぐれを發揮し、それでいて気に入らないからと圧倒的な力を振るって敵を叩き潰す、唯我独尊としか形容できない英雄王と。

「アレと似たような英霊だと!？」

しかもそんなもの相手に仕掛けるだど!？」

ファック！ 絶対に反撃してくるに決まってるだろう！ そんなことも分からのかこの低脳どもが!!」

頭を掻きむしりながら吐き捨てる。

実際に英霊と共に行動、いや、破天荒なパートナーに振り回された経験者としては、考えるまでもない結論だ。天気予報などは比べ物にならない確率で起こりうる未来予想図に絶望が止まらない。

案の定、次々と見掛けなくなっていく住人。そういつた連中は決まって、過去に自分を見下していたようなエリート連中だ。

最初はざまあみろと喝采を挙げたが、しばらくして連中の所属がここという事が何を招き寄せるかに気付き、研究室の生徒が発狂したと勘ぐるほど悲嘆する事になる。

予定調和の如く、自慢げに豪語していた三組目が失踪した時点で、彼は悟った。

間違いなく規格外の英霊を敵に回した、と。

そして必ずうるさい連中を排除しようと、時計塔にやってくるだろうと。

だからすぐさま準備をしたのだ。

「くそっ、冗談じゃないぞ！ どうしてあの低脳どもの尻拭いを俺がしなきゃならん！ おいバカども、今のうちに移せる物は全部エルメロイに運び込め！」

幾人かの教え子に毒づきながらも、研究成果や貴重な資料を時計塔から運び出した。もちろんバレれば、立場的にかなりまずい。しかし幸か不幸か彼は教師として絶大な信頼を得ており、かつ生徒達も変

わり者と言えれば聞こえが良いが、ようは単なる問題児や不出来な連中ばかりだった。協会の掟なんぞ拾い上げてくれたウェイバーの為に何のそののである。

こうしてウェイバーの教室は、今回の事件で唯一まとまって難を逃れたのだった。

「でもせんせー、いつもは酷い目に合うのに良く今度は危ないって分かったね？」

「ファアック！ 君はオレを馬鹿にしているのか、してるんだな!？」

くそつ、何故オレの生徒はどいつもこいつもこんなばっかなんだ！

いいか、英霊ってのはどいつもこいつも化け物ぞろいなんだよ。そんなまともに相手にするのもバカらしい奴を相手に、時計塔の低脳魔術師が纏めて喧嘩を売ったんだぞ!？ 逆襲されるに決まってるだろう！」

「おおー」

「——ファアック、本当になぜこう変な生徒ばかりが……」

他の教師に押し付けられた生徒どもに悶える内、空間を支配していた魔力でも魔術でもない、何らかの不可思議な圧迫感がふいつと消え去った。

(終わったか?)

抱えた書類を碌でもない教え子に呪いと苛立ちを込めて投げ渡し、慎重に様子を窺がう。

変な部分は見受けられない。

もつとも、魔術師としての自身の能力にそれほど自信があるわけではないが。

強いて言うなら……そう、内部から出てくる魔術師がない。入り口は不気味なまでに静まり返っている。

ありていに言つてウェイバーは不安だった。

一応ながらも、襲撃してきた当の英霊が理性的だったのは確かに救いである。英雄王のように怒りに任せて根こそぎ吹き飛ばさないだけマシ、そう考えれば万歳三唱してもいいくらいだ。

では何が不安か？

決まっている。

たった一人の魔術師も出てこない。

ただの一度も魔術の気配が感じられない。

そして、探査魔術が時計塔地下まで届いている。

明らかに時計塔の魔術的防御がなくなっている。それも欠片すら残さずに。あれだけの強度、枚数の結界を撃ち抜くとなれば、それこそ魔法使いでもなければ不可能だ。

魔術の気配もなく魔法クラスの現象を行使し、未だに姿すら捉えられない。

こんな敵がいる場所で不安にならないわけがない。

(本当に「英霊」か?)

英霊にしても桁が違う。あるいは、かの英雄王を超えるほどに。

「せんせ、どうします?」

生徒の不安げなささやきに、咄嗟に答えられない。

地下から猛烈な熱気が立ち上がってくる今になれば疑う余地もない、魔術協会三大部門が一、世界中の魔術師にその名を知られる『時計塔』は壊滅したのだと……。

「……とりあえず、調査は後回しだ。このままエルメロイに向かうぞ」
掘り返しても形ある物が出るか疑わしい、外観はそのままの本部に背を向け、ウエイバー教室の面々は静かに立ち去るのだった。

第参章 エピローグ 終と始 (Fate編)

しくしく……

「——オイ、この声いったい何だ？」

ここは冬木で拠点としていた廃洋館。

時計塔を片付けたのち、いくつか似たような他所を回って始末をつけた帰りだった。

帰宅、と言つていいものなのか？ まあ戦争中に施した改造が丁度良かったんで、以後もこつそりこの世界の一時的な拠点として使っている。

しかし今日は様子が違う。

昨日は誰もいなかったから静かだったんだが、今は玄関の奥、廊下の向こうの方からやたら悲しげにすすり泣く声が聞こえる。このかすれ具合といい古い洋館独特の廊下の暗がりといい、有り体に言つて非常に気味が悪かった。

「ヌル、いないのか？」

……返事はない。

相変わらず悲しげな泣き声は聞こえている。何なんだ、いったい。仕方も無しに声へ向かって歩く。

何ゆえ自宅(?)でこのような現象に見舞われなければならないのだろうか？ やはり日頃の行いだろうか、と頭をひねりつつ薄暗い廊下をすすみ——

(ここか)

一枚のドアの前で立ち止まった。

泣き声はこの扉の向こうから聞こえる。玄関では良く聞き取れなかった声が、ここならはつきりと聞こえた。

——というか、これメドウーサでない？

明らかに見知った、いや聞き知った声に首をかしげる。彼女はヌルと一緒に姉二人の探索に出かけていたはず。ヌルが付いて行った以

上、たしかにそろそろ戻ってきていい筈ではあったのだが。……まさか？

嫌な想像。脳裏に妹を拒絶するメドゥーサに似た二人の女性の姿が浮かんだ。

メドゥーサに巻き込まれた感がある二人の姉。長い年月を醜い化け物として追われ、呪われし不老不死ゆえに死にも逃げられない。そんな境遇を考えれば、たとえ妹だとしても恨み辛みは澱のように降り積もろう。それとて彼女も薄々はわかつているだろうが、現実として誰より大切に想う人に手を払われるのは、きつと心が壊れてしまうほど痛む。何より嬉しい事があって、だからこそより深く刃は突き刺さり、憎しみの毒は魂の底まで黒く犯してしまう。

それは部外者からでは避けがたい結末。心が擦り切れ果てる苦痛と怨み、呑めるだけの器が彼女たちにあるだろうか？ 澱を澱として沈めているだけの懐があるだろうか？

今更俺がどうこうはできない。

これは彼女たちが生きる生で、彼女たちが選ぶ先だ。

「——メドゥーサ？」

軽いノック。小さな覚悟だけもって、ノブを捻った。

居住建築用として調整したナノマシンによって一見木に見える扉は、滑らかに軋みひとつ立てず開いた。

「あ？」

絶句する。

正直に白状するなら、その瞬間、俺ともあろう者が見た意味がわからなかった。こんな体験はここ千年近くなかったのに。いや、いやいや。状況はわかる。たぶん色々と見たまんまで、それで十分泣き声と

か納得がいく。

ただまあ、なんとさえいいのか……。

言葉に詰まった先。

つい二日前、永い間望み続けた願いが叶うと嬉し涙を流すのを見送ったメドゥーサが、地面に這いつくばって二人の少女のイスにさかれていた。

……いや、本当に何ぞコレ？

しくしくという聞く方の心に染みてくる泣き声は、四つんばいになつて彼女の髪に隠れた顔の辺りからしてる。間違いなく泣いている。

原因はと言えば、まあ背に乗っている二人しかない。たぶん彼女の姉たちだと思うのだが……おい、泣かしてるぞ。

メドゥーサとお揃いのラベンダーの髪を二つに結び、双子だろうそつくりの美貌に何とも邪悪な笑みを浮かべ、メドゥーサとは似ても似つかぬ小さな体で自分たちの妹をイス扱いしている。

「あー、つと。……メドゥーサ？」

思ったより小声になつてしまった。

情けない事に上手く言葉が出ない。いや、こんな事に慣れるのも御免だが。

小さな声にびたりと泣き声が止まった。

ゆつくりと俯いていた顔がこちらを向いた。

「うっ」

思わず怯む。

美人さんは泣き顔も美人なんで眼福なんだが、目が明らかに助けを求めている。誰がどう見ても嗜虐性性癖をもつてるとわかる人間二人を相手に立ち向かえと？ しかも初対面だぞ？ ハードルが高いべ。

内心で言い訳を転がしながらのアイコンタクト。

涙に潤みながら切実に訴えてくる色素の薄い宝石の瞳。

勘弁してと必死に抵抗し、目を逸らす。

再びうつむくメドゥーサ。先ほどより心なし大きい嘆きが心を攻め立ててきやがる。

「あら、貴方がメドゥウの言っていたマスターとやらかしら？」

メドゥーサが再び泣き出してしまつてから一分。ひんひんとしゃくりあげるのをうっとり堪能していた二人組みの視線がようやくこちらを向いた。

「私たち姉妹を神の呪いより救つてくださったこと、心より感謝いたしますわ」

いや、感謝してんならその哀れなイスから立つて言えや。

つか……本当に遠慮も容赦すらも無く尻に敷くなよ、苦労した妹を。可哀想だぞ。

「気になさらないでくださいな。この子はこう見えて喜んでますのよ？」

ね、ダメドゥーサ？」

「そうよ、私と私のイスになれるなんて嬉しくて泣いているに決まっていますわ。」

ね、ダメドゥーサ？」

しくしく……

ひつく……しくしく……

「おい、すげエ泣いてんぞ？」

つい自重を失念して突っ込んでしまう。

するとまた夢見る表情になつてしまった双子の内、別の片割れがくすくすと笑いながらぴしりと鋭くメドゥーサの尻を叩いた。

「ねえダメドゥーサ。私たちが話してるのに喧しくするなんて……いけない子ね？」

ぴたりと泣き声が止む。

生理的反應すら握られている。もはやパブロフの犬が可愛く思える調教レベルだ。

二人のメドゥーサを可愛らしくしたような、そんな人間離れた容

貌に浮かぶ表情は、もう筆舌に尽くしがたい。虐げる妹が愛しくて愛しくて、今にも舌なめずりしそうな顔。小悪魔じゃねえ、ありや悪魔だ。

しかも、「さて、お話しの続きをしましょ？」なんて微笑んで言うさまは、それはそれで性悪と知ってなお感動するぐらい綺麗っていうからタチが悪い……。

「さて」

ようやくと緩んだ表情を引き締め、話を仕切り直してきた。

「貴方はこれから、助けた私たちをどうされるおつもりでしょう？」

「どうもせんさ。無責任なようだがね」

にこやかな二対の目の奥、冷徹な気配がわずかに揺れた。

「ではメドウが言ったように、真実損得無しに私たち姉妹を助けてくださったのですか？」

「あえて言うなら、別人への『借り』を返すという自己満足が得と言えるか」

「ならメドウとの『契約』も破棄なさる？」

「生きている君たちとは違い彼女はもう死んでいる。肉体はとうに朽ち果て、この身の内に取り込んだ魂でしか存在しないが……本人が望むのなら魂を開放し、肉の身体も用意しよう」

「——非常識で、都合が良すぎで、とても信じられませんわ」

双子は悩む。

このクロカワと名乗る異人にそれが出来る、本当だなどとは到底信じられない事ばかりだった。しかし事実として彼女たち自身を遥か未来へと連れ去り、世に名だたる戦神の呪いから解き放った。前者はともかく、後者は魔法使いとして不可能な特大の奇跡。いや、奇跡でなく純粋な実力か。

しかし信用はできなかった。

相手は『男』。美しく、そして小柄な女性という存在が異性からどう見られるかなど、うんざりするほど知っている。

あれでメドゥーサも、自分たちとタイプこそ違えど凄い美人だというのによくわかつている。この男がそういう目的があつて妹に取り入った可能性だつてあるのだ。

でも……疑いだしたらきりがない。

それに神の力をはねのけ、神すら抗えない時を自在に渡り歩く存在が、自分たちのような美しいだけの人間相手にわざわざ手間をかけるなど無駄でしかない。手に入れようと思うなら、力づくでどうとでも出来るのだ。

そう、この未来では違うかもしれないけれど、少なくともつい昨日まで過ごしていた場所ではそれが当たり前だったのだから。

(ああ、昔と同じ。力のない私たちに選択する権利なんてないか)

つまりなるようにしかならないという事なのだが、そう思ったら、少しだけ気が抜けた。これから先はともかく、今は何もされていななし妹も気を許している。

『なら、いいか』と生来の面倒くさがりが顔を出し、問題を放り投げた。本当に信じられるかなんて、いくら考えたって完璧な答えが出るわけない。だったら深く悩むだけ無駄だ。少なくとも姉妹合わせて二回は助けて貰つてるのだし？

会話を交わさずとも半身とは意思が通じる。他者にはわからず、ひとつ頷きあつた。

「——ひとまずは信じましょう」

とりあえずの結論を告げた。

自分たちをどうもしないとほ言っていたけれど、身一つで放り出すような真似はさすがにしないだろう。なら最低限、貰う物くらいは貰つておこう。どうせあの懐きようならメドゥーサは彼から離れないと思うし、そうなれば必然的に自分たちとも付き合う事になるのだ、きつと。

にやりと嗤う。

眼前の男の顔が引きつった。どうやら思ったとおり、強引にどうこ

うするような性格ではないらしい。つまり……遠慮はいらない。

「ねえ、エウリユアル私」

「ええ、ステンノー私」

冷や汗を垂らしているのを尻目にくすくすと笑いあう。案外これで良かったのかもしれない。さあ、せいぜい困らせてあげましょう。

長い付き合いになるかもしれないし、ね？

「私たち、欲しい物が……」

「ほんとに、遠慮容赦なく筆られた……」

「すみません。すみません。すみません」

あの双子の悪魔が嬉々として去ってから数分、俺はMS一機構築するより削れたキューブを手にして天井を仰いでいた。

あの悪魔どもが礼儀正しかったのなぞ最初の内。

あつというまに遠慮がなくなり、口調は横柄になり、要求に自重が消えた。間違いない。あれがやつらの本性だ。

最初の幾つかの『お願い』でどれくらいまで出来るか測っていたらしい。その後は次から次へと、いわゆる嗜好品の類いまでねだられた。「それ必要なのか？」などと洩らそうものなら、すぐさまあの性悪どもは迫真の泣き真似をして良心を追い詰め掛かってくる。『強請ねだる』と書いて『強請ゆする』と読む。俺はまさしく双子に強請られた。

けっこう出した中にはそれこそ自衛用とはいえ、この世界基準では宝具クラス概念武装に分類されるだろう物品も含まれている。……いや、泣き真似とわかってても抵抗しづらいのが男なのだ。

結局、出て行った後にこうやって二人で頭を抱える仕儀となった。

「本当に、その、姉さんたちがすみません」

「なあ、途中からすっごい無理言うのが楽しそうだったよな？」

「え、ええ。えつと……姉さんたちは少し変わった感性をして……」

「少し?」

「うつ……」

はあ。

「ま、いいや。今すぐかはともかく、必要な物つてのはわかるし。次に
いこう」

部屋には今ふたりだけ。

姉、sは最終的な要求が部屋の改装にまで及んだので、メドウーサ
が懐に収めていたヌルをつけて送り出した。生贄とも言う。怨嗟の
テレパシーがゆんゆん送られてくるが、なに、人型端末でないキュー
ブ状態ではあの嗜虐性も発揮しづらいに違いない、きつと。うん。

「体の調子はどうだい? 意思総体は『君』の方に合わせたから、慣れ
ない内は差異の違和感がキツイだろうが」

目の前の彼女はずいぶん様変わりしている。

額の印は消え、眼帯も無く、その瞳は真っ直ぐ此方をみつめている。
一回り小柄になった身体に生成りの厚手の上着、膝下まであるス
カートをはいた姿は、背中ですべてに結った髪もあわせて、ヨーロッ
パの田舎の農家の娘さんといった風情だ。いろいろ小さく(と言って
もようやく標準といったところだが)なったせいか、妖艶な雰囲気も
ずいぶんやわらかくなった。もっとも本人にとつて一番重要だった
変化は、十五センチばかり低くなった身長の方らしいけど。どうやら
トラウマというか、自分的な身体のネックだったらしい。いや、改善
できん部分でそこまで悩むなよ。

ともかくにも、頭を引つかき気分を変えながら問うのに、彼女は
小さく、楽しそうに微笑んで答えた。

「ええ、やはり手足の長さは違和感がありますね。ですがこれは慣れ
るしかありませんし、逆にそれが新鮮で面白くもあります」

「そうか」

うむ。いつぞや彼女に笑顔が良くなったと言ったが、今のはもつと
良い。

あれを向けられると年甲斐も無く面映い思いがする。

「それで、どうする? 俺もそろそろこの世界からお暇しようと思う

が、やはり身体の方を用意しようか？」

メドゥーサにはエイヴィヒカイトの『形成』によつて魂を元に今の身体を形成した際、こちらの事情は最低限話してある。問題は先程の話し合いで言った言葉だ。『彼女が望むなら、この身の内に呑んだ彼女の魂を開放し、ひとりの人間として生きられる身体を用意する』と。「——それについては悩んでいます。貴方に付いていきたい気持ちはあります。助けられたのは貴方の事情ですが、それに恩を感じて貴方の役に立ちたいのは私の想いですから。ですが姉さんを放つては行けません。姉さん家事の類いは一切できませんし、なにより離れたくない」

「ふむん……どうしたもんか。やっぱりそこら辺は一度姉さん方と話あつ『その心配はイタツ！ ウ、うう……その心配は要らないわ!!』——おや、もう終わったんかい？」

エウリュアレ、じつに漢らしく扉を蹴り開け登場しようとして、足裏でなく爪先で蹴って扉に負けるといふ非常にかつこ悪い渾身のミステイク。無かつた事にしようとしているが、サンダル履きのつま先は弱そうな皮膚が真っ赤になって、折れそうな細脚は小鹿のように震えている。顔も赤いし口元も歪んでるし、大きな瞳からは涙が零れそうなの、ようは痛さで泣きそうになっていた。

ここは大人として心優しく流してやるべきかね、うん。

「ええ、終わったわ。この子凄いのね？ 私が欲しいくらい」

「ヌルか。やらんぞ」

「ケチね」

ステンノーは猫でも抱えるように黒いキューブを抱え、その艶やかな表面を撫で繰り返しながら柔らかな唇をツンと尖らせた。

今話したのは痛そうなの代わり前に出た方なんだが、外見どころか仕草ですら見分けられないという双子の申し子みたいなこの連中。俺はそれこそ魂やら精神あたりで判断するのだが、それができない人間には判別が付かないのではなからうか？ 俺も魂を見ず、精神だけだったら間違うかもしれないほどに似通っているくらいなんだから。

「ヌルもお疲れ様」

『……白々しい』

イメージで吹雪が舞った。

おお、完全にひねてらっしゃる。

「そう言わんでくれ。すまなかったと思うが、メドウーサに用があるってのもあったんだ。それにひどい扱いはされなかったら？」

『されてません。が、私を差し出したのが気に入らないと言っているのです』

う、む。いつもより冷たいお言葉。普通の会話が透き通った氷片なら、今は厳冬のオホーツクに降りる霜ですな。これは時間をおきますか。……あれ、ヌルってAIだから時間じゃ解決しなくないか？

やはり謝り倒すのが一番か。土下座なら覚悟の上だ。娘に近い相手に今更保つプライドなどあるものか。

「ねえ、せっかく私が登場したっていうのに無視するとはいい度胸ね」
ようやつと痛みが引いたのだろう、腕を組んだエウリユアレが仁王立ちになっている。不機嫌そうに目を細めた彼女は実に物騒な感じだ。

「んな事言っただってな、エウリユアレは大変そうだったし」

「そんなわけないでしょ!? 私があの程度で泣くわけないじゃない!」

凶星というのはいつの世も人を傷付けるものだった。怒り狂っている。

というより、自分で申告してりゃ世話がない。せっかく気を使ったのに。

「いいこと? 私たちみたいな超絶美女がいるのにまったく気にしてないってのが……」「待って、エウリユアレ」「——どうしたのステンノー?」

いいところで切られた事は気にしないらしい。片割れだからだろうか? 怒りを納め、袖を掴んで止めた片割れを問う。

「この人、見分けた」

「えっ? ——あ」

じつとこちらを見詰めるステンノーに、はっと気付いて振り返るエウリュアレ。

戸惑い、というより困惑？ はじめて見た謎の生き物へ向ける視線だ。少なくとも負の類いではない。

「お母様でもわからなかったのに」

「お父様でもわからなかったのに」

こんな時までシンクロするのは、やはり根っこからそっくりだからだろうか？

どことなく愉快的気分だ。

「外見で見えないからさ。外見だったら仕草まで同じな二人を見分けられんだろうけど、俺が見てるのは魂だからな。悪い言い様だが、『包装』で間違う事はないよ」

「おどろいたわね」

またひとつ明らかにになった非常識に呆気にとられる双子。

いくらなんでもそんな方法で見分けるなんて、と予想外な判別法に驚きを隠せない。

「ふくん」

何やら観察されている。

針のむしろってのとはまた違うが、どちらにせよ居心地はよくない。

「ね、姉さん？ すこし、すこしだけ失礼な気が、しないでも、ない……ような……」

メドゥーサよ、言うならしやつきり言わんかい。どれだけ姉が苦手なんだ。先細りになって消えてるし。まあ小さい頃からあれだけ刷り込まれてたんだとしたら、こうなるのも当然か。

「メドゥーサ、いいよ。たしかにお世辞にも一般的な特技とは言えないからな」

「ごめんなさいな、悪かったわね。でも、本当にメドゥーサが言うように”人”じゃないのね？」

「ああ、聞いてたか。ま、そういうことだ。もつとも今は人間じゃないが、元が人間だった事に変わりはない。出来ることが違うだけで精神

性は大して変わらんよ」

「……そ。少しは安心したわ」

「そりや重畳。で、話が戻るが、なぜ『心配要らない』んだ？」

「決まってるわ。私も貴方たちに付いていくから」「だから離れる心配は要らないの」

驚きの事実。実は悩んでいた事は解決済みだった。

しかし、たしかにそれなら問題を両取り出来るのだが……

「一緒に来ようってのは構わんが、もうこの世界にはこんぞ？」

「そうです、本気なんですか姉さん!？」

「別に構わないわ」

「未練なんてこれっぽっちもないもの。ね、エウリュアレ」

「未練なんてあるわけないわ。ね、ステンノー」

「おい、まさか本気で言ってるわけじゃあるまいな？」

思いもかけず厳しい声音が出た。

執着という感情。それは何も人との間だけに働くものではない。お気に入りの道具、大切な相手との思い出、心に残る場面、俗なものでは自身の立場。様々なものに人は執着を覚える。

中でも最も多くの人間が得る執着、それが”故郷”への執着だ。

人は生まれ育つ過程で多くの経験をし、それを糧として肉体や人格に知識といった自身を構築してゆく。ゆえにその土壌となつて己を育んだ場所に、多くの人間は自然と親しみと愛着を持つようになる。

だが、彼女たちはその執着がないと言っているのだ。

もう名残は欠片も残っていないが、それでも遠い異国の故郷には父母が眠っているだろう。幼い頃に駆けた地、暑い日に泳いだ川や海、遠い夕暮れに見た感動、それらは今も残っているかもしれない。『未練が全くない』など、聞くほうが辛かった。

たとえそれが妹と永遠に別れ、魔術師や教会に追わる危険と隣り合わせの未来を避けるために必要な”切捨て”だとしても。

『——ありがとう』

小さな、繊細なガラス細工めいた二重唱。

謳うような囁きが連なつてゆく。

「会ったばかりの私を心配してくれて、ありがとう」

「でも気にしないで。私の一番は優しくして不器用な、たった一人の妹」

「その子が私と悩むほどの願いを持つのなら、叶えてあげるのが姉の喜び」

「何もできない私は重荷になりたくはない。でも、望んでくれるなら」
「望んでくれるなら、私も共に」

「……そうか」

息を吐く。

「なら俺からは何も言わん。話しが纏まり次第出る。ヌルの成果はこつちで持つていくから、わだかまりは残さんように」

それだけ言い置いて、ヌルを掴み部屋を出る。

最後に見たのは、涙をぽろぽろ溢して震えているメドゥーサだった。

翌々日。

ぼろぼろの洋館の前に、四人の人影が揃っていた。

あれから姉妹は、話し合いに一昼夜をかけた。

話して、泣いて、怒つて、笑つて、悲しんで。

メドゥーサの恋から始まった出来事に、彼女たちなりのケリをつけたらしい。

腹の底まで晒して、結局喧嘩までしたようで、その後は一日目の充血が取れなかったり筋肉痛だったりすると、本人たちには災難だったようだ。

結果として、姉妹は揃つて付いてくるようだ。

まあこの世界に残っていても、姉妹の存在自体が碌でもない連中を招きかねない。ああいった連中はどうやってか、どこからともなく嗅ぎ付けては、ゴキブリのように湧き出してくるものだ。

といつても別に俺に協力するとか、そういった訳ではない。

単純に避難先として移住するだけだ。

幸い、あの場所の土地は無限。主観者たる自身の思うままという地だ。二三人増えたといつて、どうという事はない。

「では、行こうか」

目の前には人一人が入れるだけの亀裂がある。空間そのもの、いや、世界その物にはいった亀裂だ。本来ならこのようなものは開けずに済むのだが、ここにはその方法が適応できない人物もいる。

勿論、星の自浄作用を止めるために交渉は済ませてある。システムに端末として交渉役を求め、現れた全権代理人に外来の”素”を持たせた。世界外から持ち込まれた”素”は、この世界にとって完全なプラス存在である。より大きく、強く、世界その物を滅びから遠ざける栄養。それは危険な来訪者を数人の人間をつけて厄介払いできる事と足せば、僅かな時間小さな亀裂一つ引き換えにする価値が、世界にはあった。

境界をまたぐ。

これより先は世界の外。法則ルールが無い、あるがままの場所。

『世界』の木から零れたやわらかな日差しが、青々とした下草に揺らめく陰影を映す。ここは丘の上。眼下には心を写した外世界が地平の彼方まで広がっていた。

原初のままの、美しく、豊かな自然。

しかし、これから訪れようとする彼女たちにとっては見知らぬ異邦の地だ。

ほんの一つ、お節介をやく。後ろを振り返る必要は無い。

先に館でやった”御霊送り”、今起こすのは”御霊降ろし”。望み望まれ、御霊の同意があるならば、英霊と同じように招くに労はいらない。

三姉妹は世界に走った亀裂へと歩みを進めた。
言葉はなく、後ろを振り返る事もない。
生まれた世界に別れを告げるのだ。
未練がましい真似は己の矜持が許さない。
まして故郷は遠く時代の彼方。想いは馳せても、目を向けようとは
思わない。

もうあの男は先へ渡っている。
なのに、声が、風の音より幽かな”声”がした。

音ともいえない音。でも、聞き覚えがあつた。
毎日聞いていた、慈愛に満ちていた、声。

とん、と背中を押される。

思いもかけず、足をもつれさせて境界を越えた。末妹が姉を支える。心を縛っていた何もかも、全てを忘れ、言葉にならぬ”何か”を求めて振り返った。

閉じゆく亀裂、その向こうに朧にかすれた二つの人影が見えた。

向こうの景色が透けて見える、顔も判別できない影。

でも、誰だかわかる。

見ればわかる。

わからないなど、ありえなかった。

朧な影に記憶が重なる。

大きな影は、土仕事で日に焼けた肌をした柔和な男性。軽々と自分
たちを抱えていた腕をまっすぐ伸ばしていた。

小さな影は、優しい微笑の女性。親子だからよく似てると、嬉し
そうに笑っていた口元が語り掛けていた。

もう声は届かない。しかし、何と言ったかはわかる。

いつも、どこかへ出かける時にかけてくれた言葉。顔が見えなくても、台所から届いた声。すぐ近くなら、笑って、でも少し心配そうに頭を撫でながらいつてくれた言葉。

——いつてらっしやい——

何か言おうとして。

言葉が出なくて。

必死に手を伸ばして。

でも、影も、亀裂も消えて。

哀しくて、切なくて、心から嬉しくて。

三人は、あたらしい世界で産声をあげた。

第參章 外話 冬の夜 (F a t e 編)

冬木市。

五度に亘る聖杯戦争という名の魔術儀式の舞台として、死した英雄が血生臭い殺し合いを続けてきた地。儀式を司るシステムが破壊されてから二ヶ月と経たぬ今、街のあちらこちらに刻まれた傷跡は癒えていなかった。

夜、市を二分する川の片側、深山町と呼ばれる古い町並みを残す住宅地を一人の人間が歩いていった。

すらりと伸びた脚を動かさず、黙々と夜の街を恐れる気も無く歩いている。やがて、とある交差点に行き当たった。脚が止まる。

ふつと足音も無く、今まで誰もいないように見えた曲がり角から人影が現れた。

言葉は無い。

互いに一拍見合い、揃って歩き出す。示し合わせた同行者なのか、淀みなく向かう先は同じ方向だ。

道なりに進むこと十分。道は坂になり、山へと登ってゆく。

二人は更に進む。やがてこの街の学び舎を過ぎ、山腹を横切るようにして目的地へと到着した。

そこは『柳洞寺』と呼ばれた寺の裏手。

山腹にちよつとした平地ひらちがあり、山肌が剥き出しになった場所だった。

そこにいたのは一人。

街灯も無い暗闇に人影が佇んでいた。

夜の山は暗い。しかしここにいる誰もが、現代の闇を物ともしない目を持つ。ここは山で、下は光に溢れた夜の街。原始の夜闇に慣れた彼らにとっては明るいくらいだった。

「やはり、貴方でしたか」

口火を切ったのは一番小柄な影。

大柄な子供が多くなつた世の中で、十分に子供と見られる背丈だ。四肢も細く、『華奢』という形容詞を形にしたような姿は、脆く頼りない中に不思議な強さを秘めていた。

かつては絶えず纏っていた他者を圧する程の威は綺麗に拭い去られ、今は静まり返つた聖なる森の泉の湖面のような、まるで鏡のように凜いだ清冽な水。そんな不思議で神聖な透明感を写し出したいた。

「……どういふ意図があつての事か、今この場で聞かせて貰おうか」

次に口を開いたのは大柄な影。

特別大きな体という訳ではない。逆に鋼のような筋肉を凝縮し、細く鋭く縫り合せ絞り込まれた肉体は、むしろ見る者にとって細身に見えるかもしれない。だがそれは太く大きな肉体とは比較にならぬ速さで動き、鞭のように鋭い一撃を放つ”戦闘”に特化した肉体だ。ひたすらこつこつと鍛え上げ、積み上げねばここまで芸術的に完成した肉体は出来上がるまい。

ひたすら願ひ続けた夢が思いもつかぬ形で叶い、しかし叶えた相手にかける口調は名剣もかくやと鋭く、鷹と称される眼差しは”敵”を見定めるが如しだった。

「意図、ね。たんなる気まぐれでやった事を勘繰られてもな」

返したのは待っていた影。

先の影と似るほど大きく、より細く長い印象を与えるシルエツト。人なのに、人のはずなのに、口調にさりげない仕草、気配の奥、先の二人にも探れない深みにどこか人外の”匂い”をくゆらせていた。

「それを、信じろとでも?」

「事実を言つて疑われるのは敵わんね」

この一人と二人は互いを敵とし、剣を交えた関係だ。

期せずして殺し合いの関係は崩れ、思わぬ借りができたが、信用や

信頼など挟む隙間など無い。それは徐々に殺意を高める鷹の目に明らかだ。もし僅かなりとも怪しい素振りがあれば、瞬時に剣を抜き放ち命を賭けた闘争を開始するだろう。

しかしもう一方の影にはそのような気配が無かった。いや、それどころか密かに、何かあれば咄嗟に自分を庇える位置に立つ影を諫めるようですらあった。

「シロウ」

「……君まであの小僧のような事を言うのか？」

「――」

「ちっ、どうなっても知らんぞ」

「ありがとう」

礼の声には深い信頼と見透かしたような小さな微笑。まるで彼が見捨てるはずが無いと、本当にどうなっても知らないなど思っているはずが無いと、そう当たり前前に思っているのがわかるような。殺す殺さないの話だったのが、聞くほうが気恥ずかしい思いをするようなやり取りになっている。

男は苦々しげに一步下がった。

「御兩人、あまり一人身に見せ付けてくれるな」

「すみません。そして遅れましたが、私とシロウの事、感謝します」

「……そう素直に頭を下げられるとばつが悪い。彼はともかく、そっちは望みを断ったようなものだからな」

「それでもです。私の望みは……今も諦めたとは言いきれません。後悔が無いとも間違っても思えません、それでも、あの滅びの先が今に続いているという事は受け止めています」

「そうか」

「ええ。この腕も――」

すつと手をやった先、もう片腕の肩口。そこには本来あるべきものが無かった。

「あの時、最後の戦いでランスロットとまみえ、再び恨みの狂気に捕らわれた彼を見てわからなくなりました。イスカンドルにいずれ最低限の誇りすら見失うと告げられ、かつて戦った高潔な騎士に妄執の虜

と唾棄され、手にかけていいわけが無いと思つた相手すら生き汚く切り、貴方に敗れ聖剣を失い、戦う事も出来ずシロウに守られ、その果てにまたランスロット出合い……」

ここまで駆け抜けてきた血の道程を振り返るように、彼女は語る。「まだやり直せると。」

心が潰れるような悔恨の果てに、聖杯さえあれば死なずに済んだ皆の命も、私が知ろうともしなかつた騎士たちの苦悩と想いを拾う機会も取り戻せると。そう、信じていました。それだけに縋っていましたですがランスロットに切られ腕を失い、剣士として死んで、なのに狂気に侵された彼は剣を止めて目の前から去り……」

辛さを呑むように。

その身を苛む苦しみが終わる事が無いのを肯定するように。

「全ての事は……あれで良かったかはともかく、なるようになったのだと、今は考えています」

「それが答えか？」

「いいえ。彼等の恨み、この腕の事、剣士でなくなった自分。これから的一生をかけて、答えを出したいと思っています」

「そうか」

男は小さく笑つた。

いらぬおせっかいと手を出したが、自分で止まれなくなった者には僅かながらも助けになったかと安堵した。

「『夢見』に問題はないか？」

「貴様は本当に余計な事をしてくれた」

「——シロウ？」

「ぐっ……」

彼女にもわかっている。

今の自分たちは本来ならありえざる存在だ。座に据えられた本体を抹消され、サーヴァントとして降りた写し身の彼らが『人間』として、世界に唯一つの存在として生きている。しかも目の前の男がどういう見だつたのか、それぞれが隣の相手の過去を、まるでマスターがパスを通じてサーヴァントの過去を夢見るように知つた。

だから気付けた。

アーチャーが誰なのかを。

なぜ最後の戦いで、虚脱し役立たずだった彼女を複数の敵サーヴァントから死に物狂いで守り抜いたのかを。生きる事を優先するのなら、役に立たぬ従僕など囷が精々なはず。にもかかわらず、己の願いと命を賭けて圧倒的な戦力差を覆し続けたのかを。

シロウはシロウなりに理由があつて、己の過去を知られたくはなかつたのだろう。

だが、彼女は知つて良かつたと思つた。

すぐ隣にも自分の影響を受けて人生を踏み外し、地獄の責め苦に苦しんだ人がいたというのは、自身の罪業からどこまでいつても逃れられないと眼前に突き付けられたようで、しばらくは彼を直視する事すら罪の意識で憚られた。

だが終戦からこの二ヶ月、屋敷の離れでの暮らしの中で彼と幾度となく話し合いぶつかり合い、皮肉で世を斜に見たような態度の奥に深い気遣いを知つて、そして己を責めるあまり被害者といつていい彼にすら支えられる自分にほとほと嫌気がさした。

無様も無様。

過去を求めるあまり視界が狭まり、いつのまにか周りが見えなくなり、最後には内に籠つて地獄に突き落とした者にすら慰められるとは……過去未来含めいつたいどこにそのような情けない英雄がいたろうか？　いつかイスカンドルに言われた言葉が今更ながら身にしみた。

それからは、やはり後悔と羞恥の連続だった。

失意に閉じ籠つた自分を案じ、何くれとなく動いてくれていた士郎とリン。もはやサーヴァントとしての能力の全てを失い、人だった頃から磨きぬいた剣技も片腕では無いと同じ。つまりたんなる穀潰しでしかない。しかし見捨てる事も怒る事すらもせず一月以上も見守つてくれていた。あのような子供が、英霊だった自分をだ。情けな

くて彼らにもしばらく顔向けできなかつた。

そんな私に引き換えシロウはすぐさま己の働き口を探し出し、タイガの祖父、藤村雷画のツテで彼と私の分の戸籍まで手に入れて自活を始めようとしていた。

その時も羞恥のあまり、極東式の自害“ハラキリ”しそうになつた。

視界が広がれば、やることなどいくらでもあつた。

安穩と子供の世話になつていられないと、結局今はシロウが雷画の紹介で借り受けたアパートに転がり込んでゐる。心苦しいなど言つていられない。もう英雄でも英霊でも、まして一国の王でもないのだ。金がなければ食えず、食えなければ惨めに飢えて死ぬのだ。

出来る事をやり、出来ない事を覚え、手探りで共同生活が始まつた。

そうこうしている内に、自然とシロウと向き合えるようになっていた。アパートという狭い住居に大人二人が暮らしているのだ。役割分担に互いの連絡事項、話さなければならぬ事などいくらでもあり、また互いにそういつたやり取りをしなければ共同生活は成り立たない。その環境で、自分がどうあれ、相手が既に許している事を理由に“今”を害すなど、到底できない話だつた。

いざ始まつてみれば、私はどこまでも彼のお荷物だつた。

料理は出来ず、掃除は出来ず、口調もあつて仕事も見つからない。やれる事といつたら買出し程度だ。そんな私を彼は見捨てなかつた。いや、見捨てるといふ選択そのものが無かつたように思う。

日中は働きに出て、帰れば夕食の準備をし、終われば明日の仕込を済ませ、合間に洗濯を片付ける。そんな忙しい生活で、あの皮肉な口調で手伝うように言う事はあつても、決して手伝わなければ……などとは欠片も言わなかつたのだから。

一人でやるのは彼の性分。

頼られていない。

そもそも頼れるほど仕事ができない。

そんな現状はなけなしのプライドをひどく抉つた。

加えて、ご飯を食べる時、彼はときどき私の食べる姿を見ながら別の私を見ている時がある。

生来の負けん気が、ここにきてようやくと疼いた。

夢で見た、彼が憧れ、彼が愛し、彼と共に戦い抜いた少女は私であつて私でないのだ。不甲斐ない自身と違い、最後の答えをだし、追い続けた願いに己が手で決着をつけた。そんな『私』と今の私、比べる事もおこがましい。

だから、私は黄金に消えた彼女に憧れよう。

英雄の名に相応しい、もう一人の自分に憧れよう。

いつか、あの夢の光景に追いつけるように。

シロウが憧れた自分を超えて、彼に並べるように。

そう思えるようになった切っ掛けをくれた、目の前の敵だった男がしたこと。シロウにそれを「余計な事」と言ってほしくなかった。

「いや、迷惑でないならなによりだ。その男もさつきからやかましいが、願いが叶ったんだろう？ ん？ 良かっただろう？」

「……こ、ころす」

「……シロウ。それとシーカー、いえ、クロカワ・トリーでしたか。からかうのは止めてください」

「む……」

「ぬう」

お互いむつつりしながら、少女に聞こえないよう、しかし相手には聞こえるように小さく舌打ちして黙った。

「まあいい。今日呼び出した用件を言おうか」

「ええ」

「実は明日か明後日にでも俺はいなくなる。もう会う事もないだろうから、様子を尋ねただけだ」

「……そう、ですか」

「ふん、清々する」

「乗らんど？ で、身体や魂に問題は無いな？」

「ええ、ありません」

「貴様の知ったことではな『どすつ!!』……問題無い」

「なら良かった。今更だが、その身体はまるつきり人間だ。生前のまんま。彼女の竜の因子についても勿論無い。それは忘れるなよ。無茶が利かかって事だ、特にその白髪しらが」

「――」

「(……頭が痛い)わかりました。彼についても私が注意します」

「最後に。元英霊って経歴は魔術師連中や教会の連中にとつては恐ろしく魅力的だ。だからその身体にはやつら限定で認識阻害をかけてある。何をどうやった所で、たとえ神だろうと魔法使いだろうと向こうからは認識できん」

「それは……」

「出鱈目だな」

「それで結構。つまり大人しく唯人の幸せを甘受しろってこつた」

なんでも無い結論。

重くも何ともない、逆にこれまでの責任や生き方を放り捨てるような要求だ。

「――言う事はそれだけか？ なら好きにさせてもらおう」

真つ先に男が踵を返した。

ただ、去り際にふと立ち止まり、「礼だけは言っておく」とだけ小さく言っただけだった。

「あれ、苦労しそうだ」

「私がいいます。それに、シロウはあれで素直ですよ？」

「……ごちそうさま」

ひそやかな笑い声。

「そうか……笑えるようになったか」

「ええ」

「なら、これを返しておこう」

鞘に入った一振りの剣。

ビー玉のような二つの結晶。

剣は鞘にも柄にも美しい装飾が施された、それでいて実戦に耐える一振り。

透き通った結晶はそれぞれ中に写すものが違う。片一方は刺青のようなもの。片一方は幾本もの剣。

差し出されたそれらを見て、しかし彼女は首を振った。

「——今の私たちには必要ありません」

「そうか？ 今はそれでも、いつか要るかもしれんぞ？」

「意地が悪いですね。ええ、後悔するかもしれませんが、受け取れませんか。リンもそういうでしょう」

「……そうか」

それだけだ。

言いたいことはそれだけ。

話す事は話し、後は別れるのみ。

「では、もう会う事もない。精々達者で」

「貴方も」

特別な挨拶など必要ない。

そんな仲でもない。

彼と彼女たちは敵で、たまの気まぐれで道が交差しただけ。ほんの一時交わり、後は離れるが理^{しこわり}。

彼女は背を向けて去り、やがて男も去る。

彼女は途中で手持ち無沙汰に待っていた彼と合流し、家路につくだろう。

男は仮初の宿へと帰るだろう。

人外の奇跡はあれど、世にことは無し。

この一幕、知るは冬の寒空のみ。

幕間 過去から続く大失敗

”外世界”

そう名付けた場所に時間はない。

正確には時間という事象を定義する概念が存在しない。

”流れる”でも”流れない”でもなく、その定義自体がない。

しかしここにいる自身の意識は、時間をいうものを明確に感じている。

必要にもしている。

人間を止めてこの生活を始めて、もうだいぶ時間がたった。

手慰みに作ったゼロから加算していくタイプの時計は、年の部分が1492なんて数字をしている。時が経つのは早いというが、まさか自分が歴史の単位に匹敵する時間に対して使うとは思ってもよらんだ。

これだけの、人の人生の十倍以上の時間で俺は何か変わっただろうか？

”それとも俺が時間が過ぎたと感じている事自体誤りで、”黒川冬理”はずっと変わっていないのだろうか？

———ひとつ確かなのは、今までの俺が大馬鹿者だということだ。

「そうですか。まだ籠ってますか……」

ようやく慣れてきた体を忙しく動かし朝餉の支度をしながら、メドゥーサはあと溜息を吐いた。原因は隣でフライパンで卵に浸し

たトーストを焼く女性から聞いた言葉だった。ここ三日ばかり引き籠もっているトリーの所有物を自称する電子的な生命体『ヌル』。しかしこなれた動きでフライパンを煽っているのは給仕服を着込み、清潔な布巾で藍の強い黒髪を包んだ美女だ。とても本体が空で光る稲妻と同じとはとても思えなかった。

メドゥーサも今までは聖杯戦争で刷り込まれた知識にあるAIと同じ存在だと聞いていたから、ちゃんとした身体を備えて現れたときには大いに驚かされた。掃除こそそれ用の機械がしているものの、料理洗濯は人間と同じ、いや、それ以上に上手にこなしている。

さりげなく向けられる視線を感じたのか、ヌルがさらりと僅かにこぼれた髪を揺らし、機械らしい溶けた鉄の緋色の瞳が、凍えた感情をのせたままメドゥーサを見た。

「この身体が気になりますか？」

「ええ、さすがに」

「このユニットはザインフラウ（在るべき婦人）と呼ばれる自動人形をモデルとして私が設計し、”素”の段階から製造した筐体です。全体として人体を模するという概念を宿すことによって人と変わらない『生態』を獲得、さらに各部に賢石と呼ばれる概念を封入した物質を埋め込む事で、様々な特殊状況に対応できます」

「概念……魔術も使われているのですか」

「ええ、と言いたいところですが、概念は魔術という分類は貴方の世界でのことです。世界から出たのなら、それは忘れないように」

「はい」

メドゥーサは喋りながらも手は休めない。洗面所へ二人の姉が向かったのは見たから、ここで待たせるようなことがあればまた虐められるに違いない。出来上がった料理から盛り付けてテーブルへ並べてゆく。フレンチトーストに数種類の野菜の付け合せ、サラダにチーズとハム。彩が良く、美味しくて手間と時間が掛からないメニュー。

エウリュアレとステンノーはあれで食べられない物が少ないけど、それでも好む物とそうでない物はある。メドゥーサは自分の安全のために、昔の記憶を思い返しながらせつせと甲斐甲斐しく用意して

ゆく。そのしいたげる相手に当たり前のように尽くす姿は、まるつきり調教に成功したペットのようであった。背後に姉妹の邪悪な笑みが透けて見えるようである。

「……先程の話しに戻りますが、仕方がない部分もあるかと。たしかにマスターにしてはあまりと言えばあまりの失敗でした。私もその点はどうに考えがあるものとはばかり思っていましたから、あえて問いませんでしたし」

「私も意外でした。大神でも出来ないような事を簡単にこなすような存在が、まさかあんなミスをしてたとは思ってもみませんでしたから」

抑揚の少ない感情の読めない言葉に、メドゥーサは小さく思い出し笑いしてしまった。彼女のイメージからすれば意外と言えば意外であり、逆にひとつ抜けた所があるなら親しみやすいという安堵もあった。

そして何より化け物と自身を卑下する彼女にとって、どう足掻いた所で勝てない自分が霞むほど強大な存在の傍というのは随分と居心地がよかった。自分の化け物らしい根本的な部分は何も変わっていないが、それでも”もし”自分が化け物に成り果てたとしても彼ならどうにかしてくれるという安心があるのは、どうしようもなく気を楽にしてくれた。

「この場所を理解しようという試みその物がナンセンスである、という言い訳はたちますが、やはり焦りはあったかと。貴方たち姉妹という他者が現れた事で、他の視点で物事を見るという基本的なアプローチを思い出したのでしょうか」

「思い出した」、ですか？」
「そうです。私が自我を得てより403年が経過していますが、それでもマスターは主観千年以上、ここでは一人でした。かつてとはいえ、人類の時間感覚では幾らかの精神的不備が出るのは仕方のないことだと思います」

「座ではあらゆる時間に繋がっていましたが……それほどの時間を経験した事は私もありません」

「システムとしては当然の選択でしょう。己の手が痛むような保存方法をとるほど、世界も無能ではありません」

「——ねえ、これはもう食べてもいいの？」

と、そこで鈴を鳴らしたような可憐な声が割ってはいる。ダイニングを見ればすっかり身嗜みを整えた二人の姉が、様になる仕草で椅子に腰掛けるところだった。

「はい、姉さん。飲み物は何にします？」

「何でもいいわ。でもそうね、あの男が日本のお茶もあるとか言ってたから、それをもらおうかしら」

「わかりました」

メドゥーサは柵から急須という、初めて見る形の焼き物で出来た東洋のティーポットを取り出す。こういうちよつとした時、背伸びをしないと届かないとう経験は彼女にとつて何とも言えない感慨をもたらす。ほんの数日前まで、二人の姉と違って彼女ばかり背が素晴らしいくらい大きかった。もう男性でもちよつと珍らしいくらいに。なまじ姉たちが小柄で誰から見ても（本性は別として）可愛らしいだけに、その長身を女性らしくないと身体的なコンプレックスとして抱えていた。でも、今は違う。念願かなって背が低くなったのだ！ とまあ、さりげなくメドゥーサは浮かれていた。

綺麗な小声で歌をうたいながら降ろした急須をサツと洗って水気を切り、茶葉を入れて湯を注ぐ。使用する水もその温度も紅茶とは違うが、ヌルが作成したと聞く機械から注がれるのは適切なそれ。

もつともメドゥーサとて、初めは機械がいじった物を口にするのに大いに抵抗があった。生前は野菜は畑で肉は猟師から、水は小川から綺麗な水をくんで使っていたのだから。けれども実際に出て来た様々な食材や水、飲み物はどれも生前死後通してお目にかかった事のない一級と言つて恥じない物ばかり。それらを前にしては、何となくイヤだなんて抵抗は儂いものであった。

「で、トリーはまだ引き籠もってるの？」

お茶を注がれた和風の『湯呑み』というカップを物珍しげに観察しながら、ついさつきキッチン組みが話していたのと同じ話題を出して

きた。そして困った事にメドゥーサは姉に好ましい返事を返せない。メドゥーサは焦った。私が悪いわけではないのに。でもきつと鬼のような姉はそれを口実に虐めてくるに違いない。ああ、もう表情に見慣れたエツセンスが混じりだしている、と。

薄暗い様相をみせだした近未来に、とたんにメドゥーサの挙動が怪しくなる。

「ええと、その……まだ、の、ようです……でもきつとす」

「ふう〜〜ん」

「ひいっ」

(舌なめずりしてる!?)

だっだらいいなく、というか、そうなって！ という希望的予測をバツサリ断ち切った『ふう〜〜ん』にメドゥーサが後ずさる。

ところが彼女にとつて全く意外なことに、エウリユアレとステンノーはあつさりとサディステイックな笑みを引っ込めた。

「えっ……?」

「メドゥで遊ぼうかと思っただけど、今は止めておくわ」

(今は!? そして”私で!?”)

返す返すも鬼畜な双子である。

「そうして頂けると助かります。朝食の席ですの」

と、自分の分のお皿を器用にまとめて持ったヌルが席につく。彼女も給仕服を着てはいるが、別に本当の使用人というわけではないので同じ席に着く事を誰も気にしない。姉妹が食前の祈り、彼女たちの時代の大地の恵みに対する祈りが終わり、朝食が始まった。

「ん、今日もおいしいわね。特にサラダ。気に入ったから明日も用意してくれろ?」

「姉さん、お肉も食べないと身体に良くないんじゃない」

「わたしきらいなのよ」「野菜とフルーツがあれば十分」

「栄養の偏りは成長を阻害します」

「あ〜あ〜。聞こえないわね」「栄養とつたからメドゥは伸びるのよ」

「ううっ!」

「——いい出来です」

「我関せずだけど、あなた食べられるんだ」

「はい。人を模するのがこのボディの基礎概念ですので、食物と酸素からの熱量生産が基本となります」

「概念と機械の融合など、あの世界の魔術師が聞いたら怒り狂いそうな話ですね」

内容の大半はどここの家庭でもあるようなものだが、メンバー四人全員がいずれ劣らぬ神がかった美女美少女。それぞれの美貌補正が生半可ではない。ここに画家でもいたなら、この光景を見て思わず陶然となり、我を忘れて絵筆をとるだろう。それだけ絵になる光景だった。

「それにしてもトリーったらホント部屋から出てこないわね」

「私も初めてです」

「ヌルが初めてなら……四百年で初めてでしょうか？」

「あら、あなた四百歳なの？」

「はい、正確には自我形成から403年が経過しています」

「ふうん。随分と……いえ、あの男といっしょなら驚くほどでもないのかしら」

すこし悪戯気に笑んでステンノーがヌルと、そして何故かメドウスを見る。

「私は聖杯戦争で会ったばかりですので……人となりは少しはわかったような気もしますが」

「マスターは一見気まぐれでいい加減ですが、あれで根底は一本です。もつとも今回はその根底に根ざした問題でしたのであなってますが」

「ま、あれはわたしもありえないと思ったし」

やれやれと双子はそっくりな動作で首をすくめた。

つられてメドウスと、珍しくヌルの氷面にも苦笑が浮かぶ。

「たしかに」

「ええ」

それぞれが緑のお茶に口をつけながら、この外世界へ出た日の事を

ただろう。いちいち自分で抑えるのが面倒と横着こいた挙句、自分でも負荷がそれとわからないようにしたお陰で今回の悲劇が起きてしまったのだ。

と、即座に再構築し、訳も分からず目を瞬かせる彼女たちに懇切丁寧に弁明した。

……：……：巨大な借りを作ったとだけ残しておこう。ちなみに世界側を彼女たちに合わせました。

なんやかんやと喧々諤々のやり取りの後、どうにかこうにか一行をここ唯一の建築物に案内した。いや、外もいい天気で過ごしやすいんだが、かといつて野原に座り込んで話し込むのもなんだなくと思った次第である。

適当な部屋で紅茶とか啜りつつこの『外世界』と、そこでの今後について話し合いが始まった。

外世界については”素”と呼称している世界そのものの構成材であり栄養である物についてや、今のところで自分が知っている、又は推察した情報について（ここらでメドゥーサがここは根源なのかとか驚愕していたが）。今後についての話し合いの方は……：……：といっても重要なのは住む場所くらいだが。なんのかんのいって、あれで年頃の娘さん方である。間違っても気軽に一緒に暮らせばいいじゃんとか男側から言えんのである。

と、思っていたのだが。

意外なことにそういうのは別に構わないそうなの。というか、このじんまりしたログハウスは外見こそこんななものの中は非常識に広く、外見には明らかに無いであろう上階や地下まで備えているのだ。中には図書館のようにした部屋もあれば、ちよつとした体育館ほどのスペースを確保した部屋もある。ここまで揃った家なら別の場所に住んだら逆に不便な思いをするので、それくらいならこつちと反対側の離れた部屋に泊まる事にする、とか。

まあ男女がどうのといったつもりは両者共に無いし（少なくとも今は全く）、外間を気にせざるを得ない場所でもない。ここでもいいとい

うならあえて反対しようとも思わなかった。

話し合いはその後、途中でヌルが自動人形のボディで登場したりとちよつとした騒動があったが、紅茶も好評でおおむね問題も無いまま終わった。

あとはそのまま雑談タイム。

久方ぶりのような気がするしよものもない、でも少し笑ってしまうやりとりとりに和む。

そんなこんなで少し経ったころ。ちようど外世界について綺麗だとかのんびりだとか、でも暇そうだとか言っていた時だった。メドゥーサがふと尋ねてきた。

「そういえば別の世界へ行く時は別の体でと言っていましたか、元の、今の体はそのまま樹の所に立ちっぱなしなのですか？」

「いや違う。主としての意識が別に移るから確とした形を無くして、その後は帰還までの間ずっと”素”を取り込み続けているのが常だ。さすがに雨やらが降ればひどい事になるからな。戻ってみれば自然に取り込まれていたとか笑い事になってしまう」

「——笑い事で済むんだ(ぼそり)」

思わずと洩れたらしいつつこみは聞かなかったことにする。

「あの時メルクリウスと最初に会えたのは随分な幸運だった。でなければ自覚なく触れて幾つか世界を弾けさせていただろうから」

「世界に住む者としては恐しい話です」

メドゥーサは苦笑にしては苦味の強い表情を浮かべて言った。紅茶を啜り、そしてふと思いついたように首を捻る。

「貴方はそんな自分が暮らせる世界が生まれるよう行動しているのですよね？」

「ああ、そうだが？」

「なら——」

「あ、ちよつと待て」

瞬間的に走った凄まじく嫌な予感に、それが何かも分からないまま反射的に待ったをかけていた。何か……とても致命的な何かだと感じがうるさいくらい告げている。

『素』を取り込み続ける己』『世界の大きさ』『俺の大きさ』『自分を許容する世界を目指す』

様々な断片が何度もリフレインする。

わからない。わからないまま、思考は混乱していた。

いや……それは逃避だ。

なにせ今の俺には、自ら望まなければ混乱などありえないのだから。

どのような表情が面に出ていたのか。卓を囲む皆が此方を見たまま驚いて、心配していた。まずい。客人を前にこれは失礼が過ぎる。そして何より、彼女たちにとってはこの地でたった一人の頼れる相手、水先案内人である存在がこのぎまでは全てに不安を覚える事になり兼ねない。それだけは招いた者の責任として、なけなしの矜持が許さない。そのためにも俺には説明して不安を取り除く義務がある。

「——いや、自分のあまりにでかい失敗に気がついて呆然としていただけだ。問題無い」

「そんなひどい顔するくらいって、何を失敗したのよ？」

……
が、まあ、事情を話せばどちらにしろ不安を感じさせるかもだが

そんなこんなで、

俺が『入れる世界』を探す途中で自分の規模を際限なく拡張し続けていたという、ちよつと信じられないほど馬鹿らしい大失敗が暴露されたのだった。

幕間 おまけとちよろちよろ 9 / 1 少し追加

シーン：黒川さん VS 兄貴

「しいッやああああ!!!」

「オラアアアアアア!!!」

ゴガアン!

岩塊が衝突したような轟音。黒鉄の拳と深紅の呪槍がみしりと軋みをあげて競い合う。次の瞬間腕と槍は反発で弾け飛び、再び翻る間もなく残った手足が攻撃を続行する。打撃と見せかけて絡め取ろうとし、紙一重の見切りから石突きが雨あられと襲い掛かる。極短時間で数十を超え、百を数える猛撃が行き交った。

面に見えるほどの連打から、僅かに突き放したと見るや槍が小さな円弧を描き鋭く足首を刈ろうとした。かと思えば見極め辛い肩や頭といった高い部位へ雷光が閃き、それを凌げば『速さこそが全て』と言わんばかりに滅多やたらな、世に有名な”三段突き”どころではない、五月雨突きが襲い掛かった。

対して無手の達人は、鋼の腕のみならず脛スネや足裏まで使って速射砲のように突き込まれる槍を払い除ける。決して正面から打ち合わず、常に直線の槍を横から当てて流した。大雑ぎは使わせない。ランサーも使わない。突きつけた穂先を逸らせば即座に踏み込まれ、その鉄拳で文字通り粉碎されるのはわかりきっている。そして決して攻撃はない。ひたすら払い除けながら進む。圧倒的に優勢な格闘距離に至るまで進む事こそがどんな一撃にも勝るのだと、鋼の意志で淡々と捌き、進む。

手数と射程リーチに勝るランサー。

膂力と硬さに勝る黒川。

正面からの戦いは、互いを得がたいつわものと知らしめる。

かき回された空気が渦を巻いて吹き荒れる中、命を懸けて鎬を削る二人の口元に確かな笑みが浮かんでいた。

やがて平面の戦いは神速の早駆けへ移った。

最速たる脚に任せ、駆け、跳ね、木々すら足場としながら互いの隙を抉ろうと衝突を繰り返す。天地が目まぐるしく入れ代わり、上下左右を入れ替えながら鋼手と槍が噛みあう。踏み砕かれ、刃と殴打に吹き飛ばされた石くれ土くれに木片が散弾と化して所構わず撥ね狂い、薙ぎ払った。

一閃、また一閃。

暗い森で木々の合間にまばゆい花が咲き、焼けた鉄の匂いを残す。

何合打ち合ったろうか？ 熾烈な応酬の果てに互いの体勢がかすかに崩れた。

ほんの僅かな、動くのに刹那の時間が要るといった程度。だがその隙を見事捉えるのが『英雄』で、人外の超人だ。

双方共にこちらは避けられず、相手も避けられず。

ならば？

ならば、より早く叩き込む！

シンプルな理論に基づき、捻じ込むように叩き込まれた拳と神速の一閃が、渾身の一撃どうしが交差する。

コオオオオオン！

中間で刃と拳はぶつかりあう。双方の力は互いの真芯を捉えた。そしてその一撃に全てを乗せていたからこそ、互角のぶつかりあい両者を大きく背後へ弾き飛ばした。

鋼の四肢を苦にもせず、空中で身軽に体を捻る黒川。

しかし中空に作った魔力の足場へ地面と横向きに着地した時、己の失敗を目にした。

ランサーは同じように空中で身を捻る。

着地？

否。

”攻撃”のために。

「ぐ、おおー」

ミシミシと身体が軋む。

吹き飛びながらの身体操作。渾身の激突の衝撃は決して軽くはない。いや、軽いどころか両手は痺れ、骨格が歪んだのではと思うほどの衝撃に身体は縛られていた。

だが、今この時こそが勝機。

押しして無理矢理身を捻り、その中で己の得物である槍を手放す。空を泳ぐ槍。自身に比べて軽い槍は失速し、一足速く宙で沈み込む。そして、それを待ち受けたのは限界まで引き絞られた、槍兵の最速を支える『足』。

「――突き穿つ《ゲイ》」

練り上げられた濃密な魔力が深紅の奔流と化して荒れ狂う。

槍の石突きが槍兵の足の甲へ乗った。

――我が槍、受けるがいい……!!

「死翔の槍《ボルク》!!!」

「ぬあ!?!」

十メートルを刹那で飛来する深紅の閃光に、咄嗟にランサー目掛け飛ぶのでなく強引に地面へ向けて跳ねた。肩口を掠めて槍がゆき過ぎ、しかし因果を捻じ曲げた呪いの槍は、物理法則ではなく誤められた運命に従い異次元的な湾曲を繰り返し、

どづつ

狙い過たず心臓を貫いた。

※実は心臓と見せかけてたヌルの端末がぶち抜かれちゃった、という話。

そもそも心臓無いからゲイボルグ発動しないと思う。

シーン：説明

魔術は確かに物理法則を無視して現象を顕す。しかしそれは決して世界の基礎たる規則を捻じ曲げているわけではない。それどころか規則に則ってすらいらない。魔術とは過去に世界へ刻まれた魔術基盤を利用し、魔力を対価に相応の効力を貰い受けるだけの、言うなれば唯の取り引き。

対して奇跡と称される魔法は別物である。世界の規則の一端に触れ、理解し、故に『規則に則って』ルールの力を振るう業だ。例えばそれが常人にも魔術師にもどれ程理解し辛いものだとしても、それは確かに世界の規則に沿っているのだ（若干ながら、法の抜け道を通るような真似をしている部分もあるが……）。

シーン：魔術協会とかに対して。『登場！ 魔殺商会』

「伊織、出るか？」

「勿論だとも」

直ぐ様の返事と共に、まったく突然に男が現れた。糊の利いた黒いスーツを着込んだ二十代の若い男だ。いや、影に隠れるようにもう一人小柄な女の子もいる。

「随分と楽しそうじゃないか。僕が出ないわけが無いだろう？」

「そう思ったから声をかけた。自由にやってくれ。期限はいつもと同じ、死ぬまでだ。それで良いか？」

「フン、十分だとも。なんと言ってもみーこがないのは最高だ」

「そうか？ 調子が出ないようなら呼ぼうかとも考えていたのだが……」

「呼ぶな！ いいか、絶対に呼ぶなよ？ あと最近主人への敬意に欠ける鈴蘭もだ！」

「分かった分かった。じゃ、時間になったらまた」

「ククク、ああ、わかっているとも」

うむり。相変わらずのようで何より。

一つ手を振り、その場を立ち去る。

何か背後から「軍曹、切つて良し!!」という声とか、「了解であります、主さま!」とかいう声とか、あと何やら魂から絞り上げるような絶叫が聞こえてくるが、まあそれもいつもの事だ。うん、後でみーこさんに鈴蘭、リップルラップルとドクターも送ろう。さびしがり屋の伊織は喜んでくれるだろう。

※軍曹大好きです。そして伊織の時々なヘタレ具合もだいすき。

シーン：謎

ここは神殿だ。まあ本当に神を奉る社というわけではないが、ようはそれに籠るのと同じくらい魔術師にとっての恩恵が大きいという事。

杖を一振りする。

遠見の鏡の向こう、足を踏み入れた侵入者達に四十二もの魔術的束縛が降りかかる。

杖を一振りする。

手足が萎え、思考が朦朧とし、体内の呪力を乱され、身動きができないよう石の縄で幾重にも縛られた侵入者達。いや、もはや判決を待つ罪人か。彼等の腰の高さで、部屋の空間が五十センチだけずれた。断面から飛沫上がる血液に空気までが赤く染まった。

杖を一振りする。

死体となった彼らを縛っていた呪式へ干渉する。魔力は一斉に飛

散し、新たな命の下に死体へ染み込み、魔術的に徹底して破壊し駄目を押す。急速に消え行くオドを喰らい、魔術的な回路や概念を引き剥がし、最後は石造りの床を通って神殿へと還っていった。

杖を一振りする。

最後の命令により、奥の部屋から小鬼が駆け出してくる。鬼達はまだ暖かい死体へかぶり付き、血で喉を潤しつつ脂肪と臓物に舌鼓を打つ。

「こんなところか」

神殿としての迎撃機能は始めて使ったが、どうやら上手く働いていないようだ。ぶつつけ本番で使うのは良くないのだが、まあタイミングが良かったって事で。一つ頷いて部屋を出る。食材の用意と下拵えをしなければ、今晚の夕飯が悲しい事になってしまう。部屋から出る前、鏡の向こうで小鬼が切り取った頭を逆さに抱え、首から手を突っ込んで灰色の脳味噌を掻き出し、満面の笑みでしゃぶっているのがチラリと見えた。

※使うかもわからないまま、思いつきで書いてた部分ですね。何気に空間ズレが凶悪。外部から力をかけ、作用として起こすズレだから対魔力とか関係無しか考えてたり。

シーン：同じく謎

「なぜ『抑止の守護者』と呼ばれるかわかりますか？ それは彼らが世界と霊長類の守護者であり、その絶対的な力でもって抑止力となる存在だからです。抑止力とはその巨大な力をもって戦えば死ぬと示し、それをもって抑制するからこそその【抑止力】。守護者は必ず世界の敵を絶対的に上回る規模で現出します。勝てるかもしれない、勝て

る可能性が一パーセントでもあるかも知れない、そんな生温い存在ではないんですよ」

シーン：衛宮との会話

「ならば問いかけよう、衛宮士郎。

聖杯を破壊し、聖杯戦争そのものを終わらせるか？」

「当たり前だ。こんな殺し合いで願いを叶えようなんて、誰が何と言おうと絶対に間違ってる」

「うんうん、打てば響くような反応だな。

だがまあ、俺はこてこての正義の味方ってイメージが『大嫌い』なんでね。

少しばかり、ものの裏側ってヤツを教えてやろう」

二つ並んだ怪訝な顔を尻目に、底意地の悪い笑いを浮かべて喋りだす。

「汚染され、現在の自我を持った聖杯。その原因は第三次に召喚された『絶対悪』の因子を持つサーヴァントだ。彼は英霊として呼ばれたが、別に英雄というわけではなかった」

「……どうということだよ？ 英霊のいる『座』は、そもそも英雄だから招かれるんじゃないかなかったのか？」

そう。

それは当たり前前の疑問だろう。

「まあ最後まで聞け。

男は確かに偉業こそ成し遂げたが、それは彼自身が何かしたわけじゃない。彼の一生は、土着の宗教か何かか、とにかく生まれた時から全ての悪の原因とされて閉じ込められ、ただひたすらに苦痛と闇ばかりを与えられ、日の目を見る事さえ無く死んだだけの、それだけの事だったんだから」

「ちよっ、ふざけるな！ なんだってそれが偉業になんかなるんだ!？」

激昂する衛宮少年。

彼にしたら正義の味方を目指す身として、悲惨な彼の人生はとても偉業と納得出来る物ではないだろう。

まあ当然の本人も、衛宮少年にそのように憤られても、彼自身、自分を悲惨と思えるほどの経験があつたとも思えんが……。

「偉業つてのは、彼の苦痛と彼が死んだこと、それそのものの事さ。

全ての「悪」とされた事でそれ以外を救い、死んだことで全ての「悪」の滅びを演出し、村という閉鎖された一つの世界を救った。

結果、彼は世界を救った英雄として「絶対悪」でありながら、英霊として座に招かれたわけだ」

はたから見れば残酷な話に士郎もセイバーも絶句した。

「そん、な…、そのような英霊がいるなど……」

「おや、仮にも王様として国を切り盛りしてたお人が何を驚いて？

綺麗事じゃ回らん事など良く知っているだろうし、その手で似たような事など幾らでもしてきただろう？」

「ぐっ…」

小さな呻きが、指摘が的を射ていたことを知らせる。

そもそもだ。

清廉潔白で高潔な騎士の道と、詐術謀術を張り巡らし、切るべきを切つて救うべきを救う、その選択を担う王の道はどう考えても重ならない。

考えてみれば、そこらへんが明確にアーサー王の人気と後の失落を表しているのかもしれない。そんな気がする。

「王なら『必要悪』など馴染み深いものだろう？ いちいち小うるさく騒ぐな。」

——だが衛宮士郎、お前（正義の味方）が倒そうとする聖杯（悪）はそういう物だ。間違いは無い。何せ、世界その物がアレは「悪」であると認めているのだから」

一つ息をつく。

徐々に頭の芯まで理解が染み込んでいく表情を眺めやり、鼻で笑い嘲りながら言葉の刃を突き立てる。

「さて。」

改めて、衛宮士郎に問おう。

あの罪科（つみとが）の無い男が宿る聖杯を、お前（正義の味方）はあつてはならない物（”悪”）として破壊（殺害）するのかわ？」

それは決る言葉。

彼の否定した弓兵が、かつて幾度も選び、その心を磨耗させた猛毒の選択。

一人を切つて多くを救うか、多くを切つて一人を救うか。

『選ぶ』という行為の天秤に “他者の命” という錘が乗せられた時、彼はその天秤を傾け、支柱を支える事が出来るのだろうか。

「おいおい、悩む時間なんて欠片も無いぞ。

今すぐどちらか選ばなきや、それほど迷う大切な両方を共に失う事になる」

シーン：セイバー

セイバーの胸中を、かつての敵より告げられた言葉がよぎる。

『なあ小娘よ。いい加減にその痛ましい夢から醒めろ。さもなくば貴様は、いずれ英雄として最低限の誇りさえも見失う羽目になる。――

――貴様の語る “王” というユメは、いわばそういう類いの呪いだ』

我が絆こそ至高の宝具と高らかに謳い、誇った巨躯の “王” 。

その在り方へ覚えた、心からの羨望。

かけられた言葉に覚えた、焦りにも似た感情。

（ああ）

いけない。そう弱弱しく叫ぶ理性を裏切り、心が膝を折る。

（たしかに、これは呪いだ）

手の平から幻想の結晶たる黄金の剣が零れ墜ち、地にぶつかって澄

袈裟切りに切りつけ、一文字に切られ。

剣を絡めて腕を裂き、弾き飛ばされ脚を割られる。

砕けた互いの剣気が飛散し木々と大地を抉り、暴風の如く荒れ狂うキルゾーンから鮮血が血霧となって吹きすさんだ。

三度鋭く奔った剣閃。

ひとつふたつと弾き、三つ目を押さえる様に流しながら地面に突き立てる。隙。踏んで動きを止めつつ蹴りを叩き込む。軽鎧の腹部に突き刺さる。めり込ませた足を地に下ろしざま、そのまま両断せんと横一文字に薙ぎ払った。が、辛うじて敵は得物を体の前に滑り込ませる事に成功する。

かまわない。

剣を野球のホームラン打者ばりに力任せのフルスイング、強引に振り切る。

剣にあるまじき扱いに、黄金の剣が折れそうな軋みをあげて震えた。

代わりに敵がまるでフルスピードの車に撥ねられたように、景気良く空中へ撥ね飛ぶ。あれだけの衝撃で獲物を手放さない根性を称えるべきだろうか？ だからといって容赦はせんが。

「エクス」

勢いに任せて一回転、なぎ払った刃は下段へ。

追う必要も無し。それで追撃の準備は済む。

背に回された黄金の剣身は投げ与えられた魔力を貪欲に飲み込み、吐き出された光芒が剣身に収束、傲慢不遜な輝きを放っている。

『——天 剣 技——』

ひとつ踏み込みながら、もはや光の柱となった聖剣を逆袈裟に振り上げた。

「カリバー」

『——霞 桜——』

※なんかスゴイことになりそう。レーザー五月雨切り。宝具つて一工夫いれると有用性が跳ね上がるんじゃない？ という思いつき。

設定：メドゥーサの変身設定

《鮮血神殿》と対になる宝具、魔眼を封印するのに使用していた《暗黒神殿》ですが、アタラクシアの方で原型がメドゥーサの首を包んだ『キビシスの袋』であり、裏表をひっくり返すというのを概念的に”外”と”内”を入れ替えるとかけた宝具とかなんとか……たしか。

ですので、サーヴァントという枠に詰められた外側を”外”と、核として内にある魂、その本来の姿を”内”として『キビシスの袋』でひっくり返した、という強引設定でした。

他にもそうですが、原作の知識がうる覚えという点で確証の無いまま思いつき設定が氾濫しています。悩ましい……

データ：未登場サーヴァント

【クラス】アサシン

【マスター】黒川冬理

【真名】赤神楼樹《アカガミ・ロウキ》

【性別】男性

【属性】中立・善

【筋力】 C 【魔力】 E

【耐久】 A 【幸運】 B

【敏捷】 A+ 【宝具】 A+

【クラス別能力】

■気配遮断：A+

最高ランクの気配遮断能力。

完全に気配を絶てば発見することは不可能に近い。ただし自らが攻撃態勢に移ると気配遮断のランクは大きく落ちる。

【保有スキル】

■殺しの才能《センス・オブ・マードー》：EX
アサシンが生まれ持った唯一の才能。

彼の全ては『他者の殺害』に適合している。

他者への攻撃という一点において“どうすればいいか”を本能的に選択するスキル。

【宝具】

■逃れられぬ死神《アンノウン・テラー》

ランク：C

種別：対軍宝具

レンジ：1～99

最大補足：7000人

一週間で一国の軍隊七千名中、約千名を暗殺し、化物、死神と恐れられた逸話の具現。

気配遮断スキルにおける攻撃時のランク低下を防ぎ、さらに殺害した対象を核として、同陣営に『恐慌』の精神汚染を伝播させる。ただしサーヴァントクラスには通じない。

また、翻って民衆には革命の英雄と称えられた事から、精神汚染の伝播と同時に自軍に対して士気高揚、ダイス補正の恩恵をもたらす。

■凶器を選ばず《マードー・オブ・ウエポン》

ランク：C

種別：対人宝具

レンジ：—

最大補足：1

手にした物に最低限の神性を付与する宝具。

彼は生前の戦いにおいて、ほぼ全ての武器をその場や敵から調達した逸話から。

ビンの破片などにもEランク相当の神性を与え、敵の武装の場合はニランクダウンした能力で彼の支配下に移る。それらは常時発動以外の能力を行使できない。

■ケモノガリ

ランク：A+

種別：対人宝具

レンジ：1〜50

最大捕捉：1人

赤神楼樹が生前名乗った呼称であり、彼の象徴と言うべき宝具。

『クラブ』と呼ばれる”マンハント”を目的とした権力者の集まりが、娯楽として開催した”狩り”と呼ばれるマンハント・ゲームに巻き込まれた事を契機に、世界中の『クラブ』参加者を人ではない”ケモノ”とし、それを逆に狩り殺す”ケモノガリ”として駆け抜けた生き様の具現。

悪の属性を持つ存在、民衆に対しての弾圧や、殺人に悦楽を覚えるといった一般常識と照らし合わせて悪逆とされる存在に対し、因果律を操作し殺害権を得る。もつとも権利を得るだけで、実際に殺害するには自身の行動で成さなければならぬ。つまり殺害目的で攻撃を加えない限りまったく意味の無い宝具。逆にそのため異様に燃費が良く、A+という破格のランクでありながら負担がほとんど無い。

この宝具によって改変された死の運命から逃れるには、同ランク以上の運命操作による干渉が必須。

【武器】

■無銘（ククリナイフ）

ランク：C

マンハント・ゲームにて『クラブ』側の施設から奪った大型鉞。

銘は無いがかなりの業物で、以後彼の腰に下がる事となる。

無銘に関わらずランクが高いのは、ひとえにこの刃によって命を断たれた人数が並々ならぬ数であるため。

■無銘（弓）

ランク：E

敵から奪った木製の強弓。

彼と同じ才能を持つマンハント側の”娯楽提供者（エンターティナー）”『ロビン・フッド』の作成した、ロビン・フッドの魂が宿るという弓。魔術的な仕掛けなどは無く、自己暗示とトランスによって高性能ライフルを上回る性能を発揮した。

が、彼の手に渡ってからはたんなる弓として活用された。

※ガガガ文庫出版『ケモノガリ』より、主人公の赤神さんを。

遠野志貴と重なるキャラクターですね。この方は才能開花前は一般人でして、固有スキルなんぞといった上等な物は一つしか持ち合わせてません。なにせ他の才能無いですから。

宝具は補助型メインで。

ご大層な真名開放とありません。なんせ暗殺者ですから。

一見して色々強そうに見えるんですが……実はまともな攻撃系が一切無く、悪辣な敵以外は暗殺するか『たたかう』コマンドだけで勝たなくてはいけません。あな恐ろしや。総合的に見てとてつもなく”死に辛い”サーヴァントですね。さりげなく魔力が底をつけてますが。

ろくでなしには天敵とも言える無類の強さを発揮する反面、英雄らしい英雄には決定打を持たないという、聖杯戦争には向かないサーヴァント。特にセイバーのような高レベルの直感スキル持ち相手は暗殺が難しいことから、極めて勝率が低い。マスターを狙えばいいけど、それも対象が良い人属性だと本人的にNG。

第肆章 01 家出とな？ (???)編

「飲まず食わずでも死ぬ事はありません。

気が済むまで放っておきましょう」

ある人物の台詞

「ああ、夏樹には絶対に言えん失態だ……」

毛布にくるまってもう三日、俺は未だ立ち直れずにいた。

ここまで腐っているのはひとえに可能性が無かったから。

俺が目的成就のために取っていた方策は世界側の許容範囲を増やすという方法だ。ようは受け皿を大きくするというものだが、これが例えば『大きさに関わらず受け入れる特殊な世界』や『何かしら例外的に俺個人を受け入れ可能な世界』といった方法なら、事はここまで問題にならなかつたらう。

しかし現実には残酷である。

というか、俺が残酷なほど馬鹿であった。

こうなつては今までのアプローチは全くの無駄、とまではいかないまでも、かなり逆進している事だろう。うん、無駄といつてもいいか。「もつとも次のアプローチは決まっているんだがなあ……」

こうなれば、いつそ自然発生するのを待つなぞ悠長なことを言っておらず、最初の部分だけでも自分で創ってしまえばいい。

しかし、今はまだそこを開き直るだけの気力が無い。

そうだろう、なにせ千五百年近く続けた頑張りが見当外れだったのだ。ちよつとくらい無気力になって引き籠もつても仕方ないだろう？ もつともそれも今日で三日目。いい加減そろそろ立ち直らなくてはならない。

(———そうだな。いつそ気晴らしに出てくるか)

一週間ばかりこの世界の時の概念を”停滞”させておけばいい。ヌル以外は観測出来んだろうし、それだけあるなら気分転換にはな

る。

思い立ったが吉日。

すぐさまヌルに一方的な通知を送りつけ、即座に返ってきたメッセージを見もせず意識の端のゴミ箱へ放り込み、さっさと大樹へと跳ぶ。

「適当で良いだろう」

最低限現時点で大規模な争いが無く、自然が残る風光明媚な地である事が好ましい。ささくれ立った気持ちを鎮めに行く先が戦地では、鎮まるものも鎮まらないだろう。検索条件に該当した多数の葉から最も近い世界を選択し己の欠片を落としながら、この外世界の時間軸を正確に一週間分引き伸ばす。

さて、いざ行かん。と思ったとき、ちょうどまた一通メッセージが届いた。

ヌルからだ。

さつと目を通す。

「は」

小さく笑ってしまう。

どうにもな。”気が済んだら帰るように”とは……あいつは俺の親か？ いや、自分の親なんぞまともな記憶すらないが。まあいい。お墨付きが出たからには気兼ねなく行くでしょう。

「じゃあ、行ってくる」

誰に聞こえるという訳でもない声量。

だがヌルの他にも住人が増えた場所だ。少し影の射した意識が物珍しく感傷なんぞを呼び起こしたから、ずっと昔に言ったような気がする言葉が口をついて出たのだった。

「ふむ。……それなりに良さそうだな」

ぐるりと周りを見回し、大きく息を吸い込んで吐息を一つ。石油を燃焼させた匂いが少しも混じっていない、純粹（ピュア）な空気の匂いだ。

簡易走査では周囲五十キロメートルに人工物は無い。大気もこの様子となれば国単位の広大な範囲が手付かずなのは確かだろう。これは良い場所に当たったようだ。

「キャンプは此処として、水源はあっちか」

この場所はちよつとした空き地。森の中ではそうそうこんな場所はないのだが、よほどでかく梢を広げていたのだろう、中央に巨大な朽ちかけた倒木と途中でへし折れた木の幹があつた。これのお陰で周囲の日光と地力が占有された結果、その範囲では強靱で小さな下草か苔程度しか生えていないのだ。

折れた幹の脇をテントの設営場所とする。随分と地面が根っこでゴツゴツしているが、これだけでかい木になると横たわるなるならともかく、根っこ根っここの間に座って寄りかかるようにすると結構しつくりしたりする。まあ、ある程度以上鍛えてる人間でもなければ痛くてたまらんだろうが。

それに樹のすぐ脇というのは根っこがある分、他所よりも地面が高い。ほんの十センチやそこらだが、雨水が溜まらないというのとはとても重要な点である。テントの下面付近は水に漬かると結構浸水するのだ。よって、場所決めにはその点も注意が必要である。

地面にシートを一枚敷いてからテントの組み立てを開始する。随分と愛用している野営道具一式のテント、その支柱をインナーテントに通しつつ手早く組み立て、インナーテントの端っこをペグという金属ピックに引っ掛け、張るように地面に打ち込む。後は頑丈・防水というフライシートを包むように被せ、同じくペグで固定してから、一番下に敷いたシートのはみ出た部分をフライシートの下へ仕舞えばそれで終わり。

工具も要らず、慣れてしまえば一人でもあつという間に立ててしまえる。本当に便利なもんだ。

中に毛布を一枚敷き、その上で少しばかり寝転がる。

目を閉じれば、遠くで鳴く鳥たちの声や風にざわめく葉ずれの音、蟲の鳴き声に動く音、沢山の生き物の生み出す音が素晴らしく情感豊かに耳をなでる。

(ああ、これだけで来て良かった)

癒される、だなんてしみじみと思ってしまうのは、やはりこういう原始的な場所から長いこと離れていたからだろうか。

さて、と身を起こす。

暗くなる前に飯を用意しなくてはならない。生成した品なら幾らでもあるし、それこそ今造ろうとするなら何でも用意できる。しかしそれではあまりにも風情がなかった。ここまで来てそんな真似は”粹”じゃない。まあ”粹”かどうかで腹は膨れんが。だからこそ早めに食料の確保に動かなくてはならん。

水場の方角は簡易走査で分かっている。

適当な小石をポケットに幾つかつつこみ、真っ直ぐな枝を細いのと太いのそれぞれ捜しながら森を進む。

枝は意外と良さそうなのがある。朽ちたのは流石に嫌なんで、立っている樹からなるべく切った方が樹に良さそうな枝に限定して剣鉞ナガサで落とし、歩きながら少し削った。

時々立ち止まり耳を澄まし、そして小川につくまで二度、小石を投げ放った。尋常ではない力で放たれた投石は、小さな質量に速度という大きな力をもたらす。二つの小石は木々の間とすり抜け、茂みの葉っぱを貫き、五十メートルは遠い小さな獣をそれぞれ打った。

仕留めた獲物は猫ぐらいあるリスみたいなのと、地面の穴からちようどん顔を出した狸の仲間のようなもの。一人で食うには十分な量だ。枝の先に吊るしてぶら下げ歩く。これは汚れないためだ。死ねば筋肉が緩み、生き物は皆腹の中身を垂れ流す。だからこうやって体から離して運ぶ。

やがて小川が見えてきた。山岳地帯という訳でもない様だが、まるで源流に近いような小さく澄んだ流れだ。少し謎だが……まあ綺麗な分には都合が良い。

平たい石の上で二匹の頭を落とし、毛皮を剥いで腹を開き内臓を掻き

出す。どうやら調べたところ毒も無く肉質はやわらかい。難点は大ききだが、人間の食用に向いている生物だな。食性も狸の方ともかくリスっぽいのは木の実なんからしい。

大雑把に切った肉へ取り出した岩塩を擦り込みながら、血の滴る肝臓を口に放り込んだ。

咀嚼する。

うん、どうやら味は期待できそうだ。

石で風通しを考えて簡単に組み、簡素な、しかし割と大きめな竈かまどを作る。燃料はそこに乾いた流木の小枝が随分とあるから、それをさらに短く折って重ね、枯れ木の樹皮なども挟んで使う。樹皮の余りは念入りにほぐして乾いた枯葉と混ぜてボールを作った。樹と一緒に見つけておいた一メートルちよいのツタの先にくくりつけ、一箇所窪みを空けてから取り出した火打石を擦ってそこへ火種を落とし込む。後は簡単だ。

ツタを持って軽く回す。先端のふわふわなボールは空気を良く通し、あつという間にボールが火の玉になる。そいつを竈にくべて火種にすれば、水を沸かすのは造作も無いことだ。

最初の鍋は水に重曹を放り込み、沸騰したら毛皮を突っ込んでおく。こうして毛皮の脂を徹底的に落しておいて、後でなめすのだ。脂質を落すことによつて細菌の繁殖が抑えられ、腐ったり組織がやられて毛がバサバサ抜けたりといった事態を予防してくれる。

ま、それでも鼠はともかく湿度とか油断すると蟲が湧くが。

復活した腹立たしい過去の出来事の記憶を念入りに再殺する。

沸騰するまでの間にもう一つ竈を作っておかなくては。

もつとも火は隣から借りればいい。石を組んで火床を整えるだけなら手間も時間もほとんどかからない。

二つ目の竈は食事の煮炊きに使う。鍋に水を汲んで掛け、そこへ鉈で断ち割った二つの背骨を出汁として入れる。味を見ながら出汁をとり、沸騰したら鍋からあげて適当にそこらへ。この骨も状態が良ければ後で釣り針か何かに……ほっそいから無理かね。

細裂いた肉とそこらで見つけたイけそうな野草を入れ、先程の岩塩

をナイフで少し削って落とし込む。さつと湯に新鮮な脂が溶け出し、さつきまで生きてた肉が綺麗に白く茹で上がってゆく。捌いた際に引きずり出した内臓も、食べそうな部分は血合いと一緒に鉋の背で叩いて潰し、肉団子にして放り込んだ。これを入れると若干血生臭かったりするのだが、生きるための栄養という点では非常に助かる。

まあ、匂いも臭み消しの野草が見つければ解決するのだが。

明日あたり探してみようか。そういうのも探せば意外とあるものだ。

灰汁を取り、どれ、と脂の浮いたスープを啜ってみた。野味が強く、都会人では食えたもんじやないと言うだろう。間違ってもあの姉妹あたりには出せないが……

「——うん、悪くない」

思わず口元がほころぶ。悪くない。こういった場所では十分以上にご馳走だ。まず肉なんてとれないんだから。残りの半分も本当はもっとしっかりと血抜きをして塩を擦り熟成させ、下拵えにも時間をかければずっと美味しい味になるんだが、それは次の機会にしよう。

狸もどきにしろリスっぽいのにしろ、どちらも地球なら多産の種だ。同じような身体をつくりをしているならおそらく似たような生活をしているだろうし、生態系の頂点でもなければこの広大な森ならかなりの数が期待できる。期間は一週間だし木の実や魚、他の獣もいるだろうから、食う分だけ狩って精々が数匹ですむだろう。生態系にはそれほど影響はない。

(本当に良い場所に当たったものだ。羽伸ばしにはありがたい)

鍋をかき回しながら予想外の幸運を喜んだ。

それはこの世界に来て三日目だった。

こんな森では日が落ちると人の目では何も見えなくなる。それは基本的に人に準拠した構造をとっている俺も同じこと。つまり、まったく何も見えない、真つ暗くらになって見えなくなる。まあ見えるようにすれば良い話なんだが、わざわざそんな手間かけんでもさっさと寝て、それで夜明けの太陽と一緒に起きた方がなんぼか楽である。

で、肉の仕込が終わったあと早くにテントへ潜りこんで寝て、一時間か二時間ほど過ぎた時だった。

いきなりテントの外から強烈な光に照らされた。

なんで!? と起きたが、テントの生地を透かして見える光の光源はどうやら空らしい。”光”だけを当ててくるようなのは人の類くらいしかない。『あく、もしやしてここは国立公園か何かだったのか』と、どんな世界なのかも知らぬまま悩む。もしも懸念通りだったら、最悪羽を伸ばす先が留置所になってしまいかねないだろう。

どこにもかくにも、外に出てコンタクトを取らねば話が進まない。面倒だが、と入り口のジツパーに手をかけたところで空間転移の反応。数は二十四、テントを囲むように空き地の端いっぱいに現れたようだ。遠距離攻撃が可能なら一方的に攻撃でき、かつすぐ後ろの木立ちを盾にもでき、いざとなれば森にも逃げ込める明らかに戦闘を考えた配置。しつかりテントを結ぶ射線も交差しないような、撃つ事を前提とした位置取りだ。

密漁が横行している場合ならこれだけ殺気立つのも分かるが……いよいよもって重要保護区だったかと首をひねると、上の光源から拡大された声が降ってきた。

『こちらは時空管理局 第83哨戒分隊です。そちらからロストログア級の魔力反応を確認しました、同行願います』

その声は鼻屑目にもみても、少なからぬ緊張と敵意を持っていた。

第肆章 02 とある局員の不幸（とてもリリカルと言えない編）

時空管理局所属次元航行部隊、通称『海』所属、航空武装隊員ベステイ・アグリフ空曹は今不幸の絶頂にあった。

始まりはちよつとした事故からだつた。

戦闘部隊である武装隊の中でも適正が必要な空戦を主として鍛えられた戦隊、航空武装隊。その一種準エリート的な集団に功績を認められて抜擢され、喜び勇んで赴いた初任務でまったくの偶発的に起こつた事故。最悪だつたのは自分がそれに巻き込まれたという事だ。

結果として建築物三棟にそれなりの被害が及ぶ事態となる。事が不幸な偶然で起こつた事故とはいえ、だからお咎め無しとはいかないのが軍隊の常。半分無理やり捻くりだした様な責任追及が行われ、降格されるような尉官も無く配属直後だつた事も併せ、幾つかの軽い罰則と三ヶ月の哨戒任務に回される処分となつた。

『海』の哨戒任務といえば暇と面倒の代名詞。

哨戒とか言っておきながら哨戒艇一隻の担当範囲が管理外世界の惑星一個とか普通にある辺り、どれだけ時間を使うかが分かるだろう。実際やってみてうんざりした。次元航行艦に搭載された哨戒艇で宇宙からざつと探査すりゃいいんだが、それにしただつて長時間かかつて大抵は何も無い。

こういった管理外世界の無人惑星は犯罪者からすれば隠れ家に絶好だから（もちろん次元航行手段を持つ大組織などだが）、一応の警戒とアピールの為にパトロールがいるつてのはベステイにも分かる。だがそれでも『次元世界を管理するつーお題目は結構だけど、いい加減お上には現場の無茶振りを本当に何とかしてほしい』とか、ついついそう腐ってしまった。

この任務に着いて一月が過ぎる頃になると僅かばかりはあつた緊

張感など賭博場帰りの財布並みに軽くなり、哨戒専任の（ようは）武装隊として使い物にならない”厄介者）隊員と持ち込んだ娯楽に励むようになっていた。任務？ 艇の機械が自動でやってくれる。頑張ってきたのに運が無かったなんてうそぶいて、訓練も半端に本を読んだりカードゲームに興じたり。

そんな気持ち的にドロップアウトしかけていたある日、最悪の事件の幕は上がった。

「あ、なんか鳴ってますよ？」

「めんどくつせえなあ。どうせ今回もハズレだろうに」

扉の向こう側にある操縦室から聞こえてきたアラームにベステイはカードから顔を上げ、ゲームの相手へ声をかける。五月蠅そうに眉を顰めながらも聞こえないふりしていた壮年の専任は、それでようやく重たげに腰を上げた。

いかにも面倒くさそうにノロノロと歩いていく。一応とベステイも操縦席へついていった。

「——オイオイ、何の冗談だこれ」

と、先に席について計器を覗いていた専任が引きつった声を上げた。た。

ここ一月で聞いた事も無い声に驚き、ベステイも慌てて計器を注視した。

そこに示されていたのは、仮にも武装隊を数年勤め修羅場も経験した事があるベステイをして度肝を抜かれるモノだった。

「なん、だよ……この数値……！」

魔力反応を示す計器。上空へ転移させたサーチャーと呼ばれる子機が拾った大量の情報、その中にあった一つの高魔力反応。茫然自失から数瞬置いて抜け出したベステイが幾つかのサーチャーを更に介して情報を収集し、解析する。

魔力反応の値は広大な森の中から発生していた。普通なら魔力を持つ野性生物だろう。リンカーコアを持つ生き物は次元世界のそこかしこに腐るほどいる。が、そういった生物とは魔力量の桁が大きく

違った。

最新鋭の超大型次元航行艦にしてこの哨戒艇とベステイ達の家である艦隊旗艦、XV級次元航行艦（エレンティア）。前に機関部の連中が酒の席で自慢げに吹聴したそのエンジンの最大出力がベステイには霞んで見えた。

余談だが、時空管理局ではそこら辺の情報規制がかなり緩い。

エンジンである魔導炉の製造を握るのは管理局の本部があるクラナガンに本社を置く会社ばかり。局に逆らうような輩に設計図が漏れれば、それだけでどの会社かがばれる。何より大衆や一般職員の名目には正義の組織とあるから、時空航行艦のような目立つ大物では暗黙の裏取引でくくくなんて黙認も通じない。

加えて製造に必要な希少金属なども、鋳床が惑星ごとまるまる管理世界に指定されている。採掘も販売も、局の許可無しでは一切認められていない。

これだけの条件があり、かつアンダーグラウンドに潜む非合法組織を除き、表立って管理局に楯突けるだけの規模の組織が無い事も原因だ。非合法組織は次元航行艦のような超大物を建造するだけの土台を用意するのは難しく、隠し通すことは更なる困難である。それに一隻二隻では火に脂を注ぐようなもの。正義の名の下に容赦なく駆逐されるだろう。

よって、艦を運用する人員などがスペックを少々漏らす事に目くじらを立てるような空気は、今の管理局では無いのだ。

「ありえない、これ、なんでこんな」

ベステイがいくら否定しようと次々に解析結果は上がってくる。そのどれもこれも信じられないものばかり。中でも驚愕したのはこれだけの反応を、次元を跨いでとはいえ、駐留艦隊が察知できなかった理由だ。

反応の規模が異様なまでに小さく、そして完璧に整っている。

これだけの魔力量を持つならどう考えても相応に巨大な存在でしかるべきだ。次元航行艦なり竜なり、見合った大きさを持つのが当た

り前で常識だ。

問題の反応はサーチャーの走査結果、魔力が一点にまるで凝縮されたように固まっていた。これが危険度がS級などの超危険大型生物なら、魔力で巨体を支える関係上、リンカーコアを中心に体全体から高魔力反応が検知される。一目瞭然だ。

それに何より莫大な魔力はそれだけで周囲の魔力を少なからず引き寄せ、またかき乱して広大な範囲に魔力の乱れを生み出す。本来ならそういった現象があるはずなのだ。だがこの謎の魔力反応は一切それが無い。

無作為に開放しただけで次元の壁を突き崩し近隣の次元世界も纏めて滅ぼしそうなエネルギーが、少なくとも計測した限りでは完璧に制御されている。

「となると、これは……」

そう。

ベステイも専任もこんな現象を、人知を超えた空恐ろしい規模の現象を起こしかねない存在を知っていた。

「——ロストログア」

送られた報告は次元を隔てた管理世界に停泊する駐留艦隊へと届けられた。

報告に添付されていたデータを見た艦隊提督は、そこに示された過去の次元崩壊事件の原因ロストログアをも大きく凌ぐ魔力数値に絶句した。その後すぐさま一刻の猶予も無いと判断を下し、本局へデータを送信し過去にロストログアとして登録された遺物かどうか照会を要請すると同時に、もし記録が無ければ特一級ロストログアとしての登録申請を行った。

一方ですぐさま戦力が召集された。即応体制にあった部隊の中で、艦隊所属の武装隊の中でもストライカー級と呼ばれるエース率いる部隊が先行として急ぎ現場へ送り出された。

L S級次元航行艦へトリスト。艦隊所属の戦艦で全長163mと旗艦へエレンティアの340mより遥かに小さいが、その大きさでありながら大気圏内でも高い機動性と躁艦性を併せ持つことから、優秀な戦闘艇として危険な現場へのアプローチに使われることが多い。今回もその例に漏れず、腹に完全装備の武装隊31名を抱えて惑星へと降下した。

「反応はこの先か」

この星での時刻は夕刻を回っている。

とうに日が落ちた視界は夜の闇に塗り潰され、眼下に広がる大樹林も武装隊の隊長には碌に視認出来なかった。

今のところ唯一の目印は一報を送ってきた哨戒艇が出したサーチャーからの情報のみ。物が未知の遺物と予想されるだけに、下手な影響を与えかねないアクティブな探査は全て許可されず、パッシブな魔力感知だけを元に問題の地点へと向かう。

総員が改めて魔法を使うための生命線へデバイスへの点検を終えた頃、通信が入った。

『ポイントへ到着。魔力反応は未だ極めて安定した状態を維持。……やはりこちらの計器では原因は判明しません』

「そうか。付近に何か変わった物は？」

『森に隠れて確認できませんが、少なくとも建築物の類はありません。地下は分かりませんが——ん？』

「どうした？ 何かあったか？」

『ええ。どうやら人のようですね、ちよつとした空き地のところにテントが張ってあります。反応も中心点のようすし、まず間違いはないかと』

「了解した。無人世界に居るとなると魔道師だろう、逃げられたら敵わん。すぐ出るぞ」

『了解しました。転送陣起動します』

武装隊の前に光り輝く魔方陣が現れた。

瞬間移動の転送陣だ。

「何が起ころかわからん、最大限警戒しろ。いくぞー！」

改めてぐだぐだ言わなければ弛むほど部下は青二才ではない。訓示もそこそこに飛び込む。

次の瞬間には問題のテントのある空き地の端に出た。

部下たちも全員無事転送されたようだ。互いが射線を避けるように最適なフォーメーションで油断無くデバイスを構えている。同時に上空から一気に〈ヘトリスト〉も降下し、艦下方に据え付けられた銃座が狙いを定めた。

全ての戦闘配置が整い、〈ヘトリスト〉の投光機でテントが照らされる。

『こちらは時空管理局 第83哨戒分隊です。そちらからロストログニア級の魔力反応を確認しました、同行願います』

台本どおりの声掛け。だが武装隊の面々も〈ヘトリスト〉の乗員もテントの中の人物が大人しく両手を挙げて出てくるとはこれっぽっちも考えていない。こんな所で次元世界が数個消し飛ぶような魔力を励起させているのだ、碌でもない目的があってやっているはずと確信している。なにせここは無惑星。そもそも薄暗い目的を持った犯罪者でもなければ寄り付かないような次元世界だ。次の瞬間にもテントを突き破って魔力弾が飛んできてもおかしくはない。

「……………」

しばし沈黙が流れた。

と、隊長の目の前、テントの入り口が揺れ、ジッパーが降りていかにも私寝てましたといった寝癖だらけで眠そうな男が眩しそうに両手を翳し、盛大に顔を顰めて出てきた。

「——意外だな」

意外にもあっさり出てきた対象に、隊長は思わずボソリとこぼした。

犯罪者の類にしてはあまりにもアレだ。いつ先制攻撃が飛んでく

るかど警戒していたのが馬鹿らしくなる格好である。しかしここで油断するような迂闊な真似はしない。油断無くデバイスを突きつけながら瞬時に思考をめぐらせる。

(こいつ一人か？ いや、テントの前の靴は一つ、油断は出来んが一人の可能性が高い。転移用にデバイスは持つてるはず。戦力は？ 身体つきはミッド系だが……)

そこへ彼のデバイス、AIで補助的な会話も可能なインテリジェント・デバイスから魔力を介したリンクで報告が入った。



隊長の表情が更に厳しくしかめられた。

一瞬これからの事を考えて頭痛がする思いをし、だが今やるべき事は変わらないと思い直す。

そして彼はテントから出てきた男へ声をかける事無く、即座に念話で隊員へ『捕縛せよ』と命令した。

次の瞬間色とりどりの魔力光のバインドが男へ投げかけられ、僅かな身動きすらも出来ないよう雁字搦めに空間へ縛り付けていく。

とにかく捕まえねばならない。

早急に無力化して管理下に置かなければ、何の拍子に世界が吹き飛ばか分かったものではない。次元世界数個の滅ぶリスクに比べれば、彼個人の意思などが在って無い様な物だ。

それに、意思を尊重すべき存在かも分らない。

なにせ相手は聞いた事も無い程に強力な“生体ロストログイア”候補なのだから。

三十のバインドにあつという間に縫い付けられて呆気にとられた様子の男を若干気の毒に眺め、隊長は自身も出来うる限り強靱なバインドを投げかけた。

彼のデバイスが言った。『魔力の発生源はテント内ではありません。この男性です』と。これほどのエネルギーを生体が保有するとなれば、まず間違いなく封印にはなるまい。徹底して無力化された挙句、あらゆる管理局の研究所で“魔法技術の発展”に協力させられる事になるだろう。

彼にしても長いことこうして局で働いていれば、そういった後ろ暗い話など腐るほど聞こえてくる。やれこの前踏み込んだ人体実験場は管理局がスポンサーだとか、あの犯罪組織には局のお偉方も噛んでるとか、拳句は自分たちの捜査の対象も”本当に重要な施設”から外されているとか。

そして馬鹿馬鹿しいと吐き捨てていても、やがて歳をとればそれなりに本当のところが見えてくる。隊長職も長くやれば上の圧力で捜査が邪魔されたり誘導されるなんてザラにある事だ。

ふと、自分は何をやっているんだろうと思ってしまうことも、ある。だが時空管理局が治安維持を担っている事には変わりはない。

綺麗事ばかりですまないのも、人間が清廉潔白でいられないのもよく分かる。

なら『仕方ない』。

そう飲み込むのが大人つてもんだ。

なんて彼個人の葛藤を他所に、事態は急変する。

ぱんっ

魔道師ランクB以上で三十一人。竜でさえも地に伏す程に何重にもかけられたバインドが弾け飛んだ音だった。

ごり……ミチイ……ッ

隊員の一人の頭が半回転し、肩と頭頂部をつかんだ両手の間で首がネジれながら伸びていく音だった。

ブチッ、ゴギ、ぴちっぴちちっ

首がだんだん伸びて、細くなつていつて、中で何かが千切れていく

を目に出来るかと不謹慎にも喜んで、結果として恐ろしく残酷なスプラッタを大画面で詳細に見てしまった。目を逸らせば良かったんだろうが、首が異様に伸びた人体が咄嗟に人間とは判断できないほど異形で、これは何だとしげしげ見てしまったのが過ちだった。

今もスピーカーで生肉を何かに叩きつける音が鳴り響いている。

叱声。

悲鳴。

泣き声。

少し前まで激しく鳴り響いていた攻撃魔法の爆音は、もうほとんどしない。

『早くっ！ 早く転送してくれえ！』

『馬鹿そっちは！』

『いギャツ、カツ……』

『転送は無理だ、さっきから魔力が濃すぎてまともな魔方陣が形成できない！ そこから離れてくれ！』

『無理だ、無理だ無理だ無理だ……なんで出れねエんだよお!? あ、ああああああやめえ』

『クリフはもう駄目だ諦めろ！ ガンマ小队は何としても壁を破壊しろ、空へ上がれん！ ヘトリスト、そっちでこの結界を破れないのか!?!』

『駄目です！ 艦砲でもひび一つ入りません！』

『泣き言言ってんじや……ああ』

『———たい、ちよう?』

そこからはもう……聴いてられなかった。

第肆章 03 F (とてもリリカルと言えない編)

「嗚呼、やつちまった……」

気分的にはスツキリして、握ったままだったモノを放り捨てる。

どちらりと音をたててくの字に曲がったものが転がり、暗い波が立った。

「ふう。どうすつかない、この有様」

周囲の惨状を作り上げた自身に若干呆れながら、動くものの無い辺りを適当に見やった。

十分ばかり前に張った逃走防止用の結界の中、地面のそこかしこは光の加減で黒く見える血に沈んで見えない有様だった。元は三十一人の人間。鍛え上げられたボディが三十一。平均80Kgとして血液量は約7〜8%。

計124Kgの血液と2,356Kgの肉片がぶちまけられた訳だ。

ふむと顎先をひねり、先程から懸命に砲撃を叩き込んでいた航空艦艇をみる。26次元の魔力(※1)を使用した結界を張った側とすれば億年経とうと無駄な努力なのは一目瞭然だが、知らず重ねられる徒労を思えば頭も下がる。

結界を縮小した。

テントを含む周囲へと範囲を狭め、同時にいろいと汚してしまつたモノも一緒に集める。

すると面が狭くなった分、かさが増える事となった。

粘性の高い液体がとぷりとぷりと波うち、黒の合間に脳幹、半分に裂けた肺、腸、手首や腿などが揺れて覗く。

「さて、——手っ取り早く聞くか」

何とはなしに掬い上げた脳を崩さないようにお手玉しながら、行き場を封じられた霊体を血の酒のあてのように摘んだ。

死者。

彼らに血はない。もう物に成り果てた顔に黒い目隠しをし、恨み辛

みをぶつぶつと呟くだけの亡者をことさらにゆっくりと咀嚼し、常識やその土台となる知識、経験から記憶と読み解いていく。

一人二人、どれもそれなりに教養レベルが高い人物ばかりだったらしく、四人目で大体の事情は把握できた。

「時空管理局ねえ」

無論、その組織は知識にある。どうやらここはアニメとして故国で放映された作品に極めて近い世界らしい。時間軸としては三期放映終了後といったところか。

(問題は訳も分らず体制に逆らった事)

この世界は一つの世界内に、次元別に分かれた多くの小世界を内包している。原典となる作品では『時空管理局』という組織が数々の世界を管理する立場に描かれていた。

この組織は、まあいろいろと問題も多く作品内で描かれた

第三部では今もトップを勤める創始者が全ての事件の大本、黒幕として存在した。

組織としては特に魔力至上主義とも取れる体制をとり、非殺傷兵器を含めたあらゆる質量兵器を、所持しているだけで逮捕という法を定めている。つまり戦闘力というステータスの基礎を完全に個人の才覚に限定する事で、むやみな戦力の拡散、武器の流出などを封じた形だ。

しかし、現状としては結果として、個人の魔法の才能に依存するがゆえに治安維持などの実働に足る実力者が足りず、魔力量さえあるなら十に満たぬ子供ですら生き死にのかかった戦いに駆り出すなど、非道ともとれる所業をで茶を濁している。

別に非道というのは、型に嵌ったように子供を戦わせるなど言っているのではない。

実際の経験として子供は戦いに向かないと言っているのだ。

身体、心、共に未成熟であり、純粋な性能として鍛えられた大人と比べ大きく劣る。これは誰もが領けるだろう。

以前にとある世界でこのような事があった。

ある軍人が子供の吸収・成長力に目をつけ、幼子を徹底的に軍事的

な事柄のみで囲み、子供の吸収力で”短時間でそこそこ”という戦力増強実験を試した。

事はある意味、成功だったのだろう。

ちゃんばらの棒の代わりに銃器が、パズルの代わりに爆薬が。

そして死んだ子供の代わりに、新しい子供が。

生き残りは反動の軽い狙撃銃やトラップを駆使し、それなり以上の戦果を挙げた。

そして敵に警戒され、現れたと知られるや否や、強引と云っていい勢いで距離を詰められ制圧された。殺され、軍人が目を背けるほど凄惨な拷問の果てに衰弱死し、廃人になり、薬漬けにされて小遣い稼ぎにウリをさせられ、安酒をかうはした金の代わりに売り飛ばされた。子供ばかりが数百人、大人の玩具として社会の暗がり横たわっていった。

確かに当初の目的どおり、コストに見合う戦果は挙げた。

だが生き死には戦場の習い、そう、済ませられない光景だったのを、まだ覚えている。

だから俺は、少年兵をつくる輩が嫌いだ。

戦場に年端もいかない子供を出すのは、目の届く限り許したくはなかった。

もつともこの世界がそうとは限らない。

むしろ違う確率の方が大きいだろう。

まっとうな良識が幅を利かせていけば、当たり前前に考える脳みそがあるなら、そういう事が起こりうる可能性は低い。

かつ、原典作品におけるこの問題点の根本は管理できないほど多くの世界を管理しようとした、いわゆる処理能力の破綻に端を発する。特に治安維持などは、かつても故国日本のレベルを要求し、特にそこまで”引き上げよう”となれば、どれほど人員がいても足りないくらいだ。

組織としてこの『超えられない障害と分かっていて突撃し、結果挾

まっつて出られなくなりました』的な問題を解決している、または最初から無茶に手を広げていなければ、しようもない事態には陥つてはいないだろう。その程度の頭を期待するくらいは、まずこの世界を信じてみよう。何も定かでない最初から目くじらを立てることは無いのだ。

さて、長くなつたがもう一つ、とてもありふれている問題がある。組織としての腐敗が酷い点だ。

構成員、特に上層部や技術開発陣などのバックヤードはかなり深く犯罪組織などと関わり、優秀ならば秘密裏に匿い研究の場を提供すらしているらしい。

組織としての年数は若く、百年も経っていない。事実三期の段階で創始者も生き残っている。

もっともそのトップ三人がまず作品にて『全ての次元世界を支配し、我々が導く』という連中と描かれ、原典作品についてなされた考察でも、時空管理局は元々彼らが別次元へ侵略するための組織として設立し、その大義名分として正義やらの耳障りの良い言葉が立てられたのだろうという説が語られていたようだ。

納得できる部分もある。

少なくとも他の次元文明に穏やかに接触しようという組織が、自分達の名前に『時空管理局』などとは名付けないだろう。ふつう同じ人間相手から”お前らの次元も管理する存在だ”と言われれば、第一印象からして喧嘩を売っていると思われかねない。

加えて所属人員の意識によろしくない影響を、具体的には自分が管理する立場なのだという自覚をもって、結果として管理相手を自然と見下すような態度となってしまうという事態を引き起こしかねない。

考えすぎかもしれないだろう。だが組織運営、それも大規模になるならそれなり以上に万難を排すべきだ。事が全ての看板となる名称なら尚の事。

そして何より経験則なのだが、『正義』を謳った武力を所有する組織は大抵そんなもんだ。というか『正義』の旗印は他者を押し潰すくら

いにしか役に立たない。

話がずれた。

、さて。この組織、成り立ちとトップがこうである。当然のように薄暗い事などいくらでもしただろうし、それは原典作品でも示唆されている。となれば動いたのは下の連中。自然と頂点の腐り具合が下にも伝染したと思われる。

憶測がほとんどだが、何より今喰った連中は、主にそれなりに歳とつたのは自らの組織の裏が真つ黒である事を承知していた。

……もつとも構成員の七割程度は真面目に警察業（らしきもの）に性を出しているのを考えれば、十分に社会の為になっている組織と言えなくもない、ような。

いや、トップやら中間の頭やらの中年連中がかなりダメなら大して変わらんかな？

「大組織に付き物の問題点の何がまずいかと言えば、そういう連中にとって俺は素晴らしい宝物か、忌々しい邪魔者か、どちらかにしか映らないって点なんだろうな」

どちらにしろちよっかいをかけてくるのは白熊が白いのと同じくらいだ。前者は身柄を手に入れる、最低でも技術を盗むくらいはしようとするだろう。後者は、こっちは盛大に逆らってきた罪人として、徹底的に叩こうとしてくるか。

——難儀で溜息が出る。

「現時点としては、逮捕権と裁判権を持った軍事組織に顔写真つきで目をつけられた、ってところか？」

軍事組織？

自分達の許しを得なければ武器の携帯を許しません。ただし我々は別。こういう組織は良い悪いはともかく、軍事組織も兼ねると言っ
て構わないかと。軍隊式の階級を使っているようだし。

判明した原因が（自分的には）些細な行き違いだったとはいえ、大人しく捕まれば確実に碌でもない事をしようとしてくるのは予測で

きる。……先に碌でもない事をしたのでは、という問いは耳に痛い。あの結界の張り方とか、強度を知ったからには間違いないと求めているだろうし、それ以外にも有益な物、情報、魔法を持っていると考えるのは当たり前だ。国家とかだと、それこそ国の利益を『秘匿』していた、けしからんヤツだと声高に叫びそうさ。

むう、捕まったら原典作品に登場したスカリエッティなる狂人の実験室へ送られるかもしれない。この身体に実害を加えるのは無理だろうが、きつと気分は宜しくないだろう。

「あ〜〜、どうしたもんか」

頭を抱えようとして握ったままの脳みそに気づいたりしているが、別にそこまで深く悩んでるわけではない。解決するだけ、それこそ波風無用と思うなら時間を巻き戻せばいい。それが出来るだけの能力を有しているのが現状だ。問題は無い。が……、

「そのクラスの世界干渉になるとな〜」

そう。本来ならともかく、現時点の分体ではちよつとばかり難儀なのだ。

元々一つの世界に入りきるように調整した分離存在、世界そのものの操作、それも根本的な運営システムで不可逆と設定されている『時間』を退行させるとなると、少しばかり無理をしなければ出来ない。

具体的には、あの過去の楽園であった事と同じ。

世界そのものへ同化し、意識を世界へ上書きして動かすのだ。

だが問題だつてある。

今の分体は当然この世界に破棄だし、世界と同化したら分離するまで運営として働かなきゃならない。休みに来て何故に働かねばならん。

もっとも煽りを食って殺してしまった彼らをこのままちやぶちやぶ言わせたまま、つてのはかなり気が咎める。特に三十一人ほぼ全員が、一般的に“善人”と称されるようなモラルを持っていたのが後ろ

髪を引いた。

——いつそ変なのが過半数を超えてたら後腐れなかったのに。

「いいか、ここで考えてばかりでは仕方もない。案ずるより生むが易し」

ようはさっさと休暇を終えてこの世界から出てしまえばいいのだが、折角の休みを切り上げるのは何か妙なプライドの様なものが邪魔していた。彼の弟である夏樹が知れば、ここら辺の変な意地は生前、とか人間だった頃と変わっていないとでも評しただろうか？

結局、一時間ほども散々頭を捻った割りにもどうするかも決めないまま、量ゆえに乾くことのない血溜まりを掻き分け、結界の外へと出た。どうやら騒いでいた航空艇は悩んでいる間に撤退したらしく、既に夜空には影も形も見えない。

黒川はくるりと振り返り、片手を振る。

すると森にたつ巨大で不透明な箱は、中に三十一人分を閉じ込めたまま、ぱたりぱたりと音を立て結界の構成魔力の存在次元である26次元の法則で折り畳まれていった。

ぱたり、ぱたり、ぱたり……

淡々と規則正しく立つ音。

ただ、先を見れば言葉を失っただろう。

音を聞けば折りたたまれているとわかる。

しかし理解できない、見ても分らない。

人は三次元に生息する生命体だ。

26次元などという世界を覗くのは、生身で深海五千メートルや宇宙空間で物を見ようとするようなもの。分らないで済めばありふれた幸運で、まともに見えたなら……それはとても運の悪い結末になるだろう。より複雑な次元というのはそれ程に異質なのだ。

ぱたん。

最後の一折り、転がったのは手の平に乗る小さな、曇りガラスで出来たような立方体だった。

黒川の鋼で出来た、今は人に偽装する機械の蜘蛛の指がそれを拾い上げる。

気も無さそうにくるりと指先で回転させ、虚空に開けた”穴”に放り込もうとして……、

「ライオットザンバー」

『Yes, sir』

飛び込んできた黄金の閃光から飛びのいた。

時空管理局と呼ばれる組織は、けして無能の集団ではなかった。

些か以上に積極的にオーパーツを数々の次元から収集し、それを分析、利用可能な技術があらば取り込むだけの柔軟性を持ち合わせている。それらの恩恵は非常に大きく、しかし出土した次元世界に還元される事はほとんどない。

穿った見方をするなら、管理局の一方的な成長とこれもするだろう。次元世界の下に降りるのは、企業でも精々民間レベルのもの。とても各々の世界が自衛を行える水準ではなく、たとえ業腹だろうと最終的には少なからず管理局の手を借りねばならない領分は多い。

そんなある次元世界の軍港に、時空管理局より近辺の次元世界管理のために派遣された艦隊は停泊していた。

白亜の巨艦がその威容を水上に横たえる中でも、一際大きな艦があつた。

艦隊旗艦、XV級次元航行艦〈エレンティア〉。

時空管理局の最新鋭戦闘艦として建造され、数ヶ月前に就航したばかりの新造艦だ。

その艦内は傷らしい傷も無く、清掃も行き届き、一部の趣味人が狂

喜しそうな造りも新品のように光っていた。

だが艦内でも運行に関わる重要な議題を話し合う会議室では、艦隊指令を始め、各艦の艦長から参謀が残らず揃って険しい顔をつき合わせていた。

「……やはり艦隊を動かすべきかと。最大戦力で当たらなければ先遣隊の二の前になるばかりです」

「だが相手はLS級の艦砲を苦も無く防ぎきる生体ロストロギア候補だぞ？ デカぶつが揃って行ったところで、まさかアルカンシエル（※2）で吹き飛ばすわけにもいくまい」

「私もそう思います。加えてもしあの巨大な魔力が制御を失った場合、発生した次元断層に止める間もなく至近で飲まれる可能性が高いかと。我々一個艦隊が全滅してしまえば、その後を収める者もいなくなってしまう」

「とは言うものの……、アレを見た上で陸士に突っ込めというのか？

正気か？」

喧々諤々の議題は、先遣隊が接触したアンノウンに対するアプローチだ。

この場にいる全員が先遣隊壊滅の映像を見ている。途中で切れてしまった映像だが、できうる事ならさっさとアルカンシエルでも何でも使って吹き飛ばしたいと思っていた。しかし発見段階で一報を入れておいた本局上層部からの『何が何でも手に入れろ』との命が、全力での武力行使に待ったをかけていた。

殺されたと思しき武装隊の面々を思えば業腹だが、言いたい事はわかる。

あれだけの魔力を完璧に、これ以上ないくらい完全に制御する生き物があるのだ。もしも一端でも解明できるのなら、その技術的恩恵は計り知れないものがあるだろう。

しかし、と司令は苦々しい。

そもそも人間サイズで巨大戦艦をも上回る魔力を保有する存在を、しかも敵対行動をとった相手をいったいどうやって確保しろというのか？

今まで定期哨戒で何の異常もなかった無人世界で発見した事から、彼個人が次元間転移魔法を使用できる可能性が高い。時間を置けば見失う可能性が高まるのは自明の理。かと言って、あの化物のような魔力に真つ当な戦力で当たっては、それこそアルカンシエルクラスでもなければ効果が期待できない公算が大きい。しかも局側の被害を考慮せずで、だ。

「つつちもさつつちもいかぬ状況に、この場の全員が困り果てていた。返す返すも、先に手を出したのが悔やまれるな」

限りなく戦死に近い扱いのM I A（戦時行方不明）の彼らに責を被せるわけではない。が、それでも思わずそのような眩きがこぼれた時、特例で会議室の末席に座っていた一人の女性が立ち上がった。美しいとしか言いようの無い容姿に熱を帯びてきていた声がぴたりと収まる。

時空管理局で最も有名な人物の一人である彼女の名は、フェイト・T・ハラオウン。

若くして執務官の地位と魔道師ランクS+と破格の力量を持ち、管理局史上最悪と名高いJS事件解決の立役者の一人。

以前はその秀でた魔道師としての能力と美貌で局員の噂に上る程度だったが、JS事件以来、民間で大きくイメージダウンした管理局の広告塔として、また事件の真相について局内でまことしやかに流れる『噂』から局員の目を逸らすため、こうして”英雄”に祀り上げられた女性だった。

「私が先遣隊の救助に向かいます」

堂々とした態度に気を吞まれていた者達は、その毅然とした”宣告”を一度聞き流し、正気に返って脳内で反芻し慌てふためいた。

彼らからすれば宣伝目的でこの次元世界へ短期派遣されたVIPのようなものである。たとえ小娘とて（侮るわけではない。実力も事件で知っている）粗末に扱うなんてとんでもないと気を使う相手なのに、よりもよって本人が断固として危険な場所へ行くといったのだ。

生死不明の先遣隊を助けたいというのはありがたい。

それこそろくでなしの上官に比べれば、涙が出るほどありがたい。ついでに美人だし。

だがそれとこれとは話が別だ。

個人としての戦力は、それこそ艦隊全ての人員で最も優れているかもしれない。しかし、相手はあの化物だ。人間レベルの実力がどうこうなど意味があるとは思えない。ありていに言って、死に行くようなものと思えなかった。

会議室の全員が似たような事を考えたのだろう、口々に思い直すよう必死に進だす。

一方の司令官も頭を抱えていた。

厄介な事は言ってる事がアンノウンの捕縛ではなく、あくまで人命救助という点だ。上位指揮権で言下に切り捨ててもいいが、きつく言えば飛び出しかねない危うさがある。修羅場を経験しすぎたゆえ、そして全て何とかなってしまったための無茶とでも言おうか……、自身の安全を二の次に回す真つ直ぐな若者には、今彼女の友人の手綱が掛かっていないと改めて理解してしまう。

——そして、おそらく局の上層部もこの提案には賛同するはず。

何故ならそれが局の”利”になるから。

たとえ死という最悪の事態になろうと、それは命を捨てて救助に赴いた英雄といえる。救助されたと名乗る局員もセットでつければ、さぞ涙と感動を誘う美談に仕立てあがるだろう。今の管理局にはどれだけありがたいか。

しかも都合がいい事に『英雄』は一人ではない。見目麗しい女性ばかり何人もいるのだ。代わりは沢山いるのだ。

司令はもう初老の域に至った年齢だった。

若者を、己がいつの間にか慣れてしまった組織の大きな思惑から遠ざけたいとも思うが、彼女らは望んで近づいてくる。それが痛みで済めばいい。擦れきってしまった年寄りには青臭く感じるほどの思いがあれば、身を切る痛みは次の成長への切っ掛けとなる。しかし組織という大きな存在に押しつぶされてしまえば……それは進んだ先が崖のようなもの。傷はまだまだ盛りの命へ届いてしまうかもし

れない。

怖さを知るからこそ、勇敢に進もうとする若者を止めたかった。彼女はまだ二十歳にならぬ未婚の女性なのだから。

……だが、情を捨てて決断せねばならないのが今の彼の立場。

あえて冷徹を装った思考で様々な断片を整理する。

中継された武装隊が蹂躪される映像、生存者の可能性、執務官のスベック、アンノウン接触時に即時戦端が開かれる可能性、その場合における執務官の生存可能性、本局からの指示、艦隊の戦力、アンノウンの予想戦力……。

司令は感情を切り捨て、重々しく口を開いた。

「執務官殿、許可しよう」

気でも狂ったかときよつと振り返った参謀たちが、これは決定だと言外に伝える鋼の気配に怯んだ。

「ありがとうございますー！」

フェイトも今の自分の立場はよく分っている。なのにまさかこうすんなり艦隊指令から許可が降りるとは思っていなかった。驚きを頭を下げる事で隠す。そこへ厳しい問いが掛けられた。

「執務官殿、貴官の最も得意とする魔道戦におけるスタイルは何か？」
歳経た者が出しうる、重く、厚みのある声。

様々な威圧感を経験しているフェイトをして、反射的に答えさせる何かがあった。

「高速飛翔魔法を使用した高機動戦闘です」

「よろしい。貴官に許可するのは先遣隊の人命救助だ。そのスピードを生かし、一人でも二人でも目に付いた者を抱えて離脱しろ。アンノウンとの交戦は許可できない」

「了解いたしました」

フェイトはすぐさま会議室から飛び出してゆく。

扉が閉じる刹那、金の髪が眩しく光を反射したのに司令は目を細めた。

執務官がこの命令に従うかどうかは半々。しかし、もし戦闘になつたととしても、それは時空管理局で指折りの魔道師とアンノウンの戦闘

データが採れるという事。命令無視で結果として彼女が命を落としても、得られた物は後の多くを救う助けとなるだろう。感情を廃し、冷徹ともとれる論理的判断をしたゆえに、司令はフェイトの『死』を計算に含めたのだった。

飛び込みざまに横殴りに叩きつけられた黄金の大剣を、身を捻るようにかわす。

ととつと距離をとって見てみれば、先程居た場所には金髪赤眼の美人、いや美人と美少女の中間か、がパリパリと雷光を散らす身の丈より大きな剣を構えていた。

鋭い眼差し。

高速移動で発生した風が、遅れて金糸のような髪を翻した。

「さっきの連中の仲間か」

服が似通っている。こちらはどうにも戦闘服に見えない、言っしまえば黒のレオタードにベルトのような行き過ぎたビジュアル重視といった服装だが、先程の男共のと同じように魔力で作成された擬似物質による防護服かと、黒川は解析の結果に中りをつける。同時に悩んだ。さっきは思わずヤッてしまったが、ここでまた敵対する必要は無い。まだ、まだラブ・アンド・ピースが通じるはず。通じるのかな、と。

「は」

なしを、と続く前に、近接戦にしてはアホのような速度で金髪女が斬りかかって来た。

「ぬー！」

掬い上げるように腕を切り飛ばそうとしてきた剣先から一步引いて避け、瞬時に二刀に分裂してこちらの残った蹴り足を挟み切ろうと

してきたのを、手の甲で剣の横腹を押すようにいなす。振るう方向を少しずつ曲げながら逸らされた双剣は、結果として膝と足の甲を掠めて空を切った。

完全に泳いだ身体に、反射的に腹に一発ねじ込もうとして、スカぶった。ぶち抜かれたのは罪無き森の新鮮な空気のみ。

「あん？」

たしかに金髪女の状態は泳ぎ、まさに隙の塊といった体だった。まともなら避けられんのだが……まともでない手段、魔法を使って避けただろう。抉れた地面の先ではあの金髪女が、再び一本に戻した大剣を肩に担ぎ、再び魔力によるアシストありで切りかかって来るところだった。

常人が目で追えない程の高速移動が目の前で止まり、次の瞬間にはその速度エネルギーをそっくり受けた大剣が振り下ろされた。

黒川の手は一見して圧倒的にゆっくり動いているが、フェイトからすれば不気味なくらい攻撃が当たらない。高機動型の戦闘機人でも圧倒した自分の攻撃が、身体強化魔法を使用したように見えない素手の相手に当たらない。キリツと歯が鳴った。

諦めを知らないように次から次へと繰り出される剣閃。

黒川は感心していた。あくまで人間の範疇ではあるが、ちよつと信じられないくらいに精度の斬撃と、要所要所で上手に使用される加速魔法が、目の前の若い金髪女の戦闘経験を物語っていた。

ちなみに彼に緊張はゼロだ。

攻撃は精度が良い分読みやすいし、二十歳かそこらの小娘ではいくら戦闘経験を積んだといっても高が知れている。しかも戦闘スタイルに先達からの教えが読み取れない。年月を掛けて使い手達から練りこまれた”老獪さ”のない剣など、恐れるにはあまりに未熟。

加えて観察すれば『近接格闘』というジャンルではまだ素人に毛が生えたようなモノらしい。高速戦闘で余裕が無いのもあるのだろうが、視線がかなり攻撃する箇所へ行っている。

加速魔法にしても先のセイバーの魔力噴射に比べれば、自由度が低いのが目に見えて分る。特に曲がれないのは致命的だ。加速、止め、

加速で曲がっているが、それでは無駄だらけだ。——というか手に持った機械つぽい剣の柄、アレに何か魔力ラインが繋がってるが、もしかして機械の方に加速と停止の調整を任せてないか？ さつきから高速移動から止まる位置があまりにも正確すぎるのだが……自分で制御できてない？

と、並列思考でなく考え事するくらい余裕だった。

しばらくそんな緊張感があるんだか無いんだかな殺伐やり取りが続くと、堪え切れない様に噛み締められた唇から怒りが搾り出された。

「あなたは……、あなたは武装隊の人達をどうしたんですか!？」

「すまん。殺した」

「——ッ!」

渾身の一撃が空を切った。

「予想してたろう。さつき周りを探査して痕跡を見つけられなかったから可能性があると思っていたか？」

「黙れっ!!」

黒川は先程まで考えていたラブ・アンド・ピースとか寝言は何処へ行ったのか、態と挑発するような言動で逃げ回る。そのくせ攻撃は一切していない。

「くっ、何で……、何で当たらない!」

「それじゃダメだなあ」

戦闘は激しさを増してゆく。

剣戟だけでなく、雷撃が地を抉り、空間埋設式の捕縛トラップへバインドが巧妙にばら撒かれ、魔力誘導弾が群れを成して襲い掛かった。

しかしそれらが、一つとして効果をなさない。

一閃は当然のごとくいなされ、雷撃は黒川の保有魔力の煽りだけで標的を逸れ、目に見えぬはずのバインドは知っているかの様にかわされ、無数の誘導弾はほんの数発放り込まれた魔力塊で全て連鎖誘爆させられた。

「いやあああああ!」

フェイトは爆煙を突き破って奇襲する。

「おっと、奇襲に声を上げたら意味が無いだろう」

初手からフルドライブで切り込んだのに完全に遊ばれていた。もし相手が攻撃に転じたら、きつと逃げられない。無駄と薄々分って手を休められない。体力と魔力ばかりが心もとなくなつてゆく。

すると敵のほうから足を止め、手で制止してきた。

フェイトも足を止めた。消費した体力以上に、過去最大の敵『闇の書』以上に底が見えない存在に悪寒と嫌な汗が流れた。

「さて、結局あんたは何処の誰さんで、何しに来たんだ？」

「ハッ、フツ……、時空管理局執務官フェイト・T・ハラオウンです。先遣隊の救出に来ました！」

「——そりゃ残念だ」

一瞬大剣へライオットザンバーの輝きが劇的に高まり、しかし抑えこまれる様に輝きは落ち、代償のようにつつと口の端を血が一筋伝った。

「それ」

黒川からフェイトへキューブが投げられる。

瞬時にフェイトのデバイスであるへバルディッシュ・アサルトが爆発物などのスキャンを掛け、解析出来ないとなると受け取らずに一歩横へずれてやり過ごした。

そんな彼女の用心を面白がるように声がかけられる。

「先遣隊」とやらだ」

指差された先は背後。

フェイトは思わず視線を切り、背後へと振り返ってしまった。しかし予期した攻撃は来ない。どういふつもりかは知らないが都合はいい。ザンバーを油断無く向けながら摺足で後退りし、土の上に転がる灰色の立方体を片手で拾い上げた。その間もバルディッシュのAIは対象が危険かどうか、僅かでも逃さぬよう解析を続ける。

「手出しはせんよ」

「信じられません」

にべも無く切捨て、キューブを持ったまま飛行魔法で距離をとる。

もちろん決して背中は見せない。

百メートルは後退し、ようやくキューブへ視線を落とした。

握り込めるほど小さくはなく、だが待機状態のデバイスにしては大きかった。材質も磨りガラスか何かに見えるけどバルディッシュが解析できない、つまり時空管理局の公式データベースに存在しない物質。しかし『コレが先遣隊』という言葉は……、予想するならこれがデバイスのような存在で、格納領域内にデータ化した先遣隊の人達の遺体が収納されているという最悪の想像しか……

フェイトは涙が零れそうになる。

あくまで広告塔として派遣されたが、武装隊の人達は良くしてくれた。男の人達というのは大抵女の人に向けて視線を向けてくるけど、それ以前に仕事の出来る同僚と見てくれた。なのに……

涙を堪える。まだ決まったわけではない。あの男が出鱈目を言っただって可能性もあるのだ。確かめるまでは決まっていけない。

そう縋る様に首を振り、キューブの中を良く見ようと覗き込んだ。

「あ」

運が悪かった。

「いや」

黒川も原典作品を詳細に閲覧しておけば、このようなミスを犯さなかっただろう。

「いやあ……」

彼女の生まれを知っていれば。そして幼少から刷り込まれた魔法知識、それがどれほど彼女の『情報』に対する才覚を類稀な物にしてきたかを。

第肆章 04 ふえいととらうまは仲良し（とて
もリリカルと言えない編）

金髪女には本当に驚かされる。

俺の首を薙いだ魔力製のブレード、あんな物をこの歳で扱えるとは。

実は魔力を物質のように固体化させるのは、人間レベルの制御力ではかなり難しいものがある。なにせ元々が実体があやふやで純粹なエネルギーの塊のようなものだ、人間にお前電気で創作れと言っているのと似たようなものである。想像するだに無茶なのが良く分るだろう。

ところが魔力は制御力とイメージさえあればその無茶が意外に利く。

もつとも難度は相応に高い。魔術で同じ事をしようとしたら最低でも第六階位、大達人（Adeptus Major）はないと無理だ。

ああ、ちなみに魔術の位階とは近代式の魔術師力量分け方で、1～4は外陣と呼ばれる理論を学ぶ段階、5～7が内陣という所謂実践段階だ。

そして最後の第三陣と呼ばれる8～10階位が、到達者とされる肉体より精神アストラルに重きを置くに至った存在。

そして、普通では努力しても内陣まで到達できない。なんといつても四位階で哲学者といった学者レベルなのだ。

ここから考えれば最低で六位階というのが如何に破格な魔術かが分るだろう。

もちろんあれは魔術と違う理論を使用しているし、彼女の場合は更に術式構築・維持の大部分を握った魔杖に代理させているようだから、実質的な負担は使用される魔力の供給と大まかな制御のみだろう。難度は格段に下がっていると見なすべきだ。

——あつた。

知識の検索でヒット。

どうやら魔杖はデバイスと呼ばれる魔法用の外部演算機関のようだ。確かにこの性能なら彼女のまっとうな匂いにも納得できる。

魔術師はなんというか、大抵腐敗の終わつた後の半ミイラ化した死体の匂いとも言えはいいのか、あの長年放置された廃屋の中の古い埃と板一枚隔てた腐敗の空気がするものだ。

金髪女は一瞥してそれらが縁遠いと見て取れる。

魔術師の観点から見ればいかにもアンバランスな存在だが、使っている技術を分析すれば至極真つ当な、正道とっていい発展の仕方をしたもの。

なるほど、これが魔道技術を中心に近代地球より発展した文明という訳か。

「……なんて考えてるのは現実逃避か」

実は今、盛大に落ち葉にまみれて転がっている。

いやね？　どうにか落ち着いたかと気を緩めた瞬間に首を薙がれた訳よ。当然切れんのだが、そうなると切れない代わりにガッツリ刃が首に引っかかる訳で……、一言で言えば吹き飛びました。

なさけなし。

ダメージはエイヴィヒカイトの装甲で止まっているが、引っ張られるのまではフォローが無かった。せめて着地くらい対処できてれば面目も立ったのに。

まだそんなものを気にしてしまう辺り、やはり俺は変わっていないのかと思う。

やれやれと身を起こした。

どうやら金髪女は一目散に逃げたようだ。無様に転がっていたのは十秒無かつたと思うのだがすでに影も形も無い。

キューブ？

首引つ掛けられた時に落としましたとも。いいさ、元々持つて行かせるつもりで渡したんだし。

「……我が事ながら、負け惜しみチックだなあ」

自身の残念感が半端ない。

しかしまあ過ぎた事。

つい八つ当たりしてしまった事は素直に悪かったと思えるし、ここは一つキューブの悪戯に加えて謝罪代わりに”洗濯”でもしてやるとしよう。

「馬鹿な！ あの件が民間にリークされているだ?!」

その日、次元世界の一つであるミッドチルダ、その首都（※1）クラナガンに建設された時空管理局本局の施設内で、激しい怒鳴り声が鳴り響いた。

雰囲気からして高級そうなデスク一式が真ん中にあるだけの部屋。

そこで椅子を蹴立てたのは壮年も過ぎかけた一人の男だ。

「いや待て。全ての資料の処理は命じたはずだし、確かに処理したとも聞いている。どういう事か説明しろ」

「いえ……その、全部が、あるはずの無いデータが管理世界全土で広まっているようなのです」

「あるはずが無いデータだと？ まさか処理されてなかったとでも言うのか!？」

「違います！ 一佐が指示を出された場面も何もかもが映像としてです！」

その答えにこの部屋の主は愕然とした。

「馬鹿な……、そんな物ある筈が……」

「信じ難い事ですが……被検体のデータも、それらを確保するまでの全てです。私に直接連絡を寄越したジャーナリストには口止めはしましたが、もうどうにもならないでしょう」

どうにもならない。

停止した思考がその言葉に収束される。

身体から活力が抜けていくようだった。

「何故だ、誰がやった。——何故、私だけ、切り捨てられたのか？」

「いえ一佐、我々だけではありません。局全てで同じような事が起こっています」

「……………、まさか、いや、馬鹿な」

逃れようの無い自身の失脚が意識の片隅へと追いやられる。

局では表沙汰に出来ない事など幾らでもある。

何せ曲がりなりにも巨大な軍事力を保有する組織、個人単位で見れば犯罪組織と裏の繋がりがあって自覚有る無し別にザラな話だろうし、軍需産業ともほぼ唯一の取引相手としてべったりと癒着している。金と権力の匂いは己を始めとした魑魅魍魎を招き寄せ、そこへ裁判権と治安維持という権限が融合しているのだ。その内実はもはや国家の縮図と言っても過言無い。

当然ながら、国家と同じように「国（組織）の利」という物を優先する場合が多々ある。

そういった対処の犠牲となるのは少数の人間だ。

しかし国家と違い、時空管理局はあくまで『次元世界を守る正義の組織』

数の大小ではない。

国家ですら闇に沈め小奇麗な皮を被るのだ。世界の守り手が自分の利の為に守る相手を犠牲にするなど、とても公言できるはずがない。

結果として局内では”資料として残さない”対応が横行している。

もし、仮にそれらが処理された物も含め『全て』公開されたりなどしたら…………。

「管理世界全てを巻き込んだ戦争になりかねんぞ…………!!」

いや、もう引き金は引かれたのかも知れない。

部下との連絡を切り、戦慄に強張る身体で椅子に座り込んだ。

端末を起動してみればニュースにこそなっていないものの、匿名の

ネットワーク上では目も当てられない騒動となっている。

いつそう血の気が引いた頭でこれから先を考えた。

現時点ではネットワークにアクセスする者の噂だが、程なく間違いなくどこかのニュースがスッパ抜くだろう。そうなれば資料の確度にもよるが、間違いなく管理世界のほぼ全ての住人に知れ渡る事になる。

事がここまで大きくなれば自分だけが責任を追及されるような事態になるまいが、それ以前にこの管理局自体が管理世界全体から非難と嘲笑と蔑視と、事によれば憎しみの対象とされてしまう。誰しもが心の内で燻ぶらせる不満の前に、絶好のぶつけ先を差し出す事となる。

「そうなってしまうえば——」

いつもは優越感をもたらしてくれる高い地位を示す制服、しかし今は厄介事を引き寄せる疫病神にしか見えなかった。その疫病神に包まれた身体で途方にくれる。

どれだけ考えても幸福な未来のビジョンなど、彼にはもう想像できなかった。

遡る事、一日。

本局では管理局のエース、フェイト・T・ハラオウンによって届けられた物体が、ラボで詳しく分析にかけられていた。

ラボの入り口を出た通路に置かれた長椅子で、フェイトは分析が終わるのを一人待っていた。

先に医務室で顔見知りの医師に一応検診をしてもらい、それが終わった後は帰宅が許されていたのだが、咄嗟に持ち帰ったあのキュー

ブが気になりこうして来てしまったのだ。

(あのキューブはなんだったんだろう。だって、あんな)

覗いて、そして見てしまった黒い四角の中を思い出せば、今すぐにも吐き気が込み上げてくる。

(絶対に普通じゃないよ……)

見たのは自分だけ。

相棒のバルデイツシュにも分らず、他の人間も一人残らず覗く事が出来なかった。

フェイト自身もう覗こうとはとても思えなかったし、幸い本局での分析が優先されて覗くよう要請される事もなかった。

だから脳裏に焼きついたいっそ非現実的と言っていい光景が実際にあつたのか、それさえも今のフェイトにはあやふやだった。

やがて手持ち無沙汰のまま二時間ほども待たただろうか、夕刻も過ぎようとする頃になってラボの扉が開いた。

「ああフェイトさん、わざわざ待たれていたのですか。一言言ってくださればこちらから連絡を入れさせて貰いますものを」

「いえ、私が気になっただけですし……」

「そうですか?」

「はい。それで、あのキューブは?」

「ああフェイトさんが持ってきた物でしたね、それは気になるか。そうなんですよ、凄いですよ! アンノウンが造っただろうって資料で見ましたけど、実際にどうやって造ったとか見なかったんですか?!」

「ひっ……!!? ——う、あ、あの」

鼻息も荒く詰め寄ってくる職員にフェイトもたじたじとなる。

戦闘以外では気の弱いフェイトは、若干怯えながらも何とか男性研究者を押し戻す。

「——あ、おっと、すみません、興奮してしまいました。いや研究畑の悪い癖です。」

それで、何をお知りになりたいんです?」

「えっと、アレは何だったんですか?」

「解りません」

「えっ」

あまりにきつぱりと返された答えに言葉を失う。

「魔力の有無から構成物質、果ては表面の付着物まで徹底的に調べつくしましたが、……いえ、正確には調べる事さえ出来ませんでした」
「それってどういう……」

大魔道師にして著名な研究者でもあった母を持つフェイトだが、彼女自身は研究畑とは無縁の生活だ。もつとストレートに言ってくれないと分らない。

「魔力は検出されませんでした。その他のあらゆる分析機器が通じないんですよ。どうやっても、どれを使っても「No Data」ばかり帰ってきます。こうなってくると最初の魔力が無いってのすら怪しくなってきましたよ」

「そんな、そんな事ってあるんですか？」

「確かに、この目で見なきゃ私も信じませんね。何てったってサンプルを削る事も出来ないんですよ。どうやってもです。最終的には武装隊からエースを引つ張って来ましたけど、それも無駄でした」

「凄く硬いんですね」

「違います。それも解らないですよ。驚いた事に超高压でも一切の変形が起こってないんで、コレどうなつてんだと精一杯拡大してみたんです。そうしたら……」

「そうしたら……？」

真剣な表情で話を引つ張る研究員にフェイトもつばを飲む。

研究員はオーバーに両手を広げて続けた。

「なんと黒一色！ 物体としてある筈の分子原子すら無かったんです！」

「？——？」

フェイトはそれがどういう意味を指すのか明確に理解できなくて首を捻っている。

ところが自分の台詞で盛り上がってしまった研究員はお構い無しだった。

「つまりアレは幾ら調べても実体がまったたく証明できず、唯一確かなのは我々が見て触れるという一点のみ！ まるで影だ！ 見て触れる『非存在』！ これがどれだけの発見か!!」

「うん、と、よく分らないですけど、ロストロギアみたいな物ですか？」
「全然違うー！」

声はすでに怒っているといっている。

ヒートアップした彼からは、既に上位階級への敬語というものは消えさせた。

「いいか、ロストロギアは、古代文明で造られた、現代より遥かに高度な魔法文明の遺産」の事だ。今の技術からすればまるで魔法の品のように見える物もあるが、あれらは現在の魔法技術の延長線上にあるれっきとした技術の産物なのだよ。

しかしこれは違う！

魔法技術どころか科学技術の類ですらない、それらとはまったく別次元の、まるで世界の法則を無視でもしたような存在なのだ!!!

研究員の目は興奮と狂熱に真っ赤に血走り、最後はもう世界の真理を見つけてしまったような絶叫だった。

フェイトなど、もはや怯えて通路の隅でぶるぶると震えている。

どうやら在らぬ方向を彷徨いだした彼の目がかなり怖かったようである。

結局この日フェイトが得たものは、到底理解できない謎の単語の羅列と、間近で見続けるざるを得なかった半狂人による大きな心の傷だけであった。

第肆章 05 休暇と崩壊（とてもしりりカルと言えない編）

時空管理局は設立以来最大の危機を迎えていた。

いや、もはや崩壊を迎えていた、と言った方が正しいか。

日本の警察が不祥事を起こした場合では、組織関係者へ処罰やらが
あろうと国民は警察機関の存続に関与はしないだろう。実際に交番
やらで世話になっていいる部分も大きいから。しかしこれが国連だっ
た場合、いつたいどのような事態になるだろう？

その答えが、今の管理局だった。

大きな動きは二つ。

一つは次元世界を治める各政府による非難声明と各種の要求。

一つは局員やその家族の多次元への移動。

一つ目は常から目の上のたんこぶだった管理局から、これ幸いと少
しでも多く雀り取ろうとするもので、予想通りといえば予想通りの動
きである。自分達の国の守りを駐留した他国の軍隊に任せるとい
うのは、そう容易く納得できるものではない。

いろいろと面子とかあるのだ。

二つ目は不信からくる動きだった。ありきたりな不祥事ならば起
こりえなかつた事態だが、最もそれを煽る原因となったのが今回流出
した中でも先のJS事件の顛末だ。

『JS事件』

ジェイル・スカリエッティの引き起こした一連の事変。最終的に
ミッドチルダの首都クラナガンをあわや壊滅とまで寒からしめた過
去最悪のテロ事件。その根幹が、事件後管理局が盛んに極悪人と吊る
し上げたスカリエッティが、その実己を造り、人体実験を初めとした
様々な違法研究を指示していた管理局上層部への反乱を起こしたと
いう点であつたと読み取れた。

それだけでは懐疑的だつた者達も、添えてあつた管理局創設メン

バーの脳髓だけで生きている映像や、それに消費されている電力や資材などの様々な証拠資料、そして本局内の機密区画データに口をつぐんだ。考えられる全ての証拠が揃い、なお疑いの声を上げられるものは少ない。

局員にしても寝耳に水だ。

ここ数年、兵隊として彼らが運用したガジェットという機械兵に襲われ殺された者も大勢いる。

古代ベルカの遺産「ゆりかご」、それを止めるために命を散らした局員も、そしてクラナガンの多くの市民の盾となって体の一部を、命を投げ出したものもいる。

仲間を大勢失い、死に物狂いになって収めた事件が、よりにもよってその根っこが、自分達のトップが好き勝手した悪事を働いたツケだというのだ。

嘆く？

それで済むわけがない。

挙句、これから待つのには被害者からの猛烈な突き上げだ。上のやった事です関係ありませんなど通じる理屈ではない。被害者からすれば、そうでなくとも不透明な組織外から見れば同じ管理局員に違いなのだから。更に局にとって致命的に都合が悪い真相を隠したのが怒りを煽る。

責任を逃れ、かつある意味根源的には被害者と言えなくもないスカリエツティに全てを押し付けた形にとれるから。

スカリエツティは真性のマッドで、社会にとって有害となる可能性が大きすぎるのは事実だ。人体実験とて嬉々としてやっていた手前同情の余地はまったく無いにしても、彼の人間性を知らぬ者にとっては、それすら過酷な環境ゆえにそうなってしまったのだと好意的に解釈される余地がある。

でも私たちが事件を収めました、とは間違っても言うてはならない。

火に油を注ぐのと変わらない勢いで反発を招いてしまう。

釈明の仕様が無かった。

不本意な責任を取らされるぐらいなら、いつそ今の内に逃げ出して関係ないふりをしよう。そう考えた局員が次々に姿を消すもの無理の無い話だった。

彼らの多くは、管理局の標榜する“次元世界の平和”の為に局に所属しているのではない。金銭を得て生活する為に勤め、働いているのだから。

それこそ自滅して沈みゆく船と運命を共にしようなど、考える者が少ないが当たり前であった。

「ここも寂しくなっちゃったね」

「……そうやな」

本局のロビーで二人の女性が話していた。常なら多くの職員がいたこの場所も、もう他に人影は無い。

「まさかこんな事になるとはなあ」

二人のうち、黒髪をショートした方が感慨深げに言う。局員の制服を着るわりに言葉に悲壮感が表れていなかったが、それも時空管理局ロビーに人気が無いという異常な状況が彼女から実感を奪ったからか……

「わたしも、想像もしてなかったかな」

茶色に近い黒髪をサイドで一つに結った女性職員も返した。

「なのは、ヴィヴィオちゃんはどないしとるん？」

「フェイトちゃんが部屋で見えてくれる。エリオとキャロも一緒」

「そっか……」

会話が途切れる。

まだ若い二人、八神はやと高町なのはの胸中にどんな思いが渦巻いているのか。

もう逃げる人はみな逃げた。

二人だって逃げられるものなら逃げたい。でも、運が悪かった。

初期に本局へ遺族や便乗した人々が暴徒となって押し寄せた際、彼らが入り口を破って押し入らぬよう警備を命じられた。ここにいないフェイトも合わせ、三人が民間人に人気がある高位魔道師として、また彼女たちも正式な命令ゆえに任務を投げ出さなかった。

” 話せば分かる ”

そう言つて民衆の前に立った彼女たちを投げつけられる石が打つた。

必死に語りかける彼女たち。

だが誰がそんな物を聞こう？

先に殴つたのは彼女たち（時空管理局）で、暴徒は殴られ大切なものを奪われた側なのだ。民衆の憎む相手はもう悪人個人ではない。

詰め寄る暴徒と化した市民。

今にも無理矢理ゲートを破ろうとする彼らに対して、とうとう三人へ実力による鎮圧が命じられる。本局内にて待機していた非番の武装隊もデバイス片手に次々飛び出してくる。

——今にして思えば、そこが最後の分岐点だったかもしれない。

拘束魔法や軽い非殺傷魔法によつて呆気なく騒ぎは鎮圧された。

もちろん大きな怪我人など一人も出ない。あつても精々擦り傷程度。

彼女たちとて守るべき市民に魔法など使いたくない、使いたくなかつた。しかしそれは彼女たちの考えであり相手の考えではない。本気で殺気立った大勢に身体を掴まれ引き倒され、群集に呑み込まれるうにもなれば、心底から恐ろしいと思つてしまう。

冷静に考えれば誰もが仕方なかつたと、自衛だつたと認めるだろう。

ただ、社会の不満が最悪の形で噴出す熱狂の渦の中では、誰もが冷静ではられない。

結果として管理局の宣伝を通し有名になっていた彼女たち三人は、この出来事を撮影していたTVによつて局の体制派として誤認される事となる。

「残つて指揮を執つてるのはリンディさんとクロノ、それとレティ提

督だけや。あとの提督はみーんな逃げよった、薄情なモンや」

「しかたないよ。誰だつてこんなのイヤだもん」

「しかたない、か」

「うん」

「そやなあ」

なのはには目の前はやての胸中までは分からない。でも親しい者達と一緒に部隊に集めるのが、その部隊を作るのが夢なのだと言っていた彼女には、今回の出来事がどれだけ重いかだけは良く分かった。はやてが夢のためにどれだけ辛くともやり遂げてきたのを知っていたから。

「そうだ、地球に帰ったら何しよつか？」

だから元気を取り戻してほしくて、少し大きなくらい抑揚をつけた。

「帰ったら？」

「そう。ヴィヴィオとかエリオとかキヤロとかも連れて、もちろんシグナム達も一緒に帰ろう」

「それいいかもなあ。どうせなら一年くらいのくんびりしたいわ」

「でしょ？ でもきつと家は翠屋（みどりや）を手伝えって言われるかな」

「ふふつ、土郎さんも桃子さんも相変わらずや」

「お父さんもお母さんもまだ子ども扱いするんだから」

「きつとそんなもんやで？」

「そうかなー」

今から少しだけ目を逸らすように。

幸せっていえるような未来を想像して。

どうか、

どうかもう少しだけ、

時間をください。

「うーん」

クラナガン都市外縁部の上空に座り込んで、黒川は首を捻った。

「どーも思ってたよりはっちゃけたな」

彼としてはもう少し穏やかで済むと思っていた。人間だった頃にも似たような不祥事はテレビやネットで目にしていたし、せつせと火種を撒いて紛争を起こし、戦火を煽って武器輸出で稼ぐ国も知っている。それも当時の一般市民であった自分が常識として知っているような事だが、それで国が傾くような問題になった例はついで知らない。

(テロに関係の無い多次元まであの有様とは、よほど抑圧的だったのか)

彼がやった事といえば、そこらのコンピュータに仮初の思考能力を与え、第一目的に「時空管理局に関わる論理的によりしくない出来事を、現在過去通して公表しろ」と据えたただけだ。

もつとも、彼(仮)は予想外に頑張った。

情報の収集を思索し、自身単体の巨大化を即座に切り捨てる。全てを攫える巨腕より細かい沢山の腕を欲したのだ。

まずネットワークを通じて自我複製を繰り返し鼠算式に天文学的数へ増えた。そして次元間移動に使われる中継ポーターを次々に梯子して、たったの二日ではほとんどの管理世界に蔓延していった。スタンドアロンのPCですら出入りする人間の持ち物を利用し乗り移り、魔道師の持つデバイスに潜み、更にはプログラムと名の付く物を使用してあるロストログアすらも選り好みせず、片端から制御下に置いてしまったのだ。

そして記憶媒体からデータを、記録が無い場所からは別世界の魔術を利用して過去を読み取り、膨大な量に上るそれらを片っ端から日の下へ放り出し始めたのである。

局の側からしたら堪ったものではなかったろう。

後はあつという間だった。

あれやこれやと問題が噴出し、それに極一部の右翼めいた管理局至上主義者が手を出してしまったのが、この出来事を知った人々に火をつけたのだ。

これが数多の次元世界に亘り築かれた、管理局の牙城の崩れる第一歩であった。

命令だけ出して、また森の奥に引つ込んでた黒川が三日後に文明に触れた時、世の中は彼というアンノウンが忘れられるくらい混乱していた。

彼自身としても「ちよつとした掃除」のつもりで仮想人格用意したのに、まさか「火事を起こせば皆綺麗になるよね」的事態になっているとは思ってもよらなかったし。

とはいえ、黒川も別段火消しに走ろうとは思わない。

ようはロクデナシが消えればそれでいいのだと思っている。

あの戦闘で金髪女が戦い慣れていると分かっているし、いざ時空管理局その物が立ち行かなくなろうとも、やる気があるなら幾らでも働き先など見つかるだろう。それこそどこも戦闘力が必要になりそうだし、と。

そんな風に暢気に遠く飛ばした視線の先では、今まさに一際目立つ管理局の立派な建物が群集に囲まれていた。

真つ黒に蠢く大勢の市民。

千や二千では到底きかない数だ。

数刻前までは建物内からしきりに転移の反応が窺えたが、どこぞの管理局に潰れてほしい組織が持ってきたのだろうAMF（アンチ・マギリング・フィールド）の発生装置が設置されてからは、それらの転移は行われていないようだ。

ああいった機械は総じて——特に失敗が許されない類は——妨害に弱い。見た訳ではないので想像だが、座標軸にでも乱れが出たんだろう。リアル「いしのなかにいる」はシャレにならない。映画のよう

に座標が重なったからといって、人と蠅でハエ人間と上手い具合にくつつく訳が無いのだ。

そんな危険を恐れないチャレンジャーは普通いない。そしてそれは翻って、

「パニックは起こっていないか」

という事に繋がる。

方に届こうかという殺気立った群れに囲まれば、恐怖に駆られるのが当たり前。仲間を突き倒し、方法に危険があろうとも逃げようとするのが人心だ。

ところが意外やよろしく纏まっている。

こういった状況を多く見てきた彼としては感心しきり。立派だと頷く。

と、ふいに高速で接近してくる魔力を感知した。

「見つけました」

「む、あの時の金髪女」

そう、なぜか非常時にも拘らず件の金髪女が登場。しかもそれだけでなく……

「テストロッサ、そいつがお前の言っていたアンノウンか」

シニールなピンク髪の知らない女が、金髪女と反対側に浮いていた。

「おいおい、魔力は隠したのになぜに見つかるかな？　というか何で探す」

「あのすぐ後に今回の事件、彼方の仕業だと誰でもわかります」

「まあそりやそうか。で？　何用だい？」

「——テストロッサ、この男はふざけているのか？」

桃色女、侍か騎士を連想する立ち姿と髪色が壮絶な違和感を醸し出している女が声を絞り出した。今にも斬りかかる寸前といった気配を内に秘め、顔まで剣のように鋭く引き締めて睨みすえている。

「ごんな、このような男が我が主はやての夢を台無しにしただと……？」

「シグナム……」

いや、まったく秘めれてないようだ。

ところで、

「何か問題かな？」

「きつさま!!」

「待ってシグナム! —— 一つだけ聞きます。なぜ、あんな事をしたんですか?」

「掃除しようと考えてな」

「そう、じ?」

「そうだ。ああ別に潔癖症ではないぞ? ただ俺に向いた煩わしい視線を逸らすついでにロクデナシどもが片付けば一石二鳥、つて程度だ」

「—— ほんとうに、そんな事で?」

「ああ」

「—— ツツツ!!!」

激情に雷刃と炎刃が抜き放たれる。

金髪女は以前ので威力不足と判断したのか桁違いに電力が大きい。対して桃色侍（仮称）は実体剣型のデバイスから猛炎を噴かせている。

金髪女は相変わらずの速度で前から、遅れ桃色侍が後ろから。

「!?!」

当然当たってはやらん。

袈裟切り奔った雷光を片手の甲で逸らし、頂戴した運動エネルギーでもって回転しながら不可視の足場を軽く跳躍。激昂しながらも正確に脚を狙った後ろからの斬撃は空を薙ぎ、カウンターとして脚を閃かせる。過たず肩にヒット。苦鳴を残して桃色侍が空中で吹き飛ばす。しかし桃色侍も興味深い。三十路に届かんと思うのだが、それにしてもは剣筋が妙に埃臭い。やたらと時間を掛けた様な、のわりにおんなじ練習ばかりしていた様な……。

「つと」

「シグナム大丈夫!?!」

魔力弾で牽制する金髪女が叫ぶ。

「ぐっ、ツ……。心配するな、何とか甲冑が間に合った」

確かに蹴った瞬間違和感があった。

見れば当初と違い、魔力で編んだ鎧を纏っている。

「ふざけた男だが実力は侮れんな。———テスタロッサ」

「うん!」

前衛後衛別れての連携。

今度は正攻法か。

「アークセイバー!」

「はああああああ!」

金髪女が鎌へ変化したデバイスから三日月状の回転する魔力弾を放ち、追いかけるように桃色侍が切り込んできた。遅い。が、魔力弾が誘導式らしく僅かな弧を描いて飛来する。桃色侍は炎は無しだ。待ちは下策。

こちらから桃色侍へ突貫する。

向こうも臨むところとばかりに一層速度を上げた。

強烈な金属音。

振り下ろされた拳と剣型のデバイスが激突する。エイヴィヒカイトの霊的装甲とアームド・デバイスと呼称される近接白兵戦用のデバイスが鎬を削り、しかし刹那の均衡は一方的に破られる。

魔道師には素の拳にしか見えない物が正面から剣の一撃を弾き飛ばし、そのままシグナムを直撃、鎧の胸当てを叩き割った。体勢が崩れたままの打撃に苦悶が浮かぶ。

だが騎士甲冑は役割を果たした。

ダメージの殆どを引き受け砕けながらも担い手の肉体を守りきつたのだ。

シグナムは踏み込む。

砕け散った鎧もそのままに、デバイス《レヴァンティン》を叩きつけた。

本来彼女のスタイルは一撃離脱。使用する魔法を混ぜた近接戦闘法である古代ベルカ式は、その一撃の重さにこそ重きを置く。しかし先の突進でスピードに勝ると見て取った敵を相手に距離を離すのは不味い。

それに剣士としての直感が囁く。相手は素手に見えるのに、離れては負けると。剣の間合い、近距離のみ勝機はあると。

だがそれは失策。

確かに離れば一方的な展開となつたろう。

しかしシグナムの豊富な戦闘経験の中には、自身を上回る技量の無手の使い手は居なかった。そして自分自身の強さを良く知り、自負してもいた。だからこそ勝利を優先し、踏み込んでしまった。

「紫電」

レヴァンティンの罅元で撃鉄が下りる。

カートリッジ・システム。

ベルカ式として更なる重さを求めた結果、専用の薬莖に魔力を封じ、任意に激発させて一撃へ上乘せするシステム。使用者へ過度の負担をかける事を除けば戦闘力は飛躍する。

紫の魔力光を帯びた炎が迸り、逆巻く。

「二閃!!」

シグナムが放ちうる最大の近接攻撃。炎を纏った斬撃が繰り出される。

対する黒川がした事は防御でも攻撃でも回避でもなく、その全てを合わせた動作だった。

単純に二倍ほど増速して体当たり。

黒髪が数本宙に切れ飛び、突き出された肩が胸骨と肋骨を纏めて押し折る。女性特有の薄くしなやかな筋肉の向こうで枯れ木を折る音が響く。同時に湿った音も。目標を見失った魔力炎が背後で爆裂して双方の髪を掻き乱した。

「ガハッ」

血反吐を吐くシグナム。幾本も折れた骨が内臓を酷く傷つけていた。

あと一撃。追撃しようと足が出た瞬間、しかし稼がれた時間でフェイトが詠唱を終えていた。斧形態のバルディッシュ・アサルトを握ったフェイトの周囲を黄金の魔法陣が取り囲む。

カートリッジが二発弾かれ、黄金が一際輝いた。

『Ready』

「トライデント……スマッシュャー!!」

伸ばした手の先に現れた魔方陣から、名前通りの三又トライデントの矛のような直射砲が放たれる。

「ちっ」

三又の幅は大きい。上から降りかかる魔力砲撃の中心の一撃のみ、手を翳して防ぐ。金の魔力は黒川を飲み込む事無く飛沫を上げて拡散し……、

「おいおい」

拡散しきる事無く、それどころか上下の二本が焦点を見つけたかのように収束した。

轟音。

衝撃波が荒れ狂いびりびりと空が振動する。

人一人など軽く炭化させるほどの電撃と、もはやちよつとしたミスイル並みの大輪の爆炎が咲いた。

「——やったか？」

「手応えはあったけど……」

胸を押さえ苦しげに息をつくシグナムをフェイトが支える。

その時、上空を吹き抜ける強い風が煙を攫った。

「——そんな」

「AMFでもあるまいに……」

そこには服すら焦げてない姿。

傷一つ見当たらず、せめて顔色でも変わっていれば救いはあったが、それすらない。

フェイトは驚愕を隠せず、シグナムは込み上げる血を飲み下して剣を構えた。

両者共事此処に至り、敵を大きく読み違えていた事に気付いた。

二人共に次元世界でも有数の魔力保有者であり、攻撃に注力すればフェイトが傷つけられなかったと言う異様な防御力も突破できると考えていた。まして超一流の古代ベルカ式の使い手たるシグナムもいる。全力なら、どんな強い相手にだって勝ってきたと。なのに。

あろう事かシグナムが二合と打ち合えず、親友であるなのはのエクセリオンバスターとタメを張るフェイト最大の砲撃魔法トライデントスマッシュは、防御魔法無しの直撃でノーダメージ。

あの闇の書の防衛プログラムでもここまで出鱈目ではない。聖王のクローン体であるヴィヴィオがもつ自動防御技能「聖王の鎧」を思い浮かべてしまう程だった。

「我々だけで来たのは失敗だったかも知れんな」
「でも今更だよ」

言外に戦闘続行を感じ取り、ゆつくりとバルディッシュが形を変えてゆく。

『Drive Ignition. Zamber Form』

斧から大剣へ。機械音声が変形を告げる。

『Full Drive』

そこから大剣が片刃の長剣になり、

『Limit Break. Riot Zamber Sting
er』

柄尻をワイヤーで連結された双剣となった。

「あんな人には、負けられない」

シグナムも友の強い言葉に痛みを忘れ領いた。

「ああ、私とてやられっぱなしでは将の名が泣く。レヴァンティン」
『Ja...』

白鞘が格納領域より展開されレヴァンティンが収められる。刃を下ろした訳ではない。些かも衰えぬ剣気がそれを否定している。

「カートリッジ、ロード」

『Explosion!』

ハンマーが葉莖の尻を叩く。激発。

機構から連続して火花が散り三つ葉莖が煙を噴いて弾き出された。しかし炎は鯉口から漏れず、鞘の機能だろう内部で魔力圧が爆発的に上昇してゆく。押さえ切れない熱気がゆらりとくゆった。

「守護騎士筆頭、『烈火の将』シグナム。炎の魔剣レヴァンティン」

「時空管理局執務官、フェイト・T・ハラオウン。バルディッシュ・アサルト」

「参る」「いきますー!」

「セルフで盛り上がってるな」

現状で敵わないなら逃げるなり何なりすりやいいのに。そして周囲に警戒を促しつつ情報収集に徹するのが賢く常識的な選択だろうに、何故にそこで勇者的盛り上がりを見せつつ突撃を選ぶ。

残念だが金髪女と桃色侍は単純な造りのようだ。

この距離では瞬間移動に見えもするほどのスピードで飛び込んでくる金髪女改め「フェイト執務官」。いや長い。ハラオウン？ 似合っていないな。金髪女でいいか。

しかし機動力こそ高いものの、接近戦で物を言う運動性が非常に劣悪のようだ。高速直線移動で標的に接近しすれ違い様に切り裂く、あるいは至近で急停止しつつ剣を振り下ろす、それしかバリエーションがない。肝心の剣術自体がお粗末かつ、魔法使いとしての応用を利かせた射撃の併用が無い。俗に言う魔法剣士の戦い方——誘導射撃と剣の一人連携とか——が出来ないらしい。……いったい彼女は何になろうとしたんだ？

と、つらつら考える脇で金髪女は必死に剣を振っていた。

どうやら双剣はコードを通じて籠められた魔力を移動できるらしい。ようは片方を弱くしてその分もう一方の威力が上がる。手数で叩いてみる戦術っぽいけど、役に立ってんのかと聞きたくなる微調整を矢鱈と繰り返している。割と神経質なようだ。どうでもいい。

確かに双剣は扱えるなら優れた武器だ。

生まれた世界でも世界的・歴史的にポピュラーなスタイルであった。

利き手と逆の剣で防御し、利き手で刺す。力は剣一本に当然敵わないが、逆にレイピアなどの軽く素早い動きの武器とは非常に相性が良く、盾ほど重く嵩張らないのも利点に拍車をかけている。

変な使い方をしなければ有用なのだが……、見る限りは我流。正直振り回していると表現できるレベルなわけでした。

「見るべき所は無いか」

「くっ」

体捌きと片手で余裕を持つてかわせる。戦い慣れてはいる様で押す引くの判断はつくのだが、それが経験と技量で勝る相手に通じる筈も無い。

ところで非常に気になるのだが……

「いや、それにしてもアンタ恥ずかしくないのか？」

「馬鹿にするか！」

「するだろう、何故に脱ぐ」

「——え？」

素晴らしく隙が出来た。

いやな？ バルディツシユとやらが変形する度にマントやら服やらがストリップ張りに消えていくんだよ。もう胸の形まで丸解りのレオタード一枚。知り合いだったら気でも狂ったかと心配する所業だ。彼女には露出を諫めてくれる友人は居ないのか？

「適当、一本」

声に応じて「穴」から滑り出た剣を掴む。先の世界でギルガメツシユの宝物庫からコピーしたデータを、戯れに削り出した粗末な鉄剣へ焼き付けた物。宝具としては機能するが、純粋な性能は”お粗末”の一言。それを無造作に振り上げ振り下ろす。

大雑把極まりない動きだが、人の反射速度で避けられるほど鈍くは無い。

やっとなに返った金髪女もこちらの膂力は承知している。全力で

防御と身体強化に魔力を振り分け刀身を交差させてガツチリ受けた。
「えっ!？」

意外を表す驚いた声。
原因はわかる。

「軽かったらう?」

そう、この一撃に叩き潰す力など入れていない。
力など必要ない。もう、彼女は動けない。

金髪女も異常を悟り顔色が変わる。

罅迫り合いの形だが、力量が開きがあつて尚且つ両者が先を読める程度に戦い慣れていた場合、押すにしろ引くにしろどうやった所で動いたら切られるのが分つてしまうのだ。それも身体が直接、誤魔化し様も無く理解する。

まあ今は程よく力も掛けている。相手の剣に掛ける力を接触した刀身で少し逸らし、関節や筋肉が「居付く」方へ誘導してやれば、身体自体が力が出る安定した形から動きたがらなくなる。なにせ命掛かつてるし。

古今類を見ないしよもない理由で危機的状況に陥った金髪女。
蒼い顔色で脂汗を流す彼女はもう放つて置く。

もうすぐ後ろにアンコールが来ているから。

「はあああああああああ!」

一刀両断。

空気の震える裂帛の気合と共に鞘から抜き放たれる業火の刃。

桃色侍は剣技としてみれば金髪女と似たり寄つたりな技量でしかないが、一撃入魂というやり方だけは妙に上手い。まるで以前暇つぶしにやった狩猟ゲームの大剣使いだ。

一撃が重くその割りに抜きが早い。だけどその後の切り替えしや防御に大きな難があり、本当の意味で接近戦には向かない。言うなれば一撃離脱の重攻撃。

……なんだか戦闘機ファイターではなく攻撃機ストライカーをイメージしてしまう。

いかん。戦闘中の考え事は悪い癖だ。ほら、炎の居合い切りがすぐそこに。

一流と呼ばれる技量に魔力の強化が加わった事により生まれた真紅の一閃。

古代ベルカの闘法の基礎である、身体や武具の魔力強化を己の力量限界まで行使しての一撃。

真円を描いた切っ先は過たず男の脇腹へと突き立ち……

澄んだ音を立てて折れ飛んだ。

最上級のアームド・デバイス、それも長い年月通し碌に破損すらしなかつた相棒が、折れた。コアや機関部こそ無事なもの、補助や術式すら削って戦闘力を求めたデバイスにとつて刀身の破壊は致命的だった。

自らの魂とまで呼んでいた、レヴァンティンの大破にシグナムは凍りつく。無防備なその首を黒川の手が掴んだ。

「ガッ!？」

容赦なく指は食い込んでいく。

それを外そうとする手に握られたままの、折れたレヴァンティンを見て黒川の口から落胆が零れた。

「玩具か」

その言葉にシグナムの目がカッと見開かれる。剣士の魂に対してよりもよつてオモチャとは……己の剣に対しての、ひいてはシグナム自身への最大級の侮辱だ。怒りで目の前が真っ赤になる。しかしシミシと軋む、今にも折れそうな頸骨が彼女に自由を許さない。

「可変機構、それも単純な二形態ではなく複雑な複数形態への変形。ただでさえ大きく強度に劣る可変機構を、よりもよつて強度が生命線たる近接武器に選ぶとは……よほど折られない自信があつたかまともに剣を合わせる気が無かつたか」

実際の所はそもそも今の次元世界より技術的に優れた、古代ベルカ製の名剣《レヴァンティン》が斬りつけて逆に折れるような非常識な存在が無かつただけだ。

加えてシグナムとはあるロストロギアに搭載された魔導プログラム体。レヴァンティンとて彼女が選んだのではなく、そのようにプログラムミングされただけに過ぎない。

それが黒川の未再生記憶領域にあるシグナムの真実だ。

その時、死の恐怖を振り払う勇氣ある絶叫が。

「うっ、ああああああああああああああああああ!!!」

金髪女だ。蒼い顔色のまま無理矢理剣を振り飛び退いた。間近で感じた命の危険に息が荒い。もつとも気を失わぬだけ立派なものだ。金髪女は失礼か。

「まさか動くとは思わなかった。しかし顔色が悪いな?」

「シグナムを離せええええええええ!」

機関部がスイングアウトしカートリッジが排莖される。即座にスピードローダーが叩き込まれ、総数六発の弾丸が再装填された。

「バルディッシュユー!」

『yes, sir Riot Zamber Calamity』

カートリッジが弾かれ更なる魔力が迸り、双剣が連結されて一本の剣を形作る。以前とは違う先が二股に分かれた雷大剣。

黒川は首を捻った。何故にこうも武器格好をやたらと変えたがるのだろうか、と。

しかし、これは戦いに関係ない疑問である。

今しがた自制を促したばかりでまた考え事とは救いがたい。戦闘で繰り返される空の派手な爆発に、都市部から幾つか近づいて来ている反応もある。到着すれば面倒が増えるのは目に見えている事でもあり、ここを簡潔に片をつける事にした。

す、と指先が黄金の魔力を撒き散らすフェイトを指す。

「金髪女、いやフェイト何がし。魔法戦において重要な事とは何か?」
当然答えなど無い。

刻一刻と死へと堕ち行くシグナムを救う為に宙を駆けるフェイト。その速度は正に雷光、人の目に映らぬ速度の域へと踏み込んでいた。大剣を手に大気を引き裂き空を一筋飛ぶ姿は、見る者が戦乙女と見紛う凛々しき。

しかし彼は万人が目を奪われる美に頓着しない。

「俺は知覚と操作だと思っ」

フエイトの速度域へ同調しつつ、最後の工程を編み上げた。

『Warning!』

極限の集中と、身体が耐えうる限界の速度域。目標以外が消え去ったその世界にバルディツシュの警告が響く。

あぶない？

なに？

警告。

危険？

バルディツシュは他のデバイスと比べて無口で、強い声など出した事は殆ど無い。そのバルディツシュが上げた最大級の警報に、咄嗟に何が危険かも分らないまま回避しようとした。

み、きり。

加速した意識に、自分の身体が上げる悲鳴が奇妙にゆっくりと響く。

痛みが無い異様な感覚。

急に横方向へ噴かしたアクセルでぶれた視界の隅、今さっきの進路上に透明な何かがあったのが朧げに見え、それが視界の逆側にもう一つ見えて……

フエイトの意識があつたのは其処までだった。

指差す先で金髪女改めが血を撒き散らし、宙で横転する。意識は飛んでいるようだ。力の抜けた手足が遠心力に負けて広がり、回転しながら落下していく。

その様子は高速で事故を起こして吹っ飛ぶ車両を思い起こさせた。事実、行ったのはそれと同じ様な事。

ひたすら速度を重視した相手の進路上に、正確に、魔力で障害物を構築しただけだ。

大きさも要らなければ動かす必要も無い。ただちよつとした硬さがあれば、あとは銃弾並みのスピードで突っ込んできた生肉が勝手に弾けてくれる。

正面とは別の透明なブロックがある方向へ咄嗟に跳ねたハラオウ
ン。

薄い脇腹がブロックぶつかり、そのままごっそりと腹部の肉と、そ
の奥に収まっていた内臓を残したまま駆け抜けた。

破れた腹腔から腸の尾を引き落ちてゆくハラオウ。あれは間違
いなく死ぬだろう。衝撃で既に心停止している可能性が大だ。片手
に握った桃色侍もそろそろダメだろう。

ところでちよつと待つてほしい。

極めて今更だが、

——休暇と気分転換に来て、何ゆえ美人さんを殺してるんだろう
？

いや女かどうかでなくて——確かに男と女どちらが気が滅入るか
と言われれば女だが——言いたいのは殺人という行為をするに至り、
その経緯に納得できるかという問題だ。

つまり成り行きでヤツちまったというのは気が咎める。

とりあえず……

明くる翌日。

バルディツシュ、レヴァンティンの救難信号を本局より脱出した高
町なのは一等空尉が受信。JS事件で負った深刻な後遺症に苦しみ
ながらも飛行魔法により現場に急行し、郊外の森林地帯にて意識不明
の両名を発見した。

二者は記憶の混濁が認められたものの至って健康で、一両日には現
場へ復帰している。

一週間後、高町なのは他数名を除いた機動六課は、崩壊する時空管
理局から逃れるように第97管理外世界『地球』へと渡った事が確認
されている。

第五章 01 人類滅亡の決まった世界 (???)編

「ほう、触覚とな。確かに素製の自動人形(ザインフラウ)なら触覚だろうが痛覚だろうが味覚だろうが付けられるか。そりやまた人間性を学ぶにや良い教材だ、色々と違うもんだろ?」

「未だ実装稼働時間は短いですが多数の発見があります」

「知覚感度を落とすともつといいかもな」

「そちらも、先だって実行いたしました」

「生身のレベルは不便だったろう?」

「小指が……」

「ああ——足か」

「痛いございました」

そりやまたのつけから災難で。

「——ところでマスター、私はお笑い芸人を目指そうと思います」

「いきなり何言い出す!」

「書物によれば『人を笑わせるには人の心を知らねば』とありました」

「ああ本ね。どっか壊れたかと思っただぞ」

「私の本体に時間経過による損壊はありません。……もしや今のはジョークというものでしたでしょうか?」

「違うよ……」

とぼけた問いにがつくりと肩を落とす。

(変な所で素直すぎる、どうしてこうなった?)

昔はもつと聡明そうだったと記憶しているが、もしや人に近付くとはこういう事かと愕然とする。しかし自分で進めた手前、もうちよつと何とかならんかとは言えない黒川だった。

「で、アレは何なの？ あなたの図書館にあった地図と違うようだけど？」

姉妹の希望により、急遽上映が始まった映画祭り。

アニメからアクション、サスペンスときて最後にロマンスの有名処を総なめした四日間の巡礼。女性特有の妙な熱意は、俺が生まれる千年以上昔から変わっていないと証明されたわけで。

ウンザリするほど見飽きた暗幕の覆いが除けられた今、ようやつと開放された俺はぐったりとテーブルに伏していた。そこへ掛けられたのが今の質問だった。

「今更かよ。おせえよ……」

「二けっこうおもしろかったわね」

「そうですね。本も良いですが偶にはこういうった映像作品も悪くありません」

「いつくら何でも見すぎだつってんだよ」

「マスター、女性とはそういうものと書籍には……」

「わかったわかった。だなあ、そおいや女ってそんな感じだったなあ。女の親交なんぞ昔過ぎてもう忘れてたよ。——で？ なんだって？」

「アレよ」

疲労した頭で聞き返した。

指差しは宇宙ステーションの窓ガラスを越え、宇宙空間を隔てて地球を示していた。

どこも指定するでもない漠然とした問いは、だがこの世界の住人もなければ誰もが問うてしまうものだろう。

遠く地球の表面を覆う海と陸。

その陸地が、まるでベタ塗りに塗りつぶしたように茶一色だったのだ。

彼女達が最初にきれいだと言ったのはアメリカ大陸がこっちを向いていた時で、今はアジア大陸の辺り。本来ならあるはずの雲殆ど無

いという異様さと、それによって見えた眩暈がするほど広大な茶色。海の青がある事で余計にそれが目に付いた。

そこには本来、植生や地形による高低差によって生まれるコントラストが全く無かった。

見ているだけで薄ら寒いものが背筋を這い登ってくる、そんな光景。

「ああアレ。アレなあ……」

「なにをもったいぶってるのかしら？」「さっさとお言いなさいな」

せつついて来る姉、ズ。

でももう予想がついてるんだろう、口元が少し楽しげに吊り上っている。

いやいや、予想といつても別にあの茶一色が何かとかじゃない。それではなく、アレが、ああなった原因こそがこの世界へ来た目的なのだと悟ったからだろう。

だからこつちも精々もったいつけて言っただけでやった。

「アレやったのな——異星人なんだよ。」

エイリアン。

さつき見た映画に出てたろ？ 別の星からの侵略者、ってヤツ」

整ったまぶたがふつと大きく開いて、きれいな瞳が良く見えた。以前のメデューサの魔眼は『宝石』と呼ばれたが、三人共に負けず劣らず魂を引き寄せる美。得した気分だ。

そして一拍おいて、ふふふつと楽しそうな笑い声。

困ったように眉尻を下げたメデューサと別に、実に楽しそうに笑うエウリュアレとステンノ。

「まさか映画で見たばつかりのが出てくるなんて思わなかったわ」「あんなのと同じ様なきもちわるいバケモノがたくさんいるのよね？」

「もちろん、地獄の窯が溢れたってくらいどっさりとな」

「アレをみる限り、ずいぶん負けてるようね？」

「ああ。負けも負け、ボロクソに負けてるな」

「ふふ」

薄い微笑はもがく昆虫を見下ろす人の笑み。

ようはロクな笑い方じゃないんだが……絶世の美（少）女はこれでサマになる。

「絶望的な戦況」「必死に抗う男達」

「楽しめそうか？」

「ええ———すつごく、好み」

「いやはや、よろこんで貰えて何よりだ。っはは、退屈なんて言葉なんぞ出んぞ」

「ええ」「本当に」

くはっ、ははははは。ふふ、うふふふ。と不気味な声が紅茶に波紋を残す。

「トウリ、では……」

”敵”となりえる存在がいる。

困った主と姉に苦笑いを浮かべていたメデューサも、話から自分にとっての要点を抜き出して表情を改めた。

黒川はそんな彼女にニヤリと返す。

「そうだ。三人の初めての異世界訪問は」

———エイリアンぶっ飛ばして人類を救ってみよう———

ぴーんぽーんぽーんぽーんぽーんぽーん

その日、世界中の人間という人間の耳に間の抜けた音が届いた。

日々を何事もなく暮らす人々の耳に。

苦難を越えた未来へ向けて行動する人々に。

異星人に侵される今を憂う人々に。
溢れかえる異形のバケモノと戦う兵士達に。
人種国籍関係なく、誰も彼も分け隔てなく、その”放送”を聞いた。

『こちらは種族保存機構です。

現時刻においてホモサピエンス種の絶滅が確定致しました。
つきましては、これより絶滅確定種に対する保護制度、一度限りの
”制止”を適応し、種の保存に努めます』

正義道徳仁友愛。

悪党非道人非人。

判で押したようなお題目はツマラナイ。

そうは思わないか？

人は知らず知らず効率的に人生を過ごしてゆく。

学生、就労、婚期、定年。

様々な社会制度の存在が区切りとなって自覚を促す。

”自分は——へ成れるだろうか？”

”その為には時間を有効に使わなくては”と。

生き急ぐと言うほどでもないが、一切気にせずのんびりとも言え
ん。

ところで……私は事情により時間の制限を引き千切ってしまった。

幸いな事に物語に良くある記憶容量のオーバーフローなどは無い。

まして千年を越えても生に飽きて世を倦むなぞ欠片も無い。

日々楽しく健やかに過ごしている。

楽しいと思ったら笑い、

悲しかったらこっさり泣くかどうにかしてしまい、

腹が立ったら殴ったり八つ当たりし、

そうでなければまったく音楽を聴いたり本を読んだりしている。千年どころか万年続いたとて何の問題があるろう？

世界とは、常に変わり続けるものなのだから。

未来とは、未知を踏みしめることなのだから。

話が逸れた。

こうなってみて、やはり改めて思う。

価値観とは社会という個を覆う傘の裏に書いてあるのだと。

「いきなり騙りかたですか……」

「なにを人聞きの悪い。おおよっぱな方針が人助けっぽい方向向いてるから気にするな」

ふう、とため息をつくメデューサ。表情は呆れと諦めが等分で出来ている。短い付き合いながら既に諦めが含まれているあたり、少しばかり我が身を振り返るべきかとも思ってしまうが……、三つ子の魂百までと言いついておこう。

「さて……こんな感じで進めて、そんでもって基地（ベース）での客の対応は任せていいんだな？」

「ええ」「十分よ」

「……」

「――？」

「私が」

生活破綻者、というより寄生生物と似たり寄つたりな虚弱者。言いだしっぺではあるのだが、そんな二人の自信はいまいち信用できず、思わずとつた確認に、家事から護衛まで何でもござれなできる末妹が『任せてください』と頷いた。

なら安心だ。どうせステンノとエウリュアレも最初から面倒なの

は、全部メデューサをこき使って済ますつもりなんだろうし。

あれから、これからどうするかを話し合った。

俺個人としては基本的に前線で大きく動くつもりは無い。今のところ。あくまで今回の主役は三姉妹、俺は脇役。

で、色々積極的な案は出たんだが。

結果は実働は大雑把にこの世界の住人に任せようという事になった。

要はアレもコレもとやつちまうとよろしくない。そういう事だ。

勿論そうなれば顔を合わせるような接触も増える。なにせこの世界の人間の殆どは実状はともかく、信用やらを完全に投げ捨てられるほど現状に切羽詰ってるようには見えないから。最低限のこちらとあちらの擦り合わせは必要だろう。

ただそこは”趣味”と実益を兼ねて双子が立候補。どっちに比重を置いてるかが分りすぎるとか色々と不安にならずにいられんが、まあどうなろうとそれも経験だろう。

さて、忙しくなるな。手始めにまずは……

『世界の皆さん、こんにちは』

ハンガーに収まったF-4の大腿部へレンチ片手に頭を突っ込んでいたダン・モロは、機械油に汚れた作業服の袖で汗をぬぐって天井を見上げた。

この機械油臭い格納庫に似つかわしくないキレイな声は、一昨日にも聞いている。あの時もこうして突然スピーカーも無いのに空中から声がした。奇妙な声だった。なにが奇妙かって、格納庫なんつー音が響きまくる場所だったのに一切反響がなかったからだ。

それだけじゃない。いきなり種族保存機構とか言われても、精々が

BETAとの戦闘で心をやられた兵士がヤクキメて馬鹿やつたくらいにしか考えてなかった。基地の誰もがそんなもんだった。けど顔真っ赤にした憲兵隊が風潰しに基地の中ひっくり返しても問題のアホは見つからなかった。あの馬鹿ども、最後には戦術機の装甲ひっぺがして下にいないかとか言い出して、おやっさんのカミナリ落とされてたが。

そうこうしたら、どうにもあの声が聞こえたのはこの基地だけじゃねえって事がわかった。それも他所ントコじゃ偵察に出てた戦術機の中にも聞こえて、それで回収用にオートで記録採り続けるデータボックスにすら記録が無かったって話だ。もちろんちゃんとモノは動いてたって話でだぜ？

こうなると話が妙になってくる。

もし仮に奇跡的にヤク中が馬鹿やって奇跡的に雲隠れして、しかもそのタイミングで複数のデータボックスに欠陥が発覚したってんなら、まあ奇跡的な確立だが、もしそうなら問題だ。

それで、そうじゃないならもつと大問題だ。

ここで一日経ってた。つまり昨日の夕方。謎の放送があつてから一日掛けてようやっと、こりゃ何かオカシイって誰もが気付きました。

そうなると馬鹿がやらかした不祥事だから恥は隠しますとか言つてられねえ。あっちこっちの基地と情報交換が始まる。上は上で。下っ端は下っ端で。それぞれ表裏合わせた横の繋がりがつてヤツで話がやり取りされた。

結果、解つた事はふたつ。

ひとつ。

ちよつと信じられない広範囲で、たぶん世界中で民間人だろうと何だろうと誰もがほぼ同じ時間に、いや、どうも”完全に同じ時間”にあれを聞いてたらしい。

ふたつ。

あの放送には音源が見当たらず、そして聞いた誰も彼もが自分の”母国語”だったと主張している事。

どつちも馬鹿げた話だ。

特にふたつ目。正直なところ、無理にでも予想しろとか言われりや「あの声は一人一人の頭に直接話しかけた」とか空想超えて妄想バンザイな予想しかたたねえ。軍隊でんなこと言おうもんなら上官にしかたまぶん殴られんのがオチだから誰も言いやしねえが、でもそれくらいのはファンタジーじゃなければ説明できないってのも事実。

「……ま、俺みたいのが考えてもわかるわけねえんだけどな」

頭もよくねえのはわかりきってるしな。戦術機の適性も無かったし。まあそれはいいんだ。あんなグロイ化物に食い殺されるとか冗談じゃねえし。

「おいダン！ 集合ださっさと来い！」

「ういーす！」

また憲兵どもか？ やれやれ。

『こちらは種族保存機構です』

「——認めるしかないか？」

照明が落とされた戦闘管制室で基地司令は呟いた。

軍帽のつばから覗く鋭い眼差しには、壁一面を埋める三十を超えるモニター・センサー群に異常は見受けられなかった。各オペレーターからも何の異常も報告が上がらない。

今も異常は続いていた。仮にもここは国際連合軍の中国大陆における対BETA最前線である。相応以上の装備設備が整っているのだが、どのような手段でこの“放送”が成されているのか欠片も判明しない。

そしてそれは、おそらく地球上の全ての国家にも当てはまるだろ

う。戦働きで老齢まで勤め上げた彼の直感が、この事象の難解さを悟っていた。

(これが本当なら、まるであの時の様だな)

引き下げた軍帽の影で苦笑いする。

彼がまだ若造と先任に呼ばれていたあの頃。WW2の終結から僅かたった二年で創設された宇宙総軍に配属された。当時は戦後の復興さえ碌になされていないなか、世界中が無残な焼け野原を忘れたがるように宇宙へと”何か”を求めて手を伸ばしていた。

十年。

十年余は何もなかった。

有力国がこぞって開発に巨額を投じた多段式大型ロケット、軌道往還機、宇宙ステーション。アメリカが開発したスーパーカーボン。様々な進歩があった。

更に宇宙軍で実しやかに囁かれる地球外生命体発見の噂。

『何とかなる』

今思えば馬鹿らしい話だ。だが、当時は誰も彼もが傷口から目を逸らして浮かれ騒いでいた。

だが何百万何千万が死んだWW2から目を逸らす世界への鉄槌のように、あの事件が起きた。

1967年

月面、”サクロボスコ事件”。

火星で発見された生命体は既に周知の事実となっていたが、国際恒久月面基地「プラトール」の地質探査チームが、サクロボスコクレターを調査中に、火星の生命体と同種の存在を発見、その後消息を絶つ。

誰もが、浮かれた頭に冷や水を被せられた気分だった。

それからすぐ、後に第一次月面戦争と呼ばれる戦いが勃発した。

BETA大戦の始まりだ。

そこからは地獄の連続。

連中がBETA:Beings of the Extra Terrestrial Origins which is Adv

rsary of human race——『人類に敵対的な地球外起源生命』と命名されたのは当時はどうでも良かった。化物の呼び方を気にするぐらいなら神に祈っていた。『どうか襲われませんように』と。

月面、宇宙空間で襲われればまず助からない。助かりようが無い。来る日も来る日も生理的嫌悪をもよおすグロテスクな化物の群れから生き延びる日々だった。それなりにあった月面基地はあつというまに、どこもかしこも化物に飲み込まれていった。生存者など一人もない。

少数がシャトルで地獄となった月面から脱出し、その中に入れた事に神へ感謝した。

だが地獄が追いかけてきた。

地上に降り注ぐあの化物の巢。

地上ならと期待した空爆という手段が、射程100kmというレーザーを放つ光線級の出現により脆くも焼け落ちたあの絶望。

陸戦最強の戦車の三倍以上の速度で突進してくる数千体の突撃級。砲弾を弾き返す複合装甲を容易く齧り、パイロットをむさぼる戦車級。

巨大な動く要塞といって相違ない要塞級に、小回りの利く要撃級。

機械化歩兵を容易く殺戮する小型の闘士級。

戦って、戦って、戦って。

その全てが負け戦だった。

この歳になるまでだ。

あの異星生命体との接触と、今現在起こっている未知の存在との接触は似ている。

そう彼は感じていた。

『これより第一^{ファーストバッチ}次対処を施行いたします。

皆様方には現時刻より、統合情報網へのアクセス権が発行されません。

統合情報網は世界中のほぼ全ての情報が掲載され、リアルタイムで

随時更新されております。接続方法は”使用したい”との明確な思考のみで起動いたします。詳しいご利用方法は右上に常時表示されるヘルプをご覧ください』

「!!」

厳しく顔が引き締まる。

これは明らかに謎の存在に繋がる重要なポイントだ。

「まだ誰もやるなよ！ いや無理か。誰でもいい、放送で使ったという者を呼び出せ！」

ゆるぎないトップが下した指令はすぐさま成された。

万が一の可能性に備えて防爆処理された部屋に入れられた衛士は、確かにこちらの合図で空間に光る画面のようなものを出現させたのだ。

当面の直接的な危険は少ないとの判断から、すぐさまこの画面の研究が（といつてもどのような物か程度しか調べられないが……）進められた。

驚いた事に、この見て触れて誰でも母国語で読める空間投影式画面としか言いようの無い理不尽な存在には、本当に世界のほぼ全てが記載されていた。とある衛士が自分の基地を調べ、冗談半分で基地の予算の使い道を調べた事で発覚した。

司令もこうなるとアヤシイなど言っている場合ではない。

己も使用に踏み切り、そして驚く。

使用した衛士達の報告にもあったが、確かに画期的なインターフェースで驚くほど使い心地がいい。後で従来の情報端末を使用するのが怖いくらいだ。

まあ、それはいい。検索する。

すぐに出てきた。

——本当だった。

流石にプライバシーなどの部分は守られているが、明らかに表に出てはマズイたぐいの情報がまったくのフリーで閲覧できている。

背中を冷たい汗が流れ落ちた。

(これは……なんという事を……！)

種族保存機構とやらが何を考えてコレをしたかは分り過ぎるほどに分る。大陸一つ失おうとしている現在で、なお内輪揉めばかりする世界を”膿を出す”ことで纏めようというのだろう。だがしかし、薬も過ぎれば毒となる。

今回のこれは、彼の目から見て明らかに『猛毒』だった。

下手をしたらBETA以前に、これから起こる未曾有の混乱で人類はとどめを刺されるかもしれない、そう思ってしまう。

それだけは止めなければならぬ。何十億という犠牲を出しながら戦い続ける人が、このような馬鹿げたことで滅んでいいはずが無い。

……だが、止めようがない。

「どうすればいいのだ……」

ただ掠れた声だけがこぼれ落ちた。

『それでは皆様、よき生存への努力をなされますよう』

突如人類に行われた宣言がもたらした物は大きい。

人種や言語の壁、地球の反対側だろうとリアルタイムで情報のやり取りが可能なグローバルネットワークが、個人単位で機材や時間、場所といったあらゆる通常の制約を無視し利用できるようになった。

また、その一切合財全て隠さぬ隠せぬ透明性に、中国大陸の最前線

における物資の横領などを代表とする隠された不正・罪が公になった。

あの放送から一週間。上官高官に対する粛清は世界規模で吹き荒れた。

どうやったのか、誰一人それがどのように成されたか知る者は居なかったが、統合情報網には過去の完全に抹消された記録までが記載されており、あらゆる不祥事は専門に追跡調査を行ったと言われても疑問に思えないほど、徹底して丸裸にされていた。

誤魔化しようも無く正確精密詳細な証拠が閲覧可能とあり、粛清は必然と世論は傾いていた。

もつとも証拠の全てと聞いていい突如謎の存在からもたらされた情報が、完全に信頼できるかと言われれば、それは疑わしい。しかしBETAという脅威を肌で感じた事がある者にとって、これは千載一遇のチャンスだったのだ。

仇を取りたい。

故郷を取り戻したい。

家族を守りたい。

死にたくない。

BETAを殺したい。

なのに許されない。

国家のメンツ？

国家の利益？

個人の主義主張？

そんなこと言ってる場合ではない。そう現状極めて怪しい未来を憂う人間は、実のところ非常に多かったからだ。

1999年現在。

50年に亘るBETA戦争は人類勢力の敗北に終始し、昨年アジア・ヨーロッパ大陸を合わせた世界最大の大陸、ユーラシア大陸の陥落により人類敗北の気配はより一層濃厚となっていた。

犠牲者は既に世界人口の六割を越え、中国の化学物質・金属・レア

メタル、中東の化石燃料など、近代において重要な物質の世界的な一大埋蔵地の多くがBETAの支配地域へと落ちた。

幾度と無く繰り返された反抗作戦。

それらは一つとて実を結ぶ事無く、幾千幾万の将兵の命と共に潰えた。そんなユーラシアの地獄の戦線を知る者達は誰もが歯痒く思っていた。

そんな彼らとて当たり前なら軍規に国法に権力にと雁字搦めに縛られ、とても表立って非難などできる立場ではない。

しかし、チャンスが来た。

それも信じられないほど大きなチャンスが。

何の準備も無く、勢いだけで声を上げてでもやれると思えるだけの機会が。

このさいこれが別の宇宙人がやった事だとしても構わない。要は利用できるならしてやる、やる事やらないんならどかして俺がやる、そういう気概が人々に残っていただけの話だった。

この一週間を世界的にみれば、後方国家の政治家などは被害が少なく（無論悪評が立ち政治家生命などは危機的だが、最低限生命が奪われないという程度で）、BETAの危険に晒された地域では、徹底して速やかな『排除』が行われる事となった。

この未曾有の混乱による死傷者は、正確な数は判明していない。

ただ、少なくとも世界中で十万人を超える死傷者が出たのは確かだ。

「これが神の視点なのでしょうか……」

メデューサが俯く。藤の花を思い出させる色がざらりと揺れて、憂い顔を隠した。

「滅びの運命を覆す。多くの人を助ける目的とはいえ、その過程で少なからぬ人が犠牲となってゆく。——本当にこのような必要があつ

たのですか？」

振り返るその問いはその場しのぎの嘘を許さない、何か鋭いものを突きつけていた。

傾けたカップを置き、真摯な、しかしあまり意味の無い問いに答えた。

「死人の数の大小を気にするか？ 一人死のうが万死のうが関係あるまいに」

「……本気で、本当にそう思っているのですか？」

すつ、と目が細くなる。

「所詮他人だろう。それを気にするのは、蛇が薄くなったからか……？」

まあいい。必要があるかと言われれば必要ない犠牲だ」

「だが決めただろう、この世界の者に任せるところは任せると。全てをこちらでやるのは簡単だがそれでは為にならないと。それは今失われる人命と未来に失われるかもしれない人命を秤にかけて、今の命を切り捨てると同意したという事でもある」

「確かに気を使い細心の注意を払えば世界に死者など一人も出さん事は出来るし、たとえ死のうと肉体ごと欠片もなくなろうと復活は出来る。しかしその義理はあるか？ こちらはこちらの目的があつてこの世界の情勢に手を出したとはいえ、元よりこの世界で人類の滅亡は避け得ない未来だ。それほどにBETAは強大。仮にここで残りの人口の半分を捧げようともそれで種としての寿命が何十年かでも長く引くというのなら……望外の奇跡と言われこそすれ、責められる筋合いなど無かろうに」

頭では分つても忸怩たるものがある。葛藤に苦しむ顔がそれを示していた。

おそらく、彼女が言っているのはそういう事ではないのだろう。もつと気持ち的な、助けられるのに助けられないという行動自体に思うところがあるのだというのは、よく分る。

サーヴァントだった頃の彼女なら悩まなかつたに違いない。良くも悪くもあの彼女は伝承の怪物『メデューサ』だった。しかし今はこれらの属性を備えつつも、あくまで人間としての魂を核として在る。加え、精神性の変化とは一朝一夕で飲み込める物でもない。それゆえにあの星の住人へ引かれてしまうのだろう。

割り切るにはまだ若い。

良くも悪くも人は慣れるものだ。やがて彼女も、そういった感情を抱かなくなるのだろうか？ そうあなどりと取られかねぬ思いを浮かべ、しかし多様だからこそその価値もまた、認める。だからこそ選択は彼女に委ねなければならぬ。

「……メドウ、あなたはどうしたいの？」

「わたし、は……」

「好きにしろ。むしろそれを含め経験を積む為の訪問だ。ステンノ達の事は俺がやる」

「……すみません、たんなる自己満足にしかならないとは分っているのですが、今回は少し自分で動いてみたい」

「いつてらっしゃい」「がんばってきなさいな」

「はい」

踵を返す彼女へ声を。

「力が要るなら遠慮なく言え、サーヴァント」

「——それでは逆ですね、マスター？」

苦笑の気配。

「ですが、ありがとうございます。姉さんもあまり迷惑をかけないようお願いしますね」

扉が閉まる。

「いいの？」

「いいに決まってる。そっちこそ可愛い妹のたまのわがまま、うれしいだろう？」

「……ええそうね」「でもあなたのその見透かした感じはイヤ」

「そりや申し訳ない」

「紅茶をもう一杯、くださる?」「息のつまる話で肩がこったわ。もんでくださる?」

「む、早速か。仰せのままに」

ポットの茶葉を入れ替えつつ、姉妹の分らない程度に小さく肩を竦めた。

(……いやはや、ちよつとばかり安請け合いだっだかねえ?)

どれほどゴタゴタがあらうと、日夜BETAの襲撃に備える最前線では任務放棄はありえない。BETAは人間の事情など関係ないのだから。怠れば防衛線を食い破られ、また一步後背地の人々が喰い殺されるのだ。

地響きが鳴り響く。

見渡す限りの荒野を合金の塊が踏みしめた。

全高20M、装甲を国軍の黒に塗られた戦術機、第二世代戦術機にあたるF-15C『イーグル』の日本ライセンス生産機F-15J『89式戦術歩行戦闘機・陽炎(かげろう)』と呼ばれる巨大人型兵器が行軍していた。

本来なら距離を稼げる筈の、腰の横へ接続された6Mを越える巨大なエンジンユニット”跳躍ユニット”に陽炎はない。ここはBETAの支配域、光線級の射程内。迂闊な飛翔は即、死に繋がる。ゆえに彼らはセンサーに注意しつつ、横浜ハイヴと名付けられた遠くかすむ異形の建造物を目指していた。

——ザ、ザザザ

先に行われたミサイル攻撃に対する光線級の迎撃を防ぐため、先行

して迎撃される事を前提に撃ち込まれたALミサイル（レーザー照射を拡散させる重金属粒子を空気中にばら撒く）により、無線機がノイズが起こす。

『——ジジー、標先頭が20km地点を通過しました。数800』
「各機、戦闘用意」

『『了解』』

網膜投影式のモニターには共に行軍する第4師団324機の戦術機が、各々36mmチエーンガン（36mm突撃機関砲：RG-36）と120mm滑腔砲（GG-120）が一体となった87式突撃砲や、ロングバレル採用の狙撃仕様120mm滑空砲である87式支援突撃砲を構えるのが映る。

その多くは己と同じ陽炎だが、中には初の国産戦術機であり、我が国が世界に誇る第三世代戦術機、94式戦術歩行戦闘機『不知火（しらぬい）』や、今では旧型となったが世界中で最も多数配備されている第一世代戦術機、F-4『ファントム』のライセンス生産機『撃震（げきしん）』も少数ながら見受けられる。

撃震は生産された多くが配備されていた第8師団が、今年のBET A日本本土大侵攻により壊滅したために数が少ない。おりしも陽炎への機種転換が始まっていた為に再度の大規模生産もなされず、現存稼働機体数は部隊として動けるほど纏まった数はない。だが国の全力を傾けたこの作戦に機体を遊ばせておくなどありえず、こうして連隊に組み込まれていた。

さらに遠くを見れば、また形の異なる戦術機がざっと70機余見受けられる。数にして二個大隊のそれらは、この国では使用されていない外国の戦術機が多い。大多数は国連軍所属機を示す“UNブルー”に塗装されていた。

総勢で400機に迫る大部隊だ。それなりの年月軍籍に身をおくが、ついで見たことのない壮観。戦人として心躍る景観だが、これで今作戦における全戦力の極一部でしかないというのだから驚きだ。

しかし周囲を見回し、この国も余裕を無くしたものだ、と正直に思う。

平時ならば自国の領土を侵略者から取り戻すのに、他国や国連の手など決して借りようとはしなかっただろう。帝国としての誇りが助力を良しとしないのは己もわかる。だが――

大陸失落からこつち、帝国は朝鮮半島からのBETA進行によって攻めに攻められた。

北九州を中心に上陸したBETA群は怒濤の進撃を開始、僅か一週間で九州・中国・四国地方を蹂躪した。

犠牲者3600万人。

日本人口の30%あまりが犠牲となった。

そればかりか、一ヶ月にも及ぶ激烈な防衛線の末に帝都京都までが陥落。東京へ首都を移す仕儀となる。近衛たる帝国斯衛軍すらもこの防衛線で多くの戦力を失い、苦すぎる敗走を余儀なくされた。己の部隊もまた、BETAの圧倒的物量を前に戦線を維持できず、多くの仲間が貪り喰われる中で辛うじて三分の一だけが離脱できた。

あの時どれほど悔やんだ事か。

主脚を損傷し擱坐した僚友の悲鳴に背を向け、逃げるしかなかった己の無力をどれだけ呪ったか。

「……しかし、今ようやくその借りを返す時が来た」

陽炎の腕が背中 of 可動兵装担架システム（通称“兵架”）より、87式突撃砲をもう一丁取り外す。

主動力として搭載された蓄電池とマグネシウム電池の電力により、支持装甲内に張り巡らされた電磁伸縮炭素帯（カーボンツク・アクチュエーター）が伸縮し、人間には扱いきれない巨大な銃器をしかと堅持する。滑らかな動作に愛機の整備の万全を感じつつ、緑のほとんどが失われた荒地の彼方、もうもうと上がりだした砂煙に目を細めた。その時、後列から凄まじい砲声が連続した。

雷光の如き閃光が閃くと、僅かな間において砂煙の中に新たな噴煙が複数立ち上った。

部隊後方につく砲兵部隊の自走砲が砲撃を開始したのだ。

100を越える砲門が連続して火を噴き、化物どもを地表ごと効果的に吹き飛ばしてゆく。この僅かな時間で演習ではありえないほど

の火力が集中運用されている。無線からオオツと此度が初陣の武家の若者の声が漏れた。

だが彼は知っている。あれしきの砲撃では足を止める事など出来ない。

事実、五秒と経たず爆炎の壁から白いモノがゾロゾロと這い出してきた。

信じられないという呻きを無視し、望遠カメラの捉えた映像に集中する。そこにはいかにも攻撃的な形の甲殻を被った巨大な生き物が映っていた。灰色の岩石のような質感の甲殻に浮いた紫の斑点が見るものにグロテスクな嫌悪を煽ってくる。

「――突撃級」

敵意と忌々しさが眩きと共にこぼれる。

『突撃級』

BETAの侵略において先陣を切る突撃兵だ。

全高18Mの巨大をダイヤモンドより硬く分厚く、さらに再生能力まで持つ甲殻に包んだBETA種。攻撃方法はその大質量を複数の脚で支えつつ、時速170kmにも及ぶ速度での突進のみ。もつとも質量と速度ゆえに小回りはまったく言ってもいいほど利かないという弱点があり、冷静にタイミングを見計らい回避しやり過ごしてしまえば、後は煮るなり焼くなりできるのだ。

だがそうは言っても砲弾を弾き返す甲殻による防御力と、戦術機の主脚移動を大きく凌駕する突進速度、何よりも数百数千の数での驀進を目の当たりにした際の、あの圧倒的を越えた、絶望感すら覚えるほどの迫力が厄介すぎる。これに飲まれて体当たりをうけ、乗機ごと命を碎かれた衛士は数え切れない。それは戦術機乗りたる衛士が、世界中で新兵に教える初陣における『死の八分』が、このBETAの先鋒たる突撃級との接敵と言って過言ではない事からも窺えるだろう。

九州・中国・四国地方、どの戦場でもこの兵種の突進蹂躪によって日本軍の戦線は大きな被害を出している。恐怖に吞まれるなど言っ

てその通りにできれば世話は無いが、文字通り地を埋めつくように猛

進してくる化物相手ではそれも酷。まして、これが初陣となる補充兵とて多い。

しかし全てをかけた乾坤一擲のこの作戦において、断じて同じ轍を踏むわけにはいかない。師団長も即座に判断したのだろう、すぐに指示が来た。

「側面へ周る、ついて来い!!」

無理に正面からぶつかる必要は無い。それは愚挙だ。

無論全軍で回り込むわけには行かない。場合によっては脚を返した撃ち漏らしと後続のBETA本隊に挟撃される危険があるからだ。もしも挟撃され、BETA側に光線級・重光線級が多数存在したら……。頭を抑えられた状態での戦闘を余儀なくされ、そして機動性の落ちた戦術機など絨毯のように群がり来る小型種『戦車級』にあつという間に取り付かれるだろう。そうなれば助かる道などない。複合装甲に齧って穴を開ける戦車級相手に、戦術機に施された薄い装甲など意味が無いのだ。比喻でなくこれだけの戦力が全滅する可能性すらありうる。そんな危険を犯せるはずが無い。

ゆえに、まず機動力に優れた少数精鋭を率いて敵軍を横撃し、砲撃と合わせ少しでも数と足を削る。

この任務は口で言うほど易くない。ようは本隊から突出して遊撃しようというのだ。

もしも後続のBETA群に捉まれば、もしも遠方から光線級に狙撃されたら。多くの危険の一つでも現実となれば、かなりの痛手を受けるだろう。だが躊躇する者はいなかった。何故ならばここにいるものは皆、この戦いが帝国の未来を分ける一戦と覚悟しているからだ。彼の指示に応じて一個大隊36機の陽炎が後に続く。

ある程度の危険を割り切り、機動性を重視して超低空の匍匐飛行で移動する。

300Mほどの低空水平跳躍を繰り返し、突撃級の正面から側面へと回り込む。BETAの攻撃目標の選定は幾つか法則性があげられているが、基本的により多く、より高度な電子装備を積んだ存在を目指す。基本的に直進する突撃級は連隊を目指して進み続けている。

部隊が突撃級の側面へついた。

「射撃開始！ このポジションで外すなよ！」

甲殻の無い突撃級の尻へ36mmの弾雨と降り注ぎ、120mm弾が脚部を撃ち碎いてゆく。

「殺すより少しでも多くに傷を負わせろ！ 足が鈍ればそれでいい！」

言いざま放った砲弾が一匹の脚を吹き飛ばす。戦術機の登場以前は戦車の主砲に採用されていた120mm滑空砲は現在でも有効だ。昆虫の脚のような脚部は割れ砕け、人には在り得ざる異色の体液を撒き散した。

その突撃級は甲殻の尖った鼻先でつんのめる様に速度を落とし、次の瞬間には後続に尻を抉られ、血飛沫を捲いて砂塵へ沈む。

『御見事です！』

有言実行の目に見える戦果に士気が高まる。

折りしも本隊との距離が4kmにまで迫り、自立誘導ミサイルの射程圏へと突入した。本隊の不知火の中で、両肩部へ大きなミサイルコンテナを背負ったものがレーザーアレイを煌かる。多数の飛翔体が炎の尾を引いて飛び立った。

弧を描く軌道で破壊の塊が降り注ぐ。

砲撃とはまた違う、大地を打ち鳴らすような轟音が響き渡った。

先の砲撃で抉られた甲殻は再生しきらず次々割れ砕け、炸裂した緋炎は周囲の肉を一気に焼き払った。

(いけるか!?)

これなら損耗無しで切り抜けられるかもしれない。

今作戦、”明星作戦”には二つの戦略目的がある。

一つはBETAからの本州奪還。

そして二つ目は横浜に建設されたBETAの巣、『ハイヴ』の攻略だ。

幸いにしてハイヴ建設の基点となる、月のBETAより落とされる着陸ユニットが落ちたのは昨年。ハイヴとしては未だ早期であり、横浜ハイヴの規模を示すフェイズは1〜9の段階の中で二つ目の「2」。

予想されるBETA総数も少なく、日本海を挟んだことで韓国に建設された鉄原^{チオルウォン}ハイヴからの新たなBETA群が雪崩れ込む危険も薄い。しかも一度取り返してしまえば、BETAの動きが鈍る海の盾が復活するという条件もある。

これらの好条件が、大東亜連合及び国連軍が人類初のハイヴ攻略へと大反攻を決意した土台だ。その結果としてBETA大戦で二度目となる世界規模戦力の投入が決定されたのだ。

然るに、やはり大陸での戦いに比べて負担が少ない。無論あの絶望的な撤退戦の経験を経てBETAとの効率的な戦い方を軍が学んだのもある。だがそれ以上に相手の”数”が少なかった。

現在地は既にハイヴより35km地点であり、他の軍団も着々と突入への包囲網に着きつつある。大陸ならハイヴへ此処まで近付くだけで、突入するだけの戦力を維持できるかどうかとも疑わしい。それほど数の暴力が雪崩れかかってくる筈なのだ。

にも拘らず、ここまで近付いてこの程度。
決して油断は出来ないが、この勢いが続くなら……
撃ち尽くしたマガジンを入れ替える。

「人類史上初のハイヴ陥落、成る」

「ぬうん……っ、——くあー！」

三時間ばかり座り込んでいた身体を伸ばす。

これくらいでこる様なヤワではないが、縮こまった身体を思い切り伸ばすのは、やはり気分がよろしい。

あれから掛かりきりである物をこさえていたのだが、なかなかどうして面倒だったのだ。

在り来たりの物なら、それこそリアルタネ無しでワン・ツー・スリーとやれるのだが、今回は若干面倒な縛りがあったので時間を食ってしまった。

出来上がったのはついこの間実行したファーストパッチに続くパッチ。

セカンドパッチ。

今度はかなり直接的な代物なのだが、お陰でこの世界の技術レベルに変な影響が出ないよう色々と細々した部分に気を使わねばならなかった。その調整が面倒くさいこと面倒くさいこと……。久方振りに簡単に終わらない仕事をした気分。しかしたった三時間程度でこんなになるとは、人間だった頃から見れば処理能力こそ桁違いだとはいえ、驚くほどに墮落したように思う。

さて。技術レベルに苦心したと言ったが、この世界の技術は非常にアンバランスな発展を遂げている。

原典となる作品内で重要なワードがあった。

『手の平サイズの半導体が作れない』

これは世界最高規模の権限と世界最先端の技術を握る、世界的な天才科学者のお言葉だ。

半導体とは導体と絶縁体の中間に位置する物質の事を言うのだが、科学技術が若干進んだ世界より訪れた主人公の持っていた、たんなる民生品の携帯ゲーム機を見ての言葉から、これは一般的に言う半導体を使用した集積回路の事を指しているのだろう。——まさかただの半導体の板切れすら作れないと嘆いているわけではあるまい。

つまるところ、それはどういう事かといえばだ。

身もフタも無い言い方をしよう。

つまり、この世界では世界最新・最高技術を用いて、『ゲームボーイ』が造れないのだ。

いやゲームボーイは言いすぎか？　せめてカラーくらいか？

ともかく全高二十メートルの二足歩行ロボットが飛んだり跳ねた

りしているのに、だ。

正直なところ、原始人が適当に火山から取ってきた硫黄を何やらと適当に混ぜたら奇跡的に火薬らしき物ができ、便利だから狩りで使っているような印象を受けた。

至極馬鹿にした言葉だが、事実それより大きな奇跡でもないが無理だと思う。

機械技術による満足な二足歩行とはそれ程に困難なのだ。

如何に生体が優れているかが分るだろう。

そしてゲームボーイが作れない技術力で、その優れた生体と近いロボットを作り上げる？

——無理がありすぎる。

まあ機体を巨大にし、かつ重量を極限まで削るのもその関係があつたのかもしれない。背が高ければそれだけバランスが取りやすくなるし、それによる重量の増加も装甲をひたすら削る事で、劣悪な技術により製造された資材による耐久重量へ収めるためかもしれない。

いや、装甲を削つたのは第二代戦術機からで、重装甲型の第一代が簡単に食い破られたのが原因だったか？

ともかくにも、これで同時に網膜投影式ディスプレイや超薄型の対Gスーツが量産されていたりするのだから、如何にこの世界の機械技術レベルが出鱈目かは明白だろう。

何せ明らかに所有する技術を超えまくっている。不思議だ。

とまあぐだぐだ世の不思議に首を捻っていたわけだ。

間抜けな事に実機を見ずにこんな事を考えてたんだが、いい加減面倒になって廃棄された実機を空間転移の要領で地表から拾ってきてちよろつと見た。

最初からこうすりや良かった。

なんつーか、完全に盲点だった。

この機体。MSとかと違ってエンジンが無い……。

よくよく調べたらどうも機械というよりも、某世界で稼動している生肉製の巨大人型戦車「土魂号シリーズ」とそっくりだった。

いやはや、意外も意外。まさか電磁伸縮炭素帯（カーボニック・アクチュエーター）とか言うみょうちきりんな素材で難易度が激下がりしているとは予想外だ。

エンジン抜きで大丈夫かとか、そんなモンで歩行とかできるのかとか疑問はあるだろう。

簡単に言えば、電磁伸縮炭素帯（カーボニック・アクチュエーター）とは人間の筋肉のと同じなのだ。電気を通すことによって伸び縮みするのである。だからエンジンなんて嵩張る物を無理に乗せなくても、少し大きな蓄電池やマグネシウム電池を幾つか搭載する事で必要電力をまかなえてしまうのだ。

人間でも神経電気を賄うのに別に心臓を用意したりしていないだろう？

その程度で済むのだ。

後は内部にある骨格に擬似筋肉の束を貼り付け、それでも運用する兵器が重過ぎるから、セミヤトンボのように支持外殻の裏側も利用してなるべく電磁伸縮炭素帯の量を多く張り巡らせる。

完全な機械オンリーのロボットと違ってかなり柔軟な動きが出来るから、背の高さと合わせてバランスも取り易い。

これならなるほどと頷いたものだ。

第二世代以降の戦術機が、やけにアツサリと軽装甲回避重視に転向したのもこれで理解できる。この造りだと装甲がやられた時点で機体もオシヤカなのだ。

普通なら装甲が破れ、更にその奥の機構が致命的なダメージを負ったところで駄目になるのだが、戦術機の構造では電磁伸縮炭素帯の一端を支える装甲が崩壊した時点で擬似筋肉の張りが失われ、機能を喪失してしまう。これでは確かに装甲というには、ちよつとばかり頼りない。

原典作品をざっと検索してみれば、なるほど考察を裏付ける場面もある。

装甲へ取り付いた戦車級を剥がすのに、装甲を傷付けないよう非常に気を使っている場面だ。普通装甲食い破るようなのに取り付かれ

たら、装甲の下まで齧られる前に装甲ごとでも引っぺがすのが普通だ。なのにただの装甲を变に大事にしている。

他にも、装甲を食い破られた段階で機体が各坐したりも。

歯型のついた鉄屑を蹴り転がしてうんうんと頷く。

あの謎が解けてからは速かった。

さくさくと作業は進み、今さつき終わった。興がのって少しばかり趣味的な部分を加えたが、そんなもんだ。

さて、そろそろステンノとエウリユアレが我慢できなくなる頃だろう。

紅茶でも入れてやりにいきますかね。

第五章 02 世界の分岐点 (M u v | L u v 編)

1999.08.08

みょうじょう
明星作戦。8月05日より始まった世界初のハイヴ攻略が期待される作戦は、開始三日現在、大過なく推移していた。

予想されていた中でもっとも厄介な、BETA側の地中からの奇襲侵攻も無く、包囲網を縮めるように迫る人類側は中規模程度の集団を野戦で殲滅し、ついに横浜ハイヴを包囲するに至った。

残るは最難関、ハイヴ地下構造体への突入のみ。

ハイヴは蟻の巣に似ている。

地表に落ちた降着ユニットの直下へ巨大な縦坑(シャフト)があり、最深部はドーム状の大広間(ホール)で、此処にBETAのエネルギー供給を行う反応炉と呼ばれる青く輝く巨大な物体が鎮座する。そして地上にはもっとも特徴的な、多角形の板を角度をずらしながら積み上げたような「モニメント」と呼ばれるタワーがそびえ、ハイヴの成長と共に天へと高さを増してゆく。

蟻の巣と似ているのは、この縦坑の中途から無数に形成されている周辺地表への通路だ。

横坑(ドリフト)と呼ばれるそれは網の目のように広がり、交差する場所はちよつとした広場(ホール)と呼称される部屋となっている。このつくりが蟻の一般的な巣の造りと非常に似通っていた。

そして、中でも人類側の最重要目標となるのが最深部に位置する大広間(ホール)、そこに設置された反応炉だ。

”炉”とは言っても、人間のそれとは違う。見た目は若干縦長の磨りガラスの巨大な球で、表面を白い網状の物が走り、内部から発光している。未知の物質で構成されており、おそらくこれがBETAへのエネルギー供給を賄っているものと考えられていた。

また、それを裏付ける情報もあった。

ハイヴ攻略は前例が無いが、実は前段階となる降着ユニット排除の

成功例があるのだ。BETA大戦初期に人類圏近くへ撃ちこまれた降着ユニットに対し、戦略核の集中運用が行われてた。この際、降着ユニットの完全破壊と同時に周辺のBETAの撤退が確認されている。

この後、破壊された降着ユニットを調べたところ、未発見の物質が発見された。

「G元素」と名付けられたこの物質はその後のハイヴ攻略戦で、ハイヴ最下層のホールにて完全な形を確認され、予想以上の強度により破壊には至らなかったが、以後BETA側の最重要施設として攻略の目標となっている。

さて、人類勢力がハイヴへ突入し反応炉を目指す場合、二つのルートしかない。

網の目のようなドリフトを踏破して侵入する。

ハイヴ直上からシャフト目掛けて降下する。

どちらも危険度は大きい。

前者は細い通路でBETAの数の暴力が襲い掛かり、加えて地中をかなりの速度で掘り進むBETAは、トンネルを進むに従い伸びる戦力の横腹へいきなり襲い掛かってくる。途中が堕ちれば先頭を進む者達は逃げ場の無い空間で前後を挟まれ、なす術無く全滅するしかない。

評価するに、時間が掛かり戦力も多く必要とする。だが本格的にマズイとなれば引く事が出来る作戦となる。

後者は、こちらは電撃戦。

衛星軌道上から突入殻に包まれた戦術機を投下するだけで時間も掛からない。しかしBETA側も当然それを警戒しており、シャフト内に多数の光線級を待機させている。上空から無防備に真っ直ぐ落ちてくる物体など、BETA側からすれば単なる的ではない。光線級・重光線級の射程100km・マツハ2を撃墜できる狙撃能力の前では回避は望み薄であり、降下でどれほどの損害が出るかはシャフト内の光線級数の予想に掛かっている。

また、この作戦は前者に比べ小数を敵中枢へダイレクトに放り込むという前提上、必然的に突入部隊の被害は極めて大きいものとなり、過去行われた作戦では、軍事用語の『全滅』ではない、文字通りの全滅に近い損害を出している。生き残りはデータを持ち帰るために友軍合流へ向けて、接敵後早期に離脱した少部隊、その更に欠片だけだった。

こちらにも批評するに、物量のBETAに対して電撃戦というのは理に適った作戦といえる。しかし光線級の数が予想を上回れば、それだけで貴重な最精鋭戦力が無為に全滅しかねない危険が大きい。

1999年現在、ハイヴ攻略には両作戦の併用が有効と考えられている。

地上部隊が反応炉を目指し侵攻、ハイヴ内の戦力を引き付けると共に敵戦力を確認し、機を見て降下部隊を突入させる。

だが戦線の後退によって肉薄できるハイヴが減少し、実際に実行されたのは1992年のインド領マツディア・プラデーシユ州ポールに建造されたポールハイヴ攻略戦、スワラージ作戦のみである。この作戦は宇宙軍がハイヴ攻略に本格的に参加した初の作戦としても名高い。

しかし今回の明星作戦において、衛星軌道からの降下は組み込まれていない。

アメリカが虎の子を出し渋ったのではなく、単純に、未だフェイズ2でしかないハイヴでは、モニュメントにまだシャフトから直通の穴が開いてないのだ。なので降下してもシャフトへ突入できないだけである。

さて、日本海・太平洋、両海からの艦砲が、西日本全土へと進撃するBETAの後方を断った事で始まった明星作戦。

もつとも近いドリフト、ハイヴから遠い入り口は、フェイズ2という事もありモニュメントからたったの2km地点。予想されるシャフト深度は300m前後。

これが地球最大のフェイズ6では、モニユメントは高度1000mを越え、シャフト深度は4000m、ドリフトに至っては遙か1000kmの彼方まで拡大する。

既に艦砲射撃を筆頭に豊富な打撃力が集中運用され、最初のドリフトを発見した2km地点を通過し、ハイヴまであと1kmまで迫っていた。

断続的に瞬くマズルフラッシュが夕刻の薄闇を押しよける。

掘り返された大地を戦術機が進んでいた。

ハイヴを中心としたBETA勢力下は平坦に均された大地が続く。そこかしこに蠢くのは醜悪な化物だ。中でも、小さいながら最も多く見受けられるのが赤い異形。

『戦車級』

小さいと言ってもそれは戦術機から見ればであり、全高2.8mにもなるBETA群中最大の個体数を誇る多足歩行種。

対人探知能力は極めて高く、機動力も最大約80km/hと高い。加えて飛び道具こそ持たないが、胴体に備える大きな口は第一世代戦術機の重装甲すら噛み砕き、常に数十、数百を越える群れで行動するためにBETAの中でも危険度の高い種とされていた。

だがBETA種全体に言える事だが、突撃級以外は甲殻といった防御能力は殆ど無く、F-15J「陽炎」の放つ36mm機関砲の弾丸を受け、脆くも肉片となって飛散していた。

『クソ、もう三日目の夜になるつてのにまだ湧いてきやがる』

『タンゴ1よりタンゴ2。無駄口叩くな』

『タンゴ2了解。……はあ、はらへったなあ』

ガリガリと弾薬は減るが全ての化物を殺し尽くすには足りない。

彼らが此処まで詰め寄るのに、流石にかなりの犠牲が出ていた。機体もそうだが、特に武器弾薬の消耗はかなりの物で、既に各部隊に配備されたミサイルや対小型種用の炸裂弾は粗方使い尽くされていた。しかも次の補給はまったくもって回ってくる気配がない。それでも幸い後方に下がれば36mmと120mm、それと推進剤は少し余裕

がある。

突入は明日の朝。日の出と共に日本帝国、国連の精鋭部隊がドリフトへ侵入する。それまでなんとか戦線をもたせなければならなかった。

『——ランデイ、またチョコレートバー持ち込んでないだろうな？』

食うなよ？』

『むぐっ!?!』

『こちらタンゴ3。ダンゴ2、アンタまた持ち込んだのかい？ 訓練校で教官にえらく叱られたじゃないか、ちつとは懲りなよ。フェン、アンタももつときつく言わなきゃ』

『タンゴ1よりタンゴ3。そうは言うがな……』

小康状態の前線を警戒しながらにしては冗談交じりだ。だがそんな言葉は、ストレスを僅かながらも和らげる。

もつともこんな余裕があるのは他より随分楽だから。

モニュメントまでは繰り返されたありったけの砲撃で肉片の海のような有様になっており、BETAの先鋒たる突撃級はもう視界には入らず、戦術機サイズのサソリのような要撃級がそこそこ。それも主戦場となっているドリフト入り口付近ばかりであった。

何より、もつとも警戒しつつ、かつ人類が対応出来ない地中進行からの奇襲が、ない。

『突入はウチからも出るんだろ？ どの隊か知ってる？』

『第二大隊らしい』

『大隊一つか？ 少ないな……』

小隊の足が止まる。

腰にマウントされている36mmの予備マガジンが尽きていた。

ここまで相当数を駆逐しており、ようやくと戦車級の赤い影が途切れた。おりしもタンゴ1のコクピットに電子音が鳴る。

『タンゴ1より司令部。ポイント9の制圧を完了。繰り返す。ポイント9の制圧を完了した』

『こちら司令部。……ポイント9の制圧を確認。タンゴ小隊は補給ポイントまで後退、補給の後、0200まで待機しててください』

『タンゴ1了解。これよりタンゴ小隊は補給ポイントまで後退する』

『タンゴ1より各機へ。帰投命令だ、補給ポイントまで下がるぞ』

『タンゴ2了解。やっとな飯にありつける』

『タンゴ3了解。やれやれ、BETAの相手は楽じゃないね』

『タンゴ4了解。そう腐るな』

『——よし、行くぞ』

地響きが遠ざかる。

彼らには余裕があった。

ハイヴ間近まで進撃し、圧倒的な数で襲い来るBETAの新たな増援が湧いてこなかったために。

だから彼らだけではなく、全軍が考えていた。

フェイズ2のハイヴなのだから、西日本全土への侵攻とここまでの激戦で、流石のBETAも数が尽きてきたのだろう、と。

それは人類がこれまでの死闘で学んだBETAの行動、それに則した判断。

運が悪い。

よく聞く言葉だ。

物事とは流動的であり、同時に決まった範囲内でそれは起こる。

なにかが大きくなれば別のなにかが小さくなり、せわしなく動くものがある。それがあれば、それに押されて動くものがある。

昨今、この世界にとある変化があった。

外部からの来訪者があった事だ。

いや、彼等がこの世界にへ手を出したこと。

二回行われた”放送”は、その実人間だけを対象としていなかった

た。

つまり“面倒くさい”と地球範囲で無差別に流されたそれは、人間がまったく予想しなかった事に、同じ地球上に居た宇宙からの侵略者にまで聞こえていたのだ。

『理解』という概念を乗せて広がったそれは、当然、理解された。

人類が、単なる宇宙産化物と考えている、BETAに。

たしかに億に届こうかというそれらに自我はない。思考という思考もない。

だがそれらを指揮するトップは違う。

その個体は（作成者にそう定められた範囲でとはいえ）モノを考える頭を持っていた。

BETAと地球人が呼ぶその炭素生命体は、その実、宇宙の彼方で生まれた別種の生命体作り上げた、たんなる惑星開発用の作業機械である。しかし炭素ベースのBETAを作業機械とするように、BETAとその創造主にとって、炭素生命体はそも、彼等にとっての『生命体』という枠に含まれていないのだ。

もちろん、それが知性の有無に関係があるかどうかと問えば、関係はしないだろう。

しかしあまりに大きすぎる種族の垣根は、生半では相手を覗き見ること叶わない。否、壁の向こうを想像することも思いつかない。

だがたった一回の放送が、その可能性の切っ掛けとなった。

皮肉にも、BETA側にとっての。

地の奥底深く——『それ』は六つの目をぐるりと巡らす。

明らかに先程の“通信”は自分達の扱う言語であった。

だが同時に間違いなく、上位存在（己）でも存在（BETA）でも、ましてや創造主でもなかった。

“知的生命体が存在する可能性が高い”

これは彼等にとって見逃せない重要な発見だ。

すぐさま上位存在間のネットワークにこの報告がなされる。

宇宙のほぼ全域へ広がる上位存在にとって、リアルタイムのネット

ワークは当然搭載されている機能であった。

同時に指揮下の存在に対し、この星の『自然災害』に対し、拠点の防衛に重点を置くよう、そして知的生命体と思しき存在の慎重な探索を指示した。

『それ』の作成された目的は、惑星開発と情報の収集。

『それ』は淡々と成すべきことを実行し続けた。

運が悪い。

よく聞く言葉だ。

物事とは流動的であり、同時に決まった範囲内でそれは起こる。

なにかが大きくなれば別のなにかが小さくなり、せわしなく動くものがある、それに押されて動くものがある。

黒川の行為に人が大きな影響を受けたように、BETAもまた影響を受けた。

人類は存続の障害となる十万人を大雑把に切り捨てる事により、前線の補給線の洗浄に成功し、BETA側には明確に「警戒」という行動を与えた。

明星作戦では国の垣根を乗り越え、原典作品の歴史を超えた戦力が集中された。

戦術機とは高価な装備だ。

端的に言つて、一機億単位の戦闘機より高い。

戦闘機を原型としながらも、それを大きく超える質量をもつ。それは当然ながら相応の技術と金、資材を持って建造され、かつ巨大な二足歩行型の陸戦兵器という、非常に負担の掛かる構造と運用をされる。必然的に機体の疲労も大きなものになるだろう。それをなだめるメンテナンスと補修もまた、ものの大きさ故に負担となる。たとえ

国とは言えど、こうした現場の事情とカネの事情がある限り、そう易々とは数を運用出来はしない。

現に日本帝国では一箇大隊36機揃える基地は珍しいし、国際連合軍ですら大規模作戦で一翼を表す連隊で、108機でしかない。それを考えればこの明星作戦にどれだけ限界に迫った戦力が用意されたか、おのずから分かるだろう。

『未成熟な敵に、最大の戦力を叩きつける』

始まる前に勝利を得る、必勝をもってあたるという、人類史において最も有効な戦略が、初めてBETAに対してとられたのだ。

同時に、BETAも初めての行動をとった。

BETA指揮官は異存在よりなされた放送より、惑星開発を一時的に縮小、補給拠点の防衛を指示。急遽、人間が鉄原ハイヴと呼ぶ補給拠点より、建造したばかりの前線拠点へ増援を送っていた。

何の気なしに行われた行為で、時は、未知を踏む。